

夜に太陽なんて必要ない

望月(もちづき)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あるスリザリンの女子生徒が突然前世の記憶を思い出してしまい、今自分がいる世界の未来を知ってしまう物語。

▼親世代から始まっていきます。▼作者は一応原作は一通り目を通していますが、読んだのは随分と前なので主に映画扱いになるかもしれません。原作の内容も少し含まれると思います。

▼所々矛盾しているところがあるかもしれませんが、勢いで書いた作品なので雰囲気楽しんでくれると嬉しいです。▼何せ作品を作るのは初めてのことなので、色々と慣れていないところがあります。

▼捏造が多いに含まれるので、苦手な方はご注意ください。

▼主人公が、ジエームズやリリーに対してきつく接する場面が多数ありますので、苦手な方はご注意ください。▼更新は不定期です。

目次

親世代

【まだ始まってもない】

1	夢であってほしかった	1
2	早過ぎる雪	6
3	サンタのいないクリスマス	18
4	真っ黒な梟と手紙	39
5	喧嘩とテスト	43
6	純血の血	51
7	長い長い夏休み	58
8	本の正しい使い方	68
9	嘘つきは誰	74
10	不器用なりの言葉	88
11	満月が嫌いなあの子	104
12	黒い紳士	111
13	ブラック家	115
14	臆病者の言い訳	135
15	来てほしくない未来	156
16	すれ違つては傷つけあう	167
17	泣き虫が2人	212
18	本の正体	238
19	楽しくないお茶会	268
20	ペンダントの秘密	285
21	壊れる音	318
22	もう遅い	346
23	答え合わせ	371

2 4 水に溶けようとするあの子

2 5 もういない

2 6 沈んでいく

2 7 もう分からない

2 8 誰か教えて

2 9 感情なんて

3 0 始まりに愛を添えて

3 1 闇の印

3 2 日記

アズカバンの囚人

プロローグ

1 現実を夢に

2 生き残った男の子と不思議な女の子

3 勿忘草を貴方に

4 震える手

5 禁じられた森

6 落とし物

7 大人になれない大人

8 夜のお散歩

9 引き裂かれた肖像画

1 0 満月が綺麗な夜に

1 1 嵐の中のクイディッチ

1 2 甘い夢

1 3 どうか私を

1 4 隠れたお店

394

417

441

475

490

509

537

572

604

628

633

647

662

679

688

697

707

732

739

752

764

775

793

806

1 5	鏡	823
1 6	恐ろしいもの	835
1 7	悪夢	849
1 8	平穏な日々	862
1 9	噂と嘘	875
2 0	約束	884
2 1	膨らまぬように、潰れぬように	898
2 2	帰る場所	914
炎のゴブレット		
	プロローグ	925
1	天秤	930
2	ホットミルク	939

親世代 【まだ始まってもない】

1 夢であつてほしかった

石でできた乗り場のような段差に波の影響で揺れている数人程度が乗れるような小さな舟がぶつかる音が聞こえてくる。そんなに大きくない音だが、その音が聞こえるたびに私の頭はまるで鈍器で思いつきり殴られたように頭痛がした。頭も確かに痛かったが、今はただ目の前に広がっている光景に、緊張するように心臓が動く鼓動が全身に伝わってきて、どちらかというところの方が辛い。

首から生々しいほどの赤黒い血を流し、だんだんと呼吸が浅くなっていく彼が私の目の前に倒れこむようにして壁にもたれかかっている、私は見ることしかできない。まるで私は観覧をしているかのよう。その場には存在していないかのようだ。

ばちんという何か弾けた音が聞こえたかと思うと、誰かが部屋に駆け込んでくる足音が聞こえ、入ってきた3人の子供達が目に入った。私は知らないはずなのに、何故か名前もこの子達がしてきたことも全て知っていた。

ロン・ウィーズリー……ハーマイオニー・グレンジャー………ハリー・ポッター

力なく横たわる彼の首を止血するかのようにおさえたハリーに、彼は最後に託すように自分の涙を取るように告げる。

ハリーが言われた通り、涙を瓶の中に取りと彼は安心したように、重たい口を開いた。

「…僕を…見て…くれ…」

私の頬に涙が流れ落ちたのが分かった。

「……リリーの目と…同じだ……」

彼の首は支えることをやめて、傾くともう一切動かなくなる。

ハリーやハーマイオニー、ロンを私は知らないはずだが、知っていた。でも彼は違う。私は、知っている。知らないはずがない。

彼は、セブルス・スネイプ、スリザリン寮で魔法薬学が得意な生徒。そして、緑の瞳をもったリリー・エバンズを愛している。

……私はそんな彼に、恋をしている。

「…………セブルス…………」

届くはずもないのに、私の口からは自然とこぼれ落ちていた。

遠くから騒がしい声が微かに聞こえてきて、私はゆっくりと瞼を開けた。眩しすぎるほどの光が差し込んできて、目を細めるとぼやけていた景色が段々とはつきりしてくる。どうやら、魔法史の授業が終わったらしく次々とクラスメイトが楽しそうに話しながら立ち上がっている。

スリザリン色の自分のローブに視線を落とし、制服の下が少し汗ばんでいることに気づき、中に空気を送り込むようにシャツを動かした。

ふと周りに視線を移すと、同じ色のローブを身に纏い、少しべつとりとした黒い髪を左右に分けて肩まで下ろしている彼の姿が目に入った。いつ見ても不機嫌そうで今日なんて目の下のクマが酷く、更に不気味な雰囲気を放っていた。肌は白すぎるし見た感じでは痩せていて、私より背の低い彼が両腕で教科書を抱えている姿はどこか可愛らしくてついつい笑みがこぼれ落ちてしまう。

「セブ、一緒に行きましよう?」

スリザリンで孤立しているセブルスに話しかけるのは、たった1人。グリフィンドール色のローブを身に纏った彼女、彼が愛しく想っている人。

セブルスは近づいてきたエバンズを見た瞬間に分かりやすいほどに頬を赤く染めた。

…そんな顔されたら、嫉妬するからやめてほしい。

私は、見ないように視線を逸らして一息ついた。授業が終わった教室には、気づけば私一人になっていた。

「…何もかもが…遅すぎる…」

もう分かっていた。あれは夢ではない。あれは私の前世の記憶で、この世界の未来。

『ハリーポッター』と表紙に書かれた分厚い本の感触、大きなスクリーンに映っている見たことのあるような人達が動く姿。

…彼が、セブルスが、首から血を流し生き絶える姿。

さつき見た記憶の欠片が脳裏をよぎり、背中の筋に嫌な汗がツと流れた。何かに耐えるように目をつぶり、祈るように両手を握った。

………夢であってほしい…

私は只々そんな叶わないことを思いながら深いため息をついて、落ち着きを取り戻す。思い出すのなら、初めからして欲しかったし、思い出さないのなら最後まで思い出さなくなかった。

私は、とりあえず教科書を手にとり、教室から出て、石造りの廊下を歩く。

察しの通り私も、友達と呼べるようなものがない。どうやら前世の私は明るい方の性格だったらしいが今は違う。どっちかというと暗い性格だし、積極的に話しかけることができない。セブルスが孤立しているのは、純血主義のスリザリンで差別されていることと、上級生よりも闇の魔術が長けているからで私とは訳が違う。

私は、一応純血だし、セブルスのように闇の魔術が得意な訳ではない。私はただ変わり者として浮いているだけだ。

廊下でエバンズと話しているセブルスを見て、苦しくなる胸を握り

しめる。最初からこの世界の未来を知っていたのなら、私はきつと何もしなかった。だってこのまま放っておけば、エバンズとポッターの間に生まれる子供があの人を殺して、平和な世界が訪れるのだから。でもそれだといけない。それだと、セブルスが死んでしまう。

楽しそうに笑うセブルスを見て私は泣きたくなかった。太陽のような彼女を愛している彼を愛してしまった私は酷く虚しい。

鬱陶しすぎる夏の太陽が嫌いのように私が彼女のことを嫌いになるのは、自然なことだった。

この時点から、変えればいいっていう問題じゃない。何せ私は、セブルスと話す仲でないし、いわゆる『ハリーポッター』の物語の登場人物達とは関わるはずのない人間だからだ。

それにもし、セブルスと彼女の仲が引き裂かれるあの出来事を防いでしまったら、ハリーが生まれることも、あの人が消滅することもなく、最悪の時代を迎えるかもしれない。

今の私にとっては、ただの空想の物語じゃなくて、生きていかなければならない現実なのだから。

まあ…そんなことは綺麗事に過ぎなくて、ただセブルスと彼女が幸せになる姿を見るのが耐えきれないだけだ。見たくない。

…：そんな光景は、絶対に。

「本当に…遅すぎる」

思い出すのなら、彼に恋をしてしまう前に思い出したかった。

このまま過ごせば、セブルスは一生後悔するようなことをして、彼女に償うようにハリーを守り続け、死ぬ時まで彼女のことを想って生き絶える未来は絶対だった。

正直言つて…どっちでも、地獄だ。セブルスの苦しみ続ける姿など出来れば見たくないが、物語を変えてしまうと確実に彼を救うことができなくなってしまう。

ただ…愛している人には生きてほしいと願うのは私の我儘なのだろうか。

：物語の結末を変えないといけない。

笑みを浮かべるセブルスの姿を遠目で見て、この叶わないと分かっている気持ちを抱きながら心の中で誓った。

記憶を思い出してから何度も何度も眠りについては忘れようとした。もし、これ自体が夢だったらどんなに幸せなんだろうと思いがら毎日寝床についていたが、どうやら夢からは覚めることはできないらしい。

目を覚ませば、そこは変わらない風景で同じ部屋のルームメイトが寝息を立てながら眠りについていた。

ほら、また覚めなかった。前世の私はこの世界に行きたいと何度も願っていたらしいが、それはお勧めしない。この世界では、杖一本と言葉を並べた呪文を唱えるだけで、人を思い通りに操ったり、怪我をさせたり傷つけたり、命を簡単に奪ったりできるのだから。現に今死喰い人の活動が活発になってきていて、魔法界には不穏な空気が漂っていた。

両親から手紙を書くように言われたことを思い出して私は手紙に羽ペンを走らせた。

新しい学期も始まり、もう二カ月も経っていた。長期休暇で家に帰省した時に、手紙を送らなかったことを酷く両親に叱られたことを思い出しながら、あったことをつらつらと書き出していく。

ぱっと見ただけでも適当に書いたと分かる手紙を見て、封筒に入れて封をした。

気づけば、ルームメイトも起き始めていた。私は、朝の挨拶もせず重い腰をゆつくりと上げて、制服に着替えると部屋を後にする。

勿論朝食と一緒にする友達なんてものはいる訳がなく、ちらほらとしかない大広間で適当に済ませた。どうやら、少し起きるのが早すぎたらしい。

私は、楽しそうに話しながら隣を通り過ぎるグリフィンドールの女

子生徒達のグループを目で追いながら、梟小屋へと足を向かわせた。残念ながら私は自分の梟を飼っていない。だから、学校で管理している梟を使うしか他なかった。

曲がりくねった階段を上り、扉のない石造りの小さな小屋に入るとまず1番に目に入ったのは梟でもなく、本を読んでいるセブルスの姿だった。

私の足音にゆっくりと顔を上げたセブルスは、ちらつと顔を見るとまた本に視線を戻す。

どうしてこんな所で本を読んでいるのだろうか。セブルスの制服の裾から微かに見える包帯が巻かれた手首を見て、そんな疑問に私は勝手に答えを出す。

ポッター達がいる大広間で本を読むのはあまりに危険すぎるだろう。きつと取り上げられて返ってこなくなる可能性だってある。だからといって、寮の談話室で読んでいても最近純血主義の思想が一層に強くなっているスリザリンで読んでも気が散るだけだ。

そう考えると、こんな朝早くに梟小屋に来る生徒なんて早々いないし、梟の糞と動物特有の臭いを我慢さえすれば、本を一人静かに読みたい彼にこんなとっておきの場所なんてないだろう。

私は、起きている梟を抱きかかえて、手紙を啜えさせた。優しく、外に放してやると梟は翼を広げて飛び立っていった。何処か飛べることに嬉しそうな梟はだんだんと小さくなっていく。

梟を見送って、セブルスに視線を移すと彼は少し険しそうな表情を浮かべながら本を読んでいた。

少し眉間に皺を寄せているのを見て、つい最近みた彼の最期を思い出した。

……彼が命がけでエバンズが残した子を守り抜く姿、最後まで誤解されたまま命を絶つ彼、首から血を流し、ハリーに記憶を託す貴方の涙が頭を駆け巡ってくる。少し、胸が苦しくなつて鼓動が速くなった。

私は、『ハリーポッター』の登場人物達に関わってはいけない。関わってしまったら、ここで未来を変えてしまったら、私が思い出した

未来は意味がなくなる。

それだというのに、私はセブルスに話しかけていた。

「…貴方、闇の魔術…興味あるの?」

急に話しかけられたセブルスは、驚いた様子で私の顔を見てくる。

「その本…よく最近読んでるよね」

私がセブルスが持っていた本の表紙に視線を落とすと、彼は何も答えずに本の表紙をゆっくりと隠した。

私は何も言わずにただただセブルスの真つ暗な瞳を見つめた。私の方から話しかけておいてなんだが、これ以上どう話せばいいかわからないからだ。

「……………僕が何を読もうとお前には関係ない」

静まり返っていた梟小屋に彼の声が響き、耳に入ってくる。セブルスの口から出た言葉は何とも冷たいものだった。どうやら、私は闇の魔術に対してよく思っていないと思っっているらしい。……セブルスに誤解されたままは嫌だが、訂正するのも面倒さいし、何より誤解されたままの方が今後動きやすいかもしれない。

「…そうね…貴方が何を読もうと私には関係ない、…けど、もう少し周りを見渡してみたらどうかしら?」

私は、セブルスに自分が言える範囲のことを言って、梟小屋を後にしようと背を向けた。

彼はどんな表情をしているのだろう。セブルスはよく頭が回るから、この意味がわかる日は早々遅くはないとは思うけど、こんなふわりとした言葉で未来が変わるはずもない。

これは私の自己満足だ。このままセブルスと彼女の中が引き裂かれることを分かっておきながら、何もせず見ているだけの自分をいつか許せなくなるかもしれない。

セブルスが苦しみ悔やみ、嘆き悲しむ姿を見たら、自分が壊れてしまふような気がしたから。…大切な人が苦しむ姿を見ると胸が痛く苦しくなるものだろうか?

こんなふわりとした言葉を言っただけでも、事実私は何もしていない訳ではない。

きっと私は後からこれを使って言い訳をする。少しでも、感じる罪の意識を軽くするために：

未来を変える度胸なんてない卑怯な私を、貴方の1番の幸せを願うことができない最低な私をどうか許してほしい。

心の中で、セブルスに許しを乞うように謝り続けた。声に出さなければ届かないなんて、本当に人間というのは面倒だ。

私は、大鍋の中でグツグツと煮込まれている泥のような色のどろっとした液体を棒のようなもので優しくかき回した。今は、グリフィンドールとの魔法薬学の合同授業だ。斜め前の机で作業しているセブルスは、いつもの不気味な雰囲気とは一変し、まるでお気に入りのおもちやで遊ぶ子供のように楽しそうな雰囲気が溢れ出ていた。

後ろ姿を見ただけで分かるのだから、よっぽどだと思う。

私は、自分の大鍋に視線を戻して、さつき潰したばかりの薬草からとれた液体を2、3滴大鍋へと入れた。泥のような色のどろっとした液体はたちまち綺麗な赤色に変わると、少しキラキラしたような湯気が立ち上った。これで終わりではないと思うのだが、どうやらそんな簡単ではないらしく、もうひと煮えさせないといけないらしい。

魔法薬学は、あまり好きではない。材料を入れる量やタイミング、薬を掻き回す方向に回数、熱する温度や時間など、ひとつひとつ慎重にことを運ばなければ、失敗してしまう。

私は赤色の液体を反時計回りに3回半掻き回しながら、教科書に視線を移して確認する。後はグツグツと煮えるまで待つだけだった。

ふとグリフィンドールの寮の机に視線を移すと、明らかにポッター達がセブルスの方を見て何やら企んでいる様子だった。

前世の記憶を思い出してからは、何かと自分の気持ちには嘘をつい

てきた。記憶を思い出したといっても、『ハリーポッター』の物語以外は途切れ途切れで、自分がどのように死んだのか、何歳まで生きたのかも分からない。だが、明らかにここにいる誰よりも精神年齢は勝っている自信はあるし、楽しそうに企むポッター達を見て、若いなーと思ってしまう私はもう年寄りだと思っただ。

何やら楽しそうに企むポッター達と、楽しそうに調合を続けるセブルスの後ろ姿を交互に見る。

：何もしないと決めていたが、もう少しで調合が終わるであろうセブルスの後ろ姿を見て、杖を取り出そうとしている彼らに近づいた。幸いなことに、生徒達は自分の大鍋に集中していたし、スラグホーンもひとりの生徒にアドバイスをしていたため、誰も私がグリフィンドールの席に近づくには気づいていなかった。

ローブの中にある自分の杖を取り出そうとするポッターの腕を後ろから握ると、彼は首がもげるんじゃないかと思うほどの速さで振り返った。それほど驚いたのだろう。勿論、側にいたブラックやルーピン、ペティグリューも私の顔を見てくる。

「お前、何で」

私の言葉より先に、ポッターが口走った。

本当に彼はお喋り好きらしい。そんなにすらすら思っていることが口に出せるなんて羨ましい限りだ。

私は、ポッターの大鍋の中に入っているまだ煮えていない少し赤黒い色をした液体を見つめた。

「まだ、煮えてない。：杖を振るのは、液がグツグツ煮えてからって教科書に書いてるわよ」

私の言葉に、見開いていたポッターの瞳は、優しそうな光を取り戻して私に笑みを向けた。

「ああ：ありがとう。本当だね、君のいう通りだ」

そう言うポッターの表情は、私のローブの色を少し睨みつけていた。

横目で、出来上がった薬を瓶の中に入れるセブルスの姿を確認し

て、ポッターの腕を手から離す。ブラックは、瓶に薬を移し満足そうなセブルスの姿を見て、悔しそうな様子で私を睨みつけてくる。

「……貴方達も何のためにいるか分からないわね。…こんなに側にいるのに誰も止めないなんて」

ポッターの周りに立っている、3人の顔を一人一人見て、顔に大きな傷のあるルーピンの瞳を見つめた。

もし、ここにいる彼らの中で誰かがポッターとセブルスが犬猿の仲になるのを止めてくれていたらどんなに良かったのだろう。

もし、君達が抵抗のできないセブルスを虐めるポッターを1分でも1秒でも止めていれば、あんな未来なんて存在しなくて済んだはずだし、なんだったら組分け帽子がセブルスをスリザリンではなく、グリフィンドールに組み分けをしていたら、何かが変わっていただろう。

セブルスはスリザリンではなくても、グリフィンドールの色のローブもきつと似合っていただろうし、彼にとっても幸せな学生生活になっていた筈だ。

…そしたら、私が彼に恋に落ちることも何もなかったのに。

「おや、何故君がここにいるんだい？」

様子を見に周りに来たスラグホーンが、グリフィンドールの生徒達の中にただ一人スリザリン色のローブを身に纏った私を見て不思議そうに問いかけてきた。何も答えない私を見つめ、スラグホーンは私に助言をしてくる。

「ほら、早く戻りなさい。見たところによると君はまだ調査が終わってないだろう」

スラグホーンが、あまりにごく普通に注意するものだから、今まで大鍋に集中していた生徒達も顔を上げ、私は注目の的だった。

スリザリンの生徒達は、私の方を見て変わったものを見るかのような目つきで睨んでくる。私の家系が純血でありながら、純血主義の思考が強くないのはもう有名で、それが彼らにとっては面白くないらしい。そんな奴がグリフィンドールの中に混じり、何やら手伝っている

様子を見たらそりやあもう睨まれるに決まっている。

私は、そんな睨んでくるスリザリンの生徒達の中にセブルスの姿もあることに気がついた。彼は何を思っているのだろうか。やっぱり私を嫌っているのだろうか、それともどうでもいいと感心さえもないのだろうか。直ぐに教科書に視線を戻して何やら書き込み始めたセブルスの姿を見て彼に問いかけた。

…貴方は私をどう思ってるの？

心の中で問いかけた答えを伝えてくれる声など聞こえることもなく、私は溜息をついてルーピンの瞳を見つめた。

この中で一番セブルスを止めてくれる望みがあるのは、彼だ。人狼であるルーピンは、相手に敵対心があるかどうか日常的に神経を常に研ぎ澄まして過ごしている。だから、きつとその人の言動や表情で心情を読み取るのが得意だろう。常にどう自分が行動すれば相手が喜んでくれるのか考えながら行動に身を移す。

「…僕の顔に何か付いてる？」

あまりに私が顔を見つめるもんだから、ルーピンは少し戸惑ったように聞いてきた。ある一定の場所を見ながら頭の中で考え込む私の悪い癖は直ることなく、それどころか私はついつい口に出してしまった。

「痛そうね。その顔の傷、まるで獣の鋭い爪に襲われたみたい。」

獣という言葉に、目を見開いたルーピンをしつかりと見て、その場を立ち去った。…そんな傷つけるつもりはなかったのよ。ただ、何か言わないとまずいかなと思ったら、もう口から出ていたから。

私は何気ない顔で、自分の大鍋が置いてある席に戻り、覗き込んだ。大鍋に入っている液体はもうすでに沸騰していて、少し煮込みすぎたかもしれないと思ったほどだった。私は火から下ろして、杖を一振りする。赤色だった液体はピンクっぽい色に変わり、少し濁ったような湯気が立ち上った。どうやら煮込みすぎたらしいが、何も害がなかったセブルスを見て結果オーライだと自分に言い聞かせながら提出用の瓶に詰め込んだ。

少しグリフィンドールの席の方から、騒がしい声が聞こえ私は視線

を移した。

さつきまで元気そうだったルーピンが、顔色を真っ青にしている、そんな彼の周りを心配そうに友人達が囲んでいた。

ルーピンは心配かけまいと、大丈夫だとみんなに言い聞かせているようだ。ブラックはどこからどう見ても様子がおかしいルーピンを見て、私の方を睨んでくる。丁度私も彼らの方を見ていたため、私とブラックは目が合ってしまった。睨んでいるブラックに元々目つきの悪い私は、外から見ればどうやら睨み合っているみたいらしく何人ががそわそわと話し出した。いや別に睨んでいるわけではないし、見ただけだ。もしルーピンの様子がおかしくなった原因が私のあの発言のせいだとしたら私にも非はあるし、申し訳ないと思わないほど薄情者ではない。……でも、私が今彼らに近寄ったら状況が悪化するだけだろう。

私が視線を逸らそうとすると、嫌いな声が入ってきた。明るく、落ち着いた彼女の女の子らしい声は嫌という程私の耳に入ってくる。

「大丈夫？リーマス。顔色が悪いわよ」

ルーピンを心配するエバンズは、私の方を睨み続けるブラックに気づき彼の頭を叩いた。

「何をそんな睨んでいるのよ、ブラック。女の子に対してそんな態度はいけないでしょ」

まるで母親のようなことをいう彼女は、うざったいポッターをひらりとかわして、ルーピンに近づいていつていた。

ルーピンは、大丈夫だと痛々しい笑みを浮かべながら、彼女を見ている。私は、心配そうにルーピンに何かを言っている彼女をひと睨みして、自分の瓶を手を取った。

気づけば、スラグホーンが今日授業で調査した薬は提出してから帰るようにと生徒達に説明しているところだった。スラグホーンの言葉を聞くと、生徒達は自分で作った薬が入った瓶を手にとって一列に並び出した。スラグホーンの前に置いてある木箱のようなものに、一人一人スムーズに瓶を並べながら立てていく。

私は、提出し終わると教科書を手に取り教室を後にした。今日は午後の授業がないこともあり、色々のんびりと過ごしたかったためゆっくりと寮へと足を向かわせた。

石造りでできた廊下を歩いていると、すっかり調子が戻っているルーピンがポッター達と楽しそうに話していた。私は何も聞かないように、あまり彼らを意識しないようにしながら通り過ぎる。

ポッター達は、私が隣を通ったこと自体気づいていない様子だった。それはそうだ。彼らはこの世界の主要人物で、私は良くてもスリザリン寮の女子生徒ぐらいの認識だ。気付かれなくて当然。さつきがイレギュラーだったのだ。

寮に戻ろうと、歩き進めると先に見覚えのある後ろ姿が目に入った。同じスリザリン色のローブに真っ黒な髪。

「…………セブルス……」

小さく小さく呟いた私の声は、廊下を歩き来している生徒達の足音や話し声の波に押し流されるようにすぐに消えていった。

…彼に話しかけてもいいのだろうか。セブルスと仲良くなってもいいのだろうか。私は今手に持っている魔法薬学の教科書に視線を移して、ぐるぐると頭の中で話しかける口実を考えた。

適当にここが分からないから教えて欲しいと頼んでみようか。…断られても、少しでも貴方と話せるのならそれでいい。

私は、勇気を振り絞ってあまり乗り気がしていない脚を無理矢理一歩踏み出した。先に行く彼の名前を呼ぼうと、息を吸い込むのと同様に後ろから私の嫌いな声が聞こえてきた。

「セブーちよつと待ってー!」

聞きたくない声が聞こえ、硬直した私の隣を彼女は走り抜けて行く。彼女が走り起こった風が嫌という程感じられ、髪やローブが風に巻き込まれると私の心臓は悔しそうに鼓動を早くしていった。

彼の名前を呼び、彼の元へと駆け出して、私が出来なかつたことをいとも簡単にやってしまった彼女を待つようにセブルスはゆっくり

と振り返り足を止めた。

…2人は何かを話して、また小さくなっていく。

「…待つてよ……私が先だったじゃない……」

私の口から出た言葉は、自分でも思いがけのないものだった。

廊下を行き来する生徒達の賑やかな話し声が耳に入ってきて、まるで私だけが取り残されたみたいだ。その場から逃げるように、遠くなつていく2人に背を向けて寮とは真逆の方向に歩いた。遠回りになるがしようがないと自分に言い聞かせ、少し俯きながら足を速めた。

余計なことをしたと私は後悔しながら、少し冷えている廊下を歩き続ける。慣れないことをしようとしたばかりに、彼女に先に越されてしまつて、今までとは比にならないほど傷ついてしまったのがわかつた。

気づけば、生徒達があまりいない人気のないところまで来たようで、通りすぎる生徒にもあまり会わなくなつていた。

早歩きをして少し温まつた体を停止させ、ふと大きな窓の外を眺めた。空は灰色の分厚い雲が覆いかぶさつていて、外にいる生徒達は、寒そうにローブを握りしめ体を丸めながらホグワーツの中へと入つてくる。

ビューという風の音まで聞こえてきて、きつと外は寒いんだろうなと思いつながら、近くにあつた壁に隣接してあるベンチに腰掛けた。石でできているからひんやりと冷たかつたが、精神的にも体力的にも限界が近かつた私はそんなことには何にも思わずに、外を眺め続けた。手に持つている魔法薬学の教科書をパラパラと適当にページをめくつてみると、外から帰つてきたであろう生徒達が寒そうに話している声が聞こえてくる。

「もう、すっかり冬ね。外でご飯も食べられない。」

「どうする？今日は、大広間ですましちやう？」

「そうしましょう。…でも空いてるといいけど…」

そんな何気ない会話をしながら歩く女子生徒を目で追い、窓の外に視線を移すと見た光景がそのまま私の口からそのまま言葉として出てきた。

「……あつ……雪だ……」

ビューという風の音は聞こえなくなったかわりに、灰色の分厚い雲からは、少し早すぎる白い雪が羽根のようにふわふわと降り出していた。白い雪は地面に落ちるとあつという間に溶けていき、また別の雪がふわりふわりと降ってくる。寒くなり始めていたが、まだ11月に入ったばかりだしまだ降らないと思っていたが、どうやら今年の雪はせっかちらしい。

実際雪というのを見ると、さつきまで身震いなんてしなかったはずなのに私の体は身震いをして急に寒さを感じた。

身を縮こませて、無意識に魔法薬学の教科書を開く自分の手を見て濁いた笑いがこぼれ、また窓を見つめるとそこに映った自分は、今でも溢れそうなほどの涙を瞳に溜め、酷い顔だった。まさかそんな表情をしているなんて自分でも思ってもいなくて、もう耐えきれなくなつた涙はどうしようもなく頬へと流れ落ちてくる。

セブルスと彼女が仲良く話す姿も、笑い合う姿も見慣れたはずでしよ？

彼女の手や声はセブルスに届いても、私の声や手は届かないことぐらいもう分かりきつたことじゃない。

それなのに何が原因でこんな涙を流しているのだろう。

……苦しいから？ 悲しいから？ どうしてだろう。

……分からない、分かりたくない。

私は流れ続ける涙を拭うこともせずに、窓の外を眺めた。唯一の救いだったのは、私が涙を流している間、生徒や先生が通らなかつたことだ。

窓に映る涙を流し酷い顔の自分を見て、自分が酷く滑稽で虚しくな

り可笑しくなった。

「……馬鹿らしいわね……」

窓には眉を下げて、困ったように自虐するように痛々しく笑う自分の顔が映っていた。

3 サンタのいないクリスマス

もうすぐ、冬のクリスマス休暇を迎えるホグワーツには、生徒達が楽しそうに話す声が溢れかえっていた。

私は残念ながらクリスマスプレゼントを交換する仲の友達もいない。毎年クリスマスは家族揃って豪華な食事をしのんびりと過ごすというのが日課だったのだが、残念ながら今年はそうはいかなかった。

3日ぐらい前に両親から手紙が届いたのだ。

愛しいレイラへ

最近、少しずつ寒くなってきて雪も本格に降りはじめましたね。防寒をしっかりとしていますか？しっかりとご飯を1日3食食べていますか？ぐつぐつと眠れていますか？

貴女は、すぐに自分のことになると怠るので心配でたまりませんが、送ってくれた手紙からは元気そうなのが感じ取れたので嬉しい限りです。

さて、前置きはここら辺にして本題ですが、少し残念なお知らせです。

クリスマス休暇は、家族揃って過ごす予定でしたが、それが出来なくなっていました。

ノアから仕事で怪我をしまして、家には帰れそうにないという手紙が届きました。どうしてもクリスマスぐらいしか行く時間が取れないし、ノアの怪我の様子もどれ程のものなのかが分かりません。

貴女も一緒に連れて行きたいのも山々だけど、今死喰い人の活動がだんだんと活発になっていくように感じています。

だから、貴女は1番安全なホグワーツでクリスマスを過ごして欲しいのです。

ノアの怪我の具合を確認できたらすぐに貴女にも手紙を送るつもりでいますし、安心してください。でもそれでもレイラが、一緒に行きたいというのなら勿論一緒に連れて行くつもりです。とりあえず、今の気持ちを手紙でください。

待っています。

母、アメリアより

私にはノアという今年で20歳の兄がいる。私の家庭は、いわゆるお金持ちで、働かなくともごく普通に生活できるほどだ。お金に困ることなんてなく父など働いていない。だが、兄はそんな甘い環境で育ったのにも関わらず、きちんと立派な社会人として今ではドラゴンを研究しているらしい。

小さい頃よく兄にドラゴンについて四六時中語られた思い出がある。兄の話術は凄まじいもので、どんな興味のないことでも兄の手にかかれば、ついつい聞き込んでしまうほどだった。それでも、きつかった思い出が1つある。それは、よく兄が私にしてきたドラゴンのテスト。なんの意味もないのだが、ドラゴンの凶鑑を引つ張り出され、名前を隠されて特徴だけでドラゴンの名前を当てるというもの。：これが見ついのだ。当てるまで、兄は解放してくれないし、何よりあんなキラキラとした目で見つめられたらたまったものじゃない。

しかし面倒見が良かった兄が、小さい私の遊び相手になってくれたいたことは有難く、今でも兄のことは大好きだ。

そんな兄が怪我をしたというのだ。私は、直ぐについて行きたいと返事しようとしたが、よくよく考えてみれば、クリスマススのホグワーツに残るのも悪くないかもしれないと思い、手短く返事を書いて鼻に届けてもらった。

返事はすぐに返ってきた。手紙の文は短いものだったが、相変わらぬ綺麗な母の字を見ただけで何故か胸が暖かく感じた。

愛しいレイラへ。

お手紙ありがとうございます。思ったより返事が早くて助かりました。

ノアの所へ着いたら直ぐに手紙を送るので、ちゃんと返事をくださいね。

今年のクリスマスは、家族では過ごせないけれど、楽しいクリスマスを過ごしてください。あとあまり羽目を外してはいけませんよ。ノアがああいう性格なので、貴女も少し心配です。

クリスマスプレゼントは、ちゃんとホグワーツに送るので、安心してくださいね。

貴女のこと大好きな母より

追記　　サンタさんが来るように良い子に過ごしてくださいね。

この返事の手紙を見て、最初に思ったことはただ一つ。

……もうサンタさんは、信じてないよ

こんなことを書く母の姿を思い浮かべるとおかしくて笑みがこぼれ落ちた。

ルームメイトが、クリスマスについて楽しそうに話す部屋で私は1人手紙を読みながら笑いを堪えているのだからもう変人だろう。

その日は、いつもより少し早めにベッドに潜り込んで眠りに落ちた。ルームメイト達があまりに一定のリズムで話してくれるものだから、まるで子守唄を聞いているかのように私は割と直ぐに眠ること

ができた。

スリザリン寮監のスラグホーンが持ってきたクリスマス休暇にホグワーツに残る生徒一覧に名前を記入して、結構クリスマスホグワーツを楽しみにしながら、休暇まで過ごした。

クリスマス休暇に初めてホグワーツに残り思ったことは、意外と残る人はいるんだなということだった。

そりゃあいつもの比べれば、大広間なんてすきすきで、廊下でほかの生徒とすれ違う事も少ないが、同じ部屋のルームメイトは1人残っていたし、スリザリンの談話室にもちらほらと生徒がいた。

いつもよりも閑散とした談話室で、暖炉近くのふかふかのソファーに腰掛けた私は魔法薬学に関して詳しくのっている本を読んでいた。魔法薬学は、本当に苦手な教科の一つで、少しでも6月にある学年末テストで良い点を取りたかったし、何よりこんな何もやることのない暇な時ぐらいいしか読む気になれなかった。読み始めると意外に面白く書いていて、ページを進めるスピードも速くなる。

だから、こちらをじつと見つめてくる人物に話しかけられるまで気づかなかったのかもしれない。

「……い……おい……おいー」

突然怒鳴られた声に気づいて私は体をびくつかせながら、顔を上げると、

目の前には少し眉間に皺を寄せたセブルスが本を抱えて立っていた。

私が不思議そうにセブルスを見つめていると彼はゆつくりと私が開いている本を指差してまた話しかけてくる。

「……それ……どこから手に入れたんだ」

私は、本を閉じてボロボロになり、すっかり色褪せている表紙を確認をする。これは手紙で母に頼み送ってもらったもので、家にあるも

ので良いから魔法薬学のことについてのつてある本を送って欲しいと頼んだのだ。

「これ？これは…家にあった本を母に送ってもらったのよ」

私は、セブルスに真実を伝えて彼の言葉を待ったが、中々返ってこなくて気まずくなるばかりだった。何か様子のおかしいセブルスは、そわそわし始め、私の顔を見たり俯いたり随分と忙しそうだ。

私に自分から話しかけたりと何やら様子のおかしいセブルスを見て、私は本に視線を落とす。

……これは、そんなに面白くない本なのだろうか。

それでもしないと、毎日本を読んでいるセブルスがわざわざ話しかけてくるはずもない。何せ、セブルスは魔法薬学が大好きだから読んでないとなると興味があつてすぐに読みたくてグズグズしているだろう。

私は一か八か聞いてみてみようと思い、そわそわしているセブルスに話しかけた。

「…良かったら…読む？…この本」

私の言葉に、分かりやすいほど表情がパアーツと明るくなり、あんな重かった空気が、嘘のようだ。

「……良いのか？……」

私は頷いて、本を渡すと、セブルスは大事そうに抱え込んで、小さく呟いた。

「…ありがとう…すぐ、返すよ」

幸せそうに眉を下げ笑うセブルスを見て、私の心臓は急に波打つように鼓動を速くした。私の心臓の鼓動の音が、今目の前にいるセブルスにも聞こえるんじゃないかと思うほどだんだんと大きくなってい

るような気がして、体は緊張しだした。

……あんな……笑顔……反則だ。

「いや……ゆっくりでいいよ……」

すっかり動転した私はそう言うのが精一杯で、自分の部屋に戻るセブルスの姿が見えなくなるまで動くことができなかった。

やっと動けたと思えば、疲れたようにソファーに座り込んでため息が溢れた。顔を両手で隠して目を閉じると、さつき見たセブルスの笑顔が瞼の裏に映った。

あんな笑顔を浮かべる人なんてこの世のどこを探してもどこにもいないと思う。断言できる。命をかけてもいい。

顔が熱いを感じながらふとあることが頭に浮かぶと、あんな温かかったのが嘘のように、胸の内が一気に冷たくなるのを感じた。

……エバンスの前では、いつもあんな笑みを浮かべているのだろうか……

今日まで、見てきた私の中のセブルスの表情といたら、無表情か、機嫌が悪そうな表情か、ポッター達にちよっかいを出されて怒っている姿か……

……楽しそうな表情といたら、魔法薬学の授業で少し口角を上げている表情しかない。

……いや私の中で一番幸せそうな表情は、

……楽しそうに笑う彼女を見る、愛しそうな表情を浮かべるセブルスだ……

……ほら、こんな所でも彼女はずっと付いてくる。

あんなに幸せだった時間が嘘のように、逆に辛いだけの時間になってしまった。

……彼女にはあんな表情を沢山見せているんだろう。他にも、私が見

たことのないような表情だって沢山浮かべて、楽しそうに笑うんだ。一回ネガティブな考えをしてしまうととことん落ちてしまう私は、ふらふらと自分の部屋に戻ってベットに潜り込んだ。

明日は、クリスマス。良く小さい頃に両親や兄から言われ続けた言葉を思い出した。

『いい子にしていれば、サンタさんがレイラの欲しいものを持って来てくれるよ』

……サンタさん……今年の私が、いい子だったかは分かりませんが、……でも、もし本当に来てくれるのなら、私にください。

彼を、セブルスを、

………セブルス・スネイプを私にください。

サンタさんなんて、子供の時だけの夢物語だということは分かっている。けど、祈ってみたら、もしかしたら朝起きたら毎日セブルスが話しかけてくれて、ごく普通にあんな笑みを浮かべてくれるかもしれない。

……私のことを見られるかもしれない。

そんなことを思いながら、私は瞼を下ろした。

目を覚ました時に感じたことは、何か長い夢を見てたような気がするということだった。

まさか、あの本を貸したのは夢だったのかと思ひ慌てて机の引き出しを開けてみた。そこにはあの本はなく、あれは夢ではないということが確認できてほっと安堵した。

とりあえず簡単な服装に着替えて談話室に向かうと、大きなクリスマスツリーの下に沢山のクリスマスプレゼントが置いてあった。

私は、見覚えのある字で書かれたクリスマスカードがのっかってあるプレゼントを手にとって、部屋に戻った。

カードを開くと Merry Xmas と書かれていて、トナカイが引つ張るソリのようなものに乗ったサンタがホッホッホ、メリークリスマスと言いながら飛び出してきた。宙を自由に飛ぶ小さなサンタは、私の周りを二回三回回ると、部屋から出ていく。

私は、プレゼントのリボンを丁寧にとり、折りたたみながら周りについた包み紙もとっていく。

中には、丸いペンダントと、髪留め、たくさんのお菓子に、手紙が一枚入っていた。

髪留めは、とてもシンプルなもので、白い真珠のようなものと、花の形をしたガラスが反射する光の違いによって色を変えた。

早速自分の髪につけてみて、鏡を覗き込んでみると髪留めをつけるだけでも、いつもよりかは明るく見えた。

……でも似合わないな……

大人びている髪留めは、お世辞でも似合っているとは言えないほど違和感だらけだった。大人しく髪留めを外し、次は丸いペンダントのようなものを手にとってみると、首からかけられるようになって紐の先には掌に収まるサイズの金色のまん丸何かだった。

文字も掘られてないし、訳も分からなくて頭を悩ませたがとりあえずいじってみることにした。どうやらこのまん丸い何かは開けるよ

うで、ゆつくりと開けてみると、青白い惑星のようなものが飛び出し

て、手に持っているペンダントの周りを回しだす。

私が見つめているペンダントの中には時計の針のようなものが何本もあり、それぞれ時を数えるように動いていた。異常に早く動くものもあれば、全く動かないものもある。

「…何これ…」

そう声に出すしかなく、私は少し引き気味にペンダントを見つめた。こんな変わったものをプレゼントにするのは、私の父しかない。

母が常識人だと表すと、父はその反対、何を考えているのかさっぱり分からない変わり者だった。世の中でいう不思議ちゃんのは域は超えていて、しょっちゅう家でも訳のないことばかりを言っている。

兄は、明らかに父の血を受け継ぎ、対して私は母の血を受け継いだらしい。

少しため息をついて、ペンダントを見つめると、時計の針が付いている奥に小さく文字が掘られていることに気がついた。

『時は進むばかりで決して戻らない。』

時が止まることはあっても戻ることはできない。

貴女は時を止められても時を戻すことはできない。しかし貴女自身がそれを望むというのなら、時は戻れるのだろう。』

意味深すぎるその言葉の意味が分かるはずもなく、私はとりあえずペンダントを閉じた。

周りを回っていた惑星は閉じる瞬間一緒にすっと吸い込まれていった。

ペンダントの紐をくるくると巻きつけて髪留めと一緒に机の引き出しにしまい込んだ。

あとは、手紙と大量のお菓子だけだ。手紙を開くと、少し丸っこくて可愛い字が目に入ってきた瞬間に兄の字だとすぐに分かった。

僕の可愛いレイラへ

元気にやっているかい？レイラ。僕は手紙を書くのが苦手だから、文章がおかしな所もあるとは思うけど、そこは気にしないでくれ。

ホグワーツ、二年生での生活を楽しんでるかい？レイラとは1年のクリスマス休暇以来会っていないから、お兄ちゃんは寂しいよ。

最近は、ドラゴンの保護をしているんだ。

ルーマニア・ロングホーン種というドラゴンなんだけど、実はこのドラゴンの角の粉末は魔法薬の材料として珍重されていて、その一方でその角の取引きに利用する奴らがいるせいで罪のないドラゴン達が激滅しているんだ。だから、この種類は繁殖計画の対象になっていくのだけれど、それでね少し研究させてもらいながらお手伝いさせていただいているよ。この他にも、ペルー・バイパーツース種や…

終わる気配のないドラゴン語りの文を見て、私は、適当に飛ばした。兄には悪いがそんなにドラゴンには興味がないし、どうしても手紙だと読む気になれない。

私はドラゴンについて、2枚分ぎつしり書いてあること自体の方が驚いて3枚目からまた読みだすことにした。

まだ書ききれないけれどドラゴンの話はここまでにして、レイラに手紙を送ったのはあることを謝りたかったからなんだ。

せっかく家族全員で揃って食事ができるクリスマスを台無しにしてしまったて本当にすまない。

レイラは優しいから、気にしないでなんて言ってくれるんだろうけど、やっぱりクリスマスぐらい家族と居たいもんだろ？

父さんや母さんにも心配をかけてしまったし、勿論お前にも迷惑を随分とかけてしまった。

僕からのクリスマスプレゼントは、悩みに悩みすぎて送り損ねてしまったんだ、ごめんね。すぐにクリスマスが終わって新学期が始まる頃には届くように送るつもりだから、その時にでもこの手紙の返事を頂戴ね。

クリスマスに集まれなかった分今年の、レイラの夏の休暇に合わせて僕も家に帰ることにするよ。

お詫びとして何か買ってあげるから欲しいものを沢山決めておくんだよ？

それじゃあ、またもう少しだけお互い頑張ろうね。レイラは僕の自慢の妹だから、心配ないけど、やっぱり可愛いものはしょうがない。

レイラ、素晴らしいクリスマスを

M e r r y X , m a s

兄、ノアより

忘れていた。私の兄は自分で言うのも気がひけるが私のことが好きすぎるのだ。頼りになるし、優しい兄だが少し過保護過ぎるのが残念なところだ。

：こんなだから、結婚できないんだよ

私は、手紙を丁寧にしまって、机の引き出しの中にあるペンダントと髪留めの隣にしまいこんだ。

クリスマスのホグワーツは、思っていた以上に楽しいものだった。いつも混んでいる図書館も、閑散としていて読み放題で、私は分厚い本を3冊ほど引っ張り出して読み漁った。

少しでも、セブルスと話せるようなきつかけができないかなーと思
いながら、魔法薬の本のページを読み進めると、楽しそうに調合する
セブルスの姿が浮かんだ。

「ああ……好きだな……」

溢れ落ちた声は、誰に聞かれることなく消えていく。

本のページをめくっていると、どうしてもセブルスの姿を見たくな
り読んでいた本を元に戻す為に立ち上がった。ここまでくると本当
に病気だと思う。

…彼の為だったら何でもできそうな気がして他ならない。

ぎゆうぎゆうの本棚に無理矢理隙間を作って元に戻していると、突
然隣からバタツという何かが落ちる音が聞こえたと思うと、まるで人
が通ったかのように風が巻き起こり、私の髪が揺れた。

私は周りを見回してみるが、クリスマス休暇に図書館に来ている生
徒など私を含めて片手で数えるほどしかおらず、誰かが本を落とした
音でもなかった。私のすぐ隣で聞こえたのだ。本が地面に落ちる音
が、すぐ横で。

ふと左のほうに視線を合わせると奇妙なものが目に入った。真っ
黒い何か布切れのような端のようなものが、私の死界に消えたのだ。
天井まで届きそうなほどの本棚の陰に消えていったそれを私は、追い
かけるように本棚の陰まで駆け寄った。

そこには、誰もいるはずもなく、代わりにかすかな香りがした。

…少し薬草の匂いが混じった懐かしいような、落ち着く香り。

少し立ち止まっていた私は、まだ本を片付け終わってないことに気
づき元に戻って、視線を下ろして自分の足元を見てみると黒の表紙
に、金の線が彫られてある本が落ちていることに気がついた。

私は手に取り、後ろも前も色々な角度から眺めてみるが随分とシン
プルなものだ。一番不可解なことは、表紙に題名が記されていないこ

と。

ホグワーツには、意味のわからない本もどんな時に使うか分からないような本だって沢山あるが、題名が記されていないのは初めて見た。

周りに誰もいないことを確認して、恐る恐る本を開いてみると、そこら辺の本となんの変わりのない魔法の歴史に関してのことが説明されていた。

少し見つめてみると、文字がズズズツと不気味にひとりりで動きだして、この本が普通のものではないことが私の中で確信した。

：記憶の中で見たトム・リドルの日記ではないな…

そう思っって本を見つめてみると、独りでにページがパラパラと動き、私の手から逃げるように宙を舞うと机の上に、何も書かれていないノートのようなページを開いてピタリと止まると静寂が訪れた。

私は、少し警戒しながら近づき、その本を覗き込む。何も書かれていないページには、少しずつ文字が浮かび上がり、文章をつくっていく。その文字は、何やら焼いて書いているようなものでそれだけでも十分不気味な雰囲気醸しだしていた。

『私は貴女がとつくの昔に知っていることも、知らないことも全て知っています。』

私はそれを語ることができません。

しかし、貴女が望むのであれば私は語ることもできます。

貴女次第で私の価値が決まります。

どうか小さな声に耳を傾けて。』

最初は馬鹿馬鹿しいそう思った。すぐに元に戻そうかと思ったが、頭にトム・リドルの日記が浮かび、元に戻す気も失せた。

この本が悪戯だったらそれはそれで笑い話として終わらせれるが、もしこの本がセブルスやポッター、『ハリーポッター』の主要人物達の手に渡ってしまったらどうなってしまうのだろうか。

私は貴女がとつくの昔に知っていることも、知らない

ことも全て知っています。

最初の文を見つめて、最悪な事態のことが頭に浮かんだ。もしセブルス達の手に渡り、この本がもし未来のことを少しでも知っていたら、誰かが未来を知りたいと願ったら、私のこの前世の記憶も何も意味もなくなる。

……私の存在意義はもうなくなるんだ。

私はこの本が何なのかという事よりも、『ハリーポッター』の主要人物達にこの世界の未来のことを知ってほしくなくて慌てて本を閉じた。

「……私が持ち続けていればいい……」

勝手に声に出た自分の言葉を聞いて、私は決心したようにその本を手に取り、図書館を後にした。

寮に向かっている頃にはもう今持っている本のことで頭がいつぱいで、セブルスに会おうとしていたことなどすっかりと頭から抜け落ちていた。

私はまるまる太った七面鳥の丸焼きのお肉をフォークで取り分けて自分のお皿の上に盛り付け、頬張った。今は大広間でクリスマスパーティーをしている最中で、いつもよりも豪華な食事に囲まれて幸せに浸っていた。

レーズンやドライフルーツをたっぷり使ったフルーツケーキに、ミンスパイ、色とりどりの野菜やチーズがたっぷり乗ったクラッカーにとろけているチーズとトマトのパイなど、どれもこれも美味しそうで、私は母の料理の味が恋しくなりながらも、ケーキを食べると、口全体に甘い香りが広がり少し寂しかった気持ちもすぐに薄れた。

先生達は、ワインを飲みながら程よく気持ち良くなっているようだ。

お腹一杯になり、ふと前の方に視線を移すとセブルスの隣に、誰かに似ているようなスリザリンの少年が座っていた。

2人は、どこか親しそうに話して、料理を口に運び込んでいる。

絶対に見たことのある少年の顔を見つめて、私は考え込んだ。誰かの面影を感じるのだ。少し腹立つような感じで、あのイケメンオーラ。

……ああ：シリウス・ブラックだ

そう思った私は、ひとり納得しながら頷いた。となると、あれは弟のレギュラス・ブラックか。

まだ幼いレギュラスを見つめながら、ケーキをフォークで切り分けて口に運んだ。

彼は16歳で死喰い人のメンバーに入り、17歳でこの世を去る。

あの人に自分にできる精一杯の抵抗をして、1人生き絶えるのだ。どんなに勇気のいることだろうか。ひとりで冷たい水の中で苦しく生き絶えるのは、怖かったんだろうなと思いつつ、笑っているレギュラスを見つめた。

……私よりも何倍も勇気のある人だ……

私は、楽しそうにセブルスと話しているレギュラスから視線を逸らす。それでもしないと、耐えきれないほど胸が苦しくなりそうだった。

……これからセブルスは孤立しているスリザリンから少しずつ、お話をするような友達ができるんだろう。

私は水を飲み干して、口に含んだ氷を砕いた。

すっかりとお腹いっぱいになって、ベッドに横になっただけでうとうとしだしてしまった。

このまま寝てしまおうかと思ったが、机の引き出しを見て、ぼんや

りとしていた意識が一気にはつきりしてくる。

私は、起き上がって引き出しからペンダントを取り出して開けてみた。

薄暗い部屋を照らすかのように、青白い優しい光を放ちながら、惑星が回りだした。ルームメイトが少し声を出しながら、寝返りをうったのが視線に入って慌ててペンダントを閉じる。あんなに明るかった部屋は、ペンダントを閉じた瞬間暗くなり、目を凝らさないと見えないほどだった。

私は手探りで、引き出しの奥にしまつてあつた本を取り出して部屋から抜け出した。

勿論談話室には誰もいるはずなく、ただ暖炉から微かに暖かい光が漏れているだけだった。

私は暖炉の近くのソファーに腰掛けて、本を開いてみたが、暖炉の微かな火だけでは薄暗くて何も見えなかった。私は、しようがなくペンドアントの周りを回る惑星が放っている青白い光を活用して本を読み進める。

図書館で見つけた不思議で不気味な本を開き、今日見た文がのつてあるページまでめくると、以前と変わらず、何か焼けたような筆記で文章が記されている。

私は出来るだけ小さくその文章を復唱するかのように呟いた。

「……………私は貴女がとつくの昔に知っていることも、知らないことも全て知っています。

…私はそれを語る事ができません。

しかし、貴女が望むのであれば私は語ることもできます。

貴女次第で私の価値が決まります。

どうか小さな声に耳を傾けて、か…」

口に出せば何か分かるかも知れないと思っただが、そうでもないらしい。

ただ何回も読んでいるとある違和感を覚えた。

私は貴女がとつくの昔に知っていることも、知らないことも全て知っています……

この文を何度も何度も読み返すと、まるで心臓が緊張しているかのように動きだした。

……おかしい……

心臓がこれ以上の散策はやめてくれと警告しているかのように鼓動を早くして体は熱を帯びてくる。

「……………あ…っ……………」

私は、あることに気づいて声を洩らしたのとほぼ同じ瞬間に嫌な汗が体から流れ出す。

貴女がとつくの昔に知っていることも、

とつくの昔に知っていることも

私が記憶を思い出して、まだ1年も経たないうちに、そのようなことを匂わせる物が自分の手の中にあるなんて、出来すぎている話だ。

まるでこの本が私が、この世界の未来のことを思い出すのを今か今かと待ち続け、思い出し全てを知った私の前に自ら現れたみたい。

不気味なその本を見つめ、私は行き場のない恐怖感に襲われた。

落ち着かせるため、一旦深呼吸をして目を閉じると、ある考えが浮かんでくる。

…大丈夫…これはただの本だ。……………何故私がこんなに恐れる必要がある。

そう思ってしまうと、あんなに不気味に思えた本も単なる少し文字が浮かび上がるヘンテコな本にしか見えなくなり、馬鹿らしくなった。

これを作った張本人が何処の誰かは知らないが、逆にこれを利用してしまえばいい。

気をつけることはただ一つ『ハリーポッター』の主要人物達にこの本の存在を知らされないようにすることだ。

そう心に決め、ひとりで納得していると誰か階段を下りる音が聞こえた。私は急いでペンダントを閉じ首からかけて服の中にしまいこむ。本は、しっかりと閉じて出来るだけ表紙を見せないように隠し持った。

男子寮から降りてきたのは、真つ暗な夜が似合う彼だった。セブルスは私の顔を見た瞬間驚いたようで、少し眉が上がった。こんな時間に、まさか談話室に自分以外の生徒、さらには先客がいるとは思ってはいなかったんだろう。彼は2冊本を手に持っていて、少し気まずい空気が流れた。私は出来るだけこの場を離れたかったこともあり、彼に話しかける。

「…ああ…私はもう寝ようとしたところだから良かったら、ここ座つてよ。…今日は随分と冷えるから」

私は、ゆつくりと立ち上がってあまりセブルスの顔は見ないようにした。

おやすみなんて挨拶が言えていたら、とつくに私はセブルスと仲良くなれている。何も言えないまま部屋に戻ろうとする私を呼び止めるセブルスの声が聞こえてきた。

「あっ…ちよつと待って、」

私は、何かと不思議に思つて振り返り少しもたついていいるセブルスを見つめた。

「これ、昨日借りた本。…読み終わったから、返すよ。ありがとう」

セブルスの手には、確かに昨日貸した本があった。彼はすぐに返すと言つた自分の言葉をどうやらきちんと守ってくれたらしい。

中々受け取らない私を不思議そうに、セブルスは見つめてくる。

…もう少しだけこの時間が続けばいいのにな……

なんて思った私をどうか誰か殴ってほしい。そうでもしないと自分がおかしくなってしまうそうで、怖くなったのだ。

私は、少し困っている様子のセブルスを見て答えた。

「……………あげる…」

「…えっ?」

私の言葉に、間抜けなセブルスの声が聞こえてくる。

「その本…あげるよ。だって私より貴方が持っていた方がその本も幸せだと思うし」

「いや…でも、これあんまり出回ってないし」

戸惑い始めたセブルスは、一步の引こうとしない。

「気にしないでいいよ。…魔法薬が得意な貴方に私は持っていて欲しいし、……私からのクリスマスプレゼントだと思って受け取って」

私は、本を優しく彼の方に押すと、セブルスは本を両手で抱えこんだ。

「…あつ……ありがとう」

申し訳なさそうにお礼を言うセブルスを見て、私は今度こそ部屋に戻ろうとするとまた彼が呼び止める。

「あつ…でも、じゃあ僕は何を君にクリスマスプレゼントをお返しすればいい?」

何とも律儀な人なんだろうか。そんなこと気にしなくていいのに。

「……………じゃあ、名前でもいいよ。貴方の名前を教えて。」

そんなことでいいのかという表情を浮かべ、セブルスは話し出す。

「…えっ?そんなことでいいの。他にもっと何か…女の子が欲しがりそうなやつとか、本とか」私は、貴方の名前が知りたいの。」

私は、セブルスの会話を中断させ、彼の瞳を見つめた。

セブルスの真つ黒な瞳の奥には、光が宿っていてこの世にあるどの宝石よりも綺麗だと思った。

少し沈黙が流れた後、セブルスはゆっくりと口を開き、声を出す。
「……………セブルス・スナイプ」

……………君は？」

思ってもいなかったことを聞かれ、私の心臓が飛び跳ねた。私の脳は、名乗るな、彼に名前を教えるな、私は彼に関わってはいけないことを忘れたのかと警告を出す。
それでも何か期待するかのように口は勝手に動いて、声が外に出た。

「……………私は……」

……………レイラ・ヘルキヤット」

貴方に……恋をしています。

眉を下げ微笑むセブルスを見て、私の胸はあつたかくなりながらも、また苦しく痛みました。

お願いだから……そんな表情を私以外に見せないで……………

こんなことを思ったところで胸の痛みがましてや和らぐばかりか増すばかりだ。

目の前にセブルスがいるのに……私は貴方はばかりを見ているの

に……

彼は…セブルスは…

………私のことは決して見てくれない…

目の前にいるセブルスを見つめながら、軽く唇を噛み締めた。……痛みで、胸の締め付けられるような圧迫感を少しでも和らげようとしたが、誤魔化すこともできなかった。

どうやら今年のクリスマスは、素敵なプレゼントを届けてくれるサントは来てくれなかったようだ。

4 真つ黒な梟と手紙

昨日のあんな豪華な食事が嘘のように大広間には、朝食が並べられていた。あんなに立派なクリスマスツリーも、色とりどりの装飾品もすっかり片付けられた大広間は、少し寂しい感じもした。

上から降ってくる白くて軽い雪だけが、クリスマスパーティーの時と変わらずふわふわと降り続けている。

朝食を食べていると、ちらほらと梟達が、上を飛び回り、手紙や配達物をホグワーツに残っている生徒達に届けていた。

皿の上に乗っかってあるパンを取ろうと手を伸ばすと勢いよく私の前を何かが突進した。驚いて手を引つ込めたのが大正解。突進した黒い何かはもそもぞつと起き上がって私の方を首だけでくるりと向いた。

真つ黒な梟だった。ぴよぴよこと、歩み寄ってきては啜えている二つの手紙を渡してくる。少し戸惑いながらも手にとって、宛名を見てみると、兄と母からの手紙だとすぐに分かった。

可愛いレイラへ

この手紙が無事に読まれているということは、その子にとっての初仕事は完璧だったということだね。

怪我の治り具合は順調だよ。母さんが、煎じた薬を無理矢理飲ませてきたらね。この手紙が届く頃にはもう治ってるだろうな。

さて、本題に入るよ。この手紙を届けてくれたその黒い梟が僕からのクリスマスプレゼントだ。

レイラは、まだ梟を持ってなかったし、手紙とか色々届けてくれるから持つてると何かと便利だろ？

男の子だからかっこいい名前をつけて、可愛がってあげて。大丈夫。動物が少し苦手なレイラの為を思っ人懐っこい子を選んどのから。

返事を待っています。

兄、ノアより

私は、手紙を少し握りつぶしながら真つ黒な鼻を見つめた。ふわふわな黒い羽根に覆われ、キラキラと輝く真つ黒くてまん丸い瞳で私を捉えながら不思議そうに頭を傾ける。

「…名前……………か…」

私は、動物が大の苦手、いや嫌いだ。猫といい、犬という王道のものから、昆虫類まで全てのものが嫌いだ。見ただけで体が受けつけない。それなのに、兄からのクリスマスプレゼントは梟☒……嫌がらせだと受け取っていいだろう。

動物なんてどう意思疎通を図ればいいのかというのだ。

人間関係もろくに上手く出来ない私が言葉も通じない動物を相手にできると思うか？答えはNOだ。

私は、少し溜息をついて、もう1つの手紙を開いた。

愛しいレイラへ

元気になっていますか？ホグワーツでのクリスマスは楽しく過ごせましたか？

ノアの怪我の具合もだんだんとよくなってきたので、心配はありません。

そんなに酷い怪我ではありませんが、一応怪我人であるノアと一緒にお酒を飲もうとする馬鹿がいるので、こちらは大変です。

次会うのは夏の長期休みですね。…1年もあつてないとすると少し寂しいですが元気で勉強も頑張ってください。

①きちんと睡眠をとること

②ご飯は、ちゃんと三食食べることに

③少なくとも一ヶ月に一回ぐらいはお手紙で近況を教えてください。

この3つのことを忘れずに、特に3つ目をちゃんと頭に入れておいてくださいね。

母より

私は、まだ机の上にいる梟に視線を移して、名前を考えた。

「…貴方…：今日からアテールね」

結局私は、ラテン語で黒という意味の誰でも浮かびそうな単語を適当に名前としてつけてやった。すると、アテールはその名前が気に入ったのか何なのか分からないが、歩み寄ってきて私の腕に体を擦ってくる。

意味のわからない行動に私は行き場のない手を空中に浮かしたまま、アテールを少し睨みつけるように視線を落とすと、潤んだ瞳で見つめてきた。

…これだから動物は嫌いなんだ！

私は、アテールを抱えて走りながら梟小屋まで連れていった。此処が貴方の帰る場所だと教えるようにアテールを空いているスペースに置いてやって逃げるようにその場を後にした。

最悪だ！梟の毛はつくし！なんか動物臭くなつたし！

全然嬉しくないクリスマスプレゼントを受け取った私は、兄に文句の1つでも書いてやろうかと思つて羽根ペンを走らせた。

母と兄への返事を書き終えて、梟小屋に向かおうとすると、談話室

のソファ―に腰掛けゆったりと時間を過ごしているセブルスを横目に寮を後にした。……名前をお互い知ったところで何も変わることもなくてなかった。ただ、彼にとつての私はレイラ・ヘルキャットという自分と同じスリザリンの女子生徒が、クリスマス夜の本をくれたという認識ぐらいだろう。

実際、話しかける勇氣なんてなかったし、闇の魔術に熱心な様子のレギュラスがセブルスに何かと話しかけているもんだからそんな隙さえなかった。

セブルスも、前よりも闇の魔術に熱中しているようだったし、どうやら原作の流れは順調に進んでいるらしい。

私は、このまま関わりなく過ごすのが妥当だろう。

そんなことを思っただけでクリスマス休暇を過ごしていると、引き出しの奥に隠した本のことなどはすっかり忘れてしまっていて、静まり返っていたホグワーツにも休暇を終えた生徒達が戻ってきた。

5 喧嘩とテスト

6月の学年末試験に向けてなのか課題の量もだんだんと多くなりその分みんなの苛立ちが募っていた。

勿論私だって勉強嫌いだっだし、何だったらやりたくなかったが、やる気のおこらない頭を奮い立たせて羊皮紙に向き合った。談話室にある机に課題を広げ、出来るだけ端によりながら目立たないようにと取り組んでいると後ろから爽やかな香水の香りが鼻をさわった。

「薬草学か……どうやら手こずっているようだね？」

聞いただけでも寒気のある声が入った瞬間私は、鳥肌を立たせながら後ろを振り返った。すぐ後ろには、私が苦手で、どうも好きになれない相手、ルシウス・マルフォイがいた。

純血である私にかけているのか、それとも純血でありながらあまり純血主義ではない私の家系を面白がって興味本位で近づいてきているのか知らないが、とにかく私はこの人が苦手だ。

「…私を手伝ってあげようか？見たところによると、君はまだ魔法薬の課題も終わってないのだろうか？」

机に置いてある魔法薬の教科書をちらっと見て、私に話しかけてくる。

羨ましそうにこちらを見て、私の方を睨んでくる周りのスリザリンの生徒達を横目に羽根ペンと、羊皮紙をくるくるとしまった。

彼は今のスリザリンの生徒にとって憧れの存在で、あの憧れの死喰い人とも繋がっているというのだから、皆が彼に気に入られようとするのは当たり前だった。

「…いや結構です。課題は自分でやった方が身になりますし、魔法薬は他の人に教えてもらう約束をしているのでご心配なく」

散らかっている教科書を閉じて、数冊重ね立ち上がるとルシウスは、にこりと張り付いた笑みを浮かべながらまた話しかけてくる。

「それもそうだね。……ところで、誰に教えてもらうんだい?…魔法薬」

この人は、私に恥をかかせようとしているのだろうか。私がスリザリンで浮いていることぐらい、此処にいる全員が知っている。教えてもらえる友達なんているわけ無いが、もう私の頭には魔法薬といったら彼の名前が浮かんでいた。中々答えない私を見て、周りにいる生徒、何人かがクスクスと笑いをこぼしだす。

「……………セブルスに、」

…セブルス・スネイプに教えてもらう予定ですが、それが何か?」

「…そうかい。…確かに彼は、魔法薬に関しても詳しいからね」

「ええ…その通りですよ。もういいですか。私は貴方ほど優秀では無いので、課題が終わらないんですよ」

そう早口でルシウスに告げ、逃げるように驚いている様子のセブルスへと足を向かわせた。どうやら結構目立っていたらしく、セブルスも見えていたらしい。

「という事で、隣いい?」

私が問いかけには何も答えない代わりに、机の上に置いてあった教科書を寄せて場所を空けてくれた。私が疲れたように、椅子に腰掛けると不思議そうにセブルスが問いかけてくる。

「何で、僕なんかの所に来たんだ?絶対にルシウス先輩の方が良いと思うけど?」

「…教えてもらう相手は、やっぱり同じ年の方がやり易いじゃない?」

適当に言葉を繋げて、もう一枚の羊皮紙を取り出し魔法薬の教科書を開いた。セブルスは何も言わずに私の顔を見てきたが、特に詮索も何もしてこなかったのが助かった。

レポートは苦手だしさらには魔法薬学も苦手なので色々手こずったが、セブルスがアドバイスをしてくれたため、なんとかやり終

えることができた。

……あんなに自然に話せたのは奇跡だと思う。いつもセブルスに話しかけようとする緊張して、何もかも上手くいかないのにごく普通に質問だってできたし名前だって呼べた。(一回だけだけど)

昼食を食べるために大広間に行こうと伸びをしながら歩いていると、なぜか盛り上がっている声が耳に入って、私は自然と引き寄せられるように声ができる方に足を向かわせていた。

どうやら盛り上がっているのは中庭らしく、吹き抜けている中庭で誰かが喧嘩をしているらしい。

皆がまるで観戦するように、廊下の窓枠の近くに円を囲むように人が集まり、凄い盛り上がりを見せていた。

私は、大体は想像ついたが少し気になって覗いてみると中庭で杖を構えているセブルスの姿が見えた。その瞬間に体から血の気が引いたのが分かった。今までで一番激しい喧嘩だと見ただけでも分かったからだ。相手はもちろんポッターで、側にはブラックが楽しそうに見ている。

2人ともお互い頬から血を流したりしていたが、セブルスの息の乱れぐらいから見ると完全にポッターの方が余裕があった。

その場は誰も止めようとする者もおらず、どちらかというと勉強詰めの日々のストレスを発散しているかのようだ。まだ、2年生だし、相

手を死にいたしめる呪文を習得しているわけではないが、魔法というのは、便利で簡単で時には怖いものになる。

……もしかするとどちらかが病院送りになる可能性だってある。

私が知っている未来は、『ハリーポッター』の本に書かれた内容と、それが映像化された物語だけ。だから、この時期に何が起こるなんて分かるはずもなく、もしセブルスが酷い怪我をしてしまったらどうしようという不安だけが募ってきた。こんな激しい喧嘩になる前にもつもだつたらエバンズが止めている。私は、必死に彼女の姿を探したが勿論居るはずもなく、私は急いで大広間に駆けだした。

……彼女じゃないといけないんだ。

……私が止めても意味がない。

大広間に駆け込んで、周りを見回してみるが、どこにもおらず私は少し腹を立てながら額から垂れてくる汗を拭った。

「こんな時に…限って……」

見つけられない。

毎日嫌という程目に入るくせに、こういう時だけは全然見当たらない。

大広間から出て、グリフィンドールの寮に行こうか、それか図書館かと、思い悩んでいると今だけは会いたかった明るい彼女の声が聞こえてきた。

大勢のグリフィンドールの女子生徒の中に入って楽しそうに話す姿が目に入り、私は彼女に向かって駆けだした。私が、エバンズの腕を握った時に、彼女はやつと私に気がついて不思議そうに眉を下げ問いかけてくる。

「どうしたの？…貴女凄い汗をかいてるじゃない」

ちよつと待ってねと言って、ご丁寧にローブのポケットからハンカチを取り出して私に渡してくる。私は受け取りもせず、彼女を睨みつけるとエバンズを無理矢理引っ張った。

後ろからは、戸惑ったような声が聞こえてくるが、気にしてる時間なんてあるわけなく、私は腕が痛いというエバンズの声聞きながら、中庭へと急いだ。

中庭に近づくとつれ、盛り上がっている声が聞こえてくるとどうやら察しがついたのだろう。彼女は、私の隣に並んで一緒に走りだした。

中庭につくと、彼女はちよつと通してと、中へと入っていき、一瞬で見えなくなる。久々に走って疲れた私は、壁にもたれながら、しゃがみこんだ。

「セブ!!!何をしているの!!!」

彼女の怒鳴り声とも近い叫び声が響くと、盛り上がっていた声もだんだんと小さくなるのを感じて安堵した。

もたれかかっている石造りの壁がひんやりと冷たく感じて汗をかきほど熱い私の体にはちようど良かった。少しして、周りにいた生徒達は面白くなさそうに散っていき、心配そうにセブスの泥だらけのローブをはらっているエバンスの姿が目に入り、疲れた体を立ち上げさせた。

怪我はしているけど、大事に至るものはなかったし、ちゃんとエバンスが止めに入ったし、私にしては良くやったと自分で自分を褒めてその場を立ち去ろうとすると、後ろから嫌な声が聞こえてきた。

「君も、見物していたのか?」

声の正体は勿論ポッターで、まるで私を挑発するように話しかけてくる。

「…見物?…何が貴方達のしようもない喧嘩を見て楽しまなきやいけないの?」

私は、哀れなものを見るかのように少し笑いながらポッター達を挑発するように言葉を選んだ。

「…その言葉をそのままそっくり貴方達に返すわよ」

ポッターではなく、周りに立っているブラックや、ルーピン、ペティグリューを睨みつける。小心者のペティグリューは、私に睨まれたぐらいで怖じ気付いたように後ずさりをした。

明らかに私と彼ら（ポッターとブラック）の間には火花が散るかの

ようにただただお互いを睨みつけ、私はいつでも杖が取り出せるようにと構える。

そんな空気をぶち壊したのは、エバンズだった。セブルスの腕を引つ張りながら今にも喧嘩をしそうな私達の間割り込んで止めに入る。

「何をしているの☒もうなんで貴方達はそんなに喧嘩が好きなのよ！女の子相手に、やめなさい！」

少し呆れたように私の前に仁王立ちして、彼らの母親のように説教しだした。セブルスはというと、エバンズの後ろからポッター達を睨みつけて、こちらでもまた喧嘩が勃発しそうだ。

私は、構えるのをやめて、彼らに背を向けてさっさと寮に戻り、午後の授業の準備をして、机にあったお菓子を何個か口に含み教室に移動した。

あんまり関わりなくなかったし、何より

……エバンズと一緒に居たくなかった。

喧嘩のおかげで昼食を食べ損ねた私は、さっき食べたお菓子だけではお腹なんて満たされる訳もなく、空腹に耐えながらその日の授業を何とか乗り切った。

その後、セブルスやエバンズと話すことも、ポッター達と衝突することもなかった。

セブルスとポッター達は顔を合わせただけで、お互い呪文を掛け合っていたから、毎日談話室に帰ってくるセブルスは傷をつくつてきたし、包帯が巻かれもう大怪我を負っているような姿をしていた。だからこそ、遠めで彼らが喧嘩をしていたらどんなに遠回りになるうがその道を避けて通っていたから私はあの時のように衝突することもなかった。

セブルスはポッター達と喧嘩をすればするほど、闇の魔術に熱中し最近ではもう闇の魔術に関する本を肌身離さず持ち歩いている。

きつと彼は、呪文を開発しては試しているのだろう。

イースト休暇なんてものは、もう休みじやなかった。課題の山のよ
うな量を終わらせないといけなかったし、来年の選択教科を選ばない
といけなかったからだ。結局私は、悩みに悩んだ後、数占い学と古代
ルーン文字学を選択した。占い学にも、マグル学にも興味なかった
し、魔法生物学に関しては選択肢にも入れてなかった。

それを乗り越えても、それから毎日は課題の山。授業のない土日
は、ほぼ課題をするために潰され、学年末テストが近づいてくると、も
う毎日羊皮紙と教科書と向き合った。じめじめとした空気で、頭の回
らない脳を必死に叩き起こしながらテストに出そうなところを詰め
込むのは、全然楽しくもなんともない、辛いだけの作業だ。

学年末テストの直前の日といったら、いつもは騒がしい談話室も、
何人かの話し声しか聞こえず、みんながページをめくる音だけが響き
わたっていた。私はそんな空間に耐えきれなくなり、自分のベットの
上で見直しをしながら、明日に備えた。

そんなこんなで学年末テストを迎え、終えた日の談話室には勿論
皆の安堵したため息や疲れたように友達と話し出す声などいつも通
り騒がしさが戻った。テストが終われば、ストレス発散ができるクイ
ディッチの試合が待っていた。でも、あんまり乗り気はしない。何故
なら今日あるのは、グリフィンドールVSレイブンクローの対決。
何せグリフィンドールには、ポッターがいるし、レイブンクローが
負ければ、グリフィンドールの優勝になるのだから、私としては面白
くない。

だからクイディッチ観戦には行かずにゆつくりと談話室で時間を
潰したのだが、本当に行かなくて正解だと思った。

レイブンクローが負けて、グリフィンドールが優勝したと後から聞
いたからだ。

その知らせを聞いた後、嬉しそうに歩くポッターとすれ違いそうに

なり、私は慌ててその道を避けるように壁の陰に身を隠した。

何でこんな広いホグワーツでこんなにも会う頻度が高いのか気になっるが、こればかりはしょうがないことだと最近諦めている。

ブラックやルーピン、ペティグリューに囲まれて笑うポッターの顔は、怖いほどハリーと瓜二つで、ハリー自身を見ているようだ。

「本当に……そっくりだな……」

私が感心する声は、誰にも聞かれることなく消えていった。

6 純血の血

2年生最後の日曜日は、いつもの通り変わらず図書館で借りた「魔法動物の全て」という本を読みながら談話室でゆつくりと過ごしていた。兄のせいで鼻を飼いだめた私は嫌でも動物を少しでも好きになろうと、努力しているのだが、どうも上手くいかない。

本を思いつきり閉じて、本を返すために寮を出た。もう2年生もあと少して終わりかと思いつきながら行き慣れた道を歩くとあつという間についた。

本を返し終わってどこまでも晴れている蒼い空を見たら、何故か外に出たくなった私はもう夕食まで時間がないというのに外に出た。勿論外に出ている生徒は少なくちらほらとしかいなかったが、晴れた日の空気を吸うのは気持ちよくて気分もすっきりはれた。

特に何も考えずにただただふらふらと歩くと、自然と人気の少ない温室へと自分が向かっていることに気がついた。薬草学の授業の時間ぐらいいしか来たことないし、生徒も滅多に近寄らないところだ。

1から3号までの温室があつて、中には危険な薬草もあるらしい。そんな生徒など1人もいなさそうな温室の近くまでくると、見たことのある顔の青年、体つきも大きく、私よりも大人っぽい雰囲気の人組が愉快そうに笑いながら私の横を通り過ぎていった。その人達がスリザリンの上級生だということをすぐに思い出し、どうしてこんなところにいるんだらうかと不思議に思うと、胸騒ぎがした。

さつきまで、あんなに晴れていた気持ちが一気に何か引つかかったように靄がかかりすごく気持ちが悪い。

私は、ふと温室が三部屋並んでいるのを見つめ何も考えないまま近づいた。

……何か嫌な予感がする。

そう思いながら温室の扉を引いてみるとなぜか鍵がかけられておらず、顔を覗かせてみたが誰もいなかった。私は、静まり返っている温室の中に入り、全神経を尖らせながら先へと進む。温室は、隣接し

ていたため中からでも外からでも行き来できる。2つ目の温室にも誰もおらず、残りはあと1つ。3つ目の温室だけだ。私は、どうか扉が開かないように祈りながら引いてみたが残念ながら音を立てて開いてしまった。

溜息をつきながら入ってみるとそこだけ、雰囲気違った。少し薄暗く、何か音が聞こえてくる。

「ルーモス」

あまりに見えづらくて、私は呪文を唱え杖の先の灯りを頼りに奥へと進んだ。一定の間隔で植えられている植物の蔦が不気味に動き、私のことなど見向きもせずに、まるで奥に弱っている獲物がいるかのようスルスルつと何本もの蔦が伸びていく。

一歩一歩進むにつれて、聞こえていた音が、何かに耐えるような苦しそうな人間の声に変わったと思うと、何か動いているような影が見えた。

前が見えやすいように、杖を前に出すと青白い光が私の前方を照らしてくれる。目の前がはつきりと見えて、動いている影の正体がしっかりと視界に入った。

あまりに衝撃的な光景に体が固まり、思考も停止した。

目の前に大量の蔦に襲われているセブルスが目の前にいたからだ。

頬には痛々しい傷をつくり、打たれたような青紫色の痣のあとまである。服は、泥の中に突っ込んだように思わせるほど汚れていて、ズボンは破れて、膝からは痛そうに血が流れていた。そんな彼に太い蔦は容赦なく襲いかかっていた。叫ばれないようにと、口周りを抑えられ、今でも折れるんじゃないかと思うほど脚と腕に力強く巻きついてくる。

セブルスは痛いのか、苦しいのかそれとも恐怖でなのか瞳には涙を浮かべて絡みついてくる蔦に必死に抵抗しようとしているが、彼の体

は意図も簡単に宙に浮かされていて力など入るはずもなかった。

落ち着いて考えてみれば1年生で習った悪魔の罫だとセブルスだったらすぐに分かるはずなのに、動転するほどセブルスは気が参っているらしい。

私は、セブルスを救い出すため、杖先を向けて呪文を唱えた。

「ルーマス・ソレム！」

眩しい光が温室を包み込んだかと思うと、悪魔の罫は、弱ったようにするするとセブルスの体から離れていった。

自由になったセブルスにすぐに駆け寄って私はぐったりとしている彼の肩を持つ。

今までで一番酷い怪我だった。

：ポッターだろうか：いやポッター達だとしたらこんなに一方的にやられる筈がない。

左手を痛そうに押さえるセブルスを見て、さっき通り過ぎた5人の男子生徒を思い出した。

「……………虐められたの?……………」

私の問いかけに、聞かないでくれと訴えているかのような瞳で見つめてきた。プライドが高いセブルスは絶対に虐められたとは言わないし、認めもしないだろう。

「…ちっ違う…僕は虐められてなんかいない」

すぐ嘘だと分かるようなことをすらすらとセブルスは、口に出して立ち上がろうとした。

「純血じゃないから虐められたの?」

自分よりも年下のやつが闇の魔術の知識を身につけて、しかも純血ではない。プライドが高いスリザリン生だったら誰でも思うだろう。そんな奴は気に食わないし、とことん潰してやりたいと。

セブルスはその場から逃げ出そうとするが、そんなことは私が許す

こともなく怪我をしている彼の腕を容赦なく引つ張った。セブルスは痛そうに顔を歪めて、私を睨んでくる。

「質問してるんだけど…純「うるさい!!!」」

私の言葉を途中で遮り、セブルスは声を張り上げた。

「そんなの言われなくても分かってる!!」

僕が純血じゃないことぐらい!!お前に言われなくてももう知っている!!!」

セブルスは辛そうに、頭を支えて狂ったように泣きながら私に大声で怒鳴り散らした。

「何なんだ。純血純血って、僕だって、あんな父親の元に生まれるぐらいなら、生まれたくなかった!闇の魔術がそんなにいけないものなのか☒何で、何で☒」

喚くセブルスの姿を見て、私の視界はだんだんとぼやけだして、鼻がツーンと痛くなるのを感じた。

…私が今いくら優しい言葉をかけようとも貴方には届かない。

…私には貴方が救えない。

私は近くにあった空の植木鉢に杖を向けて呪文を唱えた。

「レダクト」

植木鉢は音をたてて割れると、何が起こったのか分からない様子のセブルスがぼかんと私の行動を見つめた。

あんなにセブルスの怒鳴り声で響いていた温室は静まり返って、彼の落ち着いたような声だけが耳に入ってくる。

「……………何して…」

セブルスの言葉には何も答えずに割れた植木鉢に近づいた。出来るだけ先が刃物のようにとんがっていて切れ味の良さそうな欠けらを選ぶ。

「……………おい…何を」

私は戸惑っている様子のセブルスを見て、自分の掌を欠片で深く切りつけた。当然ぱっくりと肉は割れ、少し赤黒い血が大量に流れだ

す。

「何をやっているんだ!!!」

自分も怪我をして走れないぐらい痛いはずなのに、駆け足で私に近づいて血が流れ続ける左手を押しえだした。

「…血でしょ…貴方が虐められてる理由」

「…はあ?…」

私の言葉に間拔けな声を出して呆然と顔を見てくる。

「…ほら、あげるよ。…私、純血だし」

セブルスは意味が分からないと言った様子で少し怖がっているかのように、真っ青になっていく。

「…純血じゃないから虐められるのなら、純血である私の血を貴方に分ければいいのよ。…ほら、これでもう大丈夫よ。」

私がセブルスに血が流れ続けている左手を差し出すように彼に押し付けると、セブルスは震えている声で静かに言った。

「…そんなの、意味ないだろ…」

途切れ途切れで言うセブルスの言葉を聞いて私の中の塞きとめる何が壊れたように一気に流れ出した。

「そんなの…分かってるよ…だけどこれぐらいしか思いつかないの。励ます言葉なんて私には出てこないし、それにあんなこと言われるなんて思ってもいなかったから」

涙を堪えながら、私は痛む左手に視線を落とした。暖かいセブルスの手の温もりを感じると、頭の中で彼が首から血を流し息絶える姿が嫌なほどはつきりと映像として流れ始めた。

耐えきれなくなった涙はポタポタと流れ出し、制御できなくなった私は俯いたままセブルスに言った。

「…お願いだから…生まれたくなかったなんて…言わないで…」

私の言葉にどんな表情をしたのかは分からない。俯いて静かに泣く私をセブルスは、何も言わずに引っ張って医務室に連れて行ったのだ。

全身怪我だらけのセブルスと静かに俯いて泣き続ける私を見て、マ

ダムは驚いたような声を出したことだけは覚えてる。

でもそこからは、記憶が曖昧だった。セブルスとはカーテンで遮られて、どんな怪我の状態だったかは分からないし、少し経って騒ぎを聞きつけた、ダンブルドアとマクゴナガル、スラグホーンが駆けつけて、あれやこれやと事情を聞かれたが何と答えたか覚えてないし気づけばベッドに横になっていたみたいな感じで本当に記憶にないのだ。

それからは本当にあつという間で、時間が過ぎて、もう明日から夏休みになってしまった。汽車に乗り込んで、いつもと変わらずコンパートメントに1人腰掛けて外を眺めた。

……セブルスに謝り損ねた：

自分自身でも何であの場面で「純血じゃないから虐められたの？」と聞いたのか分からない。：私なりに励まそうとしたのだが、何であんな傷つけるようなことを追求するように言ったのだろうか。

後悔が押し寄せてきて、頭を支えた。

：何も言わずにさつきと医務室に連れて行ってあげればよかった
完全に謝るタイミングを失った私は、深いため息をつきながら外を眺め、必死に言い訳を考えた。

セブルスと話す機会なんてあるわけもないし、あつたとしても話しかける勇気なんてあるわけない。だってなんて言えばいいのかも分からない。

「やあセブルス。この前は酷いこと言ってごめんね。あなたを傷つけるつもりなんてなかったの。」なんて言えてたらばんばん話しかけている。

：あまり関わらないようにしようと思ったはずじゃないか。

セブルスを確実に救うために物語の流れを変えないようにとそう決めたのに、がつつり関わってしまった。

私は、顔を隠して大きな溜息をつく。

……よし、来年こそは関わらないよ……やっぱりやめておこう。

私はフラグが立ちそうな気がして決心するのをやめて、この先のことを考えると思いやられてまた溜息がでた。

7 長い長い夏休み

久々帰った我が家は、やっぱり安心した。見慣れた廊下に、自分の部屋。

屋敷しもべ妖精のアウラが、とんとんと扉の戸をノックして話す声が聞こえてくる。

「お嬢様、ご主人様がお呼びです」

アウラは私がか今まで見た屋敷しもべ妖精のなかでは、何でもできる優等生だと思う。はきはきと話すし、テキパキと家事もこなす。何かをやってほしいと思って呼ぶと、もう先回りしてやっていることも多いし、本当に凄く働いてくれているのだ。

「分かった。ありがとう」

扉を開け、お礼を言うとアウラはそんな滅相もありませんと言ってまた仕事に戻りだした。

ひとつ残念なのは、服がぼろぼろなことだ。だって新しい服を買ってあげると、彼を自由の身にしてしまう。だからしょうがないことだとは思っている。

父の部屋の扉を数回ノックして、呼びかけてみる。

「お父さん？入るよ？」

返事がないので、少し扉をあけてみると相変わらずの変わった部屋だった。物書きをする机にはもう書くスペースなどがないほど本が積み重なっているし、天井では描かれてある人物像みたいな絵たちがお茶会を開き始めていた。かと思えば、床には変な小さな植物がぴよこぴよこと歩いて移動していて、右の奥の壁は蔦がノキノキと伸びていた。

「何を立ち止まっているんだ？レイラ」

後ろから突然聞こえた声に体を飛び上がらせて後ろを振り向いた。

後ろには不思議そうに、お菓子を抱えている父がいた。

「何って、お父さんに呼ばれたからここに来たんじゃない」

「…ああ！そうだったな。ほら、早く部屋に入りなさい」

父が優しく背中を押してきて私はあまり乗り気ではなかったが、入るしか他なかった。ふかふかなソファに腰掛けると、父は杖を一振りし、私の前にお茶とお菓子を並べてくれた。

「…それでどうしたんだい？」

「…ん？」

父から出た言葉に私は聞き返した。それは明らかに私の台詞で、私には何も何もなかった。

「私に聞きたいことがあるんだろ？」

「いや…何もないけど……」

「そうかい？そんなはずはないだろう。だってレイラの目の奥にはずっと映ってるじゃないか」

ほらまた意味の分からないことを言い出す。父とはろくに話が続いた試しがない。どうして兄はあんな1時間も2時間も話せるのか不思議でたまらない。

「……聞きたいこと……ああ……ペンダント」

私が思い出したようにティーカップから顔を上げると、父は満足気な表情だった。

「どうだい？よかったろ？クリスマスプレゼントにはぴったりだ」

「…うん…まあね……あれは時計なの？なんなの？」

「あれは時計じゃないさ。時を数えてくれるペンダントだよ。」

いやいや、時間を数えてくれるのが時計なんだって！

私は心の中で、突っ込みながら落ち着きためにお茶を一口飲んだ。

「そんな曖昧じゃなくて、どう使えば正解なのかを教えてよ。」

「レイラは、中に掘られてあった文章覚えているかい？」

「……聞いてないし……」

全くと聞いていいほど聞いていない父を見て、少し長くなりそうなのでソファーに深く腰掛けた。

『時は進むばかりで決して戻らない。

時が止まることはあつても戻ることはできない。

貴女は時を止められても時を戻すことはできない。しかし貴女自身それが望むというのなら、時は戻れるのだろうか。』

この文章の意味が分かれば使い方なんて簡単だよ。

あのペンダントはね、実はお父さんの家系で代々受け継がれているものなんだ。…お婆ちゃんから母へ、母から私へ、そして今度は君に回ってきたんだよ。」

「…そんな大事そうなものを私になんかに渡しても大丈夫なの？」

「勿論大丈夫。」

何故か自信満々の父を見て、私は不安になりながらクッキーを食べた。

「でも、私その文章の意味全くといっていいほど分かんないし。時間なんて戻ることも止まることもできないでしょ？」

「…そんなことないよレイラ。時間の基準なんてものは、元々は人間が勝手に決めたことだ。時間は戻らなくて、止まることもないなんてものも人が勝手に決めてそれが固定してしまっただけ。マグルと一緒さ。あの人たちはものを宙に浮かせたり、箒にまたがって空を飛んだりする魔法があること自体に目を背け、勝手に自分たちからそんなのありえないと思っっているから彼らは私たちが見えないし聞こえない」

「じゃあ、今すぐに時間を止めてみせてよ。」

私は、少し腹が立ってきてぶっきらぼうに言う。父はにこりと笑っただけだった。

「そんなことをしたら、全ての流れが狂ってしまうだろう？」

もう意味が分からなかった。さっきから、ずっとぼんやりとしか言ってくれなくて逆に混乱しだした。

「お父さん、どっちなの？あれを使えば、時を戻したり止まらせたりできるとのこと？」

「空想が現実になることだってあるんだよ、レイラ。いつだって人間のお伽話は現実で、出来てるからね。…でもひとつだけ気をつけて

ほしい。時の流れはとても繊細で細くて、残酷だ。」

父はそう言ってまた笑みを浮かべて満足そうな表情をしたが、私は全然満足じゃない。

よし、兄に頼ろう。

何だかんだ頼りになる兄の顔を思い浮かべて、私は小さくうなずいた。

兄が家に帰宅したのは、日が沈み暑い夏も涼しくなる時間帯だった。

階段を下りているとどうやら兄が丁度帰ってきたらしく、私の名前を叫びながら、思いつきり抱きついてきた。

「ちよつとー！何☒」

「そんなに冷たくならないですよ。お兄ちゃんが帰ってきたんだよ」

「離れてノア！暑い！」

私は抱きついてくる兄の体を無理矢理押して、やっとの事で離れると私は逃げるようにさっさと食事を食べる部屋に向かって歩き出した。

「母さん…レイラは反抗期かい？」

そんな声が後ろから聞こえてきたが、特に気にもしなかった。兄に付き合っていたらきりがないのでから。

兄も帰ってきて、やっと久々の家族全員が揃った食事を始められた。

兄は今研究しているドラゴンのことや、新しい新種のドラゴンが見つかったことなど、楽しそうに話して、ドラゴンのは興味はなかったが、ついつい聞き込んでしまうぐらいに面白かった。

私は、話を振られないと話さない性格だと知っていた家族は、話し

やすいように色々と聞いてくれる。

「ところで、レイラ。ホグワーツではどんなことがあったの？」

母が食事を進める手を止めて、私の方を見ながら、聞いてきた。

今年一番の出来事は、私の中でこの世界の未来の一部を思い出したことだ。

でもこんなの言える訳がないし言っただけはいけないような気がして、とりあえず授業でやったことやクイディッチはグリフィドールが優勝したとか、そんなことを口下手なりに頑張っただけで伝えた。

兄は終始頷いて耳を傾けてくれて、母は手を止めて私の方を見ながら途切れそうになると助け舟を出してくれた。

父はというとお肉を切り分けていたが聞いていたかどうかは分からない。まあ、途中でクスリと笑ったから聞いていたんだろう。

「あつ、そういえば怪我は治ったの？」

私は、最後のデザートを食べている時に思い出して前に座っている兄に問いかけた。

「ああ…勿論もう治ったよ。あの時は参ったな、大人しかったドラゴンが急に暴れだして鉤爪が腕にあったんだ。」

どこか困ったように笑いながら言う兄を見て、何か引つかかった。……嘘…についてる

兄は小さい頃から嘘をつく時は困ったように少し眉を下げる癖がある。本人は無自覚なのだろうが、私はすぐに分かった。

私は大変だったねと返してデザートを食べ、自分の部屋に戻った。

兄はドラゴンが原因で怪我をしたかと思っていたが、それは嘘。怪我はしたこと自体は、両親が会いに行くぐらいだから本当だろう。

何が…原因で…怪我したんだろう…

私に嘘をつく兄の顔を思い返して、少しモヤモヤしながらその日は眠りに落ちた。

それからは、課題を母に手伝ってもらいながら終わらせたり、アテールの撫で方や世話の仕方などを兄から教わったり、父がおすすめてきた本を読んだりとすごく充実して過ぎていった。

「レイラ。はい、これ。ホグズミードのやつよ」

母が、サインをした紙を渡してきて、私は無くさないように大切にしまいながら話しかけてくる母の声に耳を傾けた。

「明日、教科書を買いにダイアゴン横丁に行くから用意していてね」「分かった。」

ダイアゴン横丁と聞いて少しテンションの上がった私は笑顔で頷いた。

その日は、煙突飛行ネットワークを使ってダイアゴン横丁に来ていた。

買わなければならない教科書をフローリシユ・アンド・ブロッツ書店で買い揃えたり、魔法薬で必要な材料を薬問屋で買ったり、マダム・マルキンの洋装店で少し裾が短くなったローブを直してもらったりととにかくいろんなお店に寄ったものだからもうヘトヘトだった。でもそんな疲れた気分もあるお店を見た瞬間に晴れて、母の腕を引って張り中に入った。

お店の看板には、「高級箒用具店」と書かれてある。私は箒にのり、飛ぶのが大の得意だ。残念ながら飛行訓練は一年生の時しか授業がないし、得意といっても少し箒の扱いがうまいだけで何せポッターの存在があったから、私が箒に乗るのは得意だということは家族以外知らないだろう。

何本もの箒が壁に立て掛けられていて私のテンションは上がっていった。

母がそんな私を見て、呆れたようにため息をつく。

「1つだけにしなさい。買ってあげるわ」

その言葉に私は、母に抱きつき選びだした。どの箒にしようか色々
と、悩んでいる時店の扉が開く音が聞こえ振り返ると会いたくない
人達がいた。ポッター達だった。箒に夢中になっていてまだ私の存
在には気づいていないらしくだったが、気づかれるのも時間の問題だ。
私は急いで母の腕を引っ張ってそのお店から逃げるように飛び出
した。

「どうしたの？箒は？」

「いい、もういない」

様子のおかしい私に気がついたのだろう。母は特に何も追及しよ
うとはせずに、代わりに明るい声で話しかけてくる。

「ほかに行きたいところない？」

「…ないよ。…もう帰ろう」

母は、すぐに分かったと言ってくれて、私達はダイアゴン横丁を後
にした。

長い長い夏休みももう終わりを迎えようとしていた。

ホグワーツ特急に乗る明日に備え、私はトランクの中に色々詰め
込み、準備をしていた。ある程度のもをしまい終わった時に、あの
本が出てきた。クリスマス休暇に図書館で見つけてそのまま持った
ままの本。

持っついていこうか、持っついていかまいか悩みに悩んで、一応持っついてい
くことにした。トランクを閉め、全ての準備が終わったと思った時、机
の上に置いてあるペンダントが目に入り、兄に聞くのを忘れていたこ
とを思い出した。

ペンダントを手に持ち、兄の部屋に行くとき快く迎え入れてくれる。

「準備は終わったのかい？」

「うん、ばっちり」

私は、兄にペンダントを渡して重たい口を開いた。

「そのペンダントをお父さんから貰ったの。でもさっぱり意味がわからなくて、何に使えばいいのかさえも教えてくれないし」

兄はペンダントの周りを観察するように眺めると、慣れた手つきでペンダントを開いた。惑星がペンダントの周りを回り出すのをただただ見つめている。

「その中に、彫られている文章を読んでもさっぱり。時間を止めることも戻すことも出来ないってかいてるくせに、最後の文見た？」

しかし貴女自身がそれを望むというのなら、時は戻れるのだろうか。よ？

それに、止まることはあっても戻ることはないっていうのもね……時間なんて止まることも戻ることもないじゃない」

「…父さんは何て言ってたんだい？」

「文章の意味が分かれば使い方が分かるって。」

「じゃあそうなんだろう」

そう言いながら兄は私に閉じたペンダントを返してくる。

「その文章とやらの意味を自分ひとりで分かった時に初めてそのペンダントの本当の価値が分かるっていう意味じゃないか？」

…父さんがレイラに渡すってことは、きつと意味のあるものなんだろうね。

お守りと思って肌身離さず持ち歩いているといいよ」

「…ノアも、文章の意味分からなかったの？」

兄はお茶を一口に飲むと、不思議そうに問いかけてきた。

「…レイラちよつと逆に聞きたいんだけど、さつきから言っているその文章というのは何のことを言っているんだ？」

「…えっ？…ほら、このペンダントの中に彫られてある」

私は、惑星が周りを回っているペンダントを兄に向けて説明する。「単なる小さなものが入れられそうな古びたペンダントにしか僕には見えないよ。」

「…何言って……えっじゃあ、この時計の針のようなものは？周りを回っている惑星は？」

兄は不思議そうに肩をすくめて言った。

「……そんなの僕には見えないし、文章何てどこにも彫られてないじゃないか」

私は、自分の掌で変わらさず何本もの針を動かし、惑星のような丸が周りを回っているペンダントを見つめた。

兄には、これが見えてない。私は、お礼を言っただけで今度は父の部屋に駆け込んだ。

思いっきりドアを開けて入ってきた私を見て、父は驚いたように本から視線をあげて呑気に私に聞いてくる。

「どうしたんだい？レイラ、眠れないのか？」

「お父さん、このペンダントの文章、私とお父さんにしか見えてないの？」

「……ああ……ノアに相談したんだね……ほらちよつとこつちにきてごらん」

そう言っただけで、父は私を手招きする。

「……正しくは、見えていた。私も今となつては何も書かれていない単なるペンダントにしか見えないよ」

「どういう意味なの。」

「もう分かっているだろう？……そのペンダントの本当の姿は所有者にしか見えないんだ。」

「……そうそう時間を戻したりできる人間がいてはいけないだろう？」

「……じゃあ、やっぱり」

「でもね、それを使うことはあんまりおすすめにしないでおくよ。お守りとして肌身離さず持つていてくれるだけでいい。」

それに……レイラに使う時が来て欲しくない」

「……えっ？」

「ほら、もうお休み。明日から学校なんだから」

上手く話を逸らされて、私は父の部屋を後にし、自分の部屋に戻った。

思いもよらなかつた。この姿のペンダントは、自分以外には見えてなくて、更には本当に時を戻したり止めたりできるなんて。

私には使う時が来て欲しくないって言ってたけど、…もし使えるようになつたらどうすればいいのだろう。こんなものを持つていても困るだけだ。

私は、ペンダントを首から下げたまま明日に備えて眠りについた。

8 本の正しい使い方

夏休みも終わり新学期が始まったホグワーツには、賑やかな生徒達の声が戻っていた。ひさびさに見た半透明の幽霊や、気分屋の階段、そして当たり前前のように杖を向けあい早速衝突しているポッターとセブルス。

もう何もかもがなんかすぐく懐かしく感じた。

今だったら、面倒ごとに巻き込まれても上手くかわせそうな気がする。

何てさつき思っていたからだろう。私は早速面倒ごとに巻き込まれてしまった。

ピーブズだ。あの腹の立つやつ。

寮で少しウトウトしていたら、授業始まるまでもうあと少ししかないのだ。

「スリザリンの変わり者、お前が浮いている理由教えてあげようか」
「邪魔。どいて」

私を通ろうとすると、ピーブズが遮るようにフワーと目の前に降りてくる。

「そんなこと言っているのかなあゝここ通してあげないよおゝ」

「お前なんかに構っている時間はないの。」

私は、ピーブズの体を通り抜け、凍るような冷気に耐えながら、廊下を歩いた。

しつこいピーブズは、ついてきて、隣で私を馬鹿にしてくる。

「純血なのにスリザリンで浮いてるお前はゝみんなの嫌われ者ゝ」

「お互い様ね。貴方も幽霊の中で断トツに嫌われているじゃない。後そろそろいい加減にしないと、血みどろ男爵に言いつけるわよ」

「そんな脅しは効かないよおゝ出来るもんならやってごらん」

舌を出しながら言ってくるピーブズを見て、我慢できなくなった私は、教科書で思いっきりピーブズを叩いた。勿論当たることはなかった。

たのだが、驚いたピーブズは、体を止まらせた。

「私に構うな。」

自分でも思っていた以上に頭にきていたらしく、低い声が廊下に響き渡った。ピーブズは、きつと私と声の低い血みどろ男爵と重なったのだろう。急に逃げるように私に背を向け壁の中に消えていった。

教室に着いた頃にはもうとつくに、魔法薬の授業は始まっていた。

唯一の救いは、生徒が調合に集中していてそんなに目立たなかつたことだ。スラグホーンに謝りながら、ピーブズに絡まれていたと言つて、席に戻り、調合を始めた。

何故こんなに、魔法薬の授業はグリフィンとドルとの合同授業が多いのだろうか。

赤色のローブを着ている生徒達を見ながら、材料を小さく切り分けた。

教科書に書かれてある手順通りに進め、少し休憩のつもりで視線をあげると前にいるセブルスが何か観察しているようにグリフィンとドルの方を見ているのに気がついた。私はセブルスが見ている方向を目で追いかけてみる。一体誰をそんなに見ているのだろうか。彼が見ていた人物は、リーマス・ルーピンだった。最初は、間違いかと思つたが、明らかにセブルスは彼を睨むように見つめている。

そういえばセブルスがルーピンに何かあると睨み、ブラックにはめられて死にかけるのはいつだろう…

私は、ポッター、ブラック、ペティグリューを見つめた。あの3人はもうルーピンが人狼だということは知っているはずだ。小説の描写を思い出してみる限り、まだ彼らが動物もどきを習得していない今年が怪しいというわけか…

グツグツと煮え出した自分の大鍋の中身を乱暴にかき回した。…となる今年、ブラックが、セブルスを危険に晒すと…

面倒くさそうにかき混ぜるブラックを睨みながら、助けに行きたいと思う自分に言い聞かせた。

それだと意味がない。これは、今後の物語に大きく関係してくるよ
うなことだ。私が関わってはいけない。

：大丈夫、セブルスはポッターに助けられて死にはしない。

そう思っても不安が押し寄せてきた。でも、万が一何かあったら、
もしも物語が上手く進んでいなかったら、セブルスはどうなるのだろ
うか。

そうだ：干渉しないように、遠くから見守ろう。

そう心から決めて、刻んだ葉っぱを大鍋の中に振りかけた。

今年に起こるかもどうか分からないまま私は、セブルスを見守りな
がら過ごした。もし本当に今年起こると思うと、セブルスとポッター
が決まり事のように杖を向けあい喧嘩をするなんてものは可愛く感
じた。いつだと考えながら過ごすのは気が気じゃなかった。ハロ
ウインのパーティーも、更には今年のクリスマス休暇だって帰らな
かった。それほど心配で、本当にこの物語が順調に進んでいるのかさ
えも分からなかったから。

私は、ルームメイトが寝静まった頃、本を取り出して、開いてみた。

もしここに書いてあることが本当ならば、この本は、私の知らない
ことを教えてくれる。とりあえず、本を開いてみてはいいもの、ど
う使えばいいか分からずに、とりあえずハリーの真似事で羽根ペンで
書き込んでみた。私が書いた文字が消えることも、またもや文字が現
れることもなく、そのままの状態だった。

本のページをめくると、所々に羽根ペンでHeerioと書かれてい
る文字があった。大きさもペンのインクの濃さもバラバラだが、1つ
だけ共通していることがあった、それはHeerioという文字でしか
落書きされていないこと。不気味にも、私がハリーの真似事をした時
に書いた言葉もHeerioで、怖くなった。

「……何これ……気持ちわる……」

こんな本捨ててしまいがあったが、何故か捨てようとする、誰か拾ってしまいそうな気がして捨てることも出来なかった。

使い方が分からなくて苛立った私は、本を閉じようとしたが、少しずつ文字が動き出していることに気がついた。

私は、恐る恐る動いている文字に触れてみると、私に触れられた文字は消えていく。

何か起こったんじゃないかと思った私は、焼かれたような文字でできている文章が書かれたページを開いてみた。案の定、そこ書いてあった筈の文章は消え、代わりにさつき私が触れた文字がポツンと書かれてある。

またそれに触れてみると、そのページから消えてその文字は元あった場所に書かれてあった。

「……そういうことか……」

この本に書き込むんじゃない。この本に元々から書かれてある文字を自由自在に組み合わせ、自分で文章を作るんだ。

……だからこんなに分厚いのか……

私は早速、文章を作るように文字に触れていく。

白紙のページを開くと、文章ができていた。

【貴方は本当に全てを知っているの？】

すると、すつーと黒いインクが滲むように浮かび上がってくる。

【私は、貴女がとうの昔から知っていることも知らないことも知っています】

私は、文字を探しながらページをめくって触れ文章をつくっていく。

【今、物語は順調に進んでるの？】

【時の流れを変えるのは、そう簡単なことではありません】

私の問いかけに、この本の回答はなんともはつきりとはしないものだった。

【セブルスが、人狼になったルーピンに襲われるのは今年なの？】

【貴女の知っている物語にこだわるのはそんなに大事ですか？】

私は本の返答を見て父を思い出した。こんな感じだ。聞いたことに対してはつきりとは答えてくれない。この本と会話をしていると、父と会話をしているように感じて、一気に疲れが出てきた。

【記憶に頼りすぎるな】

そう浮かび上がってきたかと思うと、今までの会話文全てが消えていった。

もう一回聞いてみようと思つて、文字に触れてみるが、何も反応がないままだった。本を閉じて、表紙を見つめ続ける。この本と全く会話が成り立たなかった。私は、トム・リドルの日記と同じような感じかと思つていたが、この本は、まるで私に一方的に警告をするだけだ。正確なことは何にも言わないまま。

「…記憶に頼りすぎるな……」

最後に浮かぶ上がってきた言葉を口に出してみると、確かになと思知らされた。確かに、最近の私はずっと記憶だけを頼りに行動してきた。

記憶を思い出す前は、どうやって行動していたのかを忘れてしまつたぐらいに、私はただただ物語が上手く流れることだけを考えてきた。

わかつてる。

…あんまりこの記憶に頼つては意味がないことぐらい。

でも怖いのだ。自分が愛しく想っている人が目の前で息絶える姿を見てしまったら、更にそれが訪れる未来で、もし、私が思いのままに行動して物語を変えたら、違うタイミングで殺されるかもしれない。

そうなる、悔やむだろう。

なんで余計なことをしたんだろう、と。

せつかく未来を知っているのに、それを無駄にってしまうなんて、嫌じゃないか。

……セブルスには、絶対に死んでほしくない

そんな気持ちが出て、私はいつも臆病になる。

9 嘘つきは誰

3年生になって1番の楽しみといえば、そうホグズミードに行くこと。

雪が降りつづける外で防寒着を着込み、生徒達が興奮したように友達と話している中私は独りで、行つていいという許可が出るまで体を縮こませながら待ち続けていた。フィルチが手元の資料と生徒の顔を一人一人見ながら、確認する姿を見て私は白い息をはく。

いくつかの注意点を聞き流しながらやつのことで、ホグズミードへと移動して、イギリスで唯一魔法使いしか住んでいない村、ホグズミードの町並みを目にするとやっぱりそれなりにテンションが上がり体も熱くなる。白い雪が相変わらず降り続けていたが、寒さなどすっかり感じなくなつてそれぞれ好きな所に散つて行く生徒達の後ろ姿を見ながら、お店の看板に視線を移した。

何処に行こうかと悩んでいると、よく見覚えのある後ろ姿が目に入った。セブルスだ。少しヨレヨレの防寒着を着込んで、彼は迷うことなく、ゾンコと書かれたお店の中に入っていく。セブルスが、そんな所に行くとは少し驚いたがその理由もすぐに分かった。

ゾンコに入ったセブルスは商品には目もくれず相変わらず、ルーピンを目で追っていたのだ。きつと興味もないであろう悪戯道具を手にとつて、楽しそうに商品を物色している彼らを見続けている。

少ししてルーピン達の後を追いながらお店を出るセブルスの後に続くように、私も一定の距離を保ちながらお店を後にした。

【記憶に頼りすぎるな】

セブルスを見守りながら浮かんだのは、忠告するように本に浮かび上がった言葉だった。

私は、マフラーを口元まで上げて、唾と一緒に不安な気持ちも飲み込む。

…物語の流れが変わるのは、とても怖い。

…でも、後から後悔するのも嫌だ

そう思った時には、もう体が自然と動き出してまだ後を追おうとしていたセブルスの腕を握っていた。

私に腕を握られたセブルスは、驚いたように振り返って私の顔を見つめてくる。

…大丈夫、行動に移せたんだから次は一緒に回ろうと誘えばいいだけだ。

セブルスの顔を見ただけでも爆発しそうな心臓の鼓動を感じて、今すぐこの場から逃げ出したいという思いを抑えながら、話しかけた。

「……………何を…しているの…」

よりによって出た声は、緊張しすぎて低く冷たいものだった。何をやっているんだろう。なんでこんなにも上手くないんだろうか。

セブルスの眉間のしわが深くなるのを見ながら、私は5秒前の自身を恨んだ。

「…別に何でもいいだろ……………」

「…こんな所に来てまで、ポッター達の後を追いかけるなんて私には到底楽しいとは思えないけど」

何でこんなことしか言えないんだろう。もつと他にも上手く伝える方法なんていくらでもあるのに。

私は、心の中で自分自身を責めながら、だんだんと不快な雰囲気になつていくセブルスを見つめた。

「僕が何しようと、お前には関係ないだろ☒ほつといてくれ！」

セブルスが少し大きな声で私の腕を払いのけようとする。全くもってセブルスが言っていることが正しいのだが、もうこうなったら

意地でもセブルスを離さないと、私は思い黙ったまま強く握り返した。

「離せ。」

セブルスは、私を睨みつけながら冷たく言い放った。

……ごめんね、離してあげられないの。こんな時ぐらいセブルスには楽しんで欲しいから。

心の中ではすらすらと出た言葉は、喉に突っかかったように声には出ずに私は黙ったままだ。

「離せと言ってるだろ☒」

明らかに怒っているセブルスが張り上げた声で、行き来していた人達の視線を集めてしまった。通り道の真ん中でやっているのだからしょうがない。

それでも何も言わずにただただセブルスの腕を握り続ける私を見て、苛立ったセブルスは私を挑発するように少し口角を上げ、冷静に淡々と話し出す。

「お前には話す口も、聞く耳もないのか？」

もうとつくに人混みに紛れて見えなくなったルーピン達を見て、私は静かに口を開いた。

「口も、耳もあるよ」

「じゃあその口で、言葉にしないと相手に伝わらないということとは知ってるか？ さつきからお前は黙ってばかりじゃないか。正直言って鬱陶しい。僕はそんな奴に構っているほど暇じゃない」

セブルスの口から出た「鬱陶しい」という言葉が重くのしかかって来て、胸が息しづらくなる。

「…言葉にしないと伝わらないことはもうとつくに知ってる。……けど、言葉にしても届かない声があることを貴方は知ってるの?」

私の言葉に、セブルスは何を言っているのか分からないといった表情を浮かべた。

…お願い、気づいてセブルス。

…近くにあるのが、エバンズや闇の魔術だけじゃなくて、

………私もいるって

私はそんなことを思ってしまった気持ちに蓋をするように、静かに息を呑んだ。

「セブ!!何をしているの☒」

結構目立っていた私達の間に入るように、エバンズの声が聞こえてくると、足音が近づいてくる。

…来るな来るな来るな来るな来るな来るな

心の中で、呪文のように何度も唱えてみたが、叶うこともなくふわとした髪を靡かせながら私達の間に入った。

「…リリー」

エバンズの名前を呼ぶセブルスの声を聞いて、私は静かに彼の腕を握る手の力を弱め離れた。

彼女がセブルスに何か話しかけている声が聞こえてきたが、まるで体が聞くことを拒絶しているかのようにまるで遠くで話しているように微妙にしか聞こえなかった。エバンズが一言か二言セブルスに何か言うと、彼は少し困ったように眉を下げて優しい笑みを浮かべ、彼女もまたつられて太陽みたいな笑顔になる。

胸らへんがぎゅーと苦しくなるのが分かり、私は目の前にいる2人を直視できずに立ち尽くす。

……やめて、そんな表情を彼女に向かないで

まるでどす黒いどろどろとした何かを吐き出すようにゆっくりと締め付けたり、膨張したりと動く心臓の鼓動を全身で感じながら、その場から逃げるように、背を向けた。

逃げようとする私を引き止めるように、誰かが私の腕を握った。「待って、」

後ろから聞こえたのは彼の声ではなく、明るくハキハキとしていて私の嫌いな声で、もう心臓もドロドロとした何かで埋もれてしまいそうなほど限界に近かった。……ただただ、苦しくて、辛い。

……この腕を握っているのが、セブルスだったらどんなに良かったのだろう。

私の腕を握るエバンスの顔を見ながらそう思った。

「これからセブと二本の筈で、バタービールを飲むんだけど、貴女もどうかしら？」

彼女の後ろで、軽く私の方を睨むように見つめてくるセブルスが見えた。

それもそうだろう。

彼にとっては、せっかく大好きな女の子と2人っきりで過ごせるチャンスなのに、私が来たらそのチャンスもなくなってしまおう。

断ろうとして、口を開いたが、一瞬セブルスと彼女が楽しそうにバタービールを飲みながら話す姿が脳裏によぎった。

「……丁度良かった。私もバタービールを飲みたい気分だったの」

私の言葉を聞いた彼女の嬉しそうな声が聞こえてくる。

「良かった。一度私も貴女とお話したかったの」

そう言う彼女の太陽のような笑みを見て、私は目の前にいる彼女と

いう存在がこれまで以上に憎く、恐ろしく感じた。

……悪魔……

私の一番欲しいものを奪っていく彼女の笑みは、悪魔にしか見えなかった。

三本の筭と書かれた看板が掛かってあるお店に入ると、店内は暖かくて、他のお客さんの声で賑わっていた。空いている席に腰掛け、エバンズは注文を聞きにきた店員にバタービールを3つと、指を三本たて注文する。

もちろん座る位置は自然と決まった。エバンズの隣にセブルスが座り、机を挟んで彼女の前に私が腰掛けた。暖かい店内の中になると暑くなりマフラーを隣の空いている席に畳んで置いた。

バタービールは、割りとすぐにきて飲もうと口につけるとエバンズがちよつと待ってと止めに入ってくる。

「乾杯がまだじゃない」

ほらほらと急かす彼女を見て、何がめでたくて乾杯をしないといけないんだと思いつながらも付き合った。

「はい、じゃあかんぱい」

エバンズの言葉で、3人のグラスが当たった音が響き、衝撃で少し溢れたバタービールが手にかかった。勿体無いなと思いつながら、お手拭きで拭き取って初のバタービールを飲んだ。喉が渴いていたこともあつてか、今まで飲んだジュースの中で何よりも断トツに美味しく感じた。

「美味しいわね。ね、セブ？」

セブルスは、飲み続けたまま頷く。

少し気まづい雰囲気の流れた後、彼女が元気よく私に話を振ってきた。

「ねえ、貴女名前はなんていうの？」

その言葉に私は、飲んでいた手を止めて彼女を見つめた。

教えたくないという私の気持ちを察してなのか、エバンズはグラスを置いて説明しだした。

「去年、セブとポッターが喧嘩をしている時に貴女が何も言わずに私を連れてその場に連れて行った時あったじゃない?」

その言葉に、セブルスは驚いたようにエバンズを見て口走った。

「えっ?それってどの時の…」

ポッターとの喧嘩なんて数え切れないほどあるセブルスにとっては、どのことか分からなかったらしい。

「二回、中庭で酷いやつがあつたじゃない」

セブルスは、その言葉を聞いて何か眩きながらまたバタービールを飲むためにグラスを傾ける。

「あの時本当にびっくりしたのよ?突然貴女が凄い形相で駆け寄ってくるし、何も言わずにただただ引つ張るし、腕も痛かったけど、何より少し怖かったわね」

笑いながら話すエバンズを見て、私は彼女から視線を逸らした。

「……私は、リリー・エバンズというの。あの時から、少し貴女のこと気がなあってね。」

それで、貴女はなんていうの?」

もう諦めた私は渋々自分の名前を口にした。

「…レイラ・ヘルキャット」

「私、貴女とは気が合う友達になれそうな気がするわ」

思いがけない彼女の言葉に、思考が停止しながらも顔を上げ、瞳を見つめた。

ただただ純粋な瞳で彼女が笑いかけてくる。

何を…言ってるの……

私の中のドロドロの醜い何かが歯止めが効かなくなったように溢れ出すと口が勝手に動き出す。

「……………友達？…笑わせないで……………なんの冗談のつもり……………」

冷たい自分の声で、2人が驚いたように顔を上げ私を見てくるのが視界に入った。

「……………貴女と私が気の合う友達？……………やめて。そんな冗談笑えないわ。」

他のお客さんが楽しそうに話をしている声がやけにはつきりと聞こえてきた。私達のテーブルだけ明らかに他の人達に比べると小さな声で話していたが、まるで別次元に取り残されたようにしつかりと2人にも聞こえたらしい。

何か言いたげにエバンズが口を開いたのを見て、私は話させまいと声を出した。

「お互い名前を知っただけでお友達になれるなんていう考えをお持ちなら貴女の見ている世界はなんて平和なんでしょうね。……………気の合う友達になれる気がする？……………そんな嘘をよくすらすらすらとつけるわね」

「……………嘘なんかじゃないわ……………私本当に」

「残念だけど、私の目には貴女はそんな風に映ってない。……………吐き気がする」

エバンズは、瞳に涙を溜め始めた。

いいじゃない、貴女にはその涙を拭ってくれる誰よりも人の痛みが分かって、自分を平気で犠牲にする優しいセブルスが隣に居続けてくれるんだから。

私はマフラーを手に取り、ポケットからバタービール代のコインを取り出して乱暴に机の上に置き、立ち上がった彼女を見下ろした。

「今後、貴女と友達なんて思える日なんて来ないわよ」

そう言い捨て、2人に背を向け店を出た。セブルスがどんな表情をしているかなんて怖くて見えなかったが、絶対凄惨な表情をしていたんだろう。店の入り口で、ポッター達にすれ違ったが私はそんなことにする余裕なんてなかった。もう何もかもどうでもいい。

気の合う友達になれそうだと嬉しそうな笑みを浮かべるエバンスの顔が脳裏によぎり、私の行き場のない苛立ちと怒りが湧いてくる。私の気持ちもこの苦しみも、辛さも、虚しさも全然知らなくせに。私にはどう頑張っても届かないのに、貴女はすぐ手を伸ばせば届く。

あんなことをよく飄々と、

好きになれるわけじゃないじゃない。貴女を友達と思える日なんて来るわけがないじゃない。

……簡単にセブルスを切り捨てたあんたなんか大っ嫌いよ。

気づけば、叫びの館の前に来ていた。マフラーも巻いていなかったが、全然寒さなんか感じずに、遠くにそびえ立っている叫びの館を見つめた。

……そろそろ…帰る時間かな…

そう思っただけ振り返ると、後ろには息を切らしたセブルスがいた。ゆっくり顔を上げた彼の瞳には怒りの色が浮かんでいるのが分かった。いつもの変わらず無表情なのが、逆に恐ろしい。

先に口を開いたセブルスの声は、いつもより一段と低く、聞きたくても耳に入るほど太く聞きやすいものだった。

「……………どういっつもりだ…」

私が何も答えずにしていると、怒りで震えたセブルスは少しずつ近づい

て来る。

「……リリーをあんなに傷つけて、どういうつもりなんだって聞いているんだ。」

「……彼女が、ご丁寧に友達になれそうなんて言ったから、お断りしただけ。……その何がいけないの?」

セブルス、近づいて来るのをやめて私を睨み続けてくる。私の中の大事な何かは、もうすっかりぼろぼろで彼に吐き出すように白い息と一緒に口から出てくる。

「……何が嫌いな奴とすきで、友達にならないといけないの?」

……どうして、貴方はそんなに彼女ばかりを見るの?

「……あんなすぐ平気で嘘がつけるような奴……」

……貴方を平気で切り捨ててしまう彼女なんか

セブルスを見つめながら、声を張り上げる私は怒りでなのか、悔しくてなのかそれとも単なる寒いだけなのか分からないが体が震えだす。

「あんな奴好きになれるわけがない!!!」

あんな奴なんか大っ嫌いよ!!!」

どうして彼女なの!!!

どうして私じゃないの!!!

セブルスに怒鳴り散らすように言っても何も変わらないことぐらい分かってる。だけど今の私はもう歯止めを失っていた。セブルスが拳を力強く握って少しだけ体を震えているのが目に入ると、私はもう悔しくて、悲しくて、彼女が羨ましかった。

「……………さっさと戻ったらどう？ 貴方の大事な大事なお友達が今頃嘘泣きでもしているんじゃない？」

…行かないで……………どうか、お願い……………

彼女じゃなくて……………

私を見て……………

私の言葉に完全に我を忘れたセブルスは血走った目を見開き、駆け寄ってくる私と私の胸ぐらを掴んできた。

よ…
…セブルス、女の子相手に暴力なんかしたら、彼女に嫌われちゃうよ…

そう思った時には、頬に衝撃を感じて痛みが襲ってきた。少しよろけて、彼に殴られた頬を触ると熱を帯びていた。彼は、真っ白い雪が積もった地面に私を押し倒すと、気が狂ったかのように目を見開い

私の言葉に、セブルスは抵抗するのをやめ、私たちが息を整えるように、呼吸する音だけが聞こえてきた。

私は、胸ぐらから手を離してゆつくりと立ち上がる。

……こんな時にしか名前を呼べないなんて…

誰か私を殺してほしい……今すぐ、死喰い人でも闇の帝王でも誰でもいいから、私を殺してほしい。

どうして余計なことをしてしまったんだろうと後悔の念に駆られた。何も言わずに、ポッター達の後を追うセブルスを見守つとけばこんなことなんておきなかった。

「……………ゆる……………して……………」

どうか許してほしい。

貴方も、貴方の大切な人を傷つけてしまったことも

貴方の所為だと言ったことも

彼女を嘘つきよわばりしたことも

貴方の1番の幸せを願ってあげられない私も

貴方を好きになってしまった私も

どうか許してほしい。

私が咳いた声は、隣にいても気づかないぐらいにか細いものだったからセブルスはきつと気づきもしなかつただろう。

私は、溢れ出てくる涙を独り拭いながらその場から駆けだした。

1 番の嘘つきは、

.....私だ。

変わらず降り続いている雪を見て、春になったら一緒に溶けてしまいたいと思った。

それから学校に戻ると、顔に怪我している私を見たマクゴナガルに心配したように医務室へと連れて行かれた。

怪我をした理由を聞かれたからつまずいて転んだと苦しい嘘をついたが、マダムはこれが打たれた跡だと分かったような表情を浮かべた。でも特に深くは聞かれずに、絶対安静を言われてやっとの事で解放された。

もう夕食も医務室で済ましてしまっていたし、あとはもう寮に戻って寝るだけだ。

寮に戻ると談話室で過ごしていた生徒達が、私の方を何か探るように見てきた。勿論、談話室にはセブルスの姿もあってお互い目が合ったのが分かったが、気にすることなく私は部屋に戻った。まだ寝るはずのないルームメイトは誰一人としておらず、私だけだった。

何に考えずに天上を見つめていると頭にある言葉が思い浮かんだ。

【記憶に頼りすぎるな】

そうだ。この言葉の所為で、慣れないことをしてこんなことになったんだ。

そう思った私は、本を取り出して苛立ちながら文章を作った。

【貴方の言葉を信じて、記憶に頼りすぎないようにしたけど、最悪の結果になったわ】

【貴方は今悔やんでいるのでしょうか？何故あんなことをしたのかわり。でもよく考えてごらんなさい】

すぐ下にゆっくりと文字が浮かび上がってくる。

【貴方にとって最悪の結末は何ですか？】

……私にとって最悪の結末……

首から血を流して独り息絶えるセブルスが頭で映像として流れ始めた。

そう……これが、私にとっての最悪の結末。

私が黙ったままいるとまた、文字が浮かんできた。

【苦しいのは貴女だけではないことを忘れてはいけませんよ】

「……そんなの……分かってる……」

エバンズや、ポッター、ブラック、ペティグリューやルーピンそしてセブルスだってみんなこの世界で心臓を動かして生きている。

時にはそれぞれ苦しい思いをして必死に耐えていることぐらい、分かっている。

でも………それでも……

………辛いものは辛い

その後は本と会話することは出来なくなり、私はあまり眠れないような気がしながらも浅い眠りについた。

それからは、勿論セブルスやエバンズに関わることなど一切なくなつた。

前からそう頻繁に話さなかったが、今はもうお互い顔を合わせることもさえも避けているかのように自然とセブルスを見る回数も減つて

いつていた。

セブルスに殴られた傷もだんだんと治ってきた頃、私は談話室の端で本を読んでいた。あまり興味のない闇の魔術に関する本を読んでいるのはこの先色々と役にたつかも思えないと思ったからだ。

「珍しいね。こんな所で君が独り本を読んでいるなんて」

上から声が聞こえてきて、顔を上げるとルシウスの姿があった。

確かに、私は談話室では本は読まずに課題に取り組んでいることが多い。大体は、自分のベツトの上で本を読む。

「…それに……闇の魔術…とは…」

彼は明らかに私が持っている本に視線を移して、決して見えていない持ちよくなれない笑みを浮かべてくる。

…やっぱり、この人は苦手だ。

「……私が読んではいけませんか?…」

「いや、そんなことないさ。そんなことより、興味あるのかい?」

「……そうですね…全く興味が無いと言ったら嘘になります……そんなことよりも私と話していて大丈夫ですか?」

私は、周りにいる睨んでくる生徒達に視線を移して、何とか話を逸らそうとする。残念ながら、今回はセブルスの元へ逃げる事も出来ない。まるでそんな事を狙っているかのように丁度タイミングよく話しかけてきたルシウスが不気味でならなかった。

「…そんな事を君も気にするんだね?少し驚いたよ」

「……私も一応人間ですし……というより、貴方の方が困るでしょ?」

「…どうして?」

紳士的ににこりと笑うルシウスを見て、

…ああ……この人は死喰い人なんだな…

と改めて思い知らされた。

「……風の便りで、貴方は今話題のあの方の考えを支持していると聞いたので」

「…それがどうして君に、話しかけてはいけない理由になるんだい?」

「……………貴方が純血主義の考えを支持しているということだからで

すよ」

「……その言い方だと、君は違うようだね」

気づけば談話室にいた生徒達が私達の会話に耳を傾けて注目していた。

「…純血主義ではないのは私の家系の話で、私個人の考えではありません。」

私のはつきりとした声に、生徒達は少しぎわめいた。今まで、純血でありながら純血主義ではない変わり者として浮いてきた私がこんな事を言ったから、驚いたのも無理はないだろう。

何か言おうと、口を開くルシウスを見て、私は咄嗟に言葉を続けた。「勘違いをしないでください。……別に私は純血主義の考えを支持するという事ではありません。血にこだわるのは素晴らしい事だとは思いますが、…私はどうでもいいんですよ。血の濃さなんて」

私は喉に引っかからずにすらすらと言葉が出てくることに自分自身驚きながら、ルシウスに語りかけた。すっかり私の方を見て、話を聞いている生徒達を視界に入れながら彼に向き合った。

「純血？…半純血？……穢れた血？…そんな事はどうでもいい。そんな事を言っていたらきりが無い。……そう思いませんか？」

ルシウスは、すぐに張り付いたような笑みを浮かべて私に上品よく喋り出す。

「…全く、君らしいね。……この思想が今後の魔法界にとってどれだけ素晴らしいものになるかを気づけない君を見ると、可哀想で仕方がないよ。…残念だなあ…せつかく君は魔法のセンスがあるというのに」

全く笑っていない瞳を見て、私の背筋は凍りついた。

……怖い…この人に逆らってはいけない

そう思ったのは初めてで、私はその場を逃げるために立ち上がったルシウスに背を向けた。すると彼のわざとらしい思い出したような声が聞こえてきた。

「…あつそういえば、私も風の便りで聞いたんだけど…君はたった1人のお友達のセブルスと喧嘩をしたんだって？」

セブルスという名前が聞こえた瞬間に身体全体から嫌な汗が流れるのを感じた。

「その様子だと、どうやら本当のようだね」

頭が真っ白になって、セブルスが酷く傷ついたような顔をしながら私を殴ってくる映像が流れ始めた。

「…私がいっ彼が友達だと言いましたか？」

自分の声が震えているのをすっかり聞きながら足を動かそうとすると、静まり返っている談話室に誰かが入ってくる足音と、レギュラス、セブルスの話し声が嫌なほどに耳に入ってきた。私は駆け足で、自分の部屋に逃げ込んだ。

あれからというもの、私はスリザリンで前より増して変わり者として浮いていた。思ったよりもルシウスの影響というのは大きく、徹底的に避けられるようになり、ルームメイトも時々私の方を見ては嫌そうな表情を浮かべてくるようになった。

月がだんだんと丸くなってきた夜中に私は本と向き合っていた。今ではルームメイトが寝ているこの静かな時間だけが、私の中の安らぎの時間になっている。どんなに文章を作って話しかけても反応がない本を見つめながら私はため息をついて静かにベッドから抜け出した。

今の時間帯だったら、絶対に談話室に生徒などいる訳がないと思いついで階段を歩いていると微かな足音が聞こえてくるのに気づいて不思議と胸騒ぎがした。私は、壁の陰から覗き込むように少し顔だけを出して誰がいるのか様子を伺う。

…結構夜は更けているはずだし…何をしているんだろう

ローブを靡かせながら何かをしているその生徒は、決心するように談話室から出ていく。寝間着姿だった事を思い出し、一旦部屋に戻って一番近くにあったローブを身に纏い、私は後を追いかけた。

少し駆け足で後を追いかけると、真つ暗で誰か見えなかった人影に月明かりが照らされると、その正体が目に飛び込んできた。

「…セブルス」

当然小さく呟いた私の声は、誰に聞かれる事なく静かに暗闇に溶けていった。セブルスはキョロキョロと辺りを警戒したように見ると、またゆつくりと歩き出す。彼がこんな寮の点数が引かれるような危険な事をするはずがない。そう思っても確かに前にいるのはセブルスで、まるで波のように不安が襲ってくる。

…まさか…今日だったのか…

案の定セブルスは、暴れ柳に向かっている。

…どうしよう…何も考えてない…

セブルスと喧嘩をし、ルシウスと言い争った私は平和に学校生活を送るのが精一杯で何も対処法を考えていなかった。

…ポッターが助けに来てくれるはずだし…大丈夫…

そう自分に言い聞かせ私はセブルスの後を追ったが、それでも不安

が消えるどころか増すばかりだった。

…でも、もし…ポッターが少しでも遅れたら…

前にいるセブルスの後ろ姿を見ると居ても立っても居られなくなり、私はグリフィードールの寮へと走って向かった。私が、グリフィードールの寮に行つたところで合言葉を知らないから、何も出来ない。よく考えたら絶対にセブルスの後を追いかけた方が良さだろう。でも、もうセブルスに関わつてこの物語を大きく変えてしまう事が怖くて怖くてたまらなくなつていた。

私の足音で目を覚ました太ったレディーは、少し不機嫌そうに口を開いた。

「あら、スリザリン生が何か用かしら」

「…中に入れて…今すぐに」

「合言葉を言ってくれないと通してあげられないわ」

「だったら、ポッターを呼」

私の言葉は途中で途切れた。突然何が私にぶつかってきたからだ。ぶつた頭を抱え込むように目を開けると、ポッターの顔が目の前にあった。すぐに彼に押し倒されているような体勢になつていることに気づいて、表情が固まっているとポッターを見つめながら冷静に口を開く。

「退いてくれないかしら？」

その言葉にポッターは、すぐに退いてぐしゃぐしゃな髪を触る。いつもの彼らしくないが、今はそんな事を気にしている場合ではない。

「…セブルスがここに来てない？」

私の言葉にポッターはだんだんと顔色を青くしていき、目を見開いた。どうやら、自分が寮を抜け出した訳を思い出したらしく、焦つたように何も答えず背を向ける。その様子を見て、私は今夜だと確信し、駆け出そうとする彼の後を追いかけた。

完全に焦っているポッターとだんだんと距離がひらいていく。

上がる息で必死に呼吸を繰り返し、足をできるだけ早く運びながら私は後を追いかけた。

少し前にいるポッターが急に走るのをとめ壁に体を寄せて何かを警戒するように息を潜めていた。やっと追いついた私を見て、ポッターは驚いたように声を押し殺しながら話しかけてくる。

「なんでついて来てるんだ☒」

私は息を整えながら、何も答えずに壁から覗き込んでみると、そこにはフィルチの後ろ姿があった。

…なるほど…だから止まったのか

私はひとりで納得して、ポッターに向き合った。

「でも結果的に良かったでしょ。」

「私じゃない。今私がセブルスを助けても意味はない。」

…まだ駄目なんだ。…私じゃ駄目。

…ポッターがセブルスを救わなければ、意味がない。

私を引き止めようと声を押し殺しながら話しかけてくるポッターを無視して廊下に飛び出た。僅かな私の足音に気づいた猫は振り返って私の顔を見るとにやあーと鳴き知らせる。振り返ったフィルチの顔が月の光に照らされて凄く怖い演出をしていたが怯まないように彼に歩み寄った。

「こんな時間によくそんな堂々と歩いていられるな、規則違反だということを知らない訳じゃあるまいだろ」

あまりに私が平然と歩く姿を見て、不穩に思ったフィルチは何かを疑うように声を低くする。

「……逃げてもどうせ捕まるんですから、そんなことをするのならそんなりと捕まった方がいいでしょ？」

フィルチは気に食わないといった感じで、鼻をフンと鳴らすと私を睨んできた。

そんな所へマクゴナガルが来たのはすぐのことだった。

「何をしているのです？」

凜とした声が静まり返った廊下に響くと、フィルチはすぐに声がする方を振り返った。

「ベッドを抜け出した生徒を見つけました」

まるで生徒が先生に言いつけるようにフィルチは、私の方を指差し

てマクゴナガルに報告をする。

「…分かりました。この子は私の方で預かりますので貴方は仕事に戻って来ていいですよ。」

どこか納得していない様子でファイルチは私の顔を睨むと、猫を連れて私達に背を向けた。ポッターがいる方とは真逆の方へと進んでくれたので、緊張していた体から一気に力が抜けていくのが分かる。

「私について来なさい。」

鋭い視線を感じて、無意識に彼女から視線を逸らした。私のことは気にせずに前を歩くマクゴナガルを見て、私は静かに後ろを振り返る。

ポッターが少し駆け足で無事廊下を横切っているのを確認して、急いでマクゴナガルの後を追いかけた。

彼女の部屋かなんかに連れて行かれるかと思ったが着いた場所は、スリザリンの寮の前だった。

「スリザリンから10点減点です。処罰は後日知らせます。…さあ、早くベッドに戻りなさい」

マクゴナガルは、スラスラと慣れたように私に言い伝えてきた。私は頷いて、何も言わずに寮に入ろうとしたが、流石に挨拶はしといた方がいいかと思い、振り返って重い口を開いた。

「…おやすみなさい…先生…」

後ろからマクゴナガルの声が聞こえてきたが私はそのまま扉の中へと入る。談話室は暖炉の微かな火で暖かく、体の芯まで温まるのを感じながらソファアに腰掛けた。今ベットに戻っても眠りにつけるはずがない。

………どうか…ポッターが間に合っていますように

………どうか…セブルスが無事でいますように

目を瞑り、何度も神様に縋るように祈った。

…お願い…お願い。

死なないで…

私は気づけば、父からもらったペンダントを握りしめていた。どうやらローブのポケット中に入っていたらしく無意識に取り出していたらしい。開くと、青白い光を放ちながら、惑星が周りだして何本もの針が時を刻むように前と変わらず動いている。

針を触っても、何も反応はしてくれない。ましてや惑星なんて触ることさえも出来なかった。

『…レイラに使う時が来て欲しくない』

父がぼそりと言った言葉を思い出して、ペンダントを閉じる。

…あれはどういう意味なんだろう。私が見える日がくるという意味なのだろうか。大体本当にこのペンダントは、時間を止めたり戻したりできるのだろうか。

考え出したらきりがなくなり、私はペンダントをポケットの中にしまった。

セブルスを待ち続けてどれぐらい経ったのか自分でも分からない。ただ暖炉の微かに燃えている火を見つめながら、私はセブルスが寮に戻ってくるのを待ち続けた。相当待ったような気がするが、それは私の体感時間がおかしいのかも知れない。でも今の私には、3時間以上待っているような感覚に襲われて、不安が押し寄せてきた。

…遅い。…あまりに遅すぎる。

…まさか…セブルスに何かあったんじゃないか

もう居ても立っても居られなくなった私が暴れ柳の所へ行こうと立ち上がった瞬間に、後ろの寮の扉が開く音が聞こえてきた。振り向くと人影がゆつくりと動いているのが見え、私はその人影がセブルスなのかどうか確かめるために目を凝らす。ゆつくりと歩く人影は、暖炉の火に照らされて真つ暗で見えなかった顔がよく見えるようになった。

「…セブルス。」

安堵と安心感で、私の口は勝手に彼の名前を口ずさんでいた。

セブルスは頬に怪我をしたのかガーゼを当てていた。私の顔を見た瞬間に、気まずそうに視線を逸らして何も言わず部屋に戻ろうとする。

…どうやら私を殴ったことを悪かったと思っているらしい。

部屋に戻ろうとするセブルスの後ろ姿がまるでスローモーションのようにゆつくり見える。

……お願い。

…動いて、私の体動いて。

…お願いだから、口だけでも動け！

心の中で葛藤するように、全くと言っていいほど動かない自分自身の体に命令した。

「……………ごっつ……………ごめんさい」

やっと動いた口からは、謝罪の言葉が出てきた。声は掠れていて、決して大きなものではなかったが、静まり返っている談話室には十分すぎる音量だった。セブルスは驚いたように振り返り、足を止める。セブルスが私の言葉の続きを待つかのように見つめてくるが、その後の言葉は喉に引っかかって出てこない。ただ口をパクパクさせて、私は彼の足元を見ながら必死に頭を回転させた。

…この後はなんて言えばいいのだろうか。どうしよう。

…どう言えば正解なの？

「…あつ……えつと……」

口からはそんな言葉しか出てこなくて、気まずい空気が流れた。まともにセブルスの目を見ることができずに、背中に汗が流れるのがわかった。

「……………なんで」

急にセブルスの声が聞こえてきて、顔を上げると、彼の表情が目に見え飛び込んできて目を見開いた。

悲しそうに苦しそうに辛そうに今にも泣き出しそうな、一言では言い表すことができないほど複雑な表情だった。

「……………なんで…謝るんだ…。」

真っ黒な瞳が、いつもよりも奥深くまで広がっているように感じ

て、吸い込まれそうになる。

「…あれは、誰から見ても僕が悪いじゃないか。…抵抗できない人を…ましてや女の子を殴りつけるなんて…それなのに…お前は誰にもこのことを言わなかった。一層言ってくれた方が楽なのに」

セブルスは自分の掌を見つめながら、静かに話し出す。

不器用すぎるセブルスが何を伝えようとしているのか私には分からなくても、苦しそうな彼を見ていると貴方が悪いんじゃないと言わなきゃという思いに駆られた。

「…貴方だけが悪いんじゃない。あれは、私にも非はあったから…だから…謝ったの」

「…でも…あれはいくらなんでもやりすぎだ…我を失っていたとはいえ…あんなこと平然とできるなんて…まるで…まるで…」

その後の言葉は、彼の口から出てこずに言葉は途切れた。セブルスが何かを思い出したように目を瞑って、耐えるように少し震える手を握り始めたからだ。

私は少し心配になり、近づくと小さく呟くセブルスの声が聞こえてきた。

「……………あいつ……………みたい…だ……………」

あいつという言葉が誰のことを指しているのかなんて分からない。でも、彼が震える手を握りしめ何を耐えている姿を見て、セブルスの両親の仲を思い出した。会ったこともないし、どんな顔かも知らないけれど、セブルスの両親が不仲ということと、父親は魔法にいい印象を持っていないことは、思い出した記憶の中にあつたものだった。

もし、両親が喧嘩をしていて父親が母親を一方的に殴ることがあつたとしたら……

今、彼は自分を父親と重ねている……

そんなことを考えていたら私の体は勝手に動いて、震えているセブルスの手を握っていた。

「……私も貴方に謝ってないことがある……」

頬に一筋涙を流しているセブルスは、ゆっくりと顔を上げると私を見つめてきた。

「……去年……私は酷いことを貴方に言ったのに謝まらなかった。……だからこれでお互い様」

今のセブルスに貴方は悪くない、私がエバンズを傷つけたのが悪いんだからと言っても、彼はもつと自分自身を責め続ける。

だから、この言葉が一番セブルスの苦しみを少しでも軽くしてあげられると思った。

「……手……冷たいから、早くベッドに戻った方がいい」

セブルスの手を離して彼から離れると私は、背を向けた。

振り返り、部屋に戻るセブルスの後ろ姿を確認して私も部屋に戻る。

セブルスは、不器用だ。きっと彼は伝えたいことを上手く伝えることができない。いつも空回りして、そして後から後悔する。

人よりも繊細で傷つきやすく不器用で、言い方がきついことだつてあるけど、それでもセブルスは誰よりも優しく強くて、人の為に自分を平気で犠牲にできる。

……そんな彼に好きになるなと言う方がよっぽど無理がある。

私じゃなくて、彼女だっただけ……

片想いなんて珍しいことじゃない。

それなのに、どうしてこんなにも涙が溢れでてるのだろう……

エバンズだったら……セブルスを苦しみから救い出せたのだろうか

……

彼女だったら、あんな表情を浮かべるセブルスを笑顔にできたのかな……

……やっぱり

「……………私じゃ……………駄目なのかな……………」

いくらベッドに潜り込んで目を閉じても寝ることは出来ずに、結局一睡もしないまま朝を迎えた。

11 満月が嫌いなあの子

罰則など忘れていないかなと少し期待していたが、ちゃんと後日知らされて、その内容も何とも言えないものだった。罰則はフィルチの掃除の手伝いというもので、私は杖を一振りして終わらせたい気持ち在必死に抑えながらマグル形式で掃除をした。

あれからセブルスと私の仲は良くも悪くも、今まで通りになっていた。

私がエバンスのことを嫌いだってことは事実には変わらなかったからセブルスから話しかけることはなかったが、それでも授業で分からない所を聞いたりしてみると、普通に教えてくれた。それなのに教えてくれるセブルスの顔を見るたびに、あることが頭に浮かぶのだ。

…これ以上彼に関わったら…：物語がずれるのだろうか

この不安は波のように絶えなく襲いかかってきて、最近の私はどうもおかしかった。

だから今もこうして、図書館で無意識のうちに人狼のことに關しての本を借りているのだと思う。

何をしてるんだろう…：

自分でも分からなかった。どうしてこんな無意味なことをしているのか。人狼のことに關してなんて興味もないのに、どうして本を借りたんだろう。借りたばかりの本を見つめながら、そんなことを考えているとよく聞き覚えのある声が聞こえてきてきた。

「何度言ったら分かるんだ!! その名で呼ぶな!!!」

すぐにセブルスのものだと分かり、自然と足は声のする方へと向かっていった。

案の定セブルスはポッター達に絡まれていて、ポッターとブラックの面白いおもちゃを見るような表情から暇つぶしのためにセブルス

に突っかかっているのが分かる。2人は兄弟のように息があつていて、セブルスに杖を振っていた。セブルスも、杖を取り出し2人からの攻撃を防いでいる。

周りにちらほらという生徒達は、どう見てもポッター達を応援していた。

ポッターが一瞬の間を見つければ、簡単にセブルスの手から杖を弾き飛ばすと、周りにいた生徒達の歓声は大きくなる。周りを見渡して見たが、エバンスの姿はなかった。

ふと視線を戻すと、ポッター達の中には参加していないルーピンとペティグリューが周りにいる生徒達の中に交じっていることに気がついた。ルーピンはじつと見つめて止めようという素振りも見せず、ペティグリューはその横で心配そうな素振りを見せながらも、どこか面白そうに見ている。ペティグリューの口角が少し上がった瞬間、私の中に何かが浮き上がってきた。

胸らへんの所で何かドロドロしたものが次々と浮かび出て、それが怒りだということに気づくにはそう時間はかからなかった。もう私にはペティグリューしか見えなくなり、体が勝手に動きだす。

…こいつが裏切ったからセブルスは悲しみ絶望の暗闇の中に落ちていくことになる…

そう頭に浮かぶと私は杖を軽く握りしめながら、さつきよりも集まりだしていた生徒達の間を掻き分けて、囲まれているセブルスやポッター達に交ざっていた。

急に現れた私に、ポッターとブラックは眉間にしわを寄せ、セブルスは私の方を振り返ってくる。

「おやおや君も参加したくなつたのかい？」

意地悪そうな声でポッターが話しかけてきたが、私にはそんな声も雑音にしか聞こえず、何も答えない。戸惑っているセブルスの横を通り、ポッターとブラックに歩み寄っていく。

勘違いをした2人は杖を向けてきたが、そんな2人には目もくれず

に、ポッターとブラックの先にいる、生徒達に紛れてルーピンの横に立っているペティグリューだけを睨むように見ながら2人の間を通り抜ける。

ペティグリューは私と目が合うと、自分が狙われていることに気づいたらしく怖じ気付いたように後ずさりをした。私は逃がさないように彼に杖を向けて、杖の先からでた色のついた閃光が標的を間違うことなく襲いかかるが、それは近くにいたルーピンに防がれる。

何も考えられなくなり、笑うペティグリューが憎くてたまらなくなっていた私は追い討ちをかけるように杖を振るがルーピンは彼を庇うように私の攻撃を防いでいった。

自分に被害がくるのを恐れ、それぞれ散っていく生徒達を一瞬見たルーピンの隙を狙い、呪文を唱える。

「エクスペリアームス！」

ルーピンの手から弾き飛ばされた杖を見て、私が一步步み寄ると後ろから低い声がした。

「動くな」

ゆっくり振り返るとブラックが私に向かって杖を向けていた。

「…お前は何がしたいんだ」

その言葉に怒りで、何も考えられなくなっていた私はだんだんと落ち着きを取り戻していく。私は勝手に動く口に任せてみることにした。

「……気に食わないから、杖を向けたのよ。」

貴方達の陰に隠れて腰巾着のようなこいつが気に食わないから。」

ブラックは、ゆっくりと私に近づこうとするがポッターがそれを止めに入る。私は、ルーピンに杖を向けるのをやめて、2人に背を向け

た。

恐怖で立ち尽くすペティグリューと、私を目で追いかけるルーピンの間を通る時に小さく呟く。

「良かったわね。独りぼっちにならなくて」

ルーピンは、私が持っている本に視線を落とすと顔色を変えた。目を見開いて驚き、彼も小さく呟いた。

「……………何で……………」

その後の続きは聞こえなかったが、大体予想がついて自分の口角が上がったのが分かった。

貴方が少しでも止めに入ってくれていたら、セブルスが死ぬ未来なんて存在しなかったはずなのに。

ルーピンを見るたびにそう思ってしまう自分がいたのはずっと前から知っていた。だからさっきの真っ青のルーピンを思い出すとなんとも言えない幸福感で満たされる。

…私は……………本当に性格が悪い

つくづく思いながら、持っている本に視線を落とした。

どうやら読みもしないくせに借りた本は意外と役に立ったらしい。

日も沈み、夕食も食べ終わって部屋でゆっくりと過ごしている時に、私は冷静になって今日やってしまったことを思い返す。

……………自分から関わるようなことをしてどうする。

ペティグリューに苛ついたとしても、あそこは踏みとどまるべきだった：

あの時の私を少し恨みながら、引き出しから本を取り出して助けを求めように話しかけていた。

【これ以上彼らに関わってしまったら、物語の流れは変わるの？】
今まで話しかけても何も反応がなかったのに私が作った文章の下にゆっくりと文字が浮かび上がってくる。

【運命というのは、そう簡単に変えられません。貴女が存在するだけで流れが変わるなどあり得ません。貴女にそんな力はない】

本は、相変わらず曖昧に答えた。…まるで、私が本当に悩んでいるタイミングが分かっているかのようだ。

【時の流れは、複雑です。それぞれが絡み合って繋がっています。ひとつのことだけを変えようなんて不可能です。

貴女にとっての最悪の結末を変えるためには、その糸を手繰り、その糸の始まりを切るしか方法はありません。】

【どういう意味？分かりやすく説明して】

私の心臓は緊張したように鼓動を早くした。

【でももし貴女が耐えきれないというのなら忘れないでください。関わりの深い人の死は連鎖です。死は時の流れの糸とは全く別になりますが、時にお互いは絡み合っています。時に人の死は、死ぬ必要のなかったものもあることを、忘れないでください。】

私は音もたてずに文字が消えていくのを見つめながら、考え込むように目を閉じた。

この本がいうことはいつも曖昧でわざと明確なことは言わないようにしている。たぶんこの本が伝えようとしたことは、物語はそう簡単に変わらない。…セブルスの死を変えたいのなら、その始まりを防ぐしかない。

…セブルスの死の始まりは…

「……………エバンズ」

自分の口から出た名前を聞いて、嫌なほど思い知らされる。

……そうだ。全ての始まりは、セブルスが彼女に穢れた血と言ってしまうことから始まる。

でもそれを変えないといけないうって…そうになったら、2人はどうなるの？

額を合わせて幸せそうに笑い合う2人の姿が目には浮かび、脳がそれを拒絶した。

……嫌だ…絶対に見たくない。それだけは嫌だ

無意識に血が出るほど唇を噛み、口の中には鉄の味が広がった。

……でも…そうしないとセブルスを救うことはできないってこと？

私は考えるだけでも辛くなり、本を閉じて布団に潜り込んだ。

目を閉じて何も考えないようにすると、本に浮かび上がってきた文章を思い出した。

「でももし貴女が耐えきれないというのなら忘れないでください。関わりの深い人の死は連鎖です。死は時の流れの糸とは全く別になりますが、時にお互いは絡み合っています。時に人の死は、死ぬ必要のなかったものもあることを、忘れないでください。」

まるで……今この状況を予測しているみたいな言い方だ。私はゆっくりと目を開けてまた考えた。

物語を変えるのは、簡単じゃない。変えるには全ての始まりを変えないと終わりも変わらない。

……でも、私を変えたいのはセブルスの死。

死は、物語とは関係ないってことなら……

別に始まりを変えなくても、セブルスを救うことができる。

「関わり深い人の死………死ぬ必要などなかった死」

この2つが、当てはまっている人。……それが、セブルスの死に連鎖しているのだとしたら。

「……………ブラック……」

そうだ……彼の死は、何も物語に影響していなかったはず。

ブラックがハリーの目の前で死んで、それから歯止めを失ったかのようにどんと死んでいった。

この本が本当のことをいつているという確信もないが、それでも私には何故かこの本は真実を知っているということを感じられた。根拠も証拠もない。単なる私の勘だ。

……でも、何故わざわざこんなことを言ってきたんだろう。

よく、考えてみれば何故この本は私を物語を変えさせようとしてくるのだろう。……どうして、ブラックの死を変える必要がある？

セブルスの死だけを変えたいのなら、彼を確実に救うために物語に干渉しない方が一番良いに決まっている。

……結局、この本は何を伝えたかったんだろう……

でも……ブラックの死を変えればセブルスが死ぬ未来を変えられるということは伝えたかったということには変わりない……

そう思っただけでも、気持ちが楽になり私は襲ってくる睡魔に逆らうこともせず眠りについた。

12 黒い紳士

すっかり暖かくなり学年末テストも終わって、私の気は緩んでいた。今年ももう終わる。色々あったからなのか、凄くあつという間に感じてもうすぐくる、物語の分岐点になる出来事も後2年後かと思うと、溜息が溢れた。

「溜息をつくとき幸せが逃げるらしいよ」

横から聞こえた声の正体を見て、私はまた溜息が出そうになった。ルシウスだ。

「そんなことで逃げる幸せなんていりません」

「あはは、君らしいね」

少し笑い声をあげながら、ルシウスは外を眺めている私の隣に立った。

「……こんな所に貴方が来るなんて、珍しいですね。」

「……そういう君も、こんな風通しの良い所嫌いそうじゃないか」

私達がいるところは、ホグワーツのすぐ隣にある崖に掛かっているすぐに崩れてしまいそうな橋。シエーマスが最後爆発する橋だ。

6月中盤にもなると、この風通しがいい所が丁度良くて私は、暖かくなると良くここに来ていた。

「何か……用ですか？」

私は、景色を見たまま尋ねてみた。

「……君は、セブルスのことが好きなんだね」

思ってもいなかったルシウスの言葉に驚いて私は、彼の顔を凝視した。

「……………えっ?……」

「あんなに、セブルスを目で追いかけているんだから流石の私でも気づいたよ。何だったらセブルスが気づかないのが不思議ぐらいだ。まあ……彼もそういう事は鈍感だからね」

「……………冷やかに……きたのなら、早くお帰りください。」

私は、景色を見るようにルシウスから視線を逸らす。

「冷やかしに来たわけじゃないよ。……君に素敵な提案をしてあげようと思っただけ」

明るかったルシウスの声が低くなったのを感じて、寒気が襲いかかってきた。

「…………セブルスは、いずれ私達の仲間に入る。」

「何故…そう断言できるんですか?…」

「君だって分かっているだろう?彼は、明らかにこっち側の人間だ」

「…………そうでしょうか?…私にはそう思えません。あんな優しい人は世界中どこを探してもいないと思いますよ」

ぴしやりと言いい切る私をみて、少し笑いをこぼしたルシウスの声が聞こえてきた。私は少し眉間にしわを寄せながら、彼に向き合う。

「何が、可笑しいんですか」

「確かに…………君のいう通りかもしれないな。私よりも君の方がセブルスの事をよく見ているから」

自分の頬が熱くなるのを感じているとルシウスの声がまた低くなり、私は笑顔を浮かべながら話す彼を少し睨みながら耳を傾けた。

「でもね…彼はある人の為に振り向いてもらえるなら何だってするんだよ…分かるだろう?」

「……………エバンズ…」

本当にこの人は意地悪だ。わざと私に言わせて実感させようとしてくる。

「そう…リリー・エバンズ、…………賢い君ならもう私が言いたい事は分かるだろう?」

私が何も答えずにいると、彼はニコリと笑って口を開いた。

「君はどう頑張っても彼女の代わりになる事なんて出来ない。…………きつともうセブルスに振り向いてもら「分かっています!!!」」

最後まで聞きたくなくて、私は声を張り上げ遮った。

「そんな事…貴方に言われなくても分かっています。…………」

人に言われる事は初めてで、震えている自分の声を聞きながら、視

線を落とした。

「ああ……ごめんね。少し意地悪だった。でも、これは真実だ。何も変わらない。」

「……それでも君はセブルスを想い続けるか？」

何も答えられなかった。答えたくなかった。そんなの目の前にいるルシウスにいった所で何も解決しない。何も変わらない。

「……途な君を応援したくなっただよ。…君も、どちらかというところち側の人間だ。」

「……一歩こっちに来れば、セブルスの側に居られるよ？」

セブルスの側に居られる……

私は、ルシウスの口からでた甘い誘惑に心が揺れ始めた。

「……貴方は、私を死喰い人に入れたいと？」

私の問いかけには何も答えずに、張り付いた笑顔を浮かべ、私を見つめくる。

「……それも良いですね……しかし、遠慮しておきます。…私集団行動は苦手なもので」

負けじと張り付いた笑顔を浮かべて、ルシウスに上品良く断りを入れた。

「…素晴らしいお誘い感謝いたします。」

私が彼に背を向けてその場を去ろうとするとルシウスは呼び止めるように話しかけてきた。

「……いつでもおいで。…君なら大歓迎だよ」

黒い笑みを浮かべながら、私を見送るルシウスの瞳は私の全てを見透かしているように見えて怖くなりその場を逃げるように立ち去った。

まさか、ルシウスが私を死喰い人に勧誘してくるなんて思ってもいなかった。……セブルスの死を変えるためには、勿論死喰い人には入ろうとは思っていたのが、彼がいてはどうもやりづらい。

黒い笑みを浮かべるルシウスを思い出すともう夏が来るというのに寒気がして、体を縮こませる。

ルシウスが今年卒業することだけが今の私の唯一の救いだった。

13 ブラツク家

夏休みを迎えて、家に帰宅した私はだらだらと時間を過ごしていた。課題を終わらせながら、何故か今回も帰ってきていた兄の相手をし、ダイアゴン横丁に行つた時は兄に本やお菓子、服など買ってもらい充実しすぎているほど毎日がそれなりに楽しかった。

何もすることがなくとりあえず本を読んでいたのだが、つまらなくなった私は本を閉じて机の上に置いた。あまりに乱暴に置いたものだから散らばっている机からいくつものコインが転がり、床に散らばった。

「…あーやっちゃった」

そのコインは何故か昨日父からお小遣いといわれて貰ったもので、何も袋にも入れられずに直接渡されたものだった。しまうのが面倒でそのまま出しっぱなしにしていたことをすっかり忘れていた。

私はコインを拾い上げて、机の上に積み重ねて置いていっていると突然ノックもせず兄が入ってきて、驚いた私の手が積み重なっているコインに当たりまた床に散らばった。

私が何も言わずに入ってきた兄を睨み付けると兄は申し訳なさそうに謝ってくる。

「ごめんごめん」

「ノックもせずに妹の部屋に入ってくるなんてどういう神経をしているの?」

「早くレイラに見てほしくてさ。ほら見てよ、チョコでドラゴンを作ってみたんだ」

瞳をきらきらと輝かせている兄の手には、確かにドラゴンの形をしたチョコがまるで生きているかのように動いていた。

「あまりに暇でさ、蛙チョコを食べただけだけど、そんな時に蛙の形があるんだったらドラゴンもできるんじゃないのかなーと思ってさ、試行錯誤してさつきできたんだ」

暇だからといって普通そんなことをするだろうか…

私に褒めてほしいのか期待しているような瞳で見つめてくる兄を横目にコインを拾い上げながら適当に言った。

「あーすごいね、天才なんじゃないのー」

誰が聞いても棒読みだと分かるのに、兄は嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

……………馬鹿なのかな…

口に出さなかっただけでも褒めてほしい。

「ほら、食べて感想聞かせてよ」

そう言いながら押しつけてくる兄からチョコを受け取って、口に運んだ。

感想って……………チョコはチョコに決まってる

「どう？」

「……………美味しいよ…」

私の言葉を聞くと嬉しそうに笑って、コインを拾うのを手伝いだした。

「コインといえば…よく魔法かけて遊んだな」

何か思い出したように呟く兄の言葉を聞いて私は聞き返していた。

「何してたの？」

「変幻自在術だよ。手紙を送るのが面倒な時に便利なんだ。」

そう言いながら、机の上にコインを積み重ねてる兄は懐かしそうに何かを思い出している様子だった。

「やってみせてよ、それ」

「勿論、いいよ」

コインを2枚ほど手に取り、杖を取り出すと慣れた様子で軽く振る。1枚を私に渡してくると、兄はコインを握りしめるだけで何も話そうとしない。何をしているのと聞こうとすると、手の中にあるコインが熱くなり、手紙を読んでいるかのように頭の中に文章が浮かんできた。

へレイラ、また2人で買い物に出掛けようね

……ああ……これ、ハーマイオニー達が後半で使ってたやつか……

私はコインを見つめながら、兄に話しかける。

「確かに……便利だね……これ」

「だろ？よく学生の時に使ってたよ」

笑いながら私に自分で持っていたコインを渡してくる兄を見て、目の前にいる兄が首席だったことを思い出した。

……こんな人が首席なんてね……人は外見じゃないな……

「これ、貰ってもいいかな？」

私は、自分の手の中にある2枚のコインに視線を下ろしながら聞くと何も気にしてない様子の兄の声が返ってくる。

「勿論。2枚どころじゃなくてあと10枚ぐらいいる？」

面白そうに聞いてくる兄に断りを入れて、何も変わりのないコインを見つめた。

……何かに使える日が来るかもしれない……

いつも通り家族揃っての夕食を食べている時に、母が私にごく普通に問いかけてきた。

「レイラ、明後日の用意はできた？」

明後日？……なんのこと？

私が何も答えずに、頭を傾げたのを見て父が思い出したように口を開く。

「っあー…そうだ。忘れていたよ」

父の言葉に、母はもう殺すのではないかと思うほどの勢いで父の方を振り返り睨みつける。

「あなた？…まさか、レイラに教えていないわけではありませんよね？」

「あはははは、それが…：すっかり「あなたがレイラに直接話すと言ったから私もノアも話さなかったのですよ？」

父は、乾いた笑い声を上げながら頭をかきだした。

「あなたはいつもそう！自分から言いだしたことをすぐに忘れて、大人として恥ずかしくないのですか？」

母に怒られだす父の姿を見て、兄は私に話しかけてきた。

「ブラック家のパーティーに呼ばれたんだよ」

「ブラックってあの？」

「そうだよ。それもあつて僕も帰ってきたんだけど、まさかレイラが

知らないとは思わなかったよ」

苦笑いを浮かべる兄が言ったブラックという言葉聞いた瞬間、自然とシリウス・ブラックが浮かんで私は表情を歪ませた。

「それって絶対に参加しないといけなの？」

私の言葉に、母も兄もそして父も私の方を見てくる。

「……レイラ…、行きたくないのかい？」

「…できれば行きたくない……」

父の問いかけに、答えた私の言葉を聞いて兄は何やら必死に言ってくる。

「レイラ、パーティーだよ？美味しい料理も、レイラの好きなお菓子だって沢山あるんだよ？」

「…お菓子にはちよつとひかれるけど……あまり乗り気はしないの……」

こんな休みの日まで、何故ブラックの顔を見ないといけないの？

どうして純血主義の家系のパーティーにわざわざ参加しようとしているのかが分からない。参加して何かいいことがあるなんて思えない。

「……………お腹いっぱい、ご馳走さま」

もう食欲が失せて、まだ白いお皿にのっているステーキに手もつげずに椅子から立ち上がった。

……………こんな休暇の日ぐらい、記憶のことは忘れていたい。

……………この世界の先のことも何も考えずにごく普通に過ごしたいのに……

ブラツクの顔が浮かぶと、嫌でもポッターやルーピン、ペティグリューが次々に浮かびエバンスの顔が浮かんでくる。彼女が浮かんでしまえば、セブルスの顔も当たり前のように浮かんできて、次に頭によぎったのは彼が首から血を流して事切れる光景だった。

一気に気分が悪くなり、私はベッドに潜り込んでこの吐きそうなほど気持ちが悪いものに耐えるかのようにシーツを握りしめる。

……嫌だ、嫌だ、嫌、思い出したくない

セブルスが死ぬところなんてもう見たくない

瞼をぎゅつと瞑ると涙が滲んできて、咄嗟に口を抑えると部屋の扉を叩く音が聞こえてきた。返事をできるほどの余裕がない私は、何も答えずに毛布に包まったままにしていると扉の外から母の声が聞こえてくる。

「……………レイラ? ……入るわよ? ……」

扉が開いた音が聞こえたと思えば、母の足音がだんだんと近づいてきて、優しい手の感触を感じた。

「どうしたの? ……気分が悪い? ……」

私が何も答えずにしていると、母は優しい布団の上から撫でてくる。

母の手の温もりを感じた瞬間何故か、ものすごく暖かくなって涙が溢れてきた。

「……………学校で何か嫌なことがあった? ……」

優しい声で聞いてくる母に縋り付くように私は口を開く。

「……………ゆめ……………最近夢を見るの? ……」

もう吐きそうなほどの気持ちの悪い感触はなかったが、その代わりに胸がぎゅつと苦しくなった。

「…大切な人が、目の前で死ぬの。…首から血を流して、何も抵抗もせず、冷たくなる。私が目の前にいるのに、助けて言ってくれない。……助けてあげられない。」

自分で口にすると思い知らされて、また涙が溢れ出てくるともう止めることなんてできなくて私は手で目を押さえながら泣き続けた。

ふわりと頭の上に母の手の感触を感じたと思うと優しく撫でだして、温かい声で話しかけてくる。

「辛かったわね……でも、もう大丈夫よ」

ただ母にもう大丈夫だと言われたただけだというのに、私の中の何かは溶けると温かく感じた。

……ああ……私は怖かったんだ…

少しでも誰かに、大丈夫だと勇気づけて欲しかったんだ…

「大丈夫、それは夢で今現実ではおきていないのだから。だから大丈夫よ」

「…でも……本当におきたら…?」

「そんな時は、私がすぐに駆けつけてレイラの大切な人も、レイラも必ず助けだすわ。もちろん、お父さんだつてノアだつて、貴女が辛い思いをしていたら直ぐに駆けつけるに決まってる。」

あまりに温かい言葉に私の涙は更に歯止めを失ったように溢れ続けた。

「…だから、そんなに抱え込むのはやめなさい」

母親というのは、本当に不思議な存在だ。まるで私が記憶を思い出して苦しんでいるのを知っているかのように、温かく、包み込んでくる。

少し経って、涙も止まり私が布団から顔を出すと私の濡れている頬を拭いながら微笑んでくる母に質問をした。

「……………どうしてわざわざ、パーティーなんかに出席するの？ そんなパーティーに行ったところで何もないじゃない。なんだったら、浮いて変わり者扱いされて笑い者にされるだけよ」

「……………私も、最初聞いた時はそう思ったわよ。…………でもね、お父さんが私に言ってきたの」

「……………なんて…？」

「……………『少し考え方が違うだけで、最初から相手を拒絶してしまうのは良くない。…自分から行動して相手を知ること、初めて言い争うことができる。…………もしかすると、少しすれ違っているだけで、いい関係になれるかもしれないじゃないか』……………ってね。」

可笑しそうに笑う母を見て、私も笑みがこぼれた。

「お父さんらしいね」

「本当に、あの人らしい言葉だったわね……………私も最初はあまり乗り気じゃなかったけど、そんなことを聞くと、何か変わるんじゃないかっ

て思ったのよ。」

「……何か、変わる……」

「レイラが行きたくないのなら、無理してまで行かなくてもいいのよ？その時は、私と2人でお茶でもしましょ？」

立ち上がり笑いかけてくる母を見て、頭に何故かレギュラス・ブラックのことが浮かび上がってきた。

彼は……あまりに早く死んでしまう……
ひとりで寂しく、冷たい水の中で息絶える

彼の命を助けた方が今後やり易いのだろうか。

彼を助けたら、少しでもセブルスを死から遠ざけることはできるのかな……

「……………レイラ？……大丈夫？」

私の名前を呼ぶ母の顔を見て我に帰った。

……………パーティーに行ってみようかな……

……ブラック家ということは、クリーチャーもいるということだ。

……そうだ、コイン。兄からもらったコインを渡しておこう。今後何か重要になるかもしれないし、…受け取ってくれなかったら受け取ってくれなかったでそれでいい。

「……………お母さん……アウラも一緒に連れてつてくれる？」

「勿論そのつもりよ」

「……じゃあ、行くよ。……パーティー」

私の言葉を聞いた母はどこか安心したように笑いかけると立ち上がる。

「じゃあ、おめかししないとね。」

……お腹が空いたら来なさい。まだ下げてないからね」

部屋から出て行く母の姿を見送ると、あんなに食欲なんてなかったはずなのに、急にお腹が減り始めてお腹の音が鳴った。

どうやら、こんな時まで体というのは正直らしい。

風通りが良すぎて落ち着かずに私は少しもぞもぞしながらスカート裾を伸ばすように下に引っ張った。

「レイラ、裾が伸びちゃうでしょ」

母はそう言いながら、崩れた私の服装を直してくる。

「可愛いよ、レイラ」

普段と違って髪型を軽くセットしている兄は満面の笑みを向けてきた。

「いやいや、きつい……こんな丈の短いスカートに生足……」

私は普段の格好もあまり露出はしていないものだし、スカートもあまり着ないようにしている。風通しが良すぎるのが嫌いなのだ。

「さあ、行くかうか。」

父は、兄の手を握りバチンという音がしたと思うと次に目を開けた時にはもう2人の姿はなかった。

「レイラ、捕まりなさい」

私は、渋々母の手とアウラの手を握り瞼を下ろして気持ちの悪い感覚に必死に耐えた。グルンと景色が歪んだと思えば、体の中がかき混ぜられているように内臓という内蔵がぐちゃぐちゃになる感覚が襲いかかってきて、頭が締め付けられると宙に浮いていた足が地面を捉えた。

恐る恐る目を開けると、目の前には心配そうにこつちを見てくる兄の姿が目に入ってくる。

「大丈夫か？……すごい真っ青だ」

「……………話しかけないで……」

私が口元を押さえてしゃがみこみ俯くと、兄は背中をさすってきた。

……姿くらましましなんて何回やっても慣れるわけがない。

こんな気持ちの悪い感触もう味わいたくないとやる度に思うのだが、これが移動手段なのだからしょうがない。

気分も大分回復して、目の前に建っている家とは呼べないほどの大きな建物に近づく父の後ろをついていく。大きな扉の前には屋敷妖

精が私達を待っていたかのように立っていた。大きな扉はゆっくりと音を立てて開き、別の屋敷妖精が迎え入れてくれると案内をしてくれるらしく、ゆっくりと歩き出した。

あまりに豪邸すぎて、装飾品を眺めながら歩いていると、前を歩いていた兄が急に止まったことにも気付かずそのままぶつかっては驚いたようによろける。

「あ……ごめん、ノア。大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫」

笑いながら言う兄から視線を上げると、家の中だというのに、立派すぎるほどの扉が目の前にあった。屋敷妖精がゆっくりとその扉を押すと、何人もの話し声がだんだんと聞こえてきて、私の心臓の鼓動もだんだんと早くなつていくのが分かった。……どうやら緊張しているらしい。それもそうだろう。私達のことをよく思っていない集団の中に飛び込むのだから、何も感じないわけがない。

あんなに騒がしかった声は、私達が入ってきたのを見た瞬間にまるで何かいけないものを見てしまったかのようにその場は静まり返った。

何人もの大人達が私達を睨むように見ると、隣の人と声押し殺してひそひそと話します。

あまりに不安になって私は少し前にいた兄の服の裾を握ると、気づいた兄が優しく手を握ってくれた。

「やあ、久しぶりだね。オリオン」

父はまるで親しそうに黒髪の男の人に近づいていき話しかけた。

「本当に久しぶりだ。……まさか本当に来るとは思わなかったよ」

繕った笑みを浮かべる男の人は、整った顔立ちをしていて、一目でこの人がブラツクの父親だと分かった。会話を続ける父の姿を見て、

私は後ろにいるアウラに視線を移して、ポケットに入っているはずのコインを確かめる。まさか、あの時に兄から貰ったコインがこんなにも早く役に立ちそうになるとは思わなかった。

大勢いる人に溶けていく父や母を見て、私は兄に声を掛けた。

「…私ちよつと、トイレに行ってくるね」

「場所、聞いてあげようか？」

「大丈夫、心配しないで。それぐらい聞けるし、アウラにも途中までついてきてもらうつもりだから」

そう言ってもまだ不安そうな兄が後をついて来ようとするから、私は大丈夫だとなんとか説得してパーティーが開かれている部屋を出た。

「お嬢様、お手洗いはいいのですか？」

少し一息つく私を見て、アウラが声を掛けてくる。

「お手洗いは行かないよ………ある屋敷妖精を探すの」

「…名は？」

「…確か…クリーチャー」

私は、屋敷妖精がないかを探しながらキョロキョロと探しながら廊下を歩き進めるとやつとのことと、それらしき後ろ姿を見つけた。

「ちよつと、お願いがあるんだけど…」

そう声を掛けると、恐縮したように体を縮こませながら私の目を見つめてきた。

「なっ何なりと…」

「クリーチャーという屋敷妖精をここに呼んで来てくれないかしら？」

「……かしこまりました」

あまり納得してない様子の屋敷妖精は、すぐに走り去って行き呼びに行ってくれた。

「お嬢様………聞いてもよろしいでしょうか？」

突然アウラが、話しかけてきたものだから少し驚いたが私は振り返りながら耳を傾けた。

「…その屋敷妖精を呼んで、何をなさるおつもりですか？」

「……………少し仲良くなつところかなと思つて」

冗談混じりで言つたつもりだったが、アウラは酷く驚いたように声を出した。

「仲良く☒何を考えておられるのですか☒」

「冗談よ冗談。…………ちよつとやっておいた方がいいことなのよ……あつこれはみんなには内緒ね？」

私の言葉に頷いたアウラを見て、視線を戻した時にはもう2つの影がだんだんと近づいてきていた。

「…お待ちせしました…」

そう言つた屋敷妖精の後ろから私の方を見つめてくるクリーチャーは確かに記憶の中で見たそのものだった。

「貴方はもう大丈夫よ。ありがとう」

呼んできてくれた屋敷妖精の後ろ姿が小さくなったのを確認して私はクリーチャーに視線を合わせて話しかける。

「初めまして…クリーチャー。私はレイラ・ヘルキャットというの」

「貴女のこととはよく坊ちゃんからお話を聞いております。」

…………レギュラスが私のことを？

そんなに親しい関係じゃない。なんだつたら話したこともない。私が一方的に知っているだけだと思つていたが、どうやら彼も私の存在ぐらいは認識してくれていたらしい。

「…それで、クリーチャーに何かご用事でしようか？」

「…用事というか…ちよつと話したかったの」

私はポケットからコインを取り出して、ゆっくりと言葉を繋いでいく。

「…貴方……大切な人はいるでしょ？」

私の言葉に何も反応しないクリーチャーを見て話を続けた。

「貴方のことを大切に思ってくれている人とか、尊敬しているご主人様とか」

少しピクリと反応したクリーチャーは確実に、レギュラスのことを頭に浮かべているのが大体予想がついた。

「……そんな人が、この世から居なくなるなんて、貴方は耐えきれる？」

「……何故そのようなことをお聞きになるのですか？」

クリーチャーからの問いかけは聞かなかったことにして、私は話しかけた。

「……もし、それが助けられる命だったとしたら貴方はどうする？」

「……それがご主人様の望んでいることであれば、クリーチャーは喜んでそれを受け入れます」

「……そうね貴方達、屋敷妖精は、良くも悪くも主人に忠実だからね。……でも貴方が助けられなくとも私だったら助けられる」

私はクリーチャーの小さな手のひらにコインを1枚握らせて記憶に残るようにゆっくりはつきり話を続けた。

「……貴方にとって大切な主人が命の危機に晒されても、貴方は主人に助けるなど言われればそれもできない。……だったら、私に助けを求めてほしいの。」

「しかし……それはご主人様のご命令を裏切ることになります。」

「主人の為ではなく、貴方自身の為に私に助けを求めればいいことじゃない？」

私はクリーチャーの手から手を離してゆっくり彼の目を見つめた。

「私のことを信じてとは言わない。信じることが出来なかったらこのコインも捨ててしまっただけ構わない。……でももし持っていてくれるのなら、その時がきたらコインを握って心の中で何かしら呟けばいい。……呟く余裕がないのなら、コインを握りしめるだけでいい」

「……まるで貴方は……この先のことがかかっているような物の言い

方ですね…」

「馬鹿を言わないで、未来を知っているなんてありえないでしょ？」

私が少し笑いながら言うと、クリーチャーはまるで何か悟ったかのようぎゆうと口を閉じた。

「……クリーチャー…私は信じてるわよ」

「…おい、何をしているんだ」

突然聞こえた低い声にゆっくりと振り向くと、もう見飽きた人物の顔が目に入った。

「あまりに広いから…迷ってしまったの。だから屋敷妖精に尋ねていただけダメだった？」

私を睨みつけてくるブラックは、私の言ったことなんて信じていない様子だった。

ちらりとクリーチャーを見ると、彼がコインをぎゅつと握りしめている姿が目に入り安心しながら、ブラックに近づく。

「こんな広い家に住んでるなんて羨ましいわ」

彼の横を通り過ぎる瞬間、ブラックのか細い声が耳に入ってきた。

「こんなところ…狭くて…息がしにくいに決まってるだろ…」

あまりに弱々しい声で、いつものブラックの姿からは想像もできないものだった。振り向くと彼は、少し俯きながら歩いていた。

ああ…彼を傷つけた……

そう思っても、臆病な私は何も声を掛けることもできずにきた道を歩み進めた。

立派すぎる扉の前に立ち、中に入ろうとしない私を見てか、心配そうなアウラの声が聞こえてくる。

「お嬢様……………大丈夫ですか?…」

「……………大丈夫よ……………」

私は少し震えている手を見つめながら口を開いた。

「……………ただ……………少し怖いだけだから」

何か言おうとしたアウラの声は突然開いた扉の音で消え去り、中から出てくる人影に驚きながら後ずさりをする腕を掴まれた。

「レイラ、良かった。……………もう帰ろう」

よく見れば、私の腕を掴んでいるのは兄で、勢いよく部屋から出てきたのは私の家族だった。無理やり引っ張りながら先を歩く両親の後を追う兄の手の力は強くて腕が痛みます。

「痛い、痛いよ。ノア」

そう言っても、何も言わずに真っ直ぐ前だけを見ながら歩く兄の頬がぱっくりと切れて血が流れていることに気がついた。

「ノア…怪我してる…血が出るじゃない。」

何も答えない兄を見て、私は前を歩く父の手元に視線を下ろすと杖を握っていた。

「どうしたの?何があったの?ねえ、」

咄嗟に後ろを振り向くと、勢いよく開けたから扉は開けっぱなしになっ
ていて、部屋の中の様子が遠くからでもはつきり見えた。

「…………レギュラス…」

ブラックの父親らしき男の人と、その隣に立っている青年は確かにレ
ギュラスだ。2人の手には杖のようなものを握っているように見え
て、何があったか大体想像がついてしまう。

兄が力強く握ってくる腕の痛みなんかどうでもよくなり、私はちや
んとアウラがついてきているかを確認しながら、結局私には何も話し
てくれないまま姿くらましをして家に戻った。

家に戻っても、重たい空気が流れるだけで3人は決して話そうとは
しない。

どうせ聞いても、はぐらかせる。そう分かっているでも今の私は聞か
ないと気が済まない。

「ねえ、何があったかぐらい話してくれてもいいんじゃない?」

兄の頬の怪我をアウラが治療している空間に私の声が響き渡ると、
まるで堪忍したように父がぽつりと話しだした。

「…………話していたんだが、それもだんだんとヒートアップして
いってね…気がついたらノアが怪我をしていた」

「怪我?…あの子はノアを殺そうとしていましたよ?ノアは、自分の
意見を述べただけなのに杖を向けるなん「母さん!!!」」

怒りだす母の話を遮って、落ち着いた様子で声を掛けた。

「落ち着いて、怪我もそう大した傷じゃないから。……僕の言い方が悪かったんだ。あの子の意見を否定するような言い方をしてしまった。」

母は少し溜息をついて、兄は痛々しく笑みを浮かべた。

「……………でも、お父さんはなんで杖なんて取り出したの?……」

「いや、父さん。大丈夫、自分で言うよ……」

私が疑問に思ったことを聞くと父はちらつと兄を見て何か言おうとしたが、兄はそれを止めると静かに話しだした。

「……………ヴォルデモートの思想に大いに賛同しているあの子の意見を聞いていると、ついつい反論をしてしまったんだ。それもすごいきついできたよ。頬をかすめただけだったし、別に杖を取り出そうとも思わなかったけど、……………あの子が……レイラのことを侮辱するようなことを言い出して……それで気づけば杖に手をかけていたんだけど……それに気づいたあの子の父親が割って入ってきて、その後すぐに父さんが僕の代わりに杖を取り出してくれたんだ。」

「……………あの子って……レギュラス・ブラックのことよね?……ブラック家の次男の」

「ああ……そうだよ」

父の言葉を聞いて、私は正直信じられなかった。

彼がそんな簡単に人に杖を向けて攻撃するなんて思わなかった。まあ、私のことを悪くいうのは当然だというか、寮での私の立場を見ればそうなるのは仕方がないだろう。

「……………そう……じゃあ、結局何も変わらなかったってことね……」

正直、心のどこかでは期待をしていた。このパーティーに参加をすれば、何かが変わるかもしれない。自然といい方向に向くかもしれないと思っていた。

こんなことが簡単に変わらないのなら、物語が私一人の力で変わらない。変わるはずがない。

あの本が言っている意味が分かったような気がして、私は天井を見上げながら瞼を下ろした。

14 臆病者の言い訳

それぞれの色のローブを身に纏い腰掛けている生徒達に紛れながら組み分け帽子の歌を聞き流す。みんな何故か組み分けを楽しみにしていたが、私にはとつても楽しみには感じない。この組み分けは、長いのだ。もう4回目となるとつまらなくてしょうがない。

やっと組み分けが終わったと思うとダンブルドアが一言二言話して、目の前に豪華な食事があらわれた。新入生は初めてみた光景に、驚いたような声を上げて大広間は生徒達が話す声とナイフとフォークの音で賑やかになった。

ふとグリフィンドールの席に視線を移すと、ポッター達と楽しそうに騒ぐブラックの姿が目に入った。：あの時の彼はどこにもいなくて、今日の前にいるブラックを見ているとあの時のことが嘘のようだ。まあ、こんなに目立つほど騒ぐほどの元気があるのならあの時私の言葉で、ブラックも傷ついていないだろうと一人勝手に決めて、目の前にあったパイを手を取った。口に運ぶとホワイトソースと野菜がたっぷり入っていた。ホグワーツの料理は、そこら辺のホテルよりは普通に美味しいと思う。屋敷妖精がこんな量の料理を作っている姿を想像しながら、私は肉を手にとって口に運んだ。

学校が始まれば、勿論授業もあるわけで苦手な魔法薬学は去年よりも複雑さを増して私の頭を悩ませていた。年々難しくなる魔法薬学に覚える種類が増える薬草学、この2つはどう頑張っても苦手なままで、魔法薬学の課題は相変わらずセブルスの手を借りながら何とか乗り切っていた。

私は湯気が立ち上る大鍋を覗き込みながら、中の液体をぐるぐると

かき混ぜてみる。今は魔法薬学の授業で、私は教室の端の席で調合をしている。隣の生徒の大鍋をバレないように見て、何色の液体か確認して自分のと比べてみた。

濁った青、透き通った水色、…何度交互に確認しても、隣の生徒は透き通った水色だし、私の大鍋の中の液体は濁った青をしている。

どういふことなんだろう…ちゃんと教科書通りにしたし、材料を入れる順番も、かき混ぜるタイミングも火の強さも、あっているはずだ。どこかで間違えたのかな…

私は液体をすくい上げて上からタラタラと垂らしながら考え込んでいると、周りの生徒達は小さな瓶に出来上がった薬を移して名前を記入しだしていた。

私はしようがなく完全に失敗しているのであろう薬を提出しようかと、側にあつた瓶を手に取るとふわりと横から落ち着く香りがした。

「……………青か……………」

耳元で聞こえた声に私の心臓は突然緊張したように運動をしだす。

私の大鍋の中をかき混ぜるセブルスは、ちらりと私の方を見てきた。課題も色々とお世話になっている私は少し気まずくて視線をそらす。

「……………これでも、教科書通りにやったのよ」

「…教科書通りにやったからと言って上手くいかない時もあるが、これは教科書通りにやれば失敗することなんてないはずなんだが」

「……………でも青色も水色もそう変わらないうじゃない？」

開き直った私の言葉には聞く耳も持たずに、セブルスは慣れた様子で余っている刻まれている薬草をナイフで潰し、汁を取り出すと3滴ほど入れて液体を優しくかき混ぜる。彼が、横髪を耳にかけた瞬間に私はなぜか見てはいけけないものを見てしまった気がして視線を逸らした。

やばい……………隣にいて、こんなに普通に会話できていること自体が奇跡に近いというのに…

耳に髪をかけている姿なんて、私の心臓がもつわけがない！

案の定、今すぐ破裂しそうなほど運動する心臓の鼓動を全身で感じ

ながら自分を落ち着かせるために目を閉じて、深呼吸を繰り返す。

「……………何をしているんだ？……」

声が聞こえて、彼の方を見るとセブルスは不思議そうに私の方を見ながら問いかけてきたが今の私には目の前にいるセブルスの色気にやられ何も答えられない。

彼は頭を傾げて、特に何も気にしていない様子で柄杓を手から離すとちらりとスグラホーンに視線を移した。

「…瓶に移すぐらいはできるだろ？」

大鍋を覗き込むと、濁っていた青色の液体は透き通った水色とまではないえないが確かにさつきよりかはましになっていた。

その場から立ち去ろうとするセブルスに、お礼を言わないという思いに駆られながら、勇気を振り絞って声をかけた。

「……………ありがとう……」

少し小さな声だったが、聞き取ってくれたセブルスは私の方を振り向くと少し口角を上げて優しく微笑んできた。

耳にかけていた髪がふわりと宙を舞うと、落ち着いたばかりの心臓がまた激しく動き出して体が熱くなったのが分かった。

……………ああ…やばい……

止まるどころか溢れてくるこの気持ちを蓋するように、私は瓶に薬を移す作業に集中する。

体がだんだんと熱くなり、どんなに考えないようにしようとしても、なぜか頭にはセブルスが微笑んできた映像が何回も流れ続ける。

……………お願いだから、落ち着いて。

自分の体だということにいうことが効かなくて、薬を少しこぼしてしまっただ。

もう、全部が愛おしい。セブルスの表情も仕草も、全部、全部愛おしい。

……私だけのものにしたい……

私は口元を押さえて、今自分が思ってしまったことを消し去るように呼吸を繰り返す。

駄目、こんなこと思ってしまったてはいけない。

セブルスはエバンズが好きなんだ。私じゃない。エバンズだけを見ているのだから……。

彼の幸せを願ってあげられない私がそんなこと思う資格なんてない。

外から見てもどうやら私の様子がおかしいことに気づいたらしく何人かの生徒達はこちらを見ながらヒソヒソと話しだした。

なんとか外に出さずに自分の体の奥底へ沈めることができた私は、呼吸を整えながら平然なふりをして瓶を提出した。

……いくら奥底に沈めようと、この気持ちは決して消えてくれない。跡形もなく溶けてくれたらどんなに楽なんだろう。

セブルスとポッターは顔を合わせるたびに杖を取り出し、喧嘩が勃発するのは相変わらずの光景だった。4年生にもなると、最初の頃と比べて喧嘩も激しくなっていた。だから少しハラハラされる事は何度もあったが、気づけばエバンズが止めに入っていたのでそう心配することもなくなった。

それなのに、何故こういう時にエバンズは居ないのだろうか。

確かに彼女もそう毎回彼らの喧嘩の仲裁に入るほど暇ではないのは分かる。しかし出来ればこういう時にこそ止め欲しいものだ。

雲ひとつない青空の下には、ポッターが自由自在に箒を操りながら乗りこなしている。彼は、何度も読み返しているような本を地面に足をつけて睨んでいるセブルスにちらちらと見せびらかすように落とす仕草を試みたりしている。

そんなポッターを見上げながらセブルスは悔しそうに、怒鳴っていた。

「返せ!!!」

どうやら虫の居所が悪いセブルスはいつも以上に怒りながら、今にも人を一人殺してしまいたいような目つきで睨んでいる。

「そんなに返して欲しければ自分で取りに行けばいいだろ」

ブラックは、少し馬鹿にしたように笑みを浮かべながらセブルスの足元に箒を落とす。セブルスが箒に乗るのが苦手な事ぐらい私も彼らもよく知っている。

セブルスは、箒を手にとって高い所を飛んでいるポッターを見上げ

ると息を呑んでいた。

きつと少し怖いんだろう。だから飛びたくても、飛べない。

私はどうせエバンズがいずれ来て止めてくれるだろうと思いついてその場を離れようとしたが、ブラックの声が聞こえてきて、その気も失せてしまった。

「スニベルス、まさか箒に乗れないなんて事はないよな？」

何も言い返せず、黙り込むセブルスを見てしまつては助けない他にはなかった。私は廊下から中庭に出てセブルス達に近づき、呪文を唱える。

「アクシオ、箒」

セブルスが持っていた箒は私の手の中に飛んできて、セブルスは私の方を見つめていた。私が貸してと声をかけても彼が簡単には渡してくれないことぐらい大体想像がつく。

ブラックが何か言おうと口を開いたのが見えたがそんな事には目もくれずに、箒に跨つて地面を蹴った。

どうやらこの箒は優秀らしい。少し傾けただけで簡単に方向を変えてくれるし、少し前のめりになればスピードを上げてくれた。

ポッターが飛んでいる高さまで上がると、少し驚いたような様子の彼は嫌味つたらしく話す。

「へえ、君得意なんだ」

「まあ：貴方よりかは負けるけど」

「そんなに褒められるなんて照れちゃうな」

「その貴方が持っている本。返して欲しいんだけど」

私はポッターの言っていることは完全にスルーして、本に視線を移した。

「君のじゃないのに、返すなんておかしいだろ」

ポッターはへらへらと笑いながら本の表紙だけを持ち、ページが風で勢いよくめくりあがる。

「じゃあ、貸して。」

「残念ながら、これはスニベルスのものだからね。僕に言われても困るな」

「……だったら早く彼に返したらどうかしら」

「僕は、スニベルスに取りにきて欲しかったんだけどな……まあいいよ。そんなにお望みなら返してあげる」

そう言ったポツターの手から本が離れて、重量に逆らうことなく落ちていく。

体を前に倒して、落下し続ける本に手を伸ばしたが、本にかすりもしなかった。私は反射的に箒から宙へ体を放り投げた。本を抱きしめるように両手で抱える箒に乗っていない私の体は、当然すごい速度で下へと落下していく。

劈く悲鳴のような声が聞こえてきたが、私にはどうしようもできずに地面に叩きつけられたら痛いかなと思いつきながら私は青空を見つめた。

落ちていくのは本当にゆっくりに感じて、そろそろかなと思いつき私はいくつか痛みが和らぐようにと目を瞑ってみるが、体には何も衝撃はこない代わりに腕を誰かに思いつきり掴まれる感覚がした。

落下する風も何も感じなくなり、ゆっくりと上を見上げるとポツターが片手で箒に宙にぶら下がりながら、私の腕を握って凄い顔をしていた。

「絶対動くなよ!!!」

ポツターは、額に汗をかきながら私の腕を握り続ける。彼の手が箒から離れてしまいそうなのを見て、私はポツターに話しかけていた。

「離していいよ……この高さだったらどっかの骨が折れるぐらいだから」

「はあ何言っ「私が落ちたらすぐに先生を呼んで」

私の腕を握っているポツターの指を一本ずつ離して、私の体は再び宙に投げ出された。真っ青になったポツターの顔がだんだんと小さくなつていき、地面が近づいてくるのが分かった。

少し怖かったが、セブルスの本が自分の手の中にあるのを感じて私は痛みを耐えられるように目を閉じる。

さつきよりかは落下の速度もそんなに速くないし、腕が折れて背中が痛むぐらいだろうと思っていると背中ではなくお腹に突然殴られ

たような衝撃に襲われ私の体は落下するのをやめていた。私は恐る恐る目を開けてみると、目の前にいたのはセブルスだった。

彼は私の体をかろうじて抱きかかえて、そのまま壁に激突したらしい。

だから背中ではなくお腹に衝撃があつたんだ。

……その他に衝撃がなかったのは壁にぶつかるときにセブルスがわざと私を庇うように自分を盾にしたからだ、辛そうに顔を歪めるセブルスを見てわかった。

セブルスが左腕をゆっくりと私の背中に回して安定するようにするもんだからセブルスと私は向き合った状態でさらには、彼にもたれかかる体勢になってしまっていた。薬草とどこか懐かしい香りがして、心臓が飛び出そうなほど鼓動を早くなつたのが分かり、体温が上がる。今絶対顔が真っ赤になってる自信しかない。

何も言わないセブルスは、ゆっくりとそのまま降下していく。

……この時間が……ずっと続けばいいのに

力なくだらんと垂れ下がる右腕を見て、そんな気持ちも一瞬にして消え去った。

地面に足がついた瞬間に、セブルスは痛そうに右肩を押さえ出して、私から離れていく。その瞬間に、血の気が引くと体に嫌な汗が流れた。

私はセブルスに駆け寄って怪我をしていない左腕を引つ張った。

ポッター達に構っている暇などない。

早く医務室に連れて行かないと!!

そればかりが頭をよぎり私はセブルスを連れて医務室に駆け込んだ。私があまりにも顔色を悪くしていたからだろう。マダムはすぐに駆け寄ってくれてセブルスの治療をしてくれた。

「落ち着きなさい。肩は脱臼しただけです。すぐに治ります」

マダムは私を安心させるような言つて、セブルスと何か話して医務室から出ていく。

私は手に持っている本に視線を落としカーテン越しにいるセブルス話しかけていた。

「……………本……………ここに置いとくね…」

気まづくてこの場から逃げ出したくて、私はそう言うのが精一杯だった。

セブルスを助けたくて行動を起こしたはずが、逆に彼を怪我させてしまった。

……………私のせいだ……………

罪悪感が押し寄せてきて私が立ち上がった時、セブルスの声が聞こえてきた。

「……………怪我……………なかったのか……………?」

私は答えずに頷いた。答えることができなかった。声が出なかった。

……………本当に、私は臆病だ……………

「…………………………そっか……………よかった…………………………」

どうやらカーテンに映っている私の影を見たらしく安心したように小さく呟いた声が聞こえてきた。

今、この状況だったらお礼を言えそうな気がして私は勇気を振り絞って彼の名前を口にする。

「……………セ「セブ」……………」

!!!!!!!

私の声は、耳に響くような大声と重なって消えていった。

どうしていつも彼女が来るのだろうか。

どうして彼女は邪魔ばかりしてくるの……………

思いつきり開いた扉には、エバンズがいた。エバンズは私と目が合うと気まづそうに逸らして、奥に進んでいく。

「セブ大丈夫☒怪我をしたって聞いて」

「……………りり……………大丈夫だよ」

カーテンに2人の影が動いているのを見て、最近はまだ生まれなかつた気持ちがあつふつと浮き出てきた。

心臓が苦しくなり、辛くなる。これが嫉妬だつてことぐらい知っている。

私は、本を腰掛けているベッドに置いて静かに医務室を後にした。

最近、エバンズを徹底的に避けてきた。だから、こんな思いなんてせずに済んだ。

久々に感じるこの胸の苦しみに耐えながら、私は廊下をひとり歩く。

きつと……今日は、セブルスの体に触れてしまったから、セブルスの温もりを香りを感じてしまったから、だからこんなに辛くて苦しんだ。

貴方の温もりに触れてしまったら、そんな幸せな時間があることを知ってしまったら……私はもつと求めてしまう。

今セブルスが生きているだけで幸せなはずなのに、ただ話しているだけで幸せだったはずなのに人間なんて貪欲で自分勝手だ。

もつともつとセブルスに触れていたい。貴方に優しく抱きしめられて、私も抱き返して、何でもないことで笑いあつて、辛いことも悲しいことも2人で分け合つて、彼女を向ける目を、私に向けてほしい。彼女の名前を呼ぶように私も名前を呼んでほしい。

…彼女じゃなくて、私を見て

貴方の幸せさえも祈つてあげられない私が、こんなことを思う資格なんてない。

でも、ただただ愛しいの。私の手が届かないことぐらい分かつてる。私に振り向いてくれないのも知つてる。何度も何度も諦めよう

とした、忘れようとしたけど無理だった。

だから……せめて……

貴方のことを愛しく想うことぐらい許して。

……決して口に出したりして、貴方を困らせたりはしないから。

今年のクリスマスは、家に帰った。最後まで残ろうかどうか悩んでいたのだが、どうやら帰って正解だったらしい。……何故か今年のクリスマスはエバンズも残っていたらしいから。

降り積もった雪もだんだんと溶け出している景色を眺めながら私は大量に出された課題を抱え歩いていった。

どうやら来年にあるO・W・L試験に備えてらしく、ひと山は出来そうな課題が出たのだ。課題を出せばいいってもんじやない。こんな量をやったところで私の頭の中に入る訳などなかった。

溜息をついて、図書館から寮に戻ろうと廊下を歩いていると、私が今避けている人物が目の前に立っていた。まるで私を待ち伏せしていたかのように仁王立ちしている。私はすぐさま背を向けてその場から逃げようとするが、課題を持っているので簡単に腕を掴まれてしまった。

「……何か用？」

顔だけ振り返り私の腕を握っているエバンズに声を低くして問い

かける。

「……貴女が私のことを嫌っているのはよく分かったわ。……でも、理由を教えてほしいの。私がいつ貴女に嫌われるようなことをしてしまったのか。」

「……それを貴女に言ったところで何になるっていうの?」

私はエバンズを睨みながら、言うど彼女は変わらず明るめの声で話を続けた。

「……何にもならないわよ。……ただ教えてほしいの」

「……理由なんてない。あんたを嫌いになった理由なんて必要?」

何かしら理由があると思っていたであろうエバンズは少し傷ついたように顔を歪めたが、すぐに元に戻して私を見つめてくる。

「……貴女には、友達がたくさんいるじゃない。…別に自分のことが嫌いな奴にそんなに構って何がしたいの?」

私は今思ったことを、エバンズに問いかけてみた。どうして今更そんなことをわざわざ本人に聞かないといけないのだろうか。

「……セブ……セブが最近闇の魔術に前よりも没頭しているの。…

私が何度言っても聞く耳を持ってくれなくて…でも貴女だったら!」

「……私が彼を止めれるとも思ったの?」

エバンズは、静かに頷きまた口を開いた。

「貴女と話しているところはよく見かけれるし、それに同じスリザ「同じ寮だからなんなの?」

私の冷たい声に凍りついたように、彼女は固まった。目を点にして私を見つめてくる。

「私よりも貴女の方が彼のことを知っているんじゃないの? 私よりも前に出会っているんだから」

「でも、私じゃ駄目なの。私の声は彼に届かない」

届かない? ……彼女は何を言ってるの? ……なんでそんなに気づかないの? ……

「……よくそんなことがすらすらと言えるわね……届かない? 冗談もいい加減にして!」

私は、エバンズの手を振り払って彼女を睨みつけた。

「……………どうして嫌いな奴の頼みをわざわざ聞かないといけないのよ」

エバンズの隣を通り、私は寮の中に逃げ込んだ。

貴女の声が届かない？ ふざけないで！

少し考えてみればいい、すぐにわかることじゃない。あんな分かりやすい反応を見ていれば、貴女に気があることぐらいすぐに気づくはずでしょ☒

…セブルスには貴女の声しか届かないのよ

今すぐにでもエバンズに言ってやりたい気持ちをぐつと堪えて、ベッドに飛び乗った。

…………セブルスは彼女を彼女だけを永遠に想い続ける。

どうして……………彼女なの…

どうして…

私じゃないの……………

ほらまた醜いものが溢れ出てきた。

それからは全てが、あつという間に過ぎていき、学年末試験を終え

てしまうともう夏休みが迫ってきていた。今回の試験はセブルスのおかげもあつて結構手応えは感じている。

セブルスとの仲は、別に良くもなく悪くもなかった。進展なんてしてはるはずもなく、お互い友達とはいえない微妙な距離を置いて接していた。

セブルスにも、エバンズがあまり良く思っていない友達が何人か出来たらしく、私が話す機会も減った。今までは、お互い浮いている存在同士何となく話している時もあったからしようがないと思う。だけど、セブルスと話してただけの時間は私にとつて暖かいものだったから、少し寂しくて、何か物足りないのを感じていた。

それでも、彼と彼の友達の間を割って入るほど私に勇気があるわけがない。少し楽しそうに話すセブルスを見てしまえば、遠くから見ているだけで幸せだと思ってしまう。

それなのに、何故かエバンズとセブルスが2人で仲良く話す光景だけは頭も体も拒絶する。

ほら今こうして、廊下の窓からひらけている中庭に2人が仲良く話す姿が目に入っただけで私は無意識に抱えていた教科書のページを握りしめて、2人の後ろ姿を睨みつけている。私の心臓は苦しそうにゆっくりと動いて締めつけられるような痛みに襲われた。セブルスはそんなことも知るはずもなく、エバンズを見て笑っている横顔が視界に入った。

最初の頃に比べるとセブルスとも話すようになった。だけど、いくら頑張ってもセブルスはエバンズを見るような目で私を見てくれないし、彼女にだけ向けるあの笑顔は私には見せてくれない。

……大丈夫…私は大丈夫……

自分に言い聞かせるように何度も繰り返しながら廊下の壁にもたれかかる。

………平気だから…泣かないで…耐えて

泣きそうになるのを堪えるために目をつぶって俯いた。こんな生徒が行き来しているような廊下で泣いたら、絶対にセブルスに気づかれてしまう。騒ぎを駆けつけて、エバンスの後から、私が泣いているのを見て彼はなんと思うのだろうか。

考えただけで、怖い。

「……………大丈夫…ですか?…」

前から声が聞こえてきて、ゆっくりと顔をあげると意外にもレギュラスが心配そうに私を覗き込んでいた。目が合った瞬間少し気まずそうにしながらも、話しかけてくる。

「……………顔色が悪いですし…医務室に行きますか?…」

「…………いや、少し考え事をしていただけなの。気にしないで。」

私が笑いながら言うと、彼は少し考えるように黙り込みそして口を開いた。

「…………とりあえず、寮にでも…一緒に行きましょう…ここに放っておけませんし…」

目の前にいる彼は心配になるほど優しくすぎる。…嫌いな私がいくら体調が悪そうだからといってわざわざ話しかける必要なんてないだろう。それにあのパーティーで、兄と対立したぐらいなのに。

前を歩くレギュラスの後をゆっくりとついていき、横に並ぶと突然小さな声が聞こえてきた。

「……………貴女のお兄様に怪我を負わせてしまい、申し訳ありませんでした。」

あまりに突然なことだったから聞き逃しそうになったが、そんなことよりも少し申し訳なさそうに落ち込んでいるようなレギュラスの方が気になっていた。

「…………いや、気にしないで。……………大した怪我じゃなかったし、兄も自分が悪かったと言っていたから」

「……………そうですか…」

周りを行き交う生徒たちの話し声や足音で時々聞こえづらくなるが、それでも耳に入ってきた。

「……………あまり無理して、私に話しかけないでも大丈夫よ。……………」
レギュラスの方は見ずに、私は前を向いたまま話を続けた。

「辛いでしょ？ 気に入くない奴と話すのは」

「何を言っているんですか。そんなことありませんよ」

お手本のような笑みを浮かべるレギュラスの横顔を見た瞬間少し恐ろしく感じた。

……………こんなに温かくない笑顔は初めて見た…

「…貴方が純血主義の考えを支持していることぐらい知っているし、……………そんな笑顔を浮かべるぐらいのなら私に構わないで。」

もう少しで寮に着くというのに、レギュラスは足を止めて私の方を見てくる。

「……………どういう…意味ですか？……………」

「……………貴方が優しい気遣いで私に今こうして接してくれているのは、もちろん分かってる。…浮いている私に情をかけて話しかけてくれたんでしょ？」

何か言いたげな彼の口からは、言葉は出てこなくて私は静かに言葉を繋げた。

「……………でもそんな笑っていない笑顔を向けられても嬉しくないし、見ている方が苦しくなるのよ」

「……………面白いことを言うんですね……………」

笑ってない笑顔ってどんな笑顔なんですか？」

ほら、また冷たい笑顔を浮かべてくる。

まるでこのタイミングで笑うようにと設定されたロボットみたいなのだ。彼の笑顔は、とても冷たくて、見ている私まで苦しくなる。

「……………そのことよ……………」

気にかけてくれてありがとね……………」

私の言葉を聞いたレギュラスがゆっくりと自分の頬を触ったのを見て私は寮に逃げ込んだ。

動き出しそうなホグワーツ特急に急いで乗り込み、空いているコンパートメントを見つけ腰掛けた。色々と詰め込んだトランクを上置き置き、隣にお腹が空いたのか鳴いているアテールが鳥かごの中から嘴で突いてくる。

「分かったから。後からお菓子買ってあげるから」

その言葉に満足したように、ホオーとひと鳴きすると毛づくろいを始めた。窓にもたれかかり、動き出すのを待っていると控え気味にコンパートメントの扉が開く音が聞こえてきた。

「……………いいかしら…他どこも空いてないの」

気まづそうに笑いながら私に訪ねてくるエバンスの後ろにはセブルスがいた。私は少し溜息をついて一言だけ返す。

「……………ええ……………」

私の言葉にホツとしたような表情を見せてエバンスは平然と中に入ってくる。どちらかというときセブルスの方が、私と彼女を交互に見て心配そうな表情を浮かべていた。

私は寝るのをやめて、本を開き読み進めることにした。コンパートメントには私がページをめくる音と、2人の会話だけが響き、外の方が騒がしいぐらいだ。

おぼちゃんがカートを押しながら、お菓子を売っている声が聞こえて、私は立ち上がりコンパートメントの扉を開けた。

「かぼちゃパイと蛙チョコ一つずつ」

皺くちやな掌にコインを置き、おぼちゃんからかぼちゃパイと蛙チョコを受け取って席に着くと、エバンスも百味ビーンズを買っていた。彼女は、隣に座っているセブルスに百味ビーンズを分けて、2人はまるでピクニックに来ているようで楽しそうだ。

「ん！ピーチ味だわ。今回は当たりねセブは？」

「チョコ味だよ。」

「良かったわね。この前、ゲロ味当ててたからね」

「あれは、本当にまづかった…」

2人は思い出したように笑い声をあげてた。私はというと、かぼちゃパイを小さくしてアテールの口に運んでやっていた。アテールは食べ終わると満足そうに鳴き、体を丸める。

私は2人の会話を聞き流しながら、蛙チョコの封を開いて逃げようとするチョコをタイミングよく捕まえた。小さい時によく兄と蛙チョコを食べていたから慣れたもんだ。

口に運ぶと甘い香りが一気に広がっていき、おまけのカードを見て

みるとサラザール・スリザリンだった。私は、セブルスにそのカードを渡そうと腕を伸ばしていた。

「……あげる」

セブルスは、困ったように眉を下げながらも受け取ってくれる。

「……男の子ってこういうのは集めるの好きでしょ？」

私がお菓子のゴミ屑を片付けていると、今度はエバンズが私に百味ビーンズを渡してくる。

「良かったらいかが？」

「……悪いけど、私嫌いな。それ」

「……そお……残念ね」

エバンズは気にしてない様子でまた百味ビーンズを食べだした。

駅に着くまで、私は2人の会話を聞き流しながら本を読み続けた。楽しそうに話す2人を見て、時々気が狂いそうになったがそれでも楽しそうに笑っているセブルスを見ると楽になって私まで楽しい気持ちになった。

ただ、幸せそうに笑うセブルスを見るたびに私は少し胸が締め付けられるような痛みに襲われて、あまり直視はできない。

………来年………この2人の関係が……壊れる……

本を読んでいても全くと言っていいほど内容なんて頭に入ってこなかったしページをめくるのを忘れるほど余裕がなくなっていた。

駅に着き、汽車から降りる準備をしていると先に2人がコンパートメントを出ようと扉に手をかけた。

「……ありがと。席を分けてくれて」

エバンズがお礼を言ってきたが、私は返事もせずに視線を逸らした。セブルスが彼女の後に続いて出ようとする時、私は無意識に彼を

呼び止めていた。

「…待って。」

セブルスは動きを止めて不思議そうに見つめてくる。本当に、呼び止めただけでも褒めてほしい。

…分かってる。言葉にしないと、声に出して言わないと伝えたいことも伝わらない。

何か言わないといけないというのは分かるのだが、いざ目の前にすると緊張して言葉が喉で引っかかってしまう。

彼を呼び止めた理由は分かっていた。…最後まで悩んでいたのだ。彼に少しでも幸せになってもらうために、忠告をするかしないかを。

でも…でも

考えれば考えるほど、頭の中は混乱してローブを握りしめる手の力が強くなっていく。

来年貴方は彼女のことを穢れた血と呼んでしまうから、だから気を付けて…

なんて言えるわけがない。私が黙り込んでいると、セブルスは頭を傾げて私の言葉を待っていた。

「……………っあ「セブ☒行くよ〜!!!」

タイミングよく遠くで彼を呼ぶエバンスの声と重なり、私はもう言えなくなった。

「…うん！ちょっと待って！……………それで、何だっけ？」

2人が幸せそうに笑いあっている姿が脳裏に浮かぶとやっぱり私

には言う勇氣なんてなかった。

「……………いや、何でもないので。……………ごめんなさい、引き止めて」

不思議そうな表情をしたセブルスはコンパートメントから出て行くこうとするが、思い出したように振り返ると私にお礼を言ってきた。

「……………そういえば、チョコのカードありがとう」

少し照れくさそうに言うセブルスは、それだけ言うと急いでエバンスの元に駆け出していった。

心臓の鼓動が早くなり、ドクンドクンうるさかった。

アテールも早くコンパートメントから出たいのだろう。鳥かごの中で私に向かって鳴き始めた。

「うるさい」

アテールに言ったのか、それとも自分の心臓に言ったのか自分でも分からない。

体が熱くなつたのは夏の気温のせいにして、私もコンパートメントを後にした。

15 来てほしくない未来

夏休みを迎えたからといって嬉しい気持ちになるわけがない。終わるかどうかとも分からない課題の山に、この夏休みが終わればあの出来事が起こる一年が始まるという現実が待っている。

このまま時間が止まればいいのに……

私は叶わないことを思いながら兄がくれた魔法のかかったコインを机の上でコロコロと転がした。

………そしたら…セブルスがエバンズにあんなことを言うてしま
うこともなく、平和に過ごせるのに。

………ずっとこのままだったら……

………セブルスが死ぬこともないのに……

考えたことを消し去るように、コインが机から落ちる直前に拾い上げて、目の高さまで上げる。

………これ、無くしそうなんだよな……

クリーチャーに渡していない方のコインは学校には持っていかず家の机の引き出しにしまっておいたのだが、それでも無くしてしまいそうに怖かった。

クリーチャーにコインを渡したからといって、レギュラスが救えるという訳でもない。それにそもそもクリーチャーが使ってくれるかどうかはその時にならないと分からない。さらにいえばコインをその時まで持つていてくれるのかさえも分からないのだ。

……それにしても…驚いたな…彼から話しかけてくるなんて

3年間も一言も話さなかった私に、更にいえばよく思っていない私にわざわざ親切心だけで話しかけてくるだろうか？

……何かしら…訳があつて話しかけてきたと言つた方がしつくりくる。

兄の怪我のことを謝るためなのか、それとも別の事があつて私に話しかけなければならぬ状況だったのか。

考え込んでいる私の手から握つていたコインが滑り落ちて、音を立てて床を転がった。

「…あゝあ…もう……」

拾うのが面倒で溜息をつきながらしゃがみこんでコインを拾い上げると、ふとあることが浮かんた。

……クリーチャーが自分に見覚えのないコインを持っているのをレギュラスが目にしたら彼はどうする？

…私だつたら…それは誰に貰つたのか問いたです。

…きつと…ほとんどの人がそうするだろう……

屋敷妖精は主人に忠実だ。…高確率でクリーチャーは、レギュラスに話すだろう。

そこまで考えてなかった…レギュラスには何も知られずに事を進めると簡単に考えていた私が馬鹿だった。

まあ：渡ってしまったものはしょうがない。

別にレギュラスの命を助けようが助けまいがセブルスの死には直接関係はしてこないだろう。コインを捨てられたら、彼が私の知っている物語通り死ぬだけだ。

とりあえず無くしそうなこのコインをアウラに預けておこうと思いい、ポケットにしっかりとしまいこんで部屋の扉を開けると何やら賑やかな声が聞こえてきた。どうやら玄関の方からしているようで、ここまで声が聞こえるということは相当声が大きいらしい。

吸い込まれるように声がする方へと向かうと、扉の前で父と母、そして2人の人影が見えた。二階の手すりで乗り出す体を支えながら名前を口ずさむ。

「……セリーヌ叔母さん……？……エド叔父さん!!!」

顔がはつきりと見えた瞬間に、私は2人の元に駆け出して思いつきり抱きついた。

「レイラ、大きくなったねえ〜元気にしてた?」

少し男勝りの叔母は、しっかりと私を抱きしめてくれると笑いながら頭を撫でてくる。

「……レイラ?……あの?」

背が高く滅多に表情を変えない叔父は、少し驚いたような表情を浮かべながらジロジロと私を見つめてきた。

「レイラよ。あの時の」

叔母とは四年ぶりだし、叔父に至っては私がまだ9歳ぐらいの時に遊んだのが最後だった。

「……………背…伸びたね…」

感心したように優しく撫でてくる叔父を見つめながら私は緩みっぱなしの頬をあげて笑いかけた。

「そろそろ離してあげなさい。レイラ」

笑いながら言ってくる母の声を聞いて初めてずっと叔母に抱きついていることに気がついた。私は言われた通り叔母を抱きしめるのをやめて、2人に話しかける。

「今日泊まつてくの？」

私が期待しながら見つめたからだろう。そんなつもりなどさらさらなさそうだった2人だったが、しよすがなさそうに笑ってくる。

「じゃあ、そうしようかな」

叔母の言葉を聞いた私は、すっかりコインのことこの夏休みが終わったら訪れる出来事も忘れていた。

外はすっかり暗くなり、私の部屋で叔父と叔母にあれやこれやと言つて聞かせた。叔母は大笑いをしてくれて、叔父は紅茶を飲みながら少し頬が緩んでいた。長い間会っていないと話すことも沢山あって、私は休むことなく話を続けた。

話が終わった後は魔法のチェスを叔父の力を借りながら叔母と対戦したり、アルバムを引っ張り出してきた叔母が小さい頃の私と兄の写真を見せてきながら昔話をしてくれたりとのんびりとした時間を過ごしていた。そんなところに突然扉を叩く音が聞こえ、アウラが顔を覗かせ口を開く。

「……セリーヌ様、ご主人様がお呼びになっております。」

「…分かったわ。今いく」

そう言った叔母は今までの表情とは一変し、一瞬叔父の顔を見た気がして何かが引つかかった。

「じゃあ、レイラ。エドに昔のように遊んでもらいなさい。」

すぐにいつも通りの笑みを浮かびながらからかってくる叔母は、アウラの後についていくように部屋から出て行った。

「……………レイラ…読み聞かせでもしてあげようか？」

何か悪巧みをするように口角を上げる叔父は、普段は冗談を言わない人だから少し不気味に聞こえた。

「何を言ってるのよ。そんな歳じゃないわ」

笑いながら言う私を見て、どこか安心したように眉が下がったのがわかった。

「……………ところで…レイラ、兄からこれぐらいのペンダントは貰った？」

指で丸を作り、尋ねてくる叔父の言葉を聞きながら紅茶を一口飲む。

「貰ったわよ。ちよっと前のクリスマスで…それがどうかしたの？」

「いや、……………そうならいいんだ。」

何か誤魔化すように言った叔父はマグカップを傾ける。

……………何か知っている……………

叔父は、あのペンダントの使い方を知っているのかもしれない。そう思ったら、聞かないわけがない。

「ねえ、エド叔父さん？」

「ん？」

「……………何か知ってるの？ペンダントのことについて」

ペンダントとという言葉聞いた一瞬だけ、叔父の体が固まったような気がした。

「…ペンダントの存在は知っているよ。…でも、レイラが期待しているようなことは知らないと思うよ」

表情が変わらない叔父を見ると、何故かセブルスと重なる。

「……そんなことより、好きな人はできたのか？」

タイミングが良すぎて、私は紅茶を吹き出しそうになるのを堪えながら何とか飲み込んだ。

「急にどうしたのよ…らしくない」

「少し気になったただだよ…まあ、その反応だといえるんだね…好きな人」

どこか楽しそうな叔父は余裕そうに、ソファアに深く腰掛けた。

「……きつと素敵な人なんだろうね…レイラが選んだんだから」

素敵…か

微笑んでくるセブルスの顔が浮かんできて、私は無意識に声に出していた。

「……………ええ…そうね…不器用だけど…優しくて…落ち着くの…もつと2人でいたいと思うほど」

自分が何を言っているのかを気づいた時にはもう遅くて、これ以上ないほどにやけている叔父の顔が見えた瞬間恥ずかしくて部屋を出ることしか頭に浮かばなかった。

「ちよつとトイレ!!!」

後ろから何か言ってきたような気がしたが、熱くなっている頬を触りながらとりあえず廊下を歩き進めた。

勿論トイレなんかに行きたいわけもない。少しこの体温の上がつた体を冷やしたくて飛び出してきたただけだ。

恥ずかしさで少し汗をかくほど熱くなった体を冷やすために服を動かし風を送り込みながら歩いていると微かに声が聞こえてくるのに気がついた。

そこは、応接間で扉の奥からは何やら深刻そうな会話が耳に入ってくる。私は扉にゆつくりと近づいて耳を澄ました。

「……………でも……………何のために……………」

「……………分からないが……………本格的に動きだしたと考えるしか……………ない」

「……………身を隠し……………人も……………と……………聞いたわ」

あまりに途切れ途切れで何を話しているのか分からないが、声が叔母と父そして母のものだということは分かった。

「……………方が……………の時は……………」

「……………大丈夫……………分かってる……………エドにも……………伝えたわ」

「……………貴方達は……………大丈夫……………の？」

「……………今の…ところは…」

「……………それでも…一応……………を用意しといた…方がいい」

盗み聞きをしているから、こんなに緊張しているのかどうか自分でも分からない。ただ、冷や汗が背中を伝ったのが分かった。

「……………それにしても…ノアは…こんな時に大丈夫なの？」

「……………心配ない……………あの子が…あそこに行くのも…これで一旦最後になる」

「……………はい…これ…手紙よ……………なんとか無事…終わりそうだと…」

「……………やっぱり…やめといた方がいいんじゃない…」

「……………あの子自身が…望んだことだ……………それを出来るだけ…後押し…する…」

「……………アメリカ……………貴女…は平気……………？」

「…大丈夫よ……………何度も3人で…話し合って…決めたことだから……………ただ…レイラが…これを知った時が心配なの…「レイラ」

突然後ろから聞こえてきた私の名前を呼ぶ声に、心臓は飛び跳ねて体がびくりと反応した。ゆっくりと振り返ると叔父がいつもと変わらない表情で、話しかけてくる。

「……………もうそろそろ…寝る時間だよ…」

怯える小動物を扱うように、叔父は私の頭を優しく撫でると背中を押してきた。

……どういう意味なんだろう？

……ノアは、……ドラゴンの研究に行っていないの？

……叔父は、叔母は、父は、母は、兄は

……何を隠してるの……？

聞けない、聞けるわけがない。

『ただ、レイラがこれを知った時が心配なの』

確かにあの時聞いた声は母のものだった。

私がベッドに潜り込んだのを見た叔父がゆっくりと扉を閉めたのを見届けたが、当然瞼を下ろしても眠れるはずがなかった。

……どこにいるの？……ノア……

兄は今一体どこに行っているのだろう……

私が聞いてはいけないことを聞いてしまったことはきつと確実だ。

すつきりと目を覚めることができるわけもなく、朝一ででないといけなかった叔父と叔母を見送った時に私を安心するように頭を撫でてきた叔父の手の感触は今だに残っていた。

私は溜息をつきながら、机に頬杖をつきぼーと外を眺める。

盗み聞きをした私が悪いのだから聞けるわけもないし、どうせ、父や母に聞いたところで誤魔化されるのだろう。

机の上に今だに積み重なっているコインに視界に入れた瞬間、あんなに重かった私の体は一気に軽くなった。

……コイン!!!どこにやったっけ!?!?

私は慌ててポケットを触ってみるが、昨日着ていた服のポケットに入れたのだからあるはずもなく、アウラの姿を探すために部屋を飛び出した。

「アウラ!!!」

前を歩くアウラは振り返り、いつもの調子で丁寧話してくる。

「何でしょう?お嬢様」

「昨日、私が着ていた服洗った?」

「…いえ、今からするつもりでしたが……」

「お願い。洗う前にここに持ってきて」

焦っている私を見て何か感づいたアウラはすぐに私の服を持ってきてくれた。服のポケットからは案の定一枚のコインが出てきて、安堵の溜息が溢れると全身の力が抜けた。

「…………アウラ…少しお願いがあるんだけど」

座り込んでいる私はアウラと丁度視線合って目を見つめながら私は彼の手にコインを渡す。

「…………これを私の代わりに持つといて。…何かしら反応があったら、私に教えて…あっ…これは誰にも言っちゃダメよ?」

頼まれたことが嬉しいのか、アウラは瞳を輝かせながら元気よく返事をする。

…………もうこれで…無くす心配もないし…

とりあえず一段落したと思いたかったが、

……………もうすぐ夏休みも終わる。

夏休みもあつという間に過ぎて、私はホグワーツに着くなり溜息が溢れた。叔父と叔母に久しぶりに会ったことも、母と2人でゆつくりとお茶をしたのも、一度だつて父に勝てなかつた魔法のチェスを過ごした時間も遠い昔のように感じた。……つい最近、記憶を思い出したような気がしたのに、思い出して今年で3年目だ。

遂にこの年を迎えてしまった。

……全てが狂い始め、すれ違いが始まってしまふ年。

出来れば……帰りたい……

私は、何も考えず平和に過ごしていた夏休みの時間を思い出して心から思った。

組分けも終わり、食事を楽しむ生徒達に紛れながら私は食べる気も失せて頬杖をつきながら溜息ばかりをこぼしていた。溜息しか出てこなかつた。私がいくら悩んでも行動に移さなければ、変わることもない。頭でわかつていても行動に移すなんて私には出来るわけではない。セブルスとエバンズが無事幸せになったら私はどうしたらいいの？

……それだけは、無理だ。セブルスにとってそれが一番の幸せだつてことぐらい十分に分かつてる。

……だけどね

………彼女に取られたくない

これが私の本当の気持ち。ドロドロとした汚くて醜いもの。こんなもの捨てられるのならもうとつくに捨てている。

私は、その日から助けを求めるように本やペンダントを開いて時間を過ごすことが多くなってきた。本に話しかけても何も返ってこないし、ペンダントの使い方だって未だ分からずじまいだ。父に聞いてみてもいざれ分かるよの一点張りで、何も教えてくれない。でもこのペンダントがあると、何故か心が落ち着くのは確かだった。

ハロウィン一色に染まったホグワーツには、ハロウィンを楽しむ生徒達の声で溢れかえっていた。一応お菓子は持つてはいるがあげる相手もないので減る様子もない。

魔法をかけて耳や尻尾を生やしたりと簡単な仮装をしている生徒達もちらほらといて、彼女も例外ではなかった。

「セブ〜トリックオアトリート!」

エバンスの声は本当に耳に入りやすく、私は反射的に声のした方を見てしまった。牝鹿の耳を生やし、セブルスに駆け寄っていた。好きな女の子が獣の耳をつけているだけで、それはそれはもう天使のように見えるのだろう。私の方からはセブルスの顔は見えないが、絶対に真っ赤になって固まっているに違いない。

「早くお菓子ちょうだいよ。じやなきや悪戯しちゃうぞ……なんてね」

笑いながら言うエバンスはセブルスからお菓子を受け取ると、ロボのポケットから取り出した手作りらしきお菓子を彼に渡していた。私は何も見ていない振りをして、その場を立ち去る。最近嫉妬することもなくなった。

それは……心の何処かで、

今年あの2人は、仲が悪くなるんだ。

と安心しきっているからだと思う。

……セブルスにとつての最悪の出来事を本気で止めたいとは思えない私はもう腐ってる。

「いいですか？今日は移動呪文を練習します。呪文はロコモーター、はい皆さん一緒に」

「ロコモーター」

椅子の上に更に分厚い本を重ねてその上に立ちながら、授業を進めるフリットウィックの満足そうな顔を見ながら耳を傾けた。今は私得意な呪文学で、新しい呪文を覚えるのが楽しみで仕方がない。

「よろしい。この呪文を唱えた後に、移動させたい物を言つて移動させたいところへ杖先を向けます。……とりあえず、私がお手本を見せますので見ていてください。」

フリットウィックは、少し咳払いをして慣れた手つきで杖を振る。

「ロコモーター、コップ」

彼の隣の机に置いてあったはずのコップは、生徒の前に移動していた。

「移動させるのはそうですね……じゃあ羽根ペンにしましょうか。さあ、やってみましょう」

フリットウィックの声が教室に響くと一気にそれぞれ呪文を唱える声で騒がしくなる。私は杖を握り、とりあえずフリットウィックの隣にある机に杖を向けて呪文を唱えた。

「ロコモーター、羽根ペン」

周りの生徒たちは、何やら苦戦しているようだったが、私は意外にも簡単にやってのけた。

「おお、皆さん。Ms. ヘルキャットが見事な移動呪文を披露してくれましたよ。スリザリンに5点差し上げましょう」

フリットウィックが褒めてくれたおかげで、私は一気に注目的になりクラス中から軽く睨まれるているであろう視線を感じながら、何も言わずに羽根ペンを自分の元に戻す。

呪文を唱える声で騒がしくなった声を聞きながら、呪文学の教科書をパラパラとめくり、顔を上げる。肩越しから振り返ると上手くいっていないセブルスが見えて、私はゆっくりと立ち上がり彼に近寄った。

フリットウィックは、他の生徒にアドバイスをしていたし、みんな自分のことで精一杯だったから私が移動しても誰も気づかなかった。

「……………もつとしならせない」と

後ろから話しかけると、セブルスはびくりと体を反応させて私の顔を見ると安堵したように肩の力が抜けたのが分かった。

「ほらしっかりと移動させたい場所を指して、はつきりと呪文を唱えるの」

「何度もやっているが、上手くいかないんだからしようがないだろ」

少し不貞腐れた様子でセブルスは、私から視線を逸らす。

「そんなにいじけないで、」

「いじけてなどいない。僕のごことはほつといってくれ。1人でやれる」

……………あつ…言葉の選択を間違ってしまった

さつきよりも怒った様子でセブルスを見て、私はそう思いながら次は必死に言葉を選びながら口に出した。

「貴方にはよく魔法薬でお世話になってるからその借りを返しに来たのよ。……それに、今年はO・W・L試験もあるし、またお世話になろうかなと思って」

私の言葉を聞いたセブルスは、こつちをちらりと見てまた前に視線を戻す。

「少し命令口調をイメージして唱えてみたらどうかしら？……私はそんな感じでやってるから」

「……………ロコモーター、羽根ペン」

私の顔を見て、前を見たセブルスは何故か私の席の机に杖を向けながら呪文を唱えた。自分で呪文を開発してしまうほどの彼が出来ないわけがない。少しアドバイスをしただけで意図も簡単にやってのけてしまった。

「……………やっぱり、凄いわね……」

「何がだ。」

「……………そんなに簡単にできるなんて……貴方に勝てそうにないわ」

魔法も、一人で耐える忍耐も、二重スパイをこなすほどの観察力や、相手を騙すほどの演技力も……自分を平気で犠牲にできるその優しさにも……大切な人の為なら何でもやってのけてしまうその勇氣にも……

私は……やっぱり貴方には勝てっこない。

そんな貴方を、私が本当に助けられるのかな……

自分がどんな顔をして言ってたかは自分でも分からなかったが、ただセブルスの瞳孔が少し大きくなったのだけははつきりと分かった。

彼が私から視線を逸らすように前を向くものだから、どんな表情をしているのかが分からなくなってしまう。自分の席に戻ろうかとした時にセブルスの口から言葉が耳に入ってきた。

「……お前が、助言をしてくれたからできたんだ。……それにお前は呪文学が得意なのだろう？……そんなに自傷的にならなくても、少しは自分に自信を持っていいと思う……」

最後の方になるにつれて声は小さくなって行って、少し聞きづらかった。

「……お前は……僕には……できないことが……できるじゃないか……」

そういつたセブルスは恥ずかしそうで、声は籠っていていたものだからきつと聞こえたのは私だけだろう。そんなことを言ったセブルスを見てみると、普段慣れないことをしてまで私を励まそうとしてくれた姿が可愛くて、嬉しくて、愛しくて、いろんな感情が混ざって自分でも訳が分からない。

「………ありがとう……」

「何を言ってるんだ……僕はお礼を言われるようなことはしていない」

聞こえないだろうと思ったのだが、どうやらはつきりと聞こえたらしいセブルスは私の方を見て当たり前前のように言い返してくる。

………でもね……セブルス……貴方も

……私ができないことをいとも簡単にやってのけてしまうじゃない。

憎い人と最愛の人の間に生まれた子供を、誰からも認められずに、

誤解されたまま命をかけて守るなんて簡単なことじゃない。

…私は絶対にできない。

自分を犠牲にして、最愛な人が残した子供を守る？無理に決まってる。誰にも認められずあんな板挟みになっていたら私だったら確実に闇に堕ちてるだろう。

自分の席に戻った私は、頬杖をつきながら今年あるO・W・L試験に出そうな呪文をヒントを言うように説明するフリットウィックの声を聞き流す。

……………このまま大人にならずずっと学生のままだったらどれほど良かっただろう…

……………そしたら…こんなに悩むこともないのに…

なんで……………私は記憶を思い出したんだろう…

そう考えてしまえば、自然とセブルスが死ぬ映像が頭に流れ始める。消し去るように瞼を下ろして、唇を噛み締めても、消えるどころか鮮明になって、彼の口がゆっくりと動く。

『……………僕を…見て……………くれ…』

もう耐えきれなくなった私は両手で顔を隠した。

…やめて……………もう分かったから。もう嫌なほど何回も何回も見たから。

私じゃいけないことも分かったから!!!

だから……もう、やめて。

頭から映像が綺麗に消え去ると、耳に足音と生徒達の私語が一気に入ってくる。ゆっくりと顔を上げると、どうやら授業が終わったようで生徒達が教室から出て行っていた。

教科書と羊皮紙を重ねてその上に羽根ペンを置き立ち上がろうとすると、頭の上から少し心配そうな声が聞こえてきた。

「……………大丈夫か?……………」

少し低く落ち着きのあるその声は、顔を見なくても誰のものかすぐに分かった。顔を上げると案の定前に立っているのは、セブルスで私は素っ気なく返す。

「…大丈夫、少し考え事をしていただけだから」

いつもだったら、少しでも目に焼き付けるためにセブルスを見つめるし、少しでも2人の会話が長続きするように頑張って言葉を選ぶのだが、今はそんなことできない。

今、1秒でも長く見ていたら直ぐにでもまた彼が死ぬ映像が流れそうで怖かった。

怖い気持ちを抑えて、平然を装って答えたつもりだったが何やら焦った様子のセブルスは私の腕を握ると、教室から連れ出した。

あまりに突然なことにどう言ってもいいかも分からず私は少し転びそうになりながら必死に彼の後を追った。

「……………急にどうしたの…ねえ…」

少し控えめ気味に声をかけてはみたが、前にいるセブルスは何も答えずにただすたすと少し早歩きで先を急ぐ。セブルスの手には、い

つの間にとったのか知らないが私の教科書や羊皮紙まであつて重くないのか少し心配なりながら、今は彼の後ろ姿を見つめた。

スリザリン色のローブに肩上まである髪先はまるで踊っているように揺れている。セブルスに握られている右手を見ると、心臓が緊張したように早く動きだして、体温が高くなったからなのか少し視界が歪んだ。

本当に私ばかり……こんなに緊張して……

………本当に……ずるい

ただ前にいるだけ、ただ手を握られているだけ、ただ彼の香りが香ってくるだけ、ただ暖かい体温が温もりが伝わってくるだけなのに、

ただ廊下ですれ違っただけの時も、ただ少し話した時も、………ただ貴方が幸せそうに笑っている顔を見ただけで

その度に、胸が暖かくなって、愛しくなって、苦しくなるの。

涙が出てきそうになって、必死に堪えながら下を俯くと今一番聞きたくない声が耳に入ってくる。

「あっ！セブ!!!」

「………リリー」

顔を上げなくてもだんだんと音が大きくなっていく足音が聞こえて誰の声なのかは見なくても分かった。足を止めたセブルスが呟いた声はつきりと聞こえたと思うと、彼女の後を追いかけるように数人の足音もだんだんと近づいてきた。

「エバンズく……って、スニベルスじゃないか」

陽気な声が聞こえて、少し視線を上げるとエバンズとポッター、ブラック、ルーピンにペティグリューの姿が見えたが、何故か目の前の視界がぼやけたり、元に戻ったりを繰り返して頭が重く感じた。「今、お前に構っている暇などないんだ。今すぐにそこを退け。」

廊下を塞ぐように立っていたポッターに言うセブルスはどこか、焦っているような声だった。

……一体、何をさつきからそんなに焦っているんだろう……

「……セブルス、どうしたの？そんなに慌てて。」

「どうか、何で手なんか繋いでいるんだよ。まさかそういう関係なのか？」

エバンズに被せるようにいうブラックの言葉を聞いて、彼の体が固まり、私の手を握る力が強くなったような気がした。

「……違おうわよ……貴方が期待しているような関係じゃない……」

重たい口を開き、セブルスの代わりに訂正を入れておく。

……早く否定すればいいのに……

何を思ったのか、セブルスは否定する素振りも見せなかった。

……まあ……彼のことだ。

……あまりこういうことに慣れていないから、動転したんだろう。

……すぐに否定してほしかったな……

じゃないと……期待してしまう……

「……貴女……大丈夫？……顔色が良くないわよ」

「……えっ……？」

エバンズが私の顔を深刻そうに見ながら言ってくるものだから、ついつい声がこぼれ落ちた。

「……大丈夫、今から医務室に連れて行くから」

「……何を……言ってるの？……私は元気よ？」

セブルスが医務室に連れて行くなど訳の分からないことを言い出したから、私が口を挟むと彼は私の方を見てきた。

「そんな顔色で元気なわけないだろ？真っ青を通り越して真っ白だぞ？」

「……真っ白？……何言ってる……」

セブルスが言っている意味を理解するには少し時間がかかって、顔を上げると目が合ったルーピンは心配そうに見つめてくる。

「……とりあえず……僕は、……医務室に……連れて行くよ……」

「ええ……その方が……いいわ……」

何故か、聞こえてくる会話が途切れ途切れに聞こえて、視界が大きく歪みだした。

体が異常に熱いことに気づいた時にはもう遅く、セブルスが優しく引っ張ってきたが脚が動かなかった。

自覚してしまうと途端に怠くなるもので、頭は重く痛みだし、体は力が入らなくなつて自然と体が倒れると誰かが抱きかかえてくれる。

「……大丈夫☒……熱がある…ポツター！誰でもいいから…先生を…呼んで……」

耳元で聞こえる声がだんだんと遠くなっていき、私は途端に恐怖に襲われた。

このまま、眠ってしまったら永遠に独りになってしまいそうで、セブルスにも会えなくなってしまう気がして、怖くて、怖くて、私を抱きかかえてくれている人のローブをぎゅっと握りしめていた。

すると、優しく、どこかぎこちない手が私を安心させるように頭を撫でてくる。

「……大丈夫…寝てしまえ……楽になる」

意識が途切れる瞬間に聞いたその声はとても落ち着くものだった。

重たい瞼を開け、体を起こすとまだ体は怠くて頭が痛みだす。痛む頭を抱えながら、周りを見ると、どうやら医務室のようだった。

「あら、目が覚めたんですね。あつ、起き上がったては駄目ですよ」

私が起きたことに気づいたマダムは、何やら苦そうな薬が入ったゴブレットを渡してきた。

「ほら、これを飲んでもう一眠りしてしまいなさい。」

恐る恐る薬を飲むと案の定苦くて、飲み込むのを体が拒絶してくるが何とか飲み込む。あんなに怠かった体が急に軽くなったと思うと、また眠気が襲ってきて自然と眠りに落ちていった。

どこまでも闇が続いているその道の真ん中に立っている私の髪が風で宙を舞って、顔に当たってくる。

ゆつくりと顔を上げると、緑色のローブを身に纏っている後ろ姿が目に入ってきた。肩まである髪が風で靡いている。

……セブルス：

ゆつくりと私の方を見てくるセブルスは、眉を下げて微笑んでくる。今にも消えてしまいそうな笑みを浮かべてくる彼はゆつくりと姿を変えた。緑色のローブも真っ黒なローブに変わり、少し歳をとったセブルスが相変わらず私に微笑んでくる。

彼の足元にできた血溜まりには百合の花が浮いていて、それを見た瞬間私の手に嫌な感触がしたのを感じた。自分の手を見てみると赤黒い血がべつとりとついていて、すぐに誰のものなのかがわかった。

「……駄目……セブルス……」

私は小さな声を出しながら、前にいるセブルスにゆつくりと近づく。彼は私が近づこうとすると、前を向いて歩き出す。セブルスは先が見えないほどの闇に向かって歩き進める。

「駄目よ……セブルス……」

いくら声を呟いても、声は届かなくて彼はだんだんと小さくなっていく。私がいくら走っても距離が縮まるどころか広がっていくばかりだ。

「セブルス!!!そっちに行っては駄目!」

手を伸ばし、涙で目の前がぼやけながら叫んでもセブルスは私の方を振り返ってくれなかった。

届かない。

いくら声を張り上げても、いくら手を伸ばしても、いくら貴方の名前を呼び叫んでも、

私じゃ届かない。

……気づいてくれない。

キーンという耳鳴りがしたと思うと目の前のが白の絵の具で塗り潰されたかのように、何も見えなくなった。

「……………良かった…顔色は良さそうね…」

遠くから明るい声が聞こえてくる。

「……………セブ…起こしちや悪いし…もう行きましよう」

誰かに優しく話しかける声が耳に入ってくると、私は少し瞼を開けた。夢なのか、何なのか分からなくなっている私の前をゆっくりと遠ざかっていくスリザリン色のローブが目に入った。

すると当然のようにさっきの光景が蘇ってくるわけで、今遠ざかっていくローブを着ているのがセブルスだと勝手に決めつけて、彼を行かせてはならないという思いに駆られた。

…駄目……………セブルスを行かせたら…

お願い……………そっちは駄目なの……………

セブルス……死なないで……

靡くローブの裾に手を伸ばし、何とか掴むと口を開く。

「……………行かな……いで……………」

なんとかうつすらと開けていた瞼も落ちてきて、逆らうことなんてできることなくまた眠りに自然と落ちた。

次目が覚めた時には、もう日が昇っていて、マダムから今はお昼だと聞かされた。そんなに寝ていたこと自体に驚きだが、体も軽いしもう頭の痛くないから良しとした。マダムから無理は禁物だと言い聞かせられて、やっと解放された私は、セブルスの姿を探すためにとりあえず寮に戻る。

私が最後に覚えているのは、彼が無理矢理でも医務室に連れて行くとうと手を引っ張っていたところまでだ。

……………お礼を言わないと……

ところが寮にも、図書館にも、大広間にもどんなに探しても見当たらない。

……どこにいるんだろう……

外を見ると、雲ひとつない快晴の空が広がっていた。

……外かな……

静かに本を読みたいと考えたと、やっぱり……あそこかな……

あまり行きたくないその場所に向かうと案の定、湖の側にある木にもたれ、少しうとうとしながら本を読んでいた。

ゆっくり近づくと、私が声をかける前に気づいたセブルスが顔を上げて口を開く。

「……………もう……平気なのか?……」

「……………ええ……おかげ様で」

鼓動が早くなる心臓は今にも爆発してしまいそうで、また熱が出そうだ。

彼の隣には腰掛ける勇気がない私は、セブルスがもたれている木に私をもたれるように座った。

「……………倒れるまで、無理をするなんて僕には分からないな」

本を見ながら言ってくるセブルスは、私を心配して言ってくれているのか全然ページをめくっていなかった。

「……………貴方もよ」

「僕のことじゃなくて、自分の心配をしろ」

顔を見ながら話せなくてもこんな何気ない会話が幸せで、ゆっくり空を見上げた。

「……………魔法薬の課題…終わってないんだけど、手伝ってくれない?」

「……………ああ……………」

素っ気なく返ってきた返事でも、今2人つきりで要られていることが嬉しかった。

…セブルスの側にいるだけなのに、なんでこんなに居心地がいいのだろう…

なんでこんなに…落ち着くのかな…………

相変わらず本を読んでいるセブルスの横顔に視線を移すと、真剣な眼差しで文章を目で追っていた。

……………貴方に幸せになってもらうことが私の幸せになるのかな

…

どんなに愛しく思っている貴方の笑顔を見ていられるのならそれで幸せ?

なんて綺麗事ばかり並べても私には無理なの。

貴方が幸せそうに笑っている隣にいるのは、私じゃなくて、彼女なんでしょう?

それが貴方の幸せなんですよ?

貴方の幸せは私にとって受け入れたくないものだから：

私は貴方ほど優しくも強くもないから：

だから：自分を犠牲になんてできないの：

そんな勇気もないの……………

貴方の笑顔は守りたい、だけど彼女と幸せになっほしくない。

私わがまますぎていることぐらい分かつてる。望みすぎていることぐらい分かつてる。

…だけどまだ答えが出ない。

私はまだ、迷ってる。

結局私はお礼を言うことが出来なかつた。

雪がちらちらと降り出して、一気にクリスマスの雰囲気为学校を包みだす。もうすっかり冷えて、温もりが恋しい季節がやってきた。私は今年のクリスマス休暇は、家に帰らずにホグワーツに残った。……ただ、セブルスの側にいれるような感覚に襲われる学校に残っていたかっただけだ。

クリスマスパーティーに行く前に私は引き出しにしまっていた髪留めを手に取り、少し考え込む。いつかのクリスマスプレゼントで、母からもらったものだ。……少し大人すぎるその髪留めは、私には似合わないわなくてずつとつけていない。

……こんな時ぐらい……いいかな……

私は、髪留めを耳の上あたりで止めて少しドキドキしながら、大広間に向かった。別に変わる事なんてない。似合ってるねつとお世辞でも言ってくれる友達なんていないし、きつと皆私のことなどどうでもいいに違いない。

だから、食事を終える頃には自分でも髪留めをつけていること自体忘れていた。

食事も食べ終わって談話室でゆったりと時間を過ごして、部屋に戻

ろうとした時に私は読んでいた本を忘れたことに気づいて取りに帰るために振り向いた。

談話室にはもう誰もいないと思っていたのだが、どうやら本を読み終えた様子のセブルスと鉢合わせしてしまった。私が忘れた本を手にとって帰ろうかと思つた矢先、セブルスの方から呼び止めるように話しかけてきた。

「…あつ…その…髪留め…」

振り向くと、セブルスが不思議そうに自分の耳上らへんをトントンと触つて聞いてきた。

「…あつ少し前…母からもらつたものなの…」

私は不安になって隠すように、髪留めを触りながら答えた。もし似合わないなんて思われていたらどうしようという不安がどつと押し寄せてきて、今すぐ外したいという衝動に駆られるが、思いがけのない言葉が聞こえて私の思考は停止する。

「……………似合つてる……………それ…」

セブルスにとっては何ともない言葉だと思うが、私にとっては嬉しくて嬉しくて、泣きそうになりそうなものだった。

セブルスは優しく微笑むと、いつも通りおやすみなんて言わずに部屋に戻っていく。

セブルスの表情といい、言葉といい、とにかく彼のせいで私はいつときその場を立ち尽くすしかなかった。セブルスは、どれほど私を好

きにさせれば気がすむのだろう。

…意図的にじゃなくて、無意識のうちにやっているのだから更に夕チが悪い。

『……………似合ってる……………それ…』

何度もさつき言われた言葉とセブルスの表情が再生される度に心臓の鼓動は早くなり、体は熱を帯びた。再び髪留めに触れて、私はにやけが止まらなくなる。

「似合ってる……………か…」

嬉しくなった私は、にやけたまま部屋に戻った。

単純な私は、その日から髪留めを同じところにするようになった。

もう歩き慣れた廊下を歩いていると、突然風が吹き込んできて、髪の毛が顔の前で舞い上がりまるで黒いカーテンが目の前に遮ったように視界を遮った。鬱陶しく思いながら、風で舞う髪を耳にかけ、落としそうになる本をしつかりも持ち直しふと顔を上げると、まるで映画のワンシーンを見ているようにゆっくりに感じた。

少し先にいる、彼女の赤髪が舞い上がりまるで2人を包み込んでいくるように綺麗に宙を流れる様子がスローモーションのようによつ

りと目に入る。セブルスの黒い髪も一緒に溶け込むかのように風で舞い、エバンスの髪と彼の髪はまるで見えない赤い糸を表しているかのように絡まった。

ただ、風で舞い上がった髪を見ただけだというのに、私の心臓は苦しいほどに締め付けられる。

風が止み、ゆつくりと髪が大人しくなると、太陽のような笑顔を浮かべる彼女と、そんな笑顔を見て、幸せそうな笑みを浮かべるセブルスが目に入った。

あまりに苦しくて私は胸の所を皺ができるんじゃないかと思うぐらいに握りしめて、歯を食いしばる。

……お願い……やめて……セブルス

……彼女に、……エバンスにそんな笑みを

……私が知らない顔を見せないで

ゆつくりと小さくなっていく2人を見て私は何かに耐えるように俯いて瞼を下ろした。

エバンスがみんなを暖かく包み込む太陽だとしたら、セブルスはきつと真つ暗な闇を連れてくる夜が似合う。

真つ暗な夜は、少し周りが見えなくて1人になりそうで怖い。でもだからこそ、普段無理して笑っている人も、大丈夫だと嘘ついている人も、人前で泣けない人もみんな人目を気にせずに大声で泣くことが

できる。自分の弱みを見せて、辛い事も苦しい事も吐き出して、そして太陽が昇る朝を迎えてまた1日を生きる。

優しく、それぞれの人の悲しみも苦しみも溶かしてくれるような真つ暗な闇が、夜が似合う人なんてセブルスしかないだろう。

太陽は、始まりを教えてください。

夜は、終わりを教えてください。

……だから、彼女じゃなくてもいいじゃない

真つ暗な夜に煌々と輝く太陽なんて必要ないでしょ？

夜には、月明かりで十分でしょ？

ねえ…セブルス…彼女じゃなくて、

私の側にいてよ…

私に笑いかけて、私を抱きしめて、私の名前を呼んで、

……お願い、私を見て…

私は溢れ出てくる自分の感情を飲み込むように口元を押さえて、喉を上下に動かした。行き交う生徒達に紛れ込むように、止まっていた足を動かして、ゆっくりと歩き進める。

………やっぱり…無理だ……

セブルスとエバンズが幸せになる姿を見るなんて、私には耐えきれない。

「……だって、夜に太陽なんて必要ないじゃない」

私の呟いた声なんて誰にも届く事もなく消えていき、胸の痛みは消えていくばかりか増していくばかりだった。

今年にO・W・L試験を控えている私達に各教科の先生達はすごい量の課題を出していった。みんなでまだ何ヶ月も先だと抗議しても聞く耳も持たずに、減るところか増えるばかりだ。だからそれから、ほぼ毎日課題に追われる日々を送っていた。課題をしていたら、O・W・L試験が終わっておこる事を少しは忘れることが出来たので私は有り難かった。

イースト休暇を迎えてしまつたら、その後すぐに寮監の先生と進路相談が待っていた。働く気など全くなく、家を継ぐとだけ適当に答えて受け流した。

それからは授業を受けてその度に課題を出され、ご飯を食べて、貴重な自由時間は課題に追われるという毎日を過ごしていた。少しずつ、O・W・L試験が近づくにつれて課題の量もどんどん増えていき、生徒達の中でも緊張感が流れ始めていた。…これは今後の進路に關係してくるものだし、こうなるのもしょうがないかと思ひながら私は羊皮紙に向き合つた。

どんなに教科書をめくつて調べても、分からないことがあつた私は少し気が進まなかつたが魔法薬の教科書を抱えながら談話室で勉強していたセブルスに聞くことにした。耳に髪をかけて、羊皮紙と教科書を交互に見ながら羽根ペンを動かすセブルスはいつも以上に話しかけづらかつたが、私は何とか勇気を振り絞つて話しかける。

「……本当に…申し訳ないんだけど…」

私の声を聞いたセブルスは表情を変えず、耳に髪をかけたまま見てくる。

「……、教えてくれない？どうしても分からなくて」

セブルスは何も言わずに机にのつてあつた教科書を退けてくれた。きつと隣に座れという意味だろう。私は、少しドキドキしながらセブルスの隣に座つて説明する彼の声を聞きながら羊皮紙に簡単に書き込む。

説明を続けるセブルスの横顔を見た瞬間、私の胸が暖かくなつたの

が分かった。

自分も課題かテスト勉強をしていたはずなのに、嫌な顔ひとつみせずには教えてくれるセブルスは本当に優しい。

……どうして……みんな気づかないのかな……

そう思うほど、誰よりも優しく温かい人なのに。

「……聞いてるか？」

私があまりにぼんやりしていたからだろう。セブルスが少し険しい顔をしながら問いかけてきた。

「……ええ、ありがとう。助かったわ」

お礼を言っただけで立ち去ろうとすると、今度は彼の方から教科書を取り出して私を呼び止めた。

「……ちよつと……こだけ教えてくれないか？」

セブルスに頼られることなんてなかった私は、少し戸惑ったがすぐに嬉しい気持ちの方が敬ってにやけそうになるのを必死に堪えながら隣に腰掛ける。

「勿論よ。」

こうしていると、これからくることなんて少し忘れることができそう、何よりセブルスの隣に居られている今この時が幸せだった。

もう少しだけ……もう少しだけ……このままできさせて……

心の中でどんなに願っても時間が止まることなんてあるわけがな

い。だけど願ってはいられなかった。

O・W・L試験まであと1週間にもなると、やっぱり課題だけではどうも不安になって、試験勉強を生まれて初めてした。：学年末試験は、ずっと課題を終わらせるだけで済ましていたから、勉強のやり方をつかむ頃にはもうO・W・L試験を迎えてしまっていた。

私は、試験のあの雰囲気が苦手だ。静まり返ってペンを落としただけでも目立ってしまうようなあの地獄のような空間。

大広間に全ての寮の5年生が集められて、一定の間隔で机が並べられて羊皮紙に向かっていた。今は闇の魔術に対する防衛術のテストの真っ最中だ。あれだけ課題を出されれば意外と覚えているものですらすらと引っかかることなく羽根ペンを走らせることができた。

試験が2週間続くなんて考えるだけで恐ろしかったが、それもあとこれが終われば、変身術だけで終わるのだ。

私はびっしりと書いた羊皮紙を眺めながら、羽根ペンを置き、息を吐いた。首も手も疲れて早く寝たいと思いつつながら、見直すこともせず頬杖をつくつと、ずっと目を背けていたことを思い出した。

……ああ……この後だ……そうだ、

この後にあの出来事が起こってしまう……

私は、全身から嫌な汗が流れるのを感じながら、深い溜息をついて目を閉じた。

どんなに頑張っても、私には無理だ。

止める勇気なんてない。出来っこない。

「あと五分!!!」

フリットウィツクの声で、我に返った私は前を向いてもう考えないことにした。五分なんてあつという間で、またフリットウィツクの耳に響く声が聞こえてきた。

「はい、羽根ペンを置いてー!」

私は、答案羊皮紙を前の方に出して彼が呪文を唱えるのを待った。フリットウィツクは、1人の生徒を軽く注意して、席を立とうとする何人かに呼びかける。

「答案羊皮紙を集める間、席を立たないように!」 アクシオ!」

体の小さいフリットウィツクの両腕に大量の羊皮紙が何とか収まったのが奇跡ぐらいだ。前に座っていた何人かの生徒達が反動で吹き飛んだフリットウィツクを助け起こすと、大広間は大きな笑い声に包まれた。今の私に笑っている余裕なんてあるはずもなく、ただ前を見ながらこれから起こることを思い出しローブを握りしめる。

「……ありがとう……さあ、みなさん、出てよろしい!」

その言葉に試験から解放された生徒達が声をあげながら大広間からぞろぞろと出ていく。ちらつとセブルスの方を見ると、試験問題用紙をじつと見ながら、扉へと向かっていつているところだった。

ポッター達が何かを楽しそうに話しながら、大広間を出て行くと、セブルスはまだ試験問題用紙に没頭しながら、後をつけるように歩いていた。

私は、まるで吸い込まれるように自然と彼らの後をつけていた。

今少し先を歩いているセブルスがポッター達と同じ方向じゃなくて、他の方へ進んでくれることを少し祈りながら、後をつけたが、そんな願いなど叶うことなかった。

湖に向かって芝生を歩くポッター達と全く同じ方向へと歩くセブルスを見て、私の鼓動は早くなっていく。私が思い出した記憶通りだ。

4人は湖の側にあるブナの木の木陰に入るように腰掛けて、ポッターは周りに見せびらかすようにスニッチで遊びだし、ルーピンは本を取り出して読み始め、ブラックははしゃいでいる生徒達を退屈そうに見つめていた。ペティグリューは、ポッターのスニッチの扱いを見て1人盛り上がっていた。

相変わらず試験問題用紙とにらめっこをしているセブルスは、灌木の茂みの陰に隠れるように腰下ろしていた。私は、変に目立たないようにと隠れることはせずはしゃいでいる生徒達に紛れるように近くの木の木陰に腰を下ろした。

セブルスをじつと見てみると、自然と湖の近くで休むように腰掛けていたエバンズが目に入り、私は無意識のうちにローブの中の杖を握りしめていた。彼が試験問題用紙をカバンにしまいだして、芝生を歩き始めると、自分の心臓が激しく動き出す。緊張で口の中は潤いなんてものは存在していない。

………お願い……このまま何も起きないで……

そんなことを思っても叶うことなくポッターとブラックは当然のようにセブルスへと近づき、ルーピンとペティグリューは座ったままだった。わくわくした表情を浮かべるペティグリューを見て、今すぐにあいつを殺してやりたい衝動に駆られたがぐつと堪える。

「スニベルス、元気か？」

わざと大声で話しかけてきたポッターを見た瞬間セブルスは、素早く反応して持っていたカバンを放り投げ、ローブから杖を取り出して振り上げるが、ポッターが叫んだ声が聞こえてきた。

「エクスペリアームス！」

セブルスの手から杖は3メートルほど宙を飛んで、後ろに落ちる。セブルスは、振り返って弾き飛ばされた自分の杖を拾おうとするが、息のあったブラックの呪文でそれも叶うことはなかった。

「インペディメンター！」

跳ね飛ばされたセブルスは、どこか苦しそうに地面に横たわっている。

周りにいた生徒たちはぞろぞろと集まり、近づいていった。心配そうにしている者もいたが殆どは面白がっている様子だった。

今だったらまだ間に合う……まだ今だったら！

そう思っても私の体は固まったままで、息をするのも忘れていた。

この距離だと会話も聞こえないし、周りにいる生徒達で中の様子も分からない。少し笑いが起きると、足元の隙間から動くことのできな
いセブルスがポッターを睨みながら声を張り上げているのが見えた。

「憶えてろ!!!」

私はもう見るに耐えなくなつて目を閉じたが、またすぐにポッターの呪文をかける声が聞こえてくる。

「スコージファイ！」

反射的に目を開くとセブルスの口から、ピンクの何かが吹き出して

苦しそうに吐き咽せている姿が目映った。

「やめなさい!!!」

いつもの通り、エバンズが赤毛をなびかせながら、ポッターの空いている方の手を握って止めに入る。そうここまではいつも通り。こんな光景は何度も何度も目にしてきた。でも今回だけは訳が違う。心臓の鼓動は速度を増すばかりで、唇を噛み締めた。

ポッターが振り返ってエバンズと何か話すのを見て、私は杖を握る手の力を強めた。

「……彼に構わないで!」

彼女の最後の言葉だけはつきりと耳に入り、私は顔を歪めた。ポッターがエバンズにすかさず何を提案するようにいつている後ろで、セブルスは口から泡を吐き出しながら杖に向かって這っていた。

「おっと!」

ブラツクの声が聞こえたと思えば、セブルスは握っている杖の先をポッターに向けて、閃光が走り、ポッターの頬がぱっくり割れて血が滴り落ちる。

ポッターの顔は、冷静だった。冷静でそれで華麗に振り返ると、彼の杖の先から閃光が走る。：セブルスよりかポッターの方が魔術に長けていることぐらいこれを見ればすぐに分かった。

セブルスが空中に逆さまに浮かぶと、ローブが顔に覆い被さり、瘦せた青白い両足も灰色のパンツも剥き出しになる。周りにいた生徒達は囁し立て出して、私とエバンズ、ルーピン以外は大笑いしだした。反射的に立ち上がろうとする私の体は、脳裏にあることが浮かんで動けなくなる。

……もしここで私が止めに入ったら、

もしセブルスとエバンズの仲が引き裂かれなかったら……

セブルスは彼女とどうなるの…

「下ろしなさい!!!」

急に聞こえた大声に私は我に返り、彼らに視線を移した。

セブルスを庇うためにポッターに声を張り上げるエバンスの声が耳に入ってくる。

……それに…物語が変わったら確実にセブルスを救うこともできなくなる

……ハリーが生まれなかったら誰があの人を消滅させるの……

そうよ…これはしようがない、しようがないことなの。

私は、罪悪感が押し寄せてきていた自分に言い聞かせるように何度も唱えながら何もせずに彼らを見つめた。

ポッターは素直に従い、地面に落ちたセブルスは、素早く立ち上がって彼らに杖を構えたが、相手は1人じゃない。2人だ。勝てるはずもなくブラックが呪文を唱えた。

「ペトリフィカストタルス!」

セブルスの体は石になったように、固まるとまた芝生の上に転倒する。

「彼に構わないでって言うているでしょ!」

私がぐるぐると考えている間にも時間は容赦なく進み、あの瞬間が少しずつ確実に近づいていた。

無理だ…私は止められない。できないよ。

怖い………2人が結ばれてしまうのが…

怖くて仕方がない。

今まで以上に大声をだして、エバンズは杖を取り出して彼らに向ける。

私はもうこの先に起こることを直視したくなくて両耳を抑えながら目を閉じた。涙が出てきそうになつてぎゅつと力強く瞑る。

両耳を塞いでもエバンズの声は微かに聞こえてきた。

「それなら呪いをときなさい!!!!!!」

この先の言葉を聞くのが怖くて怖くて、両耳を抑える手は、もう耳を千切つてしまふんじゃないかと思うほど爪が耳の裏に食い込むほど力を入れていた。

何も聞こえなくなり、目をゆつくりと開けると人波の間から、丁度セブルスの表情が見えた。

：悔しそうに、恥ずかしそうに唇を噛み締めてうつすらと瞳に涙の膜をつくつているような姿が目に入ると、一瞬だけ時間が止まったように感じた。

気づけば、耳を塞ぐのをやめていた私は少し前のめりになる。静かになったその場にポッターのからかうような声が聞こえてきた。

「ほーら、スニベルス、エバンズが居合わせて、ラッキーだったな」

その瞬間私の頭には、魔法薬を教えてくださいとくれるセブルス、真剣に本を読む横顔、エバンズの隣で幸せそうに笑う彼が、私に微笑んでくるセブルスが、今まで見た彼の表情が走馬灯のように駆け巡ってきた。

それを見た瞬間に私の体は意思とは反対に勝手に動き、立ち上がった

て駆け出そうとしていた。

……私はなんて馬鹿なんだろう…

セブルスが……苦しむことになるのが1番私にとって辛いことじゃないか…

なんで、なんで、今まで気づかなかったんだろう…

……もういい…2人が幸せになっていいから。

しょうがないことだと言い聞かせて、あんなの綺麗な事をただ並べたところで、何も変わらない。

もういい…もうどうなってもいい…

セブルスとエバンズが幸せになってもいいから、

これ以上セブルスにあんな表情をさせたくない。見たくない。

だから、お願いだから!!!

間に合って
!!!!!!

もう走つても間に合わないと思った私は、立ち上がっているセブルスに杖を向けて振ろうと構える。少し震えているせいで正確に定まらなくて、視界がぼやけた。少し遠くにいるセブルスを定めて、私は早くなる心臓の音を全身で感じながら、呪文を唱えようと口を開いたが、遅すぎた。

私が覚悟を決め行動に移すのも、セブルスの苦しい姿を見るのが一番辛くて悲しいことに気づくことも何もかもが遅すぎた。：覚悟を決めて彼に魔法をかけようとしたが結局間に合わず彼は一生後悔してしまうことを意図も簡単に口にしてしまった。

「あんな汚らしい穢れた血の助けなんか、必要ない!!!!!!」

その場の空気は凍りついたように、ひやりと冷えると時が止まったかのように誰も息なんてしなかったと思うほど静まり返った。

どこからどう見ても、好きな女の子にこんな恥ずかしい姿を見られてしまったことへの悔しさから出た言葉だった。それなのに、エバンズは、瞬きをすると冷静に淡々と言い出す。：いや：私が彼女を責める資格なんてどこにあるんだ。

「結構よ、これからは邪魔しないわ。それにスニベルス。パンツは洗濯したほうがいいわね」

セブルスのことをスニベルスと呼ぶエバンズの後ろ姿が、どこか悲しそうに見えた。：自分が後から後悔してしまうようなことを言ってしまったことに気づいたセブルスは、いつもに増して顔色がないのがこの距離でも分かる。

それでも、セブルスには彼女の声しか届かない事ぐらいよく知っていたし、彼女だけが最後の頼りだった。

……………お願い：：気づいて：：エバンズ!!!

私は目頭が熱くなるのを感じながら少しずつ彼らに近づく。どうしてこういう時に口から出ないんだらうか。どうしてこんなことも言えないほど勇気がないのだらう。

さっき間に合わなかったのも私がセブルスに対して魔法をかける勇気がなかったからだ。

あの時、彼に魔法をかける勇気があれば…今ごろ

「エバンズに謝れ!!」

ポッターがセブルスに杖を突きつけて声を張り上げると、エバンズの声が重なるように響く。

「貴方からスネイプに謝れなんて言って欲しくないわ、貴方もスネイプと同罪よ」

「えっ?…僕は一度も君のこと!」

吠えるポッターに冷静に淡々と理由を話すエバンズの声なんてもう耳に入ってこなかった。最後に聞こえたのは、酷い言葉だった。

「貴方を見ていると吐き気がするわ!!」

そう言つて足早にその場を立ち去っていくエバンズを目で追つて、私は杖を力強く握りしめた。ポッターが去っていくエバンズの後ろ姿から名前を叫ぶが振り返ることはなかった。ポッターは、腹いせにまたセブルスを宙づりにする。

「誰か、僕がスニベリーのパンツを脱がせるのを見たいやつはいるか?」

私は杖を取り出して、彼らの背後に杖を向けていた。閃光はポッターの頬を掠め、少し切り傷を作ると血が滲み出した。楽しみを邪魔されたからだろう。苛ついているような表情をしながら、振り返ってくる。

「……彼を……セブルスを今すぐに解放して」

「……残念ながら…さつきは相手がエバンズだったからね、君の頼み

なんて聞きたくもないね」

私は、2人を睨みつけながら杖を構えた。

「……………頼んでなんかない…私は命令しているんだけど」

私の言葉に2人は少し笑いをこぼす。…きっと彼らからしたら、女の子1人相手に負ける気なんてさらさらないのでろう。

「……………聞こえなかった？早く降ろせと言っているの」

自分でも驚くほど、低い声が出てその場の空気がまるで今から殺し合いが始めるんじゃないかと思うほど静まり返ってポッターとブラックが睨んでくる。杖を2人に向かって振るが、意図も簡単に防がれてしまう。

どつちからの杖を奪うことができればいいのだが、何せ杖を扱うのが上手い2人を相手にしているのだから奪うこともできなければ押されてばかりだ。2人は防御魔法だけを使って私を少しずつ追い込んでいく。

一瞬の隙も見せない2人に私は苦戦して、あがった息を整えるために攻撃をやめる。

すると何を考えたのかポッターは、浮いているセブルスを地面を下ろし、ブラックは素早く彼に杖を向け呪文を唱えた。

「インペディメンター！」

まるで何かに地面と縛られたように動けなくなったセブルスは、苦しそうな表情を浮かべてもがきだした。

「…女の子に魔法をかけるのはあまり乗り気しないんだけど、まあしょうがない。」

ポッターは、ブラックに何か目配せをして2人は私に杖を向けてきた。

「……乗り気がしないなんてよくそんな嘘をつけるわね……」

私の言葉に、ポッターは楽しそうに口角を上げて何か呪文を唱えようと口を開いた瞬間に私は呪文を叫んだ。

「プロテゴ!!!」

透明の壁があるように私を守ってくれて、私は2人に杖を向けて振り続ける。

「へえ〜やるじゃん」

ブラックは簡単に私の攻撃を防ぎながら楽しそうに声を出した。私は、正直言って余裕がなかった。2人からの攻撃を防げているのも奇跡に近いし、何だったらさつきから防御魔法を使う事で精一杯だ。

「やめろ!!!」
「!!!」

声が出た方に視線を移すと、声を張り上げたのはセブルスだった。セブルスはポッターやブラックを睨みながら、歯を食いしばっている。

「どうしたんだスニベルス大声なんか出して」

ポッターは馬鹿にしたように言いながら動けないセブルスに少しずつ近づいていく。

「……女性に二人掛かりでは、恥ずかしくないのか？」

「……あ?」

セブルスは、2人を挑発するように嘲笑いながら言い放った。2人の低い声は、激怒そのものだった。勿論2人の標的は私からセブルスへと変わり、2人はセブルスへと近づいていく。

「…スニベリーお前動けないことを忘れてないよな？」

セブルスを脅すようなブラツクの声が聞こえた瞬間私は、走ってセブルスと2人の間に割り込んだ。私は何も言わずに、2人に杖を向けて振り上げる。体力的にも技術的にも圧倒的に上回っていた彼らを追い込めるなんてできるはずもなく私は簡単に押されていく。

「やめろと言っているだろ!!!」

後ろから聞こえてきたセブルスの声を聞こえてきた時には私は後ろに後ずさりして体勢を崩したの瞬間、ポッターが何か呪文を唱えようとするのが目に入った。

人というのは絶体絶命になると動きがスローモーションに見えるらしい。ポッターがゆっくりと口を開くのをしつかりと目にした私は、気づくと最初に頭に浮かんだ呪文をとりあえず身を守るために叫んでいた。

「セクタムセンプラ!!!」

ポッターは目を見開いて驚きながら反対呪文でそれを防ぐ。

「……なんで…」

自分が開発した呪文を、私が知っていることに驚いたようにセブルスがこぼした声が聞こえてきた。どうやら、目の前にいる2人も私がこの呪文を知っていることに驚いている様子だった。ブラツクに視線を移すと、動揺したせいで一瞬の隙ができ私の呪文を叫ぶ声とそれ

に気づいたポッターの音が綺麗に重なった。

「エクスペリアームス!!!」

「シリウス!!!」

ブラックの杖は3メートル宙を舞い後ろの芝居に音を立てて落ちる。

彼の杖を奪った時にはもうポッターが私に杖を向けて呪文を叫んでいた。

「エクスペリアームス!」

やっぱり、2人相手に勝てるわけがない。

私の手から杖が離れるとブラックが冷静に呪文で杖を自分の手に戻しているのが見えた。

分かっている、勝てるはずなんてない。

ブラックの杖の先から閃光が放たれてもうだめだと思ったが、私はなぜか当たることもなく地面に座り込んでいたが、代わりにぱりんというの何が砕ける音が聞こえた。どうやら、反射的に後ずさりをした私の足首を後ろにいたセブルスが握って転けさせてくれたらしい。

何が起きたか分からなくなってよく見てみると、私の周りには母からもらった髪留めらしき破片が散らばっている。咄嗟に髪留めを留めていたところを触ってみるが案の定耳の上には何もなく、髪感触だけしか感じなかった。体には当たらなかったが、代わりに髪留めにあたって砕けてしまったということにすぐ悟った。

動けるようになったセブルスが近くに落ちている自分の杖を拾おうとするがブラックに杖を弾き飛ばされ、私は放心状態だった。

座り込んだまま近づいてくる2人を見つめていると、前に大きな影が立ちほだかる。

……スリザリン色のローブでよく見たことのある後ろ姿。

杖も持っていないセブルスが私を庇うかのように立っていたのだ。

「嫌われ者同士の友情か？泣かせてくれるね」

ブラックは、そう言いながら余裕そうに杖を向ける。

閃光の光が目に入った瞬間怖くなり目を瞑るが何も衝撃も、音も聞こえず、私は恐る恐る目を開けてみると飛び込んできた光景に目を見開いた。

私とセブルスの盾になるかのように、ルーピンが私たちの間に割り込んで防いでいた。

「…どうしたんだよ。リーマス」

「……………やり過ぎだ…」

ルーピンの顔は見えないが、声を聞く限り冷静だった。

「ジェームズ、シリウス…よく見て考えて。君達ならすぐに気付くはずなのに、今回は君達らしくない」

2人は私の方を見て杖を静かに下ろした。明らかに2人は髪留めの破片を見ていて、やり過ぎたと思ったらしい。2人がその場を立ち去ると、周りにいた生徒達もそれぞれ散っていく。ルーピンも少し私達の方を見て、気まずそうに背を向けた。

何も言わず立ち去る彼らを睨みながら目で追いかけるセブルスのローブを引っ張り振り向かせた。何も言わず杖を渡して私もその場を去ろうとしたが、セブルスは中々動かず粉々になった髪留めの破片を丁寧に拾いだした。

「…何してるの……………ねえ…」

拾い続けるセブルスを止めようと身体をさすってみるが何も反応せずにひたすらに拾い続ける。私はセブルスの前に屈んで、動く手を握り止めさせた。

「…もう大丈夫だって……もういいよ…」

顔の上げたセブルスは、酷く苦しくて辛そうな表情を浮かべていた。

「…何が…大丈夫なんだ…」

……僕のことなんて…ほっとけば良かっただろ、そしたらこんなに
ならなくて済んだんだ…」

「……………大丈夫よ。単なる髪留めなんだから」

「……………嘘なんてつかないでくれ。」

…僕のせいだって…

…大切なものだったんだって…

……………言って……………」

セブルスの声はだんだんと小さくなっていく。

「……………壊れたのは貴方のせいじゃない」

「でも…あの時僕が、足首を掴んだ」

「そうしてくれたおかげで、私は今怪我ひとつないわよ」

自分なりに落ち込むセブルスを励まそうと言葉をかけるがやっぱり届かない。彼は、下を向いてちゃんと耳を傾けないと聞き逃してしまうほど小さな声で呟いた。

「……………ごめん……………」

「……………謝らないで…本当に大丈夫だから。」

私の言葉に、顔を上げたセブルスの瞳は今にもこぼれ落ちそうなほど涙が溜まっていた。

「…だったら何で……………泣いてるんだ…」

セブルスの言葉を聞いて私は、咄嗟に自分の頬を触ってみると確かに濡れていた。泣いているなんて全然気づかなかった。

一回泣いていることに気づいてしまうともうどうしようもないほど涙が溢れでてくる。

「……………何でなんだろう…ね……………」

私は自分の目から落ちてくる涙を拭って立ち上がる。

「……………もう行こう…」

私はセブルスの腕を持ち無理矢理立たせて、学校に向かつて足を進めた。

……この涙が髪留めが壊れたから溢れ出てきたものじゃないことぐらい自分でも分かっている。

後悔しているんだ。

自分の事ばかり考えてその上から綺麗事を塗ったくっては、これが一番いい道だと言いついて聞かせてきたことに。

セブルスが苦しい思いをすると分かっているのに、何もせずにただ見ていた自分に怒りを感じているんだ。

私は全部全部中途半端だ。すぐにくろくろ意見を變えて、訪れた結果を酷く恨む。

……これも全部自業自得だ。

セブルスがなぜ泣いているのか聞いてきたときに私は何も答えられなかった。

……これから苦しむことになる貴方を思うと悲しくて苦しくて辛くてたまらないの

なんて言える訳もない。

もうここまで来てしまったんだ。

…もう後戻りもできない。何となくわかる気がする。もしも時を戻せたとしてもきつと私は何も出来やしない。一回できなかつたのに、そんな簡単に来るわけがない。

…：…だつたらもう私がやるべき事はもう決まっている。

セブルスに嫌われようが、憎まれようが、恐れられようが、疑われようが、私は誰にも気づかれないうように彼を守る。

絶対に死なせない。

…：…死ぬ運命が決まっているというのなら、そんなの変えてしまえばいい。

最後までセブルスに私の気持ち気づかれないうように、せめて貴方が永遠に彼女を想い続けられるように、私はずっと自分の胸の中だけに隠し持つ。

目元がひりひりと痛むのを感じながら空を見上げると、鬱陶しいほどの太陽が暖かい日差しを私達に浴びせていた。

17 泣き虫が2人

O・W・L試験が終わり、試験から解放された生徒達の喜びの声を聞いても私の気持ち晴れることはなく、胸に穴が空いたような空虚感だけが残ったままだった。

あの後すぐにセブルスはグリフィンドールの寮の前で徹夜する勢いで彼女に謝りに行ったらしいが帰って来た様子から見る限りでは上手くいかなかったらしい。

あの出来事から普通だったはずの光景はもうとつくの昔のように感じるほどぱったりと見ることもなくなった。セブルスとエバンズが2人で楽しそうに話しながら廊下を歩く姿も、喧嘩をするセブルスとポッター達を止めに入るエバンズの姿も、まるで初めからそんな光景なんてなかったかのように、空気に溶けてしまったみたいだ。気づかないほど少しずつそれぞれの歯車がずれていつているような気がして、私は必死にそれから目を逸らした。

もう2人で歩いている姿は見ずに済んだんだからと、いくら言い訳をしてもそれでも私はある光景を目にする度に胸が締め付けられるように苦しくなり、せめていられているような気がしていた。

セブルスは友達と話すエバンズとすれ違う度に足を止めて、楽しそうに話す彼女を目で追っている。少なくとも私が見た限りでは毎回必ず振り返っている。その度に私の胸はぎゅっと締め付けられて、彼女の後ろ姿を見えなくなるまで見つめ続けるセブルスを見ると、息ができなくなるほど苦しくなる。

悲しそうに、

辛そうに、

後悔しているように、

…愛しそうに見つめるセブルスの瞳も表情も何もかもを見ると、嫉妬していた時よりも悔しくなる。

………振り返ってくれないと分かっているのに…セブルスはまだ…エバンズを想っていることに嫌というほど実感させられるから…

私には決して向けてくれない瞳で彼女を見る彼の姿を見るたびに胸が苦しくなり、想いが溢れ出てくる。

…あの時、せめてセブルスがエバンズのことを想い続けられるように、私はこの気持ちは絶対に彼に伝えないことを決めた。それなのに、行き場のなくなったこの感情は溢れて溜まっていくばかりで消えてくれないのだ。

私は時計の秒針が動く度にセブルスに恋をして、愛しく想う感情が深くなっているような、もう抜けられないほど依存してしまっているような気がしてならない。初めはとても綺麗なものはずだったのに、今になってはこんなにも汚く、醜いものになってしまったように感じて怖かった。それでも微かに感じるあの温もりに一度触れたら忘れられないほど、幸せになる。

だから求めてしまう。

どうしても捨てられなくて、忘れたくないもの。

……どんなに届かないと分かっているにしても、それでも求めるぐらいは許してほしい…

エバンズとの仲が悪くなってしまうともう歯止めが効かなくなつたように、セブルスは闇の魔術に没頭していつていた。：きつと彼は死喰い人になつても彼女が振り向いてくれないことなんて知らないし、今後も気づくことはないだろう。それなのに、セブルスは、彼女がもう一度自分に振り向いてくれるのを信じて間違つた方向へと進んでいた。私がどう声をかけてもきつと聞いてくれない。それなら、少しでも近い場所で彼を守り続けることしかできない。

日が沈みかけて、オレンジ色の光が差し込んでいる廊下をひとり歩く。友達と話しながら歩く生徒達とすれ違う時に無意識のうちに少し体を小さくしていた。

あんなに賑やかだったのに、私が進んでいる方にはどうやらあまり生徒がいならしく、気づくと廊下を歩いているのは私一人だけだった。確かに滅多に通らない所で、普段から人気のない所だったから、行き交う生徒が少ないというのは何となく納得できるが歩いているのが自分だけとなると少し不気味に感じる。

自分の足音だけが響く廊下をぐるりと見回した時、小さな声が聞こえてきた。後ろを振り向くが当然誰もおらず、それでも確かに小さく何かを言っている声が今この時も聞こえている。聞き取れないほど小さな声だが、私はその声のする方に向かった。小さなその声はあまりに悲しそうで、辛そうなものだったからほつとくことなんてできなかった。

廊下の突き当たりを右に曲がった時、人影が目に入り私はとっさに身を隠す。

どうやら、声の正体はこの先にいた人のものらしい。

私は恐る恐る壁から顔を少し出して様子を窺ってみると、ものすごく綺麗なものを見たような気がしてゆっくりに感じた。

……あぁ：綺麗だ：

涙で濡れた頬がオレンジ色の光に照らされて暖かい黄色に色を変え
える。

吹き込んできた風で、顔に被さっていた髪が紐解くようにゆっく
りと靡くと、私の心臓の動きは早くなった。

……どうして、今まで気づかなかったんだろう

スリザリン色のローブの裾が大きく波打つように靡くのを見て、私
は名前を言ってしまうそうになり咄嗟に口を押さえた。

……セブルス

彼は誰一人として通らない廊下でひとり立ち尽くしながら、静かに
泣いていた。右手で必死に拭いながら、声を押し殺すように泣いてい
るセブルスの姿を見た瞬間私はまた壁の影に隠れる。

……最低だ：

……気づかなかったとはいえ、彼が泣いているところを綺麗だなん
て思ってしまうなんて……

私は自分が思ってしまったことを思い返すと、手が震えた。

「……………あ……………ごめん……………」

壁越しに聞こえるセブルスの嗚咽音の中に謝罪の言葉が混じっているのに気がつくのと、私の心臓は大きく飛び跳ねる。

「……………ごめん……………ごめんツ……………」

何度も何度も繰り返し言うセブルスの声を聞きたびに私の胸も苦しくなるばかりで、鼓動の速度も増していく。

「……………ごめん……………ごめんなさい……………リリー……………」

彼女の名前が聞こえた瞬間に、私の頭はまるで鈍器で叩かれたように痛みだした。

……………ほら、今日の前にいるセブルスは自分が言ってしまったことを深く後悔している。

……………ひとりで泣くほど苦しんでいる。

こうなると分かっていたのに……………

あの時、止めなかったらどうなるか分かっていたのに……………

セブルスが苦しむと分かっていたのに……………

……………私は結局何もしなかった。

私の視界もだんだんとぼやけだして、鼻がツーンと痛くなると耐え

きれなくなった涙が頬を流れた。

ここで飛び出して貴方を抱きしめる勇気があったのなら、何か変わるのかな……

…あの時…私が…止めていたら…

セブルスはこんなに苦しまずに済んだのかな……

私に勇気があれば…

私が貴方ほど優しく強い人間だったら…

思えば思うほど、その分追いかけるように流れる涙はもう止まることなんてなかった。

「……………ごめんなさい…セブルス」

泣きながらエバンズに謝り続けるセブルスの声を聞きながら、私は小さく呟く。

彼に届ける気などない私の謝罪の言葉は勿論届くこともなく、オレンジ色の光に溶けるように消えていった。

ひとりで泣くセブルスの姿を見てしまったら、もう普段過ごしている彼なんて直視することはできなくなり、セブルスと関わることもな

くなってしまうた。

彼を見てみると胸は苦しくなり涙が出てしまいそうになる。

…全部私のせいでこうなったのだから尚更だ。

セブルスが苦しんで辛い思いをしているのを見ているのは、本当に悲しくて私まで苦しくなる。

彼の方が辛い思いをしていることは知っている。痛いほど実感もしているが、私は結局自分のことしか考えられなかった。

ベッドに潜り込み、瞼を下ろしてみるが眠れなくてルームメイトの寝息が聞きながらゆっくりと目を開けた。

姿勢を変えるために横を向くと、ベッドの横にある小さな棚が目に入る。1番上の引き出しには、もう最近開いてさえもない本がしまっている。

………最近を使う気になれず、一切触っていない。

私はゆっくりと、体を起き上がらせて引き出しをひいて本を中から取り出した。真っ黒い表紙は相変わらず何も変わっておらず、不気味な雰囲気を放っている。

私はパラパラとページをめくって、何も書いていないページを開いた。どんなに文字に触れてみても何も反応はなく、勿論文字が浮き出てくるわけでもなかった。

………なんか…本にまで……見捨てられた気分だ…

思ったことを消し去るように私は、ページを進めると、何故か何も変哲のないページが気になって手が止まった。

文章が書かれていない端の空白の部分に、うつすらと文字が書かれていることに気がついた。

『どうして彼ばかりに執着するんですか？』

彼……誰のことだろうか。白紙のページではないスペースに文字が浮き上がったことなんてなかったし、どこか……この文章は今までの雰囲気とまるで違う。

文字を触ってみたりしたが、消えることもなく反応してくれない。私は何を思ったのか羽根ペンを握ってその文章の下に書き込んだ。

『貴方が言っている彼が誰のことかは知らないけれど、私が知っている彼は貴方が思っている以上に素敵な人よ。誰よりも優しく、強く、勇気のある人。私はそんな彼を愛してる。誰よりも。』

自分がどうしてセブルスのことを書いたかは分からなかったが、途端に恥ずかしくなった私は『愛してる。誰よりも。』という部分を塗りつぶした。すると、私が書いた文章もその上に書かれていた文章も溶けるように消えていく。

文字に書いただけでも少しだけでも、セブルスを想う感情が楽になり、胸がすつと軽くなったような気がした。

文章が消えたことを不思議に思いながらもとりあえず羽根ペンを置いて、本を閉じる。

そろそろ意地でも寝ないと明日がもたない。

そう思っって本を引き出しに戻そうとすると手から滑り落ちて、大き

な音がたててしまった。何人かのルームメイトが少しうるさそうに寝返りをうっただけで済み、ほっとしながら開いている本を拾うためにベッドから抜け出した。

開いていたページは特に何も変わりのない歴史の文章が印刷されているページで、特に何も考えずに文章にひとと通り目を通しながら手に取りベッドに腰掛ける。

……ん？…何だろう…

本を閉じようとしたがふと裏表紙の中に何か彫られているのがついた。何が書かれてあるんだろうと不思議に思った私は裏表紙を開いてじっくりと見る。するとそこには書かれてあった人物の名前が目に飛び込んできた。

あまりに衝撃的で、見てはいけないものを見てしまったかのように心臓も、体も緊張すると、戸惑いの言葉が溢れた口から出た私の声は震えていた。

「……………どういうこと……………」

【著者

レイラ・ヘルキヤット】

ただ自分の名前が彫られてあるだけだというのに、とても恐ろしく感じた。

……自分の名前がこの本に書かれてある、というかここに著者とま
で書かれてある。

勿論私はこんな本書いた覚えなんてない。同じ名前の人が書いたというもの信じがたい。

もう既に私の頭はパンク状態で、何が何だか分からなくなる。私は混乱しながら、彫られてある自分の名前をなぞった。

…一体どういうこと…この本は私が作ったの？…えっ？でも見覚えなんてない。

混乱しだした頭はもう限界で、とりあえず本を閉じて引き出しの奥にしまいこみ、ベッドに潜り込んだ。

眠れるはずもなかったが、あれ以上本を見ていたらおかしくなりそうだ。

…最初の頃書き込んでもその文字が消えるなんてことはなかった本がいきなり私が書き込んだ文章を消し、まるで私が悩むことを知っていたかのように忠告してきた本を作ったのは私とまで書いてあるのだ。

…確かに私は未来を知ってる。だけどこんな作った覚えなんてない。

意味がわからなくなった私は、もう考えることをやめることにした。

…もう本を開くのはやめよう…

これ以上ないほどの不安が襲いかかってきてあの本にはもう触らないことを心に誓い、大人しく瞼を下ろした。

セブルスと話す勇氣など湧くわけがなく、私はただ彼を目で追いかけることしかしなかった。本のことを考えながら、過ごしているとあつという間に時間というものはすぎるもので、気づけば1年も終わりを迎えた。

もう動きだしているホグワーツ特急の激しい振動を全身で感じながら、目を閉じる。

すると、当然のようにセブルスが1人泣いている光景が浮かんできて私は耐えきれなくなり目を開けた。

……結果的にはこれで良かったのかな……

帰りのコンパートメントの中で私は、雨が降り続けている空を見ながらひとり考え込む。

……もう成り行きでセブルスと関わることもなくなったし、

……これで物語は何も支障なく順調に進むだろうし……

言い訳の言葉を並べながら、私は窓に打ち付けてくる雨の音を聞き流す。

……これでいいんだ……これで彼を確実に救い出すことへの一歩になったんだから……

いくら都合のいい言葉を自分に言い聞かせても私の気持ちは軽くなるばかりか重たくなっていく。エバンズの隣ではあんなに笑っていたセブルスは、彼女が隣にいないだけでももう純粹に笑うこともなくなった。

………こうなるのなら………私が我慢すれば良かったんだ………

私が側にいても、セブルスは笑ってくれない。

………彼には、エバンズしかいない。

………セブルスは彼女しか見ていない。

窓の外の雨のように私の瞳からも大量の涙が流れだした。私は隠すように手で両目を覆って瞼を閉じる。そんな私を心配したように鳴くアテール鳴き声が聞こえてきて、私は目を開けて檻の中で大人しくしているアテールを優しく撫でてやる。

「………あんたに心配される日がくるなんてね」

真っ直ぐ見つめてくるアテールから視線を逸らして頬に流れた涙を拭って窓の外を眺めた。

ただ今は、綺麗事を並べるよりも何も考えずに涙を流す方が楽になれる気がした。

夏休みを迎え、帰宅した私はいつもと違う家の雰囲気違和感を覚

えた。いつものようにアウラが上着を預かってくれて埃ひとつないピカピカに磨かれた玄関も、ぱっと見何も変化はないはずなのになぜか安心できない。

「どうしたの？早く上がりなさい」

母が立ち止まっている私に優しく声をかけてくれるが、私は何も返事せずに立ち尽くす。

「…どうしたんだい？レイラ」

父は少し微笑みながら、私に優しく問いかけてきた。父の顔をじつと見つめ息を吸い込むと、階段から兄が降りてくるのが見えた。

「レイラ、お帰り。学校は楽しかった？」

笑顔で言う兄の歩き方は平然を装っているがどこか不自然で、左腕をできるだけ動かさないように気をつけている様子だった。

「……また、怪我をしたの？…」

私は、ただいまも言わずに少し兄を睨みつけながら問いかけてみる。兄は歩くのをやめて私を見つめてきた。

「……おかしいじゃない。毎年ノアは研究で夏休みには帰ってこれないはずでしょ」

「少し、休息をもらったんだよ。」

「…その怪我はなんなの」

「……少しドジしちゃってね」

笑いながら言う兄は少し困ったように眉を下げる。嘘をつくといつもこの癖がでる。

「…レイラ、疲れたでしょ。今日はゆっくり休みなさい」

母が背中を優しく押してくる。今の私には3人が明らかに自分に何かを隠しているように思えてならなかったが、私は素直に自分の部屋に戻り、兄の怪我のことを考えながら夕食までの時間を過ごした。

久々に家族揃っての夕食だというのに楽しくなくて、あんなに美味しいはずのご飯を全く喉に通らなかった。

いつも通り、楽しそうに話す兄を見ると確実に何かを隠している気がして胸らへんが霧かかったようにもやもやする。

私がフォークとナイフを置くと、心配したような兄の声が聞こえてきた。

「…体調悪いのか?」

私は今胸がもやもやとしているこの変な気持ちになった原因の核心を迫るためにゆっくり口を開いて、自然と出てくる言葉に身を任せた。

「…私に…何か隠してない…?」

私の言葉を聞いた瞬間に兄は少し眉間にしわを寄せ、母は瞳孔が少し開いた。2人とも分かりやすく反応したが、ただひとり父だけは無反応だった。

「…レイラ。どうしたの? 隠すことなんて何も無いじゃない」

いつも通り母が微笑みながら返してくるが、今回は引き下がることはできない。

「…前まで仕事で怪我なんてしなかったノアが最近になってよく怪我をしているし、それが、死喰い人が活発に行動し出してきた全く同じ頃…」

「考えすぎだよ。レイラ」

笑いながら言う兄は、やっぱり少し眉が下がっていた。

「私の考えすぎだったらそれで別にいい。」

……だけど、明らかに何かを隠してるじゃない。」

静まり返った部屋に今まで喋らなかった父が静かに口を開き、少し溜息混じりの声が聞こえてくる。

「……………ここまでかな…」

「あなた!!この子にはまだ」

何か言おうとする父に向かって、声を張り上げ母は必死に何かを守っている様子に見えた。

「……………まあまあアメリカ、そんなに大声を出さなくても。…もうそろそろいいじゃないか?この子も知っとくべきだ。」

母は溜息をつき、父をひと睨みすると私を少し見つめて静かに話し出した。

「…レイラ、貴女に言わなかったのはレイラには普通に何事もなく学校生活を送って欲しかったからなの。」

…だからどうかノアを責めないであげて」

兄に視線を移すと、少し俯きながら私の様子を伺っていた。
「……………死喰い人がこれまでも何人も魔法使いを殺しているってことは知っているでしょう?」

黙って頷く私を確認して母はまた話を続ける。

「……………その死喰い人が……………」

……………私達を皆殺しにしようと動き出したのよ……………」

「……………なっ…なんで…」

震えている自分の声を聞いて情けないと思いながら、話を続ける母を見つめた。

「……理由は彼らにしか分からない。…ノアが襲われて、助かったのも奇跡なのよ。運が良かったことに相手の人数も少なくてね。だから怪我程度で済んだの。」

……あまりに思ってもいなかった言葉に体が固まって何も考えられなくなる。

「……………えっ？ノアが襲われた？」

戸惑いが隠せずに、私は兄を見る。

「……………その怪我は…」

「大丈夫、大した怪我じゃないよ」

私が左腕を見たのが分かったように、机の上に乗っていた左腕を自然に下ろす。

……………違う…おかしい…これじゃあ…辻褃が合わなくなる。

私は兄がドラゴンの鉤爪に引っ搔かれて怪我をし、両親が会いに行った時のことを思い出した。

……あの時の怪我の原因がドラゴンのことじゃないことは確かだ。

確かに…あの時も微かに眉が下がっていた。

ここで追求してもきつとまた嘘をつかれるだけだと思い、私は母に話を振る。

「……他の人は、…大丈夫なの？」

今日の前にいる家族は生きていると見ただけで分かるが、…叔父や…叔母の顔が浮かぶと聞かずにはいられなかった。

「…連絡を取れないからなんとも言えないけど、それぞれ隠れてるとは聞いているから大丈夫よ。」

私が母の言葉を聞いて黙り込む姿を見た父が静かに話しだす声が聞こえてきた。

「……心配することはないよ。私がちゃんと魔法をかけといたから、そう簡単に見つかることはないだろう。」

「……でも、時が来たらここを離れないといけないかもしれない…それだけは覚悟しといた方がいい」

「……家を離れる？…生まれ育ったこの家を？」

急に不安が押し寄せてきて、自分でも真っ青になったのが分かった。

今まで死喰い人なんて記憶の中でしか見たことがなかったから実感が湧かなかった。でも実際命を狙われているとなると、何処からともなく現れそうで一気に恐怖心が襲いかかってくる。

現に…兄が襲われたのだから。

「…学校…来年はホグワーツに行けないの？」

私は急にそんなことが心配になって父に問いかけてみる。

「…安心しなさい。勿論ホグワーツに行っている…ここよりもホグワーツの方が安全だからね。…何だったら、家族全員で住み込みたいぐらいだ」

こんな時なのに父は冗談を言って笑いだし、母は呆れたような表情をすると優しく私に話しかけてくる。

「…レイラ疲れたでしょ？お風呂に入ってゆっくりしなさい」

私が大人しく3人におやすみなさいと告げると、それぞれ口々に返してくれる声を聞きながら部屋を後にした。

……話を聞いても、私は兄のことで気持ちの悪い感触が残ったままだった。

確かに死喰い人に命を狙われることになるとは思ってもいなかったが、何か引つかかる。

……あの左腕の怪我が死喰い人に襲われて負った怪我だと考えてみても、いくら兄が上手く逃げれたとしても軽すぎる。

…なんだったら……あのドラゴンで怪我をしたと言っていた方が酷かった。

……あの時の怪我が、死喰い人に襲われたものの怪我だと考えれば両親がわざわざ兄に会いに行ったことも、兄が私に嘘をついたことも辻褃が合う。

それにそう考えると去年の夏休みに盗み聞きをしてしまった会話で分かった、父と母、兄そして叔母と叔父が私に隠していたことも大体は想像がついて、納得できる。

みんな…ノアが死喰い人に襲われたということを私に隠していたとして…

でもそうになると、今兄が怪我をしているのは何が原因なのだろうか…

…
去年の夏休みの時、やっぱり兄はドラゴンの研究に行っていた？いや、普通命を狙われて行くだろうか。

『あの子自身が…望んだことだ…それを出来るだけ…後押し…する』

去年盗み聞きをした父の言葉が蘇ってきて、更に頭を悩ませてくる。

…兄自身が一体何を望んだというのだろうか…

いくら考えても答えなんて、出るわけがなく、私はこんがらがった頭を整理するかのようになり、ゆっくりとお風呂に入ってふかふかのベッドに寝転がる。

この先の不安と、兄のことで眠れないかと思っただが、どうやら疲れには勝てないようですぐに瞼が落ちてきた。

相当疲れていたようで、気づけば時計の針がお昼を指していた。大分遅めの朝食を食べて、ゆっくりと部屋で過ごす。いつもの過ごし方と何も変わらないがひとつだけ違った。今までは、思いもしなかったある不安。

こんなに幸せなのに…

こんな時間もう過ぎせなくなる日が来るのだろうか…

そう思ってしまうと私はまた記憶に頼りだす。…勿論、いくら振り返っても私が知っているのは『ハリーポッター』の物語のみだけだから、何も意味はない。

これからどうするのが正解なのかが分からなくて、私は先が思いや

られた。

時々父の姿が見えなくなったが、母と兄がいなくなることはなかった。：何処に行っているのかと父に聞けるわけもないし、仮に聞けたところで曖昧な言葉が返ってくるだけだと分かっていたからもう諦めていた。

夏休みを迎えてもう大分経っているというのに私は兄の怪我のことも聞けずにいたが、もう限界を迎えていた。私は聞く勇気を振り絞って兄の部屋の前で立ち続ける。夕食も食べ終わり、お風呂にも入り終わったのだがどうしても兄の怪我の様子も気になるし、本当のことを聞き出そうとも思い覚悟も決めていた。

それに、だいぶ日にちが経つのに怪我が良くなっているとは思えない、実際兄は明らかに左腕を庇いながら生活をしていた。そんな兄の姿を見ていたら、心配しないわけがない。

……大丈夫、ノックして、何気なく聞こう。自然に：

…いつも通り：

意を決して扉をノックすると、中から兄の声が聞こえてくる。

「はーい。ちょっと待って」

近づいてくる足音が聞こえたかと思うと扉がゆっくりと開いた。私の顔を見た瞬間に、兄の表情が明るくなる。

「丁度良かった。お茶をしようと今呼びに行こうと思ってたんだ。ほらほら早く中に入って」

にこにこ笑いながら言う兄を見て、私は部屋の中に入った。

ドラゴンのことに関しての本が山積みになっている机の前にあるソファアーに腰掛けた。兄は杖を一振りしてその山積みになっていた本を片付けると、私の前にティーカップと焼き菓子を置き、向かい側に座った。

「……もう……夜遅いしこんな食べたたら太っちゃう」

いかにもバターを沢山使ってそうな焼き菓子を見つめながら兄に言うと、何が面白いのか笑いだす。

「……まさか、レイラの口からそんな言葉を聞ける日が来るなんてね。……ちよつと驚いたよ」

「……失礼ね、私だって女の子なんだからこういうことぐらい気にするに決まってるでしょ」

「ごめんごめん。でもいいじゃないか。今日ぐらい」

「……その今日ぐらいが積み重なって気づかないうちに太っていくのよ」

私は話を変えるようにティーカップに口をつけ、一口飲むと私のことはお構いなしに焼き菓子を頬張っている兄に話しかけた。

「……怪我は、大丈夫なの?……」

口に入っている焼き菓子を飲み込み、一口紅茶を飲むと兄は私を安心させるかのように笑いかけてくる。

「大丈夫さ。……少し治りが遅いだけだから何も心配はいらないよ」

「……でも……こんなに治りが遅いなんてやっぱり何かあるんじゃないの?……ほら、私にだってやれることができるかもしれないじゃない……」

私が少し俯きながら話すと、少し笑いながら話す兄の声が聞こえてきた。

「…レイラは優しいな……………だからこそ、言いたくなかったんだよ……」

「…えっ？……………何を？」

「…死喰い人のことさ」

怪我のことから話を逸らされたような気がするが、そう言う兄の目は突然真剣になり、体が少し緊張したように固まったのを感じた。

「……………レイラは優しいすぎるからね…自分ひとりで何もかも抱え込もうとするだろ？……………それが、父さんも母さんも心配だったんだ…」

兄の言葉を聞いて、私は持っているティーカップを握りしめた。

……………私が優しい人間なわけがない。

「……………優しいなんて…そんな…お世辞言わないで…」

震えている自分の声を聞いた瞬間に自然とセブルスのことを思い出すと、心臓が誰かに思いつきり握り潰されているかのようによくなった。あまりに鮮明にはつきりと映像として駆け巡りだしたものだから、今までのことを吐き出すように口が勝手に動き出す。

「……………私は…人の幸せなんて祈ってあげられないし、人のために自分自身を犠牲になんてできない。」

セブルスが体を震わせながら言うてはいけない言葉を声を張り上げて、立ち竦めるエバンスの映像が流れ始めると、私は罪悪感に苛まれる。

「……………自分は何もしなくせに、何もしなかったくせに全部人のせいにして綺麗事で並べて、言い訳をし続けて…」

2人が廊下を楽しそうに歩く後ろ姿が頭に浮かんでは、消えて幸せそうなセブルスの顔が浮かぶと、私は自分を否定するように少し声を

張り上げた。

「……そんな奴のどこか優しいのよ……」

臆病者で、薄情者の方がよっぽどお似合いじゃない」

私が話し終わると、優しく、それでもどこか強く話す兄の声が耳に入ってきた。

「……レイラ……そんなのは誰でも一緒さ。」

人の幸せのために自分を平気で犠牲にできる人なんてそういない。」

あまりに優しくすぎるその言葉は、逆に私を苦しめる。

「………いる……すぐ近くに……不器用だけど誰よりも優しくて……強くて、誰よりも勇気のある人……」

私は下を俯いたままギユと瞼を下ろした。セブルスの顔が浮かんできて、泣きそうになるのを必死に抑えながら、唇を噛みしめる。

「………そうか……レイラはその人のことが……大切なんだね……」

私が何も言わずに、俯いたまましているとまた兄の声が聞こえてきた。

「レイラ……こつちを見てごらん」

ゆつくりと顔を上げると、相変わらず優しく微笑んでいる兄の顔が視界に入った。

「……………その人の為に色々と考えて、その人にとっての1番の幸せを見つけたんだろ？」

「……………見つけたけど……………それは…私が我慢しなくちやいけなくて…自分を犠牲にするのが嫌だから…」

白状するように口から出る言葉と一緒にセブルスが苦しそうに泣く姿を思い出すと涙も一気に瞳から流れ落ちていく。

「……………セブルスの幸せを私が壊したの」

まるで赤ん坊のように泣きながら、私は兄に助けを求めるように声を出した。

「……………どうしよう…ねえ…ノア…私はこれからどうすればいい…」

泣きながら問いかける私の声を聞きながら、兄はゆっくりと私の横に移動して腰掛けた。

「……………それは、誰にも分からないよ。……………人は誰でもあの時にこうしていればよかったとか後から後悔をして、自分を責めて、涙を流す。……………そんなものなんだ。

…この先どうすればいいのかなんて、誰にも分からないんだ。

……………レイラ、勘違いをしてはいけないよ。…

…優しさなんて人それぞれで、物の形や色が違うように、同じ優しさなんてものは存在しない。」

兄は私の頬を流れる涙を優しく拭って、頭を撫でてくる。

「……人のことを思いながら涙を流すだけでも、

…それは優しいというんじゃないかな？」

兄の優しい言葉を聞きながら私は、今までのものを吐き出すように泣き続けた。

「…少なくとも…僕はそう思っているよ…

…大丈夫……

自分の優しさを知っている人がいる限り、その人はひとりじゃない。

…何も難しく考えなくていい。自分の守りたいものを、守ればいいんだよ…簡単だろう？」

赤ん坊をあやすように一定のリズムで、私の背中を叩きだした。

「………大丈夫…僕は…何があってもレイラの味方だからね」

兄の左腕を通している服の袖から白い包帯のようなものがちらりと見えたが、兄の子守唄のような声を聞いていると、そんなことどうでもよくなり涙を流し続けた。

兄の腕の中は、暖かく、身を任せられるほど安心できた。いつもはあんなへらへらと笑っているような兄は、こういう時に優しく受け入

れてくれるものだから、甘えてしまう。

もしかすると…私の方が兄に依存しているのかもしれない…

背中をリズムよく叩いてくる兄の手の大きさを感じながら、泣き疲れたこともあり、気づけばゆっくりと瞼を下ろして眠っていた。

18 本の正体

汽笛が鳴る音を聞きながら、私は汽車の窓から顔を出して付き添いに来てくれた母と父、それから兄に手を振った。小さくなっていく手で手を振り続け、見えなくなると窓を閉めて空いているコンパートメントを探す。

どこも空いているところがなくて、しようがなくひとりで座っている生徒に話しかけて席を少し譲ってもらい、ホグワーツまでゆつたりと時間を過ごした。

一眠りをしてしてしまえばあつという間につき、ホグワーツ城を見た瞬間に去年の出来事が嫌という程鮮明に思い出したが、兄の姿がすぐに浮かぶと少し楽になった。

長期休暇明けの授業は、やっぱり疲れるもので私はノタノタと教科書を抱えながら歩く。

これまでと変わらず私の隣で歩いてくれるような友達なんておらず、楽しそうに話しながら前からも後ろからも歩いてくる生徒達とすれ違う度に、私は体を縮めた。こんなこと始めてで、何故か胸がキュツと締め付けられた。

……どうして……こんなにも……

寂しく……感じるんだろ……

これまでと何も変わらない。ずっと友達なんてものもないし、どんなに素晴らしいものなのかも知らない。何も変わってないはずだ。それなのに……どうしてこんなにも廊下が暗く感じるの……

廊下に響く生徒達の賑やかな声の中に、よく聞き覚えのある声やけにはつきりと聞こえてきた。声がした方を見ると、案の定ポッター達がセブルスに突っかかっていた。

少し遠くて、はつきりとは見えなかったが相変わらず杖を取り出して、言い争っている。

……いつもだったら……この辺で……エバンズが止めに入っていたはずなのに……

彼らを避けるように廊下を歩く生徒達の中にエバンズがいたのか、喧嘩をしていたはずのポッターのエバンズの名前を呼ぶ声が私の所まではつきりと聞こえてきた。

彼女は近寄ってくるポッターをひらりとかわして、他人のように何も感情もない瞳を浮かべてセブルスの横を通り過ぎる。エバンズの後をポッターが追いかけたものだから喧嘩は自然に終わって、ただ一人セブルスがそこに残り残されていた。エバンズを目で追うように振り返るセブルスを見た瞬間私は何を思ったのか、彼に近寄っていた。

……ただ……限界だった……

これ以上、エバンズを見る彼を見ていたら私の何かが壊れてしまいそうで、醜い何か溢れかえって外に出てしまいそうで怖かった。

私はもうこれ以上セブルスの視界に彼女を入らないようにするために咄嗟に名前を呼ぼうと息を吸い込むが、周りにいる生徒達の声がかき消されてしまったかのように声にならない。私はセブルスの名

前を口にする勇氣もない自分に腹を立てながら、彼の腕を握ろうと手を伸ばす。

——セブルスの腕を握ろうとした瞬間だった。

さつきまで聞こえていた騒がしい生徒達の声が一瞬だけ聞こえなくなり、まるで時が止まったかのように感じると、私の中で何かが大きなヒビが入ったような音がして、汚く醜い何かがそのヒビから漏れだした。私はセブルスに伸ばしていた手を下ろして急いで彼に背を向けその場を逃げるように早足で歩く。

……どうして……あんな時だけ……周りの声が聞こえなくなるの……

私は、静まり返ったように感じたあの一瞬で聞こえてしまったセブルスの声を忘れるように耳を塞ぐ。

……違う……あれは気のせいだ……

何度も自分に言い聞かせても、何度も何度もセブルスの声が聞こえてくる。

『……………リリー……………』

……………気のせいだと思わせて……

……お願い……やめて……

『……………待っていて……………』

何度も幻聴として聞こえてくるセブルスの声を聞きながら、私は寮に戻る足を早めた。

まだ希望を持っている彼の言葉が重くのしかかり、彼女だけを見ているその言葉でこれ以上にならないほど胸が苦しくなって息ができなくなる。

…どうして、どうして、そこまで彼女に執着するの

どうして、振り向きもしない彼女ばかり見るのよ

次々と浮き上がってくる感情を必死に胸の内にしまいこみながら、涙を堪える。

私が隣にいたらだめなの？

…何で私じゃだめなの？

もう歯止めが効かなくなったように、浮き上がってくる思いはどんなに消し去ろうと頑張っても消えてくれなくて、私はあまりに辛くなり外に飛び出した。もうすぐ次の授業も始まることもあり生徒の姿は私以外にいなかった。私はローブを握りしめながら、あの言葉から逃げるように歩き続けた。

…駄目、こんなこと思っては駄目。

どんなに思っても、どうせ気づきもされないのだから、後から辛くなるだけだから。

…早く、早く消し去らないと

自分に必死に言い聞かせながらふと顔を上げると、何故か私はあの出来事があつた湖に来ていた。

あんなに思い出したくないほど辛い事があつた場所だというのに、まるで家に帰つたみたいに落ち着く。

私は近くの木の下に腰を下ろして膝に顔を埋め、目を閉じて体を小さくすると、あんなに動転していた体も落ち着き、次々と浮き上がってきたあの感情も思いも、静かに消えて穏やかになった。

……………代わりたい……………

私はゆつくりと顔を上げて、日差しが当たり反射している湖の水面を見つめる。優しく吹く風でゆらりゆらりと揺れるものだからまるで風で靡いているカーテンのように見えて、不思議なことに見とれていた。

……………彼女に、エバンズに代わりたい…

ゆつくりと瞬きをして、決して声に出さないようにキュツと口を結ぶ。

………彼にあの瞳で見つめられることが、

………彼があんなに幸せそうな笑みを浮かべてくれるのが、

………彼に好きだと言われることが、どんなに幸せなものかを…

ただ…知りたい…

自分が考えたことを痛みで消そうと思い、腕を爪を立てて握りしめるが、私はゆつくりと吐き出してしまいうように声は出さず口だけを動かしていた。

『………もうどうしようもないぐらい…貴方のことが大好きなの…』

自然と耐えきれなくなった涙が頬を流れたのが分かった。声には出さなかったが、少し楽になった気がして私は涙を拭い教科書を手に取る。

………大丈夫…安心して………セブルス

私には………この気持ちを伝える気持ちなんてないから大丈夫よ…

この気持ちを…伝えるつもりなんて…ないから

私はゆつくりと瞼を下ろし、全身の力を抜いて木にもたれかかった。

優しい貴方が…私の気持ちを知ってしまったらきつと深く考えて、今よりも無理をして、苦しんで、全部自分一人で背負いこもうとするから…

だから…せめて、貴方が私の気持ちなんて知らないまま、彼女だけを純粹に愛せるようにするから…

だから…：勝手に一人で嫉妬して、怒って、悲しんで、涙を流して、貴方に想いを寄せ、愛しく想う私を…

貴方を愛し続けることだけは…許して…

授業をサボった私はあの後勿論、その時間変身術だったから、マクゴナガルに呼び出されて軽く注意された。

あれから特に変わったこともなく、私は授業をサボることはせずちゃんと出席した。出席しようがしまいが心配してくれるような友達なんているわけがなかったが、学年末試験もあるし、来年にはN・E・W・T試験もある。流石に授業もでないというのはきつと家族に心配をかけてしまう。

私は教科書を枕にして、遠くに聞こえる淡々と教科書を読む声を子守唄にして聞き流しながら、仮眠につく。今は一応魔法史の授業なのだ、起きている生徒などいるわけもない。

遠くで微かに聞こえていた声が聞こえなくなると視界がガラリと変わって、私は何故かあの黒表紙の本、もう触れないと誓ったあの本を手に持っていた。

するとまた目の前の光景が変わり、私は見覚えのない部屋にいて物書きをする机の前に腰掛け、目の前にいるアウラらしき屋敷妖精に話しかける。

『……………後は……………お願いね……………』

『……………お嬢様……………本当になさるおつもりですか』

屋敷妖精の声は確かに震えていて、何故か涙を溜めている。

『……………これ……………しか……………方法がないのよ…………………………』

私はペンダントを握っていて、屋敷妖精に向かって本を差し出した。

『……………彼がない…世界に…生きている意味なんてないの…………』

私の声は涙声で震えていた。屋敷妖精を見つめるとまた視界が変わり、気づけば鋭い刃物を手に取っていた。

瞬きをした瞬間、耳元で肉が裂ける音が聞こえると目の前が真っ暗になり、一気に息がしづらくなり私は咄嗟に瞼を開けた。気づけば授業が終わったよう教室から出る生徒達の足音や話し声で聞こえてくる。

……………あまりにリアルな夢だった…

夢であの刃物で確かに自分で首筋を切り裂いていたことを思い出して、咄嗟に首筋を触れてみるが勿論血なんてついていないわけがない。

あまりにリアルすぎて、目が覚めた今でも体が震える。耳元で聞こえた肉の裂ける音も、血の匂いも、あの生々しい息苦しさも覚えている。

……………まるで夢じゃないみたいだ…

あんな気味の悪い夢を見て、気分が良くなるわけがない。私はもやもやしたまま教室を後にした。

気持ちの悪いあの夢を見ることはなかったが、どんなに寝ても何故か疲れが取れずそれどころか溜まる一方で、私は気晴らしに静かな図書館で仮眠でもしようかと廊下をゆっくりと歩いていった。

最近では課題に追われているし、何もかも上手くいかないことばかりだから自分でもいつも以上に気が立っているのが分かった。

「エクスペリアームス」

そんな時に何故こんなにもタイミングよくポッターがセブルスに喧嘩をしかける所を見てしまったのだろう。声が出た方を無意識に振り向いたのが、運が悪かった。

彼らはどうやらセブルスの背後からいきなり呪文をかけたようで、完全にセブルスは丸腰だった。勿論私は見なかったことにしようとしたが、まるで面白い見物をしているかのような周りに集まりだしていた生徒達の歓声を聞いた瞬間に、頭に血が上って、杖を取り出し彼らの中に向かって、歩き出していた。

ほんと、苛々する。

今まで一番腹が立っていた私は、相変わらず盛り上がりを見せてい

る生徒達を無理矢理押しつけて、ポッターの姿を捉えると何も考えずに杖を振っていた。いきなり入ってきて私が何も言わず呪文を仕掛けてきたことに驚いたのだろう。ポッターが少し後ずさりをして、体勢を崩す。何故だか知らないが、盛り上がった生徒達の声を聞いた瞬間、もう我慢の限界だった。

「うるさい!!!!!!
!!!!!!黙れ!!!!!!」

私が周りに集まっている生徒達を睨みつけながら、声を張り上げながら言うにあんなに盛り上がり暑くなっていった廊下は一気に静まり返り、冷たくなる。

「何をそんなに、苛ついてるんだい？」

腹立つ顔で尋ねてくるポッターを睨みながら私は杖を握る手を強めた。

「貴方が彼に突つかかっているのは何故？」

私は尋ねてきたポッターの言葉は無視をし、セブルスの横を通り過ぎて、彼に近寄る。

「理由?…スニベルスがそこに存在していること以外に理由なんて必要か？」

冷たい言葉に、私は少し背筋が凍りついたがそれもすぐに怒りで忘れた。

「……………なによ……………それ……………」

こんな感情は初めてで、今日の前にいるポッターを今すぐに殺した

い衝動に駆られ、もう何も考えなくなると頭は真っ白になった。ペティグリューの時とは全く違うもので、血は逆上し頭からまるで火をかけられたかのように熱く感じた。

「良かったな。スニベリー、エバンズ以外にも庇ってくれるような奴がいて」

嘲笑いながら言うブラックを見た瞬間に頭の血管が切れたようなブチっという音が聞こえると私は彼らに杖を振っていた。自分達にまで被害がくると思った生徒達が悲鳴をあげながらそれぞれ散っていく姿が視界の端に見えた。

様子のおかしい私に気づいたのか、いつも参戦しないようなルーピンも杖を取り出して、後ろにいたセブルスでさえも私を止めるために腕を握ってきた。

3人相手に勝てるわけもなく、簡単に杖を弾き飛ばされて、セブルスに腕を握られ続けていたがそれでも私の怒りは静まるどころか増すばかりで、普段思ったことなんてスラスラ出ないくせにこういう時だけ意図も簡単に出てくる。

「何が!!!英雄よ!!!!!!
!!!!!!何が!!!正義よ!!!!!!
!!!!!!」

私は、声を張り上げながらセブルスの握ってくる手を振り払って杖も持つてないのも忘れたまま彼らに近寄る。

「人に自分の意見を押し付けて!!!!!!相手の思いも聞かず、それが悪いと決めつけて一方的に痛めつけることがそんなに楽しいの☒」

「…レイラ、落ち着いて」

私を止めようと、ポッターと私の間に入って来るルーピンの言葉な

んて耳に入ってくる訳がなかった。

「全部貴方達のせいじゃない!!!」

もし、セブルスをあの時虐めるようなことがなければ、

もしあの時、吊るすような馬鹿なことをしなければ

こんなに悩むこともなかった。

セブルスが苦しむ未来なんて存在していなかった。

「何をしているの!!!やめなさい!!!」

騒ぎを聞きつけたエバンズが、ルーピンと私の間に入り込んで私を宥めようとしてくるが今の私には火に油で、彼女に手首を掴まれた瞬間、私の中で何がざわりと騒いだ。

「私に触らないで!!!!!!」

もう歯止めの効かなくなった私は、エバンズの手を払い除けて彼女の体を押し倒す。

「おい!!!今エバンズは関係ないだろ☒」

ポッターの怒鳴り声が聞こえてきたが、私の中にある塞き止めるものはもうすっかりぼろぼろに崩れだし、今までの思いを吐き出すように座り込む彼女に声を張り上げていた。

「貴女なんかさっさといなくなればいいのよ!!!!!!」

青ざめるエバンズを見た瞬間あんなに何も考えられないほどいっぱいだった頭が一気に冷静さを取り戻して自分が何を言ってしまったのかが分かった。エバンズがゆっくりと立ち上がりその場から逃げるように立ち去ると静まり返っていたその場に怒っている様子のポッターが、何も言わずに私に近づいてくる。

「ジェームズ、落ち着け」

ブラックが彼を止めるかのように静かに呼び止めて杖を握る。

「……………レイラ……大丈夫だから、落ち着いて」

私があまりに酷い顔をしていたからなのかルーピンが優しく話しかけながら近づいてきたが、私はそれが追い詰められるような気がして後ずさりをした。

……………違う……………

私は……

「……取り消せ」

もう自分のことではいいっぱいな私の耳にドスの効いた低い声が聞こえてきた。ゆっくりと声のした方を見ると、セブルスが私を睨みつけながら杖をこちらに向けていた。そんな彼の姿を見た瞬間、私の中の汚く、醜い何かが入った殻は、大きな音をたてながれ崩れて、溢れ出すと一気に足の指先まで染まったように感じた。

「……………何よ……………」

………本当に、貴方は…彼女のことばかりね

私の言葉にピクリと反応したセブルスを見て、私の口は勝手に動く。

「………何を、取り消せっていうの?」

そんなに彼女が大切ならさっさと好きだと言って、一緒になってしまえばよかったじゃない。

ただ彼女のことを庇うセブルスを見るのが辛くて、苦しくて、悔しかった私は拳をつくって力強く握った。

セブルスに睨まれていることが、杖を向けられていることがだんだんと悲しくなると、もう何も考えられなくなり、こういう時だけ簡単に口から言葉が出てくる。

「………私は悪くないじゃない。ただ思っていることを言っただけよ」

「…取り消せと言っているだろ!!!」

「私は思っていることも言葉にしてはいけないの☒」

セブルスの怒鳴り声を聞いた瞬間、私も彼に声を張り上げる。

「2人とも、落ち着いて」

何とかその場を鎮めようとしているルーピンは、私達を落ち着かせようとしてくるが、落ち着くわけがなかった。

「リリーに言ったことを取り消せと言っているんだ
!!!!!!!」

彼の口から彼女の名前が出た瞬間、私の体は震えて胸が痛みだし、今まで大切に守ってきた何かは意図も簡単にまるで砂のように崩れ落ちると、私は彼を睨みつけていた。

何も知らないくせに

!!!!!!!

私のこの虚しさも、悲しみも、苦しみも辛さも、貴方を見る度に胸が温かくなって、苦しくなって愛しく思うこの気持ちも

!!!!!!

今でさえもう歯止めが効かないというのに、今日の前にいるセブルスをみた瞬間私は何故か怒りが溢れてくる。

私を見てくれないくせに

!!!!!!!

あんなに愛しく想っているセブルスにこんなに苛ついたのは初めてで、こんな不思議な感情の消し去り方など知らない私は簡単に怒りに吞まれ、我を失った。怒りに任せて大声で彼に怒鳴りつける私の口からは、思ってもいないことを、セブルスに決して言っではいけないこと意図も簡単に出てしまった。

「エバンズに穢れた血と言った貴方に取り消せなんて言われたくもないわ!!!!!!」

一瞬私は自分が何を言ったのか分からなかったが私の言葉を聞いた瞬間、セブルスの真つ黒な瞳に差し込んでいた光が一瞬だけ消えたような気がして、杖がゆっくりと下ろす彼の姿を見た瞬間、私は全身から血の気が引いた。

「……………っあ…ちが…違うの…今のは…」

自分が何を言ってしまったのかすぐに分かって私は、セブルスに近寄りながら手を伸ばすが、彼はゆらりと後ずさりをした。

「……………そう……………か……………」

小さく呟くセブルスの声を聞いた瞬間、私の心臓は大きく飛び跳ねた。

「……………その…通りだ……………」

「…違う、セブルス、違うの。ごめんなさい。」

私は必死に彼に近寄って謝るが、彼は少し下を俯いたまま、何かを思い出すような表情を浮かべて、ぼそりと呟いた。

「……………お前の…言う……………通りだ」

「セブルス、ごめんなさい、こんなこと言うつもりなんてなかったの」

私の声は震えていて、彼に必死に近寄り手を伸ばすがセブルスの腕を掴むことは出来ず宙を切っただけだった。

……違うの、ごめんなさい。セブルス

今日の前にいる表情を変えずに少し俯いているセブルスを見た瞬間、自分を取り返しのつかないようなことを言ってしまったという事実が嫌という程はつきり思い知らされて、心臓が今にも爆発するんじゃないかと思うぐらいに緊張したように動き続ける。

…そんなこと言うつもりなんてなかったの

込み上げてくる涙を堪えながら彼に近寄ろうとするが、私の体は何故か動くことができなかった。

「一体何事ですか☒」

騒ぎを聞きつけたマクゴナガルが入ってきたが何もかもが遅すぎで、セブルスは私の顔を見ずに背を向けた。

「少しお待ちなさい。」

帰ろうとするセブルスを引き止めるマクゴナガルの声を聞いても私はさつき簡単に口に出してしまった言葉を思い出して、その後は誰の声も聞こえなくなってひとり引きこもった。

……あつ……やってしまった……

怒りに任せてしまうのがどんなに怖いことか分かっていたことなのに……

……
何で、私はセブルスを苦しめるような言葉を簡単に口にできたのよ

……
彼を苦しめるようなことをしてどうするのよ……

私はマクゴナガルと話しているルーピンに視線を移し、大人しく待っているセブルスの表情を見た。

無表情だったが、どこか傷ついたような悲しそうな苦しそうなセブルスの姿を見た瞬間私はもうその場にはいられなくなって、後ずさりをする。

「…………レイラ…？」

私の様子がおかしいことに気づいたルーピンが私の名前を呼んできたが、あんなことを言ってしまった後悔が襲いかかってきていた私は、俯いたまま小さく呟くことしかできなかつた。

「……………ごめんなさい……………」

耐えきれなくなつた私が逃げるようにその場から走り出すと、後ろからルーピンの声とマクゴナガルの呼び止める声が聞こえてきたが、足を止めることなんてできるわけがなく、私は自然と湖のところへ足を向かわせていた。

今日はやけに風が強く、髪も鬱陶しいほどに顔に当たってくるが今はそれどころじゃなかつた。

木の下に座り、手で顔を隠して目を閉じる。

…………最低だ……………本当に最低だ

私が悪いのに……………逆ギレして……………

更には……………彼を追い詰めるようなことを言つて

本当に私は何がしたいのよ……………

「……………こんなんじや……………彼を救えないよ……………」

口に出すと嫌という程思い知らされて、涙が溢れ出てくる。

こんなんじや……………セブルスの死を変えられない

……………これじゃあ…変わるわけがない。

もう……………どうすればいいか…分からない

どうすればセブルスが笑ってくれるのか、

どうすればセブルスが生きている未来にたどり着けるのか、

どうすれば彼が幸せになれて、心から笑える日がくるのか…

もう分からない……

「……………誰か……………助けて……………」

私を助けて欲しいんじゃない…

誰か…私の代わりにセブルスを助けて欲しい

助けを求める声なんて、強い風に吹き飛ばされてしまったかのようにすぐに消えてしまって、誰にも届くことなんてなかった。

その場を逃げ出した私はあの後どうなったかは分からないが、その後すぐにうずくまっている私を見つけたマクゴナガルに連れていかれたが特に説教も受けることはなかった。叱ってくれた方が楽だというのに、何も言わないものだから逆に責められているような気がした。

眠くないがベッドに横になりながら、誰もいるはずがない部屋を見回した。結局、あの後セブルスやエバンズにちゃんと謝ることもしないまま私は寮に戻って一夜を過ごしてしまった。

……………ああ…授業…またさぼってしまった

私は呑気にそんなことを思いながら額に腕を当ててゆつくりと瞼を下ろす。今他の生徒は授業の真っ最中だろう。目が覚めても何故か食欲もなかったから大広間にも行っていないし、一応制服には着替えたものの、セブルスに会うのが怖くて、部屋から出ることができなかった。

……………嫌われたかな…

昨日のことを思い出して、私はまた溢れてきそうになる涙を堪えるために唇を噛み締める。今までだってセブルスと別に仲が良い友達だったわけではない。だけど、普通に話すことができるほどまでにやっと進展したというのに、昨日のたった一言で今後彼と話すことなんてないだろう。今まで、普通に彼と話していたことを思い出して、手を握りしめた。

……………本当に…馬鹿だな…

私はあの時の自分を責めるように心の中で呟いた。誰もいない部屋は勿論少しの物音でも聞こえるぐらいに静まり返っていて、私が少し眠ろうかと全身の力を抜いた瞬間、私を起こすかのように突然足元に置いてあるトランクが音をたてた。それはあまりに大きな音で、驚いた私は最初何が起きているのか分からなかったが、直ぐに自分のトランクの様子がおかしいことに気がついた。ベッドから抜け出して暴れるトランクを駆け寄る。何かが中から出ようとしているかのように、鍵が今でも壊れてしまうのではないかと思うぐらい嫌な音を立てていた。

暴れ続けるトランクを手を持ち、ベッドの上に置くとトランクの重みで、毛布が沈み、恐る恐る暴れるトランクの鍵を開けた。その瞬間に勢いよく飛び出た何かは私の顔の前ギリギリを通り、天上にぶつかるるとまた空いているトランクの中に落ちてくる。

危うく顔面に当たりそうだった私は何が起きたのかさっぱり分からずに少し放心状態だったが、トランクの中を覗き込んだ。

服などの着替えが少し入っているトランクの一番上には

……もう、あれから随分と開いていないあの本があった。

もうこの本には触らないと決めていた私は、トランクから出すこともしておらず、とりあえずトランクを閉めようと決心して手を伸ばす。

すると、目の前にある本はまるで私が触らないことを分かっているかのようにひとりでパラパラとページがめくられて、白紙のページでぴたっと止まった。

そのページに今まで通り少し滲んでいる黒いインクで書かれた文章が浮き出してくる。

【貴女に伝えなければならぬことがあります。】

その文章は、どこか焦っているように少し乱れていた。

「私は、的確なことは言えません。貴女なら気付いてくれると信じています。」

私が本に手を伸ばそうとした時、また文字が浮き上がってきた。

「今貴女はきつと私のことを怖がって触れないとでも決めたか、それか私のことなどもう信用していないのではありませんか？」

私の思っていることと全く同じことを的確に言い当てた本の文章を見て、私は少し本と距離を取る。

白紙のページにはまるで私に何か伝えたそうな文章がまた浮き出てきた。

「私が貴女が思っていることや感じていることを知っているのは当たり前なのです。」

貴女は私。私は貴女です。……………しかし、貴女は私にはなっていない。」

「……………貴女は…私？……………」

私は浮き出てくる文章を目で追うので精一杯で、もうこの本が何を言っているのかがわからなかった。

「私は、……………」

私と貴女にとって最悪の結末を迎えてしまった貴女です。」

「……………ちょっと待って……………」

私は無意識にそんなことを呟いていた。

「貴女に伝えたいことがあります。でも最初からそれを話したところで、きつと伝わらない。貴女がそんな簡単に信じれない性格なことは私が1番分かっています。だからこそ、私はこの本を作りました」

…この本が本当に私が作ったとしたら、考えられることはただ一つ。未来の自分が作ったということ。

…でも…そうなるか…

…最悪の結末を迎えてしまったって…

「……………セブルス…」

脳裏にセブルスが首から血を流し生き絶える姿が浮かび、心臓の鼓動が早くなった。今は、この本が本当のことを言っているのかはどうでもよくなって、私は吸い込まれるように何か必死に伝えようと浮き出てくる文章を読み続ける。

「…決して同じ結末ではありません。私は、貴女が今大切に想っている人を確実に救おうとその時がくるまで何も干渉もしなかった。

勿論確実に救えました。その時は、です。」

私に訴えかけるように乱れた文字が次々と浮かび上がってくると、消えていった。

「……………私は、貴女は、一度救ったあの人を目の前で殺されます。もうすぐ全てが終わるといふ瞬間に、彼の真っ赤な血が流れることになる。いくら止血をしようとしても、治癒魔法をかけても血は止まらなくて、貴女は何も出来ない。」

……………本来の終わり方よりも、惨くて残酷で、彼は最後まで苦しんで息耐えます。貴女は自分の腕の中で、だんだんと冷たくなっていく彼を見て泣き叫び続けるしか出来ません。

…苦しんでいる彼を見て貴女は何も出来ない。」

浮かび上がってくる文章が必死に何かを訴えかけてきて、自然と頭に最近みた夢を思い出した。

『……………彼がない…世界に…生きている意味なんてないの…………』
「……………あつ…………」

そうか…そういうことだったんだ。

私はあることが思いついて、口から声が溢れた。

あれは夢じゃなかった…だからあの血の匂いも肉が裂ける音も、生々しい息苦しさもあんなに現実みたいだった。

あれは……………この本を作った私の記憶…………

「…よく考えてみてください。この世界の物語の流れはそう簡単に変えられません。貴女は、関わることのないはずの人間です。

そんな貴女が物語の流れの中の一部だけを変えられると思いますか？

今まで干渉もしてこなかった人間が行動を起こしたところでその時は変わったとしても、物語は歪んだ流れに戻ってきます。結局のところ、貴女に物語を変えるほどの力などあるわけがないのです。」

もうこの本が誰か作ったのか分かった私は、この本が伝えようとしていることを必死で悟ろうと文章を目で追う。

私に物語を変えるほどの力がないことぐらいもうとつくに実感していた。だからそんなに驚くこともない。

…実際に変えられていないのだから。

「だったら、…もう物語の一部を変えるよりかは死の流れを変えるし

かない。物語と死が別物だと気付いたのは私が彼を救えた時に死ぬはずだった人間が生きている姿を見たからです。彼が死んでも、その人たちが死ぬことはありませんでした。どうやら、彼の死がずれたことで死の流れが途切れたのでしょうか。……もう分かったでしょうか？

彼を救うためには、死の流れを変える必要がある。

彼だけではなく、死の流れを変える。

これが大切なことだとどうか忘れないで」

私は、手を伸ばして本を手に取り文章を見つめた。

「……救いたいものがあるのなら、何かを代わりに犠牲にしなくてはなりません。流れに関係する死は、物語に気づかれないように。空白に気づかれてしまったら、強制的に動き出す前に空白を埋めて誤魔化すしか方法はないんです。まるで最初からその人が死ぬべき人であるかのように物語を騙すんです。……………」

全く干渉してこなかった私が、物語を騙すことなど出来るわけがありません。

……もう意味が分かったでしょう？」

……だから、この本はあんなにも私を物語と関わらせようとしていたんだ。

{記憶に頼りすぎるな}

{運命というのは、そう簡単に変えられません。貴女が存在するだけで流れが変わるなどあり得ません。貴女にそんな力はない}

今までの本の言葉を思い出しながら、私は納得して本に視線を戻した。

「…もう時間です。…私が貴女に伝えることはもうありません。私は貴女の言葉を聞くことはできません。ただ貴女に一方的に伝えるしか方法がなかったのです。…どうか許して、

彼を救えなかった私を許して。

…どうかお願いします。

今私がいる世界が訪れないよう、今の私が存在しないよう、行動してください。

もう二度と同じ過ちを繰り返さないで。今ならまだ間に合う。

……まだ物語は始まってもないのだから…」

滲んでいるインクで書かれた文章の上に頬を流れた涙が落ちて、染み込んでいるのに気がついた。

どうして自分が泣いているのかさっぱり分からなくて、ただ溢れてくる涙を拭いながら、本を見つめ続けた。

「全てが終わった後この本をまだこのことを知らない貴女へ」

白紙のページに浮かび上がると、音も立てずに消えて、本はまるでもう役目が終わったかのようにぱたんと音を立てながら閉じた。

これは……

セブルスを救うことができなかった私が書いた本だった。

だから、記憶を思い出した頃に丁度タイミングよく私の隣に本を落とすことができた。……

だから私が悩む時期にタイミングよく忠告をすることもできた。

……間違つても本を捨ててしまわないようにと、私に未来を知っていると印象付けるために、拾った直後に未来を知っているような文章が浮き上がってきたんだ。

……未来の私が書いたとはいえ、所詮は私だから考え方も感じ方も全く同じで、気づくと思つたのだろう。

……でも、そうなるにあのクリスマス休暇を過ごした図書館で未来の私がいしたことになる。

……逆転時計を使ったのだろうか……

いや……でも……それはありえないだろう。逆転時計は魔法省しかないし、そうなる盗んだことになる。それに手に入れたとしても私は、未来の私の姿を見ていないし、逆転時計を使ったということは今の世界にこの本を作った私がいることになる。

そう思い考えているとある言葉が頭によぎった。

『時は進むばかりで決して戻らない。…時が止まることはあつても戻ることとはできない。』

貴女は時を止められても時を戻すことはできない。

しかし貴女自身がそれを望むというのなら、時は戻れるのだろう。』

「……ペンダント……」

そうだ。ペンダント……

……じゃあ、ペンダントで時を戻し、止めて私に届けたのだろうか。

私は、最後浮かび上がった言葉を思い出しながら少し息をついた。

【全てが終わった後この本をまだこのことを知らない貴女へ】

…この言葉の意味は……次は私が過去の自分に届ける番だということだろう。

セブルスを確実に救おうと、このまま関わらず何もしないとどこでも変わらないうということも、必死に本が伝えようとしたことも大体は理解できた。

……でも、できるだろうか。

…そんな簡単に、人は変われるものだろうか。今まで、ろくに関わろうともしなかった私がそんな急に動けるのだろうか。

……昨日あんなことを言ってしまったのに…

私は不安を抱きながらトランクの奥に本を丁寧にしまい込んだ時、ふとあの夢で見た記憶を内容を思い出した。

……どうして…私は……あの時自分で命を絶ったのだろうか…

彼を目の前で失い、死にたくなるのは分かるが私にそんな自分の首筋を刃物で切り裂けるほどの勇気があるとは思えない。

それに…なんで、アウラに本を託したの？

死ぬなら死ぬでその前に過去の自分に本を届けて全て終わらせてからの方がいいだろう。

… どうして、わざわざ自分ではなく、アウラに本を渡したんだろうか

…

「……………何か…おかしい…」

何かモヤモヤとするものが胸に残ったが、どうすることもできなかった。

本が伝えようとしたことは大体理解できた。物語の流れが変わることを恐れてばかりだと救えるものも救えない。人の死を変えるには、他の人の死を変えて物語に気づかれないように流れを変える必要がある。

それと私はあとひとつ悟ったことがある。それは、セブルスの死は物語に大きく関係しているということだ。

…そうでなければわざわざあの時に物語に関係している人の死の変え方を丁寧に教えるはずがない。

…確かによく考えてみれば、彼の死であの人はニワトコの杖が自分ものになったと思ひ込み、そのおかげでハリーは死なずに済んで、あの人をこの世から消滅させることができた…

全く、関係がないわけじゃない…

……でも今は…まず

……セブルスに謝らないと…

あの時のことをまだちゃんと謝っていないなかった私は、謝ろうと思っても中々タイミングが掴めずについて時間だけが残酷に過ぎていった。

話しかけようとしても、声が出ず、一歩が踏み出せない。

今日こそは今日こそはと言ひ聞かせても、伸びに伸びているから今こうしてセブルスの後を追っているストーカーのようになってし

まっている。

私は、壁から覗き込んで廊下をひとり歩いていて彼を確認して、呼吸を整えて、一定の距離を保ちながらセブルスの後を追いかけた。

すれ違う生徒からはちらちらと、何か変人を見るような目で見られているが今はそんなこと気にしていられず、人気の少なくなったところに出た時に話しかけようと自分に言い聞かせる。

運良く、前を歩くセブルスは人気の少ないところへと出てくれて、私はぼくぼくと緊張しだす心臓の鼓動を全身で感じながら、覚悟を決めて彼の名前を呼ぼうと息を吸い込んだ。

「…何か用か？」

前を歩いていたセブルスはどうやら私が後をつけていたことに気づいていたようで、しびれを切らしたように彼の方から問いかけてくる。

私の方を振り返り、問いかけてくるセブルスの声は低くて、体は自然と緊張しだした。

「……………貴方に…言いたい…ことがあるの…」

声は震えていたし、途切れ途切れだったがちゃんと声に出せたことにまずはほっとした。

「……………あの時…貴方に……………酷いことを言ってしまったことを…謝りたくて…」

一度声が出れば後は簡単に出るもので、私はセブルスの瞳を見ながら声を出す。

……………許してくれるとは思っていない…

こんなの…私の自己満足だ……………

そんなこと分かってる。

「…………別に謝らなくてもいいだろ」

セブルスの口から出た冷静で淡々とした声に、私は驚きを隠せず黙り込んだ。

「お前が言ったことは正しいじゃないか。僕が彼女にあんな言葉を言ったのも、彼女を傷つけたのも、あんなことを言う資格がないことだって、全部お前の言う通りだ」

あまりに冷静に淡々と言うものだから、私は声が出なかった。

「だからそんなこと気にしなくていい」

……………どうしよう…何て言えばいいのか分からない…

「違う…あれは私が悪くて……………貴方は悪くない」

思っていることを上手く言葉にできなくて、私の口からは途切れ途切れの言葉しか出てこない。

「私が勝手に怒って、逆ギレして」

「僕も、杖を向けた」

「酷いことを言った」

「だから、それは気にしていない」

途切れ途切れの私の言葉に1つずつ返してくるセブルスの言葉が、私にのしかかってくる。

「…お前が後ろめたく思う必要なんてない。だから、もう気にするな」

表情ひとつ変えずに言ったセブルスは、それだけ私に言い残して、その場から去っていく。私はそんなセブルスにかける言葉を見つめることが出来ず小さくなる後ろ姿を見つめるしかなかった。

私は顔を下ろして呼吸を整えると、あの時怒りに身を任せた自分にも、自分で壊したくせに悲しくなる私にも、何故か無性に腹が立つてくる。

どんなに後悔しても、もう元には戻せない。

……………あの言葉を無しにはできない…

私は、小さくなったセブルスに背を向けてゆっくりと歩きだす。

……………こんな気持ちだったのかな…

私は後悔の念に押しつぶされて痛む胸の痛みを感じながら、彼とは逆の方向に歩き進めた。

……………セブルスも…彼女にあの言葉言ってしまった後…こんな苦しくて、痛かったのかな

結局私は自分のことしか考えてない。

彼の幸せも願えず、
彼を苦しめるような言葉を簡単に吐き出して、

……何が、セブルスを救いたいよ。

こんなんじや、絶対に救えない。

変わらないと、

こんな弱くて、臆病者な私を

自分のことしか考えられないような私を

泣いてばかりな私を

捨てるんだ。

「……………これから……………どうしようか……………」

私は呑気にそんなことを呟きながら、遠目で友達と話しているセブルスの姿を目で追った。物語に干渉しないことが一番の近道ではないことは分かった。…だが、この状況で一体どうすればいいのだろうか。

謝ったとはいえ、関係が元に戻るわけがない。すっかり闇の魔術に

染まったセブルスとどう関わればいいというのだろう。彼は、あちら側の友達と行動しているから、話しかける隙なんて見せてくれない。それに、私がそんな急に動けるほどの勇氣もあるわけがない。

……やれないじゃないと……やらないと

そう思ってもそう簡単に動けなくて、私の為に時間が止まってくれるはずもなく、ただ時間だけが過ぎていった。

ひとつ変わったことといったら、日付が増えるごとに連れてポッターがセブルスに突っかかることが極端に減っていったことだ。私が怒鳴り散らしたあの出来事から、本当に最近は見えていない。

あんなに顔を合わせただけで日常茶飯事のように喧嘩をしていたはずなのに、今はもう顔を合わせてもお互い杖を取り出すことはなく、平然と通り過ぎていくのだ。

ポッターの傲慢さが少しずつなくなるのに比例するかのようにはセブルスはどんどんと闇の魔術に没頭していつている様子だった。

両手に教科書と羊皮紙を抱え、これから一体どうしようかと考えながら、図書館で勉強をしようかと移動している時に、こちらを見てにこにこ笑いながら手招きをしているダンブルドアが目に入った。どうやら彼は散歩をしていたような様子だったが、……全く話したことはない長髯のお爺さんに親しげに手招きをされるのはある意味恐怖でしかない。

辺りを見回して見ても、完全に私を呼んでいて、渋々ダンブルドアに近寄った。

「……何か用ですか？ダンブルドア先生」

少しめんどくさいオーラを出しながら、言うとき笑い声が聞こえてきた。

「露骨に嫌がらんでもよかろう。」

「それで、何か用ですか」

「儂と少しお茶をせんかの？」

「いや、結構です。」

めんどくさい事になる事が大体想像できた私は、断りを入れてダンブルドアの青い瞳を見つめた。

「…先生方が、来年はN. E. W. T試験があるからといってすごい量の課題をお出しになるので、終わらないんですよ。……先生が少し減らすようにと言ってくれるのであれば、お茶をする余裕もあるんですけどね」

適当な言葉をペラペラと並べてその場を立ち去ろうとすると、少し考え込んだダンブルドアは、驚くようなことを言い出した。

「…では儂から少し減らすようにと先生方にお問い合わせしてみようかの。そうすればお主とお茶をする事ができるということじゃろう？」
相変わらずにここにこと笑いながら話すダンブルドアを見つめて、私は溜息をついて渋々了解すると表情を変える事なく日時を伝えてきた。

「今週の日曜日の3時ぐらいに校長室に来るといい。美味しいお茶とお菓子を用意しとくでの。くれぐれも忘れる事がないようにするにとじゃよ」

そう告げたダンブルドアは満足そうにその場を去っていく。

……日曜日の3時か……

少し憂鬱になりながら、その日は図書館で課題を終わらせた。

日曜日なんてあつという間にきて、私はすっかり3時を指している時計の針を見ながら、重い腰を上げてゆっくりと校長室に向かった。目の前に立っているガーゴイルを見つめて私は合言葉を教えてもらってない事に気付いた。

ダンブルドアが合言葉にしそうな言葉をいくつも口に出してみたが、ガーゴイルが動くことはなく私はもう諦めて帰ろうとする。

背を向けた時に後ろから、石が擦れる音が聞こえてきて振り返るとなんとあんなに何も反応がなかったガーゴイルが動いて螺旋階段が目の前に現れた。

「……………最初からそうして…」

ダンブルドアが開けてくれたのか、何なのか知らないが、最初から開けてほしかったし何よりダンブルドアが合言葉を教えてくれているればこんな廊下にひとりずっと佇んでいることもなかったはずなのだ。

私は少し苛つきながら階段を上っていたが、校長室の扉を見た時には、初めての校長室に少しドキドキしながら中に入った。

思い出した記憶と全く同じ内装で、ダンブルドアが一人がけの椅子に深く腰掛けてひとりお茶をしていた。

「よくきてくれたの。もう3時半じゃからきてくれないのかと思ってひとり寂しくお茶をしてみましたわい。…ほらそこにお座り」

にこにこ笑いながら話すダンブルドアの声を聞きながら、ひとりで私の所まで近寄ってきた椅子に腰掛けて、ふよふよと宙を浮きながら私の手元まできたティーカップとクッキーがのったお皿を受け取って近くの机に置いた。

紅茶を一口飲んでみると、ダンブルドアが愉快そうに話しかけてく

る。

「ご両親は元気かね？」

「ええ…というより、母と父を知っているんですか？」

「勿論じゃよ。2人ともこの学校を卒業したからの。……そういえば、ノアも元気かな？」

「ああ…兄は相変わらずドラゴンに熱中していますよ。」

「あの子は少し変わっておったからの」

何か思い出したようにダンブルドアは1人笑い出した。あまりこのお茶会自体乗り気ではなかった私は、クッキーをひとつ頬張るとまだ笑っている彼を見つめて本題を切り出す事にした。

「……………それで、私に何の用ですか？」

私の言葉に、ダンブルドアの表情が変わったのを感じたが、出来るだけ瞳を見つめた。

「…お主とお茶会をしようかと思っただけじゃよ。」

「……………死喰い人のことですか？」

誤魔化そうとするダンブルドアの言葉を無視して私は、彼に呼び出される心当たりを口に出した。

「……………貴方なら、もう知っているのですよね？今母も父も兄も勿論私も、命を狙われていることぐらい。」

ダンブルドアは何も言わずに私をただ見つめてきた。

「……………大丈夫ですよ。人は死ぬ時には死ぬのですから。私の場合はそれが少し人よりも早いかもしれないというだけです。」

「……………君は死を恐れていないのか？」

ダンブルドアの青い瞳が私を捉えて、じっと見つめてきた。

……………本当にこの目は嫌いだ。

まるで全てを見透かしてきそうで、今この時も私がこの世界の未来を知っていることさえも彼だったらとつくに知っているのではないかと思うくらいだ。

「……私はそんなに強くありませんよ。

……死ぬなんて怖いに決まっています。……やりたいこともありますし……」

私はゆっくりと立ち上がって、校長室を後にしようとダンブルドアを見つめた。

「貴方がいる限り此処は安全なのでしょう？……だったら大丈夫ではありませんか。……」

……それで、話は終わりですか？」

私が少しめんどくさそうに言うと、ダンブルドアはゆっくりと口を開く。

「……少し儂の耳に真面目な君が、今年に入って授業を無断欠席しているという話が入ってきての」

「……ああ……大丈夫です。ちゃんとこれからは、授業をサボることなんてしませんから」

私はさっさとこのお茶会を終わらせたくてしようがなく、作り笑顔を浮かべる。

「じゃあ、そろそろ失礼しますね。

美味しいお茶ありがとうございました。」

私が軽くお礼を言うとダンブルドアはまたいつもと変わらずにこりと笑みを浮かべた。

「いつでもおいで。儂は結構暇じゃからの」

何とも嬉しくのないお誘いを受けて私は貼り付けた笑顔を浮かべながら、校長室を後にした。

このお茶会は、結局何のためにやったのだろうか。私に何か変化がないか見るためなのか、何か探りを入れるためなのか。

ダンブルドアのあの様子だと、父と母のことは知っている様子だったし、何より兄とは親しそうな感じだった。

……流石のダンブルドアでも私が未来を知っていることはまだ知らないだろう

だけど……この調子だとすぐにばれてしまいそうな気がしてならない……

いつも通り笑みを浮かべてくるダンブルドアの顔が浮かんできて溜息がでた。

しかし……何とも楽しくないお茶会だった。これは断言できる。

……あんな威圧をかけられては、せっかくの美味しいお茶も不味く感じるし、……というより私はあまりダンブルドアは好きではないからそう感じただけかもしれない。

読む気などさらさらない魔法薬の本を片手に、歩き慣れた廊下をただ歩き進める。すっかり暖かくなり、天気もいいこんな日には外に出て空気を吸ってみたい気分だ。

外に出ると、太陽の日差しで目が眩み前が見えなくなるがそれも適当に歩いていると段々と慣れてきた。何人もの生徒達とすれ違いな

がら無意識に私は湖の方へと歩いていたらしく、あの場所に着いていた。ちらほらとしか人がおらず、私は木の影に腰を下ろして、もたれながらきらきらと輝いている湖を見つめる。

木の影にいと気温もちょうどよく時々ふく風が気持ちよかった。少しウトウトしながら、ただぼんやりと過ごす。

……お昼ご飯……食べに行かないと……

そう思っても、私は動くこともせずに読む気がないがとりあえず本を開く。

魔法薬の本を持っているとセブルスが側にいるような気がするのは気のせいだということも分かってる。だけど、やめられない。

だからこうして気づけば私は図書館で魔法薬の本を借りては、肌身離さず持っている。

……本当にそろそろ……病気だな……

そう思うと、乾いた笑いが溢れた。私は襲いかかってくる眠気に抵抗もせず、瞼を下ろした。

暖かい日差しがまるで体を包み込んでくれているみたいでもう気づけば意識などなく、ゆっくりと目の前にはセブルスがふわりと現れた。

私の方を見て満面の笑みを浮かべるセブルスに駆け寄り、思いつきり抱きつくと彼は優しい包み込んでくれる。

『……レイラ……』

私の名前を読んでくれるセブルスの声を耳元で聞きながら私は口を開く。

「……………セブルス…大好きよ、愛してる」

当たり前のようにセブルスの手が優しく頭を撫でてくると少し恥ずかしそうな声が聞こえてきた。

『……………僕も…君を、愛してる…』

ああ……………幸せだ…

こんなに近くにいます。

セブルスが抱きしめてくれている。

彼が私の愛を受け取ってくれる。

私に笑いかけてくるセブルスを見て、私も自然と頬が緩んだ。彼の頬に手を伸ばし、触れた瞬間に誰かが私の中に入ってきたような感覚に襲われたかと思うと、寒気が襲いかかってきて、気持ち悪い感触がする。すると目の前にいたはずのセブルスは、煙になって消えて目の前には、今まで見たことあるような光景が混ざっているかのように、色々な色が急激に移り変わっていく。

突然止まったかと思えば、目の前にはいつも通っている廊下が広がっていた。私は何が起こっているのか分からないまま、何かをすることもできない。

…少し……………視線が低い…？

いつもより明らかに視線が低く、自分が手に持っている魔法薬の本は真新しいもので、見覚えのあるものだった。体はいうことを効かず、まるで一人称の映画を見ているかのように、ただ勝手に視線の方向も変わっていく。

ゆつくりと本から視線が上がったかと思うと、目の前には幼いセブ

ルスとエバンスの2人の姿が目に入った。その瞬間、ヒュツと息がもれて、血の気がひく。

…いや…やだ…見たくない!!!やだ!!!

拒絶しようとも、今まで思い出さないようにしてきた記憶は意図も簡単に進んでいく。

まだきらきらと輝いている私の世界は、一途にセブルスを見つめながら、期待するかのように勇気を振り絞って2人に近づこうとする。

友達に呼ばれたエバンスがセブルスの側を離れると今だと言わんばかりに大切そうに本を抱えながら駆け寄ろうとした瞬間耐えきれなくなつた!!私は叫んでいた。

やめて!!!!

今から見てしまう光景を見てしまわないように、止めさせるように手を伸ばすと、誰かの腕を握った。

瞼を勢いよく開けると、私は呼吸を乱しながらレギュラスの腕を握っていた。彼の後ろに広がっている湖は、さつきと変わらずきらきらと輝いている。

少し前のめりになっている彼と、さつき見たことを思い出してレギュラスが何をしたのか大体予想がついた。

………開心術………

やった本人も私が開心術を使えることに驚いた様子だった。私自身、使えるなんて思ってもいなかった。

今この時だつて実感が無い。

「……………覗き見なんて……………最低ね……………」

私は苛立つ気持ちを抑えられず、彼の体を乱暴に突き放す。他人に勝手に記憶を見られるのは、気持ちの良いものじゃない。

……彼はどこまで見たのだろうか？…一体どこからどこまで…

立ち去ろうとする私の腕を握って、引き止めてくる。

「……………勝手に覗いたことは謝ります。…だけど、貴女がクリーチャーにあのコインを渡した理由が知りたかったんです。」

必死に話しかけてくるレギュラスは、随分と彼らしくなかった。

「クリーチャーが教えてくれた貴女の言葉はまるで、未来を知っているみたいだ……………」

貴女は一体何を知っているんですか？」

レギュラスは私を逃さないようにと手首をきつく握りしめてきて、少し痛かった。

「……………どうしてそれを私に聞こうともせず、最初から覗いてきたの」

「…それは……………貴女に直接聞いたところできつと誤魔化されるのは明白ですし、…話したくても貴女が僕のことを避けるので、話すタイミングなんてなかったから…」

「別に貴方を避けているつもりなんてないわよ。……………用がないのに、話すこともないじゃない。」

私は彼の手を剥ぎ取って、睨みつける。

「勝手に覗いておいて色々都合良すぎないかしら。」

そんな奴に答えたくもないわ……………貴方には、がっかりよ」

彼に背を向け立ち去ろうとするが、それでも諦めない彼の声が後ろから聞こえた。

「待つてくださいい！」

私は足を止めて杖を取り出し、近寄ってくる彼に向けた。レギュラスは、びくりと体を停止させ、私を見つめてくる。

「……………付いてこないで。……………私は貴方を傷つけない。」

夢だろうと、セブルスに抱きしめられたのが嬉しかった私は、彼が覗いてきたことと、彼の開心術のせいで夢が消えてしまったことに腹を立てていた。

私の低い声を聞いたレギュラスは自分を責めるような表情を浮かべる。私は、彼に背を向けて駆け足で学校に戻った。

少し泣きそうになって涙が溢れてしまう前に目を擦り、逃げるように寮に向かう。

だめ、泣いたらだめ。

あまりに幸せすぎたあの夢から覚めた私には、ただ胸のあたりが重苦しくなって虚しくなると、悲しみだけが襲いかかってくる。

あんな夢を見ても、幸せな時はその時だけ。

セブルスが言ってくれたあの言葉も、

抱きしめてくれた感触も、

貴方が私にだけを見て向けてくれた笑顔も、

……もう……何も残ってない。

こんなに悲しくて、虚しくて、苦しいのに、なんでもう一度見たい
と思ってしまうんだろう。

……なんで……

……私はまだ期待をしているの……

20 ペンダントの秘密

結局私は、その後は特に何をするともなく過ごしてしまった。

こればかりはしょうがないのだ。来年あるN・E・W・T試験に向けて毎日のように出された大量の課題に追われ、さらには姿くらましの試験にも備えないといけなくて、学校生活を送るだけで私は精一杯だった。

無事に姿くらましの試験に合格したと思えば、次は学期末試験が待っていたしもう気づいたらもう1年が過ぎていたといった感じだ。言い訳にしか聞こえないが、もう過ぎてしまったものはしょうがない。

家に帰り着いたその日の夜は、風呂に入ったあとすぐに一年の疲れを癒すかのようにベッドに飛びこみ、寝ようかと瞼を下ろす。

……疲れた……

そう思いながら少しウトウトした時、部屋の扉を叩かれた音が聞こえて少し寝ぼけながら、戸を開けた。

「……お父さん……どうしたの……」

父が自ら私の所へ来るなど珍しくて、一気にぼんやりとしていた意識がはつきりする。

「……お疲れのところすまないね。……少しだけいいかな?」

「……あ……うんそれは別にいいけど」

私は少し戸惑いながら、父を部屋の中に入れて扉を閉めた。父は少し小さなソファアールに腰掛け、私はその向かい側の1人掛けのソファアールに座った。

「…それで一体どうしたの？」

父はどこか言いにくそうに私から視線を逸らして、ゆっくりと口を開いた。

「…少しアメリカに怒られてしまっただね。……」

「……えっ？うん。それが何」

言っている意味が分からず私が冷たく返すと、父はまた話し出した。

「……レイラにペンダントを送ったということを知ったらいいんだ。」

その言葉に私は疑問しか浮かばなかった。

「どうしてそんなことでお父さんが怒られなければならないのよ。…それにあのペンダントって随分前のクリスマスプレゼントじゃないかい。……それを何今更」

「…所有者以外には、単なる小物入れのペンダントにしか見えないからね……どこで気づいたかは知らないけど」

そう言う父は、溜息をついてぽつりぽつりと話し出した。

「……レイラにこのペンダントが役に立つ日が来るかもしれないと思っただけ……間違っていたかも……」

見たことのない父の姿に不安を覚えたと同時に、何かペンダントについて隠してある事があると思って少し乗り出しながら問いかけた。

「……お父さん……このペンダントについて何か隠してある事があるの？」

父は私が手に持っているペンダントを見て、白状するかのようにぽつりぽつりと話し出す。

「……本当は……ペンダントを渡した後直ぐに言つとくべきだったんだろうけど、どうしても言える勇気がなかったんだ。」

痛々しく笑う父は、何か後悔しているような様子だった。

「……大丈夫よ。私はそんなに弱くないわ」

……私が弱くないわけがないが、こうでも言わないと言ってくれないような気がする。

父を後押しするかのようにつた私の言葉が部屋に響くと、少し俯いた父が瞼を下ろした。

「……レイラは……強いな……」

ぼそりと呟いたその声は確かに聞こえてきたが、深呼吸をして真剣な表情を浮かべてきた父を見ると何も言い返せなかった。

「……そのペンダントは、呪いのようなものがかかっているね……だから時を止めることも、戻すこともできるし、所有者以外にそのペンダントの本当の姿が見えることもない。」

……どんなにそのペンダントに触れても何も反応しなかった

だろうか？」

私は頷いて父の言葉の続きを大人しく待ち続けた。

「……それはね……レイラはまだ見ていないからだよ……」

「……何を……」

「……それは……」

身近な人の死……だよ」

「……えっ？……」

父の口から出た思いがけない言葉に、自分の口から間抜けな声が出て、私の頭の中は真っ白になる。

「……そのペンダントは、時を止めることも戻すこともできる。……でもね、それを使えるようになるのは身近な人の死を目にした時からなんだ」

「……何それ……どういふことなの」

「……それは誰にもわからない。……ただそういう仕組みなんだよ。

……時を止めれるのは、身近な死を目にした時から」

……時を止めれるのは……」

父の言葉に、引つかかって私は無意識に聞き直していた。

「…時を止めれるのは、って…どう意味なの」

「……時を止めれるのと、戻れるのは別物でね。」

……時を戻すことができるのは、所有者の死をそのペンダントが見守った後に最初に手に取った者が一度だけ」

「…………つまり、私は時を戻すことはできないってこと？」

父は何も言わずに見つめ続けてきた。

「…………そういうことではないんだ。…確かに所有者自身がペンダントを使って時を戻すことはできない。……でも、そのペンダントは確かに所有者が1番必要とする過去に、最初に手に取ったものを連れていく。」

…………実際に使ったことがないから、これが本当かどうかは私には分からない。

…レイラ、ペンダントを開いてごらん」

父に言われた通り、私はペンダントを開ける。惑星のようなものがいつも通り飛び出してきてペンダントの周りを回り出すと、何本もの針がものが時を刻んでいる。

「……青白い球体がペンダントを回っているだろう？……それはいくつに見える？」

私は、ペンダントに視線を下ろして最初見た時から変わらない4つの惑星のようなものを見て口ずさんだ。

「……………4つだけけど…これがどうしたの」

「……………それは、今までそのペンダントが見守った所有者の死の数だ…」

そう聞くと、急にそのペンダントが恐ろしく感じた。

「……………そのペンダントを終わらせれるのは、所有者以外に本当の姿が見える人物がペンダントを一度使用すること……………という言い伝えがあるんだけど……………今レイラの手にはペンダントがあるってことは、誰もそんな人物に出会った事がないし、勿論私も会うことはなかった。

……………それに、その言い伝えが確実だという証拠なんてどこにもないからね」

一通り話終わったのか息をつく父を見て、私は胸のあたりに違和感を感じた。やっとペンダントの秘密が分かったというのに、何故か知る前よりも不安が襲ってくる。

「……………ねえ…お父さん…ひとつだけ聞いていいかな」

父が話し終わって静まり返った部屋に私の声が響いた。

「……………なんだい？」

「どうして、お母さんに叱られたからって今更そんなことを教えてくれたの？」

私の問いかけに何も答えずに、ただ見つめてきた。

おかしすぎるのだ。

母に叱られたからといって一度自分で決めたことを簡単に変える人ではないのに、あんなに使い方を教えようとしなかったのに、

こんなにあっさりと私に伝えてきた。……………まるで、

遺言みたいだ…

「…死なないよね……」

震えている自分の声を聞きながら私は、父を見つめ続けた。父はそんな私を見て、少し笑うとゆつくりと立ち上がる。

「…何を言っているんだ、大丈夫だよ。そんな簡単に死なないさ……」

アメリカが私が言わないと、今すぐにも自分が言いに行く時まで言いだした言葉を聞いて、レイラに伝える決心がたっただけの話だ。ただそれだけの理由だよ」

父は私の不安を悟ったかのように、いつも通り笑いかけてくる。

「きつと疲れているんだろう…ごめんね。こんな夜遅くに押しかけて。」

父の大きな手が頭を撫でてくれる感触を感じながら、私は何も答えなかった。

「…………お休み、レイラいい夢を」

優しい父の声が聞こえてきたと思ったら、扉の閉まる音が耳に入ってきた。

私は今自分の中にあるペンダントを見つめて、優しく撫でる。

父の言葉を聞いても私は不安なままだった。

胸らへんがまるで霧かかったようにもやもやとしているのは、晴れることはなくしやうがなくベッドに潜り込む。

意外にも瞼を下ろせば、眠ることはできたがこんな話を聞いた後で、いい夢を見れるわけもなく、すつきりとしなない朝を迎えた。

ペンダントの秘密を知ってからというもの私はもうペンダントを肌身離さずに持っていた。

これが他の人に渡ってはいけない。
ただ、そう思っただけだ。

私は机の引き出しにしまった黒表紙の本を取り出して、ペンダントの横に並べて交互に見つめた。
ペンダントの秘密を知った今、いくつもの引つかかっている事がある。

本が今私の手にあるということは、未来の私があのかリスマスの時に届けたからだ。

…今まで私はてつきりペンダントを使ったものだと思っていた。
…でも、ペンダントで時を戻れる時には私はもうこの世にいない。
………逆転時計を使ったとも考えにくいし…

私はいつぱいいつぱいになってきた頭の中を整理するように、天上を見上げ本に視線を下ろすと、あの記憶が駆け巡ってきた。

………ああ…だから、あの時の私は死ぬ必要があった
耳元で聞こえる肉が切り裂ける音と、血の匂いを思い出し、少し繋がったような気がして息をつく。

だとしたら…あの後アウラが届けて、そして私のところまで回って

きた。

………ちよつと待つて…でも、そうなるよ

………私は…どんな結果になろうと…死なないといけないということ？

私は、目を閉じて溜息つく。こんなにも死が身近にあるとは思わなかった。

………複雑だ……

…まあ…どんなに私が考えようとも、あの時私の真横に本が落ちてきたという事実は変わらない。…となると…ペンダントで時を止めた可能性が高いのだ。

「………身近な人の死……」

身近な人の死と言われ思い浮かんだ人達は、勿論家族だ。さらに言えば、今丁度死喰い人から命を狙われている。死ぬ機会なんて沢山ある。

………でも、どうして私は生きているの

そんな疑問が頭に浮かんだ。

身近な人の死を目にしないと、時を止めることはできない。目にするということは、家族が殺される場面にいるということだ。

死喰い人が私だけを見逃すと思うか？いや、そうは思えない。

………純血主義ではない家系を、自分たちにとって不利益な存在な奴

らなんて1人残らず殺そうとするはずだ。

考えれば考えるほど分からなくなり、私は一旦外の空気を吸おうと窓を開けた。意外と風が強かったらしく、部屋の中に風が吹き込んできて、髪も、カーテンも舞うようになびいた。気分転換もできて、椅子に座ろうかとした時に、ペンダントの横に置いた本が開いているのが目に入った。どうやら風の勢いで開いてしまったのだろう。…あれから、本を開いてみてももう何も文章は浮かぶことはなく単なる歴史の本になっていた。

私は、本を閉じようと手に持つと、ページの端にとっても綺麗な文字で何やら書き込んであるのに気がついた。

『あの時謝った訳を教えてください。あの時泣きながら微笑んだ訳を、僕の名前を呼んだ意味を教えてください』

とても整っている文字で、読みやすいものだった。私の文字ではない。それは確かだ。

これを書き込んだのは一体誰なのだろう。

そう思つて、文章に触れてみると溶けるように消えていく。

時々、この本に浮かび上がる文章は一体何なんだろう。全く字体も違うし、雰囲気も全然違う。

白紙のページではなく、時々何も変哲のないページの端に書き込むように書かれてあった文章は何なんだろう…

『どうして彼ばかりに執着するんですか？』

『あの時謝った訳を教えてください。あの時泣きながら微笑んだ訳を、僕の名前を呼んだ意味を教えてください』

今まで書き込んであった文章を思い出しながら、本を閉じる。

1回目は私の書き込んだ文章も一緒に消えていったし、今回は触れただけで消えていった。

考えたところで答えなどでないことは分かっていたが、それでも誰のものなのかが気になってしまい、課題を終わらせる為に持った羽根ペンも動くことはなかった。

夏休みも中盤を迎え、そろそろ課題に取り組まないと終わらないと思った私は何とかひとりで取り組んでいたのだが、どうしても薬草学が分からず、羽根ペンが止まっていた。

………ノアに聞きにいこう………

ああ見えて一応首席だし、私よりかは頭もいい。私は羊皮紙を持って部屋を出て、兄がいるであろう部屋の扉の前に立つといつも通り3、4回ノックをする。

………いつもだったらすぐに兄の声が聞こえてくるのだが、いくら待っても聞こえてこない。

………いないのかな………

私はそう思ったが、一応ドアノブに手をかけると鍵はかかっていたなかった。

「……ノア、いな………」

扉を開け、飛び込んできた光景を目にした瞬間私の言葉は途中で消えて、持っていた羊皮紙は下に落ちる。

ソファアーに腰掛けている兄は左腕を押さえて何か耐えるように、目を閉じていた。

左腕が痛いのか、兄の顔色は決して良い色じゃない。

「大丈夫☒」

直ぐに駆け寄った私の顔を見た兄は、そこで初めて私がいることに気づいたらしい。

「…すぐに誰か呼んでくる」

兄の髪が少し汗をかいて額に張り付いているのを見て、父か母を探しに部屋から出ようとする、兄の声が後ろから聞こえてきた。

「…父さんと呼んでくれ……レイラ」

『…セブルスじゃ……ハリー、セブルスを呼ぶのじゃ』

兄の声と一緒に何故か記憶の中で聞いたダンブルドアの声が重なった。

私を見つめてくる兄の表情を見て、私は素直に頷くしかなかった。

……やっぱり……

何か…隠してる…

そう思っても今私にできることは、父を呼ぶことしかできない。私は走って父の部屋の前に着くと、ノックもせずに駆け込んだ。

「レイラ、一体そんなに慌ててどうしたんだ？」

息が切れている私に微笑みながら言ってくる父を見ながら、何とか途切れ途切れに伝える。

「…ノアが……左腕を押さえて…痛そうなの……お父さんと呼んで…言われて」

私の口から、ノア、怪我、というフレーズが出ると父の表情は一変して、すぐに立ち上がった。

「分かった、ありがとう。レイラは、部屋に戻って課題でも終わらせてしまいなさい」

「でも…」

「いいね？」

強く言いつけるように言ってくる父に反論できるわけがなく、私は部屋から出る父の後ろ姿を見て、自分の部屋に戻った。

椅子に座って課題に取り組もうとしても、進むはずがない。

あんな兄の苦しそうな姿を見たら、できるわけがない。

私が溜息をつくとノックの音と、扉が開く音が聞こえてきて後ろを振り返ると、羊皮紙を持った母と目が合った。

「レイラ、これ落ちていたわよ」

「…ありがとう」

母から兄に聞こうとしていた薬草学の課題の羊皮紙を受け取ると、まるで私が不安そうなのが分かったのか、母は静かに話しかけてくる。

「大丈夫よ、レイラ。…そんなに心配しなくても」

「……………うん」

私は母から受け取った羊皮紙を机の上に置いて、相槌を打つ。

「レイラ、明後日にでもダイアゴン横丁でも行きましようか」

急に明るくなった声を聞いて、母を見つめると優しく笑いかけてくる。

「せっかくの休みなのに籠りっぱなしだし、それに教科書も買ったかないといけないでしょ?」

「……………そうだね…うん、行きたい」

言われてみれば確かに、外に出ていないことを思い出して、私は笑いながら頷いた。

外に出て気分転換するのも必要だろう。

来年使う教科書を落とさないように抱えながら行き交う人にぶつからないように歩いたこともあり、今はアイスを食べながら空いているベンチに腰掛けていた。

「あつ…レイラ、少しだけ行きたいところがあるんだけどついてくる？」

母が思い出したように言った声を聞いて私はアイスを食べながら答える。

「いや、ここで待ってるよ。…ゆっくりしてきて」

「そう。じゃあちよつと行つてくるから、ここを動かないでね」

私に微笑んで、背を向ける母の後ろ姿を見送りながらアイスにかぶりついた。

アイスも食べ終わり、私は確認するように服の上からペンダントを探す。

…やっぱり…ない

どうやら、家に置いてきてしまったようでダイアゴン横丁に着いた時に違和感に覚えて気づいたのだが、取りに帰るなんて言えなかった。

…やっぱり…取りに帰ればよかった

最初は軽く別にいいかと割り切っていたのだが、もしかすると今この時兄があのだペンダントに触れてしまうかもしれないと考えると今直ぐにでも帰りたくてしようがない。

…あんなペンダントを…家に野放しと考えただけで、寒気がする。

母の帰りを待ちながら行き交う人を眺めていると、小さな子供達のはしゃぎながら人混みの中を華麗に走り抜けていくのが目に入った。私は転げないかどうかヒヤヒヤしながら目で追う。

「待って!!!」

1人の男の子が、もうとつくに先を走っている子供達に声を張り上げながら一生懸命追いかける姿がどんどんと大きくなる。黒の短髪のその子はどこか、セブルスに似ているような気がして、私はゆつくりと目で追いかけた。

男の子は盛大に足を絡ませて、顔から地面に突っ込むように転んだ。

周りを歩いていた大人達も、勿論私も突然のことに何が起きたから分からなかったが、男の子は転けたところが痛いのか、それとも置いていかれたことが悲しいのか大声で泣きだして、私の視界はぐらりと歪んだ。

どうしてかは分からないけど…何故かこの子を見てるとどうしてもセブルスが重なる。

私がゆつくりと腰を上げて彼に近寄ろうとした時、その子の目の前にふわりと黒のローブが靡いて視界を覆った。

「大丈夫か?」

泣き続ける男の子に視線を合わせて、誰よりも早く近付いたその人の横顔を見て私はその場を動けなくなる。

転けた男の子と同じ黒髪で、真っ黒な瞳を持っている人。

泣き続ける男の子を必死に慰め続けながら、杖を一振りして膝の怪我を治す彼は、よく見たことのある人物だった。

「ほらもう大丈夫だから、泣くな」

少し不器用だけど、それでも優しく頭を撫でるセブルスを見て私は

胸が熱くなった。

………ああ…もう、何でこんなところばっかり見ちやうかな

こんな優しいところばかり見てしまったらどんどん彼を好きになつてしまう。泣きそうになるのを必死に堪えながら、俯いた。

「こんなところで会うなんて、奇遇だね」

突然頭の上から聞こえた声に、顔を上げるとルシウスが笑みを浮かべながら私を見下ろしていた。

「…お久しぶりです……何か用ですか…?」

私は出来るだけ表情を変えずに淡々と答えながら、ポケットに入れている杖を気づかれぬように握り、身構えた。

………彼は…死喰い人だ……今私はその死喰い人に命を狙われている…

少しタイミングが良すぎる…。

まるで私がひとりになるのを狙って話しかけてきたとしか思えない状況だ。

私は周りを警戒しながら、そんなこと気にしていない風に装った。

「用ってほどでもないんだけどね……最後に君に確認しに来たんだよ」

彼は相変わらず、黒い笑みを浮かべてくる。

「本当にこっち側に来る気はないのかい?」

こんなに賑やかな声が聞こえるというのにルシウスの冷たい声は、はつきりと聞こえてくる。

「…集団行動は苦手だと言ったはずで「君は本当にそれでいいのかい？」」

私の話を遮ってくるルシウスを少しだけ睨みながら問いかける。

「……………どういう意味ですか？」

「…君はもう少し自分が置かれている立場を理解した方がいい」
私を見つめてくる彼を見ながら、私は黙り込んだ。

「……………大切な人達を失いたくはないだろうか？」

「…脅しですか…」

何も答えず変わらない笑みを浮かべるルシウスを見て、彼の先にいるセブルスに視線を移した。

「…1つ質問いいですか？」

「…もちろん」

「何故、そんなに私に執着するんですか？」

「……………我々の戦力になりそうな優秀な人材は、是非とも招き入れた
いだろうか？」

どこからどう見たら、私が優秀な人材なのかさっぱり分からない。
殺そうとしている相手を招き入れたい？少しおかしすぎる話だ。

…何か他の理由がある。

直感的にそう思つて、私は自分を落ち着かせるように彼を見ないよう
に前だけを見た。

ルシウスの先にいるセブルスのところには先を走つていていたはずの男の子の友人たちが戻つてきていて泣き続ける男の子を立たせ、それぞれ頭を撫でたり、手振り身振りで励ましていた。男の子が泣き止みつられて笑つた姿を見たセブルスは、安心したように笑みを浮かべる。

男の子の手を握り、その子に合わせて歩き出す姿が小さくなるのをきちんと思送つたセブルスはゆっくりと彼らに背を向けた。少し離れているし、人通りも多いから、セブルスは私に気づくわけもなく、人混みの中に溶けていく。

……セブルスが泣きたい時に：駆け寄る人は誰かいるのだろうか……

……彼が苦しんでいる時に、側に寄り添う人は？

……彼が歩けない時に、手を握つて一緒に歩く人は？

……彼を救う為には、彼を死なせない為には、できるだけ隣に居ないと、

隣じゃなくても、後ろでもいいから、彼から目を離さないようにしないと

セブルスの苦しみを私が背負えることができないのなら、これ以上彼が苦しまないように辛くならないように。

「……………いいですよ……………」

私の言葉に、ルシウスの表情が少しだけ固まったのが分かった。どうやらこんなにもすんなりと受け入れたことに驚いているらしい。

「……気が変わりました。……どうせなら闇に沈むのもそう悪いことではないかも知れませんね」

私が笑みを浮かべると、彼は満足そうに笑って手を差し出してきた。

「……では……行こうか」

私は何も抵抗もせずルシウスの手を握り、立ち上がった。私の教科書が置いてあるベンチが見えなくなり、薄暗い路地裏へと入った時には賑やかな声も遠くなっていくのを感じ、もう後には戻れないと思っただ。

ルシウスが私の手をしっかりと握って、こちらを見た時には突然視界が歪み、上か下かも分からなくなった。

……ああ……お母さんに……謝つとかないと

そう思っただ次、目を開けた時にはそこは見たこともない屋敷が目の前に佇んでいた。

私の手から離れてその屋敷の中へと入っていくルシウスの後ろをついていく。人気がないその屋敷に足を踏み入れた時にはもう生きて帰れないような気がして、寒気が襲いかかってきた。

階段を上がり、一番奥の立派な扉の前で立ち止まったルシウスは何

かを決心したようにゆっくりと扉を開けた。扉が開いた瞬間に冷気が足元を漂って、この先に進んではいけないと本能的に感じ取った体は動かなくなる。

それでも無理矢理体を動かして先を歩くルシウスの後をゆっくりと追い、部屋の中へ足を踏み入れると緊張したように心臓が動き出したのがわかった。

「……………我が君…連れてまいりました。」

ルシウスが見ている方向に視線を移すと、長机に沿って椅子が並び、その一番奥の椅子には対面したくなかった人が座っていた。

例のあの人、

名前を言っではいけないあの人、

死体と変わらないほどの青白い顔色も、袖から出ている蜘蛛の長い脚のような手も、こつちを見つめてくる真っ赤な瞳も全て恐ろしく感じた。

…………指を一本でも動かせば、殺される

そう思うほど、怖くてこの部屋に入ってしまったことを後悔しながら平然を装うことに集中する。

「…………まさか…本当に連れてくるとは…………ルシウス…よくやった」

「…………私などには勿体ないお言葉です。」

冷たい声を聞いた瞬間私の体は、まるで体の芯が凍ってしまったかのように一気に体温が下がり、血の気がひいた。

駄目だ…何か自分から話さない…………

そうでもしないときつと吞まれてしまう。

「……………初めてまして…レイラ・ヘルキャットと申します」

やっぱり、初対面の人には自己紹介ぐらいはしといた方がいいだろうと思いとりあえず名前を名乗ってみた。

「…貴様の家ことは、よく知っている。……………なにやら純血でありながら、純血主義の思想をよく思っていないとか…」

「……………大体は合っていますが、勘違いしないでください。……………私と家は関係ありません」

「……………貴様は違うと？」

「ええ…その通りです。」

……………貴方様のことは前から存じ上げております。貴方の思想が叶えば、魔法使いにとっても私にとっても生きやすい世界になると思っています、喜んで貴方の力になりたいと思っている時に丁度彼からお誘いがあつたものですから」

私はちらりとルシウスの方を見て、あの人に視線を戻した。

騙すんだ…

…ここにいる全員に、私は純血主義で、あの人の考えに賛同している奴だと思ひ込ませるんだ。

「……………我が君、少し発言してもよろしいでしょうか？」

口を挟んできたのは、椅子に座っている1人で見たことのない青年だった。

私より、若い…………

「聞かせてもらおうか…」

「…私は信じられません。彼女が急にこちら側の人間になるつもりで

来たなど到底理解できませんし、何か企んでいるとしか考えられませんか」

「…私は別に貴方に信じてもらわなくとも結構ですよ」

どこか見覚えのあるその青年に冷たい笑みを浮かべながら、口を挟み前に座っているあの人の真つ赤な瞳を見つめる。

「…私は貴方様に尽くせればそれでいいんです」

…私はセブルスに尽くせればそれでいい

私を見てくる赤い瞳から目を離さずに見ていると突然、自分の中に何か入ってくるような感覚に襲われた。

…これ…知ってる感触だ

それはレギュラスが開心術を使ってきた時と全く同じで、すぐにかけられていることに気づき、心に蓋をするように集中する。

…全く見せないというのも、怪しまれる。

私は、見せてもいいところだけをうまく繋ぎ合わせて開心術などできかないように装った。

「……………よかろう…」

上手く出来たかは分からないが、声を聞く限りではそんなに怪しまれた様子はない。

気持ちの悪い感覚が終わりホツとしたのもつかの間、ゆっくりと立ち上がったあの人が近寄ってきて初めて顔がはっきりと見えた。

真つ赤な瞳には、温かい光など差し込んでいなくてその瞳だけで人を殺してしまいそうなほど恐ろしかった。

「貴様にチャンスを与えてやろう。」

突然、聞こえた冷たい声に顔を上げるとあの人何か探るように私を見てきていた。

「最近とても面白いことを耳にした。何やらお前の家には不思議なペンダントがあるとか」

ペンダントとという言葉が聞こえた瞬間、私の心臓は大きく波打つ。体が緊張したように変に力が入り、心臓の鼓動は激しくなっていく。私は平常心を保ちながら静かに返した。

「…ペンダント…ですか？…そのようなものは聞いたことも見たこともありません」

運良く今は、ペンダントを持っていない私はあの時取りに帰っていたらと考えると変な汗が出てきた。

…一体どこで聞いたのだろうか。

もし、彼が時を止めることを既に知っていたとしたら、

もし、それを使うことができたら

セブルスを救う以前の問題になってしまう。

「……………貴様がそのペンダントを俺様の元に持ってくれば、お前を俺様の僕として歓迎してやろう」

…なるほど…最初からペンダントが目的だったんだ。

だったら、ルシウスが私に執着していたのも納得いく。

「……………ペンダントを無事届けてさえくれば、貴様の命も勿論貴様の家族の安全も保証してやろう。……………ただし、少しでも奇妙な行動をしたり、期待を裏切るようなことをした場合に」

あの人は、私の胸元に杖を向けてくる。私はその意味が分かって、恐怖で体が強張った。

ゆっくりと私に近づき全く動けない私の耳元で囁いてくる。

「……………大切な者の苦しむ叫び声を聞きたくはないだろう?」

私の脳には、父や兄、母が苦しむように叫ぶ光景が浮かび上がってきて心臓の鼓動が早くなっていく。

「……………分かりました。……………必ず貴方様の元にペンダントを届けてみせます。」

私の声は、恐怖で少し掠れていてそう答えるだけで精一杯だった。私の言葉を聞いたあの人は満足そうに口角を上げて、ゆっくりと口を開く。

「……………期待しているぞ」

声を聞いたただけだというのに、私はもう目の前にいるあの人に縛られたかのような感覚に襲われた。

ばちんという音が聞こえると宙に浮いていた足は地面を捉えて、目の前には気味の悪い店が並んでいる一本道がずっと前まであった。看板を見上げるとそこはノクターン横丁と書かれている。

何も言わず先を歩くルシウスの後を追うと、だんだんと人の話し声や足音が聞こえてくる。

どうやらダイアゴン横丁までの道のりを案内してくれたらしく、少し眩しい光が目には差し込んできた。

「レイラ!!どこにいるんだ!!」

急に私を呼ぶ声が聞こえてきて、ルシウスの背中から覗き込むように人混みを見ると、必死になって私を探している兄の姿が目に入った。

その瞬間、何か家族を裏切ったような気がして、胸が痛くなる。

中々動かない私を見て、ルシウスは背中を押してきて、私は少しよろけながらも彼を見つめた。

「…君なら上手くやれると信じているよ」

相変わらず、彼は張り付いた笑顔を浮かべてくる。

「……………」期待に添えるように頑張ります」

私も負けじと作り笑顔を浮かべて、ダイアゴン横丁に出た。人混み紛れながら、見失ってしまった兄の姿を探す。

「レイラ!!」

後ろから私の名前を呼ぶ声が聞こえたかと思うときり腕を掴まれた。ゆっくりと振り返ると、すごい顔をした父は額に汗をかいていた。

「…お父さん……」

どれぐらい走ったんだろう。父は乱れた呼吸を整えながら、安堵したような表情を浮かべる。

「父さん!!レイラは見つかっ…レイラ!!!」

父の後ろから、兄も駆け寄ってきて私の姿を見た瞬間抱きついてきた。汗の匂いがして、体は熱かった。

「…よかった…本当に良かった」

耳元で聞こえた兄の声は、少し震えていて泣き声が混ざっていた。

「さあ、家に帰ろう。アメリカが待ってる」

父は優しく微笑んできて、さっきまであんなに冷たかった体はだんだんと温かくなっていくように感じた。

涙を堪えるので精一杯で、私は謝ることもできずに頷いた。

家の扉を開けた瞬間に母とアウラが駆け寄ってきて、目が腫れている母が私に向かって声を張り上げる。

「どこに行っていたの!!!こんな時に独りになって!!!何かあったかと心配したのよ!!!」

あまり母に怒鳴られたことのない私は、母の怒鳴り声に驚いて涙がこぼれ落ちてきた。

…ああ…泣かないって決めてたのに…

そう思っても、まだ家族が生きることが嬉しくて、安心したかのように抑えていた涙が溢れでてくる。

「……………ぐめんな…さい…」

嗚咽混じりに謝ると、母は力強く抱きしめてきた。

「……………私もごめんね。…貴女をひとりにしてしまつて」

謝ってくる母の言葉を聞いて、私はお母さんは悪くないと言いたかったが、言葉が出てこなくて頭を横に振ることしかできなかった。

「……………本当に良かった…無事で…」

優しく頭を撫でてくれる母に甘えてるように、私は声を押し殺すことなく泣くことしかできなかった。

落ち着いた私は、母からあの時のことを言つて聞かされた。

私がルシウスと姿を消した後、用事を済ませた母は居るはずの私の姿がないのを見て、すぐに探したらしいがどうしても見つけられず一旦家に戻つて父と兄に事情を説明したらしい。母は私とすれ違ひにならないようにと家に待機して、父と兄が私を探した。

そう話す母は、どうやら思い出したようでもた泣きそうな表情を浮かべる。

「ところで、レイラ。どこに行つていたんだ？」

兄が不思議そうに問いかけてきて、私は少し言葉を詰まらせる。

……例のあの人に会っていたなんて言えるわけがない……

言っただけはいけない……誤魔化さない……

「ダイアゴン横丁の店にも、通りにもどこにもいなかったし……」

「……………ノクターン横丁に行ってたの……」

私の言葉に、家族は雷に打たれたように体を強張らせた。

「ノクターン☒何を考えているの☒」

母は、私の肩を持ってすごい表情で声を張り上げてくる。

「母さん、落ち着いて。レイラも怪我なく戻ってきたんだし、そんな声を張り上げなくてもいいじゃないか」

兄が横から母を慰めるように声をかける。

「……………前から興味があったの。」

……お母さんが戻る前に戻ればいいと思って……ごめんなさい」

溜息をつく母と、謝る私の頭を撫でてくる兄を交互に見て、ぽろつと本当のことを言ってしまったように唇を噛み締めた。そんな私の姿を見てか、後ろにいた父が声をかけてくる。

「……………レイラ、少しだけ話したいことがあるんだけど、いいかな？」

いつもと変わらない笑みを浮かべてくる父は逆に恐ろしくて、頷く

ことしかできなかつた。何を言われるのかと思ひながら先を歩く父の後を追つた。

父の部屋に入ると、相変わらずの変つた部屋で前と何も変わつていながつたが今回ばかりは目の前にいる父が怖く感じる。

「……レイラ……本当のことを言いなさい。」

……行つていたのはノクターン横丁じゃないんだろう?」

やっぱり、勘が鋭い父はそう簡単に私の言葉で騙せるはずがなく、冷静に淡々と言つてくる父の迫力に体が緊張した。

「……何を言つているの? 私はノクターン横丁に行つていたの」

今の私にはそれしか言うことができなくて、語尾を強く言つて服を握りしめる。

「……大丈夫、アメリカにも、ノアにも言わないよ。」

……だから、本当のことを言つてくれ」

真剣な眼差しで見てくる父の視線を感じながら、私はぎゅつと目を瞑つた。

本当は……全部吐き出したい……

私はこれから起こることを知つていて、

さつきは例のあの人に会つてきたつて……

あの人は、私を持っているペンダントを狙っていて、

…ペンダントを渡さないと、家族が殺されるってことも

全部全部、言ってしまいたい。

でも……………話してしまったら…あの人は絶対に殺しにくるだろう

…

私はあの人を騙すほど器用じゃない。

「……………レイラ…君は賢い子だ。……………」

死喰い人に命を狙われているということを知っていながら、用もなしにわざわざ自分を危険な目に晒すようところへ行くなんて、そんなの考えられない。」

父が、何か必死に訴えるように話を続ける。

「…大丈夫……………誰にも言わないと約束する。」

……………だからそんなに独りで抱え込まないでくれ」

肩に手を置いて話してくる父を見て、私はまた泣きそうになった。

……………駄目だよ…駄目なんだよ、お父さん…

私だって言えるものなら、今すぐに言いたいよ。でも言えないの…

助けて…なんて言えないの。

私はぐつと堪えて、父に向かってゆつくりと言葉を繋げた。

「…本当よ。私はノクターン横丁に行っていたの。
…だから安心して。嘘なんてついてないわ」

父に嘘をつくのは胸が痛み、自分が変に笑ってしまったことに父の表情を見て気がついた。

「……………分かった……………レイラのことを信じるよ。」

ただ、これだけは絶対に忘れないでくれ。

……………自分の身に危険が及んだ時や、もう無理だと思った時は誰でもいいから助けを求めてくれ。私でも、アメリカでも、ノアでも、アウラでもいい。誰でもいいから助けてと言えなくても何かしら訴えかけてくれ。…一人で抱え込もうなんて絶対に思わないでくれ。
……………いいね?」

あまりにも優しすぎる言葉を聞いて、私は黙ったまま頷いた。また溢れ出てきそうな涙を必死に堪えるので精一杯で何も言えない。…ここで泣いたら何かあったと勘付かれてしまう。

……………ねえお父さん……………

今日から嘘をつき続ける私を、今までと変わらずに愛してくれる?

……………嘘をつく私を許してくれる?

笑いながら頭を撫でてくる父に問いかけることができるわけもな

く、私は平然と笑い返した。

21 壊れる音

夏休みも終わり、私の学生生活も残りあと1年になってしまった。あまりにあつという間であり実感がない。

ポッターが今までのあの傲慢の行動が嘘かのように単なる好青年になってしまったものだから、廊下を歩いていてももうポッターとセブルスの喧嘩をする声も聞こえることはもうなくなった。あんなに日常茶飯事だった喧嘩ももうすっかりなくなった代わりに最近は当たり前のように付き合い始めた2人の姿がよく目に入る。

「……………本当に…鬱陶しい…」

私はポッターとエバンズが楽しそうに手を繋いでいる姿を見て呟いた。

…どうして貴女ばかり幸せになるの？

……………どうして…セブルスじゃなくて、ポッターを選んだの？

……………どうして、気づいてくれないの？

ポッターの横で笑うエバンズを少し見つめながら問いかけるが、声を出していないんだから聞こえるわけがない。

2人とも首席に選ばれたということもあるし、色々と目立っていて、周りからはお似合いだと祝福されていた。

そんな2人を目にするたびに私は周りにセブルスがいなか確認

をすることにしている。彼も知っていると思うが、出来るだけこんな光景は見せたくなかった。

あの時止めれる勇気がなかった私の、今できるせめてもの償いだと思っただから。

……2人を見つめるセブルスを見て、耐えきれぬわけがない。

もう何回歩いたか分からない廊下をいつも通り歩いている時に、2人が楽しそうに話しているにすれ違った。私は出来るだけ表情を変えないようにしながら耐えるように制服を力一杯握りしめた。エバンスの隣にいるのはセブルスではなく、ポッターで……こうなったのは私のせいだと思い知らされる。

……そんなことは知っている。もう痛いほど分かっている。

エバンスを見る度にこの浮き出てくる感情を抑えるには一苦労で、まだ私はセブルスが彼女達を見ている姿を目にしていなかったからなんとか抑えることができていた。

それだというのに、何故私は振り返ってしまったのだろうか。

……他の生徒達に紛れているポッターとエバンスを横目にすれ違い、無意識に振り返ると、明らかに彼女たちを見て、泣きそうな表情を浮かべているセブルスが目に入ったのだ。

その場から逃げるように2人に背を向けをして小さくなっていく彼は隠れるように他の生徒達に溶けるかのように見えなくなる。

「……………待つて…」

小さくなつていくセブルスに向かつて無意識に呟いて、私の体は勝手に元きた道を走り戻つて早歩きをしているセブルスの後を追いかけた。

……………追いかけないと…

ここで追いかけなかつたらまた後悔する気がして、私の足は勝手に動きだした。

途中でエバンスの肩にぶつかったがそんなこと気にしている暇もない。

私よりも小さかったはずのセブルスはもうすっかり私よりも背が大きくなつていて、あの頃よりかはたくましくなっていた。それでも相変わらず痩せているし、肌色は不健康なぐらい白い。

私より背の高いセブルスを見ると余計に時間が進んでいることを実感させられる。

彼の姿を見つけて前を歩くセブルスの腕を何とか握ると、彼は反動で私の方を振り返り、一瞬だけセブルスの泣いている顔が見えてた。すぐに彼は私に見せないようにと前を見る。

肩手の甲で流れ落ちてくる涙を必死に拭おうとしている姿を見ているだけでも胸が痛くなった。

すぐにここが生徒達がよく通る階段であることを思い出して、私は無理矢理彼の腕を引いて人気のないところに連れて行つた。

「なんなんだ！離せ！」

彼がこんな人のいるところで泣くなんて、きつとそれだけいっぱい
いっぱいなんだろう。

そう思うと、私まで泣きそうになる。

今私ができることは、泣かずに彼を人気がないところに連れて行く
ことしかできない。それしか思いつかない。

私は彼が泣いていることなんて気づいていない振りをしてながら無
理矢理セブルスを引っ張った。：本気になれば私の手の力なんて簡
単に振り払うことができるはずなのに、セブルスは大人しく付いてき
てくれる。

人気がないところに着くと私はセブルスの手を離して、顔を見ずに
思いつきり抱きついた。セブルスは突然の出来事に体を硬直させて、
驚いている様子だった。勿論私も冷静を装ってはいるが、心臓が緊張
したように激しく動き続けている。本当は恥ずかしくて早くここか
ら離れたい気持ちだが、それよりも今のセブルスの気持を少しでも
軽くできたらそれでいいという思いの方が勝った。

薬草の香りとどこか懐かしくて落ち着く匂いが香る。私が櫛で梳
いていないセブルスの髪をよく家族がしてくれるように優しく撫で
るとセブルスの戸惑っているような声が耳元で聞こえてきた。

「……なっ何をし「今日って、とても冷えるじゃない？」

私が全く関係ないことを言うのとセブルスは何も言わなくなり大人

しくなる。

「……………少し寒くて、人肌で温まりたい気分なの…」
自分でも何を言っているのか分からなかったが、私の口からはこんな言葉しか出てこなかった。

関係ないことを言って、

何とか少しでもセブルスが人肌のぬくもりで少しぐらい楽になれるように、

さつき見た光景を忘れられるように、

私は震える手で彼の体を力強く抱きしめ続けた。

セブルスが私にもたれかかってきたからだだろう。突然彼の体重を感じたと思うと、耳元で声を押し殺しながら泣くセブルスの微かな嗚咽音が聞こえてきた。

「……………私の我儘に付き合わせて…ごめんね」

それ以上は言葉もでなくて、私はただセブルスの頭を撫で続けながら自分の感情を必死に抑え込んだ。

…なんでセブルスが苦しい思いをしているというのに…
私は今こんなにも…

幸せなんだろう…

彼の香りも温もりも感じられている今が、

2人っきりのこの空間が、
彼に触れられていることが、

セブルスが側に居てくれている今この時が

ものすごく幸せだ。

……このまま時間が止まればいいのに……

私は自分の思ってしまったことを誤魔化すために、血が出るほど唇を噛み締めた。

本当に私は自分のことしか考えられない。

今年のクリスマス休暇は、最後だからといってホグワーツに残る生徒が結構いたらしいが私は勿論そんなこと気にもせず家に帰宅した。

家族揃っての夕食は何も変わらないが、やっぱりクリスマスともなると出てくる料理が豪華だった。兄の怪我也心配だったが、楽しそうに話す兄を見る限りどうやら痛みは引いたらしい。

……何を隠しているんだろう……

夕食中、家族の姿を見ているとどこか引つかかったようにもややとするがそれも私が大好きな焼き菓子がデザートとして出てきて、そんな気持ちも呆気なく消え去った。

家族とのんびりと過ごしているとクリスマス休暇もあつという間に過ぎて、気がつけば明日ホグワーツ特急に乗らなければならない。ホグワーツに行く支度も全て終えて、あの本を誰にも見つからないように引き出しの奥に隠し、そろそろ寝ようかとベッドに横になった。

……寝れない……

いくら瞼を閉じて、毛布に潜り込んでも、本を読んでも全然眠気が襲ってこない。

私はベッドを抜け出して、自分の部屋から出ると少し冷えている廊下を歩き進めながら、温かい飲み物でも貰おうかと、アウラがいるであろうキッチンに向かった。

廊下を歩き進めると玄関前に立っているアウラの姿が見えて、二階

の手すりを掴んで、上から話しかける。

「アウラ、丁度良かった。」

私の声を聞いたアウラが、振り返り見上げていたが、どこか困っているような様子だった。

「…どうしたの？」

温かい飲み物を頂戴と言うつもりだったが、困っているアウラを見るとそんなことを言うつもりだったことは忘れて、階段を下りて彼に近寄る。

「…先程、玄関を叩く音が聞こえたのです。今夜お客様がお越しになるとはご主人様から聞いておりませんし…どうすれば良いか」

…たしかにこんな夜に突然の訪問とは考えにくい

アウラの説明する声を聞きながら私は玄関に近寄って覗き穴を覗き込んだ。

玄関の前に確かに人が立っていて、寒そうに体を縮こませている肩には雪が積もっている。

「……やはり、ご主人様を呼んできます」

「…うん……お願い」

遠ざかっていくアウラの足音を聞きながら、私は肌寒かったことも忘れて、少し玄関と距離を置くと、玄関を叩く音が聞こえてきた。少し強めで、どこか焦っているようなそんな音に聞こえた。

恐る恐る覗き穴を覗き込むと、さつき少し俯いていたその人が、じつと玄関の扉を見ているものだからはつきりと顔が見えた。

…エド…叔父さん

私は玄関越しにいる人物が自分の知っている人だということにほつとして、早く中に入れないとという衝動に駆られ、玄関の鍵を開けるとゆつくりと開けると外の冷たい空気が流れ込んできた。一気に肌寒くなり少し体を縮こませながら招き入れようと声をかけようとする、私の顔を見た瞬間に叔父が抱きついてくる。

いきなりこのことで戸惑いながらも、自分の体を支えることで精一杯で声が出ない。

「……………よかった…レイラ」

どれぐらい外にいたのだろう。叔父の体はすっかり冷えていて、抱きつかれた私の体もだんだんと低くなっていく。

「……………どうしたの…？…」

叔父らしくない行動に戸惑いながらも、問いかけながら抱き締め返すと、彼はゆつくりと私の顔を見つめて、焦ったかのように言い出す。

「…レイラ、一緒に行こう」

……………えっ？……………

…何言ってるの…

あまりに突然の言葉に、叔父が何を伝えたいのかが分からない。叔父は私の手首を力強く握ってくる。

「……………急にどうしたの？…もうこんなに夜も更けているのよ？……………それに明日から学「こんな所に居ては駄目だ」

私の言葉を途中で遮ってくる叔父の目は真剣そのもので、何故か今目の前にいる叔父が恐ろしく感じた。手首を力強く握ってくるのも、…まるで私を逃がさないようにしているみたいだ。

「…エド……………こんな夜中に何の用かな？」

後ろから聞こえた声に振り向くと父が、アウラと一緒に階段を下りてきていた。

父の姿を見た瞬間に叔父の握ってくる手の力が強まり、手首が痛みます。

「……………そう殺伐しないでもいいじゃないか」

父の穏やかな声が聞こえてくると比例するかのように叔父の手力もどんとどんと強くなる。

「アウラの作ったミンスパイは絶品なんだ。どうだい？久々に2人でゆっくりお茶をするというのも、いいと「いい加減にしてくれないか」

そう言う叔父の声はあまりにドスが効いていて、その場の空気が緊迫した。

「そんな必要はもうない。」

はつきりと言い捨てる叔父は明らかに父に憤りを感じているようで、父を睨む瞳は殺氣の色を浮かべている。黙り込み、さつきまでの穏やかな表情とは一変した父は、私の手首を掴んでいる叔父の手に視線を移した。

「……とりあえず……レイラを離してくれないか？……それから話をし「話をするために来たんじゃない。」

はつきりそう宣言する叔父の様子はいつもと違すぎて、私の体は緊張しだしたのか、熱くなりだした。

何か言わないといけない気がしたが、私の口からは声が出てこなくて、何もできない。

「こんな夜中に何をしているの？」

静まり返ったその場空気を壊すかのように、少し明るめの声が聞こえてきた。母は、叔父と父の姿を見るとしようがなさそうに溜息をつく。

「全く、こんな寒い日に扉も開けっぱなしで一体いい大人が子供を巻き込んで何を言い争いしているの？」

玄関の扉を閉め、少し苛ついているような様子の母の足元にはアウラがいた。

「どうやら、アウラが状況を察して母を起こしに行ってくれたらしい。」

母は、私の手首を握っている叔父に気付きゆつくりと近づくと私の体を自分の方に抱き寄せた。

「言い争いは結構だけど、この子を巻き込まないでくれないかしら。レイラは明日から学校なのよ。」

母に抱き寄せられ、叔父の手は自然と離れたがまだ手首は痛くて、少し赤く跡ついていた。私を部屋に戻そうとする母に押されながら、歩こうとすると何かはち切れたように、叔父は母を睨みつけながらゆっくりと口を開く。

「学校?…こんな時にか？」

命を狙われている時に、1人学校に行かせるのか？」

「ええ、そうよ。この子は今年で最後なもの」

そう言う母の声は力強く、ハキハキとしていて私は喧嘩が始まりそうな雰囲気はどうすることも出来ずに、母と叔父を交互に見る。

「何の冗談だ、アメリカ…」

「冗談でも何もないわ。」

「…エド、こういう時こそ、ごく普通に過ごすのがいいと思ったんだ。」

今にも喧嘩しだしそうな母と叔父を宥めようと父が叔父に話しかけるが、どうやら状況は悪化しただけみたいで、父の声を聞いた瞬間叔父の声が興奮したように大きくなる。

「ごく普通に過ごして、死んだら何も意味がないだろ☒大人の勝手な都合で子供の命を危険に晒すのか☒」

「落ち着け…エド、とりあえず座ってゆっくり話をしよう」

こんなに我を失っているような叔父の姿は初めてで、私は何か不安に駆られた。

「何を話すというんだ。もう今更話すことなんてないだろう」

睨みつけながら言った叔父の手にはさつきまで握っていないなかった杖を握っていることに気づいた瞬間何か嫌な予感がして、私は慌てて口を挟もうとしたがそれよりも叔父の低い声を聞くと声が出ない。

「……レイラを……こっちに渡せ」

突然低い声で名前を呼ばれ、まるで心臓を誰かに撫でられたような気持ちの悪い感触に襲われた。

……知らない……

……こんなエド叔父さんは知らない。

今日の前にいる叔父がまるで他人のように感じて一気に恐怖心が波のように襲ってくる、母が私の体をぎゅっと抱き締めて身構えたのが分かった。

「……エド……何があった？」

杖を持つことはせずに叔父に問いかける父の声を聞いた瞬間、持っていた杖を父に向けた叔父の目はつきりと見えた。

誰かに裏切られたような、

何かに怖がっているような、

……悲しそうな目だった。

叔父の名前を呼ぼうとした時、後ろから足音が聞こえてきたと思うとその音はぴたりと止まり、いつも聞いている声が聞こえてくる。

「……………杖を下ろしてくれませんか？」

兄が私の横を通り過ぎた時始めて、兄が叔父に杖を向けているのが目に見えた瞬間に何か壊れるような音が聞こえたような気がした。

……………止めないと……………

今すぐに……………杖を下ろさせないと……………

……………元に戻れなくなる。

「……………本当に……………そっくりだな」

叔父の呟いた声も聞こえるほど静まり返っていたこの場の空気は息苦しくて、私は杖を握る叔父を見つめながら、声を出す。

「……………エド……………叔父さんも」

私が突然声を出したからだろう。叔父が体を強張らせながら私の方を見てくる。

「……………ノアも……………杖を下ろして」

2人を交互に見るが、お互い杖を下ろさず少し睨むように見つめる

だけだ。

「何をそんなに杖を向ける必要があるの?……」

ねえ、ノア、相手は叔父さんよ?」

兄は私を見て何か考えると、ゆつくりと杖を下げるが、叔父は杖を下ろす気配がない。

「…エド叔父さん、……杖なんて必要ないじゃない。……出掛けるなら別の日「今日じゃないとだめなんだ」

私の言葉を途中で遮り、叔父は父に杖を突きつけ続けた。

「……いくら血の繋がった弟でも訳も話さず、こんな真夜中に娘を連れ出すのを許す訳がないだろ?……」

エド……一体何があつたのか話してくれ」

叔父は父の言葉を聞いても、口を閉じたままで睨み続けていた。

父は一呼吸おいて、ゆつくりと叔父に近づくと恐れる様子もなく向けられている杖を握る。

「………どんなことでも受け入れる。………」

私は、お前を信じてる……だから「冗談じゃない」

父の言葉を途中で遮った叔父の声はもうこれ以上聞きたくないといった様子で、低く聞こえた瞬間身震いがした。

「信じてる?馬鹿を言うな。よくそんな嘘をすらすらとつけるな。」

叔父は父の胸ぐらを掴み、今までのものを吐き出すように声を張り

上げた。

「何が信じてるだ☒：何がどんなことでも受け入れるだ☒」

「エド：落ち着け、みんな怖がつてる」

父が落ち着かそうと話しかけるが、落ち着くどころか酷くなるばかりだ。

「子供達に話さないというのも反対したのに、聞く耳を持ってくれなかったのはどこのどいつだよ☒何が子供達の為だ？

ただ知られたくなかっただけだろ☒
全部自分の為じゃないか!!!」

父は黙り込み、グツと何かを堪える手を握りしめると叔父と向き合い胸ぐらを掴んだ。

「僕の方がレイラを守る!!!」

「いい加減にしろ!!!」
!!!」

今にも殴り合いが始まりそうなこの状況に兄は飛び込んで、仲裁に入った。

「父さん!!!落ち着いて!!!叔父さんも!!!」

声を張り上げながら必死に止めに入る兄の声を聞いた瞬間、叔父は何か思い出したように父に怒鳴りつけた。

「言われた通りのことを信じて、守ってきたのに結局全部嘘だったじゃないか☒☒」

その言葉に、あんなにうるさかった玄関は一気に静まり返って父や兄の動きが止まり、私を守るように、手を握っていた母の手の力が強くなった気がした。

「何が、信じてるだ□結局僕のことなんて信じていなかったじゃないか□ずっと騙しといて今更なんなんだ□」

……騙す…？

静まり返っているのを気づいていない様子の叔父は口を滑らすように怒鳴り終わると、呼吸を整える。

「……………何で…それを…知ってるんだ」

静かに、途切れ途切れに言った父の言葉を聞いた瞬間に叔父は何か言っではいけないことを口した後みたいに顔色がさつきよりも悪くなった。

「…エド……………まさか……………」

父の言葉を消すように鍵が閉まってなかった玄関の扉をが勢いよく開いて、一気に寒い冷気が中に入ってくる。

「エド…やっぱり……………ここにいた」

ノックもせず入ってきた叔母が、叔父の姿を見るとほっとしたように安堵の表情を浮かべたのが視界に入った。叔父は逃げるように来たばかりの叔母の横を通り過ぎて、家を飛び出す。

「エド叔父さん□」

叔父を呼び止めようと声をかけたのは私だけで、後を追いかけてやると母が何も言わず引き止めてきた。

「…セシル…何があったの？」

冷静に父に問いかける叔母は、何も答えない父とこの場の空気を感じてか何かを悟ったようにすぐに叔父の後を追いかけてやろうと背を向ける。

「セリーヌ」

父に呼び止められた叔母はすぐに振り返り、真剣な眼差しで見つめた。

「………すまない………エドを…頼む」

「…勿論よ」

少し笑った叔母は、先が見えない夜の暗闇に溶けていった。

誰も動こうとしない空間にアウラが玄関の扉を閉める音と鍵をかける音が響くと、父は何も言わず部屋に戻ろうとする。

………聞くなら………もう今しかない

「………騙すって…何？………エド叔父さんに何の嘘をついていたの？」

私の声を聞いた瞬間、動きを止めてゆっくりと振り返ってきた。

「お父さんは何を知ってるの？何を隠しているの？」

「……レイラ……」

父に問い詰める私を引き止める為か、兄の声が聞こえてきたが私は聞こえないふりをした。

「何か隠していることなんてもう知ってるよ。………何で私には教えてくれないの？」

「…レイラ、違うのよ。貴女には「お父さん、もういいから、」

母の声に被せて言い寄るが父は話そうとする様子も見せず、私は声を張り上げた。

「私はもう守られてばかりは嫌なの!!!」

私の声が響き渡ると、その場は静まり返り私は父の返答を待った。

………これで…話してくれなかったら
もう…

二度と話してくれないだろう。

「……………分かったよ……………レイラ、少し遅めのお茶をしようか」

溜息混じりで言った父は、私に背を向けて自分の部屋に向かって歩き出す。もうきつと深夜を迎えているはずなのに、眠気が遅いかかってくるはずもなく、私は父の後を追った。

「今お茶を淹れるから」

部屋に入り、父の声を聞きながら私は一番近くにあったソファアームに腰掛けた。燃え続ける暖炉の薪を眺めていると横から手が伸びてきて前にティーカップが置かれた。

「ありがとう」

お礼を言っただけで一口飲むと、冷えていた体の芯が温まる。

「……何から……話そうか……」

ぼそりと言った父の声を聞いて私はティーカップを置き、乗り出すように聞く耳を立てた。

「……明日は学校だろう？……少し長くなるけどいいかい？」

「……ええ。このまま横になっても寝れそうにないもの」

確認してきた父の言葉に返答した私の声を聞いて父はゆっくりと話し出した。

「……死喰い人が何故私達の命を狙うのか、分からないと言ったが……」

…それは嘘だ。」

ゆっくりと座り直した父は私を見つめてくる。

「……………命を狙われるようになったのは……………」

…私のせいなんだよ」

無理矢理笑う父の笑顔は痛々しかった。

「……………どういう意味なの？」

「……………トム・マールヴオロ・リドル」

父の口から突然出た名前に私は体を強張らせた。まさか父の口からあの人の本名が出るとは思いもしなかった。

「……………名前を言っていてはいけないあの人と魔法使い達から恐れられ、ヴォルデモートと名乗っている人物の本当の名だ。」

私を見つめながら、ひと息ついてまたゆっくりと口を開く。

「……………そして……………彼は私の昔の友人だった。」

「……………友達?……………お父さんが?」

あまりに衝撃なことに、そんな言葉しか出てこなくて、父は私の言

葉にゆつくりと頷いた。

「…きっかけはただ同じ寮で、一緒の部屋だったから、何となく話しただけのことだ。学生の時から、あんな冷酷だったわけではないんだ。少々貪欲で、そう簡単には打ち解けられない性格だったが、彼は誰よりも努力家で、…私自身そう嫌いではなかった。

全く魔法界のことを知らないと言った彼に、私は喜んで色々教えただよ。何も知らないと言っても成績も良く、私も勉強面は随分と助けもらったものだ。」

懐かしそうに話す父の表情が少し暗くなると、声が一段と低くなり、小さくなる。

「…だが、口が達者で私以外にも友達の間がどんどん広がっていった時に彼は純血主義という言葉を目にした。

私にどういう意味か聞いてきてね。何も考えずにいつも通り教えたがそれが仇となった。

あの時の私はまさか彼が、あんな思想を抱くなんて思いもよらなかったんだ。」

父はどこか後悔しているような表情を浮かべて後を続ける。

「…純血主義の意味を知った日から、物凄くのめり込んで、私のことを純血だと知った彼は私に色々と自分の理想を語ってきた。私は元々純血主義でもなければ、そんな理想を抱いたこともなかったから、共感はできなかつたが否定するのは違うと思つて話は聞いていたんだ。

…ただある日、風の噂で彼が裏で色々と悪事を働いているというものを耳にしたんだ。彼は私が彼の友人だと思つていた生徒達に、そういつたことをさせていると聞いた時は何かの間違いかと思つた。

私が知っている彼は、努力家で成績優秀のいわゆる優等生。…時々、引つかかるような場面を見たこともあつたが、それでも私は彼

を確かに友人と思っていたし、実際私はそんなことをさせられた覚えもないし、あの時の私はその噂は信じなかった。

…だけど…その後たまたまマグルの新聞を見る機会があつて、そこである一家が不可解な死を遂げたと書いてあるのを目にしたんだ。

その一家の名前がリドルというのを目にしたら、やっぱり何か引つかかつて本当に軽い気持ちで問い詰めた。きつと馬鹿にされて終わると思っていたが、彼は何も隠すことなく平然と殺したと言つただ。

彼の表情を見た瞬間、体が凍りついたように固まって…今でもあの感覚は忘れられないよ。」

燃え続ける暖炉の火がこの時だけ、少し不気味に感じた。

「…何か知ってはいけないものを知った気がしたが、何か事情があつてそうせざるを得ない状況だったんだと思いたくて、私は何故殺したのか問いかけた。…彼は私の思いとは裏腹に笑みを浮かべながら、自分の理想を叶えるためには、あいつらは存在してはいけないからだと平然と言つてきたよ。」

…本当に、あの時の笑みは冷たい笑みだった。…人間じゃないんじゃないかと思うぐらいに温かみを感じられなかったよ。」

私はあの人の冷たい声を思い出して気を紛らわせようと唾を飲み込んだが、心臓は緊張したように鼓動を速くする。

「私は、周りの大人達に彼が人を殺したとは言わなかった。…言えなかつたんだ。彼がもし私のせいで、アズカバンに行つてしまったらと考えると恐ろしかったし、本当に自分の友人が人を殺したとは思

いたくなかった。

彼が躊躇なく人を殺せる奴だと信じたくなかった。

自分の知らない彼を知った瞬間、もう友人だと思えなくなっていて、友人だと思いたくないと思った。……止められないと。関わりたくない、関わってはいけない気がした。

あんなに親しく話しかけていたのに、あんな一瞬の出来事で何もかも簡単に崩れ落ちて、その後は自然と話さなくなったよ。

彼から話しかけてくることもなかったから、きつと向こうももう友人とは思ってないと思い込んで、ホグワーツを卒業して、アメリカと結婚して、そしてノアとレイラが生まれた。」

目が合うと、父は優しく微笑んで本題に入るように険しい表情を浮かべながら話し出した。

「………本当について最近、レイラがホグワーツに入学したぐらいに、外でばったりと彼に会ったんだ。……ばったりというより、待ち伏せされていたと言った方が正しいな……」

瞼を下ろして思い出すかのように話を続ける父の声は少しだけ震えているような気がした。

「……最初は外見が変わっていたから、誰だが分からなかったが目を見た瞬間に分かってね。その瞬間血の気が引いたよ。

彼は何を思ったのか私を誘ってきた。

私の力を貸してくれと、友人である私に仲間になってほしいと、そう言われたけど……

純血主義でもなければ、自分を犠牲にしても守りたいものができて、もう彼のことを友人だとは思っていない私が承諾する理由なんて

あるわけがない。

純血主義ではないし、君の意見には賛同できない。…巻き込まないでくれと断ったが、彼は私に断られるとは思ってなかったらしくてね…

何とか、頷かせようとしてくるものだから鬱陶しくて、ついつい強い口調で言ってしまった。

お互い、少し口喧嘩程度に揉めだして彼が突然杖を取り出す仕草を目にした瞬間、すぐに呪文を唱えたら何とか杖を弾き飛ばすことはできたんだが、その後口を滑らせて、君のことを友人だとは思っていないと言ってしまった。」

私は父の言葉を聞いて、後のことが大体予想がついた。

「…私の言葉を聞いた瞬間に彼の表情が一変したのを見ても私は何も言わずにその場を逃げ出した。

………そして、その後にノアが襲われた。

…レイラ、意味が分かるかい？」

「………でも、それが理由で命を狙っているとは限らないじゃない」

だって…確かにあの人はペンダントを欲しがっていた…

私はペンダントのことを思い出して父に言うが、確信があるように話し出す。

「家族も自分にとって邪魔な存在だと思えば躊躇なく殺せるような奴だ。

友人と思っていた私から友人ではないと言われて、そいつが純血主

義ではないと分かったら彼にとって私は邪魔な存在だろ？

私だけを殺してくれるのならまだしも………最初に襲われたのはノアだ。

………
確実に私の周りの人間を殺して、最後に私を殺すつもりだろうね
………」

父は少し笑みを浮かべて、紅茶を一口飲むと呟くように言った。

「……何にしろ、命を狙われるきつかけをつくってしまったのは私だ。
……だから、ノアにもレイラにも出来るだけ普通の生活をして欲しく
て黙っていた。「ノアの左腕の怪我は、死喰い人じゃないんでしょ？」

私が父の言葉を遮り問いかけると、父は口を開き、小さな声で言っ
た。

「……それは……言えない……」

「どうして？」

「………レイラ、元々お前がホグワーツを卒業したら全て話すつも
りだったんだ。

学生でいる時ぐらい何も考えずに過ごして欲しくて今まで隠して
きたつもりだった。………だけど、結局こんな中途半端になってしまっ
た」

椅子に深く座り直した父を見て、私は叔父のことを思い出して聞こ
うとしたが、それを分かったかのように父の声が聞こえてきた。

「……レイラ、学校を卒業したら必ず全て話す。ノアのこと、エドの
ことも、全て説明すると約束するよ。

……だから今日はもう遅いし、明日に備えて寝なさい。」

父の目を見つめると、今はもうこれ以上話してくれないような気がして、私は父に言い聞かせるように声を出した。

「……………約束よ……」

「……大丈夫……………ちゃんと守るさ」

父の言葉を聞いて、私は立ち上がり部屋を出ようとする声が届いてきた。

「……………レイラ、……おやすみ」

「……………おやすみなさい」

部屋の扉を閉める瞬間に、暖炉の火に照らされた父のどこか悲しそうな表情が見えたが私は見なかったふりをして扉を閉めた。

あの人と、父は友人だった。

まさか父の隠していることがこんなことだなんて思いもしなかった。

あまりに衝撃的で、思ってもいなかったことを言われるとどうやら人間というのは意外と冷静でいられるらしい。

……………そんな素振りなんて見せなかったのに

……………でもそうなる……私はよく殺されなかったな……

あの人に会った時のことを思い出しながら私は考えながら自分の

部屋に戻る。

……それほど、ペンダントが欲しいということなのかな…

どんなに考えてもあの人の考えを読み取るほど器用じゃない私は、
ベッドに横になると気づけば眠っていた。

22 もう遅い

寝不足だった私は、汽車の中でぐっすり眠れて気づいたらホグワーツについていた。

学校に戻るといつも通り授業が始まり、休日は出された課題に追われる日々が始まった。叔父のことや兄のことが気になつていない訳ではないが、父が話してくれると約束してくれたものだからそこまで考え込まないで済んだ。

N・E・W・T試験に向け出された大量の課題を抱えながら、寮に戻っていると前から4人組が歩いてくるのが見えた。楽しそうに、ブラックの肩に手を回しながら話すポッターを見た瞬間、私は視線を逸らし前だけを見て彼らとすれ違う。

少しだけ歩いて、後ろを振り返ると私の方を見ていたルーピンと目が合い、慌てて視線を戻すとレギュラスが壁にもたれながら私の方を睨むように見ていた。

あれから一言も話していないし、話す気などさらさらない私は勿論声をかける気などない。

ちらりと彼を見ると、彼は私ではなく他の誰かを睨んでいることに気がついた。

レギュラスが見ている視線を追いかけると、

……明らかにあの4人組を目で追いかけている。

ブラックの笑っている顔が見えた瞬間、彼は何かに耐えるかのよう
に、悔しそうに唇を噛み締めると、ローブに皺ができるほど強く握り

しめて、体を少し震わせていた。

……知ってる……

……私は、今の彼の感情を知ってる。

レギュラスにセブルスとエバンスの2人を見ていた自分が自然と重なり、私はその場から逃げ出すように彼に背を向けた。

……あんな顔されたら、救いたいと思ってしまう。

聞きたくない明るい声が聞こえてきて、私は自然と睨むように声が出た方を見ると案の定、沢山の友達に囲まれたエバンスが楽しそうに話していた。

立ち止まっている私の後ろから風と一緒にふわりと葉草の香りがあると、よく見たことのある後ろ姿が私の横を通り過ぎた。：エバンスに気づかなかったのか、彼は彼女と真逆の廊下を歩み進める。

今まではぶつかり合っただけでもみんなそれぞれが幸せで、こんなにバラバラじゃなかった。

セブルスとポッターが喧嘩をして、それにブラックが参戦して、エバンスが止めに入る。

ルーピンは時々セブルスに話しかけて、その少し後ろからペティグリューは追いかけて、レギュラスはセブルスを慕うように楽しそうに話しかけて、エバンスとセブルスは楽しそうに笑うのが当たり前だったのに……

当たり前が幸せだということを……失ってから知った私はどうしよ

うもなく胸が痛んだ。

………本当にすれ違つてばかりだ……

私は溢れ出てきそうになる涙を堪えながら、止まっていた脚を運んだ。

………これじゃあ…誰も幸せになんかなれるわけがない。

N・E・W・T試験が近づいてきたこともあり、生徒達の間では少しピリピリとしていた。発散する場所もないため勉強のストレスは溜まるばかりで、勿論私もいつもよりは余裕がなかった。

こんな時にエバンズとばったりと会ってしまったのが運が悪いと思うのだが、それよりも運が悪いと思うのはどうしてこういう時に限ってお互い人気の少ない廊下を歩いているのかということだ。

勿論余計なことなどは言わないと思っていたのに、エバンズとすれ違う瞬間にセブルスを抱きしめた感覚を思い出して、私の口は勝手に動きだしていた。

「………あんなに嫌っていたのによく付き合えたわね」

私の言葉に、エバンズはゆっくりと緑色の瞳で見つめてくる。

「………1つだけ教えてくれない？」

………もしかすると………ここで私が何か言えば……

私はセブルスが泣いている姿を思い出して、エバンズの緑色の瞳を少し睨みながら言葉をつないだ。

「……………どうして彼を簡単に切り捨てることができたの？」

……何かが変わるかもしれない。

これ以上…彼が苦しむ姿を見なくていいかも知れない。

「……………その話はしたくないわ」

そんな私の期待とは裏腹に、エバンズは一言言い捨て、私の問いかけに逃げるように赤毛をふらりとなびかせながら、歩き出そうとする。私は咄嗟に彼女が逃げないように手首を掴んだ。

「…人間なんて間違えるものですよ？…」

それをどうしてたった一度の過ちで、彼を切り捨てるの？」

私の言葉にエバンズは少し睨んできた。その瞳にはうつすらと涙の膜が張っていた。

「…たった一度の過ち？……………何よそれ。……………」

私はそんな心が広くて優しい人間じゃないわ。

……貴女に私の気持ちなんて分かるわけない訳ないじゃない！」

「ええ…分かるわけもないし分かりたくもない。……………」

……だけど、あなただってセブルスの気持ちなんて分からないでしょう？」

……どうか、少しでもいいから彼に一言でも話しかけて…

「……………まるで貴女は分かっているような口ぶりね……………」

……貴女とセブぐらいの関係だったら、たった一度の過ちで済んだか

もしれない。

でも無理なのよ。もう何もかもが遅すぎるの！」

エバンズは私の手を振りほどいて、睨みつけながら声を張り上げた。

「…………もうセブルスに私の声はもう届かない」

歩き出すエバンズの髪が靡いて、シャンプーの匂いが香った。

…………それは…………ただ貴女がそう思い込んでるだけなの

私は前を歩くエバンズの肩を握って無理矢理振り向かせた。エバンズの長い髪が顔に当たったが気にすることなく彼女の肩を持ち訴えかける。

「…貴女が届かないのなら、最初から届かない人はどうすればいいの？…………」

ねえ…教えて…」

どうか…気づいて…………私が言葉に出来ないことを気づいて

私じゃ元に戻せないの…

貴女じゃないと、貴女しかできないの…

何か気づいたエバンズの瞳孔が少しだけ開いたが、私は今までのことを詫びるように言葉を続ける。

「……………貴女のことを傷つけてしまうようなことを言ったことは謝るわ。

貴女のことを、最初から拒絶したことも、

友達になりたくないと一方的に言ったことも、

貴女に酷いことを言ったことも、

今までのこと全部謝るし、別に許してくれなくてもいい。

……………今更なことだって分かってる。都合が良すぎるのも十分に理解しているわ。

でも…セブルスは貴女しか見ていないのよ。貴女しか見えていないの。

私にはできなくて、貴女にはできることがあるの」

……………お願い…気づいて…

静まり返った廊下には、私の声だけが響き渡り、やけに不気味に感じた。

……………気づいて…エバンズ…

「……………そんな冗談はやめて、笑えないわ」

冷たく私に言い放ったエバンズは、私の手を振り払ってその場から逃げるように少し駆け足で歩いていく。

「……………セブルスは貴女のことを愛してるの…」

結局彼女に伝えることができなかった言葉を、今更言ったところでエバンズに届くことはなかった。

溢れそうになる涙を堪えながら、溢れてしまう前に痛くなるまで目をこする。

……………セブルスがこんなにも苦しい思いをしているのも…全部、全部……………

私のせいだ…

彼の幸せを願ってあげられなかった、私のせい

どう頑張っても一度ずれてしまった歯車はそのまま噛み合わないまま回り続けるらしい。

私は、2年前のことを後悔しているかのように自然とあの湖のところへ気づけば足を運んでいた。

今日もいつもと変わらず、あの場所へと向かって歩みを進める。いつもはちらほらと生徒がいるもののだが、どうしてだか今日だけは誰一人として姿がなかった。いつも、もたれている木に視線を移すと、もう先客が居たことに気がついた。風が巻き起こると、彼が持っている本のページが勝手にめくりあがって、髪も流れに沿って靡いている。

「…………セブルス…？」

あまりに微動だにしない彼を見た瞬間、首から血を流している姿と重なった。私は急いで駆け寄り、膝をつく。

瞼を下ろして、力が入っていない手がだらんと地面についているのを見て私は彼の肩を持つ。

「セブルス、起きて。ねえ、目を開けて」

何回か呼びかけながら、肩を揺らすと固く閉じられていた瞼はゆっくりと開いてぼんやりと私を見つめてきた。

…よく考えてみれば、体も温かいし、息もしている。

…………死んでいるわけがない。

私は、それでも安堵の溜息をついてまだ眠たそうなセブルスに話しかけた。

「…こんな所で寝たら風邪ひくわよ…」

何も答えずに、目をこすりながら座り直して本を手探りで探しだすセブルスを眺めながら、まだ緊張している心臓の鼓動を全身で感じて

いた。

眠っているセブルスはあまりに綺麗で、儂くて、まるで……

死んでいるみたいだった……

「……………僕がどこで寝ようが関係ないだろ……」

どうやら寝起きは悪い方らしく、起きた彼から冷たい言葉が返ってくるが私は何も答えずに、セブルスの近くに座った。

……………ごめんね…セブルス…

心の中でいくら謝っても聞こえるわけがない。

隣から視線を感じて、セブルスを見ると彼は何故か私の方を見てきていた。

「…どうしたの？」

何か聞きたそうな表情を浮かべていたセブルスに問いかけてみたが、一瞬目が泳いだ彼は本に視線を戻して、素っ気ない返事が返ってくる。

「いや、何でもない」

本を読み続けるセブルスの横顔を見つめていると、自然とあの時のことを思い出した。

あの時……止める勇気がなくて……ごめん

私に声を出して言うほどの勇気があるわけがない。ただ、心の中で何度も謝っては自分一人で勝手に満足をする。

休日に、ホグズミードに行くことを許されて、特にやることもないし、気分転換もしたくて私は1人ホグズミードに来ていた。

行きたい店がある訳でもない私は、とりあえず三本の筭で、バタービールではない飲み物を適当に頼み、店の端の席で時間を潰していた。

「……いいかな?」

持ってきていた本を取り出し、ゆつくりと読んでいると突然聞こえた声に顔を上げる。私の返事も聞かずに、前に座るルシウスの髪が綺麗に靡くのを見て、本に視線を戻した。

「ご注文はお決まりですか?」

「…じゃあ、バタービールを貰おうかな」

店員とルシウスが会話をしている声を聞き流しながら本を読み進めると、前に座っている彼が話しかけてくる声が耳に入ってくる。

「…珍しいね」

顔を上げ、ルシウスを見ると彼は私が頼んだ飲み物を見つめていた。

「ここに来てバタービールを頼まない生徒は初めて見たよ。」

私は水滴がついているグラスを見つめながら、適当に返す。

「私、バタービール嫌いなんですよ。」

「あんなに美味しいのにかい？」

ルシウスの声を聞いた瞬間、自然と彼にエバンズが重なり、その横にはバタービールを持つ記憶の中のセブルスが見えた。

…バタービールを飲むと、あの日のことをどうしても思い出してしまう。

私はそれから視線を逸らすように本に視線を戻して、声を出す。

「…味が嫌いというわけではないんですけど……」

それで、今日はわざわざ何の用でしょうか」

中々本題に入らないルシウスに、本に視線を移したまま問いかけるが、声が聞こえることはなく、顔を上げると黙り込んでいた。

「……………あれのことなら、まだ見つけられてませんよ。」

……………どこを探してもありませんし、両親もそういつた言動を見せてくれないので、本当にあるかどうかも怪しいぐらいですね」

……………ペンダントを渡すつもりなんてない。

……………渡したら、そこで全てが終わってしまう

「……………意外と手こずっているね」

私が溜息混じりに言った声を聞いたルシウスは、頬杖をつきながら私を見つめてくる。

「…家族を上手く騙しながら、家中を探すのは簡単なことではないんですよ」

グラスを傾けてると、少し冷たくて、甘い香りが口全体に広がっていく。

「……………一つ、個人的な疑問で聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「……………ええ……………」

改まって言ってくるルシウスに視線を移して、何を聞かれるのかは見当も付かないが、とりあえず素っ気なく返す。

「……あの方が、何故君達にそこまで執着しているのかがずっと不思議に思っているんだが、君は何か知っているかい？」

…君達？

ルシウスが言った君達という言葉に引っかかった。

君達…ということは、少なくとも私以外に1人はいるということだ。

「……執着…ですか。…私にはそうは見えませんよ。」

……私よりもあの方に直接聞かれてみてはいかがですか？」

まあ……それが出来ていたらこんなことを私に聞くわけがない。

「お待たせしました。バタービールです」

バタービールを持った店員が私達の机に近づいてきて、自然とその話は途中で終わった。

「じゃあ、私はそろそろ失礼するよ。……」

バタービールを口にすることなく立ち上がったルシウスは、机の上に明らかに私の飲み物と彼が頼んだバタービール代以上のお金を置く。

「…いや、悪いですよ。飲み物代ぐらい自分で払えます。」

「こういう時は素直に受け取って来てくれ」

にこりと笑う紳士的なルシウスは、今の笑みで今までどれほどの女性を魅了してきたのだろう。

私に背を向けたルシウスは何かを思い出したように振り返ると、見つめてきた。

「……………ああ、そのバタービール良かったら飲んでもいいよ。」

……………嫌いと言ったばかりだというのに…

…嫌がらせだろうか…………

私が何も答えず笑みを浮かべると、彼は振り返ることなく店を後にした。

私は何となく手を伸ばし、バタービールが上までたつぷり入ったグラスを持つと、口に運ぶ。甘く、少し温かいものが喉を通っていくのが分かった。

…あの時の頃の味と全く変わっていないバタービールを飲むと、まるで昨日のことかのようにあの時のことが鮮明に頭の中で駆け巡ってくる。

……………エバンスの酷く傷ついた表情も

……………泣きながら殴ってくるセブルスも

乱暴にグラスを置いたから、中身が少し溢れたが、気にすることなく本を手を持った。

「……これだから…嫌いなんだ…」

私の独り言は、他の客の騒がしい話し声に溶けるように消えていき、お金を払って店を後にした。

別に行きたい店があるわけでもない私は、もうそろそろ学校に戻ろうかと思い、歩き出そうとすると足元に何かが当たって視線を下ろした。

足元には、丸い形の何かがあって、手に持つとそれがお菓子だということが分かった。

…だれか、落としたのかな

「すみません！それ、僕のです!!」

突然聞こえた大声にお菓子を持ちながら振り返ると、小柄な青年がだんだん走って近づいてきた。

……ペティグリュー…

私だと分かった瞬間彼は少し戸惑いを見せた。私は何も言わず、ペティグリューにお菓子を押し付けると、小さな声が聞こえてくる。

「…あつ…ありがとう」

「……………いいえ、気にしないで」

うわべだけの言葉をいい、さっさとその場を立ち去ろうとするところから何か決心したような彼の声が聞こえてきた。

「君は！…死ぬのは……怖い？」

「……………いきなり何？」

私が振り返りながら不機嫌そうな声を出したからだろう。彼は少し怖がったように体がびくりと反応したが、体を小さくしながら後を続ける。

「……………そういう…話になったんだ…」

……………ポッター達とそういう話をしたという意味だろうか。

……………でもそうだとしても、何故わざわざ私に問いかけてくるんだろう。

「……………みんな…死ぬのは……怖くないって」

「貴方は？」

「へっっ？」

「貴方はどうなの？」

私の問いかけに間抜けの声を出した彼は、視線を下にしてボソボソと口にする。

「……僕は……僕は、……僕も……怖くない……」

自分に言い聞かせるように言ったペティグリューは明らかに嘘をついていた。

「そう。」

………私は怖いわよ。」

私の言葉を聞いた瞬間、彼は頭を上げて見つめてきた。

「……でも、大切な人が目の前で死ぬ方が………もつと怖い」

私は彼を少し睨むように見つめて、背を向けた。

結局、ペティグリューは私に何を聞きたかったんだろう……

あんなことを私が言ったとしても………きっと彼は、ポッター達を裏切る。

弱い人間はそんな急に強くなれない。

それからはあつという間に時間が過ぎ、気づけばN・E・W・T試験ももう目の前に迫っていた。図書館で勉強をし、寮に戻っていると前から元気な声でお礼を言う新入生らしき子供達が走ってきた。

「ありがとうございますー!!!」

何事かと、前を見ると手を大きく振っているルーピンがいた。ぼつちりと目があった私は、何も考えず彼の隣を通り過ぎようとする

ルーピンは私の腕を握ってくる。

「……………何か用？」

少し睨みながら言うと、ルーピンは私を見ながら恐る恐ると言った感じで口を開く。

「……………あの時…早く、止めに入らないといけなかったのに……………ごめん」

最初は彼が何を言っているのかさっぱり分からず、頭がついていなかった。

…あの時って、いつの時のことを言っているんだろう。

…去年のことなのか、それとも2年前の時のことなのか…

動転して、思考が停止した私は口が勝手に開き、最初に思ったことが言葉として外に出る。

「……………謝らないですよ……………」

小さな声だったが、ルーピンは聞こえたらしく驚いたように目を見開いた。私は慌てて、彼の手を振り払って、駆け足でその場を立ち去った。嬉しいことに、ルーピンが追いかけてくることもなく、理由を聞かれることもなかった。

……………謝られて、私はどうすればいいのよ…

何で……………そんなに勇気があるの…

何でそんなに…簡単に、言葉にできるの…

私は震える唇を閉じて、持っていた羊皮紙をぎゅつと握り潰した。

N・E・W・T試験が終わって、私は重い足取りで廊下を歩いていた。試験は、セブルスに勉強を聞けずに挑んだものだから散々なものだった。

……そんなことで足取りが重いわけじゃないことぐらい分かっている。

彼が笑わなくなった姿を見ていると、胸が重く苦しくなり、日差しに当たっていても冷たく感じ、そしてとても居づらい。

表情ひとつ変えずに、淡々と友達と話すセブルスの姿を見るたびに私はあの時止めなかったことを責めていられるように感じるのだ。

もう歩き慣れた廊下をひとり歩いていると後ろから突然私の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「……ヘルキャット！」

ゆっくりと振り返ると、私もよく知っている人物が少し駆け足で駆け寄ってきた。

グリフィンドールのローブが靡き、あちらこちら寝癖がついている髪に、丸眼鏡。

……ポッター……

心の中で名前を呼んで、私は駆け寄ってくるポッターを見つめた。

……今日の前にいるポッターが……セブルスだったら……良かったのに……

少し息を切らしている彼は、呼吸を整えて話し出す。

「あの時の……ことを謝りたくて……」

……何で、みんな謝ってくるの

そう言いながら何やらローブのポケットの中を探って中から何やら綺麗に包まれているものを出してくる。

「……中々、似てるのなくてさ……」

後からあの髪留めが大事なものだたって聞いて」

ポッターは、袋の中から髪留めを取り出して私の方に渡そうとしてくる。

どうやら、どういう風に彼の耳に入ったかは知らないが、あの髪留めに思入れがあったことが彼の所まで伝わったらしい。

「あの時は……本当にごめん……」

君の大切な髪留めを壊しておいて、謝りもせずに……こんなに時間が過ぎてしまった……

許して欲しいとは、言わない。
せめて…これを受け取ってくれないか？」

そう言うポッターの掌の中には、あの時壊れてしまった髪留めにそっくりなものがあつた。

それを見た瞬間、私の中の何かはざわりと騒いで途端に目の前にいるポッターも、何もかもが憎くなってくる。少し髪留めを見つめると、気づけばポッターの掌にあつたそれを思いっきり払いのけた。

丁度生徒達も行き来していなかったから、誰にも当たることなく壁に当たって割れる音が聞こえる。

視線を上げ、ポッターを睨みつけると彼は驚いている様子もなく、こうなることを分かっているかのように冷静な様子で私を見ていた。

「謝ってる相手が違うんじゃないかしら？」

私は彼にそう吐き捨てて、背を向ける。

………こんなことを言っても、ポッターがセブルスに謝るなんてしないだろう。

………それぐらいにお互い嫌忌し合っている。

ポッターから逃げるように、廊下を早歩きで歩いていると前を見ていなかった私は誰かとぶつかってしまった。

「ごめんなさい」

謝りながら顔を上げると、まず目に入ってきたのはグリフィンドール色のローブだった。

……どうして、今日はこんなにも彼らに会うのだろう。

ブラックの顔を見た瞬間、私は彼の横を走り去って逃げ出した。

ただ逃げ出したかった。

……今すぐ……こんな物語を終わらせたい。

未来をしていなければ、こんなに苦しまなくて済んだのに……

こんな……思いなんてしなくて良かったのに

未来を知っていていいことなんて一つもない。

ポッターがセブルスに謝ろうが、2人の仲が今更良くなってももう遅い。そんなことは分かっている。

闇に足を掴まれてしまった人間はそう簡単に抜け出せない。
どれだけ、何人もの人で引っ張り上げようとしても、きつとそれは纏わりついてくる。

だれか1人、闇に吞まれて彼を下から押してあげないといけないうのならば、私は喜んでそれを受け入れよう。

彼が笑える日が来るのなら、
セブルスがただ心臓を動かして、夜を過ごし朝を迎えられるのなら、

……私は死んでもいい。

セブルスがいつか幸せを噛み締めて、
生きていてよかったと思える日が来るのなら

……エバンズじゃなくても、

……私じゃなくても、

誰かを愛して、
愛されて、

今度こそ彼が幸せに笑える日が来るのを見届けたら

………私は、もう必要ない。

N・E・W・T試験が終わってしまえば、もうあつという間に時間は
はすぎて私の学生生活も呆気なく終わってしまった。

ホグワーツを後にしていく生徒達に紛れ込みながら、転げないよう

に急ぎ足で歩く。

トランクを手に持って、私はホグワーツを振り返ることもないまま前にいるセブルスを目で追いかける。

途中で他の生徒に持っていた鳥かごが当たってしまった、中にいたアテールが驚いたように鳴く声が聞こえてくる。当たった生徒にも謝ることもせずにトランクと鳥かごを乱暴に地面に置くと、少し立ち止まっている彼の腕を後ろから必死に掴み引き止めた。

ホグワーツ特急に乗り込んでいく生徒達の波が私たちを避けるかのように横ぎりぎりを歩いていく。セブルスは、私の方を見ると表情を変えず何も言わなかった。

「……………本当に……………そっちに行くの…?」

私の問いかけにセブルスは何も答えず、私の瞳を見つめてくると何か言おうと口を開いた。まるでセブルスの言葉を遮るように、彼の友達がセブルスの名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

彼の口から言葉が出ることはないまま、意図も簡単に私の手から離れていく。

一度も振り返らず、人波に飲み込まれて見えなくなっていくセブルスの後ろ姿をしっかりと目に焼き付けるように見つめた。

「……………私も…すぐ…行くよ…」

セブルスに伝えるはずだった言葉を小さく呟いて、私はトランクと鳥かごを手に持ち、ホグワーツ特急に乗り込んだ。

23 答え合わせ

駅に着いた瞬間、違和感を感じた。

…いつも迎えに来てくれるのは、家族揃ってだったのに今回は父の姿しかなく、そんな父も私を見つけるとほっとしたような表情をしてすぐに手を握ってきた。

「どうしたの？…何かあったの？」

私はあまりの不安に、父の顔を見ながら問いかけてみたが、父は私のトランクを持つと間をおいて口を開いた。

「…帰ってから話すよ。ほら掴まりなさい」

父に言われた通り、しつかりと腕を握ると一瞬で景色が歪んで体の中をかき混ぜられているような感覚に襲われて、気づけば宙を浮いていた足が地面についていた。

すぐに姿くらましをしたのだと悟って周りをキョロキョロと見回してみたが、来たことのないところだった。

「レイラ、はぐれないようにちゃんと着いてくるんだよ」

父はそれだけというと、少し薄暗い小道をどんと進んで行く。私は、ぴったりと後について歩いた。

どうやら路地裏だったようで、大きい道路に出るとあんなに静まり返っていたのに人の話し声や足音で騒がしくなる。

家付近でもないし、行き来する人の格好を見た感じだとマグルだということがすぐに分かった。

「……お父さん……ここはどこなの？……」

前を歩いている父に向かって聞いてみると、小さな声で返ってきた。

「……大丈夫、すぐ着くからね」

肝心な場所のことは何も答えてくれない代わりに、父は私を安心させるかのように少し微笑んでまた前を向いて歩く。

あまりに人通りが多くて、時々足を踏まれたり、肩がぶつかったりしたが何とか父の後をついていった。

マグルは梟が珍しいのだろうか。私が梟の入った鳥かごを持っているものだから行き交う人に、好奇心な目で見られるが、私は気にしてない風を装いながら歩いた。

少し歩くと、お店が並ぶ通りから、だんだんとレンガ造りの建物が並んでいる通りが変わっていき、すれ違う人も少なくなっていく。

レンガ造りの建物の窓からはカーテン越しに暖かい光が漏れている。どうやら、ここはマグル達が住んでいるところらしい。

「…レイラ、こっちだよ」

建物を見上げていたから、立ち止まる父に気づかず先に進んでしまったらしく、私は慌てて父に近寄った。

父は私がいることを確認するかのように顔を見ると、建物と建物の間にある僅かな幅の道、もう路地裏と呼べるのかと思うほど狭いところを父は気にすることなく進み出した。

人が1人通れるぐらいの道を少し歩いていると行き止まりになり、父は立ち止まって懐から杖を取り出して、壁のレンガをなぞるように杖を滑らせる。3回ほどトントンと叩くと、石が擦れるような音が聞こえてきた。

壁に人がしゃがめば通れるぐらい空洞ができていて父は中へと入っていく。私も慌てて中に入ると後ろからまた石が擦れる音が聞こえて振り返ると、通った空洞は閉じていた。

周りを見回すと、まるで誰かの家の廊下みたいなところだった。薄暗い道を歩くと、前にいた父が、扉を開けて私を先に入れてくれた。今まで薄暗いところに居たせいで突然の眩しい光に目が眩み、目を凝らすと母と兄の姿があった。

「レイラー！良かった」

母が私の姿を見た瞬間に抱きついてきて思わず後ろに倒れそうになる。

「お帰り…レイラー」

少しほっとしたような表情をしている兄がにこりと笑いかけてきた。

「…ただいま」

何がなんだか分からなくて、私はそれしか言えなかった。

「お帰りなさいませ。お嬢様」

アウラがいつものように私にいうと、鳥かごを手に持ち、父のところに行って私のトランクを預かっていた。

「アメリカ…それぐらいにしてあげなさい。レイラーが混乱してしまう」

父が、ローブを脱ぎながら言うと母はやっと離れてくれた。

「……………()はどこ()なの？…何で家じゃないの」

私が思い出したように父に聞いただと、母が優しく私に話しかけてくる。

「…………レイラー落ち着いて、一旦座ってから話しましょう」

前を歩く母を見ながら私は、周りを見渡した。ここが家でないことは確かだ。家よりかはるかに狭いし、雰囲気も全然違う。

少し小さな部屋に入ると、机には4人分のお茶とお菓子が準備されていた。私は一番ふかふかそうなソファーに腰掛けて、目の前にお茶を飲んでいる兄を見ていると父の声が聞こえてきた。

「…………レイラ、落ち着いて聞いてほしい。」

あまりに真剣に話すものだから、私の体は強張って少し不安になった。

「…………私の母が死喰い人に殺された」

父の口から出た言葉を聞いた瞬間頭は真っ白になって、何も言えなかった。人から言われただけじゃ全くとっていいほど実感がない。

「…魔法省から連絡があつて、私達もさつき知ったばかりだね。」

…………何せ一人暮らしたから、太刀打ちできなかつたんだろう」
どうして父がこんなにも冷静に居られるのかが不思議でたまらなかつた。

「…………他の人は…大丈夫なんだよね？」

私は父にすぎるように聞いたことをすぐに後悔した。父の口から何とも信じがたい言葉が出てきたのだ。

「…………分からない。…全く連絡が取れないからまだ何とも言えない」

「…レイラ、大丈夫よ」

私が酷い顔をしていたからだろうか。母が駆け寄ってきて、優しく頭を撫でだした。

「…ここは絶対に見つからない。それに私達がいるんだから大丈夫よ」

「…でも…」

「レイラ、大丈夫だって。僕がレイラを守るから。」

ノアが、乗り出すようにして満面の笑みを浮かべる。

「ほら、死喰い人に襲われて無事に帰ってきただろ？…だから安心して」

冗談をいれながら話すノアを見ても、私は余計に泣きそうになった。

「…すぐ近くまで死が近づいているのが分かると怖くて怖くてたまらなくなる。」

「…だから少しの間だけここで生活することにしたの。…外には出してあげられないけど、ひとり部屋はあるから今日はゆっくり休みなさい。」

私に笑みを浮かべて言う母の顔をみるとなぜかさつきよりかは楽になった。

そうは言っても、やっぱりいつものように寝ることなんてできずに、気づいたら朝を迎えていた。

狭い部屋でひとり籠っていても、不安が募るばかりで、私は安心してがために母の姿を探そうと部屋を出る。すると明らかに出かける格好をしている父が目に入った。そんな父はアテールが入っている鳥かごを手に持っている。

「……どこに行くの？……アテールをどこに連れていくの？」

母と話している父に話しかけると、2人は私の方を振り返った。

「…心配ないよ。少し魔法省に行ってくるだけだから。アテールは少しの間だけ空に放してくるね。最近外に出してやっていないだろう？」

「…今行かないといけないことなの？」

私の言葉を聞いた父は、ゆっくりと近づいてきて私の頭に手を置くと微笑んでくる。

「……出来るだけ早い方がいいんだ…大丈夫。すぐに帰ってくるから」

そう言われると何も言えなくなつて、私は俯くしかなかった。

本当はどこにも行って欲しくない。……怖い。

何故か簡単に死んでしまいそうでものすごく怖いのだ。

「…じゃあ、アメリカ子供達を頼んだよ」

そう言うと父は、扉の向こうに行つてしまった。

「レイラ、僕とチェスをしないか？奇跡的にあつたんだ。埃被つてたけど」

いつも間にか隣にいた兄が笑いながら誘つてきて、私はつられて笑いながら頷いた。

父の帰りを待ちながら、私は兄とチェスを打ち、母が淹れてくれた紅茶を飲みながらアウラが作ったお菓子を食べた。

チェスを打ち終わると、あんなに楽しそうな笑みを浮かべていた兄が少し緊張しているような表情を浮かべる。

「どうしたの？」

兄は私だけしかいないことを確認するように、部屋を見回して見つめてきた。

「……………父さんと約束したんだろう？…卒業したら全部話すって」

「ええ…それがどうかしたの？」

兄は、左腕を握ってゆっくりと話し出した。

「…やっぱり、自分から話したくて父さんからは言わないでくれて頼んだんだ。」

「…うん」

「……………言い訳に聞こえるかもしれないけど、

……………僕はただ家族を守りたかっただけなんだ。

……………だから、これから話すことを聞いても…嫌いにならないでくれ
…」

不安そうに頼んでくる兄は、力強く左腕を握っていた。

「……………大丈夫よ…ノア……………私はどんなことを受け入れるわ。」

ノアを嫌いになるなんて絶対じゃないわよ」

「……ありがとう……」

私の言葉を聞いて安心したのだろう。兄は弱々しい笑みを浮かべるとお礼を言ってきた。

少し左腕を見た兄が、服の袖を捲り上げると、腕に巻きついている白い包帯が露わになる。

「……死喰い人に襲われて、……怪我をしたというのは嘘なんだ。

……左腕は怪我をしたわけじゃない。」

「……じゃあ死喰い人に襲われたというのは……」

「襲われたというのは、本当だ。

……僕の不注意でドラゴンの鉤爪に当たってしまったという時があったのは覚えているかい？ほら、レイラが2年生ぐらいの時」

「うん」

私が頷きながら、答えると兄は後を続ける。

「……本当はその時に、襲われて……怪我をしたんだ」

「……でも、どうして左腕は怪我もしていないのに包帯なんか巻きつけていたの……」

自分が思ったことが、自然と口から出ると兄は核心を聞かれたように、少し表情が暗くなった。

「……それは……見たほうが……分かるよ」

そう言った兄が、腕に巻きついている包帯を取っていく姿を見てみると自分が緊張していることがわかった。

……死喰い人に襲われて怪我をしたんじゃないというのは、大体予想はついていた。

……でも、怪我自体をしていないとは思っていなかったし、考えてもいなかった。

だって…前に兄が左腕を痛がっている姿も見たじゃないか。

腕からするりと包帯の最後が、取れると左腕だけ不健康そうに白い肌が目に入る。

肌白く、少し赤くなっている兄の左腕には、黒くはつきりと印がついていた。

…骸骨に……蛇の形をしたそれは、どこからどう見ても死喰い人がつけているあの印がはつきりとついている。

……どうということ…

どうして兄の腕にそんなものがついているのかが考えられなくなり、頭が真っ白になる。

何で…ノアの腕にこんなものがついてるのよ

兄の目を見つめながら言った私の声は、少し混乱しているからなのか震えていた。

「……………どうということなの…ノア…」

私の声を聞いた兄は、今にも泣きそうな表情を浮かべながらもしっかりとした声で話し出した。

「……どんなに人数が少なかったとはいえ、一人で死喰い人の攻撃を全て防げるわけがない。」

……本気で殺しにかかってくる相手に、僕が怪我だけで済んだのは、……例のあの人が急に僕を見て攻撃を止めるよう死喰い人達に言ったからだ。」

思い出すように話し出す兄は、左腕を後がつくんじやないかと思うぐらいに握っている。

「……何故、僕を殺さなかったのかも分からない。……ただ、杖を振って必死に防いでいたら、急に相手が攻撃をやめたんだ。それで……例のあの人に言われたんだ」

そう言っ言葉が詰まる兄の姿を見て、大体予想がつく。

「……自分に忠誠を誓い、僕になれば家族に危害を加えないと、次会う時まで決めとくようにと言われた……次会うかどうかなんて分からないのに、あの人は断言していて怖かったんだ。」

もし次会った時に断ったら？

反発したら僕はそこで確実に殺される。でも……自分が死ぬことよりも……

母さんも父さんも……レイラも僕のせいで殺されてしまうかも知れないというのが……何より一番怖かった。」

……だから……兄は……死喰い人になった……

家族のために……自分を犠牲にして、

……私に心配をかけないために、嘘をつき続けていた。

「…本当は…父さんにも話さずに1人でやり遂げるつもりだった。だけど、僕が怪我をしたと聞いてすぐに駆けつけた時にすぐに何かあったと勘付かれて話すしかなかったよ。

父さんも母さんも、僕が死喰い人に入ることは反対してきた。その時に、僕は父さんがあの人の友人だったということを聞いたんだ。

だけど…それしかこの状況を良くする方法はないと思ったし……逆にこれを利用しようかと考えた。死喰い人になれば色々情報も耳に思うと思って、……僕はあの日自分から会いに行ったんだよ。」

「……叔父さんと…叔母さんが、来た…日？」

「……いや…それよりも…もつと前」

思い当たる日があった私は問いかけると、兄は否定をしてくる。

「……確か…レイラが学校へ行っている最中ぐらいだったか……」

僕は、仲間になるつもりで行ったんだけど、……その時は印をつけられることはなかったんだ。…きつと信頼をしていなかったんだろ
うね」

兄は、すっかりぬるくなった紅茶が入ったティーカップを傾けながら混ぜるように回します。

「……だから……僕は…あの人の…信頼を得るために……」

……人を殺した。」

そう言う兄の目には光が差し込んでなくて、表情を変えない姿が逆に恐ろしく感じた。

「……………何人もの人を…僕は……………自分の為に…殺したんだよ。……………」

今にも壊れてしまいそうな笑みを浮かべる兄は、自分の手を見つめてぼそりと呟く。

「……………僕は…もう……………汚れてる……………」

兄の言葉を聞いた瞬間、私は勢いよく立ち上がって、兄の手を両手で包み込むように握った。

「ノアは、汚れてなんかないわ。」

驚いた様子で、見つめてくる兄は黙ったままだった。

……………汚れているわけがない。

私は、自分の気持ちを言葉にして吐き出していく。

「…私に嘘をつき続けてくれたことも、死喰い人に入ったことだって、全部家族を守りたい一心でやったことなのよ。」

私は兄の左腕を力強く握って、言葉が続けた。

「人を殺そうが、死喰い人になろうが、貴方はノア・ヘルキャットで、

私のたった1人の大切に、大好きな兄なことに変わりない。」

整理してもいないのに、話したから兄に伝わったかは分からないが、それでも今はとにかく伝えたい一心で必死に言葉を並べた。

「……………僕を……………許してくれる…のか…?」

兄の口からは、弱々しい声が出てきたと思うと次々に言葉が声が聞こえてくる。

「……………死喰い人になった僕を……………」

…人を殺した…僕は…

…レイラの…兄でいていいのか…?」

「勿論よ。……………ノアは、たった1人の大切な兄弟よ」

「……………僕を……………嫌いにならないでくれるのか?」

一呼吸置いて、兄に向かって宣言する私の声は泣きそうな震えた声だった。

「嫌いになるわけがないじゃない」

私の言葉を聞いた瞬間、兄の目から涙が溢れ落ちると、瞳に光が差し込み、思いつき私に抱きついてきて耳元で独り言のように呟いた。

「……………ありがとう…レイラ…」

私は、いつも兄がやってくれるように頭を撫でながらちくりと痛む胸の違和感をごまかす。

あの時…ルシウスが君達と言ったのは、兄も入っていたから…か…。

あの時の違和感の正体もわかって、私は兄の体温を感じながら、必死に泣かないように唇を噛み締めた。

…………ごめんね。ノア…………

……………私は、もう兄が思っているほど…綺麗じゃない。

父はちゃんと約束通り帰ってきて怪我も何もない様子だった。

「ひさびさだったからね。少し話が弾んでしまったよ」

そう言う父が持っている鳥かごには、アテールの姿はなかった。

家族揃って、夕食を食べながら兄を見ると、まだ目元は少し赤かったが、私と目が合った時にいつも通り微笑んできたから、ほっとした。私が手元の料理を一口大に切り分けて、口に運ぼうとすると父が思い出したように話しかけてきた。

「…レイラ、ノアから話は聞いたかい？」

「…ええ…さつき聞いたわよ」

「…そうか、良かった。」

そう言いながら、ナイフとフォークを置いた父は、ゆっくりと私を見てくる。

「じゃあ…約束通り…エドのことも…話しておくよ」

笑いながら話す父を見て、私はナイフとフォークを置くと、思い出したように兄が父に話しかける。

「父さん、実は…レイラに全部話し終わってないんだ。…途中で止まってしまつて」

「どこまで話したんだ？」

「…：僕が…人を殺した…：と…ころまでだよ」

「…ああ…大丈夫だよ。…：そこま…で…：たら、レイラも逆に混乱しないだろうしね」

そう言いながら、兄に笑いかける父はゆっくりと私の方を見つめてくる。

「…：レイラは、エドやセリーヌが家に泊まった日のことを覚えているかい？」

何も答えずに、頷く私を見て、父はまた話し出す。

「…あの時、ノアはドラゴンの研究に行っていたわけではなくて、
…彼らの所に行っていたんだ。その時に、…左腕に印ができた。」

兄が机の下で左腕を握りしめたのが、仕草で分かり、私は目をそらした。

「…ノアが、死喰い人に入ったというのは、私とアメリカ、それからセリーヌも知っている。

協力者は、ある程度いた方がいいと思っただけね。

…セリーヌには、全てを話した」

…セリーヌにはって…叔父さんは？

私は父の話の中に、叔父の名前が入っていないことが引つかかって、口を挟まずにはいられなかった。

「…エド叔父さんは？…」

どうして、叔父さんは知らないの？」

私の口から叔父の名前が出ると、父は何か言いたくなさそうに口を閉じる。

「…セリーヌ叔母さんに話すのなら、エド叔父さんにも話して協力してもらった方がいいじゃない。」

「…レイラ、…エドに言いたくても…言えなかった状況だったの」

黙る父の代わりに答える母の声は、とても落ち着いていて体に染み

渡ってくる。

「…僕が…まだ死喰い人に入ったばかりで左腕にも印がない時に
……………」

何人かの親戚の名前と、その人達が隠れている隠れ家の場所…を話しているのを耳にしたんだ。」

真剣な表情で話す兄の声を聞いて、私の頭は考えるために、脳を回転させるが答えなんて出てくるはずがなかった。

「…隠れ家の場所は、全員が知っているわけではないの。万が一に備えて、それぞれ知っている隠れ家の場所は違うの。」

…ノアが聞いた、隠れ家の場所は……………」

…エドが知っているところだけだったのよ。」

母の言葉を聞いた瞬間嫌な考えが脳裏に浮かんだ。

「……………その後……………そのことを聞いて、別の所へ逃げて誰もいなくなった隠れ家は…様子を見に行ってくれたセリーヌが、無惨な姿になっっているのを確認した。」

私の心臓は緊張しているように、鼓動を速くしていく。

「……………誰も…信じたくなかったのよ。」

……………こんなに身近な人が、…エドが……………彼らの仲間で、情報を教えているなんて…

…でも、その可能性がある以上……………嘘をつくしかなかった」

耳に母の言葉が入ってくると、叔父が泊まったあの夜の日のことを自然と思い出した。

……あの時……叔父さんは私に……

ペンダントを持っているか……聞いてきた。

叔父さんが本当に、あの人の僕だとしたら、私を殺そうともペンダントを奪い取ってくるはずだ……。

本当に、死喰い人なら、あの人がペンダントを欲しがっているのを知っているはず。

……違う……

……エド叔父さんは……死喰い人じゃない

私は服の上からペンダントを握って、考え込んでいると、今まで黙っていた父の声が聞こえてきた。

「……私に……あの時、エドが騙してきたと言ったのは、……彼には、ノアが何のために死喰い人に入ったのかは話さずに……ノアが死喰い人に怪我されたことをレイラに気付かれないように協力してくれと……嘘をついたからだ。」

……私の言葉は……昔から信じてくれないからね。……その嘘は、セリーヌも協力してくれたんだよ。みんなで口裏を合わせて、エドを騙したんだ。」

だから、あんな裏切られたような表情を浮かべていたんだ……

あの時の叔父の表情を思い出して、私は少し胸が苦しくなった。

「……もし、私達の勘違いで、疑いが晴れたらすぐに本当のことを説明して、嘘をついていたことを謝るつもりだった。

……でも、あれが嘘だったということ……話す前に既に知っているということは……もう……彼らとは……無関係ではないということになる。」

辛そうに、額に手を当て話す父の表情は、手の陰で見えなかった。

「……エドの側に来るだけいてほしいと、セリーヌに頼んでいたんだ。だから……油断をしていた。そんなわけないと思ひ込んでいた。

……信じたくなかったんだよ……。

あんなに、優しい子が……エドが、彼らの仲間になっていて、情報を流しているなんて考えたくもなかった。

魔法省に伝えたら、エドはきつとアズカバンに送られる。

……そう考えると……できなかった。」

「でも、今私達は襲われてないじゃない」

「……叔父さんは、この場所は知らないんだ」

私が反論すると、横から兄の悲しそうな声が聞こえてきた。

「……結局……何もかもが……悪い方向に進んでしまっただ……。」

父の言葉で静まり返った部屋は、重たい空気が流れ、体が潰され
と感じるほど圧がかかっているような感覚に襲われる。

……この様子だと…父も、母も、兄も

あの人がペンダントを狙っていることは、きっと知らない。

そう思うと、必死な様子で腕を掴んできた叔父の顔が浮かんだ。

……もし、あの時の叔父は、父に騙されていたこと以外にも、

……あの人がペンダントを狙っていると知っていたとしたら？

……だから…ペンダントを使える私を必死に隠そうとしていたと
考えたら…あの時の、叔父らしくない行動にも納得できる。

「……今、叔父さんは…どうしているの？」

「…セリーヌが、側に居てくれている筈だ」

「……でも…本当に、エド叔父さんが…死喰い人だったとして…その
後はどうするの？」

誰も話そうとしない部屋に私の声が響くと、父は考え込むように目
を閉じ、口を開こうとしない。

「……………私は…エド叔父さんが…死喰い人だとは思えない。」

私の言葉に、母も兄も少し下を俯くだけで何も言ってくれなかつ

た。

「…だって…それだけで決めつけるのは…あまりにおかしいじゃない。…他の誰かが、流した可能性だって十分に考えられる」

「…レイラ…」

「よく考えてみてよ。…あの叔父さんが、私達を裏切るようなするわけないわ。だって、あんなにも私達のことを第一に考えてくれていたじゃない」

途中で、話す私を止めようと名前を呼ぶ父の声が聞こえてきたが今はそんなこと信じたくない一心で話し続けた。

「何で…お父さんはそんな簡単に……実の弟を疑えるの。私は…」レイラ、話を聞いて」

私の話を遮るように聞こえてきた母の声を聞いて私は自然と口を閉じた。

「…信じたくないのは…分かるわ。…」

でも、私達が嘘をついていたということをエドが知っている時点で…もう…少なくとも…何かしら彼らと関わっているということになるの…」

母が言っていることは、理解できる。

でもどうしても、叔父が死喰い人だとは思えない。

だって…こうして…今ここにペンダントがあるのだから。

……あの人がペンダントを狙っていることを……言ったら、叔父の疑いも晴れるのだろうか。

一度……あの人に会ったことを……話した方がいいのだろうか。

「……レイラは……私達に何か……話すことはないか？」

まるで私が考えていることを分かっているように、話しかけてきた父の声を聞いて私の心臓は飛び上がった。

鼓動を速くして、私は平然を装いながら3人の顔を見る。

……話したら……、楽になるのかな……

……話して……父や母、兄に協力してもらったら……誰も死なずに済むのかな……

「……レイラ……？」

兄の名前を呼ぶ声が聞こえてきて、私は恐る恐る口を開き、声を出そうとすると突然冷たい声が聞こえてきた。

『大切な者の苦しむ叫び声を聞きたくはないだろう？』

あの時間いた言葉が、耳元で聞こえたような気がして、外に出そうとしていた声を呑み込み、口を閉じる。

……言えない……

「レイラ、どうしたんだ？」

優しい兄の声を聞いて、私は口を開く。

「話すことなんて何もないわよ。」

私は平然と嘘をつき、父を見つめた。

……死んでほしくないの……

父も……母も……兄も……

セブルスも……

……いなくなつてほしくない。

そう思つてつく嘘でも……やっぱり、嘘をつくのは胸が痛む。

24 水に溶けようとするあの子

全てを知った私は、それから外に出ることは勿論なく家の中で息を潜めるように生活した。子供の頃に戻ったように兄とゲームをしたり、お茶をしたりとそれなりに不自由はなく過ごしていた。

「……ねえノア、今度ドラゴン見せてよ」

私が紅茶を飲みながら言うと、兄が嬉しそうに目を輝かせて乗り出してくる。

「遂にドラゴンに興味を持ったのか☒」

軽はずみに言ったことを後悔しながら、私は嬉しそうな兄の顔を見ながら答える。

「……ちよつとね、実物を見て見たくなつたの」

兄はそうかそうかと呟きながら、頬をゆるっぱなしにして紅茶を飲む。

「じゃあ、ここを出られるようになったら、一緒に見に行こう」

「落ち着いて、紅茶が溢れる」

張り切り過ぎている兄の姿を見てついつい笑いが溢れた私も頬がゆるっぱなしだった。

私に得意げに、ドラゴンのことを話し出す兄の声を聞きながら、紅茶を飲む。

……こんな口だけの約束でも、真っ暗なこの先のことを考えると

暗くなるこの気持ちも、軽くなる気がした。

……私だって…希望ぐらい抱いてもいいだろう？

兄とのお茶会もお開きにして、家族揃って夕食を食べ終わった時だった。

部屋でゆっくりとして、あまりに暇で何となく部屋を出た時に、父が誰かを迎え入れていた。

少し汚れた様子のその女の人が私の姿を見て、小さく呟く声が聞こえてきた。

「…レイラ？」

「…セリーヌ叔母さん？」

こんな時だからこそ、叔母の顔が見れたことが嬉しくて、思いつきり抱きついた。

「レイラ、汚れるよ」

少し照れくさそうに言う叔母の言葉を無視して強く抱きしめた。

「セリーヌ、これを」

「ありがとう、アメリカ」

「レイラ、少し離れてあげなさい。体が拭けないだろう」

少し笑いながら言う父の声を聞いて、渋々叔母から離れた。

「叔母さん！」

「どうやら、兄も騒ぎを聞きつけて部屋から出てきたらしく後ろから駆け寄ってくる足音が聞こえてきた。」

「おおくノア。久しぶりだね」

兄は嬉しそうに、叔母と話を続けていると父が会話を中断させた。

「……セリーヌ、何があったんだ。」

父の低い声にその場は静まり返った。叔母は私と兄の方をチラチラと見て、この2人で言っているのかと気にしている様子だった。

「…セリーヌ、この子達は大丈夫よ」

母が隣から助け舟を出すと、叔母は少し真剣な眼差しになって話し出した。

「……私のところにアレック叔父さんが突然来てね…」

叔母が言うアレック叔父さんというのは、私にとってお爺ちゃんのお兄にあたる人だ。何回かしか会ったことがないから、顔もあまり覚えていない。

「……叔父さんが言うには……死喰い人が…勢いを増しているって。思い当たる隠れ家に行ったらしいんだけど…ほとんどいなかったらしいの」

叔母の言葉が耳に入ると、あの人が浮かび、冷たい声が空耳として聞こえてくる。

『…大切な者の苦しむ叫び声を聞きたくはないだろう?』

私は無意識のうちに首からかけていたペンダントを服の上から握りしめて、呼吸を整えた。

…大丈夫…大丈夫…

体の震えを止まらせるために何度も繰り返し、震えが止まった時には何やら話が進んだようで、父が叔母に話しかけていた。

「…エドは…どんな感じだい?」

「…大丈夫よ。あれから、外に出ていないし、今頃ぐっすり眠っている筈だから。」

じゃあそろそろ戻るわね。みんなの顔を見れて良かったわ。」

本当は行って欲しくなかったが、叔父を一人にしているというのならしょうがない。

「じゃあ、また近いうちに顔を出すよ。」

叔母は、アウラにタオルを渡して私たちの顔を見ながら話す。

「…気を付けてね。」

心配そうな母の声を聞いた叔母がしっかりと頷いて扉に手をかけようとすると、父が少し声を大きくして呼び止めた。

「…セリーヌ、…もしもの時は頼む」

父は、叔母の瞳を見つめて続けながらしっかりと口にした。

もしもの時とは…どういった時なの？

「……………分かってる……」

父を安心させるように、力強く言った叔母の声が聞こえた時にはもう、扉の向こうに行っていた。

ねえ…もしもの時ってなんなの…

私は、父を見つめながら心の中で問いかけてみたが口から出ることはなかった。

…私に聞ける勇気なんてある訳がない。

近くにいるのが当たり前になっていた家族を失うと考えただけで、恐ろしくて怖い。人間というものはそういうものだろうか？

叔母が顔を出してもう随分と日にちが過ぎて、もう9月を迎えている。気づけばこの隠れたような生活も1年ぐらい続いている。

窓に打ち付ける雨音を聞きながら私は少しウトウトしながら、外を眺める。こんな大雨は本当に久しぶりだ。

…雨の日は、不思議と眠気が襲ってくる。

頬杖をついて、これからどうすればいいのかと、ひとりぼんやりと考えていると突然慌てたようなノックが聞こえてきた。

私の返事も聞かずに開いた扉の奥にはアウラがいて、何やら焦っているかのように駆け寄ってくる。いつもの彼らしくない姿に少し戸惑いながらも、冷静を保って話しかける。

「アウラ、どうしたの？」

「お嬢様!!コインが熱く感じて、早くお知らせしないと」

アウラの言葉を聞いた瞬間に眠気なんてものは吹っ飛んで、私は側にあつた黒のローブと杖を手に持ち、彼に手を伸ばす。

「アウラ、私を外に連れ出して」

……コインが熱くなったということは……

…レギュラスが…死ぬ可能性が…高いということだ。

アウラは、私の言葉にオロオロと戸惑いだして、言葉を並べる。

「それはなりません。私はご主人様から貴女を外に出さないようにと言われております」

「アウラ、貴方も一緒にきて守ってくれればそれでいいじゃない。

……必ず夕食までには戻ると約束するわ」

私の言葉に、負けたように項垂れるとアウラは手を私に差し出してきた。

「……お嬢様…約束ですよ？」

「…分かってるわ」

彼の小さな手を握ると視界が歪んで、気づけば路地裏に立っていて、降り続けている雨で体が冷えていく。一応フードを深くかぶって私はアウラに手を伸ばした。

……記憶に頼るしかない…

「アウラ、私の手を握って」

大人しく握ってくるアウラを見て私は、記憶の中で見たあの景色を思い浮かべながら試験以来の姿くらましをした。

ばちんという音が聞こえて、ごつごつとした歩きにくい岩の上に着地をしてゆっくり辺りを見回す。荒れている波の音が聞こえてきて、横を見るとどうやら姿くらましは成功したらしく、大荒れの海が目

入った。

「お嬢様、ここはどこなんですか？」

アウラの問いかけに答える余裕がない私は、記憶を頼りに歩いて大きな洞窟に入る。

杖先を光らせながら先を進むと、記憶で見た通りだった。私は、尖った石を選んで手のひらを切り裂く。

「お嬢様!!!何をやっているのです☒」

「大丈夫よ、アウラ」

血が流れ続ける手のひらを石の壁に擦り付けると音を立てて崩れ落ち、道ができる。

血が流れる左手の痛みに耐えながら歩くとぽちゃんという水の中に小石が落ちる音が聞こえて、足を止めると、怒鳴り声が響いて耳にはっきりと聞こえてきた。

「クリーチャー!!!行け!!!」

怒鳴り声が聞こえたと思うと、人が湖に落ちるような重たい音が洞窟を響いた。私は光を飛ばして、アウラに呼びかける。

「アウラ、あそこまで姿くらましをお願いします」

私の焦っている声を聞いた彼は、じつと見つめて頷くと私の手を握る。視界が歪み、ぼちんという音が聞こえると、小さな島のような岩が重なっているだけのところに無事着地できた。

「坊ちゃんを…どうか、坊ちゃんを」

声をする方を見ると、ロケットを握っているクリーチャーが佇んでいる。

「クリーチャー、貴方は貴方のやるべきことをしなさい。

……できるでしょ?」

中々姿くらしをしようとしないうクリーチャーに話しかける。

「一度私を信じてくれたんでしょ?」

…もう一度だけ、私を信じて?お願い」

私の言葉を聞いたクリーチャーは、覚悟を決めたような表情を浮かべて音を立てて消えた。

「アウラ、もし約束を守れなかったらごめんね」

暗く、先が見えない湖を見つめながら言うと、アウラが何か言おうとして息を吸った音が聞こえてきたが、気にすることなく湖に飛び込んだ。

水に濡れたローブは一気に重みを増して、目が痛みますが、私は先が光っている杖の明かりだけを頼りに、深く深く潜っていく。あまり冷たく、体が冷えていった。

……こんな暗くて…寒いところでひとり…で死ぬなんて…

私は杖を握りしめる力を強めて、勘だけをを頼りに泳いでいく。

……それにしても…どうして、あの亡霊が襲ってこないんだろう。どんなに潜っても亡霊の姿はまだ1人も見ていない。

でも今はそんなことを気にしている余裕はなく、レギュラスの姿を探していると小さな空気の泡が浮いてきた。細かい泡が、彼の居場所を示しているかのように次々に浮いてくる。

……大丈夫……まだ間に合う

レギュラスが水に沈んで何分経っているかは分からないが、私の今の感覚ではもう5分ぐらい経っているような気がして不安が一気に襲ってくる。

泡が浮いてくる方に杖を向けると、何人もの人影がぼんやりと目に入ってきた。

…見つけた

私は目を凝らして、何百人という亡霊達がレギュラスを底へ底へと沈めようと体を引っ張っているのを確認する。

杖を向けて魔法を唱えると、杖先から炎が渦を巻くように亡霊達に襲いかかる。怯んだ亡霊達は簡単にレギュラスの体を離す。

私は力が入っていない手首をしっかりと握って、彼の体を抱き寄せて、急いで空気を吸うために上へに向かい湖から顔を出した。

彼の体の体重が全身にかかってきて、結構な重さに驚きながらも何とか支える。

……これが人ひとりの命の重さなんだ

私は体に空気を取り込むように、吸ったり吐いたり荒い呼吸を繰り返しながら、ぐったりとしているレギュラスの頭を支える。口元と鼻元に手をかざしてみたが、全く息をしていなくて、顔色も青白く瞼も閉じたままだ。

「お嬢様!!!大丈夫ですか☒」

私は急いでアウラがいるところまで泳いで、レギュラスの体を支えながら岩の上に足を踏み出す。

「彼を…彼をお願い……」

早く助けないと…間に合わなくなる。

すぐに水に入れたままのもう片方の足も上がらせようとするが突然足首を掴まれて、力が入らない私は、膝が地面についた。

抵抗をしようとするが何人もの力には勝てるわけもなく、引きずりこまれられ、簡単にまた湖の中に頭が入った。

「お嬢様☒」

遠くでアウラの声が聞こえたが、私は返事もできずに、水の中で亡霊達に向き合うと、一気に私を沈めようと襲いかかってくる。

息も体力的にも限界で、体にまとわりついてくる亡霊達に抵抗することができず、少しずつ下に沈んでいるのが分かった。

自分の体についている細かい泡が私とは、反対に上へ上へと上っていくのをただただ眺めるしかなかった。空気を求めているかのように口から空気が溢れ落ちるとそれは大きな泡となって、私を置いて上へと上っていく。

………苦しい…

そう思つて必死に空気を取り込みたい体は無意識に上に手を伸ばしていた。だんだん視界がぼやけると、それに比例するかのように体の力も入らなくなる。

………ああ………もう………いいかな………

体に力が入らなくなり、私はそんなことを思いながら瞼を閉じる。

……ここで死ねば…セブルスが苦しむのも見なくて…済む…

セブルスが……死ぬのも見なくて…済む……

これ以上……悩まないで、苦しまないで……済む…

そう考えると……死ぬのもそう悪くない…

脳裏には走馬灯のようなものが駆け巡り、今まで会ったことのある人達の顔がふわりと浮かんでは消えていく。

黒髪を靡かせながら、振り返るセブルスは優しく微笑んでくれて、私は手を伸ばした。

……セブルス…

苦しいはずなのに、何故か普通に息ができているような感覚に襲われて、目の前の視界が真っ暗になりそうになると上から誰かが水の中に飛び込んでくる音が微かに聞こえてきた。

あんなに冷たかったのに、誰かがまるで私を優しく抱きしめてくれて、温かく感じる。

ゆつくりと瞼を開けると、誰かが私の体をしっかりと抱き寄せて頭を支えてくれていた。

こんなに暗い湖の中がいきなり真っ赤な影に包まれると、私の体は上と上がっていき、湖から顔を出す。私の体は空気を求めるあまりに水も一緒に飲み込んで少し咳き込みながらも、空気を吸い込んだ。

「レイラ!!!大丈夫か☒」

私の頬を包み込みながら、私に呼びかける人影がだんだんとはつき

りして、顔がはっきりと見えた。

「……ノア……何で……」

「もう大丈夫だからな。……早く上がろう」

兄は私の体を支えながらアウラの元まで泳いで、ゆっくりと上がった。

「お嬢様！ああ……良かった。」

こんなに、冷えて……風邪をひいてしまいます」

泣きそうになっているアウラが駆け寄ってきて手を握ってくる。兄は素早く杖を振り、私の服を乾かしてくれると、自分の服も乾かしていた。

「どうして、ノアがここにいるの？」

私は、目の前に何故兄がいるのかが理解できなくて何とか言葉を繋げながら問いかける。

「そんなことより、レイラ。この子を助けないと」

兄は力なく倒れこんでいるレギュラスに近寄り、彼の口に手を当てるとほっとしたような表情を浮かべた。

「良かった……息はしてるね」

兄は、確認するように呟くと杖を振り上げて、レギュラスの濡れていた服も乾かした。

冷たい体温だからだろうか。兄は、レギュラスを抱きしめて自分の体温で温めようとしている。

「…聞かないの？何をしていたのか」

あまりに兄が何も言っていないものだから、私は我慢できなくなり自分から話しかけた。

「…聞かないよ。…レイラはただこの子を救おうとしたただけだろ？」

…大丈夫、父さんと母さんにも秘密にしておくから」

レギュラスをおぶって、ずれ下がる彼を上にあげながら、微笑んでくる兄の顔を見て、私は黙り込む。

「…私が連れてきたのです。お嬢様」

静まり返った空気を壊すかのように、アウラが話し出した。

「…お嬢様が水の中に沈み、勿論助けに行こうかと思いましたが、私が行っても確実に助けられないと思ったのです。」

…だから、姿くらましでお嬢様の部屋に戻り、丁度その部屋にいた御坊ちやまをお連れしたのです」

「いや〜驚いたよ。あまりに暇でね、レイラと遊ぼうかと部屋に行ったら誰もいないし、そしたら突然アウラが姿を現してね。」

…何が何だか分からない状態で気づいたらここにいたから」
笑いながら話す兄は、ゆっくりと私を見ると静かに言った。

「……良かったよ…間に合って」

そう言う兄は安堵しているような表情で、一気に罪悪感が襲いかかってくる。

「……ごめん…ノア……迷惑をかけてばかり」

「何を言っているんだ。迷惑なんかじゃないさ。レイラは人を救おうとしたんだろ？素晴らしいことじゃないか。」

…だからそんな顔をしないでくれ」

私を励ましてくる兄の言葉は、あまりに優しく、温かすぎた。

「…ごめんじゃなくて、ありがとうの方が嬉しいかなあ」

明るく言う兄は私の方をちらりと見て、にこりと笑ってくる。

「…ありがとう、ノア。」

きつと今、笑えている。

作り笑顔じゃくて、心から笑えていると思うほど、心が温かくなつた。

「どういたしまして。…よしじゃあ、帰ろっか」

兄の言葉を聞いて、私はアウラの手を握る。中々アウラの手を握ろうとしない兄を不思議に見ると、何故か兄は私の方を見つめていた。

「………僕は、レイラがピンチな時はどんな時も必ず助けに行くよ。」

兄は、アウラの手を握る直前私の顔を見て言ってきた言葉が耳に入り、私が言葉を返そうと息を吸い込んだ瞬間、視界が歪んだ。

目を開けると、見覚えのある部屋で一気に疲れが襲いかかってきて座り込む。兄は、おぶっていたレギュラスをゆつくりと下ろしていた。

兄にあの言葉の意味を聞こうとした瞬間、突然地面が少し揺れたように感じて、体に振動が伝わってきた。今でこんなことはなかったから、何か嫌な予感がして咄嗟に杖を握り、兄を見ると、どうやら私と嫌な予感がしたのか、杖を握り立ち上がった。

「…レイラはアウラと一緒にいて、少し外を見てくるよ」

そう言つて部屋を出ようとする兄に、私は声をかける。

「ノア、私も行く。」

迷っている兄の表情を見て、私は言葉を続けた。

「大丈夫。」

折れた様子の兄は、もう止めることなんてせずになんてしょうがなさそうに笑ってくる。

「ほんと……母さんにそっくりだな」

「そういうノアは、お父さんにそっくりよ」

笑いながら返して、後ろにいるアウラに声をかけた。

「アウラは、その子の側にいて」

頷くアウラを確認して、私は杖を握りしめて兄の後ろを追った。

ここは、姿くらしが出来ないように魔法をかけていると少し前に父に聞いたからこの場所の入り口は1つしかない。

部屋を出ると少しだけ早歩きで歩き、扉の前で身構えている父と母の姿を目にした。

「2人とも、アウラの元へ行け!!!
!!!」

私達に気づいた父が私に怒鳴るように声を張り上げた瞬間だった。扉が粉々になってその衝撃が私のところまでくると何が起こったのかわからずに目を凝らしてみる。砂埃が起こった先には、全身黒ずくめの集団が確かに中へと入ってきていた。それも数人じゃない。

砂埃が収まる前に、眩しい閃光が走り部屋が少しずつ崩れていく。杖を振りながら、必死に攻撃を防いでいる父と母を見た時には何か目に入って痛かったがもうそれどころではなかった。

「アメリカ!!!子供達を頼む!!!」

父の大声が私のところまで聞こえてきて、私は加勢するために恐怖で少し震えている手の震えを必死に抑えながら、階段を下りようとすると、後ろから私の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「レイラ!!!
!!!」

兄が私の腕を握って自分の方に抱き寄せると自分を犠牲にするかのように私の頭を胸に抑え込んで一緒にしやがみこむ。その瞬間に、上ギリギリに赤い閃光が横切った。兄の体越しに見ると、何人も死喰

い人が階段を上ってくる姿が見えた。

ひとりが、私達に襲いかかるように飛びかかってくるが、慣れたように兄が無言呪文で突き飛ばすと壁が崩れ落ちる。

私も何とか防衛呪文を唱えながら、兄に引つ張られながら奥へと走る。あまりに人数が多くて、魔法を防いでいられていること自体が奇跡に近く、もう限界が近づいていた。

兄は私の方をちらつと見てきて、何か決心したような表情が目に入ると一気に不安になる。

「…ノア？」

私の声には何も答えずに、唇を噛み締めて手を離し、私と迫り来る死喰い人の間に立ち塞がる。

「止まるな!!!レイラ!!!きつきの部屋へ行け!!!」

聞いたこともない兄の怒鳴り声のような大声を聞いて、私は少し足を竦めながらも泣きそうになるのを堪えて、奥の部屋に向かって走るしかなかった。

地響きがする音が後ろから聞こえ、振り向こうとすると前も見えないような濃い砂煙が襲いかかってきた。髪がパサつたのがわかり顔に砂や小石が当たり咄嗟に目を瞑ると、横から誰かに引つ張られる。砂の匂いがしなくなったと思うと聞き慣れた声が聞こえてきた。

「お嬢様☒お怪我は！」

目を開けると、そこは埃の被った家具が無造作に置かれてある部屋で、バランスを崩し座り込んでいる私の前にはアウラの姿があった。どうやら、私の部屋からこの部屋まで姿くらましをしたのだろう。彼の隣にはちゃんとレギュラスの姿もあった。

「アウラ、…っあ、早く助けないとノアが」

私は兄を1人、襲いかかってくる死喰い人の中に置いてきてしまったことを思い出して、アウラに縋り付くように腕を掴む。

「落ち着いてください…お嬢様。…とりあえず、私の手を握ってください。」

私は言われた通り、アウラの手を握ろうとしたが、彼がしつかりと倒れこんでいるレギュラスの手も握っていることに気づいてぎりぎりのところで思い留まった。

…屋敷妖精は、姿くらしができない場所でもできる…

「…駄目よ。…私だけここから逃げるなんてできな「お嬢様!今はそんなこと言っている場合では」

私の言葉を遮るように、声を張り上げたアウラは扉の奥から聞こえた足音を聞いた瞬間に黙り込む。

その足音は、どこか焦っている様子で耳を済ますと話し声も、聞こえてくる。

「クソツ、どこに行った!」

「落ち着け、殺してはいけないことを忘れるなよ」

「そんなことは分かってる。」

「お嬢様、早く」

死喰い人の会話に混じって、アウラが私に呼びかけてくるが、私は彼に手を掴まれないように一定の距離を保つ。

…待つて…約束が違うじゃない…

耳を澄ましていると、1人の足音が近づいてきて扉の近くにいるであろう死喰い人達に話しかける。

「…見つけたか？」

少し低い上品な声が聞こえた瞬間に、さっきまで話していた死喰い人達は一気に静かになった。

「…使えない…もういい、私が娘を探す。

お前達は、…ペンダントを探してこい」

……何で、ペンダントを探しているの？

……私が届けるまで待っていてくれるんじゃないの？

私は、今自分の首にかけてあるペンダントを服の上から触りながら頭の中で考える。

死喰い人達が探しているのはこのペンダント。ということは、例のあの人が欲しがっているということになる。

私が届けるのを…待ちきれなくなって…強硬手段に出たとしたら…

あんなに何も考えられないほどいっぱいだったのが嘘のように、色々な可能性が頭に浮かんでくる。

…もし、例のあの人にこれが本当に渡ってしまったら

…もし、使うことができたら

…ここで見つかったら…

私の頭の中に嫌な考えが浮かび上がるともう、やることは自然と決まった。

「アウラ、手を出して」

私がやつと手を握ってくれると思っただろう。少しほつとしたような表情を浮かべたが、私が首から下げていたペンダントを外して掌に置くと、複雑そうな表情に変わった。

「これを持って、安全な所へ行つて。」

「お嬢様、おやめください。貴女様をこんなところに置いていくなど「それを誰にも渡さないで。私があなたの元へ取りに行くまで守り続けて欲しい」

私はアウラの言葉を遮り、彼に言い聞かせるようにゆっくりと話す。

後ろから、扉を壊そうとする音が聞こえてきた。どうやらアウラが簡単に扉を開けられないように魔法をかけていてくれていたらしい。

「駄目です。お嬢様。」

嫌だと言うアウラは、泣きそうに頭を横に振りつづける。後ろからガラスにヒビが入るような音が聞こえてきて、心臓の鼓動が早くなつていく。アウラがかけた魔法が崩れていく音がカントダウンのように聞こえきた。

……もう時間がない……

「アウラ……約束する。必ず貴方の元に戻ってくる。……だからお願い、それと、彼を守って」

「お嬢様も一緒に来れば良いではありませんか！」

「……家族を置き去りになんてできない……」

だんだんと大きくなっていく音を聞こえているはずなのに、アウラはまだ私を説得しようとしてくる。

「お嬢様、お願いです。どうか私の手を握ってください。握ってくださいだけでいいのですどう「アウラ!!!」」

後ろから聞こえた大きなヒビが、はる音が聞こえて、私がアウラの話を守るために彼の名前を声を張り上げて怒鳴ると、アウラはびくりと体を震わせた。

「大丈夫必ず貴方の元に戻るから、だから貴方は、それと、その子を死にもぐるいで守って」

アウラに言い聞かせるように目を見て言い、私は杖を持ってゆつくりと立ち上がり、扉の前に立つ。

「お願いね、アウラ。」

振り返り、笑みを浮かべるとアウラは大きな瞳いっぱい涙を浮かべた。扉の方から少し砕けるような音が聞こえてきて、私は扉に向かい合った。

「…………お嬢様……」

「行きなさい！！！！！！」

アウラが小さく呟いた声を消し去るように私が声を張り上げると後ろからばちんと弾く音が聞こえてきた。それとほぼ同時にあんなに固く閉じていた扉は、粉々に吹き飛んできて、私は爆風のような風々に耐えながら杖を向ける。

砂埃が舞っていようが、関係なしに扉の方から色のついた閃光が私めがけて飛んでくる。なんとか、反応して杖を振り身を守るが、それでも敵うわけがなかった。気づけば何人もの死喰い人に囲まれていて、杖を手から弾き飛ばされたと思ったら縄が体にきつく巻きついてくる。

立てなくなった私は、床に頬をつけてゆっくりと近づいてくる靴を見て、見上げると長い金髪を靡かせて、私を見下ろしてくるルシウスが目に入った。

「……ルシ……ウス……」

殺されるのだろうか。

……彼に殺されるのかな

ルシウスが手に握っている杖を見て、ふとそんなことを思うと自然と彼の名前が浮かび上がってくる。

……殺されるのなら、

セブルスに……殺してほしい……

そんなことを思っていると、私は無理矢理立たされていて部屋から出ると、頭から血を流して、すっかり傷だらけの兄は私の姿を見た瞬間に、大きく目を見開いたのが視界に入った。

抵抗する気などなかった体は、そんな光景を見てしまうと自然と動くもので、自分の手首を掴んでいた死喰い人の手を無理矢理振り払い、兄に駆け出していた。

「ノア!!!!
!!!!」

「ステイ!!ピファイ!」

「レイラ!!!!」

後ろから呪文を唱える声を消し去るような兄の私を呼ぶ声が聞こえると、一気に体の力が抜けて、視界が真っ暗になった。

意識がなくなる直前に頭に浮かんだことは、父のことでも、母のことでも兄のことでもなく、なぜかセブルスの後ろ姿で、それがふわりと浮かび、消えていくと私の意識も同じように薄れていった。

25 もういない

突然、誰かが引つ張り上げているような感覚に襲われて、上か下かも分からなくなり、少し頭が痛みだす。今まで何も感じなかったのに、急に体の感覚が蘇り、身体中が怠く感じた。

遠くから聞こえてくるような声は、だんだんと大きくなり、はつきりと聞こえてくる。

「レイラに触るな!!!」

……誰……私の名前を呼んでるの……

ゆっくりと重たい瞼を開けると、まだ慣れないのか目の前が歪んで見えて吐きそうになる。ぼんやりとしていた光景がだんだんとはつきりとしてきて、自分が床に寝つ転がっているのが分かると、縛られている縄で体が痛みだした。

「……………ノ……ア……………」

兄を呼ぶ私の声は掠れていて、自分でも驚くほど弱々しすぎるものだった。

「レイラ！……大丈夫か☒」

確かに、兄の声が近くで聞こえて私はゆっくりと体を起き上がらせるとそこは一度きたことのある部屋だった。

……ここって……あの時の……

頭に初めてあの人に出会った時のことが、色鮮やかな映像として流れ出す。

できれば…あんな怖い思いは二度としたくない…

薄暗い、その部屋は前と何も変わっておらずとても広くて目の前には長い机と椅子が並んでいてその椅子に座っている人たちは、じつとこちらを見ている。周りには、大勢の死喰い人達が立っていた。

「レイラ、こっちを見て」

声が出た方を見ると、少し離れたところに母の姿があった。

「…お母さん……」

母は、私を安心させるかのように、優しく微笑んでくる。それでも私は不安が募るばかりで、近づくように1人の男が私の前に立つとドスの効いた声が部屋に響く。

「子供達に、手を出すな。」

その声がすぐに父のものだと分かり、まだ誰も死んでいないことに安堵した。

「…それは、貴様次第だな…」

低く、冷たい声が聞こえると、体の芯が凍るんじゃないかと思うほどで、自然と心臓の鼓動が激しくなった。

椅子をひく音が聞こえたと思うと、足音が少しずつ私達の方へと近づいてくるのが分かり、体が震えだした。

……怖い……

死んでいるのか生きているのか分からないほど青白く、もう人間なのかどうかもわからないその姿はどこからどう見ても今恐れられている人だった。

……できれば、もう二度と会いたくないと思っていた人……

「ふと、俺様の所にあることが耳に入った。

……なんとも、不思議なペンダントを持っているようだな」

あの人は、ゆつくりと父の前にしゃがむと気持ちの悪い笑みを浮かべた。

「残念ながら、そんなものは聞いたことも見たこともない。」

父は、真っ赤な瞳から視線をそらすことも、怖気づくこともなく淡々と答える。

「……そうか……残念だ……」

低い声が聞こえると、扉の奥から女の人の叫び声のようなものが聞こえてきて、体が強張った。その声は、よく聞いたことのあるものだった。

扉が開くと、声と一緒に、痛々しい姿の叔母が目に入る。

「離せ!!!私は何も知らない!!!」

「……セリーヌ……」

父の声を聞いた叔母は、私達がいることに気づいて目を見開くと、

突然泣き出した。

…待つて…何をする気なの…

無理矢理座らせられる叔母を見て、私は何も言えず、ただ満足そう
なああの人の表情が目に入るともう何も考えられなかった。兄が叫ぶ
声も、母や父が何か言っている声も、何もかも雑音にしか聞こえない。

「…ごめん…」

あの人叔母にゆっくりと杖を向けて、口角を上げるのを見た瞬間、何をしようとしているのかすぐに分かった。

「…ごめん…エドを守れなかった「アバダケダブラ」

最期の声を消し去るように緑の閃光が叔母に当たると、目を開けた
ままゆっくりと体を傾けて床に力なく横たわった。

「叔母さん」

!!!!!!

兄の叫び声が耳に入ると、涙を堪えることはできずに、頬に涙が流れ落ちる。

目の前に横たわっている叔母は、ピクリとも動かない。

あんなにも簡単に、目の前で身近な人が死ぬのを見ると、怖くて、怖くてどうしようもなく、私は無意識に彼の姿を探していた。こんな状況だからこそ、顔を見て、安心したかった。

…セブルス

彼の姿を見つけた瞬間に自然と涙が止まり、表情ひとつ変えることなく、こちらを見ているセブルスを見つめる。椅子の近くに立っ

るセブルスは、相変わらず不健康そうに青白くて、真つ黒な瞳も変わっていないかった。

私が見つめていることに気づいたセブルスは、少しだけ口元を固く結び、少しも動こうとしない。

……………セブルス……………

助けて……………

私は無意識の内に心の中で彼に何度も助けを求めていた。

何が助けてよ……………

私は自分の思ってしまったことを消し去るために少し俯いて瞼を閉じる。

彼を助けなかったくせに……………本当に私は都合が良すぎる。

…駄目…口にだしてはいけない。……………

そんなことしたら、セブルスが苦しくなるだけだ。

自分に言い聞かせて、助けを求める声を出そうとする口を閉じるように噛み締めた。

下を俯いて、必死に恐怖心に勝とうと目を閉じていると、いきなり髪を握られて嫌でも真つ赤な瞳と目があった。

「レイラに触るなど言っているだろ!!」

隣にいた兄の声が聞こえてきたが、私はもう恐怖心に勝てるはずもなく、せつかく止まったばかりの涙が溢れ出てきた。

「……………っあ……………」

「……………可哀想に、こんなに震えて」

そう言ったあの人は私の耳元でまで近寄ってきて、私は周りに聞こえないように小さく呟いた。

「…約束が違うではありませんか…」

少し間があくと、冷たい声が耳元ではっきりと聞こえてくる。

「……………中々見つけられないようだからな…俺様が手伝ってやる」

背筋が凍りつくような笑みを浮かべたあの人は私を見て、ゆっくりと胸に杖を押し当ててくる。

……………私を痛みつけて…父から聞き出すつもりなのか…

最初から…こうするつもりだったのか…

あまりに残酷な言葉の意味に私は頭が真っ白になる。

「やめろ!!! トム!!! 子供達は何も知らない!!!」

父の怒鳴り声が部屋に響いた瞬間、あの人の表情が一変した。

「その名で呼ぶな
!!!!!!!」

あの人の怒鳴り声が入ってきた瞬間に、突然右からふわりと暖かい温もりを感じて、その瞬間真っ白だった頭に色がついていく。寄り添ってきた母は、縛られている手で震えている私を少しでも安心させるかのように、手を握ってきた。

私とあの人の間に割り込むように前のめりになって、恐れることなく話しかける。

「…どうか、お願いです。……子供達だけは助けてください……それが無理だというのなら……」

最後まで母親らしく子供達を守らせて」

力強い母の言葉を聞いて、私はずっと閉じていた口が自然と開いた。

……お願い……やめて……

「……お母さん……やめてよ……」

……馬鹿なこと言わないで

「……大丈夫よ……レイラ……」

そう言って微笑んできた母は、肩で私を兄のいる方に押し倒す。あの人は私の顔を見て面白そうに、そして意図も簡単に呪文を唱えた。「アバダケダブラ」

人を殺すことを躊躇なくしてしまうあの人への恐怖心よりも、母がいなくなる恐怖の方が波のように襲いかかってきた瞬間、目の前が緑の光に包まれた。緑の閃光の影と重なった母の顔を目に入り、瞬きをして次、目を開けた時にはもう、母は力なく床に横たわっていた。

「……………っあ…やだ、やだよ!!!お母さん!!!」

私は、もう冷たくなっている母に必死に呼びかける。

「目を開けて!!!お願いだから!!!」

ゆっくりと父に近づき、話しかけるあの人が冷たい声が聞こえてきた。

「俺様も、魔法使いの命がこんなことで消え去るのは胸が痛む。」

「……………やめてくれ……………私も子供達も…何も知らないんだ。……………お願いだ。」

はつきりと言う父の声は少し震えていた。

「……………そうか、残念だ」

そう言ったあの人は、泣き叫ぶ私に杖を向け素早く呪文を口にした。

「クルーシオ」

その瞬間、私の心臓が握りつぶされているような痛みで襲われて、息がしづらくなると身体中の血管が圧迫されているかのように痛み

だす。まるで体の中で内臓を生きたまま鋭い刃物で切られているような痛みが全身に襲いかかつてきた。

「っツ!!ゲアアーーーーー!!!」
「レイラ!!!」

自分でもこんな声が出るんだと思うぐらいの音量が部屋に響き、私は激痛で涙を流す。痛がる私を見て、悔しそうに涙を流す兄の姿が視界に入る。

…本当は少しでも心配をかけないように叫びたくない。

だけど叫ばずにいられないほど、

苦しく、辛く、痛い。

「やめろ!!!今すぐに解け!!!」
!!!

「それは貴様次第だ。ペンダントのことについて話してくれれば、今すぐにでも解いてやろう。」

……そしたら娘の叫び声なんて聞かなくて済むぞ?」

父の迷いだした瞳を見て、私は必死に訴えた。

……駄目、言っては駄目。お父さん…

ペンダントを言っても言わなくても、この人は殺すつもりだ。最初から、この人は約束なんて守るつもりなどさらさらなかったんだ。

……少しでも信じた私が馬鹿だった。

……私が渡すまで待っていてくれると簡単に考えていた私が浅はかだった。

「約束が……約束が違うじゃないか!!!」

あの人が突然私への呪いを解き、さっきまでの痛みが嘘のように体

が軽くなったが、呼吸が乱れる。

「貴方の僕になれば、家族には手は出さないと、そう約束しただろ!!!」
「お前ごときが、我が君にそのような無礼な口の聞き方をするな!!!」
横から声を張り上げながら兄に、杖を向けるベラトリックス・レストレンジの姿が目に入った。

「ベラトリックス、俺様の邪魔をするな」

「……………私は…そのようなつもりでは…」

彼女は睨んでくる赤い瞳に怖気ついたように、杖を下げて、後ずさりをする。

「ああ…約束したな。俺様に忠誠を誓えば、家族を助けてやると」

兄を見下ろしながら話す、あの人の赤い瞳はとても冷たいものだった。

「だったら！何「お前は、俺様を裏切った。」

兄の話を途中で遮る声が入ると、私は血の気がひいた。

……………殺される…ノアが……………殺されてしまう

「貴様には失望した。……………親そっくりな馬鹿な奴に育ったもんだ」

そう言いながら、座り込む兄に杖を向けられ、あの人が呪文を唱えようと口を開いたのを見た瞬間、私の体は勝手に動いて、兄とあの人の間に入っていた。

「……何のつもりだ。」

光が差し込んでいない赤い瞳も、冷たい声も怖かったが、私は何も答えずにただ、後ろにいる兄を庇うように指先も動かさず、瞳を見つめた。

「殺すのなら、私だけを殺せ

トム!!!」

!!!!!!!

静まり返った部屋に、父の怒鳴り声が響くと、あの人は分かりやすく反応して、私達から離れて父に近づいていく。

「その忌まわしい名は捨てたと何回言えば分かるのだ☒」

父は私達から気を逸らすために、わざとあの人を本名で呼んだんだろう。

「俺様の名はヴォルデモートだ!」

父を殴る鈍い音が聞こえてきて、私は止むまで目を閉じるしかなく、私は服を力強く握った。

「………君が………殺したいのは……私だろ?……」

子供達に……何も罪はない……。

………殺すのなら、私だけを殺せ。」

途切れ途切れの父の声が聞こえてきて、目を開けると口の端から血を流している父の姿が目に入った。

「………子供達は、関係ない。」

……私が許せないのなら、邪魔だというのなら、

私だけを殺してくれ……頼む……」

父の声が消えていくと、あの人の口角が面白そうに上がり、笑い声が部屋に響いた。

「アハハハハハ、本当に……お前は愚かな奴だな。」

不気味な笑い声が部屋に響くと、その場にいた全員が緊張したように体が強張ったのが分かった。

「……セシル、お前にはこいつ以外にも娘がいるだろう？」

あの人は兄に杖を向けて、何かショーを始めるように楽しそうに話し出す。

「……何を……言っている」

「……関係ない？……お前が知らないだけだろ」

「レイラ……が……何だっけ言うんだ」

側にいる兄が、不安そうに、あの人に口答えする声が聞こえてくる。私は俯いて、頭の中で色々と考えてるがもう自分が今やらないといけないことは自然と決まっていた。

……ノア……ごめんなさい……私も嘘をついてるの。

……私の嘘はノアがついていた嘘みたいに優しくないの。

私は、父を見つめて、ゆっくりと振り返り兄に視線を移した。

……ごめん…私はそんなに強くないの…

「……………レイラ…う…」

私の様子が、おかしいことに気づいた兄の不安げな声が聞こえてきた。

……………私は、自分の為にしか動けないの

私は、口を開いて嘘の言葉を吐き出す。

「……………ここまでするとは聞いていませんよ…」

……………ノア…助けてよ…

「…レイラ…何を言っているんだ…」

……………私の嘘を見破って…

私の言葉を聞いた兄の声は震えていて、私を見つめてくる。

……………ごめん…ノア…

「素晴らしい演技だったな。」

……………平気で嘘をつく私を許して

「…そうですか？…少し嘘くさいと思いましたが」

……………お願い……………私を嫌いにならないで

私を縛っていた縄が外れて床に落ちる音が聞こえるほど静まり返っていた部屋に、私は淡々と話す。

「……………ここまでやって何も言わないということは本当に無いのは？私も隅々まで探してみましたがありませんでしたし」

……………私の大切なものを守りたいだけなの…

私の言葉を聞いた父は、何かに気づいたように私を見つめてきた。

「…ペンダントを渡せば、私を死喰い人に入れてくれるという約束は、本当にならない場合はどうなるのですか？」

……………だから…お願い……………許してください

どうせ、ペンダントを渡そうが渡さまいが殺されるのだ。

だったら、私は今ここにいる全員を、あの人を兄を、…セブルスを騙すんだ。

驚きで目を見開いているセブルスを視界の端に入れて、私は緊張している心臓の鼓動を感じながら、自分自身さえも騙すように嘘の言葉を繋げた。

「……………貴方様をこんなにも長くお待たせしてしまったのは、変わりないですからね……………」。

……………どうぞ……………殺してくれてかまいませんよ」

私は笑みを浮かべて、あの人の前に立ち両手を広げた。

「…………レイラ」

「貴方様が私の死をお望みなのなら、私は喜んでそれを受け入れます。……………」

…………私の死で、セブルスが死なないのなら喜んで私は受け入れる。兄の声を消し去るように言うと、あの人は面白そうに満足そうに口角を上げて近づいてくる。

「…………貴様は本当に毎回俺様の想像を超えてくる。…よいだろう。…………最後のチャンスにやろうではないか……………」

セブルス…………こいつの杖を」

彼の名前が出た瞬間心臓がわかりやすいほど飛び上がって、鼓動が早くなる。人を掻き分けて、あの人の近くに近づくとセブルスは確かに私の杖を握っていた。

「…………お前のいう通り、ペンダントが存在しないのならこいつらに用はない。」

用はないという人を人とも思ってもいない冷たい言葉を聞いて、また恐怖心で呼吸がしづらくなった。

あの人は何故か兄を縛っていた縄を解き、セブルスから私の杖を受け取る。

ゆつくりと私に近づき、無理矢理握らせてくると氷のように冷たい手が当たった。生きている人間とは思えないほど、冷たくて体が一気に冷たくなる。

「…俺様に忠誠を誓うのだろうか？」

……………だったら何をすればいいか分かっているな……」

獲物を捕らえた蛇のような瞳に、映っている私の顔は何とも酷い顔だった。

私は、杖を力強く握りしめて動かない足を無理矢理動かし、セブルスの奥にいる兄に向かって歩き進める。

……私の手で、殺すんだ……

兄を、殺すんだ

そう思うと手は震えて涙が出てきそうになり、私を見つめてくるセブルスを見て唇を噛み締める。

……殺したくない

あんなに優しくいつでも私のことを思っていてくれた兄を、

頼りになる兄を殺したくない。

殺したくない……でもやらなきゃ……じゃないと、ここで私も死んで……結局セブルスも死んでしまう。

私は自由になっても座り込んでいる兄の前に立ち、顔を見つめた。
……縛られていて、抵抗できないままだったら、まだ楽だったかもしれない。

……でも、自由になっている兄を見ると、一気に人を殺す恐怖が襲ってくる。

……強制されていない。……私自身の意思で殺すのだ。

……このために……あの人はわざわざ……縄を解いたのか……。

「…レイラ……嘘だと……言ってくれ……」

……やめて……お願い……そんな顔しないで……

弱々しい兄の声を聞いた瞬間、私の体は固まった。

……できない……殺せない……

私に殺せない……

……誰か……助けて……

杖を持つ手の力は抜けて、全く体が言うことを聞いてくれない。

「……呪文を忘れたではあるまいな？……：……しょうがない……：……セブルス、手本を見せてやれ」

中々動こうとしない私を見てか、あの人のセブルスを指名する声が聞こえてきた。

彼は、ゆつくりと歩いて父に近づく。

待って……：……セブルス……

ローブから杖を取り出し、父に向けるセブルスの杖を握っている手が少し震えているのを目にした瞬間、私は自然と体が動きだし、呪文を唱えようとしていたセブルスの杖と腕を握り自分の方に抱き寄せていた。

……駄目、彼をこれ以上苦しめさせたらいけない……

……セブルスに……人を殺させない……

「…どういうつもりだ」

後ろから聞こえた冷たい声は、明らかに怒っているようでドスの効いた声だった。

「……私のためにチャンスを作ってくださいだったので、私が2人とも…殺します。」

私は、あの人の返事も聞かずにセブルスの腕を離して、父に杖を向ける。

……ごめん…お父さん…

こんな…娘で…ごめんなさい…

私の中々呪文を唱えられずにいると、父が私を安心させるかのように、優しく微笑んできて、私にだけ分かるほど口を小さく動かす。

『だ、い、じよ、う、ぶ、 わ、か、て、る』

声は聞こえなかったが確かにそう言っていた。

父にそう言われただけだというのに、体の震えは止まり、何か体の中が冷たくなり、何か無くなったような気がする。私は自分が生きるために杖を持つ力を強める。

他の人に殺されるぐらいのなら……

「アバダケダブラ」

私が殺す。

私の口は、意外と簡単に死の呪文をなんの躊躇なく唱えた。杖先からは緑色の閃光がはしり、眩しい光で目の前にいる父の姿が見えなく

なった。

瞬きをし、瞼をあけるとさっきまで生きていたはずの父はまるで眠っているかのように倒れこんでいた。

涙も出ることなく、まるで決められたことしかない機械かのように、兄に近寄って杖を向ける。今まで兄と過ごした時の光景が走馬灯のように駆け巡ってくると、思いが溢れてくる。

……………約束したのに……

……………ドラゴンを今度一緒に見にいくと約束したというのに……

……………何度も助けられてきたのに……

「……………レイラ……」

小さく名前を呼ばれて兄を見ると、さっきまでの顔とは別人で、とても穏やかだった。いつも通り微笑んできて、何も抵抗もすることなく、ゆっくりと目を閉じる。

私は歯を噛み締め、杖を握る手を強めた。

……………どうしよう……………

できない……………殺せない……………殺したくない

そう思ってしまうと、目の前に立っている兄がだんだんと涙でぼやけてくる。

………ひとりになりにたくない……

私は、杖を兄に向けたまま少し俯くように瞼を下ろした。

物音ひとつせず、静まり返っている部屋に私の方に近づいてくる足音が聞こえて、目の前で止まったかと思うと前から抱きしめられた。

瞼を開けると、私は兄に抱きしめられていて、耳元で囁いてくる。

「……ごめん……」

兄の声が聞こえたと思ったら、私の体は傾いていて、床に座り込んでいた。持っていた杖は何故か兄が持っていて、彼は私の杖を使って死喰い人達に向かって閃光を放っている。

それぞれの動きがゆっくりに見えた私は、兄の勝算などあるわけがないことぐらい一目瞭然で、何故兄がこんなことをしているのかが分からなくなり、目で追うことしかできない。

兄があの人に杖を向けた瞬間に私の方をちらりと見てきて、自然と兄と目があつた。それはほんの一瞬で、何か伝えようとしてくるその瞳を見た瞬間、側にいた死喰い人の兄に向けている杖を無理矢理奪い取る。

私は他の死喰い人が呪文を唱える前に、あの人に杖を向けている兄

の後ろ姿に杖を向け、素早く呪文を唱えた。

……あの時、確かに目で伝えてきた……

「アバダケダブラー！」

……殺せって……

少し声を張り上げながら言うと、少し行き先が定まっていないうような緑色の閃光が走り、兄の体を包み込む。ゆつくりと膝をつき、床に力なく倒れる兄を見届けながら、私は呼吸を整えて、真っ赤な瞳を見つめた。

「ご無事でしたか？」

自分でも驚くほど、部屋に響いた私の声は冷静なもので、身内を殺した後とは思えないほど淡々としすぎていた。

「……少し時間をかけすぎだな」

「申し訳ありません。……人を殺すのは、初めてのことなので」

私は答えながら、持っている杖に視線を落として振り返る。

「あっ……これ、勝手に借りてしまいませんでした」

後ろにいた死喰い人に手渡しし、力なく倒れている兄に近づいて、膝をついた。ピクリとも動かない兄は目を開いたまま死んでいて、本当に死んでいるのか疑うぐらいだ。私は自分の杖を拾い上げるのと一緒に兄の顔を下ろして、ゆつくりと立ち上がる。

「……………私を貴方様の僕にしてくださいますか？」

どこかまだ私を、信用していないようなあの人に問いかけると、
ゆっくりと私に近づいてきた。

「……………まあ…いいだろう…」

…貴様を今日から俺様の僕として迎え入れてやろう」

あの人の口から出た言葉を聞いて、少し安堵した私が笑みを浮かべると、何故か周りにいる人の表情が固まった。普通に笑ったつもりなのだが、そんなに冷酷な笑みだったのだろうか。

「……………さあ、左腕を差し出せ」

服を捲り上げ、前に出すと私の左腕を力強く握りしめて杖の先を当ててきた。体温を感じない冷たくて、ゴツゴツとした手に握られただけだというのに、体が緊張して少し熱くなった。

あの人が、何を言っているのか分からないほどの小さな声で、蛇語に似たような呪文を口に出して唱えだすと、まるで身体の中に一匹の太い蛇が這っているかのような気持ちの悪い感覚が襲いかかってきた。身体中に蛇が巻きついて締め付けられているように苦しくなり、私は瞼を下ろしてじつと終わる時を待つ。

何も感じなかった左腕に、突然焼印を押されたような痛みと熱が帯びてきて私は少し体を強ばった。

何も感じなくなり、瞼をゆっくりと開けると私の左腕には闇の印が黒くはつきりと跡ついていた。

私は、まだ熱くて少し痛む左腕を押さえながら目の前にある真っ赤な瞳を見つめる。

「……………貴様には、期待しているぞ……………」

レイラ・ヘルキャット」

静まり返って部屋に、冷たい声が響くと私の体温がすつと下がったような気がした。

「……………」期待に応えられるよう……貴方様に尽くさせていただきます」

セブルス……………貴方は……絶対に……死なせない……

私の口からは平然と偽りの言葉が出て、口角を上げた。

もういない……………

私を温かく見守ってくれる父も

優しく、一番に私のことを考えてくれる母も

私の味方でいてくれた、頼りになる兄も

家族の死を目の当たりにして、悲しみ涙を流す私も

弱くて、臆病者な私も

泣いてばかりな私も

もういない。

26 沈んでいく

足が宙に浮き、ぐらりと視界が揺らぐと体の中をかき混ぜられるような感覚に襲われた。

足が地面につき、目を開けると、さっきまでいた不気味な屋敷の代わりに、大きな玄関の扉が視界に入ってくる。あんなに、苦手だった姿くらしもすっかりと慣れた私は、よく見たことのある扉をただじっと見つめた。

扉が外れているせいで、自然と家の中が見える。灯りもついていない家は、先も見えず、まるで自分の家ではないような気がして、一気に入る気が失せた。

それだというのにまるで早く中に入れと急かしているみたいに、強い風が後ろから吹いてくる。

正直入りたくはなかったが、体はそんな私の気持ちとは裏腹にまるで家族を求めるかのように勝手に動いていて、中に入っていた。

あんなに綺麗に掃除されていた我が家は、少し埃かぶっていて、明るく暖かかったのに……今はこんなにも暗く冷たい。

見ただけで、ここにも死喰い人が来たんだというほど分かるほどに、荒れていて何もかも原型をとどめていない。

静まり返っているだけだというのに、それだけで恐ろしく感じる。私は、自分があの本を手元に置くために家に戻ってきたことを思い出して、自分の部屋に行こうと一歩足を踏み出した。

『お帰りなさい、レイラ。』

突然、前の方から母の声が聞こえたような気がして、私は継る思いで顔を上げるが、声がした方には誰もいなかった。

……分かってる……いるはずがない……

私は左腕を押さえて、瞼を閉じる。

………本が無事かどうかを確認して、早くアウラと…レギュラスを探さないと

私が今したいことは、出来るだけ早くアウラと合流することだ。そう思っても、中々体は動いてくれない。

『レイラ、お帰り。学校はどうだった？』

今度は兄の音がさつきよりもはっきりと聞こえて、瞼を開けると目の前に笑いかけてくる兄の姿があった。あまりにはっきりと見えるものだから、体が強張ったが、私は無意識に兄の名前を声に出た。

「……………ア……………」

手を伸ばして触れようとすると、音を立てずに消えていき、自分の幻覚だったということを思い知る。

『レイラ、お茶でもしないか？』

名前を呼ばれた方を見ると、階段の上から私に微笑んでくる父の姿が一瞬だけ見えたような気がした。瞬きをすると、いたはずの父の姿

はどこにもなく、ただ崩れそうな階段だけが視界に入ってくる。

…分かってる。

いない。もういないんだから。

私が殺したんだから。

いるはずがない。

そう思うと、少し震えていた体は落ち着いて、さつき家族を殺したとは思えないほど冷静でいられた。

すぐに泣いていた頃がまるで大昔のように、涙も出なければ、なぜか悲しくなることもなかった。悲しくならないから、胸が苦しくなることもない。それだというのに、何か大切なものがぽっかりとなくなつて、穴が開いてしまったように虚しい空虚感だけが襲いかかってくる。

何が原因なのか全く分からない私は、この不思議な感覚に胸に手を置いて考え込んだ。

「おやめください!!」

「離せ!! 僕が外に出ようが君には関係ないだろ!!」

突然、怒鳴り声が上がって来て、私はゆっくりと顔を上げる。聞こえてくる声は聞いたことのあるもので、私が探している人の声だった。

………()にいます……

そう思った私は声をする方向に向かって歩くと、だんだんと争っているような声はだんだんと大きくなっていく。

「それはいけません!!!私は貴方のお命をお守りするとお嬢様と約束したのです!」

アウラの大きい声が聞こえてきた1番奥の部屋の扉を開けると、今にも外れそうな扉の金属が擦れる音が聞こえてくる。

突然、扉が開いたからだろう。アウラがすぐさまレギュラスの前に立ち庇うような姿勢をとったのが視界に入った。

「…………お嬢様……」

私だと分かると、強張った体はだんだんと力が抜けるのが見ただけで分かった。

「…………無事でなによりです……」

ほっとしたような表情を浮かべるアウラを見て、私は表情を変えずにゆっくりと近づく。

「…………お嬢様…………主人様は……死んだわ。」

アウラの話を遮るように言った私の言葉を聞くと、彼の瞳孔が開いたのが分かった。

「……私以外、全員死んだわよ」

自分でもこんなにも淡々に、死んだと言えることに驚きながらも、

ゆっくりとレギュラスに視線を移す。

「……………目が覚めてばかりで、申し訳ないんだけど」どういうつもりですか？」

私の話を最後まで聞かずに、口を挟んできたレギュラスは何か怪しんでいるようにすごい剣幕で言い寄ってくる。

「僕はあのロケットを変えた後、湖に沈んだはずだ。それなのに目を覚ましたら、見知らぬ所にいるし、彼は貴女が僕を助けたとまで言いだす。」

「……………ええ…」

私が冷静に目を逸らさずに答えると、彼は今思っていることをどんだんに言葉にしていく。

「あそこに行くなんて、誰にも言っていない。貴女が僕を助けることなんて、……………僕があそこに行くということを知っていなければ、できない。」

「…一体貴方は……………何を隠しているんですか？」

すらすらと噛まずに言ってくるレギュラスを見つめて、私はゆっくりと口を開く。

「……………全て貴方の言う通りよ。」

「…私は貴方があそこに行くことも、命を落とすのも知っていた。だから貴方の屋敷妖精にコインを渡したの。」

……………私1人では…きつとこの先乗り越えられないことがある。

「……私は……少し先の未来を知ってる」

……彼の力を借りないと、きっとこの先上手くいかない。

私の言葉に、アウラは唾然な表情を、レギュラスは信じられないような表情を浮かべ、恐る恐るといった感じで声を出す。

「未来を……知っているなんて……そんなの信じられる訳がない。」

「……未来を知っているといつても……私が知っている未来が訪れるという保証もない。……でも、少なくとも今までは私が知っている通りに進んでいる。」

これから起こる出来事も、命を落とす人物も……知ってる。だから、貴方を助けられたの。

……貴方が今生きていること自体が、私が未来を知っていることの証拠になるんじゃないかしら？」

ごく普通に答える私を見たレギュラスは、信じられないように声を絞り出す。

「そんなの……現実的じゃない……」

「貴方がごく普通に使っている魔法だって、……マグルからしてみれば、現実的じゃない。……それと同じよ。」

現実的じゃなくても今こうして現実で起きている。」

私は、ゆつくりと彼に歩み寄って話を続けた。

「…貴方に提案があるの。」

黙って私を見てくるレギュラスは、どこか警戒しているように身構える。

「…貴方が生きているということはまだ、私達以外に誰も知らない。」

……………貴方は今、家に戻るに戻れないんじゃないかしら？」

「だから、何なんですか」

「……………私に協力してくれないかしら？…勿論、損はさせないわ。…お互い、手を貸しあつていくのは悪いことではないと思うんだけど…」

何か考えるように黙り込んだレギュラスは、私から目を離さずに、口を開き、声を出した。

「……………断つたら…？」

レギュラスの声を聞いて、私が杖を取り出すと仕草で気づいた彼は、咄嗟に杖を懐から取り出す。私は、一瞬の間隙について、レギュラスの手から杖を弾き飛ばし、杖を向けた。

「……………その場合のことは、考えてなかったけど……………さつき言ったでしよ？」

貴方が今生きていることは私達しか知らない」

抵抗できない彼に杖を向け、こんなことを言うこの状況は、誰が見ても提案というより、脅しだろう。

「……………このどこが提案何ですか？

…僕には脅しにしか見えませんが」

そう言いながら少し笑みを浮かべるレギュラスは、私を少し見つめて口を結ぶ。

「……………1つ教えてください。」

私が返事をするのを待つことなく、彼は後を続ける。

「…一体貴女は何をするつもり何ですか？」

杖を握る手を強めて、レギュラスを見つめることしか出来ず、彼の声が聞こえてきた。

「……………僕に協力してほしいのなら、貴女が何をするつもりなのか、教えてください。……………それぐらい、僕にも知る権利があると思います。」

全く彼の言う通りだ。

今から何をするのか教えない人に、協力するはずがない。

セブルスを救いたいと言うだけだと言うのに、私の口からははつきりもしない言葉しか出てこなかった。

「……………死なせたたくない…人がいる…」

私の小さな声を聞いた賢い彼は、何か考え込むように少し黙ると、一瞬何か分かったように瞳が揺らぎ、口を開いた。

「……………分かりました。」

…貴女に協力します。」

案外簡単に承諾したレギュラスを見て拍子抜けした私は、彼を見つめた。

「それ以外に、選ぶ選択肢は無さそうですし」

少し笑いながら言う彼の言葉を聞いて、私はゆっくりと杖を下ろした。

「…それで、これからどうするんですか？」

私は、レギュラスの声を聞きながら荒れ果てた部屋を見て、考え込む。

……………ここに彼らが来るとは考えにくいですが、絶対来ないという保証はどこにもない。

レギュラスが、生きているということを経験した彼らにばれたら色々厄介だが、…とりあえず…住む場所を確保するまではここに居るしかないか…

「…とりあえず…私がいい場所を見つけるまではここで過ごすしかないわね。」

……貴方は、自分が死んでいることになっていることをちゃんと頭に「レギュラス・ブラックです。」

「えっ？何」

突然私の話を遮って名前を言ってきた意味が分からず、聞き直すのにこりと笑みを浮かべて話します。

「僕にも一応名前があるので、……さつきから名前を全然呼んでくれないじゃないですか。」

あつ…僕の名前、知りませんでした？」

「……いや…知ってるけど…」

……この子…意外と面倒くさいかもしれない

名前で呼ぶとかそういうのは何も考えずにいた私は、そう思いながら彼を見つめた。

「じゃあ、何でもいいので貴方じゃなく、名前で呼んでください。これから長い付き合いになりそうですし」

にこにここと笑いながら言うレギュラスを見て、私は少し溜息をついた。

……別に…ここで反論する必要なんてないだろう。

「分かった……じゃあブラック「それ以外で」

私の声に被すように言ってきたレギュラスをひと睨みすると、楽しそうに言ってくる。

「その呼び名は、兄さんに行っているじゃないですか。

………一緒にされるのは嫌なので、別のでお願いします。」

………さつき何でもいいと言ったのはどこの誰だろうか。

私は少し苛つきながら、ぶっきらぼうに答える。

「じゃあ、レギュラスでいいわね。これで満足でしょ？」

「はい。」

…それで、僕は貴女のことを何と呼べばいいですか？」

「…別に好きに呼んでもらって構わないわよ。」

適当に受け流した私の言葉を聞いたレギュラスは、少し考え込んで、すぐにいつもの張り付いた笑みを浮かべてきた。

「分かりました。」

今日はあまりに色々なことがありすぎたせいで、疲れた私は、ぼろぼろのソファアに腰掛けたと同時に無意識に溜息がこぼれ落ちる。

「溜息をついたら幸せが逃げるそうですよ」

レギュラスは、私の横に腰を下ろして、少しからかうように言ってくる。

「…溜息ついていないとやっていけないわよ」

私がソファアの背に肘をついて頬杖をつきながら答えると、何か察したように彼が質問してくる。

「……………こつて…貴女の家なんですか？」

「……………そうね…それが何？」

「……………こんなに荒れている理由は、……………貴女の家族が死んでしまったことと関係しているんですか？」

レギュラスの言葉を聞いた私は、何も答えることができず、ただ頭の中でさつき見た家族の息絶える姿が浮かんでくる。

「…お嬢様……………私から頼みごとをするなど、もつてのほかだということは十分に理解しております。

しかし、……………何故ご主人様達が……………あのようなご立派な魔法使い様が命を落とすようなことになったのかを……………教えてくださいませんか？」

私が黙り込んでいると、後ろから恐る恐るといった様子のアウラの声はつきりと聞こえてきた。

「……………何故…知りたいの?……………」

振り返ることもせずと言った声は、自分でも思っていたほど低く、冷たいものだった。

「……………私は…死ぬまでこの身をヘルキャット家の皆様に捧げると誓いました。」

本来ならば、ご主人様達が死ぬまでお側にいることが、ご主人様達のお命を守ることが私の存在意義でございます。

……………しかし、それはもう叶いません。……………せめて…ご主人様達の最期を知りたいのです。何があったのか、真実を「殺したの」

私に必死に訴えかけてくるアウラの声を聞いていると、もうこれ以上聞きたくなくて、少し声を張り上げながら彼の話を遮った。

「…えっ…?…」

あまりに突然な言葉に、アウラの戸惑ったような声が聞こえてきたが私は、気にすることなく後を続けた。

「私が殺したのよ。」

私の声で静まり返った部屋は重苦しく、息がしづらい。

「アウラ、お茶淹れてきてくれない?…」

あまりに居づらくなった空気を壊すために、私が頼むと、アウラが部屋を出ていく音が聞こえてきた。

レギュラスと2人つきりになつても一体彼にどこまで話せばいいのかわからずに、少し考え込んでいると、静まった部屋に声が響いた。

「…何か……殺さなければならぬ状況だったんですか？」

彼が、まさかその話を掘り下げてくるとは思っていなかった私は、少し驚いてレギュラスに視線を移した。彼は私の方も見ずに、ただ前を見て、後を続ける。

「……僕は……貴女が何も理由なしに人を殺すとは思えない」

はつきりと断言するレギュラスを見てみると、少し悲しくなつて胸が苦しくなつた。

「……貴方が思つてるほど……私は綺麗じゃないわよ」

ぼそり呟くように言った自分の声が静かに消えていくと、部屋はまた静まり返る。

「……気づいているかどうか……分かりませんが」

もう耐えきれなくなつたかのように、話し出すレギュラスの声を聞いて、横を見るとさつきまで前を向いていた彼は私の方を見てきた。

「……どうして……さつきから……左腕を隠すように握っているんですか」

彼の言葉を聞いて、自分の左腕に視線を移すと、確かに私は左腕を

力強く握っていた。

…完全に無意識だった。

黙り込むしかない私を見てレギュラスは何か考え込み、そしてゆっくりと前を向いた。

「……………僕は…信用……………ないですか…」

寂しそうな声が耳に入ってきて、彼の方を見ると、悲しそうな表情を浮かべる姿が目に入ってきた。

「……………そういう…ことじゃない……………」

そう言うので精一杯な私は、左腕を力強く握りしめるしかなかつた。

「……………話してくれないと…協力したくても…できませんよ」

あんなに私よりも小さく、子供だと思っていたレギュラスは、今では歳が変わらないと思うほどに大人じみているように感じた。私よりも、先に死喰い人になった訳だし、きつと想像できないようなことだつて乗り越えてきたんだろう。

困ったように笑いかけてくる彼を見て、私はぎゅっと服を握りしめながらゆっくりと口を開いた。

「…自分が生き残るために家族を殺して、死喰い人になった。

…ただそれだけのことよ。」

レギュラスが何か言おうとした時、アウラが部屋に入ってくる音に

遮られて彼が口を閉じたのが見えた。

「お嬢様、申し訳ありません。茶っ葉がこれしかありませんでした。」

「……こんな時だもの。……お茶できるだけでもましでしょ。」

謝りながら私の前にティーカップを置く、アウラに言って、少し変わった香りの紅茶を口に含んだ。

「……変わった香りですね。」

紅茶を飲んだレギュラスは飲んだことがないのか、ぼそりと小さく独り言のように言った。

「……その茶っ葉は……ご主人様のお気に入りです、何か大切なことがある度に必ずお飲みになっていたものです。とても貴重なものだと、私に話してくれました。」

アウラの言葉を聞いた瞬間、頭に紅茶を飲みながらゆったりと過ごす父の姿が自然と浮かび上がってくる。私は、父の姿を消し去るように、2人に別の話を切り出した。

「できるだけ早く見つけるように努力するけど、いいところが見つかるまではここで我慢してくれるかしら?」

「ええ……大丈夫ですよ」

レギュラスは紅茶を飲みながら、呑気に答える。

「……貴方が生きていくということは、私達以外の人には知られないように。分かった?」

「分かっていますよ。」

横から聞こえる彼の声を聞いて、私は飲み終わったティーカップを机の上に置いた。

隣に座っていたレギュラスは、いつの間にか寝ていて、部屋には物音ひとつせず、彼の寝息だけが聞こえてくる。夜にしては明るいと思うほど、月明かりは眩しくて、私はちらりとレギュラスに視線を移した。

体を丸めて、眠っている姿を見るとまだ少しだけ子供らしい表情を浮かべながら、眠りにについている。

「お嬢様…」

私を呼ぶ小さな声が聞こえた方を振り向くと、アウラが何か大事そうに両手で持ちながら立っていた。

「どうしたの？」

レギュラスを起こさないように、声を押し殺しながら、聞くと彼は私の方にゆったりと腕を伸ばして両手の中にあるものを見せてくる。

「これを…」

アウラの手にあるペンダントは、月明かりに照らされて少しきらきらと輝いているように見えた。

「……………ありがとう…。」

私はペンダントを受け取り、首からかけて服の中にしまいこむ。

「アウラ、貴方も寝ていいのよ。」

「それは、なりません。……………貴方様を差し置いて私なんか眠りにつくなど」

「……………私は眠れないし、…それに貴方には体力をつけといてもらいたいの。ほら、早く寝なさい」

私が優しくアウラの背を押すと、何か迷ったような彼の声が聞こえてきた。

「……………私に……………お嬢様の…苦しみを背負うことは……………できませんか？……………」

私の方を見るアウラは少し瞳に涙を浮かべていた。私は少し笑みを浮かべるしか出来ず、何も答えられなかった。

「……………お嬢様は…そんな笑みを浮かべる方じゃなかったはずです。」

……………今の貴女はまるで…別人のように感じます。」

アウラの言葉に少しドキツとしながらも、私は口を開いて、彼の頭に手を置いた。

「……………私は何も変わってなんかいいわよ。」

アウラ、貴方には…私よりも、レギュラスを守って欲しいの。」

アウラは私の言っている意味が分かっていないようにただ私の顔を見つめてくる。

「彼が生きているということは私達以外に知られてはいけない。彼が命をかけてまで守りたいものを、危険に晒すことなんて、できないでしょ?」

私は優しくアウラの頭を撫でながら、後を続ける。

「……貴方の主人を殺した私に…もう手は貸したくない?」

私が笑いかけながら問いかけると慌てたように、否定してくる声が聞こえてきた。

「そのようなことを言い出すのは、おやめください。ご主人様がいなくなつた今、私にとっての主人はもう貴女様しかいないのです。

……どうか、私を独りにしないでください」

何か勘違いしたアウラの声は少し大きくて、私は落ち着かせるように声を出した。

「……………そう……………じゃあよろしくね。アウラ」

私の言葉を聞いた途端、アウラはほつとしたような表情を浮かべた。

あれから数日が過ぎたが、私は未だにいい場所が見つけれずいた。そろそろ見つけないとレギュラスが生きることが彼らにばれてしまうのも時間の問題だ。

荒れはれた家に帰り、今にも崩れそうな階段を上がって奥の部屋に入るといつも通りレギュラスがにこりと笑いかけてくる。

「おかえりなさい。…良い場所は見つかりましたか？」

「残念ながら、どこもかしこもすぐに見つかってしまいそうな場所ばかりね」

……そろそろ、一旦この場所を離れた方がいいかも知れない。

彼が私の帰りを待ち、出迎える姿はすっかりと慣れたもので、私は平然と返した。

「ほら、また癖が出てますよ」

突然そう言われて、左腕に視線を移すと彼の言う通り、私は左腕を握っていた。あれから、無意識に左腕を触るのは治るところか癖になっってしまう、彼曰くよく触っているらしい。

「そんなことでは、あの人は騙せませんよ」

少し笑いながら言うレギュラスの瞳の奥は、明らかに私よりも何かを知っているような色を宿していた。

「……ひとつ相談なんだけど」

私から相談されるとは思っていなかったんだろう。少し間が空いて、レギュラスの戸惑ったような声が聞こえてきた。

「……ええ……何ですか」

「こんなにも集まらないものなの？」

あれつきりあの人の顔も見えていなければ、何か命じられることもなく、何となく不安だった。

「まあ……何か大切な用があれば、集められる程度ですし、自分で出向いて報告するのがほとんどですからね」

「……そう……」

私が左腕を見て、小さく呟くとアウラが部屋に入ってくる足音が聞こえてきた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。…丁度お茶を淹れたところですが、どうなさいますか？」

アウラの尋ねてくる声を聞こえ、答えようとすると外から何人かの足音が聞こえてきた。その瞬間に部屋には緊張感が走り、一気に静まり返る。

壊れている床を人が歩く音が聞こえてきて、私は静かに杖を握った。

「…………アウラ、一旦レギュラスを連れて、ここを離れて」

「…どうかご無事で…」

アウラは、私の言うことを素直に聞き入れてレギュラスの手を握るとばちんという音を立て、消えていった。

2人を見送った後、私はもう外れそうな扉をゆっくりと開けて、玄関へと向かった。

死喰い人だろうか。…そうだとしたら、一体何のためにこんな所へ来たというのだろうか。

レギュラスが生きていることが彼らにバレてしまったとしたら、厄介だ。

私は唾を飲み込みながら廊下を歩き進め、二階の手すりにつかまりながら覗き込むと玄関前にいる人影が目に入った。

……思ったより…いる…

そう思いながら、階段を下りようすると1人の人影が明らかに私の方を見上げているのに気がついた。何も言わずに杖を向けてくるその人影が視界に入った瞬間、咄嗟に身構える。

襲いかかってきた赤い閃光を杖を一振りして弾き飛ばすと、破裂音がその場に鳴り響いた。そうなれば、そこにいる全員が私の存在に気づくわけで、杖を向けてくる。

流石にひとりで防げる自信もないが、とりあえず次、襲いかかってくるであろう攻撃に身構えると、張り上げた声はその場に響いた。

「止めろ!!!すぐに杖を下ろせ!!!」

どこかで聞いたことのあるような男の人の声を聞いた人影が、ゆっくりと杖を下ろしていく。

「……………安心してくれ。…私達は敵じゃない」

私を安心させるように話しかけてくる声を聞いても、杖を下ろせるはずがない。

「……………名乗らない人を信用できる訳がありません。」

私がそう言い放つと、男の人は少し咳払いをしてゆつくりと近づき、杖先を灯らせた。

「失礼……………私は、ハロルド・ミンチャム。君の父親に頼まれてここにきた」

私を見上げながら名を名乗る男の人は、流石の私でも顔も名前も知っている人物だった。

……………何で…魔法大臣がこんな所に…

日刊予言者新聞で顔も見たことあるが、直接話したことなんてない。

「少し、君に話さなければならぬことがあるんだ。下りてきてくれないか？」

私は言われた通り、階段を下りて彼の前に立つと、周りにいる人たちの中に見覚えのある顔があることに気づいた。

アラスター・ムーデー……………

彼がいるということは……………この人たちは全員闇払いの可能性が高い。

ムーディは、何か探るように私をじっと見つめてくる。

「……君が、セシル・ヘルキヤットの娘さんで間違いないね？」

「……そうですが…なぜ、父のことを知っているんですか？」

「……ここで話すのも何だから、少し移動しよう。」

そう言いながら差し出してきた手を握ろうとした瞬間に、左腕が少し熱く熱を帯びだし、何故か屋敷の風景が脳裏に過ぎる。本能的に呼び出されていると感じても、今彼らが目の前にいる状態で姿くらましなんかできるわけもない。

中々握ろうとしない私を見た彼が、心配そうに問いかけてきた。

「姿くらましは苦手かな？」

「……いえ、大丈夫です。」

タイミングが悪すぎる左腕の違和感を感じながら差し出してきた手を握ると、視界が歪み、いつもの気持ち悪い感覚が襲いかかった。た。

宙に浮いていた足が地面を捉えた感覚を感じてゆつくりと目を開けると、何人もの魔法使いらしい格好をした人たちが忙しそうに歩く姿が目飛び込んでくる。

両方にある暖炉のようなものからは、緑色の炎が舞い上がったと思うと、ローブをなびかせながらゆつくりと人が現れていた。

私は慌てて先を歩くミンチャムの後をついていきながら、周りを見回した。

やっぱり私の記憶通りで、広げた大広間の中心には大きな石像と噴水が視界に入ってくる。

気づけば、応接間のような部屋に案内されていて、ソファアに腰掛けるように言われ、目の前でローブを脱ぐ彼を目で追いかけているが私は聞きたいことを口走った。

「……一体父から何を頼まれたというんですか。」

「そんなに慌てなくても、きちんと一から説明するよ。とりあえず、お茶でも飲んで落ち着きなさい。」

そう言われて、机に視線を移すと気づけばティーカップが置かれていた。ミンチャムにじつと見られていることに気づき、私は渋々お茶に口をつけた。

「……ところで、……他の人の居場所は知っているかい？」

座りながら問いかけてきた彼の声が耳に入ると、私はゆっくりとティーカップを置く。

……父や母、兄のことを言っているんだろうか。

そうだとしたら……一体何と言えいいのかだろう……。

「すまない。……今のは忘れてくれ」

黙り込む私を見て、何か悟ったように彼が謝ってくる。話を変える

ように、お茶を一口飲むミンチャムは、私に話しかけてきた。

「あまり時間もないから、単刀直入に聞くけど………魔法省に身を置く気はないかな？」

思いもしなかった言葉に、私は聞き返すことしかできなかった。

「…意味が分かりません。」

「君のお父さんから、頼まれたんだ。もし自分がいなくなった時には、子供達の安全を確保してほしいと。」

……君は今住むところもないんじゃないか？」

私が何も答えずにいると、ミンチャムは後を続けていく。

「……君が、魔法省に居てくれると私だけではなく、他の人達の間もあ
るから安全も確保できる。」

今、私はあの人に信用されていない。あの人の信用を得るために、
この状況を利用すれば今後動きやすいのかもしれない。

淡々と説明する彼を見ながら、頭の中で浮かぶ色々な考えを整理し
ながら耳を傾ける。

魔法省に身を置けば、情報も入ってくるだろうし、あの人のスパイ
として魔法省に潜り込むといえ、少しずつ信用を得られるかもしれない。
ない。

「……何があったかは、家の様子を見て、大体予想はつく。……君ひ
とり、野放しにして死喰い人に襲われるのは確実だ。」

……君にとって悪いことではないとは思いますが………どうかな？」

変にここで断る必要もないだろう。

私に問いかけてくるミンチャムを見つめながら、私はゆっくりと口を開いた。

「……………分かりました。……………貴方の言う通りにします。」

私に断れるとでも思っていたのか、彼はほっとしたように、表情筋が緩んだ。

私は適当に誤魔化して、魔法省から出ると人通りが少ない通りへと急いで移動する。路地裏に入り、周りに誰もいないことを確認して、服の袖を捲り上げてみると、変わらず黒い印がはっきりとついていた。もうあの違和感はないが、今からでも行った方が良かっただろう。

もう一度周りにマグルがないかを確認して、姿くらしをした。

目にただけで怖かったのに、今ではすっかりと慣れて平然と屋敷の中へと入っていく自分の体が、自分のものではない気がした。

中に入り、きつともう集まっているであろう一番奥の部屋へと歩き進める。立派な扉の前に立つと中から微かに声が聞こえてくる。

「……………裏切り者は……………消せば良いまでだ」

聞こえてきた冷たい声に、私の体は震えることなく、自分の意思とは裏腹に扉に手をかけ、中へと入っていた。一斉に私の方を見てくる全員の視線を感じながら、口を開く。

「申し訳ありません。……どうしても抜け出せない状況でしたので、遅れてしまいました」

見たところによると、集まっているのは全員ではないらしく、数人しか集まっていなかった。

椅子に座り、私の方を見てくる人達の顔を一人一人確認する。私が知っている人は、ルシウス：それから、バーテミウス・クラウチ・ジュニアらしき男、ベラトリックス……そして：セブルスぐらいだ。

薄暗い部屋を少し歩き、目の前に座っているあの人の目を見つめながら、話しかけた。

「……（つづ）報告があるのですが、宜しいですか？」

私が問いかけると、あの人は少し口角を上げてゆっくりと答える。

「……良いだろう。話してみろ」

「………実は、先程成り行きで魔法省に身を置くことになりました。」

その言葉に少し反応みせるあの人を見つめながら、後を続けた。

「……父が、生前魔法大臣に頼んでいたようでして、……私としてはこの状況を利用して、貴方様のお力になりたいと考えているのですが、どういたしましょうか？」

嘘の言葉をつらつらと吐き出していく私は、自分の体じゃない気がするほど、淡々としていた。

……こんなにも…嘘がつけるといふのなら……

どうして……あの時…つけなかったんだろう

「残念だが、その必要はない」

きつぱりと言い捨ててくるあの人の声が入ると、頭に浮かんだことは消えていった。

思ってもいなかったことを言われた私は、嫌な予感がして、あの人から目を離さないようにしながら慎重に声を出す。

「……………貴方様にとって良い話だと思っておりますが」

視界の端にセブルスの姿を入れながら問いかけると、ただ彼の姿を見ただけだというのに、緊張したように少し鼓動が速くなった。

……ひさびさに顔を見たからだろうか。

………こんな時にセブルスの顔を見るだけで、少し胸が暖かくなるなんて、もう私はどうしようもない。

「……………貴様に1つ聞いておきたいことがある。」

「何でしょう」

少し笑みを浮かべながら、聞き直すと腰掛けているあの人はゆつくり口を開いた。

「エド・ヘルキャットはどこにいる。」

私は、思えがけない言葉に聞き直すしかなかった。

「……それは……どういった意味でしょうか？」

…叔父は、死んだのではないのですか？」

確かにあの時、叔母が死ぬ直前に助けられなかったと言っていた。

私の言葉が響いた部屋は、静まり返り、重い空気だけが流れる。

我慢できなくなったベラトリックスが、椅子から立ち上がり私にズカズカと歩み寄りながら声を張り上げてきた。

「黙って聞いておけば、さつきからデタラメばかりよくもまあそんなに言えるものだ。お前があいつを庇っているんだろ!!!!」

さあ、早く居場所を言いな!!!」

「何のことだか……さっぱり分からないのですが……その様子だと、叔父は生きていますね？」

私の言葉を聞いたベラトリックスは、怒りでなのか、体を震わせるのと、私に杖を向けてくる。

腰掛けているあの人に視線を移すと、何も言わず、私の様子を見ているだけだった。

「……信用されていないのは……分かっていました……まさかここまでされていなかったとは……」

あの時……貴方様は私を僕にしてくれるとおっしゃいましたよね？」

「ああ……確かに言ったな。……だが、信用したとは言っていない」
感情がこもっていない声を聞いた私は、少し可笑しくて、ついつい笑みがこぼれた。

「……では何故、信用していない私をわざわざお呼びになったのですか？」

「口を慎め!!!」

隣から聞こえるベラトリックスの怒鳴り声が鬱陶しく感じて、私は彼女を睨みつけた。

「今から死ぬ人間がそんなこと知らなくてもいいだろう」

口角を上げながら、言ってくるあの人の冷たい声が耳に入ってきても怖いと思うことはなかった。

「……………確かに……そうですね。」

「……………1つ言っておきますが……私は叔父の居場所など知りませんよ。」

笑いながら言った私を見たセブルスの表情が少し歪み、眉間の皺が深くなったのが見えたが、私は後を続けた。

「……死ぬ前に、1つご質問があるのですが、……叔父を殺してここに体

を持つてくれば、……私のごことを信用してくださるといふ意味でしよ
うか？」

ここで殺されるのは、何としてでも避けなければならぬ。

「貴方達の言う通り、叔父が生きているというのなら、…私の前に姿を
現わす自信があります。叔父には随分と可愛がってもらいましたし、
彼はまだ私が貴方様の下についたとは知らないはずです。」

スラスラと出てくるその場しのぎの言葉を繋いでいく。

「……そんなの信じられる訳がないだろう？…そう言つて貴様もあいつ
のように尻尾巻いて逃げるに決まっている。」

「同じにしないでくれませんか？」

口を挟んでくるベラトリックスを睨みつけて、あの人に視線を戻し
た。

「…私に任せてくだされば、貴方様のお望みどおりになりますし、私も
晴れて貴方様に信用される。

お互い、良い事ばかりではありませんか？………」

ここで死ぬわけにはいかない。ここで死んだから意味がない。

私の声が響いた部屋は静まり返り、最初に口を開いたのはあの人
だった。

「…………ベラトリックス…杖を下ろせ」

彼女は少し戸惑いながらも、大人しく従った。

「……………良いだろう。…貴様の提案をのんでやる。」

「…ありがとうございます。」

少しほっとしながらお礼を言う私の声に被せるように、冷たい声が聞こえてきた。

「だが、……………貴様が殺す気がないと俺様が判断した場合、…直接手を下す。もちろん、逃げようとした場合も例外なくだ。…いいな？」

「勿論です。」

自分でも信じられないほどに、平然と笑みを浮かべながら答える私は、どんとと底に沈んでいつているように感じた。

先も見えない真っ暗な闇に沈むのは、決して良い気分にはならない。
い。

…息もしづらくて、生き辛くて、…………冷たい。

でも…………貴方と一緒に…………

セブルスが側に居てくれるのなら…

沈むのも…そんなに悪くない。

こんなことを思ってしまう私は、可笑しいのだろうか。

こんなにも1人の人間を愛して、執着するのは普通じゃないの
だろうか。

でもきつと……

大切な人を…愛している人を守りたいというこの感情は…間違っ
てない。

27 もう分からない

何とかその場をやり過ごせた私は、姿くらましで家に戻った。相変わらず、荒れている部屋をぐるりと見回して、アウラの名前を呼んでみる。

「アウラ…もういいわよ」

私の声に答えるように、ばちんという音が聞こえると、アウラとレギュラスが私の前に姿を現した。

「…お嬢様！お怪我は☒」

「大丈夫よ。…そんなことよりも早くここを離れた方がいい。」

私の姿を見た瞬間に、慌てて駆け寄ってくるアウラに答えながら、私は2人に話し出す。

「…ここに来た人は、一体誰だったんですか？」

「…魔法大臣と、多分闇祓い。…父が頼んでいたらしいの。自分が死んだ時に、子供達の安全を確保してほしいって」

私の言葉に考え込むレギュラスを見ながら、私は後を続けた。

「…私は魔法省に身を置くことになったけど、貴方達の安全が確保できるところはまだ見つかってないし…」「…何か隠していませんか？」

私の話を遮り、問いかけてくるレギュラスは見つめてくる。

「…そんなことで、焦っているなんて貴女らしくない。……別にあるのでしょうか？…ここを離れないといけない理由が」

「……それは…」

「しつかりしてください。貴女がひとり抱え込んだ所でどうにかなるものじゃない。……僕は、貴女に協力すると言った。

……大丈夫です。

…僕を…信じて…」

私に語りかけてくるレギュラスの言葉を聞いて、自然と落ち着いていく自分の体から力が抜けていくのを感じながら、声を出した。

「……あの人に呼び出された。…」

私の小さな声のはつきりと響くほどに静まり返った部屋には、緊張した空気が流れた。

「…エド叔父さんを……庇っていると疑われて、何とかその場をやり過ごせたけど、……疑われるにはそれなりの理由があるはず。……まだ確証はないけど、…誰かを匿っているということが薄っすらとばれているのかも知れない」

あの時感じたことを言葉にすると、どんどんと思っていることが外に出て止まってくれない。

「…このままだと、貴方も私も…殺される」

「一旦落ち着きましょう。……今焦っても状況は変わらないですし…」

そう言いながら、私の肩を持つてくるレギュラスは少し頼もしく見えた。

「……………そうね……………。とりあえず、貴方達の安全を確保することに集中するわ。」

私は少し息を整えながら、レギュラスに言い、アウラに視線を移した。

「……………明日には、確保するからそれまでに身支度を済ましといて。……………アウラ、貴方は彼からひと時も離れないで」

「分かりました。」

アウラの返事を聞いて、私はひと息ついて、考え込む。

やっぱり…マグルが住んでいる所に紛れ込むのが1番だろう。

「……………探してくる」

私が部屋を出ようとする、後ろから腕を掴まれ、呼び止められた。

「……………今は行くべきではないと思います。」

……………どこかで、貴女のことを見張っている可能性が高いですし、それに……………もう日が暮れてますから。」

じつと見つめてくる真剣なレギュラスの表情を見ると、私もだんだんと落ち着きを取り戻し、冷静になる。

「……………そうね…」

私の言葉に、安堵したような表情を浮かべた彼は私の腕を離した。

大体、目星はつけてある所は何箇所かある。

明日、そこを回って、決めればいい。

…大丈夫

そう何回も自分に言い聞かせても、心臓は緊張しっぱなしで、勿論眠ることなどできる訳がなかった。

朝一で出掛けた私は、街の中の、マグルが普通に住んでいるアパートのような建物の一部屋を借りることができた。

ダイアゴン横丁に行き、グリーンゴッツで両替をして、部屋を借りる手続きを色々と済ましてみると、気づけば夕方になっていた。お金は、両親が残してくれたおかげで困る心配もない。

宙に浮いた足が、地面につき、体勢を整えると、荒れた部屋に変わらざいる2人の姿が目に入ってきた。無事な姿を見ると、安心から体の力が抜ける。

「見つかりましたか？」

「ええ…確実に安全な場所とは言えないけど、この場所よりかは何倍もましよ。……身支度は済んだ？」

「…はい、大丈夫です。」

少し笑いながら言ってくるレギュラスを見て、私はふとあの本のことを思い出した。

「少し…待ってて。すぐに戻るわ」

私は、部屋から出て、本を取りに自分の部屋に向かった。

ひさびさに入った自分の部屋も、すごい荒らされようで、廃墟のようだった。床に散らばっている本の中に、混じっていた、黒い表紙の本を拾い上げて砂埃を払う。

…逆に、変に隠さなくて良かったかもしれない。

そう思いながら、ページをパラパラとめくり無事なことを確認して、2人の元に戻った。

「…ごめんなさい。…じゃあ行きましようか。」

戻った私の手の中にある本をちらりとレギュラスは見たが、何も言わずに私の手を握る。アウラが私の手を握った瞬間に視界が歪んだ。

まだ見慣れていない部屋に視界が変わると、2人は確認するように

キョロキョロと見回す。

「ここは好きに使って構わないから、……もう少しだけ外に出るのは我慢してほしいの。」

「大丈夫ですよ。……意外と良い部屋ですし、それに興味深い本もいくつかありますし、暇は潰せそうです。」

レギュラスは、前の住人が置いていった本を興味深そうに手を取り、ページをめくっていた。

「……ああ……それは、前の住人が置いていったものらしいから……きつとマグルの本よ」

「……なるほど、だから見たことなかった訳ですか」

レギュラスは納得したように呟いて、本を机の上に置くと、ソファーに腰掛けた。見ただけでも柔らかくなさそうなソファーに座った彼の表情から、やっぱり柔らかくないらしい。

「本当に、最低限の部屋しかないの。奥には寝室とバスルーム、それから隣の部屋には小さなキッチン。」

落ち着くまでは、とりあえずここで我慢して。」

「十分です。意外と見つかりにくそうですし、それに……」

レギュラスはカーテンを少し開けて、人通りが多いことを確認するように、外を覗き込んだ。

「……これだったら、マグルに紛れ込めそうですしね」

カーテンを閉めて、ソファアに腰掛けるレギュラスを見てみると私はずっと思っていたことを問いかけていた。

「……本当に…家族に会わなくても良いの？」

ずっと思っていた。彼の為だと思つてやってきたことでも、実際はそれが苦しめているのかも知れない。家族想いのレギュラスが、家族に会いたいと思わない訳がない。

今後、1人ではやれないこともあると思つて、彼に力を貸して欲しいと頼んだけど……本当にそれが正しかったのかも…分からない。

「……今だったら…まだ、間に合うわよ。…私から提案していませんけど…まだ今だったら家族の元に戻「レイラ」

話を遮られたことよりも、名前を呼ばれたことに驚いて、こつちを見ていたレギュラスを見つめた。

「……今更、家族の元に戻るつもりなんてさらさらないですよ。…例のあの人がいつ僕が裏切ったのかを気づくかも分からない状態で、戻れる訳もないじゃないですか。」

にこりと笑いかけながら話すレギュラスは、後を続けていく。

「……自分の欲のために、家族を危険な目に晒すなんてしたくないんです。

それに……僕が家族の元に戻ったら……

「貴女が独りになる。」

彼の言葉が重くのしかかり、少し声が出しづらくなった。

「……独りなんて……もう慣れっこよ。」

私は彼から視線を逸らし、近くにあった机の上に持っていた本を置き、話題を変えるために話しかける。

「この本、私の大切なものなの。……無くさないように、預かってもらっていいかしら?」

「……ええ……いいですよ」

レギュラスは、本をちらりと見て、何か言いたげに返事をした。

「じゃあ、……アウラ、少しここをお願いね」

アウラに視線を移し、部屋から出ようとすると腕を握られ、引き止められた。振り返ると、私の腕を握るレギュラスが視界に入った。

「……どこに行くんですか?」

そう問いかけてくる彼の瞳は、真剣そのものだった。

「……魔法省よ。……早く帰らないと、どこに行っていたのか聞かれそうでしょ?」

「……何か……隠していませんか?」

私の言葉が聞こえていないように、質問ばかりしてくるレギュラスは後を続ける。

「……………何を…するつもりですか…」

少し不安そうな表情を浮かべてくる彼は、いつもよりか幼く見えて、ついつい子供を安心させるように頭を撫でた。

「……………貴方が不安がることなんて…何もしないわよ」

私に頭を撫でられたことに驚いたのか、少し体を固まらせたレギュラスを見て、ゆっくりと手を離すと、彼の顔がぐらりと歪んだ。

レギュラスは、どこまで勘づいているのだろう。

……私が叔父を殺さないといけないことも薄々気づいているのだろうか。

彼に全て話した方がいいのだろうか。

何だったら私は、本当に信じていいのかさえも分からなくなっていた。

中々帰ってこなかった私を心配してなのか、案の定どこに行ってい

たのかミンチャムから問いただされたが、何とか誤魔化すことができた。

案内された部屋は、少し狭い部屋だったが、それでも身を置かせてくれる私からすれば、十分過ぎるものだった。

「すまないね…空いている部屋がここしかなかったものだから。」

「いえ…私には十分過ぎるほどですよ」

私の言葉を聞いた彼は、優しく微笑みながら杖を一振りする。

少し埃かぶっていた机も椅子も綺麗になり、散らかっていた羊皮紙や、何冊かの本が元の位置に戻るかのよう移動して、見違えるほどになった。

「その扉は、寝室に繋がっているからね。そんなに良いベッドじゃないから、寝苦しかったり、何かあったら直ぐに私に言いなさい。」

「ありがとうございます。」

まさかこんなにも整った環境を用意してくれるとは思っていなかった私は、少し戸惑いながらお礼を言った。

「まだ仕事が残っているから、私は戻るとするよ。…ああ、この部屋は好きに使ってもらって構わないからね。」

そう言いながら、部屋を後にするミンチャムの後ろ姿を見送って、ローブを1人掛けのソファアーにかけて、椅子に座った。

……さて…これからどうすればいいのだろう。

腰掛けて一休みすると、あの人の顔や言葉が頭に浮かんでくる。

死なないためには…叔父を殺さないといけない。でも、その叔父がどこにいるのかも分からない。

そもそも、本当に生きているのかどうかも分からない。今考えれば考える私は、叔母の言葉を聞いただけで、叔父が死ぬ瞬間も、死体も見えていない。

……死ぬ…瞬間…か……

…あつ…ペンダント…

私は急に、ペンダントのことを思い出して、服の中から取り出し、手に持ってみた。

「……身近な人が死ぬ瞬間を目にしたら…時を止められる……」

父に言われたことを繰り返すように呟いて、ペンダントを開いてみると、変わらず4つの惑星のような球体が飛び出し、周りを回りだす。見た感じでは、特に何も変わっておらず、相変わらず何本の針がそれぞれの速さで動いている。とりあえず、ペンダントの色々なところを押してみたり、触れてみたりしてみたが、何も変わることはなかった。

変化がないペンダントを見ていると、父が言ったことはデタラメなものじゃないかと思いだした私は、やけくそに針の中心を押してみると、ボタンのようにカチツという音が聞こえた。

すると、それぞれの速さで動いていた針は、ピタリと止まり、周りを回っている球体の動きも止まった。

咄嗟に周りを、見回してみるが、特に変わっている様子はない。

ペンダントに視線を戻すと、今まで動いていなかった針が静かに時を刻んでいることに気がついた。

ペンダントを手に持ち、少し緊張しながら、部屋の扉を開けると、最初に目に飛び込んできたのは、まるで石像のように全く動かない人の姿だった。

ゆっくりと近づき、顔の前で手を振って見ても、瞬き一つしない。

……本当に…時間が止まった…

そう確信した私は、全く音が聞こえないことに気がついた。足音も、物音も、音というものがこの世界から消えてしまったかのように、静まり返っている。

…今この世界で…動いているのは…私だけ

そう思うと、本当にこのペンダントをあの人に渡さなくて良かったという安堵感が襲ってきた。

何となく、ペンダントに視線を移すと、時を刻んでいる針が12時を指し、カチツという音がした瞬間に、音が聞こえてくる。咄嗟に後ろを振り返るとさっきまで動いていなかった人が何も気にすることなく歩いていった。

…時間制限がある…ということか。

部屋に戻った私は、ペンダントを眺め、首からかけると服の中にしまい、瞼を閉じた。

時間が止められるということは、本当に、父も母も兄も…死んだということだ。分かっていた。あんな状態で生きることがおかしい。

でも、どうやら私はまだどこから生きているのかも馬鹿なことを思っていたようだ。

でないと、今こんなにも胸が苦しくならない。

あれから、魔法省に身を置いた私は尻拭いという名の仕事をこなしていた。ただで身を置かせてもらっている者だから、文句を言っただけではないことぐらい分かっているのだが、毎日羊皮紙と向き合い続けて正直言つて溜息しか出てこない。

急に現れた私は、死喰い人に家族を殺された可哀想な少女として魔法省中に広まったらしく、すれ違うたびに情をかけてくるものもいれば、変に気にしてくる者もいた。

最初は慣れなかったが、時々アウラが身の回りのことをしに来てくれていたお陰で、魔法省で寝泊まりすることもすっかりと慣れた。何か頼みたいことがあったら、アウラのことを呼ぶと直ぐに前に現れてくれる彼は、とても頼りになる。

レギュラスの様子を見には、時々行つてはいるが、今の私は自由に外を歩ける身でもないし、長い時間魔法省を留守にできるわけもない。

ただ、夜に毎日叔父に会うために、家に戻つてはいる。叔父が私に

会いに来てくれるのなら、まず最初に家に来るだろうと思ったからだ。

でもまだ一回も会うことが出来ておらず、本当に生きているかどうかも怪しく思うほどに時間が経ってしまっていた。

生きていたとしても、私に会いに来てくれる保証なんてどこにもない。このままだったら、私はきっとあの人に殺されるだろう。

こんな賭けをやっていること自体、きつと間違っているんだろうが、あの時のこの方法しか思いつかず、後先考えずに言ってしまったのだからしょうがない。

……叔父を見つけて……殺さないと……

自分の掌を眺めながら、簡単にそう考えてしまうこと自体、私はきつともうおかしくなっているのだろう。

正直言つて、今後何をするのが正解なのか、何をすればいいのか分からない。レギュラスに協力を強制したことも、彼の命を救ったことも、魔法省に身を置いたことも、家族の命を奪ってまで、生き残ったことも本当に正しかったのだろうか。

……あの時……一緒に……死ねばよかったんじゃないかと時々頭によぎっては、頭が真っ白になる。

何も考えられなくなった頭には、いつも必ず最初に浮かぶのは、セブルスのことだった。

学生の頃のセブルスの後ろ姿が浮かんでは、消えると、体に力が自然と入る。

彼を……助けるまでは……

こんな腐った世界を終わらせるまでは……

セブルスが……心から笑える日が来るまでは……

死ねない。

……死んではいけない。

そう思うと、……何故か胸らへんが寂しくなった。

魔法省の部屋に籠って、ひたすら羊皮紙に向き合っていると時間の感覚も狂うらしく、気づけば日も落ちていた。

気分転換に部屋を出てみると、もう日は落ちていているというのに、まだ忙しそうに働く人とすれ違う。体を伸ばしながら歩き、少し体越しに後ろを振り返ると、人混みに紛れながら、私の方を見てくる1人の男が目に入ってきた。

……：やっぱり……私の……勘違いではないな

最初は気づかなかったが、最近同じ人物が私のことを見張るように、部屋を出ると高確率で近くにいることが多い。

分かるのは、男だというだけで、名前もどこの所属なのかも分からない。ただ、私には1つ心当たりがある。

神秘部の……オーガスタス・ルックウッド。

彼だとしたら、私を監視するようになってくるのも十分に理解できる。

こんなことが分かったとしても、……状況が良くなるなんてことはない。

私は部屋に戻り、ローブを羽織ると姿くらしをした。

足が地面につき、顔を上げるとソファアに座り、本を読んでいるレギユラスの姿が目に入ってきた。

「お帰りなさい。……状況は良くなりましたか？」

私に気づいた彼は本を閉じて、机に置くと私に問いかけてくる。

「あまり良くはないわね。……それで何か変わりはある？」

「いえ、何も変わりはありませんよ。……」

レギユラスの声を聞きながら、椅子に座ると、アウラがキッチンから出てくるのが見えた。

「お嬢様、お帰りなさいませ。今、お茶をお持ちしますね。」

「ええ……ありがとうございます」

アウラがキッチンの方に入っていく音を聞いた、レギユラスはまるでタイミングを見計らったかのように、口を開いた。

「……………すみません。……」

突然謝ってくる声が耳に入ってきた私はただ目の前に腰掛けている彼を見つめるしかできない。

「…協力すると言いながら、…貴女だけを危険な目に合わせてしまつて……」

申し訳なさそうに話すレギユラスの姿を見て、何となく彼が今思い詰めているように感じた。

「そんなこと、気にしないでも大丈夫よ。……貴方は、今は見つからないことだけに集中すればいい」

アウラは、話を邪魔しないようにと静かに私の前にティーカップを置くと、奥へと消えていく。

目の前に置かれた、淹れたばかりの紅茶を飲んでみると、彼の話し出す声が聞こえてきた。

「……………僕の…話を……………少しだけ聞いてもらってもいいですか？」

「……………ええ、いいけど……………」

レギュラスが急に問いかけてくるものだから少し戸惑ったが、彼はそんなこと気にせず後を続ける。

「……………僕の家系は、純血主義の思想を抱いていて、その考え方が正しいと教えられてきました。

僕は今でもあの考え方が間違っているとは…思っていないません。そんな家で育ったんですから、あの人の下につきたいと思うのも自然の事で、あの人が、僕にとっての憧れで尊敬していました。

でも、両親の思い通りに育った僕に対して……………兄はそうはいかなかった。」

私から視線を逸らし、話すレギュラスは何か胸の内を明かすように言葉を繋いでいく。

「……兄は純血主義を全否定して、両親に反抗しました。そんな兄の姿を見て、滑稽だと思ったのが正直な気持ちです。

だけど……ホグワーツに入学し、目に見た兄は、友達に囲まれ、楽しそうに生き活きとしていて……何より幸せそうだった。

兄の考え方が、全く理解できなくても別に嫌いだった訳ではないんです。僕にとっては……たった一人の兄で……兄弟ですから、だから見たことのないあんな笑顔見た瞬間に何か崩れてしまった気がして、いつの間にか兄が憎くなっていった。」

そう話すレギュラスは、どこか苦しそうで、私は何も言わずに耳を傾けた。

「……両親が兄のことで頭を悩ませる姿も、親戚が……兄のことを全否定する姿も……耐えきれなくて、だから……僕が両親期待に応えないといけなくなった。」

自分の気持ちに正直で、強いられた道ではなく、ただ自由に生きる兄を見ていると自分が惨めになるんです。

僕は、両親の期待に応えようとただひたすらに頑張ってきたはずなのに、それなのに何か大切なものが失った気がしてならない。」

彼は認めたくないように、両手で顔を覆うと小さく呟いた。

「……僕は……シリウスが……羨ましかった」

そう言うレギュラスに、学生の頃の彼が自然と重なって、私はティーカップを机の上に置いた。

「……私は最初……ブラックを見たとき彼は純血主義だと思った

わよ。」

私が静かに話し出すと、彼は驚いたように顔を上げる。

「…あんなに名が知られている純血主義の子供だつてことも勿論理由だけど、…：ホグワーツ特急に乗る前、明らかにそういう雰囲気醸し出していたし、目が死んでいて、何より何かに怯えていた。」

「…怯えていた…：？」

聞き直してくるレギュラスは、驚きを隠せない様子だった。

私は新入生の時を思い出しながら、後を続ける。

「何に怯えていたのかは分からないけど、…：組分け帽子の時に見た時には、もう怯えてもいなかったし、目も死んでいなかったわね。」

…：きつと、何かあつて彼を変えたんじゃない？」

まだ記憶を思い出していない私は、あまりの変わりように驚いたから良く覚えている。

今だったら、大体予想はつく。

…：彼を大きく変えたのは、ポッターに出会えたから。

自分の命を犠牲にしても守りたいほどの、親友の存在ができたからだ。

「…そんなに慌てなくてもいいんじゃない？まだ死ぬには早すぎる年齢だし、…：人生なんて、まだまだこれからよ。」

…：…：それに…：お楽しみは最後にとつとくのが一番よ」

私が明るめに答えると、彼は可笑しそうに、優しくふわりとした笑みをこぼした。

いつもの張り付いたような笑顔ではなく、暖かくなるようなそんな笑顔。

私は、笑うレギュラスを見て少し眩くように声に出した。

「……………笑えるじゃない。」

私の言葉に、意味が分からないように頭を傾けるレギュラスを見てみると、私も笑いが溢れた。

「私、貴方のその笑顔好きよ。」

レギュラスと話している今、少し楽に笑えているような気がして、胸らへんが軽くなる。

「……………そろそろ行くわね。」

ゆつくりと立ち上がり、彼に話しかけた。

「……………また何かあったら、私で良ければ聞くわよ。……………じゃあ、アウラにお茶美味しかったって言つといて」

ローブを羽織り、姿くらしをしようとする後ろからレギュラスの声が聞こえてくる。

「……………ありがとうございます……………」

柔らかい表情を浮かべる彼の姿が少し見つめて、笑いかけると私は魔法省に戻った。誰にも私が留守にしていたということはばれないことにほっとしながらローブを脱ぎ、1人掛けのソファアに腰掛ける。

……隠れながら暮らしているレギュラスにとっての話し相手は、時々顔を見にくる私と、アウラしかない。

まさか、急に自分のことを話しだされるとは思っていなかったが、きっと自分1人では抱えきれなくなったんだろう。

そう思ってしまうと、兄に泣きついた時のことが昨日のことに頭に映像が流れる。

「……………上手くいかなかったな……………」

兄のように励ますことができなかった。

レギュラスは、私に話して少しでも楽になっただろうか。

兄の体温が恋しくなった私は、少しでも紛らわすためにローブを羽織って誤魔化した。

今日はどうやら土砂降りの雨が降っているらしく、魔法省の中は所々濡れていたり、気持ちいつもよりか暗い印象だった。

部屋に1人で籠っている私は、羊皮紙を眺めながら今後のことを考

え込む。

殺されそうになったあの日から、もう随分と時間が経っているし、……殺されるのももうそんなに遠くないことだと思う。

今までは、ただ叔父から会いに来てくれるのを待っているだけだったが、そろそろ自分から探しに行かなければならなくなった。

……もし……見つからなかったら……私が殺される。

……一応……レギュラスに全て話して、彼に託すべきだろうか。

そしたら……私が死んでも、彼が代わりにやってくれるという保険は一応つく。

私が死んで、レギュラスが必ず私の代わりに成し遂げてくれるなんて保証もないが、……何も伝えずに死ぬよりはマシだろう。

……今夜……叔父と会えなかったら、……レギュラスに全て話そう。

私は、心の中でそう決心して、とりあえず今夜まではいつも通り家に行くことを決めた。

すっかりと夜が更けた頃、私はローブを羽織い、家に向かった。

視界が歪むのを止めると、相変わらず荒れ果てている部屋の景色が視界に飛び込んでくる。窓に激しく打ち付ける雨の音を聞きながら、何とか支えられている椅子に腰掛けながら外を眺めた。

こんなにも雨の音が激しいと、足音もはつきりと聞こえないかも知れない。

そんな考えが思い浮かんでも、私は体を動かすことがめんどくさくて、実際立ち上がろうなんて思いもしなかった。

それはきつと、叔父が私の目の前に現れるわけがないと諦めているからだと思う。

毎晩、家で待っていてもこんなにも姿を現してくれないというのなら、……生きていないという確率だつて高いし、……もし生きていたとしても私の前に必ず姿を現してくれるという保証なんてどこにもない。

それにしても、何故あの人は叔父を殺そうと必死なのだろうか。

叔父が裏切ったしたら、一体何を……裏切ったというのだろうか。

想像もつかない私は、ぼんやりと窓を眺めると、外は相変わらず、激しい雨が降り続いていた。

どれ程の時間待ったのか分からないが、あんなに土砂降りだった雨は少し止み、小雨になっていた。

こんな暗い部屋で1人いると、だんだんと眠たくなってくる。

………そろそろ…戻ろうかな…

長時間留守にしすぎるのも、誰か部屋を訪ねてきたら私がどこにも

居ないことがばれてしまうし、…きつと、今夜も会えないだろう。

私がゆっくりと椅子から立ち上がり、立ち去ろうとした時だった。姿くらましをした時に聞こえる弾ける音が、遠くから聞こえたような気がして、心臓が緊張したように跳ね上がった。

一步も動かずに、耳を澄ますと、誰かが歩くような音が聞こえてくる。

……どうやら…意外と近いらしい。

私は杖を取り出して、部屋を出ると足音が聞こえた方の、隣の部屋のドアノブを握り、勢いよく開けてみるがそこには誰もいなかった。

……いや、絶対に誰かいたはず。

私は諦めきれずに、その部屋を出ると隣の部屋を開け、杖を構えながら入ると暗闇の奥で人影らしきものが動いた。どうやら私の前にいるのは魔法使いらしく、私と同様、杖を握っているように見える。ポタポタと、床に落ちる水が滴るような音だけが部屋に響き、私は目の前の相手が誰なのか確かめるために声を出した。

「…貴方は…誰？」

私の声が部屋に響き渡ると、目の前にいる人影が、杖を下ろすような仕草を見せる。

「……………レイ…ラ…………？」

私の名前を呼ぶ弱々しく、震えているその声は、聞いたことのあるもので、自然と心当たりのある人の名前が口からこぼれ落ちた。

「…エド…………叔父さん？」

小雨だった雨は止んだようで、タイミングよく雨雲から顔を出した月の明かりに照らされ、叔父の姿がはっきりと見えた。顔は影になってあまり見えなかったが、どこかほっとしているような表情を浮かべたのが、うつすらと見える。

「……………良かった……………無事だったんだな」

そう言う叔父を見ても、私は嬉しいという気持ちより、殺さなければならぬということだけが頭を巡る。

「……………レイラに……………どうしても…伝えたいことがあって…」

叔父は決して、私に近づこうとはせずに一定の距離を保ったまま話そうとする。私が近づこうとすると、叔父は少し声を大きくした。

「そのまま、聞いてくれ」

私は何も答えずに、素直に従って、叔父を見つめた。

「……………お前の家族が……………死んだのは……………レイラのせいじゃない。……………全部…僕のせいだ。」

だから、……………思い詰めることなんて……………何もない。」

そう話す叔父は、明らかに私のことを励まそうとしている様子だった。

「……………叔父さんは、……………本当に……………死喰い人なの？」

「…………………………脅されていた。……………何か有力な情報を話さないと、殺すと、言われた……………」

すまない……………レイラ…。

…本当に……………すまない。」

何度も謝ってくる叔父は、私を見つめて途切れ途切れになりながらも後を続ける。

「……………レイラ……………ペンダントは……………持っているか？」

「……………それが……………どうしたの？」

私の言葉を聞いた叔父は、お腹に手を回しながらゆっくりと口を開く。

「……………ペンダントは……………使うな。……………終わらせるんだ。」

じゃないと……………レイラは死に近い人間になり続ける。」

「…分かりやすく、説明して」

叔父が伝えたいことがわからずに、問いかけると、何か焦っているような声が聞こえてきた。

「…そのペンダントは、自分を必要としてくれる人間だけに力を貸す。……………自分の存在意義を示すように、……………所有者を色んな手を使って殺

しにかかってくる。

……………意思があるんだ。…そのペンダントは単なる物じゃない。

……………レイラ：に……………は…死んでほしくない…」

……………ペンダントに意思があるとと言われても…そんなのもう遅い。
今更、意思があるとかないとかそんなのどうだっていい。

……………私は……………今日の前にいる叔父を…殺さないといけない。

そればかりが頭に浮かび、ペンダントのことを言われてもどうでも良くなっていた。

「……………分霊箱……………」

弱々しい声で叔父の口から出た言葉が耳に入ってきた瞬間、驚きで何も言えなかった。

「……………例のあの人は…分霊箱というのを作っている……………。全部……………壊さないと……………どんなに頑張っても……………殺せない……………」

どうして、叔父がそんなことを知っていることに驚きながらも、必死に途切れ途切れに話す叔父を見ていると何故か不安が襲いかかってきた。

……………どうして……………こんなにも…息が切れているの……………

疑問に思った私が杖先を灯して前の方を照らすと、叔父の身に何が

起こっているのかがはつきりと視界に飛び込んでくる。

雨に濡れてたから、水が滴るような音がすると思っていた。

違う。

雨じゃない。

叔父の足元には、真っ赤な血溜まりが出来ていて、押さえている腹部から血が滴り落ちていた。

顔色が良くない叔父は、やっと立っているような様子で、叔父に聞きたいことも何個もあったというのに、全部消えていった。

もう限界が近づいたのだろう。叔父が全身の力が抜けるように膝をつくと、血がだんだんと広がっていく。

私はもう居ても立っても居られず、叔父の側に駆け寄ると、血が出続ける腹部部分を力いっぱい押さえた。

「……………レイ……ラ……………ごめん……な。」

「話さないで。出血が酷くなる」

どんなに治癒魔法をかけてみても、血が止まることはなく流れ続ける。

……………お願い……止まって、止まって……

叔父を殺さないといけないというのに、体は勝手に動き、思いが溢れてくる。私は杖を握ったまま、腹部を圧迫し続けた。それしかできない。

「……………死ぬのが……怖かったんだ……。……自分の……ことを……犠牲にできるほど……強くない……そんな……勇気なかった……。」

「お願い、喋らないで。叔父さん」

「……………守り…たかった……………」

私がいくら頼んでも、叔父は力なく話し続ける。

「……………終わらせるつもりだったのに……………結局……………こんな……………中途半端で……………レイ…ラを…1人残す…なんて……………できない……………」

ゆつくりと私にもたれてくる叔父の必死に繰り返す呼吸が耳元で聞こえてきても、血を止めるために腹部を押さえるしかなかった。

「……………ごめん…レイ…ラ……………」

もう今にも事切れそうな声が耳元で聞こえた瞬間、込み上げてくる涙を堪えながら声を出す。

「……………謝らないでよ……………」

「……………レイラ……………のおかげで……………レイラが……………必要としてくれたあの日から……………」

私は叔父の背に腕を回して、服を力強く握りしめた。

「……僕は……救わ……れた……」。

……あの日って……いつのこと言ってるのよ。

そんなの知らない。叔父なんて救った覚えなんてない。

だんだんと重くなってくる叔父の体重が嫌という程感じる。服に血が染み込んでいると分かるほど、流れ続ける血にどう頑張っても止まることはない。

「……止まってよ、お願い、止まって……」

呟いても、止まることなんてない。……止まったとしても……殺さないといけないというのに、……今は叔父に死んでほしくなくて、……助けたいと思っているのに、……何もできない。

こんなに苦しそうなのに……。

やっと……逢えたのに……。

「……………レイ……………ラ……………も……………う……………だ……………いじょう……………ぶ……………」。

叔父のか細い声が聞こえてきても、私は涙を堪えながら腹部を圧迫することしかできない。

……どうすればいい。この血を止めるためには、どうすれば……

必死に頭を回転させていると、叔父の大きな手が私の頭を優しく撫でてきた。髪の毛を巻き込みながら、撫でてくる叔父の掌は本当に大きく感じると、思考が停止する。

「……………あ…り…が…とう…レイラ…」

小さな声でそう言った叔父の体は、一気に力が抜け、頭が私の肩にもたれかかっていると、撫でてくれていた手は力なく垂れ下がり、床に落ちる音が聞こえてきた。

「……………エド…叔父さん…？」

震えている声で問いかけてみても、叔父は答えてくれない。

耳元で聞こえていた呼吸も、声も、聞こえなくなり、あんなに温かった叔父は、少しずつ冷たくなっていく。

……………ああ…死んだんだ……………

そう思っても、涙が出ることはなく、頭の中にある考えが浮かんでくる。

……………どうせ…殺さないといけなかったんだ…

だからこれで良かったんだ。

……………殺す手間も減ったし、…それに…私が殺したわけじゃない。

結果的には…同じ……………だからこれで良かった。

……………しようがなかった。

自分に何回も言い聞かせながら、叔父の体を床に寝転がし、顔を見ると私の中の何かが争うように、再び浮かび上がってくる。

……………本当に？……………これで良かったの？

これが……………正解だった？……………

叔父を助けられずに……………殺すことが……………正しかった？

これで……………セブルスを救うことに……………一歩近づいた？

「……………分からない……………」

私は、聞くことのない叔父の目を、見つめながら呟いた。

分からない。何が正解で、何が間違っているのか。

今私は間違ってる？

どうすれば、いいの。

どうすれば、セブルスを助けられるの？

お願い………誰でもいいから……教えて。

叔父の亡骸を見ていると、私一人、どこかに取り残されたような感覚に襲われ、どうしようもなくなった。

29 感情なんて

すっかり冷たくなった叔父の側に座り込みながら、雨雲から顔を出している月を眺める。

何が正解か教えてくれる人なんているわけがない。

重たい腰を上げ、立ち上がると力なく横たわっている叔父の姿がよく見えた。

悲しいと思うこともなく、私は冷たい叔父の体に触れて、あの人が居るであろうあの屋敷を思い浮かべながら姿くらましをする。

足が地面を捉え、閉じていた目を開けるとそこは荒れ果てた家の中ではなく、目の前で家族が死んでいった、……あの時と同じ部屋だった。

並んでいる椅子には誰も座っておらず、私は足元にある叔父の体を確認して、誰かいないか周りを見回していると、扉が音を立てながらゆっくりと開く。

綺麗な金色の長い髪を靡かせながら、私の方を見つめてくるルシウスは、少し驚いているような様子だった。

「……何故……君が……う……」

上品に私に問いかけてくるルシウスは、それだけでいい育ちを連想させる。

「……あの方を知りませんか？……少し用があるのですが……」

彼の問いかけには何も答えずに、私が口を開くと驚いたように声を出した。

「……どうして……そんなに服が……汚れているんだ……」

そう言われて自分の服装を見てみると、ルシウスに言われて初めて自分が、叔父の血で汚れていることに気づいた。

「安心してください。これは私の血ではありません。」

何か誤解されても困るし、私が冗談ぼく彼に言うのと、ルシウスは何か気づいたように私の足元にある叔父の亡き骸と私を交互に見て、分かりやすい反応を見せる。

「……………付いて来い……」

叔父の体に魔法をかけ、宙に浮かせると小さな声で言った彼の後へと付いていく。

どうやら別の部屋にいるらしく、私達以外、全く人の気配がしない屋敷の中を歩いた。

一言も話さず前を歩くルシウスの後ろ姿を見ると、兄と重なり私は視線を逸らして誤魔化すしかなかった。

固く閉じられた扉の前に立ち止まったルシウスは、数回ほどノックをして何も言わずに中へと入っていく。私はちゃんと叔父の体がついてきているかどうかを確認し、彼の後を追うように部屋の中へと足

を踏み入れた。

部屋には、少し大きめの机と、椅子しか置いておらず、明かりもついていない。大きめの窓の外を眺めている人影がゆっくりと振り返ると、真つ赤な瞳がルシウスを捉えた。

「……………我が君……………彼女が…用があると…」

静まり返った部屋には、彼の声が良く響く。

ルシウスを映していた赤い瞳が、私の方を向くと冷たい声が聞こえてくる。

「……………退がれ…」

大人しく従うルシウスが部屋を出ていく扉の音を聞きながら、あの人から目を離さないように見つめ続けた。

今だに信じられないでいる。

この人が、父と友人関係にいただなんて。

「お待たせしてしまい申し訳ありません。」

私が自分からあの人の前へと、息絶えた叔父の体を差し出すと、少し驚いたように反応を見せた。

「……………約束通り……………お持ちいたしました……………まだ何かもの

たりませんか？」

ごろんと転がる叔父の顔が見えたが、気にすることなく後を続けた私の声が響くと、部屋は一気に静まり返る。

叔父が何故、致命傷になるほどの傷を負っていたのかはもう本人の口からは聞けない。

今まで、叔父は結局何をしようとしたのかも、

一体何故死喰い人が追われるようなことになったのか、

…そんな理由ももう叔父の口からは聞くことはできないし、……そんなことを知ってもこの状況は何も変わりはない。

私の瞳を見てくるあの人から視線を逸らさずに、ただ何か話してくれるまで待ち続けた。

………これで…駄目だったらどうしようか…

もしもの時のことも頭で考えていると、あの人があゆつくりと口を開くのが見えた。

「…オーガスタス・ルックウッド。神秘部に所属している同志の名だ。

………其奴に手を貸しながら、魔法省に潜り込め。」

あまりに突然なことでも少し驚いたが、大事なスパイの名前を明かしてくれたということは、少しは信用してくれたということだろう。

「…かしこまりました。」

「……………良い情報を持ってくると期待しているぞ。」

怪しげな笑みを浮かべてくるあの人を見ても、私はこれでやっとセブルスの側に居られるという思いだけが膨らみ、満たしていた。

あの人が私のことを信用してくれたような素振りを見せても、別に今まで通りで、大きく変わることはなかった。

雑用係のような立場にいる私と、神秘部に所属しているオーガスタスが、親しげに話していると、外から見たら異様な光景だし、接点もない私達を怪しむ人だって出てくるだろう。だから、魔法省内で彼と話すことは避けて、時々手を貸す形で協力していた。

今のところ、魔法省の人達にも私が死喰い人だということは気づかれていないし、あの人にも私の本当の目的もばれておらず、いたって平和な日常が過ぎていっていた。

いつも通り、部屋で1人羊皮紙とにらめっこをしていると、今から起きる出来事が頭に浮かんできた。

……………今…一体どこまで進んでいるのだろうか

……あの人は……今予言を知っているのだろうか

……セブルスは……もうダンブルドアの方に寝返っているのだろうか。

実は最近呼び出されることがなく、今どんな状況なのか掴めずにいて、セブルスの顔も随分と見ていない。

……とりあえず……今日はレギュラスの様子を見に行くか……

最近顔を出していないし、様子も窺っていないから丁度いいだろう。

仕事が一通り済ませ日が暮れた頃、ローブを上から羽織り、いつも通りレギュラスの所へと向かった。

そういつも通り。なんの変わりなくソファアにレギュラスが座っていて、出迎えてくれると思っていたというのに、目に飛び込んできたのは、誰も座っていないソファア。

……いない……

こんなことはなかったから、一番最初に頭に浮かんだのは、あの人の顔で、最悪な結果が映像として脳裏に流れだす。

緊張するように鼓動を速くする心臓を落ち着かせるように、呼吸を繰り返しながら部屋を見回してみると、荒らされた様子はなく何も変わっていない。

私は寝室へと続いている扉を見つめて、手をかける。

気配を殺しながら、ドアノブを回し扉を開けると、電気もついておらず真っ暗だったがだんだんと目が慣れてきて、奥で誰か動いているのが見えた。

どうやら、まだ私には気づいていないらしい。

隣の部屋から漏れる微かな光のお陰で、動いている人影が、レギュラスだと分かり手に持っていた杖を直した。

しかし、一体電気もつけずに何をしているというのだろうか。

全く私がいることに気づく様子もないレギュラスは、後ろから見ただけでは何をしているかも分からない。

「……何してるの?…」

静まり返った部屋に響いた私の声を聞いた瞬間、彼は驚いたように体をビクつかせて、手に持っていた何か落ちる音が聞こえてくる。

「驚かせないでくださいよ。……僕そういうの苦手なんですから」

電気をつけると、困ったように笑うレギュラスの足元に羽根ペンが落ちていた。

「…意外ね……。ところで、アウラは?」

「…ああ…彼なら、買い出しに出かけて行きましたよ。もうそろそろで帰ってくるはずですよ。」

私の問いかけに答えるレギュラスが後ろの方に手を回し、何かをしていた。私は気づかない振りをして、話しかける。

「…そう。…まあ、何でもいいけど明かりぐらいつけて。…勘違いする所だったから」

「すみません、気をつけます。」

張り付いた笑顔を浮かべながら謝ってくるレギュラスを見つめると、後ろの方でばちんという音が聞こえてきた。

振り返ると、買い物を終えたアウラが立っていて私に話しかけてくる。

「お帰りなさいませ、お嬢様。直ぐにお茶を淹れますので、お待ちください。」

そう言ったアウラは、食材を抱えたままキッチンへと消えていく。レギュラスはそんなアウラを見て、何か話題を変えるように口を開いた。

「こんな所に立っていないで、ソファアームにでも座りましょう。」

「…ええ…」

レギュラスは、羽根ペンを落としたことに気づいていないのか、それとも落としたことを忘れてしまったのかは知らないが、拾いもせず、寝室から出ていく。

私は特に何も考えずに、羽根ペンを拾い、ベッドの横にあつた小さな机の上に近づくと、そこには私が彼に渡した本が置いてあることに気づいた。

……なるほど……さつき……後ろでしていたのは、手に持っていたこれを机に置いていたのか。

私は、本の隣に羽根ペンを置き何気なくパラパラとめくってみるが特に何も変わっていない。

羽根ペンを持っていたのは、確実だ。

……もし、この本に……書き込んでいたとしたら？
でも何も反応はしない筈だし、彼が書き込む必要なんてない。

本の最後には相変わらず、私の名前が書かれてあり、少し血の気が引いた気がした。

……よく見ないと分からない所にあるが、もしこれを見たら何と思うのだろう。

別に見られて困るものではないが、何か胸騒ぎがする。

何か忘れているようなそんな変な感じがしてならない。

どんなに考えても思い出せず、私は本を羽根ペンの隣に置いて、寝室から出るとレギュラスは相変わらずソファアに腰掛けていた。彼の前に腰掛けると、アウラがタイミングよくお茶と軽めのお菓子を持ってくれた。クツキーを頬張ると、少し甘めでサクサクしていて、紅茶とよく合う。

アウラはまだ仕事が残っているようで、キッチンの方へと、姿が見えなくなる。

明らかにいつもと様子が違うレギュラスは、紅茶にもクッキーにも手をつけずに、本を読み続けていた。それでも、ページはさつきから全然めくられていなければ、時々私の方を見てくる。

私が気にしていない振りをしてながら、紅茶を飲み、何事なく魔法省に戻るために立ち上がろうとすると、彼は何か意を決したように大きな音を立てながら本を閉じた。

「……急に……どうしたの？」

あまりに突然なことで、驚きながら問いかけるとレギュラスは私に質問してくる。

「……ずっと気になっていたんです。………」

まさか……あの本のことを聞かれるのだろうか。

速くなった心臓の鼓動を感じながら、続きを待つ。

「………前に言っていた………死なせたくない人というのは………先輩のことですよね？………」

彼が問いかけできたのは、本のことではないというのに、自分でも驚くほど冷静だった。

「……………先輩って「セブルス・スネイプのことを言っているんです。」

私の言葉に遮ってくるレギュラスの口から出た、彼の名前を聞いただけで懐かしくなって一気に愛しくなる。

「……………そうよ。…貴方の言う通り」

……………できるものなら…今すぐに逢って、抱きしめて、……………彼の温もりを感じたい。

できることなら……………

彼の大切な存在になりたかった。

できることなら……………

愛されたかった。

浮き出てきた叶わない望みを必死に消し去りながら、レギュラスを見る目があった。

「……………いつから知っていたの?…」

そんなこと別に知りたくはなかったが、誰も話さなくなったこの重たい空気が耐えきれなかった。

「……………聞いた時からですかね……………大体は予想がついていただけですけど」

……………最初からバレていたのか…

流石に最初からだとは思っていなかった私は少しショックを受けながらも話を続ける。

「…よく分かったわね」

ぼそりと呟くように言うと、彼はゆっくりと口を開く。

「……………貴女が自分から動く時なんて…先輩が関係している時ぐらいですし、学生の頃から見ているんですからそれぐらいすぐに想像つきましたよ」

眉を下げ、笑みを浮かべながら話すレギュラスは相変わらずのお手本のような笑顔で、前見た温かい笑顔とは程遠いものだったが、どこか悲しそうに見えるのは私の気のせいだろうか。

……何か…あったからわざわざごんな話を持ち出してきた？

「……………何か…あったの？」

「……………えっ……………どうしたんですか？急に」

レギュラスは最初戸惑いながらも、途中からはいつも通り笑みを浮かべながら、誤魔化する。

「…少し、いつもと様子が違うような気がして」

「そうですか？別に何も変わりはありませんよ。」

…ほら、まただ。

そう言うレギュラスは、ほんの一瞬だけ瞳に悲しそうな色を浮かべた。本当に一瞬だけ、涙を堪えるような表情が見える時がある。

「…じゃあ、どうしてそんなに泣きそうなの？」

私の言葉を聞いたレギュラスは、瞳孔を開くと、何か戸惑ったようにゆっくり瞳が揺れるといつも通り笑みを浮かべてくる。

「本当にどうしたんですか？僕からしたら、貴女の方がよっぽど様子がおかしいですよ。急にそんなことを言い出すなんて」

いつもだったら、彼の笑みを見ても少し違和感を感じるだけだが、今は違う。悲しみを堪えるような、助けを求めるようなそんな笑顔に見えてならない。

「ああ…もしかしたら、昨日本を読みすぎて夜更かししたから、涙目に見えたかもしれませんね。凄い面白くて、途中で切り上げられなかったんですよ。マグルは、本当に面白いことを思いつきますよね。読ん「レギュラス」

まるで話題を変えるように話しながら、本を取りに行くこうと私に背を向けた彼の名前を呼ぶと、ピタリと動きが止まった。

「……そんなのもう誤魔化しにしか聞こえないわよ」

普段、私よりも話す彼が大人しく黙っているというのは少し不気味に感じたが、今このままにしとくのは、いけない気がしてなからなかった。

……レギュラスが…悲しくなる理由として…思い当たるのは、やっぱり家族のこと。

彼は家族想いだし、こんな窮屈な空間に閉じ込めてしまっているし、…それに今は誰が殺されてもおかしくない世の中だから、色々と考えてしまうのもおかしくない。

「レギュラス…もうやめたいのなら…やめてもいいわよ」

別に…彼まで苦しむ必要なんてない。

私は、立ち上がりレギュラスにゆっくりと近づいた。

「…最初は…脅すような形で言ったけど、殺す気なんてないし、…家族に会いたいのなら…そう言って」

「…やめて…ください…そういうことじゃないんです…」

聞く耳を立てないと聞こえないほどの小さな声で呟く彼は、苦しもうだと分かっても、レギュラスに言う言葉が見つからずにいた私は後ろ姿を見つめるしかない。

…多分…何を聞いても話してくれないだろう。

何をしてあげられるのだろうか…

何かに悲しんで、苦しんでいるレギュラスに…

そう思いながら見つめていると、幸せそうに手を繋ぐ2人を見て、悲しみ、苦しんでいたセブルスの姿が自然と重なった。

……セブルス……

目の前にいるのは、セブルスではなくレギュラスだというのに、苦しそうに涙を流す彼の姿がまるで目の前いるかのように見える。

そうならもう、抱き締めずにはいられなくて、私は後ろからレギュラスを抱き寄せた。

……お願い……泣かないで……

私の体はセブルスと勘違いしたまま、レギュラスの頭を撫でる。

……セブルス……

いつもだったら、セブルスに抱きついてても香るはずの薬草の香りと、あの懐かしくて落ち着く匂いがしないことに気づいた私は、一気に我に返り、自分が誰に抱き締めているのかを瞬時に悟った。

「ごめんなさい、そういうつもりじゃ」

レギュラスから離れようとすると、彼が耳元でぼそりと呟いた。

「……もう少し……だけ……このままで……いさせてください……」。

その声は完全に涙声で、震えていたものだから突き放すなんてできるわけもない。

私は少しぎこちなかったが、子供をあやすように一定のリズムで頭を優しく叩いた。

……人肌が……恋しかったのか……

そんなことを思いながら、レギュラスが落ち着きを取り戻すまで彼を抱き締め続ける。

レギュラスの速い心臓の鼓動を聞いていても、やっぱり浮かぶのはセブルスのことだった。

今はただ、……セブルスの心臓の鼓動を聞いて、生きていることを実感したい。

私は今、無性に貴方に逢いたくてたまらない。

結局、レギュラスが何に苦しんでいたのかも分からないまま、時間だけが過ぎていった。あれから、心配で何回か戻ってみたが、レギュラスはいつも通りで、特に様子がおかしいこともなかった。

おかしかったのも、あの一回きりだったし、彼の中で解決したのかも知れないと勝手に決めつけ、私は気にしないことにした。

いつも通り仕事済ませ、日が沈んだ時間帯、魔法省の役人が一気に少なくなる時を見計らって、私はローブを身に纏い、久しぶりにあの人の元へと向かった。

別に用があつた訳ではない。ただ、……今どこまで進んでいるのかを確認する必要があつたからだ。屋敷に行けば、何かしら情報は耳に入るかも知れない。

相変わらず、薄暗いな屋敷の中を歩き進めていると、前から見覚えのある人物がだんだんと大きくなり、はつきりと顔が見えた。

……ペティグリユー

彼が死喰い人になっていることは、知っていたからそう驚きもしなかったが、どうやらペティグリユーは知らなかったらしく、私の顔を見た瞬間に分かりやすく反応した。

別に話すこともない私は、表情を変えずに横を通り過ぎた。顔を真つ青にしたペティグリユーが、私から視線を逸らすのが見えたが、特に興味も何もない。

………そんなに怖いのなら、彼らに頼ってしまえばいいのに。

友人というのは、助けを求めれば手を差し伸べてくれるような素敵なものだと私は勝手に思っていたのだが、実際そんなものができたこ

とない私にとっては、結局自分で答えを出すことが出来なかった。

見たことのある扉を目指していると、声がだんだんと大きくなっていく。

「どうか!!!!!!
!!!!!!お願いします!!!!」

何か必死に頼みごとをしているその声は、私がずっと逢いたかった人物のものだった。

「父親と息子を殺すかわりに、どうかリリーだけは殺さないでください!!!!」

声が聞こえる扉の前で、自然と体が動けなくなる。

「彼女は、予言とは関係ありません!!!!」

こんなセブルスの大きな声を聞いたのは、初めてだと思っただけの音量だった。

………ああ………嫌になる………

私は、エバンスの為にこんなにも必死になっているセブルスの声を聞いただけで、悔しくて、辛くなった。ほら、あの忘れていた胸の痛みが、また襲いかかってくる。

誰かに握り潰されたような痛みには耐えきれず、胸を押さえながらしやがもうとした時だった。

「私は…リリーを愛しています。」

……私にとって、彼女は大切な人なんです。」

セブルスの声はつきりと耳に入ってきた瞬間に、鈍器で殴られたように頭が痛みだして、視界が大きく歪んだ。

体が拒絶反応を起こしているみたいに、全く力が入らなくなり扉の前でしやがみこむ。

……彼がエバンズのことだけを愛していることも

彼にとって…エバンズだけが大切な存在なことも

もうとつくの昔から知っている。

でも……聞きたくなかった。

本人から、…彼の口からそんなことを聞きたくなかった。

「……だから…どうかお願いします。…我が君」

扉越しに聞こえてくるセブルスの声もだんだんと小さくなり、私は

呼吸を整えながら気づかれないうちに、この場を去ろうとゆつくりと立ち上がる。

「……………盗み聞きはどうかと思うがな。レイラ」

中から、突然呼ばれた冷たい声が聞こえた瞬間に、全身の血の気が引いたのが分かった。

……………立ち去ろうと思っていたが、中に入らなかつた後のことを考えるとどう考えても、中に入った方がいいだろう。

意を決して扉をゆつくりと開けると、驚いているような様子のセブルスと目が合った。

……………久々に会う時ぐらい、普通に逢いたかった。

そんな気持ちをぐつと堪えながら、あの人に視線を移す。

「…盗み聞きをしようとして、したわけではありませんが……………気分を害されたのなら、申し訳ありません。」

誤魔化すための言葉を並べながら言うと、あの人は何か思いついたような表情を浮かべてくる。

「……………そうだな…事情を知ったからには、お前にもそいつらの居場所を探してもらおうか。人手が多くて困ることはないからな。」

「…我が君」

セブルスはすかさず横から、何か訴えるようにあの人を呼ぶ。

「セブルス、その穢れた血の女のどこがいいというのだ？お前に似合う女など、他にもっといるだろう。」

それか……お前はその俺様の目的よりも、その女の命の方が大切だと言いたいのか？」

あの人という言葉聞いたセブルスは、少し下を俯くようにして口を開いた。

「……………そんなことはありません。」

このままだと、セブルスがどんどん追い詰められるように感じて、私は横からあの人に声をかける。

「我が君、……確かに私は、エバンズとは同級生でしたが、……彼女とは友人関係でもなく、……仲も最悪でしたので、彼女が今どこにいるのか見当もつきません。」

最善を尽くし、居場所を探してみますが、私よりもっと適任な人物がいるかと」

ペティグリユーの顔を思い浮かべながら、話すと彼は、誰か思っていたような表情を浮かべる。

……彼女達の居場所が分からない筈がないが、あの人に私が知っているということがばれなければいいのだ。

それに……

……エバンスの居場所をあの人に教えた時には、きっとその後、セブルスに殺されることが大体想像できる。

そうになると、結局セブルスを救えなくなってしまうし……それに……まだ憎まれたくない。

……これが、単なる私の我儘だということぐらい分かっている。

「……………では、失礼します。」

早くこの場を離れたい私は、あの人にそう告げてその部屋を後にする。

部屋を出て、長い廊下を歩いている時だった。後ろから、あの懐かしい香りがしたと思えば振り返ると、真っ黒な髪の毛のせいで視界が一瞬真っ暗になると、すぐ後ろにいたセブルスが腕を掴んできた。

「……………セブ……ルス？」

私が名前を口に出した時には、目の前にいたセブルスの顔が歪み、足が宙に浮いた。

屋敷にいた筈なのに、気づいたらどこかの路地裏にいて一瞬何が起きたか分からなくなる。

「……………いつから聞いていた☒」

言い寄ってくる凄惨な表情の彼の顔を見て初めて、セブルスが姿くらましをしたのだと分かった。

「…えっ…なにが？」

「だから、さっきの話はどこからどこまで聞いていたを聞いているんだ！」

ずっと逢いたかった人に会って早々迫られると、人間というのは頭がパニックを起こすらしく一気に頭が回らなくなる。

「…えっと、貴方がエバンズを殺さないでくれって頼んでいたことは聞いたけど」

「……………それだけか？……」

念押しして聞いてくるセブルスを見てみると、さっき聞いた言葉が頭の中を巡りだした。

『私は…リリーを愛しています。』

……………私にとって、彼女は大切な人なんです。』

……………ああ…彼は、私がこの言葉を聞いていないかどうか気になっているのか。

そう思ってしまうと、あんなにいっぱいだった頭が途端に冷静さを取り戻した。

「……………ええ…それだけよ。…」

「……………そうか……。…」

緩んだセブルスの表情を見る限り、どうやら私には知られたくないようだ。

……彼の中だけでも……私は貴方がエバンスのことを愛していることを知らないことになっていけば、……救われる気がした。

だから私は、これ以上自分が苦しまないでいいように、あの言葉を聞かなかったことにするために知らない振りをする。

「……にしても、どうしてそんなにもエバンスに死んで欲しくないの？」

「……それは……」

私の言葉を聞いたセブルスが、何と誤魔化そうかとしている姿を見ていると、何故か嬉しくなった。

今だけでも、……セブルスの目には私が映っている。

それだけで幸せだ。

「……貴方にとって、……エバンスが大切な友達だというのは知っているけど……」

私の言葉を聞いた彼の真っ黒な瞳がゆっくりと私を捉える。

「……自分を犠牲に彼女を救うことは、そんなに意味があるとは思えないわよ。」

彼に睨まれているのは、気のせいではないことぐらい分かっている。

こんなこと言っても、セブルスは彼女を守り続けることだって知っている。

「それは、どういう意味で言っている…」

明らかにさつきよりも低くなったセブルスの声を聞いて、彼に視線を移すと、険しい表情を浮かべていた。

「……………別に…意味なんてないわよ…」

セブルスは、彼女の為だったら、平気で自分の命を犠牲にだってできるだろうし、自分が苦しんでエバンズが死なないのなら、その道を選ぶほどの勇気がある。

だけど、私は違う。

もし、セブルスが望んだことであっても、

もし、それが彼にとつての幸せだったとしても、

私は彼の幸せのためには、動けない。

自分を犠牲にできるほどの勇気なんてない。

私は、言葉の裏に気持ちを隠して話題を変えるように後を続けた。

「……………もう用は済んだ？」

「…ああ…」

最低限のことしか話さないセブルスは、一人称が変わろうとも、やっぱり学生の頃から何も変わっていない。

「……………それで…貴方はどうするの？……………あの人の様子を見る限り……………貴方の望み通りにはいかなそうよ。」

セブルスの顔に視線を移すと、表情一つ変えずに、少し俯くように何か考えているような様子だった。

「……………まあ……………諦めなさい。」

セブルスが自分の身を危険に晒しても、どうせエバンズが死ぬというのなら、彼が苦しむことになるというのなら、……………全力で阻止したいが、そう簡単にはいくものじゃないし、実際私に動く勇気がある訳がない。

私は彼の肩を優しく叩いて、振り返ることもせずに距離をとる。

今振り返ったら、きっともう離れたかなくなると思った私は、彼の顔を見たい気持ちをぐっと我慢して姿くらましをした。

……………私がいたところで、きっとセブルスはエバンズのために自分を

犠牲にするのは変わらない。

私が何を言ったとしても、きっと思いとどまってくれないだろうし、私が存在しているだけでは、未来は変わらない。

だから、どうかせめて、今はまだ私が知っている未来が訪れますように。

……セブルスに……私の思いが伝わってしまわないように……
いつそのこと感情をなくすことができたら、なんて楽なんだろう。

そうしたら……今のこの状況よりかは、ましなものになっていたのかもしれない。

30 始まりに愛を添えて

相変わらず私は雑用係をこなしながら、有力そうで、伝えても良さそうな情報を見極めて、あの人に情報を流すという生活が続いていた。

あの人から、殺せと言われたら躊躇なく人を殺し、拷問しろと言われたら、何も考えずに従った。

一体自分が何人殺し、何人の人を苦しめたのかももう分からない。

「……ラ…、レ…………ラ、…………レイラ！」

急に名前を大声で呼ばれた私は、驚きながら顔を上げるとレギュラスと目が合った。

「大丈夫ですか？」

……何かぼつとしているようですし疲れているんじゃない？」

一瞬、なぜレギュラスが目の前にいるのか分からなくなったが、彼の話す声を聞いていると、様子を見に会いに来たことを思い出した。

「…大丈夫よ。少し、考え事をしていただけだから」

適当な言葉を並べた私の声を聞いた彼は、私の顔も見ずに声を出す。

「…僕で、よければ話ぐらい聞けますよ。」

いつも通り、素っ気ない感じだったが、視線を逸らしていた彼と目

が合うと、少し困ったように少し眉を下げ、笑みを浮かべる。

「…話すと意外と楽になるものなんですよ。

貴女に随分と甘えてばかりだったんですから、それぐらいさせてください。」

優しい声で話してくるレギュラスの声が入ると、私の口は自然と動きだした。

「…貴方に言わないといけないことがあるの」

私の言葉に、レギュラスは紅茶を飲もうとしていた手をピタリと止めて、私を見つめてきた。

「……ハリー・ポッターという男の子が、あの人を窮地に追い込むんだけど」ちよつ…ちよつと待ってください。………ついていけません。」

混乱した様子のレギュラスは、体を前のめりに私の話を遮ってくる。

「…それは、………前言っていた未来の話ですか…?」

「…ええ、そうよ。」

「………その…男の子って、…子供が例のあの人を?」

「正確にいうと、赤ん坊ね。」

彼は、どうやら赤ん坊があの人を倒すというのが信じられないらしく色々と反論してくる。

「それは、流石に信じられませんよ☒だって、魔術に長けているような魔法使いでもあの人に敵わないというのに、……赤ん坊が？」

「だから、彼は英雄として有名になる。……今は信じられなくてもそれでもいいけど……遅かれ早かれ、貴方の耳にもきつと、ハリー・ポッターという赤ん坊があの人を消滅させたという噂が入るわよ。」

私が話し出すと、レギュラスはしっかりと聞く耳をたてながら真剣な表情を浮かべる。

「だけど、1つ勘違いしないでほしい。あの方はそれで死んだわけではない。体を失っただけであって、魂がなくなったわけではないの。」

「……………例のあの方が……蘇る日がくると言いたいんですか？」

頭が賢いレギュラスは、私が言いたいことを先に口にしてくれて私は頷き、口を開く。

「……………彼を消滅させる為には、ハリー・ポッターと、ネビル・ロングボトムは死なせてはいけない。……もし、2人が死んでしまったら、私はそれ以外にあの人を消滅させる方法なんて思いつかないし、それにきつとそうなればもう無理ね」

彼の顔を見ずにすっかり冷えた紅茶を一口飲んでいると、何か悟ったように話しかけてきた。

「それで……………どうして、急に未来の話をしてくれたんですか？」

……何かしら僕に頼みたいことがあるからなんですよね？」

レギュラスは本当に勘がいい。

私が参ったようにため息をつくとき、彼は悪戯つ子のような笑みを浮かべてくる。

「……それは、きっと貴方はまだ私が未来を知っているということは半信半疑だと思ったのと、……もし……私が……ハリーを殺そうとする時のことを考えて、一応、貴方をお願いしところかなと思ったのよ」

私の話を聞いたレギュラスがあまりぱつとしていない様子を見て、私は後を続けた。

「私の学生の頃を見とけば分かるでしょ？……エバンズとの仲は最悪だったし、ポッターとも衝突していた。

そんな2人の子供を、殺したくならない方が……不思議だと思ったから……。いや、でも一応よ。万が一の時を考えて備えておいても、困らないかなと」

私が話し終わると、彼は納得したように確認してくる。

「僕は、貴女が殺してしまいそうになったら止めればいいんですね？」

「……ええ……そうね」

レギュラスの問いかけに答えると、彼はどこか嬉しそうに紅茶を飲む。
む。

目の前に座っている彼を見ていたら、あることが頭に浮かび上がってきた。

彼に、ブラックが死ぬということは今伝えた方がいいのだろうか。

「……大丈夫ですか？ 凄い顔をしてましたよ」

少し笑いながら言ってくるレギュラスの顔が視界に入り、私は考えていたことを消し去るようにローブを手を持って、口を開いた。

「そろそろ、行くわね。：アウラに美味しかったって伝えといて」

まだ飲み終わっていない紅茶が入っているティーカップを見ながら、彼に言い、私は魔法省に逃げた。

誰が見ても逃げたと分かるほどに、分かりやすかったというのにレギュラスは、ありがたいことにわたしを引き止めることはしなかった。

あれからセブルスに会えていない私の口からは、溜息しか出なくて、そのせいか部屋も暗い気がした。

羊皮紙が散らばっている自分の部屋に籠り、溜息をこぼし頬杖をついていると、アウラが心配そうに見つめてくる。

「……………また…痛むのですか…」

部屋の片づけをしているアウラが、私の方に近寄ってくる。

「大丈夫……………それよりも少し喉が渴いたからお茶を淹れてくれない？」

「分かりました。少々お待ちください」

アウラが、隣の部屋に消えていくのを見て、ただ遠くを見つめていると私の頭の中にはやらなければならないことが次々と浮かび上がってきた。

……………イゴール・カルカロフが捕まった後、私の名前を出した時の対処法も考えないと。

……………ああ…それに……………どうやってセブルスに関わっていくかも考えないといけないし、ブラツクの死をどうやって防ぐかも考えないといけないし……………

……………それに……………全部終わったら、あの本を過去の私に届ける人も……………ああ…それは、レギュラスでいいか。

あまりにやることが沢山で、また溜息が出てきたが、アウラが淹れてくれたお茶を飲むと少し元気が湧いてくるような気がした。

「アウラ、レギュラスの様子はどんな感じ？」

「……………レギュラス様ですか？……………特に変わったご様子はありませんよ。」

最近会いに行っていなかった私は、アウラの言葉に少しほっと胸を撫で下ろした。……………なんだか最近、彼が弟のような存在になっている。

そうなってしまったら、…失った時に辛いだけだというのに…本当に私は学習しない。

「……………すぐに抱え込むような子だから……………話を聞いてあげて」

「…ご安心ください。お嬢様。」

優しく私を励ますように言った彼は、またせつせと部屋の掃除を再開した。

「……………ありがとう…アウラ…」

私の感謝の言葉は、アウラの耳に入ることなく、消えていった。

部屋に1人こもり、ただひたすらに羊皮紙と向き合い、人手の足りない部署の手伝いに行ったりと雑用をこなしながら、得た情報を報告する日々を過ごしていると時間なんてあっという間に過ぎていくものだ。

どうやら、まだエバンスの居場所は突き止められないらしく、あの

人は気が立っている様子だった。

セブルスがホグワーツの教師についたと私の耳に入っても、スパイである彼と会うことなんてあるはずもない。

……セブルスが教師か…

記憶で、教師の仕事をこなしている彼の姿は確かに見たことはあるのだが、私にとってのセブルスは、あの学生の頃の印象が強いものだから少し信じられない。

……生徒に授業する姿は…

……真つ黒のローブを身に纏い、華麗に廊下を歩く彼は…

きつと、見惚れてしまうほどかっこよくて、綺麗なんだろうな。

私がそんなことを思っているうちに、残酷にも時間だけが過ぎていき、特に何か行動を起こすこともしなかった。

左腕に痛みを感じながら、私は薄暗い屋敷の中を歩き進める。ここに何回来たのかも数えきれないほどで、来るたびに私は自分の目的の為に、人を殺し、苦しめているような気がしてならない。

だから、…殺さないでと私に哀願しながら、涙を流す人も、私が唱えた呪文で苦しみ、叫ぶ人の声も、もうすっかりと慣れて今ではそんなものを見ても何も思わなくなっている。

「……………もう…人間…じゃないな……………」

自分の呟いた声で実感させられた私は、どんどんと大きくなる立派な扉を見つめた。

…嫌な予感しかない。

エバンズ達の居場所が見つけれなくて、結構時間も経っているし、それにあの人はいつもより気が立っている。

そんな時に呼び出されるなんて、絶対に良いことではない。

心の中で思ったことを消し去って、扉を開いた私の目に飛び込んできたのは、床に力なく横たわる死喰い人の亡骸だった。

最初は何が起きているのか分からなかったが、部屋に入り顔を上げると、あの人が杖を握っている姿が視界に入る。

集まっていた死喰い人達は、私に注目していたが、どこか怖がっているように壁に近寄っていた。

「何故!!…誰一人として奴らを見つけないことのできないのだ!!!」

突然、部屋に大きな声が響くと一気にその場は緊張感が走る。

自分の脅威になると予言されている子を突き止めているというのに、居場所が分からないまま、もうとつくに時間は経ちすぎている。怒り狂ったあの人に、殺されてしまうかも知れないのだから、この部屋の空気は恐怖心に染まって当たり前だ。

私は、横目にセブルスの姿を探したが彼はどこにもいなかった。

「我が君、……どうやら、魔法省は彼らとは関係ないようです。ですから、彼らの居場所に関する情報どこ」そんなことはもう分かっているんだよ!!!」

私の話を遮り、声を張り上げるレストレンジが近寄ってくる。どうやら彼女は、私のことが気に食わないらしく、いつも突っかかってくるのだ。

「聞いたところによると、お前はあの女と知り合いそうじゃないか」

「……ええ……そうですね。」

何も間違っていない彼女の問いかけに返した私の声を聞くと、挑発するような笑みを浮かべて言葉を並べる。

「……実は、もう居場所を知っているんじゃないか?……」

「何の冗談ですか、笑えませんよ。」

私は目の前にいるレストレンジを睨みつけながら、杖を取り出した。衝動を必死に抑えた。

「……確かに彼女とは、顔見知りですが、友人ではありません。ですから、ホグワーツを卒業して以降顔も見てもいなければ、やり取りもしていないので、居場所など知るわけがありませんし、……それに……」

エバンズ達を庇っているんじゃないかと疑われている自体が不愉快な私は、少し怒りに任せながら口を開く。

「できることなら、今すぐにでも……殺したいと思っっているほどの私
が、彼女と仲が良かった風に見えますか？」

エバンズの死を望んでいるような奴が、居場所を知っていると思いますか？」

私あまりに早口で話したからなのか、少し戸惑っている様子のレストレンジの隙について、私はあの人に話しかけた。

「……我が君、私は彼女の居場所など到底想像もつきません。ですが、ポッターの親友だったペティグリューだったら、話は別でしょう？」

あの人の赤い瞳がギロリと私の方を向き、少し睨むように見ている。

「ポッターは、親友を何より信じ大切にしている単純で馬鹿な奴です。ですから、ペティグリューが貴方様の僕になっっていることなど知る由もありませんし、今ここにいる誰よりも、今ペティグリューは彼らとの距離が近いと私は思います。」

「あんな奴に託すというのか☒」

ペティグリューという名を聞いたレストレンジは、信じられないといった様子で声を出す。

「それが、今出来ることでしよう。」

：我が君。ペティグリューが、親友として彼らの居場所を突き止めるまで待ち続けるしか今は方法がありません。」

私の声に静まり返った部屋の空気は重く、あの人は何か探るように私の目を見てくる。

誰一人として話そうとしないせいで、不気味な空気が流れ、僅かな音さえも立ててはならないような感覚に襲われた。

今は彼らに怪しまれることなく、この場を離れることだけを集中しながら、あの人の様子を窺う。

どうやら少しは落ち着いたらしく、あの人はゆっくりと杖をローブにしまった。

周りにいた死喰い人達の肩から、どこか安心したように力が抜けたのが視界に入ってくる。

「……我が君……指示を」

小さな私の声でも、静まり返っている部屋には響き、一気に注目の的になった。

「……不死鳥の騎士団に近づけ」

まさか、そんなことを言われると思っていなかった私は、少し体が固まったが平然な振りをしながら、口を開く。

「…魔法省はどうするのですか？」

「勿論、それと同時進行でやれ。お前だったら、それぐらい簡単なことだろう？……それか」

何で、この人はそこまで私に色々と託すことができるのだろうか。

「……俺様に従いたくないとでも言いたいのか？」

冷たく、低い声が部屋に響くと、体の芯がまるで凍りついたように寒気が襲いかかってきた。

……殺される……

ここであの人の気の触るようなことを言ってしまったら、何だったら、少し動いただけでも殺されそうで、脚は全く動かなくなる。

何をしても…殺される。

声を出そうとしても、喉の途中で何がせき止めているような感じが出て、口を開いても息しか出ない。

別に怖いとかそういうものではない。頭の中は至って冷静で、ここで何を答えるべきかは分かっているのに、体が言うことを聞かない。私の体ではないみたいなきわびな感覚なのだ。

もう一度声を出そうと口を開くと、何か弾くような音が聞こえてきた。それが、誰かが姿くらましをした時に聞こえる特有の音だとすぐに分かった。

あの音が聞こえた後、ローブが靡くような音が耳に入ると、落ち着く匂いがふわりと香った。

少し後ろを振り返ると、会いたくてたまらなかった人が、セブルスの姿が視界に入ってくる。久々の彼の姿に私の胸は踊って、嬉しさのあまり少しだけ顔が熱くなる。

あんなに冷たく、動かなかった体が意図も簡単に動いて、声が自然とこぼれ落ちた。

「……セブルス……」

どうやら何か報告に来たらしく、私の姿に気づいたセブルスが少し瞳孔を開いたのに気づいた。

……もう……セブルスは、ダンブルドアの方に寝返っているだろうし……

……もう……この時から……彼女を守るために……自分を犠牲にする。

そう思うと、少し苦しくなって私はあの人に視線を戻し、口を開いた。

「……かしこまりました。我が君。必ず、貴方様の為に成し遂げてみます。」

私はできるだけ早くこの場を離れる為に、少し笑顔を浮かべながら、あの人に宣言した。

あの人に背を向け、セブルスとすれ違っただけで、胸の辺りが温か

くなると、少し苦しくなる。

不死鳥の騎士団に近づく気などさらさらしない。近づいたところで、怪しまれるだけだし、歓迎などしてくれないだろう。

どうせあと少しで、あの人は一時的に力を失う日がくるのだから、それまで誤魔化せばいい。

皆から恐れられた名前を言っただけはいけないあの人が姿を消し、生き残った男の子が額に稲妻のような傷をつくり、セブルスにとっての最愛の人が殺される日、

10月31日：ハロウインの夜は、もう指で数えるほどに迫っていた。

全てが始まるその日は、何故みんな気づかないのか不思議になる程空気がよどんでいた。

朝から激しい雨が打ち付け、外に出ることさえも躊躇うほどで私はいつものように魔法省で仕事に取り組んでいた。

今日、エバンズが殺されるのかと思っても、特に何も思わない私は

もう終わっている。

……今から動いたら、きつと間に合うだろう。

…セブルスの最愛の人の命を守ることができだろうか…彼にとつての最愛な人は、私にとっては憎い人。私とは正反対な彼女は、嫉妬するほど、私が欲しいものを持っている。

最近、よく思ってしまう。

……もし…エバンズのことを拒絶せずに分かれようと少しでも努力していたら、

あの時、差し出された手を握っていたら

こんな中途半端になっていなかったかもしれない。

……もしかしたら、セブルスを救う道が他にあったのかもしれない。

どんなに、後悔してももう遅いのは分かっている。今手元にあるペ
ンダントを使っても、私は過去には戻れない。

後悔ばかりするくせに、私は結局動こうとはしなかった。
きつと、これが本当の気持ちなのだろう。

……彼女を…助けたくない

……記憶通り…死んでほしい…

私は腕で枕をつくり、顔を周りから見えないように隠した。

確かに嫌いだ。正直言つて、これからも彼女を好きになれる日なんてこない。だけど、死んでほしいとまで思うなんて、結局私はセブルスのことは考えてないじゃないか。

エバンズが死んでほしいと願うことは、セブルスに悲しみ、苦しんでほしいと言っているのとそう変わらない。

「……………最低…だ」

小さく呟いた声なんて、誰にも聞かれなかった。

人間はどうしてこんなにも複雑な感情を抱くのだろう。どうして、素直に人を愛することができないのかな。

愛しているのに、…………大切なのに

…それなのに、

苦しくなつて、虚しくなる。

あの人が直接殺したとしても、ポッターもエバンズも私が殺したのと同じことだ。

……嫌いでも、憎くくても、

知っている人が、死ぬのは………心が痛い。

時計の針が夕方過ぎを指したぐらいに、突然左腕が熱く、痛みだして、私は咄嗟に右手で押さえた。あまりに痛くて顔が歪み、無意識に血が出るまで唇を噛み締める。

「お嬢様！大丈夫ですか☒」

今まで以上の痛みがるように、片付けをしていたアウラがびよんぴよんと駆け寄ってきて、呪文を唱えて腕を冷やすためか水を左腕にかけてくれた。

「………大丈夫。…ありがとう、アウラ」

少しましになって服をめくってみると、闇の印の色が、明らかに薄くなっていた。

「……アウラ………私は、ゴドリツクの谷に行くから…貴方はレギユラスの所に戻って」

「……駄目です。……お嬢様、これ以上貴女が傷つく所を見てはいけません。」

何か悟ったアウラは、大きな瞳に、涙を溜めてじっと見つめながら彼らしくない行動を取り始めた。

「私のようなものが貴女様にお願い事をするなど言語道断な事ぐらい

分かっております。……しかし、何故貴女だけがこんなにも苦しまなければならぬのですか☒

もうこれ以上、お嬢様が傷つく所など見たくないのです！

どうかお願いします。……ご自分から苦しむ道に進まないでください
…お願いします」

ポロポロと泣き出すアウラは、私の足元で深く頭を下げている。

「……アウラ…顔を上げて」

私は、アウラの頬を両手で包み込んで優しく話しかけた。

「…貴女が私の心配をしてくれただけで嬉しい」

「…では」

「…アウラ、苦しいのは私だけじゃない。…それに私がしたくてしていることだから、苦しくも辛くもないから、大丈夫よ。」

苦しくも辛くないという訳ではないが、最近は何か感情が少しずつ私の中で消えていつているような感じがしていた。勿論、胸が苦しくなることも痛くなることもあるが、もう随分と泣いていないような気がする。

だから、アウラに言ったことは嘘ではない。

これで落ち着いてくれると思ったのだが、アウラはさつきよりも興奮したように、一層声を張り上げた。

「貴女様は分かっておりません!!!そういうことではないのです!!!お嬢様!!!」

今まで聞いたことのないような大きな声にも少し驚いたが、私はあまりに彼らしくない行動の方が衝撃が大きかった。

アウラは完全に冷静さを失い、私の言うことを聞かないどころか、何か訴えかけるように手を両手で掴むと、凄い勢いで言ってくる。

「私は怖いのです!!!貴女様が、貴女ではなくなってしまうのが怖いのです!!!今までの自分を殺し続ける貴女様の姿を見ていると悲しいの!!!」

です!!!!
!!!!

大きな瞳からは、ポロポロと涙がこぼれ落とすアウラは、涙声で私に訴えかけてきた。

「……………どうか…お願いします。……………ご自分を殺さないでください。」

アウラが何を言っているのか、さっぱり分からないのに、どうしてこんなにも胸が痛むのだろう。

「……………意味…が……………分からないわよ…アウラ」

絞り出した私の声を聞いた彼は、また何か言おうと口を開こうとする。

「今、こんなことをしている場合ではないの。」

…………アウラ、お願いだからレギュラスの所に戻って。」

そう言っても中々引き下がろうとはしないアウラを見て、私はゆっくりと立ち上がった。

もう本当にこんなことをしている場合ではない。

…早く…ゴドリツクの谷に行つて確認しないと…。

屋敷妖精は、主人の命令に逆らえない。だから、こうするしかない。

「私は、命令しているのよ。アウラ。」

私の声を聞いたアウラの表情は一変し、何か言おうとしていた口はゆっくりと閉じていく。

彼の体には、主人の命令に逆らえないというのが自然と染み込んでいるから、それに逆らえることなんてできる訳がない。

「…分かり……ました。」

小さく言ったアウラは、一瞬にしてその場を立ち去った。

少し…悪いことをしたという気持ちが襲ってきたが、今はそんなことを気にしている時間がない。

私は、ローブを身に纏って、ゴドリツクの谷の風景を思い浮かべながら、姿くらしをした。

歪んでいた視界がはつきり見えるようになる、住宅が並んでいるのが目に入ってきた。

私はとりあえず、ポッター家を探すために歩みを進める。

あんなに雨が降っていたというのに、今ではすっかりと晴れて少しじめじめするぐらいだ。もう日も暮れていたが、電灯がなくても周りが見えるほど、今夜の月明かりは眩しかった。

「…ここか…」

目の前に建っている一軒建ての家は、見覚えのある外見をしていて、生きている人間の気配が全くしない。外見だけでもみるに無残な姿な家は、誰が見ても何があったのか予想がつくほどだった。

私はローブのフードを深く頭に被って、外れかかっている玄関の扉を開けて中に入ると、ギーという嫌な音が耳に入ってくる。

あまりに耳障りな音に、咄嗟に閉じた瞼を開けるといきなり、事切れたポッターの姿が目に入ってきた。手の中にはしっかりと杖が握られていて、今にも動きだしそうなほど綺麗すぎる死体だった。

自然と、学生の頃の彼の姿が頭に浮かんで消えていく。

これで……もう……あの4人組は……一生、全員揃うことはない……。

そう思うと、少し胸が締め付けられ、ある思いが襲いかかってくる。
……私が……殺した。

あんなに気に食わなくて、嫌いだった奴の死を見ても意外と、人間
というのは胸が痛むらしい。

私がただ、目を見開いたまま死んでいるポッターを見下ろしている
と、微かに泣き声が聞こえてきた。

ハリーの……泣き声……

聞こえてくる泣き声の中には、赤ん坊だけではないことに気づいた
私の心臓は、飛び跳ねて、全身から血の気が引いた。

……と……悲痛な……泣き叫ぶ声……

「……………っあ……」

あまりに痛々しく、苦しそうで、悲しそうな声は、姿を見なくても
セブルスのものだと分かった私は口から声がこぼれ落ちた。

私は、声を外に出ないように口を押さえながら、緊張したように動
きだす心臓を落ち着かせるために呼吸を繰り返す。

セブルスの泣き叫ぶ声は、だんだんと大きくなっていき、玄関先に
いる私のところまではつきりと聞こえてくるまでになった。

それでも、私は何もできない。

今ここで、彼の前に現れても、抱きしめても、セブルスの苦しきみなんて、悲しみなんて拭い取ってあげられない。

今、私にできることは、耳を塞がずに、セブルスの悲痛な…泣き叫ぶ声を聞くことだけだ。

彼がこんな声を出して泣いているのは、私のせいなのだ。

セブルスが、悲しみ、苦しんでいるのは全て私が臆病なせいだと。私が卑怯者だからだと。

言い聞かせる為に。

泣いてはいけない。私が泣く資格なんてないのだから。

セブルスの泣き叫ぶ声も聞こえなくなつてから、少し時間をおいて、私は奥の部屋に歩き進めた。

その時の様子を物語るように家の中は悲惨な状態で、散乱するものを避けながら中に進むと、赤ん坊の泣き声だけがだんだん大きくなつていく。

ハリーがいるであろう子供部屋に入ろうとしたが、中にまだ人がいることに気がついて私は息を潜めるように暗闇から目を凝らした。

ガラスが割れている窓から風が吹き込むと、ぼろぼろなカーテンが大きく舞うように靡いて、雲に隠れていた月がタイミングよく顔をだす。真っ暗な闇に包まれたこの場所を照らすかのように月明かりがその部屋を差し込んだ。そのお陰で、その部屋にいる人物の顔がはつ

きりと見えた。

「……………セブ…ルス……………」

彼と鉢合わせしないように、時間を置いた筈だったが、どうやらまだ居たらしい。

目を腫らして、力なく横たわるエバンズの頬を優しく触れると彼は、ゆっくりと立ち上がる。

ハリーの方は、全く見ずにどこか遠くを見て、表情を変えなかった。ただ抜け殻になってしまったかのように感じた。

エバンズを失ったセブルスは今…自分を責めているのだろうか。

自分のせいだと責め続け、あの時のことも、彼女が死んだことも全て自分が招いた結果だと、罪として背負い、一生苦しみ続けるのだろうか。

そう思ってしまったえば、嫌でも私はまた間違ったのかもしれないという後悔が襲いかかってくる。

セブルスの頬に流れる一筋の涙が月明かりに照らされて、目に入ると私は心臓が握り潰されるように痛みだした。

もう…戻れない…

……………私が…ポッターと…エバンズを…殺して

……………セブルスを…傷つけ……………苦しめた。

彼は、足元にいるエバンズを名残惜しそうに、愛しそうに見つめると目を閉じて一瞬にして姿を消した。

私は、さつきまでセブルスがいた部屋に足を踏み入れて、力なく横たわるエバンズに視線を移した。

彼女の服には、誰が強く抱きしめたような皺ができていて、ピクリとも動かない顔は、彼女のことを思つて嘆き悲しみ流した涙で濡れていた。

「……………ねえ…エバンズ。……………」

貴女は…セブルスのことどんな風に思っていたの？…」

そう問いかけてみても、死んだ人間が答えてくれる訳がない。

「……………本当に…貴女が…羨ましいよ…」

服の皺、涙で濡れたエバンズの顔を見て、私は嘆き悲しむセブルスの姿が思い浮かぶと、視界が滲みだした。

……………私が…私が…死ねばよかったんだ…

そう思えば、鼻が痛くなり、涙がこぼれ落ちてしまう前に、拭いながら私は無意識に声を出していた。

「……………貴女…ばっかり……………」

きつと、私が死んでも彼は涙ひとつ流さないだろう。
……嘆き悲しんでくれないだろう。

「……………代わってよ…エバンズ…」

お願い…エバンズ……

…代わってよ……

その場所…代わってくれるのなら私が代わりに死んであげるか
ら

必死に溢れそうな涙を堪えていると、ハリーのうるさい泣き声が耳
に響いて、私はゆっくりと近寄った。

「……………うるさい……………」

……これから…セブルスはこの子を守り続ける…苦しみながら、自
分を犠牲にして守る。

この子がいるせいで、…彼は、彼は!!!

全て私のせいだというのに、変な理由をハリーに押し付けて、自分
が楽になろうとしていることも分かっている。けど今はもう何
がなんだか訳が分からなくて、どうしようもないのだ。

私は何かに取り憑かれたように、ベビーベットの柵の中にいるハ
リーに、ゆっくりと手を伸ばして、首を締めようとしていた。

殺せばいいんだ…ハリーを殺せば!!!

それで、セブルスはもう何も背負わなくていい!!!

泣き続けるハリーが、ゆっくりと目を開けエバンズと同じ緑色の瞳

が視界に入ると、私の瞳から一粒だけ涙がこぼれ落ちる。

「……………どうして……………同じ色なのよ……………」

……………セブルスは、ハリーの目をエバンズと重ねて息絶える。

……………彼は最後まで彼女を想いながら息絶える。

……………私じゃない……………

ハリーの緑色の瞳を見つめていると、何故か殺せない自分がいた。

私は……………死んだエバンズにも勝てない……………

生きているのに……………ここにいるのに……………

私の方を見てくれな「何をしているんですか
!!!!!!!」

突然怒鳴り声のような、大きな声が聞こえると私をハリーから離すように間に割り込んできて、腕を掴まれた。

「離して!!!!レギュラス!!!あいつを殺すの!!!」

「落ち着いてください!!!!!!あの子は死んではいけないと言ったのは誰ですか!!!」

レギュラスの腕の中から逃げようと暴れるが、男の人の力に敵うわけもない。

「お願い!!!!!!
殺させて!!!レギュラス!!!」

何も答えない彼は、ただ力強くハリーに私を近づけないように距離を取っていく。

「アウラ、君は、僕が落ち着かせるまでその子を守ってくれ。」

レギュラスがアウラに指示する声が聞こえてきても、私は自分でもこんな感情をどう処理していいのか分からず、叫んでいるのは自分の筈なのに、自分ではない気がして、もうどうすればいいのかわからない。

「離せ!!!!!!」

「離しませんよ。…貴女と約束したんですから」

荒い口調で声を張り上げてみても、レギュラスはしつかりと私の腕を持ち、落ち着くまで私の好きなように暴れさせた。

「……………お願い、あいつを……………ハリーを殺さないと……………」

……………エバンズと同じ緑色の瞳を持った……………ハリーが生きていたら……………

……………ああ……………これは……………私の本心……………

さつきから声を張り上げているのは、私の本心だと分かってても、もう止めることなどできない。

これは一度外に出てしまったら、……全て吐き出してしまおうやつだと、…学生の時のことが頭に浮かんできた。

「……………ハリー……が……………生きていたら……」

……………セブルスは…エバンズをひと時も忘れない

……………何故か…セブルスが私のことを最初から知らないように、忘れてしまいそうで怖い。

怖くて……………怖くて…仕方がない。

「……………セブルスは……………私を…見てくれない」

私が暴れることをやめ、絞り出した声が部屋に響き渡ると、レギュラスがゆっくりと握っていた手の力を弱めて、優しく包み込んでくる。

「……………レイラ……………僕の方を見て……………」

レギュラスにそう言われて、逸らしていた視線を彼に戻すと何故か泣きそうな表情を浮かべていた。

「…泣きたい時は……………泣いていいんですよ。」

私は、自分では泣いていると思っていたのだが、どうやら彼の言い方だと泣いていなかったみたいだ。

「……………だから…そんな…顔しないでください。」

そんな苦しそうに、泣くのを我慢しなくていいんですよ。」

……………ごめんね…レギュラス。

貴方にそんな顔をさせているのも、きっと私のせいなのよね。

「……………分からない…の。」

私の言葉に、レギュラスも後ろにいるアウラも少し険しい顔になる。

「自分が……………今苦しいのか…辛いのか…悲しいのか…もう…分からない。」

その言葉を聞いたアウラが、泣き出したのが見えたが、私の口は止まってくれなかった。

「……………もう…どうやって泣くのかも…忘れた」

レギュラスは、私の声を聞くと俯き何も話さなくなった。

私の手を少し強く握ってくる彼の体は、震えていた。

自分の手が何か水が滴ったように、少し濡れていることに気づくと、レギュラスは何も言わずに私に抱きついてくる。

耳元で嗚咽音が聞こえてくると、私は彼に話しかける。

「……………レギュラス…泣いてるの…?」

私の問いかけに答えたのは、レギュラスではなく、少し太い声だっ

た。

「そこにおるのは誰だ
!!!!!!」

急に聞こえた怒鳴り声がある方に振り向くと、ハグリッドらしき姿が見えた。あの体型だと暗闇でも分かりやすい。

「ハリーから離れろ
!!!!!!」

私がハグリッドを見つめっていると、アウラは素早く私達の方に駆け寄り、手を握ってくる、視界が歪んだ。

気づけば、もうすっかり見慣れた部屋にいて、レギュラスは何も言わずにゆっくりと私から離れていく。ソファアに腰掛けたレギュラスを目で追った私は、気まずいこの空気が耐えきれなくなり、口を開く。

「少し…魔法省に行ってくる」

彼の返事も聞かず、姿くらしをした私は、椅子に腰掛ける。

静かに過ごしていると扉の向こうでは、色々と忙しそうに走り回っているような足音が聞こえてきた。

…それもそうだろう。闇の帝王が姿を消したとなると、魔法省も対応に追われるに決まっている。きっと、私の所にも仕事が終わってくるだろう。

そんなことを思っていると丁度タイミングよく、扉をノックする音が聞こえてきた。

闇の帝王が小さな赤ん坊によって倒れたことは、日が昇った頃にはもうあつという間に魔法界中に広まっていた。

あんなに姿を隠すように生活していた魔法使いたちは喜びを分かち合うかのように、毎日どんちゃん騒ぎをしているようだ。

マグル界に一步出ただけでも、魔法使いだろうとすぐに分かるほどの格好をした人達が一箇所に集まっていて、少し歩いていただけの私にも話しかけてきた。

「何をそんなに浮かない顔をしているのです？まさか知らない訳じゃないでしょう」

いきなり全く知らない人に話しかけられて驚きを隠せなかったが、他人に話しかけるほど浮足が立っているということだろう。

「あの人倒れたのですよ！それも小さな赤ん坊によって！」
興奮した様子で、隣にいた魔法使いが私に話しかけてくる。

「これ以上の喜びはない！この時をどれほど待ちわびたことか！」
彼らはここがマグル界であることをすっかりと忘れていたようだった。

「もう終わったのです！あの人の時代は！」

興奮している様子の魔法使い達を見つめて、私は歩きだしながら静かに声に出した。

「…終わったんじゃない…始まったんですよ」

私の言葉を聞いて、意味が分からないといった表情を浮かべる彼らの顔を見て私はその場から立ち去った。

今頃色々なところで宴をしているのだろう。

皆が集まって闇の帝王が倒れたこと喜びを分かち合いながら、生き残った男の子を英雄として祝福しているのだろう。

『生き残った男の子に祝福を!!!』

『英雄、ハリー・ポッターに乾杯!!!』

どこからともなくそんな幻聴が聞こえる気がして私は両耳を塞ぐ。今最愛の人を失い、絶望のどん底まで落ちているセブルスのことを考えると乾杯も祝福もする気力も湧かない。

これから、セブルスは憎いポッターに瓜二つのハリーを、エバンスの緑色の瞳をもったハリーを影から守り続けるのだ。

「…………ごめん…セブルス…」

セブルスの命を救えることができたとしても、私には彼の苦しみを分かち合うことも、一緒に背負うこともできない。

…………どんなに頑張っても…私はエバンスに勝てない…

セブルスは…私を見てくれない

どこまでも、自分のことしか考えられずに、セブルスの1番の幸せさえも願ってあげられない。

私がペンダントを取り出して、針の中心部分を押すと、カチツという音が聞こえてくる。

その途端に歩いていた人はピタリと動きを止めて、何も聞こえなく

なつた。

時を止めても何も変わらない雲ひとつない青空を見上げて、私は小さく呟いた。

「……………愛してる……………」

彼にこの気持ちを伝える気なんてない。言わなくても、返ってくる返事はわかっている。

これ以上セブルスを困らせるようなことなんて言わない。言っただけはいけない。

だからこそ、彼の前でぽろっと出てしまわないようにここで言ってしまうおう。

溢れ続けるこの感情を口に出して、少しでも軽くしよう。

「……………愛してるよ……………セブルス……………」

私の言葉は、時間切れを知らせるペンダントのカチツという音が重なるのと、一気にこの世に溢れ出したありとあらゆる音にかき消された。

止まっていた人もゆつくりと歩き出して、時間は何事もなく進みだす。

まだこれは、序章が終わっただけ。

まだ…本編は始まってもない。

そう思うと、もう苦しいや辛いという負の感情を通り越して、笑いそうになった。

こんな世界、…セブルスがいなかったら私はもうとつくに死んでい

31 闇の印

晴天が広がる空を窓越しに眺めながら、何もやることのない私はただ、ぼんやりと過ごしていた。

あの人が消滅すれば色々な人が騒ぐはずで、魔法省は今、人手が足りないぐらいの仕事に追い込まれている。

毎日尋常じゃないほどの手紙は届くし、訪問者も減るところか、増えていくばかりだ。闇祓いの人達はどうかやら死喰い人を根絶やしにしようとしているらしい。

だから、私のところにまわってくる仕事は今まで通りのものばかりで、手をつけようとしてもしないから部屋に羊皮紙だけが溜まっていくだけだった。

対応に追われた職員の分の仕事までがまわってくるものだから、やっても終わる訳がなく、完全にやる気なくなった私は、レギュラスの元に帰ってダラダラと過ごしているのだ。

「お嬢様、お茶をお淹れいたしましょうか？」

「今はいいかな。……ありがとう、アウラ」

上の空な私に話しかけてきたアウラに返事をして、私は少し寝ようかと思いつつ、瞼を閉じてみる。

実は今、レギュラスは久々に外に出て、私とアウラ以外に誰もいない。

きつと今頃、買い物でもしているのだろう。

そんなことを思いながら寝ようかと思つて瞼を閉じてみても、静か

すぎるというのも逆に眠れない。

あまりに暇で、魔法省に戻り仕事をしようかと重い腰を上げると、後ろから玄関のドアノブを回す音が聞こえてきた。

勿論、帰ってきたのはレギュラスで、私がいることに気づくと笑みを浮かべてくる。

「ただいま帰りました。」

「…おかえりなさい」

彼は、どこか楽しそうな表情を浮かべながらローブを脱ぎだした。

「いや、それにしても貴女の言う通りでしたね。…僕の耳にもあの子のことが入りましたよ。」

「…そう、良かったわね」

ソファアーに座るレギュラスが、何か握りしめていることに気づいた私は、話しかけようとしたが先を越されてしまった。

「……1つ聞きたいことがあるんですが、いいですか。」

さつきまでの楽しい雰囲気とは一変し、何か真剣な表情を浮かべながら、私に手に持っていたものを見せてくる。

「…これは、本当ですか？」

レギュラスの手にあったのは、日刊予言者新聞だったらしく、ブックがアズカバンに収監されたと書かれている。

「本当に、シリウスはここに書いてある通り、人を殺したんですか？」
そう言う彼は、信じたくないような様子で、すごい勢いで問いかけてくる。

「…いや、それは間違いよ。ブラックは、濡れ衣を着せられただけ。」

「…そうですか…。」

ほっとしたように声をこぼすレギュラスの体から力が抜けていくのが分かった。

「…ブラックは、ハリーが3年生の時にアズカバンを脱獄する。」

私が静かに話し出すと、レギュラスの表情が引き締まり、少し空気が張り詰めたのを感じながら、説明するために後を続けた。

「貴方には、…大体把握していてほしいんだけど、…今話しても大丈夫？」

座り直すレギュラスは、私の顔を少し見て、声を出す。

「…勿論、大丈夫ですよ。…もう、貴女が言う未来を疑ったりはしませんから。」

少し笑いながら言う彼を見て、私は順を頭に浮かべながら、口を開いた。

「……………あの人が、蘇るのはハリーがホグワーツに入学して四年目。その年に開催される、三大魔法学校対抗試合の最終競技で使う優勝

カップが、ポートキーに変えられる。」

私の話を聞いたレギュラスは、何か色々と言いたい事があるような表情をしては、声をだした。

「……優勝カップをポートキーに変えるに何の意味があるというのですか？」

「…蘇るためには、ハリーの血がどうしても必要なの。でも、力が弱っているあの人がわざわざダンブルドアがいるホグワーツに攻め込む力なんて残っていない。だから、ポートキーに変えた優勝カップを使って、ハリーを自分の元に呼び寄せる。」

頭の回転が速い彼は、私の話を聞いたただけですぐに筋が通るような可能性を導き出していく。

「…それは…内部に裏切り者がいるということですか？」

「……裏切り者というよりも、成りすましているのよ。ポリジューズ薬を使ったクラウチJr. が、ムーディーに化けて、ハリーが優勝カップに触れるよう導く。」

「…ムーディーって…あの闇祓いのですか？何故彼が、ホグワーツに？」

どうやら、流石の彼でもムーディーがホグワーツの教員になるなど想像できないらしく、不思議そうに問いかけてくる。

「ホグワーツの教員だからよ。」

あまりの驚きで声が出ないらしいレギュラスは、大きく目を見開い

た。

「ちなみに、闇の魔術に対する防衛術。」

「……想像……できませんね……。」

それで、その時にあの人が蘇るといふのなら、阻止するということですか？」

冷静に私に問いかけてくるレギュラスの声を聞きながら、私は頭を横に降る。

「いいえ、阻止はしないわ。……阻止をしてしまったら、私が裏切り者だということになって今後やりにくくなるし、それに結局別の方法で蘇ると思うの。」

「……それは……貴女が知っている通りに未来が来るように……するためですか……？」

前に座っている彼は、私の核心に触れるように問いかけてくる。

「……間違いではないわよ……。」

レギュラスは、答えた私の声を聞くと少し間をおいて、声を出す。

「……先輩は……いつ死ぬんですか……？」

彼の言っている先輩は、きっとセブルスのことだろう。

レギュラスの問いかけを聞いた私の頭には、何度も見たセブルスが息絶える瞬間が浮かんでくる。もう随分と思いい出していなかっただから、頭に浮かんだときは、息がしづらくなつた。

これだけは、何度思い出しても慣れるものではない。

………本当に………心臓が悪い。

「………私知ってる未来の………最後の方。………でも、その前にやらないといけない事がある。」

私は話題を逸らすために、レギュラスの目を見つめて、覚悟を決めた。

「………ブラックは………ベラトリックスに殺される。」

私が言うブラックが自分のことではないと瞬時に悟ったレギュラスは、どこか顔色が悪くなった。

「次の年に、魔法省で死喰い人と対戦して、殺されるの。だから、私は死喰い人として、貴方は………不死鳥の騎士団として、その場に紛れ込む。」

「………不死鳥の騎士団？………僕がですか□」

彼は、混乱したように声を出す。驚いているレギュラスはどうやら、兄弟が死ぬと聞いて、動転しているらしい。

「あの人が蘇ったと聞いたダンブルドアは、また不死鳥の騎士団を立ち上げる。」

彼らの本部がどこにあるのかは、知っているから、時が来たら貴方は、何事もなく乗り込めばいい。」

「……でも、死喰い人だった僕を受け入れてくれますかね？」

心配そうに問いかけてくるレギュラスを見て、私は少し笑みを浮かべながら後を続けた。

「…私1人の力で、人の死を変えるなんて、自分を犠牲にしない限り不可能に近い。…だからどうしても貴方の力が必要なの。」

大丈夫よ。まだその時まで時間はたっぷりある。だからどうすればいいかは考えましょう。」

そろそろ魔法省に戻ろうかと思いつくりと立ち上がった私の腕を慌てて、掴んでくる。

何か聞きたい事があるのだろうか。

そう思つてレギュラスが話すのを待つても、中々話す気配がない。

「……レギュラス？」

少し心配になって問いかけてみても、彼は私の腕を握り、俯いたままだった。

一体、どうしたのだろう。

…ブラックのことが心配になったのかな。

私は、レギュラスを安心させるために、言葉を選びながら口を開く。

「…不安がらせるために、教えた訳じゃないの。大丈夫。力を合わせれば、ブラックを助けられるし、それまでに考える時間もたっぷりあ

る。」

そう言ってみても、握ってくる手の力は強まるばかりで、もうどうすればいいのかわからなくなった。

「……貴女の言う通り……あの子を英雄として讃え、お祭りのように毎日騒いでいるようです。」

ぽつりぽつりと話し出したレギュラスの口から出たのは、私が励ますために言ったこととは、全く違うことだった。

……外に出た時に、魔法使いと話したのだろう。

でも、何故彼がそんなことでここまで落ち込んでいるのかわからない。

「……どうして……」

その後は、聞き取れないほどの小さな声で、彼が何を言っているのか全く聞こえなかった。

「…レギュラス、とりあえず手を離して。」

彼は何も答えないまま握り続けると、ゆっくりと力を抜き、離してくれた。

「……何があったかは…知らないけど、話してくれないとどうしようもできないのよ…」

視線を合わせ、そう問いかけてみても、彼は黙り込んだままで何も

言ってくれない。

もうどうすればいいのか分からない私は諦めて、魔法省に戻ろうかとゆっくり立ち上がる。

姿くらましをしようとした瞬間だった。また腕を掴まれた私は、もう振り向かなくても誰が掴んできているのか分かっていった。

さつきから一体何なんだと少し苛ついた私は、腕を振り払おうと振り向くと弱々しい声が聞こえてくる。

「……………行かな……………いで……………」

あまりに弱々しく、聞いたことのない声を聞き戸惑った私は、何も返す事が出来ない。

「…っあ…いえ、冗談です。すいません。気にしないでください。…ほんと何言ってるんですかね。」

我に返ったレギュラスが普段通り、へらへらと笑みを浮かべながら、誤魔化してくる。

……………何か…隠してるな……………

根拠も証拠も何もない。単なる私の勘だが、そう思った。

何か慌てたように、私から手を離し、腰掛けるレギュラスは相変わらず今も言葉を並べて誤魔化している。

「……………私も今夜、ここで寝るよ。」

自分でも一体何を言っているのか分からない。レギユラスが凄く驚いたような表情をしていたのも無理もないだろう。

あんなに帰ろうとしていた奴が、いきなり泊まると言い出したのだから。

でも、あんな表情されたら、ほっとけない。

鳥の鳴き声が遠くから聞こえたような気がして、重たい瞼を上げると、カーテンの隙間から太陽の光が差し込んでいた。

もう朝かと思い、ゆっくり体を起こそうとすると腰が少し痛んで歳をとったことが思い知らされる。

そういえば昨日の晩、レギユラスと寝る場所で少し言い争い、何とか彼をベッドで寝かせたのを思い出した。

前は、ソファアールで寝ても何もなかったのに…

私が溜息をつきながら、腰をさすっているとアウラの声が聞こえてきた。

「おはようございます。お嬢様。朝食はどう致しますか？」

お腹も空いていなければ、胃にも何も入れたくなくて、食欲がない。

「…お茶だけでいいわ。」

そういえば、アウラは淹れたての紅茶を持ってきてくれた。一口飲めば、体の中を綺麗に流し取ってくれる気がして、さつきよりも気分が良くなった。

少しゆったりと過ごした私が、そろそろ魔法省に戻ろうかと思うとアウラが声を掛けてくる。

「…レギュラス様に、お声がけはされていかれないのですか。」

「起してしまったら、悪いからね。」

……ああ、後それから、何もやる事がなくなった後でいいから、今日部屋の片づけに来てくれる?」

静かに笑みを浮かべて返事をする彼を見て、私は姿くらましをした。

羊皮紙が散らかっている部屋に戻った私は、杖を一振りして、一応片づけはする。それでもどうせ散らかるのだろう。

雑用係の私に重要な仕事が終わってくるはずもないが、それでもこれはあまりにも酷いと思う。

つまらない文章が書かれた羊皮紙を眺め、書き込まなければならぬところを羽根ペンを走らせる。

まだ、学校の課題の方が何倍も楽しい。

そう思ってもこれも一応仕事だから、誰かがやらなければならぬ。私はやる気のない自分自身を奮い立たせて、羊皮紙に向き合った。

何枚終わらせたか分からないが、やっと半分ぐらいの量を終わらせたぐらいで、少し背伸びをすると、机に私の腕が当たったらしく、机の端に置いていた羊皮紙の山が雪崩のように崩れ落ち床に散らばった。

それを見た瞬間、やる気は一気になくなり、もう随分と部屋にこもりっぱなしの私はおもむろに立ち上がり、部屋を出た。

もうやってられなくなった私は、単なる暇つぶしのためにとりあえずエレベーターに乗る。

どうやらこのエレベーターは下の階にいくものらしい。別に行くところもない私は、とりあえず地下8階で降りることにした。何故、こんなに人が多いのか不思議に思うぐらいの人数はいて、行き交う人と肩がぶつかりそうなほどの人が密集している。

顔を上げれば、この階の象徴である、大きな噴水が視界に入ってくる。

私は何となく噴水の中に、コインを投げ入れた。噴水の中に投げ入れたお金は、聖マンゴ魔法疾患傷害病院に募金される。そう思えば、自分が良いことをしているような気がしたからだ。

それに：時期的にそろそろ、ネビルの両親が拷問され、病院に入院しているかもしれない。

我が子を忘れてしまうほどの拷問なんて想像つかないが、レストレンジの顔が浮かべば納得してしまう自分もいる。

「久しぶりじゃの。」

突然聞こえた声に少し驚きながら、振り返ると立派な髭が目に入った。

「……ダンブルドア……先生……」

目の前にいるダンブルドアは、にこりと私に笑いかけてきて、何も変わっていなかった。

「……………少し目の下のクマが目立っておるが、きちんと睡眠を取っておるか？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

適当に笑いながら返しても、彼は話すことを切り上げようとはしないどころか、明るく別の話題を振ってくる。

「ところで、…魔法省に身を置いていると聞いたのじゃが、ここでの生活は慣れたかの？」

「…慣れてしまえば、意外と快適ですよ。仕事で回ってくる羊皮紙の量が多いのを除けばですが」

冗談を言う私の話を聞いたダンブルドアは、笑みを浮かべる。

「相変わらずじゃの。……………どうじゃ？君が良ければ、ホグワーツに来ても構わんよ。皆、歓迎してくれるじゃろう。」

冗談なのかどうかも分からないことを言い出すダンブルドアの話を聞いても、笑うことはできない。

……………どう考えても…歓迎される訳がない。

「君は優れた魔術を持っておるから、きっと教員という職場はぴったりだと思うがの。それに、ホグワーツはいつでも教員不足なのでな。」

すらすらと話すダンブルドアの言葉を聞いて、まず最初に浮かんだのはセブルスのことだった。

私がおもひ、この話の流れのままホグワーツの教員になったとして、一番やりづらくなるのは、彼だろう。

それにしても、この人は私が死喰い人だということをセブルスから聞いているのだろうか。

……もし、聞いているのであれば、セブルスに嫌がらせをしようとしているとは思えない。

「…人に教えるのは得意ではないので、残念ですが、お断りさせていただきます。」

「…そうかの。……残念じゃ。気が変わったら、いつでも言うておくれ。」

「分かりました。」

これで、やっと解放されると思ったが、前に立っているダンブルドアは中々動こうともせず、少し黙り込む。

何かと申して問いかげようとすれば、少し悲しそうな、申し訳なきような声が聞こえてきた。

「……………すまんかった。…君が一番苦しい時に助けてやれなくて。」

急に黙り込んだと思えば、突然そんなことを言い出すダンブルドアを見て、私は部屋を出してしまったことを後悔する。

「ところで、何の用事なのですか？魔法省に」

話題を変えるために、問いかければ何か思い出したような表情を浮かべた。どうやら私の言葉で用事があったことを思い出したらしい。

「そうじゃった。最近、物忘れが酷くての。嫌じゃの、歳というのは……今度、お茶でもどうかね？息抜きするのも、大切じゃろう？」

私が承諾すれば、にこりと笑みを浮かべ、私の頭を優しく叩いてきたダンブルドアは、そのままエレベーターに向かって歩き出す。

……魔法省に……ダンブルドアが用事……

ダンブルドアが乗り込んだエレベーターは、下の階に行くものに気づいた私の頭にはある事が浮かび上がってくる。

この下の階は、……神秘部と……法廷。

……まさか、今日が

……カルカロフが情報を提供する日。

嫌な予感がした私は急いで、上の階にエレベーターに乗り込む。

私の名前を出さなかったら、それはそれでいいが、……もし出したら直接会ったことも、話したこともないが、もしかしたら私が家族を殺したあの時の集団の中に紛れ込んでいたかもしれない。

色々な可能性が浮かび上がる以上、一応備えといった方がいいだろう。

エレベーターから、さつきまでいたところを見下ろしていると、人混みの中に見たことのある人物がいた。

リータ・スキーター……

段々と小さくなっていく彼女を見ながら、私は確信する。記者であるスキーターとダンブルドア、この2人が揃って魔法省にいるということは、高確率でそうだろう。

私は自分の部屋の階につくと、誰よりも早くエレベーターから降りて、自分の部屋に向かった。

……とりあえず、私が死喰い人ではないということを訴えればいい。

口では、いくら嘘をつけるが、問題は左腕にある印だ。本当にどうして、こんな分かりやすい印にしたのだろう。

もう少し、誤魔化せるようなものにしてほしい。

私は、この印をつくったであろうあの人に苛立ちながら、部屋に入ると、アウラが散らかった羊皮紙を綺麗に整えていて、丁度部屋の掃除をしていたところだった。

「…お嬢様。どうかなさいましたか」

私が焦っているのが分かったのか、心配そうに問いかけてくるアウラに何も答える余裕もなく、私は左の袖を捲り上げて、まだ薄っすらと付いている印を見つめる。

確かによくみないと分からないところまでは、薄くなったが、それでもこの印の存在に気づかれたらもうどうしようもない。

……これがあつたら…誤魔化せない。

「アウラ、これ消すことはできるわ。」

私が左腕を見せながら問いかけると、彼は少し考えたように恐る恐る触れてくる。

「……分かりませんが……やってみます。」

アウラが印に触れると、少し熱く感じた。何やら呪文をかけてくれているらしい。

終わった様子のアウラがゆっくりと私から離れると、左腕にはまるで最初から何もなかったかのように綺麗さっぱり印が消えていた。

本当に彼には、感心させられる。私が出来ないこともやってのけてしまうのだから。

「……何とか、魔法で誤魔化しましたが一時的なものだと思います。……1日持つかどうか……申し訳ありません。お役に立てず」

申し訳なそうに、謝ってくるアウラは、明らかに落ち込んでいた。

「そんなことないわよ、アウラ。これで、十分よ。助かったわ。……掃除、ありがとね。もう戻ってもいいわよ。」

アウラは、何か言いたそうな様子だったが、素直に私の指示を聞いてくれた。

彼がいなくなった部屋に、1人になった私は、自分自身を落ち着かせるためにとりあえず椅子に腰掛ける。

……大丈夫……名前を出されないかもしれない。

彼は、私の存在を知らないかもしれない。

何度も言い聞かせても、左腕を握る右手の力がだんだん強くなっていくばかりだ。気を紛らわすために、羊皮紙に向き合ってみても、羽

根ペンを握る手が動くはずもない。

今はただ、私の名前が出ないことを祈るばかりだった。

空も赤く染まり、日が落ちだした時間帯になったぐらいだろうか。遠くから、何やら音が聞こえるような気がして、私は動かしていた手を止め、耳をすませた。

どうやら、私の気のせいではないらしく、どんどんと大きくなるその音は、足音だった。

私がいる部屋の扉でびたりと足音が止むと、少し心臓の鼓動が速くなる。

私は、左腕の袖口のボタンをしっかりと留めていることを確認して、羊皮紙だけを見つめた。

ノックをする音が聞こえてきて、返事をする、扉の外れかけた音が聞こえてくる。足音を聞く限り、3人以上の人が部屋に入ってきたのが分かった。

ゆっくりと顔を上げれば、少し険しい表情のムーディーが目の前に立っていた。その少し後ろには3人、若そうな男の人が2人と、女の人がこちらを睨むようにじっと見てくる。

「闇祓いが私に何の用事ですか？……見てもらえば分かると思うのですが、私も暇ではないのですが。」

特に気にしていない振りをしてながら羽根ペンを動かしながら、声を出す、ムーディーの声が聞こえてきた。

「レイラ・ヘルキャット。ご同行願おうか。」

「……………一体どこに行くというんですか？」

私は、目の前にいる彼を見つめながら問いかけてみる。

闇祓いがここに来た時点で、私の名前がカルカロフの口から出たということは間違いない。

……………めんどくさいことになった…

何も答えないムーディーに向かって、私は追い討ちをかけるように問いかけた。

「……………何故、貴方達がこのような場所にわざわざ来たのかを聞いているんです。」

何か一言言ってくればいいというのに、彼が何も言ってくれないものだから、部屋の空気が張り詰めた。後ろにいる人達は、私を警戒したように、構えている。

気持ちには十分に分かるが、そんなに警戒しているのをあからさまに出されるのは、少し傷つく。

握っていた羽根ペンを机の上に置き、立ち上がろうとすると、ムーディーは私に杖を向けてきた。

「それは、お前が一番よく分かっているだろ」

言い捨てた彼は、今にでも殺しそうな勢いで睨んでくる。

「……………意味が…分かりません。」

「杖を、机の上に置け。」

もう会話さえも成り立たず、私は諦めて言われた通り、杖を机の上に置いた。後ろにいた男の人が、私に杖を向けながら、机の上に置いている私の杖を取る。

丸腰になった私は、指示された通り、ムーディーの後ろを付いていくと他の3人は私の周りを囲むように歩きだした。

部屋を出て、エレベーターに行くまでにすれ違った役員の人達は皆、私の方を興味本位で見してきた。それはそうだろう。闇祓いに囲まれないながら移動しているんだから、外から見たら異様な光景だろう。

……もし：誤魔化したとしても、一度死喰い人と疑われた人間を魔法省に身を置いてもらえるのだろうか。

私はそんな不安を抱きながら、ムーディーの後ろ姿を見つめながら、下の階にいくエレベーターに乗る。

前にいた彼が降りたのは、勿論、法廷がある地下10階だった。

緊張する自分の心臓を落ち着かせるために、ゆっくりと呼吸を繰り返しながら、静まり返っている廊下を歩き進める。

少し大きめの扉の前で、立ち止まったムーディーは、私に何の説明もせずに扉を開けると中に入っていく。私が立ち止まっていると、後ろにいた男の人が、背中を押して、中に入れと促してくる。

意を決して、中に入ってまず目に入ってきたのは、何人もの役員の方だった。記憶の中で見た、あの光景そのもので、カルカロフが入れられていたであろう檻のようなものもまだ中央に設置されていた。

何枚もの羊皮紙が崩れ落ちているのを見て、視線を移すと、私は役員以外にも、端にスキーターやダンブルドアなど、全く関係ない人達までいることに気がついた。

カルカロフとの司法取引をした後に私を呼び出したことは、誰が見

でも明白で、直ぐにでも私をアズカバンに収監させたいらしい。

少しの物音でも立てたら、目立つほどに静まり返っているこの空間に、何食わぬ顔で腰掛けている人達の気が知れない。

その中にいた記者のスキーターは、しっかりと羽根ペンとメモ帳を握り締めながら、今から何か面白いものを見るかのように少し口角を上げていた。そんな彼女を見ると、一気に腹ただしくなったが、睨みつけることしかできなかった。

……何も知らない……風に……演じなければ……

あの人に……家族を殺された可哀想な子という印象を……ここに
いる全員に植え付けるために

私は、少し戸惑ったような振りをしながら、周りに座っている人達の顔をぐるりと見回す。端らへんに腰掛けているダンブルドアに助けを求めるように見つめるが、そんなことをしてもこの最悪な状況を変えられるわけがない。

無理矢理、檻のようなものの前に立たされた私のすぐ隣には、ムー
デイーが立っており、身動き一つも許されない。

2回ほど木槌の音が部屋に響くと、感情のこもっていない声が聞こえてきた。

「レイラ・ヘルキヤット。我々、評議会は、貴殿が死喰い人である可能性が高いと判断し、緊急にここに呼び寄せた。今から、いくつかの質疑応答をする。嘘偽りなく、答えるように」

淡々に言葉を言う、パーテミウス・クラウチ・シニアの顔を見つめながら、私は口を開く。

「…何故、そのような考えに至ったのでしょうか。」

「レイラ・ヘルキャット。貴殿は、死喰い人として、ヴォルデモート卿の下につき、罪のない人々の命を奪い、弄び、残酷な行為をしたと認めるか？」

彼は、完全に私の言うことに耳を貸す気もなく、問いかけてくる。

「いいえ。私は死喰い人になった覚えなどありませんし、そのような行為もした覚えは一切ありません。」

私のはつきりと言い切ると、周りに腰掛けている役員達が少しざわついた。

「魔法省の、内密情報をヴォルデモート卿に流していたことは認めるか？」

「何故、私が内密情報を流さなければならぬというのですか？そのようなことをした覚えはありません。」

私が否定したのが、気に食わないのかそれとも何か疲れているのか、彼は少し気が立っているような様子だった。

「そのような嘘は、通用しない。お前らの主人は死んだのだ。諦めて、全てを吐け。」

「ですから、私は死喰い人ではありません。何度も同じことを言わせないで頂きたい。」

睨んでくるクラウチを睨み返ししながら、私はゆっくりと後を続ける。

「私がいつ、罪のない人々の命を奪い、弄び、残酷な行為をしたのでしょうか？ そのような証拠はあるのですか？」

「ある死喰い人の口からお前の名前が出たことが何よりの証拠だ。全くの無関係だというのなら、そのような者の口から名前が出ること自体おかしいだろう。」

私が反論しようと口を開いた瞬間だった。目の前に座っている彼は、木槌を2、3回叩いて、少しざわついていたこの場の空気を変えると、私の意見など聞くつもりもないらしくひとりでに話し出す。

「レイラ・ヘルキャットが有罪だと思う者は、挙手せよ。」

彼が言った言葉が耳に入ると、私は驚くことしか出来なかった。まさか、こんなのをこの世界は裁判とでもいうのだろうか。確かに、今のご時世は、誰が死喰い人か分からないし、混乱はしているが、それでも流石にこれは有り得ないだろう。

こんなの最初から公平な裁判などやるつもりなどなかったとしか思えない。きつとうわべだけの裁判をして、私の意見など聞くつもりなどさらさらなかったのだろう。

でも……まあ裁判もせずにアズカバンに収監された奴がいるぐらいだから、こんな意味のない裁判を開いてくれただけでもましなのだろうか。

クラウドが手を挙げてしまえば、周りにいる役員達もつられるように半数以上が挙げるに決まっっていて、私の前に座っている人達ほとんどが挙手していた。

私が本当に死喰い人ではなかったとしても、彼らは最初からアズカ

バンに収監するつもりでいたのだから、こんなをやったところで意味などないだろう。本当に時間の無駄だ。

こんな理不尽な裁判でも、世間には公平な裁判を行ったと公表するのだろうか。

もう呆れるしかない私は、溜息が出そうになった。

「バーティー、少しいいかの。」

突然聞こえたダンブルドアの声が今だけは、安心してほっと胸を撫で下ろす。

「ずっと見ておったが、彼女はずっと否定しておる。そのような者を、半信半疑のままアズカバン送りにするのは、いかななものかと儂は思うがの。」

「奴の口から、名前が出て、無関係のはずがないだろう。こやつが言っていることはさつきからデタラメばかりだ。もう判決は決まっている。」

クラウチが私の側にいた男の人に何かを促すと、私の腕を縛り上げ、私を檻の中に無理矢理入れようとしてくる。この中に入ったら後戻りができないと悟ったが、杖がない私は太刀打ちできるわけがない。

「何故、その死喰い人の言うことは簡単に信じ、私のことは信じてくれないんですか？」

私は、檻越しに彼を見ながら声を張り上げながら訴えかける。

「バーティー。あやつが自分を解放されるために嘘ついた可能性も十

分に考えられるじやろうし、口に出した名前が全て死喰い人であるという証拠も何もないじやろう。」

「一体何故、あいつはそのような嘘をつく必要があるというのだ？そんな嘘をつく余裕があったとは私には思えない。」

「勿論、彼女が死喰い人である可能性も十分に考えられる。しかしじゃ、彼女の声に耳を傾けず、ましてやこれといった根拠もあるわけがないというのに、アズカバンに送るのはいささか問題かと思うのじやがな。」

私を庇うダンブルドアの言葉を聞きながら、血の気が引いていくのが分かった。

……このままだと……本当に……アズカバンに送られる。

「ダンブルドア、貴方は、こいつが死喰い人ではないと言いたいのですか？」

「それは儂にも分からん。死喰い人かどうかは、本人しか分からんことじゃ。」

バーティー、不思議に思っておったのじやが、何故彼女の左腕は見ようとしなのじや？」

ダンブルドアの言葉を聞いた彼は、少し表情が歪んだ。

「儂には、死喰い人であろうがなかろうがアズカバンに送っているようにしか見えん。」

「左腕に、印がないといって、死喰い人ではないという確信はない。呪文を駆使して、消している可能性も十分に考えられる。」

「確かに、その可能性もあるじやろうが、一体いつ彼女は、その印を消す時間があつたというのじや?」

ダンブルドアの口からでる言葉を聞くと、クラウチは口を閉ざした。

「カルカロフの尋問があるということも知らない彼女がいつ印を消したのじや?ましてや、自分の名が彼の口から出ることを予測していたと言いたいのかの? 未来が見えるというのなら、話は別じやが、そのようなことは信じがたいことじや。」

闇祓い達の目を盗んで、呪文をかける余裕があつたとも考えにくい。アラスター、彼女が左腕に呪文をかける素振りを見せたかの?」

檻越しに、ムーデイーに視線を移すとどうやらさつきのことを思い出している様子だった。

「いや、そのような素振りは見なかった。…あの状況で誰にも知られることなく呪文をかけるのは不可能だ。」

「ありがとう、アラスター。…：パーティー、たった1つのことをすれば、全て分かるはずじや。彼女の左腕に印が存在していたら、君の考え通り、死喰い人だと決まり、アズカバンに送れば良い。しかし、…存在していないかったら、彼女が死喰い人だという可能性は、極めて低くなるじやろう。」

死喰い人か否か、確かめる方法があるというのに、確かめもせず、アズカバンに送るといふのなら、儂は反対じや。」

クラウチは、少し溜息をつくと頭を抱えながらゆっくりと口を開いた。

「…そいつの左腕を見る」

そう彼が言うのと、急に腕を掴まれ、檻の外に出されると、私を縛っていた紐を解き、乱暴に左腕の服をめくりだす。

………お願い………魔法が切れていませんように

私は、アウラからいつまで持つか分からないと言われたことを思い出して、祈りながら露わになっていく自分の左腕を見つめる。

露わになった私の左腕には、印も何もついていなかった。

ほっとしながら、私の服を捲り上げている男の人を見ると、少し驚いているような様子だった。どうやら、印があると思っていたらしい。

「………ありません。」

小さな報告する声が部屋に響くと、腰掛けていた役員はざわざわと話しだす。クラウチは乱暴に木槌を叩き、周りに座っている役員の人達の話し声を黙らせた。

「印がないからといって、死喰い人ではない証拠にはならない。」

そう言い捨てる彼は、どこか気に食わない様子で、私を見てくる。

今の私には、息子が死喰い人だったということの腹いせに私をアズカバンに収監しようとしているようにしか見えない。

「左腕に印がないからといって、カルカロフの口から名前が出た事実

は変わらん。あいつが嘘をつく理由など、どこにもない。」

左腕に印がないことも、確認した筈だというのに全く意見を変えようとしないクラウチが話し終わると、後ろから扉が開く音、聞こえてきた。

「失礼、少しいいかな。」

後ろから聞こえてきた声は、聞いたことのあるもので、役員達も、前に座っているクラウチも驚いたような表情を浮かべる。私は、つられるように後ろを振り向くと、思いもよらぬ人物が、立っていた。

「……………大臣……………」

正確にいうと、元魔法大臣。彼が大臣の座を降りてから一度も話した事も、会った事もない。

私は何故、ミンチャムがこんなところにいるのか分からなくて、何も考えられなくなる。

「彼女に魔法省に身を置くよう勧めたのは、私だからね。私の意見も聞いてもらおうかと思って来てみたんだが、どうやら正解だったらしい。」

笑みを浮かべる彼は、私を見るとクラウチに視線を移した。

「どうやら、随分と死喰い人が彼女の名前を知っていたことを気にしているらしいが、知らないはずがない。彼女の家族は、死喰い人によつて殺された。どうやら、ヘルキャット家の血筋が通つたものを全員を殺すつもりだったらしい。だから、勿論死喰い人は彼女の名前は知っているだろう。」

黙り込むクラウチは、彼が元大臣だからなのか、何も反論しようとはしなかった。

「一度冷静に、考えてみてくれ。わざわざ、家族を殺した奴らの仲間になるか。司法取引をしたからといって、死喰い人が言ったことを全て鵜呑みにしてしまうのか。」

私は、奴らが一度殺そうとした相手をわざわざ仲間に入れてくれるほど優しい集団だとは思えないがな。」

彼が話し終わると、部屋は静まり返ったまま誰も話そうとしなかった。

「何故、死喰い人が彼女の名前を出したのかは分からないが、自分が自由になる為に1人でも多くの知っている名前を出した可能性が高いと私は思う。」

元大臣といっても、やっぱり一度権力を持った人物がという言葉は間違っていないんじゃないかと思うみたいで、役員達は少し考えるように下を俯く。

そんな重たい空気を壊すかのように部屋に響いたのは、少し若そうな女の人の声だった。

「レイラ・ヘルキャットが、有罪だと思う者。」

はつきりとした声が響くと、それぞれのタイミングで手を挙げる。その中には勿論クラウチもいた。

「では、無罪だと思う者。」

女の人の声に反応し、手を挙げた人数は先程よりも少し多いぐらい

だった。きつと今座っている人達の中には、手を挙げていない人もいるのだろう。

「レイラ・ヘルキャットを無罪とする。」

クラウチが、乱暴に木槌を叩きながら言った言葉が耳に入ってくる、体の力が抜けるのが分かった。

どうやら、私で終わりだったらしく、次々と腰掛けていた役員の人達が立ち上がる。

私は、後ろにいたはずのミンチャムがいないことに気づいて、慌てて部屋から飛び出した。彼の後ろ姿を見つけた私が、声を張り上げながら呼び止めると足を止めて、振り返ってきた。

「ありがとうございます。本当に助かりました。」

私が、お礼を言うと彼は口を開く。

「私はただ、君のお父さんとの約束を守っただけだから、気にしなくていいよ。」

そんな優しい言葉をかけてくるミンチャムを見ると、とても悪い気がしてきた。彼は、本当に私が死喰い人だとは思っていないだろう。でも、私は…死喰い人なのだから。どんな理由があろうとも死喰い人なことに変わりはない。

「…何故、魔法省に？」

「元々、用があったんだが、ダンブルドアから急ぎの知らせを受けてね。君が疑われていると知ったんだよ。…すまない。少し急ぎの用

があるんだ。じゃあ、失礼するよ」

少し、帽子を深く被り直しながら私に言ってくるミンチャムの後ろ姿を見送っていると、自然と頭にはダンブルドアが浮かんできた。

私はダンブルドアにもお礼を言うために一度部屋に戻ったが、そこには彼の姿はなく、人の姿もちらほらとしかいなかった。

周辺を探してはみたのだが、どこにも姿はなく、私は諦めてとりあえず自分の部屋に足を向かわせた。

………最初はどうなるかと思ったが、ダンブルドアやミンチャムのおかげで、何とか無事に最悪の結果は避けられた。

………彼らが居なかったら、今頃私はアズカバン送りになっているだろう。

まさか、ダンブルドアがあそこまで庇ってくれるとは思わなかった。

でも庇うということは、私が死喰い人だということを知らないのだろうか。でもそうになると、セブルスはダンブルドアに知らせていないことになる。まあ、私が死喰い人だということは知らせても何も意味はないと思ったのさ。

………てつきり、メンバーを教えていると思っていた。

でも、まあこれを取り切ってしまうえば、少しの間は楽に過ごせるだろう。

そう思えば、今夜はよく眠れそうな気がした。

カルカロフに名前を出されて、散々な目にあつたあの日から、私は決して部屋の外には出ようとはせず、ただ地道に自分の仕事をこなしていた。なぜなら、魔法省中に噂が広まったからだ。どうやら、ここは一度死喰い人だと疑われると生きにくい職場らしい。

それでも、私はここから離れる気などさらさない。ホグワーツに教師として働けるなら、一番良いのだが、それだとセブルスが動きにくくなってしまう。きっと彼は私が根元からの死喰い人だと思つているだろうから、私が動きやすくなったとしても、結局彼が一番辛くなる。

私は深いため息をつきながら、机にひれ伏せた。

……………会いたい…な…………

今、セブルスは何をやつているのだろうか。ホグワーツで、生徒達に魔法薬を教えているのだろうか。

彼の教え方は、分かりやすい。苦手な私でも理解できたぐらいなのだから。

私は学生の頃のことを思い出し、しようもないことを思いながら、ぼんやりと一点を見つめた。

私は胸らへんに硬いものが当たっているような感触に気づいて、触れてみると正体は首からかけているペンダントだった。

…………あつ、時を止めて会いに行こうかな…

いや、それは時間が足りない。

私は思ったことを自分で突っ込みながら、ペンダントを手取る。最近、ペンダントについて分かったことがある。それは連続的には使えないということだ。一度使ったら、最低でも5分以上は待たないといけないし、その空き時間によって、時が止まる時間も変わってくる。空き時間が長ければ長いほど、止まっている時間は長いし、短ければ短いほど、止まっている時間は短い。

制限時間はあるし、それに連続して使えない。更には時を止めている間は、物も動かせないのだ。ただ、私が移動することしかできない。あまりに条件が多すぎて、最近使っていない。だって、本当にこのペンダントの力が必要な時に、時が止まっている間が短いといけないただろう。

私はペンダントを服の中にしまいこみ、背筋を伸ばすと仕事に取り組んだ。

久々に仕事に打ち込んだ私が立ち上がり、体を動かしている時だった。扉をノックする音が聞こえてきて、返事をするゆつくりと扉が開く。部屋に入ってきたのは、ミンチャムで私は驚きのあまり少し体が反応した。

「…お久しぶりです。……あ、どうぞ腰掛けてください。」

私が声を掛けると、彼はにこやかな笑顔を浮かべながら腰掛けた。私は、慣れない手つきでお茶を淹れて彼の前に差し出すと、向かい側

のソファアーに腰を下ろした。

「…今日は、少し話があつてきたんだ。」

話を切り出すミンチャムの顔を見ながら、私は小さく返事をする。

「……もう、君の命を狙うような者達は居なくなった訳だし、君がここにいる理由ももうないんだ。だから、無理にここに居なくても大丈夫だよ。」

そんなこと言われるとは思ってなかった私は、彼の言葉を聞いて思つたことを問いかける。

「……それは……ここに居てはいけないという意味でしょうか？」

「いや、そういう訳ではないんだ。ただ、あれから、ここは君にとって過ごしにくそうだし、それに、ダンブルドアが君をホグワーツに迎えてくれるとまで、私に言つてきたからね。だから、君に伝えておこうと思つて今日ここに来たんだが……。まあ君の好きな方を選びなさい。」

説明し終わった彼は、私が淹れたお茶を飲むと、後を続ける。

「…後悔しない方を選ぶんだよ？周りのことなど、考える必要などないんだから」

そう言ってくるミンチャムがあまりにも、父に似ていたからだろうか。私の口からは全く関係ないことが溢れていた。

「……………父は……………どんな人でしたか……………？」

下を向いていたから、ミンチャムがどんな顔をしたのかも分からな
いが、聞こえてきたのは優しい声だった。

「……そうだな……一言で言えば、変わっている人だったな……。」

私は顔を上げて、思い出すように話すミンチャムの顔を見つめなが
ら、聞く耳を立てる。

「私では到底考えもしないことを言い出すこともあつたし、……：1
番驚いたのは、まだ死喰い人の行動が活発ではない時期に、私にトム
を止めてくれと言ってきたことかな。」

「……えっ……。」

私が驚いたような声をこぼしたことに気づかなかつたのか、ミン
チャムは気にすることなく後を続ける。

「凄い慌てた様子で、魔法省に飛び込んできてね。凄い剣幕で言っ
てきたから、今でもよく覚えているよ。あの時は、仲が良かった訳では
ないからね。彼が、トム・リドルがヴォルデモートだと言ってきても、
何を言っているのか分からなかつた。」

「……それは……ヴォルデモートの名前がまだ世の中に広まっていない
時にですか……？」

私の問いかけに、彼はお茶を飲むと頷きながら答える。

「……そうだよ。……私も全くその名前を知らない時に、彼はそう言っ
てきたんだ。」

あの時、彼が言っていたことを信じて何か行動を起こしていたら、

今頃何か変わっていたのかも知れないな……」

後悔しているように話すミンチャムの目には、悲しそうな色が浮かんでいた。

「……………その他に……父は……何か言っていましたか。」

私の心臓は、何故か少し緊張したように鼓動を速くする。

「……その他……？……その他は、……………ああ……何か夢を見たと言っていたよ。」

夢という単語が聞こえると、私の頭にはある可能性が浮かび上がってくる。

「……会ったばかりの時に、相談するような人がいなかったらしくてね。私に相談してきたんだ。」

最近、不思議な夢ばかりを見ると。」

私は、口元を押さええながらある考えの可能性がどんどん高くなっていくことを感じながら、後を続けるミンチャムの声に耳を傾けた。

「その頃は、まだ若かったし、それに父親を亡くしたばかりだったから、色々気が参っていたんだろう。少し経ったら、もう夢の相談もしてくることもなくなったからね。」

お茶を一口飲む彼を見て、私は自分を落ち着かせるためにティーカップを手取る。中に入っている紅茶を見ても、全然飲む気にならない。

父は……私と同じ……

未来を知っていたのかも知れない。

ミンチャムから聞いたことがどうしても頭に引つかかっていた私は、日がすっかりと落ちて、辺りが真っ暗になった時間帯に、我が家に来ていた。久々に来た我が家は、埃もすっかりと被り、相変わらず荒れ果てたままだ。

杖先を灯しながら父の自室に向かうと、あるはずの扉は存在しておらず、扉であったらう残骸が床に落ちてあった。

中に入り、部屋の中を見回してみると、物書きができる机もふかふかなソファも原型を留めておらず、床にはもう読むことができないような沢山の本が散らばっている。

……何か…あるかも知れない。

もし、父が未来を知っていたという確証が持てたら、何か今後役立つようなものがあるかも知れない。

床に散らばっている破れている本を一冊、一冊見てみても、特にそれに関する本などはなく、机の引き出しも開けてみても、当然何も

入っていないかった。

何も見つけることができないうちは、もう諦めて帰ろうかと立ち上がると突然どこからか声が聞こえてきた。

「貴女、セシルのお嬢さんよね？」

「誰☒」

振り向いても誰もおらず、私は警戒するような辺りを見回す。

「上よ。上を見て」

そう言われ、まさかと思いながらも見上げると天井に描かれている女の人が私に話しかけてきていた。

「何を探しているの？」

優しく問いかけてくる女の人の奥には、女の人が2人と、男の人が1人何やらお茶会をしている。

「…えつと…父の秘密を知ってるもの」

「セシルの？……日記のことかしら？」

そう言う彼女は少し考え込むと、私に話しかけてくる。

「日記なら、暖炉の中よ。」

私は言われた通り、暖炉の前に身を屈めて彼女を見た。

「中つて、本当に中？」

「違う違う。手前のレンガ少し浮いてるでしょ？それを取ってみて」

確かに言われてみれば、浮いている。隙間に指を滑り込ませて、レンガを二個取り除き、ぽっかりと穴が空いたそこには、何も変哲もない本があった。表紙は少し、汚れているし、色も褪せている。

「あつた？」

問いかけてくる彼女に、本を見せると少し興奮したように声を上げた。

「そうよ、それ！良かった。まだ捨ててなかったのね。」

私が本を見ていると、上から彼女が話しかけてくる。

「きつと、それに貴女が知りたいことが書いてあるわよ。」

そう言ってくる彼女は、少し悲しそうだった。

「……貴女、名前は？」

私が見上げながら問いかけると、彼女は笑みを浮かべる。

「…アマータよ。」

アマータ……。

どこかで聞いたことのある名前に私が頭を悩ませていると、アマータは後を続けた。

「貴女のごことはよくセシルが話していたからよく知っているわよ。……ほら、そろそろ行きなさい。」

「……教えてくれて、ありがとう。」

私がお礼を言うと、嬉しそうに笑うアマータは手を振ってくる。

「本を読む時は、明るい所で読むのよ。」

母親みたいなことを言った彼女に手を振り返すと、後ろにいた3人も私の方を見て、微笑んできていた。

……アマータ……3人の女の人に……男の人

どこかで聞いたことがある名前、それと何か引つかかるあの人数。私は少しモヤモヤしながらも、姿くらましをして、魔法省に戻った。

部屋に戻り、椅子に腰掛けた私は、早速持ってきた父の日記に被っていた埃を払い、表紙を開いた。少し、ヨレヨレになっていて少し力を入れただけで破れそうだ。

表紙を開き、最初に目が入った文字は、父の文字というより、何か幼い子供が書いているような字体だった。

今日、不思議な夢を見た。夢とっていいのか分からないほどに、現実的で、まだはつきりと内容も覚えてる。

少し、怖いけど、忘れてはいけないような気がするから、一応書いておくことにするよ。

少し視線が高くて、周りには同じ歳っぽい子たちがいた。前には、帽子を被った女の人が出て、周りのみんなも、そして僕も付いていった。大きな扉の奥に入ると、そこには、赤、緑、青、黄の4色のローブを見に纏った人達がそれぞれの机で固まって、僕たちを歓迎していた。

真ん中の道を通ると、椅子が用意してあった。帽子と羊皮紙を手にとった女の人は、1人ずつ名前を呼びあげて、その子に帽子を被せては、帽子がグリフィンドールとか、ハッフルパフとか叫ぶ。

僕の名前が呼ばれて、椅子に座ると、頭の上の帽子が、スリザリントで大きな声で叫んだ。体が勝手に動くから、どうしようもできないけど、何故かこれが夢じゃないような気がしてならなかった。

緑色のローブを羽織っている人達のところに行くと、歓迎してくれた。

それから、お爺さんみたいな人が話すと、目の前にご飯がいっぱい現れて、僕は肉を食べるんだ。そしたら、目の前にいる男の子が僕に話しかけてきて、笑いかけてくる。僕の名前を知った彼が、トム・マルヴォロ・リドルと名乗ったのを聞いて、僕は目が覚めた。

よく分からない夢だったよ。夢って、起きたら大体薄っすらとしか思い出せないはずなのに、今でもはつきりと覚えているんだ。

……なんか…不気味だ。

文書と日付は幼いというのに、年を表す数字だけ少し整っていて、後から書き込んだように端っこに書いてあった。

この日記を見て、思い出したよ。今は、ホグワーツに入学して、クリスマス休暇で家に帰ってきてる。

日記に書いてある通り、そのまま通りのことが起こったんだ。トム・マールヴォロ・リドルという子もいた。彼とは同じ部屋になった。気が合いそうな人がいて、ほっとしたよ。

トムは、魔法界のことは何も知らないらしい。それなのに、魔法を扱うのが上手いんだ。下手したら、僕より上手なんじゃないかな。彼と、友達になれるといいんだけど。

それから、母さんにペンダントを貰った。クリスマスプレゼントではないらしい。肌身離さず持つとくように言われたんだけど、あんまり乗り気はしない。なんか嫌な感覚しかしないんだよな。このペンダント。

トムのおかげで、テストの点数が割と取れた。彼は凄いや。僕よりも知っていることが多いし、魔法の扱いだつて上手い。テストの点数も高かつたし、少し羨ましいな。

それだというのに、彼はあることに執着しすぎてる。トム曰く、特別な存在でなければいけないだつて。理由は教えてくれなかったけど、とにかく特別な存在になりたいらしい。

僕は、もう勝手に友達だと思つていたし、友達ならそれは僕にとつて特別な存在だと思つていたんだけど、違つたのかな？

それを言つたら、驚いたような表情をしていたから、そろそろ思つたことが口から出てしまう癖を直さないと。

1939 / 6

今のところ、日記に書いてあることで未来のことを書いてあるのは、最初のページだけでその他は、主にあの人のことばかり書いていた。自慢するように、色々と、沢山のことが綴られていた。それだというのに、次のページをめくると、今まではぎつしりと書かれていたというのに、このページだけ数行しか書かれていなかった。

トムに純血主義のことを聞かれた。だから、今まで通り変わらず、
教えた。もしかすると、これが間違いだったのかもしれない。

それまでは、純血かどうか聞かれもしなかったのに、彼は血のこ
を気にしだした。そして最近言ってくるんだ。穢れた血は、ホグワー
ツで学習する権利など必要ないんじゃないか、魔力を持っていないマ
グルなど、この世に必要なのだろうか、って。僕が知ってるトムじゃ
ない。

ある噂が飛び込んできた。トムが裏で自分の友達をいのように利
用しているらしい。でも、僕は利用されていけない。きつと嘘に決まっ
てる。……そう、言い切りたいのに、否定できない自分がいて、凄く
苦しいんだ。

それまで、毎日欠かさず年月を書いていたというのに、ここでは、書
く余裕がなかったのか、どこにも書かれていなかった。

何ページか飛ばして、書かれていた文章はパツと見ただけでも何か
あったと分かるほど乱れていて、戸惑っているのが私でも分かる。

またあの不思議な夢を見た。今度はトムが人を殺す夢だ。あの時と感覚が似ている。

立派な屋敷で人を殺していた。3人の人に向かって、杖を向けていたんだ。でもなぜかその杖は彼のものではなかった。

緑色の閃光が目の前が眩むと、僕は手に新聞を持っていた。どうしてだか、それが予言者新聞ではなく、マグルの新聞だと分かっていた。新聞に書かれてあつたことは、少し曖昧で覚えてないが、頭にトムが自分の家族を殺したということが浮かんできた。

そこで、夢は終わった。分からないんだ。これが夢なのか、それとも違うのか、分からない。だって、これが本当に起こることだと考えたくても、未来の出来事を夢で見るなんて普通じゃない。

僕は、どうしたらいい？誰かに相談できる人なんて、いない。……未来が見えたなんて、誰が信じてくれるっていうんだ。

混乱し、苦しみ悩みながら、父は1人この日記を書いたのだろうか。

父は、どうやら本当に未来で起こることを夢として見ていたらしい。でも、私とはちよつと違う。

この日記を見る限り、父は、未来の自分の視点の夢を見ているらしいし、それに比べ私が、この世界の未来を知ったのは、前世の自分の記憶を思い出したからだ。それに父が断片的なものに比べて、私はほとんど全てのことを思い出している。父は未来を見たという感覚なのに、私は思い出したという感覚なのだ。

変えたかったんだ。もし、あの時見た夢が本当に、未来に起こる出来事だとしたら、トムが家族を殺してしまう。それだけは止めたかった。止めなければいけないと思った。

トムが家族を殺してしまう未来を変えたかったただけなのに、僕が勇気がないせいで結局何も出来なかった。ただ、目の前で見たただけだ。トムが家族を殺す瞬間を目にしたら足がすくんで動かなかったんだ。結局、間に合わなかった。

僕がいるのに気づいた彼は、酷く驚いていた。ただ何かの間違いで殺してしまったんだろうと、彼の本心からではなく衝動的にやってしまったんだろうと、：藁にすぎる思いでトムに問いただした。でも、それが間違いだったらしい。彼は僕の思っているような人じゃなかった。負けず嫌いで、誰よりも努力して、僕の自慢できる友達だった。羨ましくて、彼みたいになりたいと何度も思ったこともある。彼のことだったら何でも理解しているつもりだった。

でも、知らない。あんな冷たい笑みを浮かべるトムなど知らない。見たことない。

僕だけだったのかも知れない。友達だと思っていたのは、きっと僕だけだったんだ。

間に合っていれば、勇気がいれば、こんな思いせずに済んだのかも知れない。僕が知っているトムを殺したのは、きっと僕自身だ。

父は、新聞を見て、あの人が家族を殺したのを知ったと言っていたのに、ここには人を殺す瞬間を見たと言っている。となると、父は私に嘘をついたということになる。

もう、この先を見てはいけないような気がしてならなかったが、ページをめくる手は止まることはなかった。

母に言われた。いつか貰ったあのペンダントは、代々受け継がれているものらしい。身近な人の死を見れば、時を止められるようになり、僕が死ねば過去に戻れると教えてくれた。

それに、このペンダント自身が次の所有者を決めるらしいのだが、母によると、少なくとも僕がホグワーツに入学する前にはもうペンダントが選んでいたらしい。母は、幼い僕に渡すのが怖くて、どうしても渡せなかったと言っていた。

…きつと僕が時々未来が見えるのは、ペンダントが関係している。あの不思議な夢を見るのは、いつも決まってペンダントが手元にならない時だった。

でも母は、未来が見えるなんて一度も言わなかった。やっぱり、僕の勘違いなのかも知れない。

その後は、白紙が続いていて、もう書かれていないのかと思いがながらもページをめくり続けると、綺麗な字体の文章が簡単にメモるよう

に綴られていた。

父が死んだ。僕が殺したと言っても間違いじゃない。

エドが死ぬ夢を見たんだ。もうあの時はこれが夢で終わらないことは理解していた。エドが死ぬ未来が来ると知って、阻止しないわけがない。

エドの代わりに父が死んだ。分からないことがたくさんあるから、今混乱している。時を止められたんだ。身近な人の死を見ていないというのに、僕は時間を止めてエドを死なせずに済んだ。でも、その結果がこれだ。父が死んで、僕が当主にならないといけない。悲しみに暮れている母や、セリーヌ、エドを見ていると苦しくてたまらない。正しかったのだろうか。僕は一体どうしたらよかったんだろう。

あと一つ、身近な人の死というのは、本当にその人の心臓が止まり、身体が冷たくなることだけを言っていたのだろうか。

……父は…ペンダントを使っていた。それに最後の文章の意味は、どういった意味だろう。

私は、文章をなぞりながら何度も読み返してみると、ある文章が頭に浮かんできた。

【僕が知っているトムを殺したのは、きっと僕自身だ。】

まさか、あの人が家族を殺す瞬間を見た父の目には、自分の知っている、トム・リドルという人物が死んでしまったように映ったのだろうか。

きっと、父にとって家族以外にもあの人は身近な人だった。

考えられることなんてこれぐらいだ。

考えを巡らせながら、次のページをめくろうとした時だった。本の1番下に、少し掠れているインクで小さく何か書かれてあることに気がついた。私は目を凝らしながら、目で追っていく。

誰か、助けて。

その文字を見た瞬間に、何故か一気に怖くなり、私は日記から視線を逸らす。私は文字を見ないように次のページをめくった。

……怖かった。

鳥肌が立つほど怖くて、それと同時に何故か心臓がぎゅつと苦しくなった。

その後のページには、自分の友人がヴォルデモートという名で、罪のない人達を殺し、魔法界を支配しようとする夢を見たこと、居ても立っても居られずに、魔法大臣に頼みに行ったが相手にされなかった

こと、ペンダントを使うことが怖くて、未来が見えても動く勇気がないことなど、父の葛藤している気持ちがつらつらと文章ととして、書き出されていた。

読み進めていると、上から下までぎつしりと文字で埋め尽くされているページを見つけて、目で追っていると私の名前が書かれていることに気づいた。

ノアや、レイラが産まれて今のところ何事もなく過ごしている。子供達がいるおかげなのか、最近あのような夢を見ることもなくなつた。毎日が楽しくて、幸せすぎて時々不安になる。そういえば、レイラが異常なほど箒に関心を示していた。まだ、やっと歩き出したばかりだというのに、よろよろしながら跨ぎながら家中を歩き回っていた。

体を支えながら箒に乗せて、少し浮かしてあげると上機嫌になっていたよ。

ノアは、最近魔法動物に興味があるみたいだ。毎日、本に釘付けになっている。時々、レイラに自分が覚えたことを教えているよ。レイラは一応、首は振ってるけど、本当に分かっているかどうかは分からないな。

そういえば、最近セリーヌとエドが遊びに来た。ノアは、セリーヌにばかり話しかけているし、レイラはエドにひっついてばかりだ。

本当にレイラはエドが大好きらしい。赤ん坊の時に誰が抱いても泣き止まなかったというのに、エドが抱いた瞬間ぴたって泣き止んだ時のことを思い出したよ。

最近、エドもよく笑うようになって嬉しい。

…どうか…あの2人にペンダントが回らないでくれ。こんな思いをするのは、私だけでいい。

その後の日記は、毎日私やノアのことばかりで、ぎっしりと書かれていた。

ページをめくっては、何か今後に役立つものはないかと必死に文章を目で追っていると、突然、白紙のページが現れる。今までの日記を見ていても分かるように、時々白紙のページを挟んでいたから特に何も考えずにページをめくると、まず最初に目に入ったのは手紙のように宛名と書いている文字だった。

明らかに、今までの書き方が違うから少し読むことを躊躇ったが、私は意を決して読み進めた。

今、これを読んでいる貴方へ

これを読んでいるということは、貴方がきつとペンダントを持っているのでしよう。

一体貴方がペンダントのことについて知っているかは分かりませんが、一応私が知っていることと、仮説を書き出しておきます。少しでも、貴方の力になれば幸いです。

ペンダントは、意思を持っていると私は考えています。人間は、人に必要とされたい生き物です。それと全く同じで、このペンダントも自分を必要としてくれる人を所有者として選ぶのでしよう。

このペンダントは死と深い関係があるようです。時を止められるようになるのは、身近な人の死、過去に戻るようになるのは、所有者が死ななければなりません。

どうして、死にそんなにもこだわっているのかは分かりませんが、私はこのペンダントに執着させるためにそういう仕組みになっているのではないかと思っています。

身近な人の死を目の前にし、時間を止めることができるというのは、きつと人は、もう二度とあんな光景を目の当たりにしないように、死ぬ運命の人物を救うでしょう。自分が死んで、過去に戻れるというのなら、尚更です。過去に戻れるというのなら、身近な人の死さえも、防げるかも知れない。そう思えば、信頼できる人に頼んで自分の命を犠牲にする人もいるでしょう。別に人ではなく、屋敷しもべ妖精でもいいのですから。

突然ですが、貴方は未来が見えることはありますか？夢のようなんだけど、夢ではないようなそんな不思議な夢は見たことはありますか？あるというのなら、それはきつとこの先起こる出来事です。

未来が見えるのも、きつとペンダントが関係していると思っています。きつと、その人にとって変えたい未来を見せるのだと思います。例えば、自分の命を犠牲にしても守りたい大切な人が殺されてしまう未来を見せれば、人はペンダントを使って救おうとする。その時の所有者、一人一人に合わせて、見せる未来も違うかも知れません。自分を使ってくれるように、必要としてくれるようにと、その人にとって辛い未来を見せる。

ただ、1つ引つかかるのは、前の所有者である母はそんなことは一言も言わなかったことです。未来が見えるということは言いませんでしたし、最低限のことだけを教えてくれました。

考えられるのは、2つです。1つは、未来が見えることを黙っていたか、そしてもう1つは、未来を見たということを忘れたか。

私は後者だと思っています。前者は、どう考えても、黙っている理由が思いつきませんし、未来を見たということのを忘れたというのが何もかもが1番しっくりくるのです。

所有者が変わる際に、前の所有者の記憶は消えてしまうのかも知れません。未来を見たということや、このペンダントに関することなど、覚えているのはペンダントの使い方のみ。

でも、何故ペンダントの壊し方だけは私のところまで伝わってきたのかが疑問になります。自分を破壊させる方法など、1番最初に消えてしまう気がするので、もしかすると本当に、単なる言い伝えなのかも知れません。

私が知っていることは、これ以上ありません。本当に記憶がなくなるのか、これを確かめるために私はこれを書いています。

次の人にペンダントが回っても、私が覚えていたら、この日記は燃やします。しかし、まだ貴方の手にあるというのなら、私は未来を見たことも、ペンダントに関することも忘れてしまっていると考えてください。

この日記が、暖炉下から出てきたら、私はこのことを書いたことさえも忘れていくということでしょう。

最後に、貴方がどこのどなたかは分かりませんが、出来ればペンダントを終わらせてください。私には、息子と娘がいます。子供達には回したくないのです。未来が見えて、良いことなど、1つもありません。辛く、苦しい気持ちをするのは私だけで十分なのです。

もし、今これを見ているのが、私の子供達だったなら、今すぐに誰でもいいからペンダントを使う前に不思議な夢を見たと、未来を見たこと打ち明けて。

信じてもらえないかも知れないという気持ちも、話す勇気がどれほどのものなのかも、私は知っている。でも、もしかしたらそのおかげで忘れていく私が思い出すかも知れない。

この負の連鎖を断ち切れるかも知れない。

君達を救えるかも知れない。

もし、どうしても言える勇気がないというのなら、覚えていて。どんな時も私は、お前達の味方だ。決して、一人で抱え込む必要がないことも覚えていてくれ。

私は、いつでもお前達が幸せに過ごせる事だけを祈ってるよ。

セシル・ヘルキャット

「…遅すぎるよ……」

私の口からは、そんな言葉がこぼれ落ちる。

まだ、父が生きている頃に、これを見つけていたらどんなに良かったのだろう。

私だけではなかったんだ。未来を知っていたのは、私だけじゃなかった。

私は、日記を閉じて両手で顔を隠した。

………ということは…私が記憶を思い出したのは、ペンダントが私

を次の所有者として選んだから。

この日記が、私の手元にあるということは、父の記憶は消えたということだろう。

そんなことを考えても、今の私には後悔が襲いかかってくる。

……ペンダントのせいで……思い出したのか。

私は、首からかけているペンダントを取り出して、力一杯に握りしめる。

………自分を必要とされたいがために、私に思い出させた。………意思があるというのなら、きつといい気味になっていたんだろう。

悲しいという感情よりも、今手に持っているペンダントが腹ただしく思えてきた私は、ペンダントに視線を移した。

………そんなに必要とされたいのなら、利用してあげるわよ。

どうせ、ここまでできたんだ。セブルスを救って、ペンダントを終わらせる。

こんなペンダントに振り回されるのは、私が最後で十分だ。

でも、こんなにも過去に戻りたいと思ったのは、初めてかも知れない。

アズカバンの囚人 プロローグ

小さな英雄が闇の帝王を倒してから一年とまた一年と時は過ぎていった。

私は相変わらず、魔法省で雑用係として尻拭いをしている。変わったことをしたことといえば、あの後父の日記を焼いたことと、ダンブルドアとお茶をしたことぐらいで他は特に何も無い。

闇の帝王が倒れて年月が経つにつれて、私に対する噂も消えていったようで、あの変な視線を感じることもなくなった。

その代わりに、あんなに家族を死喰い人に殺されて可哀想な少女と思われていたのが嘘のように、役職につくわけもなく、ただふらふらと居候しているような私は今ではすっかり変人として浮きまくっていた。

全員がそういう態度をするわけじゃない。例えば、アーサー・ウィーズリーのような人の良い人達は愛想よく接してくれている。

学生の頃と同じ立場だといえば、分かりやすいと思う。

しょうがないことだが、どうも落ち着けず、今までは魔法省でも寝泊まりをしていたが、今では、レギュラスがいる部屋に帰ることが多くなっている。身の回りは今までと変わらずアウラがこなしていてくれているから、特に不自由はない。

ただ、そろそろ役職が欲しいと思っている。

だってあれから私はずっと皆の尻拭いや、人手の足りない部署を手伝ったりと仕事内容は変わりなかった。

正直言つて、魔法大臣の秘書的立場に立てれば今後色々動きやすいのだが……………

魔法大臣の秘書になれなんて言われたら、嬉しいんだけど……………
望みの薄いことを思いながら、私は期待するしかなかった。

私は少しため息をつきながら、魔法省の中を早歩きである部署に向かっていった。地下二階に下りて、その階の一番奥、ここまで通る人などごく僅かで、他の部署と明らかに孤立している。

『マグル製品不正使用取締局』

と書かれたぼろぼろの札がかかってある扉を開けると、もう扉は外れかけていて嫌な音を立てた。

部屋に入って一番最初の印象は、散らかった物置部屋だと思った。あちらこちらに、マグルの製品が散らばり、山積みになった羊皮紙ができていて中には山が崩れているものもある。籠の中に大量の手紙が無謀座に重ねてある。

「…失礼します。…………上から言われて手伝いに来ました」

少し埃っぽい空気で咳き込みそうになりながらも、中に入ると年長いた男の人が目に入った。マグル製品不正使用取締局の貴重な局員の一人であるパーキンスだ。

「ああ…何度もすいません……………」

パーキンスは、私に申し訳なきそうに言ってくる。

「…いえ、これが私の仕事なので。気にしないでください。」

私は慣れたように積み上がった羊皮紙を机の端に移動させ、一枚の羊皮紙に向き合った。もうここに手伝いとして派遣されるのは、一度のことではないので慣れたもんだ。

「……ところで、ウィーズリーさんは？」

「……ああ……何やら息子さんが空飛ぶ車を運転したのがマグル達に見られたようで、上から呼び出されていますよ」

「……そうなんですか……」

私はパーキンスからの言葉を聞いて素っ気なく返し、羊皮紙に視線を戻した。

あれからどれほど時間が経ったかは分からないが、私が羊皮紙を10枚ほど片付け終わった時に後ろのはずれかかっている扉が開く音がした。

この扉を開く人は決まっているから、大体は誰が入ってきたかは想像できる。振り向くと案の定アーサー・ウィーズリーが入ってきた。

少しげっそりとしている様子で、疲れたように部屋に入ってくるのと、私に笑顔を向けて話しかけてくる。

「すいません……何度も手伝ってもらって」

「……いえ、お気になさらず……それよりも大丈夫でしたか？呼び出されたのでしょうか？」

「……大丈夫です。……50ガリオンの罰金と注意喚起で終わりましたし、何とか辞職には持つていかれなかったので……」

アーサーは、思い出したように苦笑いを浮かべた。

「……今、職を失っては辛いですがものね……子供が7人でしたっけ？」

「ええ……今年は末っ子もホグワーツに入学しましてね、グリフィンドールだったと聞いた時は嬉しかったですよ」

ジニーのことを思いながら話すアーサーは、満面の笑みを浮かべていた。本当に良い父親だと感じて私は少し笑みが零れおちる。

「そうですか、それは良かったですね。」

私は出来るだけ自然な笑みを浮かべて、羊皮紙に向き直った。

「……そういえば、あの子もホグワーツにいるんですっけ？」

私が思い出したように言うと、アーサーが聞き返してくる。

「あの子って？」

「……生き残った男の子」

「ああ……ハリーのことですか。あの子は、去年ホグワーツに入学しましたよ。グリフィードールだったと息子に聞きました。」

「会ったことがあるんですか？」

私は、何も知らないという風な雰囲気を出しながらアーサーを見つめた。

「ええ、息子の友人なもので、今年の長期休暇に何日かうちに泊まりにきていましたね」

「……へえ……私も一度は会ってみたいですよ」

そんなことをポロリと口に出しながら、羽根ペンを動かす手を見ながら後に続けた。

……どうせならまだ誰も死なない内に

アーサーがこつちを見てきたような気がしたが私は特に気にする事なく、手を動かし続けた。まさか、心の中で思ったことが分かるはずがないし、きっと私の気のせいだったんだろう。

こんなにも時間が経つのが早く感じるのは年のせいなのか、それとも単なる感覚の問題なのか分からないが、気づけばもう私が知っているこの世界の物語の一部は始まっていた。

……もう……始まったんだ……

そう思うと、緊張したように心臓の鼓動がいつもより耳元で聞こえる気がした。

1 現実を夢に

積み上げられている羊皮紙を横目に、ひとりでに忙しそうに動く羽根ペンから手元の日刊予言者新聞に視線を移した。そこには少し小さめだが、ガリオンくじグランプリの当選者の名前と本人のメッセージが一言書かれてある。

【当選者、アーサー・ウィーズリー氏

賞金は家族を連れて、エジプト旅行の資金に使うと語った。】

読み終わった新聞をたたんで、机の上に置くと、丁度マグル製品不正常使用取締局に用があつたことを思い出した私は、羊皮紙の束を抱えて部屋を出た。

もうこんな時間が経てば、私の存在などないに等しく、魔法省に居てもただ羊皮紙を眺める日々。一言も声を出さないといい日もざらではなく、正直言ってここにいる意味も分からなくなってきた。る。

そんな私を気にかけてくれているのが、アーサーだった。社交辞令のように話していたのは最初だけで、今では下の名前で呼ぶほど仲良くなっている。

エレベーターに乗り、一番奥の部屋に向かう。字が消えかかっている札は相変わらず今にも外れそうで、扉を開けば嫌な音を立てながら少し埃が舞った。

パーキンスと話しかけながら、皺くちやなローブを羽織っていたアーサーは、私の姿を見ると優しく微笑みながら、話しかける。

「ああ、レイラ。今日は一体どうしたんだい？」

「これを届けに来ました。」

私が持っていた羊皮紙の束に視線を移したアーサーは、少し申し訳なそうにお礼を言ってくる。彼からは、敬語じゃなくてもいいと言わ

れたが、歳上の相手にそんな崩した口調で話しかけられない。

「ありがとう。その机の上にも置いてくれない。」

そうは言われても、私の近くにある机には羊皮紙を置けるスペースなどなく、大量の手紙や、羊皮紙、更にはマグル達が使っている道具かは分からないが、見たことのないものが転がっている。

懐から杖を取り出して、一振りしてしまえば散らかっていた机の上は、羊皮紙を置けるスペースが空いた。

「そういえば、ガリオンくじ当たったんですね？新聞見ましたよ。」

顔を上げれば、嬉しそうな表情を浮かべているアーサーが視界に入った。

「そうなんだよ。いや、こんなこと本当にあるんだね。」

「エジプト旅行でしたっけ？」

少し部屋の奥に入り、机の上にあつた取っ手のようなものが上に乗っかっている見たことのないものを少し触りながら問いかける。

「長男のビルがエジプトで呪い破りの仕事をしているからね。」

子供達が喜ぶ姿を見るだけで、私まで嬉しくなるよ。」

彼の話聞きながら、私は目の前にある物の、取っ手の部分を握り取ってみたが、一体何をする為のものなのか全く予想がつかない。

「最近、ジョージとフレッドの悪戯が少しやんちゃってきて、そこが少し悩んでいるところなんだ。2人の悪戯にはしよっちゅうロンが巻き込まれているんだが、…全く本当に手がつけられない。」

旅行とは関係ないことを話し出したアーサーは、そう言いながらもどこか嬉しそうだった。きっと自分の子供の成長が嬉しくてたまらないのだろう。

「それは、奥さんも大変でしょうね。今は丁度、学校も休みですから。」
「そりゃあ、毎日モリーの怒鳴り声が家中に響いてるよ。彼女の怒鳴り声が聞こえない日なんてないな。」

笑いながら話す彼を見ると、ついつい私まで笑みがこぼれる。私が笑いながら持っていた取っ手のようなものを元の位置に戻すと、アーサーが話しかけてきた。

「それは、電話という物だよ。」

どうやら、私が興味を持ったことが分かっただらしく、近づいてきたアーサーは軽々とそれを持ち上げる。

「…電話？一体何をやるものですか？」

少し懐かしい言葉の響きに、頭を悩ませながら問いかけると、彼はいかにも自分が開発したように自慢げに話し出す。

「マグルが連絡手段として、使っているものなんだ。この紐のような先についているこれをコンセントというものに差し込んで使うらしい。」

アーサーは紐の先にある凸凹したものを握りながら、説明する。

「どうやら数字の組み合わせの違いによって、色々な人と連絡する。凄いのはこのからなんだ。これを耳に当てて何と相手の声を聞きながら、会話をすることができる。」

さつきまであんなに家族の話をしていたというのに、今はお気に入りのおもちやを手に入れた少年のように、目を輝かせながら得意げに話を続ける。

「凄いと思わないか？こんな小さな箱のようなもので会話をすることができるんだ。マグルが考えることには本当にいつも驚かされる。」

確かに凄いとは思うが、どちらかというど彼の勢いに押されて、そっちの方に驚いている。そんな私に気づくこともなく、アーサーは熱弁する口を止まらせることはしなかった。

「一度使ってみたいんだが、コンセントというものはないから、マグルの家に行って貸してもらえないだろうか」

笑いながら話すアーサーは、多分冗談で言っているのだろうが、彼だと本当にやってしまいそうで少し怖い。というより、私は完全に彼のマグルに対する好奇心を簡単に見ていた。まさか、こんなにも熱中していたとは思わなかった。

「……時間は大丈夫ですか？……外に出なければいけなかったのは……」

申し訳なさそうに聞こえてきた小さな声は、パーキンスのもので、彼の声を聞いた瞬間、アーサーは何かを思い出したように凄い勢いで身支度を済ませた。

「すまない。レイラ、この話はゆっくり別の日にしよう。…そうだ、今度我が家に遊びに来ないか？一度、モリーや子供達に紹介してたいんだが…ああ勿論乗り気じゃなかったら…」

「もちろん、ご家族が良いというのなら、喜んで」

振り返りながら早口で問いかけてくるアーサーに返すと、彼の頬が安心したように綻んであつという間に部屋を出て行った。

アーサーが居なくなつたこの部屋には、パーキンスと私の2人しかおらず、羽根ペンが動く音しか響いていない。あんなに話し声で溢れかえっていたのが不思議に思えるぐらいに静まり返っている。

パーキンスと2人つきりで話したことがあまりない私と彼の間には、きつと誰が見ても気まずい雰囲気の流れていることは目に見えて分かるだろう。

「……………あと、どれぐらい終わつてないんですか？」

恐る恐る彼に話しかけると、顔を上げたパーキンスは部屋をぐるりと見回した。私に視線を移す、パーキンスは困つたように眉を下げながら口を開く。

「……………実は…これ、全部なんです。」

彼が申し訳なさそうに言つた全部というのは、大量の羊皮紙や手紙でできた山々のことを言っているのだろう。まあ、よくよく考えてみれば、2人だけしかいない部署にこれだけの羊皮紙が送られてくるのもおかしい話だ。

私は背もたれのない椅子に座り、手をつけていなさそうな羊皮紙の山から1枚引つ張り抜いた。

「手伝いますよ。」

「そんな、悪いですよ。」

私が強引に引つ張り抜いたせいで、羊皮紙の束が勢いよく崩れ、その音で彼の声が少し聞こえにくかった。

「大丈夫ですよ。私、丁度暇をしていたんです。…それにこの量と一人で向き合っていると気がおかしくなりますよ。」

パーキンスの顔も見ずに、近くあつた羽根ペンを勝手に借り、ひとりでに動く羽根ペンを横目に私もペンを走らせる。

本当に今、実際に私が知っている未来が訪れているのだろうか。

ふとそんなことが頭をよぎり、私は羽根ペンを動かす手を止めた。幸い、パーキンスからは、羊皮紙の山で見えない角度にいるから様子がおかしいことも気づいていないだろう。

一度思ってしまうと次から次へと、色々なことが浮かび上がってきた。

本当に、ハリーが賢者の石をあの人に渡すのを防ぎ、去年トム・リドルの日記からジニーを救ったのだろうか。

というか、本当にハリー・ポッターという少年はホグワーツに通っているのかな……

彼を見たのは赤ん坊の時だけだからなのか、実際あまり実感がないのだ。最近、エバンズそっくりの瞳を持った、ポッターにそっくりな男の子など本当に存在しているのかどうかも怪しいと思っっているほどだ。もしかすると、そんなにポッターに似ていないかも知れないし、私の知っているような彼ではないかも知れない。

最近時々思うことがある。

随分と昔に見た未来の出来事も、今まで起きたことも全て夢かもしれない。今この瞬間も、単なる私の頭の中で想像の世界のかもしれない。

そんなことを思っても、何も解決などされないのは分かっている。

夢ではないこともしつかりと理解しているつもりだ。その証拠に、よく今まで殺した人達の顔や、声、その時の感覚が鮮明に蘇ってくる時がある。こんなのを思い出すということは、きちんと現実だと頭では分かっていることだということにしている。

私は、文字が並んだ羊皮紙を眺めながら静かに羽根ペンを置いた。
……でも…何が…おかしい…

私が今見ている世界は、何故か色がない。別にモノクロに見えるという訳ではない。何か失ってしまったような、噛み合わない歯車がそのまま回り続けているような何か小さな違和感がある。

私は一体……何を…失くしたのだろう。

少し不安になった気持ちをかき消すように、羽根ペンを握り直して、羊皮紙の上を滑らした。

こんな、羊皮紙ばかりを見ているからそう感じてしまっただけだと言いつても、胸に大きな穴が空いたような空虚感は誤魔化すことができなかった。

いつも通り日が昇り、外が明るくなると外からはマグルが仕事へ行く足音や、車のエンジン音が聞こえてくる。

私は、家のソファアに深く腰掛けアウラが淹れてくれたコーヒーを飲むながら日刊予言者新聞に目を通していた。

いつもは、ただ細かいところなんて見ずに新聞を閉じるのだが、今日だけは写真と印刷されている文字を見て、視線は一点に集中した。

【シリウス・ブラック、アズカバンを脱獄】

写真の中のブラックは、こちらに何か叫ぶように大きく口を開けている。

……あんなイケメンがこうなるとは…

顔だけは良かったのに、今じゃすっかりと髭も髪も伸びておじさんになっている。

新聞を閉じて、机の上に置くと起きてきたレギュラスが、目元を擦りながら、部屋に入ってくるのが見えた。

「おはようございます。相変わらず、朝早いですね」

レギュラスは、眠たそうに欠伸をしながらソファアに腰掛ける。

「今日は、仕事が忙しくなるからね。」

彼は日刊予言者新聞を手にとると、声をこぼした。

「…ああ……もうですか……早いですね。時間が経つのも」

「…きつと歳のせいよ。」

私の言葉を聞いたレギュラスは、笑いながら新聞に目を通していきる。

「……………いよいよ……ですね……」

静かに言ったレギュラスの声が、部屋に響くと静まり返り、空気が重くなったのを感じた。

「……………そうね。」

ハリーが例のあの人を倒したあの日から、今日まで本当にあつという間だった。今があまりに平和なものだから、正直あの人が蘇るなんて想像もつかない。

あの人が蘇ったら、私は死喰い人として過ごさなければならぬ。

また人を殺したり、拷問しないといけない日々がくるのだろうか。そう思えば、私に助けを求めてくる若い男の表情や、もがき苦しむ女の悲痛の叫び声が聞こえた気がした。

私は後、何人の人間を殺さなければならぬ羽目になるのだろうか。人を殺したことを後悔しているかと聞かれても、私は直ぐに後悔していないと答えられる自信がある。

……人を殺しても何も思わない私を見たら、彼は一体何と思うのかな。

セブルスの顔が浮かんだ私は、無意識に掻き消そうと窓の外に視線を移した。

どこまでも青く、晴れ渡っている空を鳥が自由に羽ばたいている姿を見ても、脳裏に浮かんだセブルスの姿を掻き消すどころか、彼のことしか考えられなくなる。

今……何事もなく平和でも……彼はずっと苦しんでいる。ずっとひとりで……今この時も、

「どうかしましたか？」

声が聞こえた私は我に返り、彼の方を向くと新聞を手を持ったまま、不思議そうに私を見つめていたレギュラスと目が合った。

「……いや、少し眠くなっただけよ。」

さつきまで考えていたことを誤魔化すために、口から出た言葉は分かりやすいものだったが、今の私にはそれ以外の嘘は思いつかない。

「少し、寝てからでも大丈夫だと思いますよ。……少しは寝てみたらどうですか？」

寝不足だと心配してくれているのか、レギュラスは私に提案してくる。でも私は無理矢理、目を閉じてても眠れないことはもう経験済みだった。

「大丈夫、どうせ私は雑用係なんだから。仮眠する時間なんて沢山あるし。それに羊皮紙って、眺めていたら眠たくなるでしょ？」

私は重い腰を上げて、ソファーに掛けていたローブを手に取る。皺くちやだったはずのローブは見違えるように皺一つなく、アウラが洗濯しといてくれたことが大体予想がついた。

ローブを羽織って、杖を持っているか確認するためにポケットに手を入れる。

「行ってらっしゃいませ。お嬢様。」

キッチンの部屋から出てきたアウラが、朝食を手に持ちながら私に声を掛けてきた。適当に一言返しながら、杖を持っていることを確認できた私が正面を向くと、新聞を見ていたはずのレギュラスが私の方を見てきていた。私を見送るように笑いかけてきた彼の顔が歪むと、足が宙に浮いた。

私の予想は当たり、案の定魔法省はいつも以上に忙しかった。

凶悪犯が逃げ出したとなると、やはり色々と対応に追われるらしく、私の元には、ブラックの対応に追われている人たちの仕事が終わってきた。どうせなら、ブラックに関する仕事の方が何となく飽きずに働けそうだが、何せ私は雑用係なのでそんな仕事がまわってくる訳がない。

大量の羊皮紙を片付けたり、魔法省に届いた手紙に返事を書いたり、ほぼいつもと何も変わらない仕事を淡々とこなす。

あんなにひと山できそうなほどの羊皮紙が、もう残り僅かなことに気づいて、私は一息つこうと紅茶を淹れるために立ち上がった。杖を一振りしてしまえば、もちろんわざわざ立ち上がりなくて済むのだが、魔法を使い淹れたお茶よりも、自分で淹れたお茶の方が美味しいのだ。そう感じるのは、きつと気のせいだろう。

葉にお湯を注いだ瞬間、紅茶のいい香りがするのがたまらなく好きで、最近ではお茶が淹れるのが上手いアウラに教えてもらっているほどだ。見よう見まねで、やってみるものの中々うまくいかないが、最近やっと近づいたような気がする。

私は杖を一振りして散らかっている羊皮紙を一つにまとめ、机の上を片付けると淹れたばかりの紅茶と、クッキーが入った瓶を置いた。

まだ淹れたばかりの温かい紅茶を一口飲めば、優しく、甘い香りが口いっぱい広がった。今回は中々上手く淹れたらしい。

少し嬉しくなりながらクッキーを食べようと蓋に手をかけた時、紙飛行機が部屋の中に入ってきたのが視界に入った。手を伸ばして掴み、紙飛行機を開こうと手をかける。これが来て良かったことなど一度もなく、少し開くのを躊躇ったが急用の用事だったら、後から色々厄介だ。

案の定、書かれていた内容は仕事のこと、業務的な言葉が並んでいた。

【緊急業務

直ちに、忘却術士本部に出向き、業務を全うするように。」

これまた面倒くさい仕事があったものだ。

私は紙飛行機に書かれてある文字を見ながら、溜息をつく。

私はクッキーが食べられないことになりながら、ゆつくりと立ち上がって、脱ぎ捨てていたローブを身に纏う。

あんなに美味しく紅茶を淹れたというのに、帰ってきたらきつと冷めているのだろう。そんなことが頭に浮かべば、また溜息が出てきた。

雲ひとつなく、晴れていたというのに今ではすっかりいつ雨が降り出してもおかしくないような黒く厚い雲が空を覆っている。

こういう時こそ、のんびりとお茶をしながら仕事に取り組みたいのだが、私は今マグルの記憶を消すよう命じられていた。

何やら、パンパンに膨らんだ1人のマグルが宙に浮く姿を数人目撃してしまつたらしい。

どうしても人手が足りなかつたらしく、私が呼び出されたと役員の人から説明された。

事前に知らされていたマグルの記憶を無事何事もなく消した私は、絶対この出来事を招いたであろうハリーの顔を浮かべながら溜息をついた。

今年ホグワーツに行けばいいのだが、タイミングが分からない。

…やっぱり、教員になるしかないのだろうか。

この先のことが思いやられ、私は肩を落としながら魔法省に戻つた。

マグルの記憶を消したあの日から数日が経つた頃、いつものように尻拭いのような仕事をしていた私の元に紙飛行機が飛んできた。

また、どこかが人手が足りないのかと思いついてみると、思いがけないことが書いてあり、つついっ落としてしまいそうになる。

紙飛行機には、魔法大臣室に来るようにと、コーネリウス・ファツ

ジからの手紙だった。彼とは一度も話したこともないし、関わったことも勿論ない。

そんな魔法大臣から直々の呼び出しとは、一体どんな話なのだろう。

私は少し緊張しながらも、魔法大臣室に向かった。

地下一階にある魔法大臣室に入るとまず目に入ってきたのは、高価そうな椅子やテーブルだった。客人用かは分からないが、向かい合って置いてあるソファは座り心地が良さそうだ。

「…大臣、私に何か用でしょうか？」

目の前に座っているファッジに問うと、彼はゆっくりと口を開いた。

「シリウス・ブラックが脱獄したことは知っているね？」

「勿論です。」

私がすぐに返すと、彼はゆっくりとその後を続けた。

「…それで、生徒達の安全を確保する為にホグワーツにディメンターを配置することにしたんだが、一応役員も配属させることに決定した。……そうなる今、魔法省で手が空いているのは君ぐらいなんだ」

……手が空いている…？

何を馬鹿げたことを言っているんだろう。

そんなの私が暇だと言っているようにしか聞こえない。こっちは、回ってくる仕事に毎日追われているというのに。

「…なるほど、雑用係である私に押し付けようということですか。」

私が不機嫌になったのを察して、ファッジはすぐにフォローするように口を挟んでくる。

「勿論、君の実力も認めているからこそ頼んでいるんだ。…ディメンターだけで充分だと思うが、もしもそれを潜られた時、中に君が居れば安心するだろ？」

これが、うわべだけの言葉だということは理解している。

でも、よく考えてみれば、魔法省の人間という立場でホグワーツに行けるならば、ラッキーかもしれない。…それに、私が知っている記憶ではなかった対策をしようとしていることが引つかかる。そんなに大きく変わっているという事ではないが、もし私以外の人間が行くとなったら話は別だろう。それだと、色々と後から大変になる。別に元に戻そうとはしなくてもいいとは思いますが、変わりすぎるのも私が困る。

物語が私を巻き込んでくれるというのなら、今は流れに身を任せた方がいいのかもしれない。

さつきまで少し苛立っていた気持ちは、もうすっかりと消え失せて、確認するように言葉にした。

「…では、生徒の安全を守り、シリウス・ブラックを拘束するのが私の仕事だということですか?」

「そういうことだ」

頷くファツジを見て、私は少し違和感を覚えながらも、とりあえず今はポジティブに考えることにした。

この状況で、こんなにも自然とホグワーツに行けるきっかけができるとは何とも都合がいいと考えれば、さつきまで感じていた違和感なんて忘れていた。

「ダンブルドアには、私から手紙を送っておく。…ホグワーツには年度の初めから配属してくれ」

「…分かりました。お任せください」

愛想良く答えて部屋を後にし、廊下を歩いているとある思いだけで胸いっぱいになる。

ホグワーツに行けるということは、セブルスに会えるということ。彼に会える、やっと会えるんだ。

私は口元が緩んだのを誰にも見られないように、手で覆い隠しながら、エレベーターに乗り込んだ。

私がホグワーツに行ったら、セブルスが大変な思いをするかも知れないということも勿論頭にはあったが、それよりも嬉しい気持ちの方が勝っていたのだからしょうがない。

まだ、行くのは先だというのに私の心臓は緊張したように鼓動を速くする。

単純な私はこれだけのことですっかり舞い上がり、ずっと感じていた小さな違和感もすっかり気のせいな気がしてきた。

2 生き残った男の子と不思議な女の子

アウラが作った夕飯を食べ終え、暖かい紅茶を飲みながら、前に腰掛けているレギュラスの様子を窺う。彼は、ゆったりと時間を過ごしている様子で、興味なさそうに本に目を通してている。

飲み終わったティーカップを机の上に置くと、アウラがポットを傾けて注ぎ足す姿を見て、私は話を切り出した。

「…話しときたいことがあるんだけど、いいかしら？」

私の声を聞いたレギュラスは、何も言わずに本を閉じ、アウラは聞いてはいけなと思うたのか席を外そうとする。

「アウラ、貴方も聞いていて欲しいの。」

引き止めると、彼は少し戸惑いながらも大人しく従ってくれた。

「…そんな改まってどうしたんですか？」

レギュラスは、読んでいた本を机の上に置き、紅茶を一口飲む。

「…前話した未来のことよ。今までは私の見た通りに起きていたけど、今回少し違うことが起きたの。」

私の口から未来という言葉が出ると、レギュラスは一気に真剣な眼差しに変わった。

「…私知っている未来は今年のホグワーツに、脱走したブラックの身柄を確保するためにディメンターが送られる、それだけだった。…でも、ついこの前大臣直々に生徒の安全の確保と、ブラックを拘束するためにホグワーツに出向いてくれと頼まれたの。」

私がゆっくりと順を追って説明すると、レギュラスは何か考え込むように少し視線を下ろす。

「今のところ、変わっているのは小さなことだから、何も問題はないと思う。だけど問題はその後よ。もし、このままどんどん変わっていったら、ブラックがいつどこで死ぬのかも分からなくなるし、そうなってしまったら、何も出来なくなる。」

「…………でも、そうなるのは必然的だと思います。貴女1人関われば、未来なんて少しずつ変わっていくでしょうし。」

反論するレギュラスの言葉を聞いて、思い出したのはあの本に書かれた言葉だった。

【運命というのは、そう簡単に変えられません。貴女が存在するだけで流れが変わるなどあり得ません。貴女にそんな力はない。】

私が関わっても、変えられないことは身をもって知っている。

だから…………可能性として考えられるのは…………私というイレギュラーな存在に気づいた物語が、元に戻そうと私まで巻き込んでいるか…………レギュラスの死は物語に関係する死だったか…。

「…私1人の力じゃ、変えようと思っても変えられないの。…………私は他人の運命を変えられるほどの人間じゃない。」

…………でもきつと貴方だったら、変えられると思うわよ。」

私の言葉に意味が分からない様子で、レギュラスが聞き直してくる。

「僕と、レイラ、一体何が違うというんですか？僕と貴女はそんな違いはな「あるのよ。レギュラス」

言い切ろうとする彼の言葉を途中で遮り、私は後を続けた。

「貴方は、この物語に元々関係している人物なの。」

…………でも、私は違う。」

「…………物語…………何のことを言っているんですか？」

きつと今聞き直してきた彼は、私が本や、映像化された物語を見て、未来を知ったなど想像できないのだろう。勿論、そんなこと言うつもりもない。

「…言い方の問題よ。とりあえず私が言いたいのは、いつでも動ける準備をされていて欲しいということ。」

こうなるとは思っていなかったから、この先どうなるかは分からない

いけど、もし大きく変わるといふのなら、変わりだす前に私が元に戻す。」

険しい表情を浮かべるレギュラスは、小さく頷きながら承諾してくれた。

「…そこで、アウラにお願いがあるの。」

「何なりと」

レギュラスからアウラに視線を移すと、彼は頼もしい言葉を口にした。

「もしもの場合貴方を呼び寄せるから、その時はレギュラスも一緒に連れてきて欲しい。」

もしもの場合というのは、1人ではどうしても対応できない時に、私がアウラを呼び寄せる時のことだ。

私が未来を知っているというのは、アウラとレギュラスしか知らない。何かあった場合、たった1人で全てをこなすことは私にはできない自信がない。

「かしこまりました。お嬢様。」

どうやら、アウラもレギュラスも意味が分かったらしく何も聞き返してこなかった。

「…それで、ホグワーツにはいつ行くんですか?」

問いかけてくるレギュラスの声を聞きながら、ソファアに座っていた腰を浮かせて座り直す。

「生徒達と同じ日に、ホグワーツ特急に乗って行くつもりよ。」

「…じゃあ、もう一週間もないですね」

レギュラスは小さく呟きながら、紅茶を飲むと少し背筋を伸ばしながらアウラに話しかける。

「アウラ、少し小腹が空いたから何か口にできるもの持ってきてくれないか?」

レギュラスがなぜ、急にそんなことを言い出したのか大体予想はついた。きつと彼は、私と2人つきりで何かを話したいのだろう。

どうやら私の予想は合っているらしく、アウラがキッチンの部屋の奥へと消えていった瞬間、彼は私の目を見つめてゆつくりと口を開いた。

「……レイラ、…無理だけはしないでください。自分の身に何か起きる前に、アウラを呼ぶと約束してください。」

「そんな約束しなくても大丈夫「駄目です。約束してください。」

しつこく言ってくるレギユラスの勢いに吞まれて、少しおかしく感じた私は軽く言葉を返した。

「分かったわ。約束する。」

何故そこまで、レギユラスが心配そうな表情を浮かべているのかが分からない私は、もうすっかり冷えてしまった紅茶を一気に飲み干した。

机の上に散乱している羊皮紙に紛れている少し前の日刊予言者新聞に視線を移しながら頬杖をつく。新聞には楽しそうにピラミッドの前で、ウィーズリー家がこちらに笑顔を浮かべてくる。ロンの手の中にいるスキヤバーズもしつかりと写っていて、よく見れば指が一本欠けていることに気づいた。

それにしても、ペティグリューはよく長い間鼠として生活できたものだ。私だったら絶対に耐えられない。そこは少し尊敬する。

私はやる気のない体を奮い立たせて、あと少し残っている仕事を終わらせるために羽根ペンを動かした。流石に私が居ない時に、仕事が回ってくることはないと思うが、ホグワーツに行くまでにとりあえず片付けといた方がいいだろう。

時々、甘いクッキーを頬張りながら淡々と仕事を終わらせていく

と、意外にも予定よりも早く終わることができた。部署ごとに羊皮紙をまとめて、机の上に並べると、それぞれの部署へ紙飛行機を飛ばし、羊皮紙の束に簡単な魔法をかける。宙に浮いた羊皮紙の束は紙飛行機の後を追うように、それぞれの部署に向かって部屋を出て行った。私はティーカップに入っていた紅茶を消し、杖を一振りすればそれぞれその定位置に戻っていく物が部屋中を飛び回り、あつという間になんかに散らかっていた部屋は片付いた。私は机の引き出しを開け、奥からペンダントを取り出した。

ずつとしまっていたせいで少し埃が被っていたが、ペンダントを開けると前と変わらず、惑星のようなものが周りを飛び回り、時間を刻んでいた。今の私にはそれがペンダントが嘲笑っているようにしか見えず、勢いよく閉じて、首から掛けると服の中にしまった。

ソファアに掛けてあったローブを羽織って、綺麗に整っている部屋をぐるりと見回すと私は自分自身を落ち着かせるように深呼吸をする。

深呼吸をしても、別に変わることはなく意外にも落ち着いている自分自身に少し驚いた。まるで私の体じゃないみたいだ。他の人の体を操っているようなそんな感覚な今なら、何でも出来るような気がしてならない。

トランクを使うのは随分と久しぶりで、多分学生以来だろう。忘れ物がないか確認し、トランクを閉じているとレギュラスが話しかけてきた。

「忘れ物はありませんか？」

「ええ、大丈夫よ。」

答えながら立ち上がると、少し不安そうに笑いかけてくるレギュラスの表情が視界に入ってくる。

「どうしたの？そんな暗い顔をして」

私が明るく問いかけると、彼はいつものように誤魔化すような笑みを浮かべながら答える。

「今日は天気が悪そうですから、そう見えるだけですよ。」

確かにレギュラスの言う通り、今にでも大粒の雨を降らせてしまうような厚い黒雲が空を覆っていた。

「じゃあ、そろそろ行くわね。」

私がトランクを手に持ち、彼に言うのと再度確認するように少し小さな声で話しかけてくる。

「約束、覚えていますよね？」

真剣に問いかけたレギュラスを見た私は、彼を安心させるために頷きながら声に出した。

「ええ、覚えているわよ。…大丈夫よ。レギュラス、そんなに不安がることなんて何もないわ。」

レギュラスの肩を優しく叩いた後、無意識に頭を撫でようとした手を途中で止めた。流石にこの歳で頭を撫でられのは、嫌だろうと思っただからだ。

私はアウラの元に駆け寄って、レギュラスに聞こえないように耳元で囁く。

「…………レギュラスを…お願いね…………」

アウラが小さく頷いたのを確認して、私はレギュラスとアウラの顔を交互に見て姿くらしをした。

足が地面を捉えたのと同時に、人混みの騒がしい声や、汽車の煙を

吐く音が耳に入ってくる。柱の影に隠れていた私はトランクを持ち直して、人でごった返している所に出た。

少し薄暗い所にいたせいで、眩しく感じたがそれよりも久々の人混みで酔いそうになる。子供達を見送りに来たであろう大人達が汽車から乗り出す子供に何か話しかけている姿や、小さな子供が楽しそうに走り回っていたりと、とにかく騒がしくこの感覚は少し懐かしかった。

カートを押す人達に少し足を踏まれそうになりながら、空いていそうな車両を外から探していると後ろから私の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「レイラ!!!」

こんなに人がいれば、私と同じ名前のいるであろうが一応振り返ってみる。後ろには見覚えのある人はおらず、気のせいだと思ったのがよく見てみれば、人混みの中に見覚えのある人が私に手を振っていることに気がついた。

立ち止まっている私に近づいてくるアーサーの後ろには、赤毛の子供達がいることに気がついた。

「久しぶりですね。アーサー。エジプト旅行は楽しかったですか?」

私が問いかけると、彼はにこやかな笑顔を浮かべながら答える。

「とても楽しかったよ。手土産を買ってきたんだが、今度会った時にも渡すよ。そうだ、丁度子供達も来ているんだ。ちよつと待つてくれ。」

後ろを振り返ったアーサーは、少し離れた所にいる子供達に呼びかける。子供達を後ろから優しく誘導するモリーは、私の顔を見るととても優しく微笑んできた。

「モリー、こちらは前話したレイラだ。」

モリーの腰に手を回し、私を紹介するアーサーの言葉を聞いた彼女は、何か納得したような表情を浮かべ、手を握ってくる。

「ああ! 貴女が。夫がいつもお世話になっています。」

「いえ、私の方こそ…」

私が少し戸惑いながらも彼女の手を握りながら、声を出すことしかできなかった。

「レイラ、私の子供達だ。」

そう言っただけで後ろにいた子供達を私の前に押し出してくるアーサーから、子供達に視線を移すと、赤毛の他にも、黒髪と栗色の髪を持った子供も交じっていることに気がついた。

誰だか大体は予想はついたが、フレッドやジョージと重なっていつか時々髪の色が見えるぐらいだ。

私がそこばかり見ていたからだろうか。何かに気づいたアーサーは2人を私の前に連れてくる。

「この子供達は、私の子ではないんだけどね。ロンの友人だよ。この子が、ハーマイオニー、そしてこの子が」

私はハーマイオニーから、黒髪で丸眼鏡を掛け、緑色の瞳を持った少年に視線を移した瞬間、心臓が緊張したように鼓動を速くした。

「ハリーだよ。」

アーサーの子供達を紹介する声も遠くでしか聞こえず、私はハリーの緑色の瞳から目を逸らすことができなかった。

……もう……逃げられない。

……夢かもしれない……現実から目を逸らせない。

私が自分のことばかり見てくることに気づいたのだろう。ハリーが少し何か困ったような表情を浮かべたのを見て、咄嗟に視線を逸らすことしか出来なかった。

アーサーが私のことを紹介し終わると、一人一人手を握り名前を言ってくる。正直言って、ジョージとフレッドの区別はつかないが、それ以外は名前と顔の一致はする。私は彼らに会うよりも前に、顔も名前も知っていたのだから当たり前だ。

隣にある汽車から汽笛の音が鳴り響くと、アーサーは子供達を汽車へと乗せていく。

「少し、いいですか？」

私も乗り込もうかと思っていたら、後ろからモリーが話しかけてきた。

「ええ、何でしょう。」

振り返りモリーと向き合っていると、彼女は何か迷っているような様子だった。中々口を開こうとしない彼女が何か決心したように、声を出そうと息を吸い込んだを見た瞬間、視界の端に何か小さく動くのが見えた。

咄嗟に何か動いているの方を見ると、ロンが持っていたはずのスキヤバーズらしき鼠が歩く人達を避けて、汽車から離れていく。

「すいません。」

私はモリーに、一言だけ謝罪の言葉を入れて、手に持っていたトラノクを地面に置き、何も説明することなく鼠の後を追った。後ろからモリーやアーサーの音が聞こえたような気がしたが、気にする暇もなくすばしっこく逃げる鼠の後を追いつける。

私に追われていることに気がついたのか、少し逃げる足が速くなつた気がしたが、所詮は人間と鼠。逃げ切れる訳がなく、軽々と持ち上げると何とか逃れようと手の中で暴れている。

気にすることなくモリーの元に戻っている途中で、手が少し痛んだ。手元を見れば、鼠が私の手を噛んでいて血がポタリと地面に落ちる。どうやら相当強く噛んでいるらしい。

私の様子を窺うように、少し見上げてきた鼠は私の表情を見た瞬間何故かまた暴れだした。

戻ってきた私の手の中に、一匹の鼠がいることに気がついたモリーに問いかけてみる。

「この鼠、さつきお子さんが持っていたものですよね？」

「ええ、確かにそうですけど……あら!!怪我をしてしているじゃないですか☒」

私の手から血が流れていることに気づいたモリーは、慌てたように大きな声を出した。

「大丈夫ですよ。これぐらい。動物は噛むものですから」

彼女を宥めながら、鼠を渡そうとしたのだが、後ろから何か焦った様子のアーサーが肩を掴んできた。

「もう、汽車が出る。急いだ方がいい。」

そう言いながら、私のトランクを持つアーサーは少し駆け足で汽車へと向かっていく。

「渡しておきますね。…あつ、お話というのは？」

少し早口で問いかけみると、モリーはにこやかな笑顔を浮かべながら頭を横に振った。

「いえ、何でもありません。ごめんなさい、引き止めてしまつて。」

彼女の言葉を聞いた私は、モリーに背を向けて急いでアーサーの後を追いかけた。汽車の前には私のトランクを持っていたアーサーが待っていた。

「ほら、早く乗って乗って。」

アーサーはそう言いながら、トランクを汽車へと乗せる。

私は手に持っている鼠を逃がさないように手にしっかりと握り、乗り込もうと手すりを握った瞬間、彼が誰にも聞かれないように耳元で囁いてきた。

「私は、君を信じている。」

何故そんなことを言われたのかが分からなかった。アーサーの顔を見ると、真剣な表情で見つめてくる。

…：一体…私の何を信じているというのだろう。

私がブラックを拘束できることを信じているということだと考えるには少し強引な気がしたが、それ以外に思いつくことはなかった。

私は何も答えずに、アーサーから視線を逸らして、汽車に乗り込んだ。

汽車がガタンと大きな揺れたと思つたら、ゆっくりと動き出し、窓から顔を出しながら親に手を振っている生徒達の後ろを通っていく。外の風景ががらりと変わり、もう大人達の姿も見えなくなると、手を振っていた生徒達は取っていた席に戻っていく。

狭い通路を通りながら、鼠を渡すためにロンを探していると、コン

パートメントに入ろうとしているハーマイオニーの後ろ姿が見えた。私はまだ手の中で暴れている鼠を握ったまま、彼女が入っていったコンパートメントに向かっていると、ハリーが扉から顔だけを出して様子を窺っていた。勿論ぼつちり目が合ってしまった私は、出来るだけ平常心を保ちながら、近づいていきハリーの前に立つと、コンパートメントの中のソファァーに腰掛けいたロンやハーマイオニーも私の方を見てくる。

「…あつ…ごめんなさい。もうここも満席なんです。」

どうやら、私が座る場所を探してここに来たと思っただけらしい。ハーマイオニーの申し訳なきような声を聞きながら壁にもたれて眠っているルーピンであろう人をちらりと見ながら、ハリーに鼠を差し出した。

「…この鼠を届けに来ただけよ。」

ハリーが受け取った鼠を見た瞬間、ロンは少し大きめな声で名前を呼びながら立ち上がった。

「スキヤバース!!!」

ハリーから鼠を受け取ったロンを見ながら、私は色々な意味を込めて、鼠に話しかけている彼に向かって口を開いた。

「ペットは、肌身離さず持っていた方がいいと思うわよ。特にその鼠はすぐに離れようとするから、見失わないようにね。」

大切そうに鼠を持っているロンを見て、私はコンパートメントの扉を閉め、空いている席を探しに向かった。

丁度、ザ・クイブラーの雑誌を読んでいる1人の少女が座っているコンパートメントを見つけた私は、彼女に話しかけると、雑誌から顔を上げた少女は見たことがある人物だった。

銀白色の瞳を持ったその子は首から不思議な眼鏡を掛けていて、近くに置いているバッグはカラフルな不思議なデザインが施されている。

座っていいかと問いかければ、何も答えずに頭を縦に動かしたただけだった。

コンパートメントに入った私は扉を閉めて、トランクを網棚の上に置く。腰掛ければ、体の力が抜けていき、ふと彼女に視線を移すと、ザ・クイブラーを開きながらもちらちらと私の方を見てきていた。どうやら見たことのない私が気になるらしい。

「……あんだ…見たことないけど…新しい…せんせえ？」

おつとりと話す彼女の話し方は、まるで子守唄を歌っているような感じだった。

「先生…ではないけど、仕事で用があるの。」

私の答えを聞いた少女は、私の方に手を伸ばしてきてゆつくりと口を開く。

「あたし…ルーナ・ラブグッド……」

この流れは、私も名前を言わなければならぬのだろう。

少し戸惑いながらも、伸ばしてきた手を握って、全く私から目を逸らそうとしない彼女に向かって名前を口にした。

「レイラ・ヘルキャット、よろしくルーナ。」

そう言えば、無表情だった顔が嬉しそうに少し綻び、ルーナは持っていたザ・クイブラーの雑誌の表紙を見せてきた。

「ヘルキャットさん…知ってる？…これ？」

どうやら私のことは流石にファーストネームでは読んでくれないらしい。

「ええ、読んだことはないけど、名前は知ってるわよ。」

「これ、あたしのパパが編集しているの」

何か誇らしげに話すルーナは、父親の話から、聞いたことのない魔法動物に話題が変わり、ずっと彼女の話し声を聞きながら時間を潰した。

駅を出てからだいぶ時間は過ぎ、ホグワーツまで後もう少しだという距離に差し掛かった時、窓に打ち付ける雨がだんだんと酷くなってきた。外はもう真夜中だと思うぐらいに暗く、止むことはない大雨が降り続けている。

……そろそろ…か…

そう思いながら窓の外を眺めていると、一瞬黒い何かが横切ったのが見えた。

……来る……

「…どうしたの？ヘルキャットさん？」

ルーナが私に問いかけてきた瞬間、走っていた汽車は急ブレーキをかけたように、いきなり停止し、凄い衝撃が伝わってきた。

私の方に体を乗り出していたルーナが衝撃のせいで、持っていた雑誌を落とし、体のバランスを崩す。顔から突っ込んでしまわないように、前に倒れてくる彼女の体を受け止めて座らせた。

「……ありがとう」

お礼を言ってくるルーナは落ちていた雑誌を拾い、何かを悟ったように窓の外を眺める。

灯りがふっと消えると、ルーナは上を見上げて、ぎゅつと雑誌を両手で握りしめた。静まり返った汽車は、時々戸惑ったような生徒達の声や、コンパートメントの扉を開ける音が聞こえるだけだ。

私は扉越しに通路を見ると、自分が白い息を吐いていることに気がついた。後ろからパキパキという音が聞こえてきて、振り返れば窓には霜を張りついており、置いていたルーナの飲みかけのかぼちゃジュースもうつつすらと氷を張っていた。

寒そうに少し震えるルーナの白い肌は真つ暗でもはつきりと見える。私はルーナの隣に移動し、着ていたローブの彼女の肩から掛ける。

「大丈夫よ。」

私は彼女の頭を撫でながら、微笑むことしか出来ない。杖を握りしめ、立ち上がるとルーナは、私の服の裾を引っ張ってきた。

「出ちやダメ。嫌な感じがする。」

彼女が白い息を吐きながらそう言った瞬間、コンパートメントの扉に黒い影が映った。裾がボロボロのマントをふわりと宙に靡かせながら、私達の方には見向きもせずに通過していく。おそらく、ハリイがいるコンパートメントに向かっていているのだろう。

少しルーナが私の服の裾を握る力が強まった気がしたが気づかな

いふりをした。どうやら彼女でも少し怖いのかもしれない。

私はとりあえずルーナの隣に腰掛けて、灯りがつくのを待つことにした。

真つ暗だった通路に銀色の温かい光が差し込んできたと思えば、デイメンターらしき黒い影が逃げるように凄い勢いで退散していく。汽車の灯りがチカチカつと復活したのはそのすぐ後のことだった。隣のコンパートメントにいる生徒達が話している声が、騒がしい声に変わると、一気に扉を開ける音が聞こえてきた。

隣にいるルーナに視線を移すと彼女の震えはもう止まっていて、何事もなかったかのように目をパチパチさせている。

「少し、様子見に行ってくるわね。」

彼女にローブを貸したまま扉を開けて外に出てみると、どのコンパートメントの扉からも生徒達が顔を出していた。生徒と目が合うと、見たことのない私を怖がっているのか、コンパートメントの中に頭を戻して扉を締め切ると何か友達に話している姿が視界の隅に入ったが、そんなのはもう慣れている。

学生の時と比べれば、何とも思わない。

私がハリー達がいるであろう、コンパートメントに向かっていると通路に出ていたルーピンがハリーに話しかけているところだった。

「食べなさい。元気が出る。」

きつとチョコを渡して、中々食べようとしないうハリーに言っているのだろう。コンパートメントの扉をしっかりと閉めて、運転手の元に行こうとしたルーピンは、自然とコンパートメントから私がいる方向に視線を移した。私が今立っているのは、運転手の方向だから彼に気づかれない方が難しいだろう。

私の顔を見た瞬間、ルーピンは少し驚いたような表情を浮かべながら呟いた声が聞こえてきた。

「……………レイラ……………」

相変わらず彼の顔には大きな傷があったが、顔色はまだ良さそう

だ。布を継ぎ足したようなローブを羽織っているルーピンは、さっきの顔が嘘のように優しい笑みを浮かべながら、何も言わない私に話しかけてくる。

「久しぶりだね。…元気にしてた？」

「…ええ」

私が静かに答えると、ルーピンはそうかと呟きながら歩き出す。

「少し、運転手と話してくるよ。また後でゆっくり話そう。」

そう言ったルーピンに道を譲ると、ハリー達がいるコンパートメントの扉が少し空いていることに気がついた。

どうやら、彼らは人の会話を盗み聞きするのが好きらしい。私は彼らがいるコンパートメントの扉を開け、ちゃんとロンの手に鼠がいるかどうかを確認した。

もし逃げ出していたら、探さなくてはいけない。

何も言わず覗いてくる私を不審に思ったのだろう。ロンの手の中にちゃんといることを確認した後、無意識にハリーに視線を移し見つけていただけなのだが、痺れを切らしたかのような声が聞こえてきた。

「あの、何か用ですか？」

何も話さない私を不思議に思ったのと同時に少し苛立ったのだろう。私に問いかけてくるハーマイオニーの声は挑発的だった。

「……いや…何でもないわ。」

私は一言だけ言って扉を閉めると、ルーナがいるコンパートメントへと足を向かわせた。

……ポッターにも、エバンズにもあまりに似過ぎている。

「……あまりに…酷すぎる……」

セブルスの思いを考えただけで胸は苦しくなり、無意識に呟いていた声は消えていった。

3 勿忘草を貴方に

ルーナの元へ戻ったのとほぼ同時に汽車はゆつくりと動きだし、ルーピンであろう影が扉の向こうを通ったのを見てみると彼女が話しかけてきた。

「様子は…どうだった？」

ゆつくりと話すルーナの声を聞きながら、私は口を開く。

「何も問題はなかったわ。…ほら、もうすぐ着くから着替えた方がいいんじゃない？」

私の言葉を聞いたルーナは、自分のトランクを開けて制服を引っ張り出す。トランクの中に何か不思議なものが入っていたような気がしたが、見なかったことにしよう。

「…あつ、これありがと」

ルーナは私のローブを綺麗に畳み、お礼を言いながら渡してくると、あつという間に制服に着替え終えた。

レイブンクローの色のローブを身に纏ったルーナは、着ていた私服や雑誌をトランクの中にしまっている。

「…レイブンクローなのね。」

支度が終わった彼女に話しかけると、足を少し浮かせ、揺らしながら答えた。

「うん、青色は好きだから結構気に入っているの。」

「…学校は、楽しい？」

「うん、楽しいよ。毎日楽しいことばかり起こるから、好きだよ。」

学校を楽しんでいるだけでも胸が苦しくなる時だってあったぐらい羨ましくてたまらない。

あの時はとにかく、セブルスが死んでしまう未来のことで頭がいっぱいで、息をしているだけでも胸が苦しくなる時だってあったぐらいだ。

「それで、ヘルキャットさんは、どこ？」

「ん？」

ルーナの声で我に返った私は、彼女が言ったことを聞いておらず、聞き返すとルーナはリズムよく声に出した。

「グリフィン・ドール？ハツフルパフ？」

「ああ……私は、スリザリンよ。」

スリザリンという言葉聞いた彼女は、変わらない表情のまま話し出す。

「スリザリン、うん。あんたにぴったりだと思うよ。緑色は人を癒す効果があるっていつか聞いた。……あんたと居ると安心するもの。」

ルーナは大分ポジティブ思考らしい。

「……そう……ルーナは物知りね。」

そんなこと他人から言われたことがない。

ただ、彼女は私に対して相当良い印象を抱いたということだけは分かった。

「あたしは物知りじゃないよ。パパからいつも教えてもらってるの。あたしじゃなくてパパが物知りなんだ。」

ルーナは、父親の話をしているときとても自慢げに話す。きっと相当父親のことが好きなのだろう。

走っていた汽車がだんだんとスピードを緩めていることに気づいたルーナは、窓の外を見て足をぶんぶん振りながら、声を出した。

「もう、着くみたい。」

ゆっくりとスピードを緩め、汽車が駅に止まり煙を吐く音が聞こえると、一斉に汽車から降りる生徒達の話し声や足音で騒がしくなった。

中々外に出ようとしないうルーナは、じっと私の方を見てくる。私は網棚の上に置いてあるトランクを下ろし、ローブを羽織ると彼女に話しかけた。

「……ほら、降りましょう。」

私が彼女の分のトランクを手を持って、コンパートメントから出ると、ルーナは何も言わずに後を付いてくる。

生徒達のトランクが一箇所に集まっている所にルーナのトランクを置き、自分のものは端の方に寄せて置いた。ここに置いとけば、トランクをそれぞれの部屋に運んでくれる。

「一年生はこっちだぞー！」

大きな体を持ったハグリッドの太い声が聞こえる中、私は何も言わず見てくるルーナに向き合った。

「また、後でね。ヘルキャットさん」

そう言った彼女は、少し口角を上げると軽く手を振って、生徒達の中に入っていく。私は胸元で軽めに手を振りながら、遠くなっていくルーナの後ろ姿を見えなくなるまで見送った。

これからどこに行けばいいのか分からないまま、周りを見回してみるが、生徒しか目に入らない。とりあえず私も生徒達が歩いている方向に行こうかとした時、後ろから私の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「レイラー！」

振り向けば、ルーピンが小走りで駆け寄ってくる。どうやら彼は私を探し回ってくれていたらしい。だからローブも乱れているのだろう。

「良かった。中々見つからなかったから少し心配したよ。」

固く口を閉ざしたままの私を見たルーピンは、優しい笑いかけてくと歩きだした。彼に付いて行くことにした私は、大人しく前を歩くルーピンの後を追った。

先頭を歩いていた生徒達を追い抜くと、ルーピンは薄暗い道をどんどんと歩いていく。

灯りがぼつぼつとしかない道の先に、ぼんやりと馬車のようなものが待機していることに気がついた。

近づけば、骨ばった黒色の体を持ち、背中からドラゴンのような羽根を生やしている馬のような動物の姿がはつきりと見えた。その動物と繋がっている馬車に乗った彼は、当たり前のように私に手を伸ばしてくる。

……見えた動物の正体はもう分かっている。

ルーピンの手を握り、私が馬車に乗ると、セストラルはゆつくりと

ホグワーツを目指して歩き出した。

2人だけで乗るには少し寂しく感じるほど、広く作られている馬車の椅子に座りながら結構なスピードで走るセストラルを見つめた。

前に腰掛けているルーピンの様子からして、彼は見えていないらしい。

何か話しかけてくると思ったのだが、雨が降る音だけしか聞こえてこない。

ルーピンも勿論私も別に話しかけることもせず、結局一言も話さないままホグワーツの姿が視界に入った。

ホグワーツの前で止まった馬車から降りると、セストラルはくるりと後ろを向いて元来た道に戻っていく。

あの時と変わらず、目の前にそびえ立っているホグワーツを見上げると懐かしい気持ちと一緒に思い出したくない記憶が頭の中を駆け巡った。

「レイラ? どうしたんだい?」

「……何でもないわ」

中々中に入ろうとしない私に問いかけてくるルーピンに適当な言葉を返して、彼の後を追いかけた。

中に入れば、学生の時に戻ったように感じられるほど見覚えのある階段や、廊下、話したり動いたりしている絵画達に空中に浮きながら移動している半透明の幽霊達が視界に入ってくる。

何度も通ったことのある廊下は、どんなに年月が経っても覚えていられるものらしい。彼が大広間に向かっていることが直ぐに分かったほどに、私は道順を忘れていなかった。

大広間から暖かい光が漏れているのを見る限り、どうやら扉はもう開いているらしく、中に入れば少し薄暗い廊下を歩いていたせいから、少し目が眩んだ。

真つ暗だった視界がだんだんとはつきりと見えるようになって、一

気に懐かしい風景が目飛び込んでくる。

本物と錯覚してしまうぐらいにそっくりな夜空が広がっている天井に、空中に浮いている何本もの蝋燭。真ん中の道を開けるように並べられた4つの寮の長机と長椅子。

そんな懐かしい風景を目にすると、まるで学生時代に戻ったようにそれぞれの寮の色のローブを着た何千人という子供達の姿が見えた。

……そうだ……よくセブルスを探していたっけ……

学生の時の私は、ご飯を食べながらよく無意識に彼のことを目で追いかけていた。今思えば、外から見たら単なる変人だろう。

あまりに懐かしい風景に少しぼっと見ていると遠くから私の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「……ラ、レイラー！」

我に返った私の前には心配そうな表情を浮かべるルーピンの顔が視界に入ると、彼の声はつきりと聞こえてくる。

「本当に大丈夫？……それに少し顔色も悪い」

「……大丈夫よ。懐かしんでいただけ。」

彼の後ろには、さっきまで確かに見えていた生徒達の姿はどこにもなく、代わりに奥には何人かの教師達の姿があった。私は心配してくれたルーピンをよそにして、ダンブルドアに近づいていく。

「お久しぶりです。ダンブルドア先生。」

「おお〜レイラー、随分と久しぶりじゃの。元気になっておったか？」

「ええ、おかげでさまで。先生は相変わらずお元気そうで何よりです。」

上手く笑えているかどうかは分からないが、社交辞令の言葉を並べながらダンブルドアと一言二言話していると、少し遅れてルーピンも挨拶を交わしていた。ダンブルドアの近くにいたマクゴナガルが私の方を見ていることに気づき、私は彼女に近づいて挨拶をする。

「お久しぶりです。マクゴナガル先生、お元気でしたか？」

「……ええ」

「お変わりないようで良かったです。」

私がそう言葉を並べると、何も変わっていないマクゴナガルの口から思ってもいなかった言葉が聞こえてきた。

「そう言う貴女は……随分と変わりましたね。」

……学生の頃の面影が感じられませんよ」

「……そうですか？……自分では分からないものですね。」

彼女に言われた心当たりがある私は、自分を誤魔化すように、曖昧な言葉を並べた。

元々話すことは得意ではないから、そう話すことも長くは続かず、いつも気まずい雰囲気の流れでそこで会話が終わってしまう。

次何と言えればいいのか悩んでいると、有難いことにダブルドアの呼びかける声が聞こえてきた。

「先生方、ちよいといいかの？」

これで、無理矢理話す話題を考えなくてもいい。

散らばっていた教師達が彼の周辺に集まっていく姿を見てみると、ルーピンが私にこつちに来るようにと手招きをしてくる。

「事前に知らせておったが、一応紹介しておく。まず、闇の魔術に対する防衛術の授業を受け持ってくれる、リーマス・ルーピン先生じゃ。」

私が彼の隣に移動したことを確認するように見てきたダブルドアが一言紹介すると、ルーピンは一言言って、浅くお辞儀をする。

「そしてこちらが、魔法省から派遣されたレイラ・ヘルキヤットさんじゃ。」

ルーピンに集まっていた視線が一気に私に集まり、私は何も言わずに浅くお辞儀をして、教師達の顔をひと通り見た。

……やっぱり……いない。

どんなに探してもセブルスの姿がどこにもなく、何か言っているダブルドアの声を聞き流しながら、視線を下ろした。

……一体どこにいるのだろうか……。

……まさか……教師ではないとか。

私の頭には様々な可能性が浮かんできて、変な汗が出てくる。

…彼が居なかったら…：私がここにいる意味なんて

ダンブルドアの話し声を上の空で聞いていると、それに混じって、微かに足音が聞こえたような気がした。ゆっくりと近づいてきているような足音が聞こえる度に、私の心臓は鼓動を速くし、頭は速く後ろを振り向けと命令してくる。

隣にいるルーピンに視線を移してみるが、彼は気づいているような様子は見せない。

意を決して振り向くと自分の髪がふわりと舞い、視界を遮ってくる。まるで時間がゆっくり進んでいるような感覚に襲われると、葉草の香りがしたような気がした。

視界を覆っていた髪の毛の隙間から、人の姿がこちらに向かってきているのが見えると、目が自然と大きく見開いた。

……：セブ……ルス……

視界がはつきりと見えた時には、少し距離はあったが、確かにそこには真つ黒なローブに身に纏い、こちらに歩いてくる人の姿が視界に入ってきた。

……：セブルス……

決して口には出さないように、ずっと会いたかった人の名前を、ずっと愛しい人を心の中で呼びかけた。

だんだんと近づいてくるセブルスを見ると、私の心臓は相変わらず緊張したように鼓動の速度を上げ、熱があるのではないかと思うほど体温が熱くなる。

「セブルス、君には紹介しなくても大丈夫じゃな？」

彼に気づいたダンブルドアが問いかけると、セブルスはルーピンと私を見て、少し嫌そうに顔を歪ませた。

一体どっちに対してそんな表情をしたのだろう。ルーピンかそれとも私か、いや2人ともという可能性もある。

「そのようなことより、校長。生徒達がホグワーツに到着したようです。」

セブルスの低い声が耳に入ってくると、私の心臓は速度を増して動き続ける。あまりに久々に愛しい人に会うと人は周りも見えなくなり、声も聞こえなくなるらしい。

ダンブルドアと話しているセブルスをじっと見つめ続ける私は他の人の話し声も聞こえなければ、セブルス以外の人間はぼやけて見えていた。

私に見られていることさえも気づかずに、話し続ける彼を見ていると私はどうしようもない不安が襲いかかってくる。

……セブルスは…私のことを憶えているだろうか……。

もしかしたら、忘れられてしまったかも知れない。

そう考えてしまうと少し胸らへんがぎゅつと苦しめられて、心臓の鼓動が聞こえることに何かどろどろしたものが吐き出されているような気がした。

あまりに私が見ていたからだろう。

ダンブルドアと話していたセブルスが私の方に視線を移して、ぼつちり目が合う。

髪を左右に分け、色白い肌に、どこまでも吸い込まれそうな真っ黒な瞳。彼は何も変わっておらず、自然と学生の頃のセブルスと重なった。

眉間に皺を寄せることも何もなく、表情を全く変えない彼を見ていると、私の口は勝手に動きだしていた。

「……私のこと……憶えてる?……」

一体私がどんな表情をしていたのかは分からないが、セブルスの瞳孔が少しだけ大きくなったことだけは分かった。

……お願い……憶えていると……言って

「……ああ……憶えているが……」

私の気持ちとは裏腹に、彼はその言葉を簡単に口から出してくれた。こんなことで、私が救われているなんて思ってもいらないだろう。きっとセブルスはそのあと、それが何なんだと言いたかったのだろうが、何か言いたげに少し口を開いて、閉じてしまった。戸惑ったような様子は一瞬見せたが、流石二重スパイをしているだけあって、今一体何を思っているのか、何を考えているのか表情からは分からない。

「……そう……良かった……」

ほっとした私は、小さく呟いて彼から視線を逸らし、他の教師達が席に着いているのを見て、私も後を追った。

先に座っていたルーピンが私の席まで取っておいてくれていたらしく、自然と彼の隣の席になってしまったが、ルーピンの隣にセブルスが腰掛けるのを見て、少しだけ嬉しくなった。

座る時、少し嫌そうな表情を浮かべたような気もするが、その理由が私ではないことを願いながら、彼から視線を逸らした。

……私……貴方に忘れてしまわれたらと考えただけで、こんなにも不安になる。

愛しい人に憶えてほしいと、私を忘れないでほしいと思うのは私がおかしいのだろうか。

……勿忘草でも贈って、彼の記憶に私が少しでも残るように、遠回しにこの想いを伝えたいという気持ちもあるのだが、……私にはそんな勇気さえもないことは身をもって分かっている。

それぞれの寮の色のローブを身に纏った生徒達が、大広間に入ってきたのはその後すぐのことで、一気に騒がしくなった。

ルーピンの奥に座っているセブルスを横目で見て、気づかれそうになる前に直ぐに逸らす。そんなことをしていれば、新入生の組み分けが始まっていた。

最後の生徒の寮を組み分け帽子が叫ぶと、マクゴナガルが椅子を消し、ダンブルドアがゆつくりと立ち上がった。

「さて、」馳走の前に皆がボーっとなる前にいくつか知らせておかなければならないことがある。」

生徒達に向かつて話をするダンブルドアの後ろ姿を見ながら、私は静かに耳を傾けた。

「今学期から新任の先生をお迎えすることになった。リーマス・ルーピン先生じゃ。ありがたいことに、今空席になっておる闇の魔術に対する防衛術の担当をお引き受け下さる。」

隣に座っていたルーピンが立ち上がり、軽くお辞儀をするとパラパラと気のない拍手が起こっただけだった。隣にいたセブルスは、胸元で2、3回手を叩いただけで、表情は少し険しかった。

立ち上がったいたルーピンが座ったものだからもうセブルスは見えなくなったが、多分今も苛立っていることだろう。

「そして、魔法生物飼育学の先生じゃったケトルバーン先生は、残念ながら退職なさることになった。手足が一本でも残っているうちに余生を楽しみたいとのことじゃ。そこで後任じゃが、嬉しいことに、ほかならぬルビウス・ハグリッドが受け持つてくださることになった。」

長机がずれるようなガタツという大きな音が鳴り響くと、グリフィンドールの生徒達からは割れんばかりの拍手が送られた。ハグリッドの大きな体は、この距離からでもはっきりと見えた。

他の寮の生徒達はパラパラとしか拍手しておらず、スリザリンの生徒達に至っては、拍手していない生徒達の方が圧倒的に多い。

「さて、楽しい話の次は少し深刻な話じゃ。」

真剣なダンブルドアの声が大広間に響くと、拍手も徐々に止み、ハグリッドに集まっていた視線はダンブルドアに戻った。

「皆も知つての通り、ホグワーツはただいまアズカバンのデイメンター達をシリウス・ブラックが捕まるまで受け入れておる。彼らは魔法省のご用でここに来ておるのじゃ。」

少しざわつく生徒達を気にすることなく、彼は後を続けた。

「デイメンター達は、学校の入り口を固めておる。彼らの影響で、日頃の学校生活に支障をきたすことはないが1つ言っておく。

…デイメンターは極めて凶暴で、獲物も行きずりのものも容赦なく襲ってくる。言い訳やお願いを聞いてもらおうとしても、彼らには生来できない相談じゃ。

…あの者たちに危害を加えるような口実を与えてないぞ。」

ダンブルドアの話聞いた生徒達が不安そうな様子を見てか、彼は穏やかな声で後を続けた。

「とはいえ暗闇の中でも幸せを見つけることは出来る。…：明かりをともすことを忘れなければの。」

…：そして最後の知らせじゃが、今話した通り、ホグワーツにはデイメンターが配置される他にも、魔法省から君達の安全を守る為にお越しいただいた方がいらっしやっておる。」

ダンブルドアが、私のことを切り出すと明らかに生徒達のざわざわした声が大きくなる。こんな状態の中、わざわざ目立つようなことをしたくないのだが、…：立たないわけにはいかない。

「それが、このレイラ・ヘルキャットさんじゃ。…彼女はシリウス・ブラックが捕まる間、君達がこれまでと変わりなく学校生活を送れるように守ってくれる。」

椅子を引いて立ち上がると、生徒達の顔が良く見えて、集まった視線を感じながら軽くお辞儀をした。パラパラと拍手の音が聞こえてきたが、何とも嬉しくない中途半端拍手は、数秒で消えていく。

椅子に腰掛けると、自然とため息が溢れて、ダンブルドアの声が聞こえてくると、突然目の前の机に豪華な食事が現れる。生徒達は待っていましたと言わんばかりに、手を伸ばして大広間は一気に生徒達の声で賑やかになった。

…：相変わらず…：豪華な食事だな…

私はそんなことを思いながら、何も考えずにかぼちゃパイに手を伸ばして、自分の皿の上に置いた。

……レギュラスはちゃんと食べているのだろうか。

そんなことを思いながら、食事と友達との会話に夢中になっている生徒達を見ると、何となくハリーの姿を探していた。

夏休み中にあつたことを話しているであろう生徒達は、楽しそうに笑いながら、それぞれ食べたい物を口に運んでいる。

「……………いた……………」

大勢の生徒達の中から、ハリーだけを見つけるのは意外と大変で、見つけた時には自然と口からこぼれ落ちた。

グリフィンドール色のローブを身に纏い、友達と話すハリーは、やっぱり気色悪いほどポツターと似ていた。

どうしてこんなにも瓜二つなのかが分からない。もし、ハリーが女の子で、エバンズに似ていたとしたら、セブルスもあんな複雑な気持ちを抱かなくて良かったかもしれない。

ありもしないことを思いながら彼を見つめていると、瞼がゆつくりと開いて、緑色の瞳が目に入る。エバンズと全く同じ色で、私の頭には自然と彼女が浮かんだ。

……………緑色……………

私も…緑色だったら、良かったのかな…

私の中で何かが弾けたと思うと突然、ハリーが私の方を見てぱっちり目が合った。

……いや、ハリーだけではない。よく周りを見てみれば、ハリーの周りに座っているロンやハーマイオニー、前方に座っている生徒達、更には教師達も私に視線が集まっていた。大広間にいる全員ではないが、私の近くに座っているほとんどがこちらを凝視してくる。

「どうしたんだい？」

隣から聞こえたルーピンの声を聞いても、何故そんなことを言われるのかが分からない。ただ、ハリーを見ていただけで、何もしていない。

「…何が？」

そうルーピンに返すと、彼は私の手元を視線を移し何か訴えてくる。

自分でもよく分からずに視線を下ろすと、皿に置いてあるかぼちやパイを、右手で握りしめたフォークで突き刺さしていた。かぼちやパイは真つ二つに割れて、残骸が皿からはみ出している。

どうやら、無意識にフォークを握って思いつきかぼちやパイに突き刺したらしい。こんなにも視線を集めるということは、凄いい音がしたのだろう。

「……切り分けたかっただけよ。」

私が何とも厳しい言い訳をすれば、ルーピンはナイフを渡してくる。優しく微笑んできたが、私はお礼も言わず、ルーピンからナイフを受け取った。

私が視線を気にせずに、かぼちやパイにかぶりつくと、少し戸惑ったように生徒達はまた会話と食事を再開した。

かぼちやパイを食べ終わって、隣から視線を感じて横を見ると、甘いお菓子を幸せそうに食べているルーピンの隣にいるセブルスが私の方をじつと見つめていた。

私がセブルスに気づけば、彼は私から視線を逸らして食事を再開しだす。

……私を監視するようダンブルドアに言われたのだろうか。

サラダを食べようとして口を開くセブルスを見つめていると、横からルーピンが話しかけてきた。

「……それにしても、セブルスもレイラも本当に久しぶりだね。……学生以来だっけ?」

セブルスは、ルーピンに話しかけられたこと自体をひどく嫌がっている様子で、眉間の皺を深くした。

「……そうね。学生以来。……まさか貴方が教師になるなんてね……」

私が、ルーピンを横目に言うのと彼が少し苦笑いをしたのが見える。「……何を考えているのかしらね。……ダンブルドアは」

私が小さく呟く声を聞かなかったことにして、またルーピンが話し出した。

「君が魔法省にいるのは知っていたけど、まさかこんな所で会えるとは思っていなかったよ。」

「…貴方の友達が、脱獄をしてくれたおかげで雑用係の私が駆り出されただけよ。」

セブルスが私達の会話を聞きながら無表情で口を動かしているのが見えて、私は彼に話を振る。

「…貴方もうまく教師をしているのね…どうやら見た感じだと、生徒にはあまり好かれてないようだけど…」

「…余計なお世話だ」

「生徒達に好かれようとは思わないの?」

セブルスは食べ物飲み込みむと、私の方も見ずに答えた。

「何故好かれる必要がある…そんなことどうだっていいことだ。」

「…君らしい答えだね」

眉を下げながら言うルーピンを見て、私も食事を再開した。

甘い焼き菓子を食べて、水を飲んでみるとハリー、ロン、ハーマイオニーが私の方を見て何やら話しているのが見えた。できれば、私ではなく、隣に座っているルーピンのことを話していて欲しいのだが、残念なことに私が気づいた瞬間、ロンとハーマイオニーが分かりやすく顔を逸らした。

あんなあからさまに逸らしたら、逆に気づいて欲しいと言っているものだ。かと言ってハリーのように、逸らさずに見つめてくるのもどうかと思う。

嫌いな彼女の瞳にそっくりな緑色の目を見つめてくるハリーは、決して目を逸らそうとはしない。私が逸らしてしまえばいいのだろうか、何故か逸らしてはいけない気がした。

あんなにポッターに瓜二つだというのに、目が似ているだけで、嫌いな彼女の顔とハリーが重なった。

……これは…複雑だな。

目だけというのが、逆に厄介なのかも知れない。私が見ても、彼女の顔が浮かぶのだから、セブルスはきつと彼女に見つめられているように感じるのだろう。

憎いポッターに似ている子供は、……エバンズが命をかけて守ったのだから。嫌いなのに、嫌いになりきれない。愛しい人の瞳を持っているんだから、拒絶なんてできるわけない。

………こんな…苦しすぎる。

残念ながら、ポッターもエバンズも、嫌いだった私は、ハリーを見て守りたいと思うわけがない。

彼女のことを思い出した私が彼を睨みつけると、ハリーは額の傷が痛んだのか押さえて視線を逸らしたが痛んだのは、多分気のせいだろう。今、あの人は近くにいない。

私を疑っているような目で見たせいで、変に感じてしまったただだ。

勿論、ハリーはそんなこと思う訳もなくきつと今頃、私に対しての疑惑が深まったに違いない。

そんなハリーを心配そうに、話しかけるロンやハーマイオニーの姿が目に入った。

自然と、学生の頃の光景を思い出して急に胸が締め付けられるように苦しくなり、私は軽く胸のところの服を握りしめる。

……彼らを見ていると嫌でも学生時代のことを思い出す……

ハリーを見ているだけで、ドロドロとした感情が吹き出てくる。胸が苦しくなって、辛くなる。あの緑色の瞳が目に入る度に、私は彼を憎く思ってしまう。

違う……エバンズじゃない……。

そう自分に言い聞かせても、私の中にはあの気持ち悪い感覚が襲い

かかってくる。よく学生の時に、感じていた思い。

……こんな感情、捨てたはずなのに、

……忘れたはずだというのに。

2人と話すハリーを見て、私は無意識に呟いていた。

「……………本当に……そっくりだ……………」

容姿はポッターと瓜二つで、瞳はエバンズと同じ緑色。……………それだけじゃない。

私は、笑うハリーを見て心の中で呟く。

……………笑い方が……………彼女そっくり……………

私に友達になろうと手を伸ばしてきた時のエバンズの笑い方とそっくりで、その時の彼女と重なった。

「……………嫌なことを思い出す……………」

ずっと忘れていたことを思い出して、私は顔を歪めた。

頬が殴られたように熱くなり少し痛みだすと、胸が針に刺されたように痛んだがそれが気のせいなことぐらい分かっていた。

あの頃が、1番幸せだったのかも知れない。そう思ってしまうと、これからやっていけるか不安になる。

エバンズのように……………私が死んでも、セブルスはいつまでも私のことを憶えていてくれるだろうか。

それとも、やっぱり忘れてしまうのかな……………

生徒達を見ていると何故かそんなことが、頭に浮かんでくるとは、消えていく。

……………大切な人のから忘れられてしまうことを想像しただけで、真つ暗な闇に突き落とされたような、救いようのない気持ちに駆られた。

やっぱり……：……勿忘草でも贈った方が良いのかな。
そんなことをしてもここにいと、学生の頃を思い出してしまうの
はぎつと避けられない。

4 震える手

食事も終わり、生徒達が大広間から寮へと戻っていくと教師達はそれぞれ自分のやるべきことをしようと、大広間から出ていく人もいれば、雑談をしている人もいる。

私は自分の部屋の場所を聞くのを忘れていたことを思い出して椅子から立ち上がり、ダブルドアに近づくと、私に気づいた彼は微笑んできた。

「……あの聞き忘れていたことがあるのですが……」

ついさっきまで、私の方を見ていたはずのダブルドアが何故か前の方に視線を移していることに気づいて、言葉も自然と消えていった。ふと同じ方向に視線を移すと、ひとりの生徒がローブを靡かせながらこちらに走り寄って来ている。

レイブンクローのその生徒は、良く見ればルーナで教師達の視線を一気に集めた彼女は、しっかりと私を見ながら声を掛けてきた。

「ヘルキャットさん。」

まさか、私に用があるかと思っていなかったのだろう。ルーナに集まっていたはずの視線は一気に私に集まり、勿論その場にいたセブルスやルーピンにも見られていることは見なくても大体想像つく。

「……どうしたの？……ルーナ」

何か用があるのなら早く言って欲しかった私は問いかけてみると、彼女の口からは私が考えてもいなかった言葉が出てくる。

「あなたに会いたかっただけだよ。ホグワーツにはいると言っただけ、いつ会えるかなんて誰にも分からないもん。」

……確かにいつ会えるかなんて分からないが、会おうと思えばいつでも会えるというのに、そう言う彼女は真っ直ぐ私を見つめてきた。

「そんなに慌てなくても大丈夫よ。ほら、今日は寮に戻りなさい。また今度お話をしましょう。」

私が想像もつかない考え方をする彼女の頭を撫でると、少しだけ口

角を上げて私の目を見たまま答える彼女は、満足そうだった。

「うん。分かった。」

小走りで大広間に出て行く彼女の姿を見送り、振り向けばにこりと笑うダンブルドアが視界に入る。

「あの生徒と仲良くなったのかの？」

「ええ……たぶん、懐かれました。」

「儂の思った通り、君は教師が向いておるようじゃな。」

そう言いながら笑うダンブルドアの横にいる教師達に見られている視線からとにかく早く解放されたくて、適当に言葉を返す。

「たまたまです。あの子は元々優しい子ですから。それで私の部屋は？」

「ああ、そうじゃった。お主の部屋は、地下でよかったかの？…寮も地下じゃったからそっちの方が何かと慣れておるじゃろう？」

「ええ…私は別にどこでも構いません」

私の言葉を聞いたダンブルドアは、安心したような笑みを浮かべ後を続ける。

「良かった、部屋はスリザリン寮の談話室を通り過ぎて、一番奥の部屋じゃ。分からないことは無いと思うが、万が一の時はセブルスにでも聞くといい。」

隣にいるセブルスに視線を移すといつも通りの調子で、他の教師に話しかけられていた。

「…ありがとうございます。」

今、目の前で笑っているダンブルドアは、私を信用してここに置いてくれているのだろうか。それとも他に彼なりの考えがあって、教員にならないかとまで誘ってきたのだろうか。

どう考えても、私は後者な気しかない。そうだとすると、今セブルスはきつと私を監視するよう命じられているのだろうか。

私はその場から逃げるように大広間を後にして、学生の時によく歩

いた道を歩き進めながら地下に向かった。生徒達の姿は見えないから、どうやら全員無事にそれぞれの寮に戻ったらしい。

薄っすらと灯りが付いているだけの廊下は、薄暗く、雨が降り続ける音だけが聞こえてくる。

「やあ！嫌われ者さん久しぶりだな！」

久々に聞いたうざったらしい声の方を見ると、壁からピーブズが顔だけを出していた。

「どうして戻ってきたんだ？また独りぼっちになりきたのか？」

私はからかってくるピーブズを無視して、地下を目指して歩く。

「スリザリンで浮いてるお前は嫌われ者〜」

ピーブズに腹を立てながらも、自分に地下までもう少しだと言い聞かせながら、無視を貫いた。

「友達1人居ないお前は、独りぼっち。嫌われ者は独りぼっち」

何も言い返してこない私の反応がつまらなかつたのだろう。ピーブズの退屈そうな声が後ろから聞こえてきた。

「チツ、つまんねーの」

後ろを振り向いてみると、さっきまでいたはずのピーブズの姿はなく、私ひとりだけだつた。私は視線を下ろして、口をきつく閉ざしたまま足を地下に向かって運ぶ。

…嫌われ者……

……独りぼっち……か……

さっき言われたことを心の中で繰り返していると、何故か可笑しくなり笑みがこぼれた。自分でも何故笑つたのか分からないが、とにかくピーブズも、私自身も酷く可笑しく感じたのだ。

独りぼっち……

そんなの、最初からだ。

階段を降りて、地下に行く魔法薬学の教室が目に入った。ゆっくりとその前を通り過ぎ、懐かしいスリザリンの談話室の前を通ると微かに賑やかな声が聞こえてくる。

談話室から漏れている僅かな光は暖かく、懐かしく思っていると、後ろから一定で歩いている足音が聞こえてきた。

良く音が響くせいか、ぴたりと止まった足音を聞いただけで、誰が後ろにいるのか、どれぐらいの距離で立っているのか大体想像つく。

「何か用？」

振り向きながら問いかけると、案の定後ろにいたのは、彼で少し眉間に皺を寄せたのが見えた。

「……こんな所で、立ち止まって一体何をしているのか気になったものでね。」

地下にいるせいなのか、耳に入った低いセブルスの声は体の芯にまで染みていくような気がした。

「別に、懐かしかったから見ていただけよ。」

学生の頃の私が今の光景を見たらきつと驚くだろう。こんなにも平常心を保ったまま普通に話すことができているんだから。

「……もう少し早くこんな風に普通に話すことが出来ていたら、少なくとも今のこのセブルスとの関係は良好だっただろう。」

私はセブルスから視線を逸らして、暗い地下の廊下を歩き進めた。少しして後ろから扉が開くような音が聞こえてきたのは、多分談話室に彼が入ったからだと思う。

彼らが私のことを死喰い人として警戒しているのかどうかは、もう少し見守ってから決めた方が良さそうだ。セブルス相手というのは、正直言つてあの人よりも手強そうだし。

「……それにセブルスの後ろにはダンブルドアもいる。」

慎重に行動しないと……

私は頭の中でやるべきことを整理しながら、自分の部屋に向かっ

た。廊下の突き当たりを曲がり、ダンブルドアの言った通り一番端の部屋が私の部屋だった。

少し古そうな扉を開けると、軋む音が聞こえてくる。部屋の電気をつける、古そうな扉からは想像できないほどに充実していた。

見ただけでもふかふかだと分かるようなソファ、物書きが出来そうな立派な机に、1人がけの椅子、いくらでも本がたてられそうな本棚に、お茶を淹れる材料が揃っている棚、そして暖炉。その部屋の隣にはもう一つ部屋が隣接してあってそこは寝室と、バスルームが付いていた。

あまりに充実すぎていて、私はトランクを片付けずにベッドになる。私の体の重みでベッドの空気が抜けていくのと同じように私の体の力も抜けていった。

そうなるともう、眠気が襲ってくる。風呂に入らないといけないのにといいながらも、抵抗する気などない私は気づけば瞼を下ろし眠りについていった。

ベッドがふかふかだったお陰か、久々に朝までぐっすり寝ることができた。最初目を開けた時は、一瞬自分がどこにいるのか分からなかったが、天井を数秒見ればすぐに思い出した。

もう随分と眠れない日々が続いていたせいで、朝まで寝たというとても小さなことが少し嬉しい。私は身支度を済ませ、朝食を食べる大広間へと向かった。正直あまりお腹は空いてはいなかったが、パン1つぐらいは食べておかないと後から体が動かなくなってしまう。

大広間には、朝食を食べている生徒たちがちらほらと居て、起きたばかりだからなのか少し元気がないように見える。

私は教員席の1番端に腰掛けて、目の前に広がっている朝食を眺め

っていると、欠伸が出てきた。もう眠たくないと思っていたのだが体は正直で、どうやらまだ私は眠たいらしい。

朝食というには豪華すぎると思いつながら、前にあった焼きたてのパンに手を伸ばすと後ろから、話しかけてくる声が聞こえてきた。

「隣いいかな?」

私に親しそうに話しかける人物など、ルーピンしか居ない。そう思いながら、顔を見たら思った通り彼だった。

別に私の隣だけしか席が空いていないという訳ではない。私が他に空いている席を見ている、ルーピンは何も気にすることなく隣に座ってきて、彼の顔が視界に入ってくる。本当は他に席が空いていると言いたかったのだが、言うのが面倒くさかった私はパンを手にとって、一口サイズにちぎっては口に運んだ。

別にルーピンと特別に仲が良かった訳でもない。だから話すことなどあるわけもないし、話す必要もないと思っていたのだが、どうやら彼はそうはいかないらしい。

「実は、ダンブルドアの計らいのおかげで、闇の魔術に対する防衛術の教師に就くことができたんだ。」

隣で話し出すルーピンの言葉を聞いても、何と返せばいいかわからない私は、ただひたすらにパンを口に運んだ。

「……まあ、その時に色々ダンブルドアと話してね。君にずっと断られていたから困っていたと話してくれたよ。」

確かにダンブルドアには、あれ以降も会う度に教師にならないかと誘われていた。一度自分で決心したことは、曲げない性格な彼が先に折れることはないということ、十分に理解しているつもりだ。一体何度断ればいいのか頭を悩ませていたものだ。

「一体、どんなに断ればダンブルドアにあんな表情を浮かべさせることができるんだ?」

思い出したように少し笑みを浮かべながら問いかけてくるルーピンの声を聞きながら、パンを飲み込むと側にあった水を飲み干した。

「…残念ながら、私は子供が苦手なの。子供好きな貴方には天職でも、私にとっては地獄でしかないのよ。」

パンを食べ終わった私が立ち上がると、私の方を見上げてくるルーピンはまだ何も手をつけていないことに気がついた。

単にまだ手につけていないだけか、それとも体調が悪くて食欲がないだけか、分からないが私の頭に自然と浮かんだのは、今日が彼にとつての初授業だということだった。

ルーピンがそんなことで、朝食を食べられないほど緊張をするとは考えにくいだが、その可能性も決してゼロではない。

「頑張っつてね。ルーピン先生。」

皮肉たつぷりに、彼に言葉を掛けると、困ったように少し引き攣つたような笑顔を向けてくる。どうやら、意外にも緊張していたらしい。

生徒達の安全を確保しながら、ブラックを拘束することを任せられた私は、勿論ホグワーツ中を自由に歩き回っていい許可が出ているのだが、結局のところ一体何をすればいいのか分からない。

ただ歩き回ってブラックを探し続けるふりでもしとけばいいのか、それとも生徒の側にも寄り添えばいいのか、あまりに明確としない仕事内容に私は頭を悩ませていた。

学生の頃は朝食を食べ終わった後、授業の準備をして、ひとりゆっくり教室に向かえば良かったが、今はそうはいかない。私は今生徒ではなく、魔法省の人間としてここにいる。

朝食を食べ終え、とりあえず大広間を後にした私は、どこに行けばいいかも分からずに自室に向かった。部屋に行つたところで何をやるわけでもないのだが、私の足は自然と地下の方向に向かつていた。

朝日が差し込んでくる廊下を歩き、地下へと向かっていると、どこかで匂ったことのある優しいシヤンプーの香りが鼻を触った。

私は自分自身に気のせいだと言いつ聞かせながら、気にすることなく歩き進める。そんな私にわざと感ぜさせるように吹いた後ろからの風に乗って、はつきりと彼女の声が聞こえてきた。

「セブ」

セブルスの呼び方といい、そして何より聞こえてきた声自体がエバンズそのもので、歩き進めていた私の足は自然と止まり、咄嗟に後ろを振り向いた。

エバンズが生きているはずがない。

私は確かに彼女の死体も見たではないか。

それなのに、どうしてこんなにもエバンズが生きているような気がしてならないのだろう。

勢いよく振り向いたせいで、視界を覆っていた髪がゆつくりとカーテンのように靡き、今まで何も見えなかった私の視界には、エバンズと全く同じ瞳を持った少年がいた。

瞳が同じ色、ただそれだけだというのに、逆にそれが残酷で、心臓が大きく波打ったのが分かった。

私が急に振り向いたことに驚いているのだろう。ロンと2人で歩いていたハリーは、少し不思議そうに私を見つめてくる。

………違う…

私はぎゅつと口を結んだまま気にすることなく、地下へと向かうために彼らから顔を逸らした。

一体何が違うというのだろう。心の中で出た言葉は頭の中を駆け巡るばかりで、何も分からないままだ。

………久々に、ホグワーツに戻ってきたからだ。………ただハリーを見ただけ。

あれは、ただの空耳で………単なる、私が気を張りすぎただけだ。

自分にそう何度も言い聞かせながら、部屋に戻ると私は座することもせずに、ただ扉の前で立ち尽くす。こんな姿外から見たら、様子が変なことぐらい誰にでも分かるだろう。

自分でも分からない。

どうして、私は椅子にも座らずこんな所で突っ立っているのか、ましてや手が震えているのか、理由なんて全く見当もつかない。

自分の手に視線を下ろすと、両手とも確かにまだ小刻みに震えていた。

5 禁じられた森

落ち着きを取り戻した私は、結局何故手が震えていたのか分からな
いまま、学校中を見回るように歩いていた。

もうそろそろ1限目の授業が始まるのだろう。廊下は、重たそうな
教科書を抱えながら教室に向かっている生徒達で賑わっている。

廊下で生徒達とすれ違う度に、私を怖がっているかのようには避ける
生徒の姿をしばしば視界の端に入れながら、それはしようがないと半
端諦めている。魔法省の人間だと分かっているにもかかわらず、目つきが悪い知ら
ない大人が、廊下を歩いていたらしきと怖いだろう。

それぞれの授業に向かっている生徒達にぶつからないように歩い
ていると、前からハーマイオニーが重たそうな本を抱えながら1人で
歩いてきた。何故ハリーやロンがいらないのかという疑問が頭に浮か
ぶと、さつき、ハリーとロンが2人つきりで歩いていたことが頭に浮
かんできた。

ハーマイオニーとロンはよく言い争いをしてしまうし、きつと喧嘩
でもしたのだろうと、勝手に決めつけながら、廊下を歩き進める。

歩いている生徒が多いのはしょうがないが、ずっと部屋で籠りっぱ
なしの私にとっては、それだけで疲れてしまう。人通りが少なそうな
ところに行こうと、角を曲がった時だった。

誰かが慌てたように走っていたようで前を見ていなかった私は、勿
論避けることも出来ずぶつかってしまった。

生徒の体を何とか受け止めることで、精一杯な私は少し体勢を崩し
ながら転けないように、体で受け止めるしかない。

どうやら生徒も前を見ていなかったらしく、思っていたよりも衝撃
が強くて、足がよろける。重たそうな本が落ちる音が聞こえてくる
と、落ち着いたような声が耳に入ってきた。

「すみません。」

謝ってくる生徒はどうやら女の子らしい。

私は足元に落ちた本を手に取り、顔を上げ生徒の顔を見た瞬間、口からは驚きの声がこぼれ落ちる。

「……………えっ…」

私の目の前に立っていたのは、さつきすれ違ったハーマイオニーだった。

グリフィンドールのローブに、栗色の髪の毛、どこからどう見ても彼女だ。ついさつき、私とは正反対に歩いて行った筈だというのに今こうして目の前にいる。

私の顔を見た彼女は、驚いた表情を浮かべるとすぐに何か慌てたようにキョロキョロと戸惑いだす。

「……………これ、落としたわよ」

拾った本を差し出すと、ハーマイオニーはすぐに受け取っては、何度も謝りながら逃げるように走り去って行ってしまった。

不思議でたまらなかったが、よくよく考えてみれば、彼女はタイムターナーを持っていた筈だ。そう考えればさつき身を持って体験した現象は十分にあり得る。

私は考え抜いた結論に納得しながら、乱れていたローブを整え、彼女が走ってきた方向へと歩いた。

授業が始まると、あんなに廊下にいた生徒達の姿は誰一人として居なくなり、一気に静けさが襲ってくる。

私1人の力で、凶悪犯であるブラックを捕まえられなくても思っただったら、魔法省も落ちたものだ。まあでも権力を横暴した行為が何度もされているから、最初から期待していない。

壁と隣接している石造りの椅子に腰掛けたりと、時々休憩を挟みな

がら、散策するようにホグワーツ中を歩き回った。

ホグワーツは私が学生の頃と、大きく変わっている様子はない。何度も行き来した廊下も、よく暇を潰すためにいた図書館も何も変わっていない。

私の時と何が変わったかと聞かれて答えられるのは、セブルスとポッター達の喧嘩や、セブルスとエバンズが2人で仲良く話している光景がもうそこには広がってないことぐらいだ。

私は窓から顔を出して、思いっきり空気を吸い込むと息を吐いた。顔を伏せて目を閉じると、思い出したくもないセブルスのあの表情が頭に浮かんできた。

「……………やっぱり…凄いな…」

私は誰もいない廊下の壁にもたれ、俯いたまま瞼を下ろす。

彼もここには、良いことばかりがあつた訳ではない。何なら、彼にとつて思い出したくもないことばかりな筈だ。

ポッター達に喧嘩という名の虐めを受け、怪我だつて沢山しただろうし、見世物にされたことだつてあつただろう。

「…それに…ここは…彼にとつて、大きな過ちを犯してしまった場所だ。」

自分の手で、大切な人を傷つけてしまったことなんて、思い出したくもない筈だし、それは私も身を持って体験している。

それなのに、セブルスはここで何年も教師をしている。

私はまだ一夜過ぎただけだというのに、もうこんなに嫌なことを思い出してばかりで、嫌になつていくというのに、彼は何事もない顔で教師をしている。

きつとセブルスも…嫌な記憶ばかり思い出している筈だというのに、……………もう慣れたのだろうか。

「……………やっぱり……………敵わない…」

呟いた私の声が聞こえてくると、自分よりも何倍も勇気も優しさも上回っている強い彼を本当に私が救えるのか不安になつてきた。

一時限目の授業が終わると、さつきまで静まり返っていたのが嘘のように一気に騒がしくなる。

やることもない私は、壁にもたれかかったまま前を歩き来する生徒達を見ていると、占い学の帰りであろうあの3人の姿が他の生徒達に紛れながらもしつかりと視界に入ってきた。ハリーとロンはどこか浮かない表情を浮かべていたが、ハーマイオニーは特に気にしていない様子だ。

多分、あの様子からしてトレローニからグリムが見えたとも言われたのだろう。ハーマイオニーだけが何も気にしていない様子で、2人に話しかけていたが、特にハリーは思い当たることがあるのか少し暗い表情を浮かべたままだ。

3人を見ていると、この後彼らがハグリッドの授業を受けることを思い出した私の頭にはバックビークの姿が過ぎる。実は少し会ってみたというのが正直な気持ちだが、見に行つて丁度ハリーがいる学年の授業と重なつたら面倒だ。

……生徒達がない時間帯は、朝一か、昼食の時間か、それか夜中ぐらいだろう。

私は生徒達が昼食を食べている時間帯を狙つて、禁じられた森に行くことを決めて、彼らとは真逆の方向に歩きだした。

授業が始まった頃、私は中庭で飛行訓練をしている一年生の様子を見ながら、暇を潰していた。

ずっと歩き回る体力があるわけもないし、ブラックを捕まえる気がない私にとっては、この仕事はとても馬鹿馬鹿しい。

石造りの窓から顔だして、授業をただ眺めていると、地面に置いた箒に手をかざし、必死に上がれと言っている生徒達はなんだか可愛らしく思えてくる。

そんな光景を見ていると大分時間が過ぎ、そろそろ授業が終わるだろうと思いつながら、廊下を歩いているとまるで禁じられた森の方向から、医務室に向かつて赤い血が点々と印をつけるかのように床に落ちているのに気がついた。

……ドラコかな

杖を一振りして床の汚れを落としながら、血の跡を辿っていくと、何故か床に落ちている血は医務室の方向に向かつていなかった。ドラコだと思っていたのだが、もしかすると別の生徒のものかもしれない。

不思議に思いつながらも、地面に落ちている血に視線を移しながら廊下を歩いていると、弱々しい声が聞こえてくる。

「死んじゃう、死んじゃうよ。」

廊下の突き当たりを曲がると、ハグリッドらしき姿が視界に入ってくる。よく見ると彼の足元にはドラコの血が一定のリズムでポタリポタリと滴っていた。ハグリッドの様子を見る限り、慌てすぎて医務室の方向を忘れてしまったように見える。

私が床に落ちている血を消しながら彼に近づくと、足音で気づいたのか話しかける前に振り返ってきた。ハグリッドの腕の中には、顔色を真っ青にして、今にでも泣きそうなドラコの姿があった。

「生徒が怪我をしたんですか？」

「ああ、ちよいと腕をな」

「医務室はこっちの方向じゃないですよ。」

私がそう言うと、彼は何か口元で小さく呟くように言う。あまりに小さな声で、何と言っているのか全く分からなかった。

「痛い…痛い。死んじゃう。」

「大丈夫、それぐらいじゃ死なないから。」

私が励ますようにドラコに話しかけると、彼は私をキッと睨みながら、さつきよりも大きな声で言ってきた。

「こんなに血が出てるんだぞ！」

そんなに声が出ている時点で死ぬはずもないというのに、ドラコは怪我をした腕を抑えながら怯えたような表情を浮かべた。私はしよ

うがなく杖を握り直して、彼の怪我をしている腕を掴む。

「なっ何をするつもりだ☒」

何も説明もなしにいきなり掴んだものだから、彼は身を縮めながら驚きの声をあげた。ドラコが何か言っていることには聞こえないふりをして、傷近くに杖先をもつていくと、彼の体はビクツと動いた。怖いのかぎゅつと瞼を瞑るドラコを見ながら、簡単な治癒魔法をかける。

「ほら、もう目を開けても大丈夫よ。」

そう呼びかければ、彼は素直に瞼を開けて恐る恐る自分の腕に視線を移す。

「……………止まってる……。」

血が止まっていることに驚いたのかは知らないが、聞こえてきたドラコの声を聞き流して私は口を開いた。

「応急処置をしたただけだから、早く医務室に行きましょう。ほら、早く。」

私は中々動こうとしないハグリッドの腕を引っ張って、医務室の方向に向かいながら、後ろを振り返る。さつきまで彼が立っていた所に出来ている小さな血溜まりを消し、前を向く。医務室まで誰も話そうとはしなかったせいで、着くまで気まずい空気に耐えなければならなかった。

無事ドラコを医務室に届け終わった私は、午前中の授業が終わるまで、壁と隣接しているベンチに腰掛けながら時間を潰した。

午前中の授業が終われば、廊下には昼食を食べに大広間に向かう生徒達の声で賑やかになる。

大広間に近づけば、入らなくとも前を通っただけで賑やかな声が聞こえてきた。昼食を抜いてまで、バックビークに会ってみたかった私

は、早歩きで大広間の前を通り過ぎる。

出来るだけ早く外に出たかったのだが、前からよく見たことのある生徒が歩み寄ってきては、話しかけてきた。

「こんにちは、ヘルキャットさん。」

じつと目を見つめながら話しかけてくるルーナの手には何か握られている。

「こんにちは、ルーナ」

挨拶を返すと、彼女は手に持っていた何かを持ち直しながら私に問いかけてきた。

「お昼ごはんは、食べないの?」

「少し、用があるの。」

別に急ぎの用ではなかったが、誤魔化すように言うところルーナはふんと言っただけだった。

「手に持っているのは何?」

さつきから何を手に持っているのか気になった私は、ルーナの手元に視線を移しながら問いかけると彼女は手に持っているものを私に見せてくる。

「日刊予言者新聞だよ。さつき、そこで拾ったの。」

彼女から日刊予言者新聞を受け取ると、まず目に入ってきたのはブラックが目撃されたという記事だった。

そんな記事を見て思うことは、私の記憶通りに進んでいるということだけだ。

「ありがとう」

お礼を言いながら、新聞を返すとルーナはまだ話したいことがあるらしく真っ直ぐ私を見つめてきた。

「今度、お昼一緒に食べよう。ご飯は一人で食べるより大勢で食べた方が美味しいってパパも言っていたもの。」

「分かったわ。約束ね。」

ルーナは頭を撫でながら言った私の言葉を聞くと、何とも彼女らし

い言葉が返ってくる。

「約束なんてしなくても、あんたが気が向いた時でいいよ。あたし、待つのは得意なんだ。」

彼女が言っている意味が全く分からなかったが、適当に返事をする
と、ルーナは満足したように1人大広間に入っただけだった。

ハグリッドの小屋の方向に向かってしていると、歩いている生徒の姿も
だんだんと少なくなり、外に出してしまうと、誰一人として歩いている
人などいなかった。

整備されていない階段を下り、細い道を進むと、あつという間に小
屋についた。ハグリッドの小屋を見上げると思っていた以上に小さ
く、小屋の近くに置いてある植木鉢には見たことのない植物が生えて
あった。授業で使おうとして準備したものだろうということは大体
予想がつく。

少しある段差を上り、木でできた扉を叩いてみたがどうやら留守ら
しく、どんなに待ってみても扉が開く様子がない。

バックビークの所に連れて行ってもらおうと思ったのだが、彼が居
ないとどうすることも出来ない。

しようがなく諦めようとしたが、森に視線を移すと、私は好奇心に
駆られて足が自然と動いていた。

学生の時に行くなど言われなくても、この森自体不気味に感じて、
よっぽどの用がない限り、近寄ることもしなかった。

：だが今は、不気味というより、森の中がどうなっているのかとい
うことの方が気になって仕方がない。

学生の時、あんなに恐ろしく感じたというのに、今はこんなにも躊
躇なく入ることが出来る。

森の中に足を踏み入れると、細い枝が折れる音が聞こえ、少し肌寒
く感じたが、そんなことよりも好奇心の方が勝っていた。まだ昼間だ
というのに、奥に入れば入るほど暗くなっていく森は、少し不気味な
雰囲気醸し出していた。こんな広い森で、バックビークを見つけ出
すことは不可能に近いことは分かっていたから、見つけだすつもりな

どない。ただ今は、この森には私以外の人間はいないということを考えると、何とも言えない気持ちになった。

気づけば、結構深いところまで来ていたらしく、周りは静まり返っている。見上げてみると、背の高い木の葉が空を覆っていた。

葉の隙間から差し込む太陽の光が、地面から突き出ている木の根や石に付いている苔の水滴を輝かせ、遠くから見ると小さな宝石が散らばっているように見える。

あまりに神秘的な光景に、見惚れていると後ろから誰かが枝を踏み、折れる音が聞こえてきた。

誰もいないと思っていた私は、聞こえた方向を振り返ろうとすると、すぐまた後ろでその音がする。

反射的に後ろを振り向くと、私の直ぐ後ろにいたのは人間ではなく、堂々とそこに立っている動物は、この神秘的な景色に似合っていた。

白色の毛並みに金色の蹄、額から突き出ている角。

……ユニコーンだ：

私の姿を見て、警戒しているのかじつと見てくる大きな瞳は、綺麗に透き通っている。敬意を持って接しなければならぬ動物というのは、きつとこういうことを言うのだろう。

私を避けることもなく横を通り過ぎたユニコーンは、立派な鬣を靡かせながら森の奥へと消えていく。

神秘的な光景を背景に見る、ユニコーンの後ろ姿は儂い存在のように感じたが、それ以上に美しかった。

6 落とし物

森から戻った頃にはもう午後の授業は始まっていて、廊下に生徒の姿はなく、時々授業のない教師が通るぐらいだった。

何もすることがない私はあまりに暇で、もう部屋に戻って仮眠でもしてしまおうかと考えていると、頭の上から穏やかな声が聞こえてきた。

「隣いいかな?」

顔を見上げると、最初に視界に入った立派な髭だけで誰が話しかけてきたのか直ぐに想像がつく。

「ええ、どうぞ。」

腰掛けていた私が顔も見ずにベンチの端に座り直すと、ダンブルドアは空いた私の隣に腰掛けてきた。

「仕事は順調かの?」

「順調かどうかは分かりませんが、私が暇だということは良いことだと思いますよ。」

彼の問いかけに答えると、愉快そうな声が聞こえてくる。

「そうじゃの。君が忙しくなったということは、ここにブラックが入ってきた時ぐらいじゃろう。」

彼がどこまで知っているかは知らないが、もしブラックが犯人だと思っているのなら、どうしてこんなに気軽に話せるのかが分からない。

「……………一体…この人は、何を考えているのだろう。」

私が死喰い人だということを知った上で、こんなにも親しくしてくるのか、それとも私に目を置いているだけなのか。全く分からない。

「……………一つ聞いてもいいですか?」

ずっと疑問に思っていたことを聞くために、重たい口を開き声を出

すと、私の声はやけにはつきりと廊下に響いた。私達の声しか聞こえないのがいけないのも知れない。

「一つと言わぬとも、いくつでも構わんよ。遠慮はいらない。」

いつもの調子で言ってくるダンブルドアの声を聞いた私は、あまり口を開くことなく声を出した。

「……何故、あの時庇ってくださったのですか？」

少し小さめの音量だったが、こんなに静まり返っている廊下では残念ながら聞こえないふりができない。

あの時というのが、私が死喰い人だと疑われた時のことだということとはすぐに分かったのだろう。それまですぐに聞こえていた彼の言葉が、今日初めて途切れた。

静まり返っている廊下には、時々遠くから授業を受けている生徒達の声と、小さな物音が聞こえてくるぐらいで少し空気が張り詰めた。

「……君は死喰い人ではない、そう信じておったからしたまでじゃ。」

少し間があいて言ったダンブルドアの言葉が、本心からの言葉なのか偽りの言葉なのか全く分からないが、そんな言葉を聞いた私の胸はちくりと痛む。

……少し罪悪感のようなものを感じた訳は、はつきりと分かっていた。

「そうですか。ありがとうございます。ずっと疑問に思っていたのですっきりしました。」

感じた罪悪感を誤魔化そうと、言葉を並べながらゆっくりと立ち上がると、後ろから私を呼び止めるダンブルドアの声が聞こえてくる。

「……暇なのならば、授業を覗いてみてはどうかの？そうすれば、何か見つかるかもしれん。」

彼の言っている意味が分からない私は、目の前にある青い瞳を見つめるが、それでも意味など分かる訳がなかった。

「……見つかるって…何を見つけるんですか？」

私の問いかける声を聞いたダンブルドアはにこりと微笑みながら、穏やかな声で助言をするように言ってくる。

「それは儂には分からんよ。だがこの世に必要なものなど何一つないことは知っておる。」

全く意味のわからないことを言う彼の言葉を聞いていると、だんだんと苛立ってきた。

……どうしてこんなにも曖昧にしか物事を言えないのだろうか。

腰掛けているダンブルドアを見ていると、自然と父の姿が浮かび上がってくる。

……父も…こんな風に訳の分からない事を言っていた。

はつきり言ってくれたら…間に合わずに済んだかもしれないのに。

苛立ちを抑えながらもう付き合いきれないと思った私が背を向けると、後ろから明らかにさつきよりも張り上げた声がしつかりと耳に入ってきた。

「落とし物は、案外近くに落ちておることが多い。一度周りを見回してみることが大切じゃ。」

「何が言いたいんですか？はつきりと意味を教えてください！」

腰掛けているダンブルドアに向かって少し声を張り上げると、全てを見透かられそうな青い瞳には私の姿が映っていた。

「…それは、君が一番分かっておるはずじゃ。」

……目を背けていては、いつまでも戻ってこない。」

はつきりと言い切る彼から視線を逸らした私は、どこに行くとも決めないまま適当に足を運んだ。

分かるはずがない。ダンブルドアが言っている意味など何一つ分からない。

戻ってこないって、一体何のことを言っているの。目を背けるって何から目を背けているというの。私は何にも目を背けていない。セブルスの死を変えたくて今こうしてここにいます。

私の手で殺した人の顔だって覚えていて。家族を殺したのは他でもない私だということもよく分かっている。

全く心当たりのない私の頭に、父や母、兄の姿が浮かんでは消え、叔母や叔父の姿までもが浮かび上がってきた。

「…戻るわけがない……」

口から溢れた私の声はとてもか細く、隣に居ても聞こえないほどの小さな声だったと思う。

気づけば私は中庭に足を運んでいて、急に吹いた風のせいで舞い上がった髪が視界を遮り、前が見えなくなると遠くからよく聞いたことのある声が聞こえてきた。

『やめなやうー』

力強い声を聞いた瞬間、私の心臓は誰か心当たりがあるように大きく波打つ。

違う……彼女じゃない……

私はそう何回も繰り返し、心の中で呟いていたが、体というのは正直で拳を作っている掌にはあまりに力強く握りすぎて爪が食い込んでいた。

痛みよりも今は、聞き覚えのある声をまた空耳でも聞いてしまったということの方が辛く、早足でその場から逃げ出した。

「……………違う……私じゃない……」

無意識に呟いた自分の言葉を聞いた私は、どうして自分がこんなことを言ったのか訳もわからず、足が止まった。

……今……私は何て言った……？……私じゃないって……何が自分で言ったことなのに、まるで他人が言った事のように感じられた。確かに私の口から出た言葉だ。それは間違いない。

授業が終わり、一気に賑やかになった廊下に響く生徒達の声も聞いても、胸元にもやもやしたような気持ちの悪い感触が消え去ることはないどころか、増えるばかりだった。

賑やかな生徒達の話し声を聞きながら、目の前にあった肉料理に手を伸ばし、皿に取り分ける。隣に座っているトレローニのお皿の上には、色々な食べ物が盛られていて、彼女は美味しそうに頬張っていた。ダンブルドアに言われたことがまだ頭に残っていた私は、正直食べる気力などなかったが無理矢理口に押し込んだ。美味しいのだが何が物足りないように感じて、私は甘そうなデザートを皿いっぱい盛っては、ご飯よりも甘いお菓子を食べ続けた。甘い焼き菓子を食べている時は、ご飯を食べている時に感じたあの物足さを感じなかった。

「そんな、甘いものばかりではなく、ご飯も取ってはどうですか？ バランス良く食事をしなければ体調を崩しますよ。」

横からそんなことを言われて手を止めると、マクゴナガルがサラダがのっている皿を私の方に押し付けてくる。

……母親が言いそうな事を……

「……そうですね……」

私は大人しく持っていた食べかけの焼き菓子を置き、フォークにサ

ラダを突き刺して口に運んだ。シャキシヤキしているサラダに、さっぱりしたドレッシングは相性バツチリで美味しかったのだが、やっぱり今は甘いお菓子をたくさん食べたい。

だがここでまたお菓子をたくさん食べたい。彼女に口を挟まれるのは目に見えている。

私は我慢をしてサラダを口に運ぼうとすると、金属と金属が当たったような甲高く耳障りな音が入ってきた。思わず聞こえてきたトレローニの方をフォークを握ったまま視線を移すと、どうやら彼女がフォークを皿の上に落としたらしい。しかし何故かトレローニは直ぐに拾おうともせず、私とは反対方向を見て固まっていた。

「どうかしましたか？」

少し不思議に思い、彼女に問いかけみると何か慌てたように私の方を見て大げさに頭を横に振りだした。

「いや、何もありませんわ。何も」

誰が見ても何かあったことに気づくほど、彼女の顔色はついさっきまでと打って変わって青白くなっているし、少し汗をかいているように見える。

「…そうですか。…それだったらいいのですが…」

私から視線を逸らしたトレローニはフォークを握ると、食事を再開するわけでもなく口を小さく動かして、何かぶつぶつと呟きだした。

明らかに様子がおかしく、私は彼女が見ていた方に目を凝らしてみると、トレローニが見ていた方向にはもう一つある教員席があり、自然と黒髪を左右に分けた彼の姿が視界に入った。

向こう側の教員席にはセブルス、そして私が座っている教員席には端にルーピンもいる。

セブルスが座っている教員席を見て、怯えるトレローニ。

ほぼ答えは出たような気がしたが、まだすつきりとはしない。

…一体、彼女は何を見たんだろう。

問いかけてみたい気持ちはあったのだが、未だに何かぶつぶつと言っている彼女の様子を見る限りではそれは叶わないだろう。

夕食の後、生徒達が談話室で課題に取り組んでいるであろう時間帯に私はホグワーツの周辺を見回っていた。私も部屋でゆっくりと出来ればいいのだが一応仕事としてここにいる以上、仕事をしているような振りをしていないといけないだろう。

：禁じられた森に1人で入ってしまったのは、今思えば浅はかな行動だったが……セブルスからブラックの手引きをしているなんて思われてしまうのは、何としてでも避けたい。

もうすっかり日も暮れ、星も出だした時間帯、空を見上げるときらきらと輝く星よりもホグワーツの上空を飛び回っているのがデイメンターの姿が目に入ってくる。

こんなにいるのに結局はブラックに侵入されることになるし、デイメンターは意外に役に立たないんじゃないかと思いつながら見上げてみると、正面玄関から抜け出す人影が見えた。

少し遠くて、顔は見えなかったが明らかにハグリッドの小屋に向かっていて、さらには3人の人影から誰だかは大体は想像できる。

自分の命を狙っている殺人鬼が、近くにいてもかもしれないというのに、よくこんな夜に抜け出すことができるなど感心しながらも、少し苛立ちを覚えた私は、ハグリッドの小屋に向かって3人の人影の後を追った。

扉の前に立ち、ノックをしようかと考えていると、ハグリッドの大声が中から聞こえてきては、扉が勢いよく開いた。あまりに勢いよく開いたものだから、ノックをしようかと近づけていた手が当たりそうになったが、反射的に引っ込めたおかげで怪我をすることはなかった。

ハリーの腕を引っ張っているハグリッドと目が合うと、まさか私がここにいるとは思っていなかったのか彼の表情が驚いたように固ま

る。

「…見回り中に城から出てくる人影が見えたので迎えにきました。」

私の声が聞こえてないということではないと思うが、何故か何も言っていないハグリッドは少し険しそうな表情を浮かべる。

「…安心を、私が彼らを学校まで送り届けますので」

「……………よろしく頼みます」

少し間が空いて、やっと彼の言葉が返ってきたものの、ハグリッドは私が歩こうとするまでハリーの腕を離そうとはしなかった。

きちんと後ろから3人がついてきているか確認するために振り返ると、彼ら越しにハグリッドを見ると、もうすっかりと小さくなっているというのに未だに彼は小屋の外に出ていた。

「…わざわざ日が暮れてから会いに行くなんて、何を考えているの?」

そんなハグリッドの姿から彼らに視線を移し、少し睨みつけながら言う。ハリーが訳を話そうと口を開く。

「心配だったんです。」

「言い訳は結構よ。訳が聞きたくて貴方達を迎えに来た訳じゃない。」話を続けようとするハリーを遮るように話すと、彼の顔が少し歪んだ。

……………彼がこう行動するのはしようがないことは分かっているが…それでもやっぱり何も知らないとはいえ、セブルスが命がけで守ろうとしていることを考えると腹が立つてしょうがない。

分かっている。彼はまだ知らないし、どんな状況かもよく理解できない子供、どれだけの大人が自分の安全のために動いているのかきつと想像もついていない。それでもだ。

あまりに無責任すぎる行動に苛立っていた私は、ハリーを横目に入

れながら後を続けた。

「…シリウス・ブラックが脱獄したことぐらい貴方達も知っているでしょう?」

私の顔を見つめてくる彼らの顔から視線を逸らし、前を向いたまま冷たく言い放つ。

「…殺されようとして自分から危ない目に遭おうとしているのなら、私は止めないわよ。」

……私は、貴方を守るつもりなんてない。

明るい光が漏れているホグワーツの正面玄関に送り届け、ハリーだけを見つめて、冷たい言葉を並べた。逆光で彼の緑色の瞳は見えなかったことをいいことに、私の口からはハリーの爛に触るだろう言葉が自然と滑り落ちる。

「…ああ…それかあの人を殺した英雄様だったら何をしても許されると思っっているの?」

私の言葉に固まるハリーを守るかのようにロンが前に立って、ハーマイオニーが私に反論しだす。

「ハリーはそんなこと思っていないよ!」

「だったらそれ相応の行動を見せなさい。誰が見ても、貴方の行動は自分勝手すぎる。」

私の言葉に何か反論しようとしたのかハーマイオニーが口を開いたのが見えたが、私は口を挟ませまいと空かさず声を出した。

「私やデイメンターがここにいてというのがどんな意味なのか分からないの? そんなことよく考えてみなくても冷静になれば分かるはずよ。」

私が知っている未来を訪れるようにするためには何も言わない事が正解なのだろうが、ただ今は我慢ができない。相手は子供だというのに、大人気ない私は動き続ける口を止めようとしなかった。

「それは、それだけの事態ということよ。貴方の命を狙う奴が、貴方よりも何倍も魔術に長けている奴が今この瞬間でも、殺しにかかってくるかもしれない。」

だから私はこうして生徒達の安全を守るためにここにいるの。

……いくら私が貴方達の安全を守れたとしても、貴方達が殺人鬼の潜んでいる所へ自ら飛び込んでいったら意味がない。」

こんな説教じみたことを言ったとしても、私の言葉など耳に入らないだろう。届く希望があるのはハーマイオニーぐらいだ。

彼らは、私に良い印象を抱いていないと思う。そんな怪しく思っている人に言われたことなど頭に入る訳がない。

「……ほら、早く寮に戻りなさい。先生に見つかると、減点されるんじゃないか？」

そんなことを考えながら溜息混じりに言うと、私の言葉に我に返った3人は、私に背を向けてホグワーツの奥へと消えていった。少しはこれで行動を改めてくれるといいのだがきつとそれはない。

……何せあのポッターの子だ。よく想像がつく。

校則を破る癖はそう抜けないものだ。

7 大人になれない大人

突然ゴンという鈍い音と、額に何か打ったような痛みが襲いかかってきて、それまですっかり寝ていた私は目を覚ました。ゆっくりと瞼を開け、体を起き上がらせると何故か床に座り込んでいる。

ソファーからブランケットが今にも落ちそうになっているのを見て、あまりの眠たさにソファーで寝てしまったことを思い出す。

あちらこちらが痛む体を無理矢理起き上がらせ、鏡を覗き込むと少し額が赤くなっていた。シャワーを浴び服に着替えながら、持参してきたクツキーを頬張ると甘い香りとピーナッツの風味が口いっぱい広がる。

水を一口飲み、机の上に雑に置いてあるペンダントを手にとると、引き出しの奥にしまい込み、部屋から出た。

正直言ってまだ眠っていたかったのだが、もう一度寝てしまうと昼になってしまいそうだ。まだぼんやりとしている意識の中、地下牢を歩き進めて、大広間に向かった。

着ていたローブを整えながら朝食が準備しているであろう大広間の中に入る。

眠たそうに朝食を食べる生徒は、話しながら食べているものもいれば、課題が終わらなかつたのか、分厚い本を開いているものもいる。私が起こしたのは、結構時間が遅いのか、大広間には結構の人数の生徒で賑わっていた。

ふとスリザリンの席を見ると、怪我をした腕に包帯のようなものを付けているドラコが、武勇伝のように周りの生徒達に話しているのが見えた。あんなに泣きそうだった彼の姿が嘘のように思えてくるほど、誇らしそうにすらすらと言葉を並べている。

私があまりに見ていたからなのか、スリザリンの生徒達に話しているはずのドラコの視線が私の方を向いて、ぼつちり目が合った。私を見てくる彼の目はルシウスにそっくりで、彼の面影を感じた私は視線

を逸らした。

ドラコの未来が決して良いものではないことを知っている私は、彼と関わるのを無意識に避けている気がする。まだ学生の彼が家族を守ろうと、人を殺そうとする姿を思い出しただけで、少し胸が痛んだ私は、まだ良心が残っているのかもしれない。

授業が始まったホグワーツの廊下を一人行くあてもないまま、ふらふらと歩く。あまりに暇で暇で、これを本当に仕事だと言っているのか分からないほど、何もしていない。

ここに来て、やったことと言えば、ひたすら学校中を歩き回ったことぐらいだ。

「……………退屈だ……………」

そんなことを無意識に呟いてしまうほど、暇なのだからしょうがない。

窓から顔を出すと、今日は風が強いらしく少し肌寒かった。城の近くにある遠くまで広がっている湖の水面がキラキラと輝いているのを何となく眺めているとダンブルドアに言われた言葉が浮かんできた。

『暇なのならば、授業を覗いてみてはどうかの？そうすれば、何か見つかるかもしれない。』

流石に授業中お邪魔するのは、如何なものかと思っていたのだが、ダンブルドアが言ってきたのだからそこらへんは気にしなくてもいいということだろう。

……………彼の言っていたことも気になるし……………

ダンブルドアの言っていた落とし物というのが一体何のことなの

か、全く想像もついていない私は、少し気になっていた。それに……もしかすると、セブルスが授業している姿を見られるかも知れない……。

ある可能性が頭に浮かぶと、あんなに怠かった体が一気に軽くなる。

私が授業に顔を出せば、彼はきつと嫌な顔をするだろう。

……でも……セブルスが授業している姿は、……エバンズでも知らない。

授業を終えた生徒達の声で、さつきまで静かだった廊下が賑やかになると、私はそこで初めて自分が優越感に浸るように口角を上げていることに気がついた。

まさか、表情にまで出ているとは思っていなかった私は、上げていた口角を下ろし、真顔に戻すと地下牢に向かって歩き出す。

ああ……本当に私は性格が悪い。

魔法薬学の授業をしているであろう教室の前に立ち止まる私は、本当に入っているのか迷っていた。もう授業が始まって、結構な時間が経っているのだが、実はこの時間はハリーがいる学年の授業らしいのだ。正直言って、彼とは関わりたくない思いが本心だが、……この前自ら彼らに近づいてしまったことを思い出すと溜息が出る。

……セブルスが授業しているところ……まだ見ていないし……

私は扉の奥を見るように、魔法薬学の教室の扉を見つめて少し考え込んでいると少し大きなセブルスの声が聞こえてくる。

来年またここに来れるという確証がないというのに、彼が授業をする姿を見ないなど勿体ない。

：何か言われたらダンブルドアの名前を出すことにしよう。

少し不安な気持ちを抱きながらも、何か踏み入れてはいけない所へ行く時に感じるあの緊張したような、そんな気持ちで中に入ると、案の定そこでは魔法薬学の授業が行われていた。

生徒達の前の机に並んでいる大鍋からは湯気が立ち上り、教室に入った瞬間に煎じた薬草の匂いと、薬独特の匂いが香ってくる。この匂いを嗅ぐと、一気に学生の頃に戻ったような気がした。

突然教室の扉が開いたからだろう。私には当然生徒達やセブルスの視線が集まってくる。何と言おうか少し迷っているとセブルスの低い声が聞こえてきた。

「何か用ですか？」

まさか貴方の授業をしている姿を見にきました、なんて言えるわけがない。

「：用はないですが、少し授業を覗いてみたくなりました。お邪魔でしたか？」

誤魔化すように言った私の言葉に、セブルスは納得していないように顔をしかめる。

それもそうだろう。彼が私のことをどう思っているのかは知らないが、絶対良い風には思っていない。

「ご安心を。校長からは許可を得ています。」

眉間のしわが一本増えたセブルスは、きつと今ダンブルドアに苛ついていることだろう。死喰い人の私を、ハリーに近づけることはセブルスにとって余計な仕事が増える。

「：シリウス・ブラックがまだ捕まっていないというのに、呑気なものですな。」

お得意の嫌味を言ってくるセブルスを見ていると、私は少し可笑しくなつて笑みがこぼれた。今こうして話せているだけでも、私の心臓はいつもより鼓動を早くしているし、体温も熱い。彼とただ話してい

るだけだというのに、私は今こんなにも生きている感じがする。こんなにも、嬉しい。

「……心配なく、彼はまだホグワーツにはいませんので」

私の言葉に何か引つかかったような表情を見せるセブルスを無視して、私は教室の隅に身を置き、生徒達を見つめた。

「私のことは気にしないでください。どうぞ授業を始めて」

静まり返っていた教室には、再び生徒達が調査を開始した音が響き渡る。

中々苦戦している様子の生徒の後ろ姿を見ると、ローブの色は緑色ではなく、赤色だったが自然と学生の頃の自分自身と重なった。

いくら教科書通りにしても、上手くいかなかったから、魔法薬の成績はお世辞にも良かったとは言えないものだった。

……彼と話すきっかけがほしくて、よく魔法薬の本を読んでいた記憶が蘇ってくる。

懐かしい気持ちに浸りながら、その生徒を見つめていると、私が見ていた子の鍋の中を覗いたセブルスの声が聞こえてきた。

「オレンジ色か、ロングボトム」

どうやら、私が見ていたのはネビルだったらしい。

セブルスが彼の大鍋の中の薬を柄杓ですくい上げると、確かに綺麗なほどオレンジ色だった。他の生徒の大鍋を試しに、のぞいてみるとみんな黄緑色で、どうしてこれがあんな色になるかが不思議でたまらない。

確かに私も魔法薬が苦手だったが、……あんなに露骨に違う色にはならなかった。

「教えていただきたいものだが、君の分厚い頭蓋骨を突き抜けて入っていくものがあるのかね？」

我輩ははつきり言っただはずだ。ネズミの脾臓は1つでいいと。聞こえなかったのか？ヒルの汁はほんの少しでいいと、明確に申し上げたつもりだが？ロングボトム、いったい我輩はどうすれば君に理解していただけるのかな？」

セブルスに長々と言われるネビルの体は小刻みに震えていて、彼を

見るネビルの顔色が真つ青を通り越して、真つ白になっている。まるで、目の前に世にも恐ろしいものがあるような表情をしていた。

ネビルがセブルスのことを怖がっていたことを思い出した私は、1人納得しながら相変わらず震えている彼の後ろ姿を見つめた。

だから、恐怖のあまりいつもの何倍もへまをやるんだろう。

そんなネビルの背中から、セブルスに視線を移せば彼の口は今だに動いていて、セブルスの口から出る一つ一つの言葉に怖がっているようにネビルの体は縮こまっていく。

そんな彼が面白いのかどうか分からないが、叱るセブルスが少し楽しんでるように見えた。勿論表情も声のトーンも一切変わらない。

叱られて怯えている様子のネビルの後ろにいたグリフィンドールの生徒達は、明らかにセブルスに対して良い風に思っていないような表情を浮かべている。

……ここにいる生徒達は、きつと全員セブルスのことを誤解している。

彼の思惑通り、ここにいるグリフィンドールの生徒達は、彼のことをスリザリンを鼻屑する性格の悪い教師とでも思っているのだろう。

根暗ではないと言ったら嘘になる。でも一度話したら、時間なんて忘れるほど楽しくて、とても面白い人。

本当は誰よりも優しく、勇気のある強い人だというのに……。

ネビルを助けたいとは思わなかったが、セブルスの印象がこれ以上悪くなるのが見てられない。勿論、そのことは本人が望んでいることは分かっている。

脳裏にセブルスの息絶える姿がふつと過ぎると、足は勝手に動き出し、私はセブルス達へと近づいていた。

……大切な人があらゆる人から嫌われたまま死んでいくのは……あまりに悲しすぎる。

生徒達の間を通り過ぎて、ネビルのところへ向かっていると、隣に

いるハーマイオニーがセブルスに頼む声が聞こえてくる。

「先生、お願いです。私に手伝わせてください。ネビルにちゃんと直させます」

勿論セブルスがそれを許すわけがないし、何と言葉を返すのか大体予想がついた。彼がグリフィンドールを嫌う気持ちだつて分らない訳ではない。私だつてどちらかというどグリフィンドールにはろくな奴がいないイメージしかない。

それでも、……何故セブルスが悪役のように思われなければならないのか理解にできない。

「君にでしゃばるよう頼んだ覚えがないがね、ミス・グレン」素晴らしきことではありませんか。」

セブルスの話を途中で遮ると、ネビルやハーマイオニーを始めとした生徒達の注目した視線を感じながら、彼に視線を移した。

私に話を遮られたことが気に食わないのだろう。セブルスの目の奥に感じる殺気に、少し鳥肌が立った。

「どういう意味ですかね？」

普段よりも一段と低い彼の声を聞いただけでも、私に対して苛立っているのが十分に分かる。

「同級生同士が教えあつて授業をするなんて、お手本のような授業風景ですよ。…教えている方も改めて復習できますしね。」

今にも殺されそうな勢いで睨んでくるセブルスが視界に入ったが、彼の目から逸らさずに、私は覚悟を決めて声を出した。

「…よく私も貴方に教えてもらつてましたね…魔法薬」

その言葉に、私とセブルスが同級生だということに気づいた何人かの生徒達がざわざわと話し出す。

こんな生徒達の前で過去のことを引つ張り出すなんて卑怯なことをしているという自覚もあるし、私が出る幕ではないことも分かっている。

でも…こうでしないと私の気も治らなければ、セブルスを言いくるめるなんてできる自信もない。

あんなに睨んできていたセブルスの瞳は昔を思い出しているのか、瞳孔を開いて私をじっと見つめてくる。

長いローブを靡かせながら、華麗に背を向けた彼の小さな声が聞こえてきた。

「……………好きにしろ…」

まさか、こんな簡単に引き下がるとは思っていなかった。思いのほか、生徒達の前で学生の頃の話をされたくないのだろう。

前を歩くセブルスの後ろ姿を見ていると、なんだかとても申し訳ない気持ちがかかっていた。

「…ほら、早く彼女に教わってしまいなさい。」

固まっているネビルの顔を見ながら私が呼びかけると、我に返ったように自分の鍋に視線を移す。ハーマイオニーに教わりながら、鍋に材料を入れていくネビルの姿を見て、教室の後ろに戻ろうとすると横から呼び止める声が聞こえてきた。

「……………あつあの」

声が出た方を見ると、ハリーが何か聞き出そうに私の方を見つめてくる。

「何か？」

何か迷っているのか、中々口を開こうとしないハリーの後ろにいるロンが何か気づいたように彼の肩を揺らしている。

そんな彼の表情はどんどん焦っているようなものになっていき、ハリーの肩を揺らし方もどんどん大きくなっていった。

中々話そうとしないハリーと、その後ろで慌てているロン。そんな2人の姿を見ていた私は、おかしな光景に少し笑いそうになる。

ハリーが肩を揺らされることに気づいたのは、ロンが慌てたように肩を叩き出した頃だった。少し痛かったのか、顔を歪ませながらロンの方を見ようとしたハリーは私の後ろを見ると、一段と険しい表情を浮かべた。

「随分と余裕そうですね。」

後ろからよく聞いたことのある声が、耳に入った瞬間誰がいるのか

すぐに分かり、ロンのあの慌てようもハリーの険しい顔も納得できた。

彼が私の隣に移動してくると、ふわりと懐かしい香りがし、黒いローブの裾が視界の端に入ってくる。

「呑気に話す余裕があるのなら、勿論調査を完璧に終わらせていることだろう。」

何も答えないハリーは、無表情でセブルスを見続けている。この2人の間にいると、少し息がしづらいと感ずるぐらいに、居づらくてたまらない。

恐る恐るセブルスに視線を移すと彼はハリーの鍋を見て、口をゆつくりと開いた。

「…ほお…：終わってもいないというのに、呑気にお喋りとは偉くなったものだな。ポッター。」

グリフィンドール5点減点だ。授業に関係ない私語は慎め。」

ハリーがセブルスに寮の点数を減点されるのは、もう数えきれないほどあるのだろう。彼は減点されても慣れたように表情一つ変えなかった。

減点を終えたセブルスは、私にまるでハリーに近づくななどでも言っているように睨みつけてくる。

…：彼に睨まれるのはしょうがないことだ。セブルスにとって私は死喰い人で、ハリーの安全を脅かす存在なのだから。

それでもやっぱり睨まれると胸がちくりと痛む。

…：私は…：セブルスのそんな表情を見たくて来た訳じゃない。

でも…：もうきつと私が見たい表情は…：もう二度と見せてくれないだろう。

私に向かつてぎこちなさそうに、それでも優しく微笑んでくれることもないのだろう。

もう…：…：いくら頑張ったってあの頃には戻れない。

授業終了を告げるベルの音が聞こえてくると、彼が生徒達に一言二言話し終え、生徒達が1つしかない教室の扉に一斉に向かっていく。教科書を抱えながら友達と話しながら出ていく者や、邪魔にならないように壁に寄っている私を、ちらちら見ながらひそひそ話している者もいる。

1つ問題があるといえば、ハリーにセブルスとの関係について問いかけられるかもしれないということだ。学生の頃、魔法薬学を教わっていたと聞いたなら、仲が良かったという誤解を招いている可能性も十分にあり得る。

生徒達が教室を後にする中、中々動こうとしないハリー達の姿に視線を移すと、ハーマイオニーがハリーを止めるようにローブを握りしめていた。

嫌な予感しかしない私は、さっさとここから立ち去ろうと入り口に近づくと、後ろからハリーを呼び止めるような声が聞こえ、小走りの足音がだんだんと大きくなっていく。

……ああ…来てる…

「あの一！」

声は勿論聞こえたが、構わず歩いているときつきよりも大きな声が後ろから聞こえてきた。

「待ってください!!」

これも聞こえないふりをするつもりだったのだが、彼にローブを握られたせいで自然と足が止まってしまった。振り向けば後ろにいたのは勿論ハリーで、何も知らない彼は緑色の瞳で私を見つめてくる。

……どうして…

……エバンズは死んだというのに、

目の前に緑色の瞳があるのかが分からない。

目の前にいるのはエバンズではなく、ハリーだということはおわかってはいるが、それでも彼女に見られているようで気分が悪くなる。

彼女はもうこの世にいないというのに、
死んだというのに、

……どうしていつまでも私に彼を譲ってくれないの。

「貴女と、……スネイプ先生は、学生の頃仲が良かったんですか？」

私の気持ちも知らぬまま問いかけてくるハリーは、一体何が知りたくて問いかけてきているのか、全く想像もつかないと言いたいところだが、どうせセブルスの弱みでも聞き出そうとしているのだろう。

「……そんなこと知って、どうするつもり？」

教室を出ようとする生徒に道を譲りながら冷たく返すと、ハリーは私を見つめたまま口を固く閉じたままだった。ハリーの後ろに広がる教室にはハーマイオニーやロン以外に、セブルスと話しているスリザリンの生徒だけで、教室にはもうほとんど生徒の姿はなかった。

私の中にあるセブルスとの記憶ぐらい、独り占めしたっていいじゃないか。

……それぐらい私だけのものにしては駄目だというの？

目の前にある緑の目は、私の記憶さえ奪っていくつもりなのだろうか。

近づいてくる2人の姿に一瞬だけ視線を移し、少しだけ間を置いて、声を絞り出した。

「……人の過去は……好奇心で知っていいものじゃない。」

私とハリーの間流れる少し変な空気を感じ取ったのだろう。近寄ってきたハーマイオニーが私の方を見て、少し険しい表情を浮かべた。一方ロンは、何が起きたのかさっぱり想像もつかないらしい。

スリザリンの生徒が私の後ろを通り、教室を出ていくとこちらに近づいてくるセブルスの姿がハリーを越して見える。

「ポッター。」

低く落ち着いた声を聞いた彼らは、私に頭の背を向ける。顔は見えないが、きつと3人は嫌そうな表情を浮かべているに違いない。

「昼食の時間を無駄にしまで、ここに残るとは……一体どんな大事な用事があるのか教えていただきたいものだな。」

「……いえ、何の用もありません。」

セブルスの問いにぶつきらぼうにそう答えたハリーは、私を見向きもせずに教室を去っていく。後を追って出ていくハーマイオニーと一瞬だけ目が合ったような気がしたが、きつと気のせいだろう。

いきなり、2人つきりになったからなのかどうかは分からないが、静まり返った教室の空気は重く、とても居心地がいいとは言えない。気まづい空気に耐えきれず、教室から出ようとする後ろから低い声が聞こえてきた。

「どういうつもりだ？」

後ろを振り返れば、勿論セブルスが私の方を不機嫌そうに見てきていた。

……やっぱり…呼び止める時でさえ……

私の名前は呼んでくれないらしい。

「どういうつもりって？」

何も知らない風に聞き返せば、彼の表情は察せと言わんばかりにどんどんきつくなっていく。

「何が目的でここに来た」

「生徒の安全を守るためよ。」

壁にもたれながら言うと、セブルスが苛立ったように声を少し大きくした。

「我輩がそう意味で聞いていないことぐらい分かっているだろ。」

「残念ながら、分からないわよ。貴方が言いたいことなんて。」

私の言葉に何も返答が返ってこず、部屋が静まり返り、また気まづい空気が流れる。

……セブルス相手に一瞬でも気を抜いたら、全て知られてしまいそうで、気を張りながら彼の真っ黒な瞳を見つめた。

何を考えているのか全く分からず、もしかすると今この瞬間私が気が付いていないだけで、開心術をしているかもしれない。

……心の中を覗かれたら……何もかも…見られてしまう。

そんな可能性が浮かび上がってくると、少しだけ嫌な汗が出てくる。

私はそんな不安をかき消すように、セブルスが動揺しそうな話題を振った。

「……………あの子…凄いきつくりね。」

私が独り言のように呟きながら、ハリーが出て行った扉に視線を移しながら後を続けた。

「いくら親子とはいえ、あんなに親に似過ぎるものなのかしら……………」
それに…あの子を見ていると…エバンズに見られている気がしない?」

扉からセブルスに視線を移しながら、問いかけると彼の瞳が一瞬だけ動揺したように揺れたのがしつかりと見えた。

「…そんな訳ないだろ。」

「……………そう?…同じ緑色じゃない。」

「同じ色だから何だって言うんだ。」

私の問いかけにも冷静に返してくるセブルスが嘘をついていることぐらいすぐに分かった。

彼は最後の瞬間、ハリーの瞳をエバンズに重ねて死んでいく。…………

そんな彼が、ハリーの瞳を見て何も思わない訳がない。

それなのに、そんな素振りなんて全く見せない。

…どうして不器用なくせに嘘はこんなにも上手いのだろう。

きつと未来を知らなかったら、彼が何をするつもりなのかも、見抜けることなんてできなかつた。

私に背を向け、何か作業をし出すセブルスの背中を見ていると、どうしようもない思いが溢れ出していく。

貴方も……………私も……………嘘つきだというのに、

どうして貴方の嘘はそんなにも綺麗で優しいものなの……………だろう。

それに比べて……………私のは……………

……………汚くて…………醜い。

貴方の嘘は、誰かを救う為にあるというのに、私の嘘は自分自身の為。セブルスを救う為の嘘？いや、私の嘘何て所詮は自分自身が傷つけないように生きていくため。

それ以上は掛ける言葉が見つからず、私は静かに教室から出て、地上に出る階段を上った。

昼食の準備がされている大広間には向かわずに、人通りが少ない廊下のベンチに腰掛け、今からどうしようかと悩んでいると、何か手に持ちながら、ボロいローブを身に纏ったルーピンに気がついた。

特に用事も何もない私は、話しかける気などなかったのだが、どうやら彼は私に用事があったらしく明らかに私の方に近づいてくる。

立っているルーピンを少し見上げると、彼の手の中には到底一人では食べきれない量のサンドイッチがあった。

「レイラ、良かった。やっと見つけた。」

「……………用事は？」

早く話を終わらせたかった私は、手短に問いかけると、ルーピンはにこりと笑いかけてくる。

「お昼はもう食べたかい？」

「……………食べてないけど…………」

反射的にそう答えたが、私の答えを聞いたルーピンの表情を見ると、次何と聞かれるのかはもう大体予想がついてしまった。

「良かったら、お昼と一緒に食べないか？」

「…………いや…………私人が多い所で食べるのは苦手だから、遠慮しておくわ。」

丁寧に食べたくないと遠回しに断ったつもりなのだが、ルーピンは私の言葉を聞いても決してめげずに誘ってくる。

「そういうと思って、大広間からレイラの分のサンドイッチも持ってきたよ。静かなところでゆっくりと一緒に食べようかと思ってね。ほら、早く。時間がなくなってしまう。」

そう言ってくるルーピンの姿を見ると、これは何を言っても聞いてくれないと思い私は何も言わず彼の隣を歩きながらついていった。

「ほら、ここだったらいだらう？」

そう言いながら着いた場所は、闇の魔術に対する防衛術の教室で、勿論私達以外誰も居らず、ルーピンはサンドイッチを持ったまま階段を上って奥の部屋へと入っていく。

彼の後を追いかけて、奥の部屋に入るとルーピンは近くにあった机の上にサンドイッチを置いて、お茶を淹れていた。

置かれてあった椅子に腰掛けて、部屋を見回していると、私の前にお茶を置いてきた。

疲れたように腰掛けるルーピンは、自分で持ってきたサンドイッチを手にとって、口に運んだ。静まり返った部屋には、野菜のシャキツとした音がよく響く。

「ほら、遠慮は要らないよ。好きなものを食べていいんだから」

私が遠慮しているとでも思ったのか、3種類のサンドイッチを私の前へと押しやってくる。崩された卵が挟まっているものと、たっぷりの野菜に、ベーコンや鶏肉が挟まっているものがあった。

美味しそうには見えたが、今の私には食べる気などなく、勿論出されたお茶も飲む気など一切ない。

「そんなことより、早く要件を話してほしいのだけれど。」

私が椅子に深く座り直しながら問いかけると、サンドイッチを食べていたルーピンの手が止まった。

「こんな回りくどいことをしなくても、話ぐらいはするわよ。」

一緒に昼食を食べないかと誘われた時から、どうせ何か話したいこ

とがあるからだと思っていた私は、特に何も疑問に思わずに彼に話を切り出した。

…出来るだけ早く用事を済ませたかったからだ。

まだどこかピンときていないのか、少し険しい表情のまま固まっているルーピンを見て、何故彼がそんな表情をしているのか訳が分からない。

「昼食を誘ってきたのは、何か話があるのでしょ？」

そう問いかければ、やつと話してくれると思っていたというのに彼はサンドイッチを置いて、思ってもいなかったことを言い出す。

「いや、…私はただ君と一緒に食事をしようかと思つて誘つただけだよ。……話をしようとして、こんな回りくどいことなんてしないさ」

「……じゃあ…何、貴方は私と単なる食事をしたいがためだけにわざわざ誘ってきたというの？」

「ああ…その通り」

そう言われてもどんな反応をすればいいのかさっぱり分からず、少し下を見て黙り込むしかなかった。

「それに、今日パンを一口食べただけで終わっていたのをたまたま朝、目にしてね。」

「…クツキーも食べたわよ。」

ムキになつて答えた私を見てか、お茶を飲んでいたルーピンは少し笑いをこぼす。

「朝の調子を見ると、昼も抜くと思つたから、少し気になったものでね。それに食事を抜くと力なんてでない。」

「……そうかしら。誰にも迷惑をかけていないんだから、貴方が気にすることなんてないんじゃない。」

どこから取り出したのか分からないが、ルーピンに視線を移すと何故か手にはチョコを握っていた。

「食事を抜いて、倒れたら結局誰かに迷惑がかかってしまうし、そんなことは君も望んでないだろう。」

板チョコを一口サイズに分けて、口に放り込むルーピンは、幸せそ

うな表情を浮かべながらチョコを食べだした。

「流石に倒れそうになる前に気づくわよ。…それに、一回食事を抜いただけでは残念ながら人は死なないわ。」

「そうかな…」

そう言いながら、チョコを机の上に置いた彼は、ティーカップを手に持って口を開いた。

「…君は、気づかないよ。自分が倒れた時に初めて無理をしていたことに気づく。」

「まるで、私のことを分かっているような口ぶりね。ルーピン。」

私が嘲笑いながら言っても、彼は少し微笑んだ表情を崩そうとはしない。

「……一応…学生の頃から知っているからね」

そう言われても、学生の時に彼と関わったことなど無いに等しい。親しくなった覚えもなければ、同じ寮だったわけでもない。

「…よく言うわ。…貴方、あの時私のこと良い風に見ていなかったでしょ。」

「…最初は、少し警戒していたよ。でもそのおかげで、君がどんな人間なのかよく分かった。ほら、私が人間観察が得意なことぐらいレイラも知っているだろう？」

……そんな話はしたくない…

「……そうだった？……もうそろそろいいかしら。貴方は良くても、私は良くないの。」

もうこれ以上の会話をする意味が分からない私が椅子から立ち上がろうとしても、ルーピンは気にすることなく話しかけてくる。

「サンドイッチを食べなくても、お茶ぐらい飲んでいけばいい」私は、貴方と昔話を仲良く出来るほどお人好しではないし、私は貴方に対して良く思っていない。」

もうこれ以上、昔のことを言われることが苦痛でたまらなかった。私は少し声を大きくしながらきっぱりと言い捨てた。

「……人間観察が得意なのなら、今私が思っていることも大体予想がついているんじゃないの？」

「ああ……勿論、君が私のことを嫌っていることは百も承知だよ。」

「……大当たりよ。だったら「だからこそ」

私の話を遮るルーピンは、何か重々しく口を開いた。

「昔のことを水に流せるわけではないことぐらい分かっているが、……もうあの頃のように子供ではない。私達はもう立派な大人だ。守られる側から、守る側になったんだ。

私のことをどう思おうが構わない。だがそれとこれを結び付けていては、守れるものも守れなくなる。

「……いつまでも、お互いが聞く耳を持たなかったら、きつと何も守れない。」

どこかで似たようなことを聞いた気がしたが、頭に浮かんだ薄っすらとした何かは、すぐに消えていった。

「……偉くなったものね、ルーピン。まさか貴方に説教じみたことを言われるとは思いませんでしたわ。」

私が睨みつけながら皮肉たつぷりに言っても、顔色ひとつ変えない彼を見ていると、学生の頃のルーピンの顔が自然と重なった。

「……あの時もよく顔色ひとつ変えずに、ただ止めもせず見ていた。セブルスに突つかかかっていく2人に何一つ声を掛けずに、こうなるのはしょうがないことだと諦めているように立ち上がるかもしれない。かもしれない。」

学生の時に見た光景を思い出した私は、色々な思いがどんどんと浮き上がってくる。良い気持ちになる訳がなく、胸らへんがむかむかとして、何か異物が身体中を回っているかのような気持ち悪くなった。

「それは、あの子のことを言っているのかしら？」

私の声は苛立っているせいで、少し低くなり、部屋によく響いた。

「そうだよ。ハリーのことさ。」

まるで苛立つ私を落ち着かせるように、ゆつくりと言うルーピンの

声は優しく穏やかだったが、今の私には逆効果だった。落ち着くどころか身体が熱くなり、目の前にいる彼が憎く思えてくる。

「あの子の命を守る為に自分の命を犠牲にするなんて、そんな馬鹿なことは御免よ。あの子が死喰い人に再び命を狙われようが、死のうが私には関係ない。」

「……レ」ルーピン、貴方はどうして彼を守っているの？ どうして側にいるの？」

私の名前を呼ぼうとしたであろうルーピンの言葉を遮って問いかけ、目を見つめると彼の瞳は私のと比べて綺麗だった。

「あの人を倒した英雄だから？ 違うでしょ。貴方はきつと友人達が命懸けで残した子を、ポッターやエバンズの子だから守りたいんでしょ？」

私の手は気づけば力強く握りしめていて、ルーピンを睨みつけながら後を続ける。

「あの子を守る理由なんて私にはない。」

きつぱりと言い切る私を見ても何も言ってこないルーピンを見ても、この嫌な感触が治ることはなかった。

「ルーピン、お互いが聞く耳を持たなかったら……なんて、そんなこと言っていたけど、聞く耳を持ったところで何か変わるといふの？」

そんなことを簡単に言えるなら、ポッターやブラックを止めることなんて簡単だったはずでしょ？

私は言いそうになった言葉を呑み込んで、誤魔化すように声を出した。

「傷というのは、時間が経つにつれて治りにくくなるのよ。貴方は大人だから関係ないと割り切れるかもしれないけど、私にとっては関係あるの。」

私は貴方みたいにできた人じゃない。」

飲むはずのなかったお茶を一気に飲み干していると、さっきまで聞こえてこなかったルーピンの声が聞こえてくる。

「そんなことない。」

はつきりと言い切る彼の表情は、まだ余裕がありそうで、私はそれ

が気に食わなかった。

私よりもずっと大人なルーピンが、少し羨ましかった。

「……貴方は私じゃないんだから、そんなの分かるはずないでしょ。」
冷たく言い放ちながら、空になったティーカップを置いた私の頭には、これから自分が言おうとしていることが浮かんだ。

「…そういうえば、ずっと私聞きたいことがあったの。」

これを言ったら、ルーピンが傷つくだろうと頭では十分に分かっている。それなのに、私の口からは自然と出てしまう。

きつとこういう所だ。私がいつまでも大人になれないのも、友達というものが出来なかったのも、こういう所の所為だろう。

…私がひとりぼっちだったのは自業自得だ。

顔も見ようとしない私の口からは、意図も簡単にルーピンが傷つきそうな言葉が出てきた。

「ブラックが裏切った時、どう思ったの？」

さつきまですぐに返事が返ってきたというのに、彼の声は途切れ、部屋は一気に静まり返った。

ルーピンに視線を移せば、彼は少し顔色を悪くさせ、表情が暗くなっている。

「……………そんなこと……………」

…思い出したくもない。」

そう言った彼の声は明らかに、今までとは違って低く、少し下を俯きながら、ほとんど口を動かさずに答えた。

「……………そう……………わ」

私には友達というものがいないからよく分からないの。

私の言葉は外から聞こえる騒がしい声でかき消され、続くはずだった言葉は声になる事はなかった。

「どうやら、昼食の時間が終わっていたみたいだ。…多分午後の生徒達だよ。すまなかつた。無理矢理引き止めてしまつて」

さつきとは別人のように明るく接してくるルーピンは、部屋を出ていこうと立ち上がる。

「何だったら、私の授業を見ていくかい？今回はボガートを使う授業だから、結構面白い授業になると思うよ。」

「……気が向いたら、行くわ。」

少し考えるように答えた私を見て、ルーピンは何も言わずに部屋から出て行つた。外から、生徒達に指示をする声が聞こえてきたと思うと、机を引きずるような音がした。

……ボガート……ね……

これがハリーがいる学年だったら、確かに私にとつても貴重なセブルスの姿が見えるわけだが、もう授業が始まっている途中で部屋を出るのも、ものすごく目立つ。

外から聞こえる授業を始めるルーピンの声を聞きながら、私はゆっくりと立ち上がった。

もし、違う学年の授業だったら、そのまま教室を出ればいい話だ。覚悟を決めた私は扉を開け、部屋から出ると下から授業中だった生徒達が私を見上げてくる。

「みんな、彼女のごとは気にしなくて大丈夫だよ。私が授業を覗かないかと誘つたんだ。ほら、前を見て」

私の存在に驚きながらもルーピンの言うことを素直に聞く生徒達の中に、ドラコがいることに気がついた。ハリーを見つける前に彼を見つけるとは思わなかつたが、ドラコがいるということは、……面白いものを見れるということだ。

呪文を唱える生徒達の声を聞きながら、階段を下りると邪魔にならないように、端の方に寄って授業風景を眺める。

そんなことをしていると、ルーピンはネビルを呼んで、彼に質問を

していた。

「さあ、ネビル。君の恐ろしいものは何かな？」

「……………すつ…スネイプ先生です……………」

ネビルが遠慮がちに答えると、他の生徒達から笑いが起こった。

「ああ…よく分かるよ。そうだな…君は、お婆さんと住んでいるね。」

「…はい…あつでつでもお婆ちゃんに变身されるのも嫌です。」

慌てたように言うネビルを見たルーピンは少し笑いながら、後を続ける。

「そうじゃないよ、ネビル。お婆さんの格好を思い浮かべてみてごらん。」

「…赤いハンドバッグを持っていて…」声に出さなくても、頭に思い浮かべるだけでいい。ネビル、私がダンスを開けたらこうするといい。」

ネビルに近づき、耳元で囁くルーピンの言葉を聞いてか、少し戸惑ったような表情を浮かべながらもしつかりと頷いてみせた。

「よし、じゃあやってみようか。杖を構えて」

ルーピンが指示を出すと、ネビルはローブから自分の杖を取り出し、自信がなさそうに構えた。後ろにいた生徒達は数歩後ろに下がったのを見ていると、数を数えるルーピンの声が聞こえてくる。

「いち、にの……………さん」

鍵が外れるカチツという音がやけにはつきりと教室に響くと、ゆつくりとダンスの戸が開く。怖がっているのか、半歩後ろに下がるネビルからダンスに視線を移すと、そこにはどこからどう見てもセブルスの姿をしたボガートがゆつくりとネビルに近づいていた。

……………本当に…そっくりだ……………

あまりに似ているものだから、私は壁にもたれるのをやめて、前に乗り出していた。

「リディクラス！」

ネビルが呪文を唱えながら杖を振ると、ばちんという音が鳴り、次の瞬間、緑色のドレスに先がとんがっている帽子に、赤いハンドバッグを持ったセブルスの姿に変わった。

いつもの彼からは想像もつかない格好に、生徒達は一気に笑い出

し、ルーピンも満足そうに笑みをこぼしている。

大笑いをする生徒達に並ぶように指示をするルーピンの後ろ姿を見て、ボガートはオロオロと戸惑いだす。女装をしているセブルスが戸惑っている姿を見ると、こうなると分かっていた私でも自然と笑いがこぼれた。

手で口元を隠しながら、先頭に並んでいるロンが前に出たのを見てみると、セブルスの姿をしたボガートは空中で回転しだした。

……ボガートを見つけたら……ネビルを呼べばいつでもセブルスが見れるな……

しようもないことを考えていると、大きな蜘蛛に変身したボガートはロンの唱えた呪文でローラースケートを履き、転げ続けている。

成功したことが嬉しいのか、帰りざまにハリーにハイタッチをするロンはとても嬉しそうに笑っていた。

次前に出た女子生徒が、大きな蛇に変わったボガードに怯えながらも呪文を唱えるとピエロに姿を変える。

……次は……ハリーか……

どこか得意げに前に出たハリーは、ピエロの姿をしたボガートを見つめると、上がっていた口角が何か嫌なことを思い出したように下がっていく。

この後何が起こるか勿論分かっていたが、私は動こうともせず、記憶通り勘づいたルーピンが慌てて彼に走りだす姿を見つめた。

「私だ!!!」

ディメンターに変わったボガートは、空中で回転し綺麗な満月に姿を変える。さつきまであんなに楽しそうな声で溢れていた教室に、呪文を唱える声が響くと、風船の姿になったボガートをそのままダンスの中に閉じ込め鍵を閉める音がやけに鳴り響いた。

「さあ今日はここまでにしよう。」

静まり返った教室に響いたルーピンの声を耳にした生徒達は、不満そうな声をもらす。

「ごめんね。教科書を忘れずに、今日の授業は終わり。」

ルーピンがそう言えば、丁度タイミングよくベルの音が聞こえてきた。

それぞれの教科書を手に取り、教室から出ていく生徒達の中にあつた、ロンに引つ張られながら出ていくハリーの姿が目に入った。

階段を下りていく、生徒達の話し声や足音がだんだんと小さくなっていくと、少し疲れたように壁にもたれるルーピンが話しかけてきた。

「……流石に、まずいからね。ヴォルデモートの姿が変わってしまったのは」

彼が平然と口にした名前が耳に入ると、あの頃感覚に襲われた。

……今すぐにも殺されてしまいそうなあの嫌な感覚。

少し血の気が引いたが、私は平然な振りをしながらその名前から話題を逸らすように声を絞り出す。

「……そうね……でも……良かったの？あれがきっかけで誰か勘付くかもしれないわよ。」

「……あれだけじゃ、流石に私が狼人間だということは誰も考えないよ。……教師が狼人間だとは、誰もが想像していないだろうからね。」

私の問いかけに答える彼の表情は、少し自傷的な笑みに見えて、ルーピンから視線を逸らすことしかできなかった。

「ごめん、レイラ。悪い気分にならせてしまつて。……さつき言ったことは忘れてくれ」

背中越しに声を聞いても、私は謝ることはせず、扉に近づいた。

「……貴方も……大変ね……」

……あんな綺麗な満月が……恐ろしいなんて

扉に手を伸ばしながら呟くと、まるで私の思っていることが分かったかのように、後ろから弱々しい声が聞こえてきた。

「…………あの頃は…綺麗だと思えたんだ…」

最後のあまりに寂しそうな声に私は振り向くこともできずに、そのまま教室を後にした。

どんな表情をしていたのか想像もつかないが、ルーピンのあんな声を聞くのは初めてでただただ…

…………恐かった…………。

あの時、振り向いてしまったら同情してしまいそうで、…………私の中のルーピンが変わってしまいそうで見れなかった。

あんなに人を殺しても何も感じなくなったというのに、どうして今になってこんなにもいろんな感情が襲いかかってくるんだろう。

苦しんでいるのは、セブルスだけではないことも勿論分かっていたが、弱い私にはそれを直視することなんてできない。

授業を覗けば、何か見つかるかもしれないというダンブルドアの言葉通りにしてみたものの、見つけるところか、悩みが増えたような気がした。

8 夜のお散歩

その日の授業が全て終了し、夕食の時間を迎えた頃には、ネビルがボガートをお婆さんの格好をさせたセブルスに変えたという、生徒達にとって面白い話題が Hogwartz 中に広まっていた。

そのせいで、今夜の夕食中ずっとセブルスは変に目立っていたし、彼の耳にも入ったのかどこか不機嫌そうな雰囲気も放っていた。生徒達が、友達と話しながら教員席に座っているセブルスをちらちらと見る度に、明らかに不機嫌になっていく彼は、時々ルーピンを睨んで終始溜息をついていた。

夕食が終わり、生徒達もすっかり寝静まった頃、一応ここに仕事で来ている私は何もせず寝るのは気が引けて出来ずに、見回りという名の夜の学校の散歩をしていた。

月明かりだけを頼りに真っ暗な廊下を歩いても、ブラックに出くわすことなどあるわけがない。

静まり返っている廊下には私の足音しか響いておらず、少し不気味に感じるというのに何故か心が落ち着く。

廊下を歩き進めていると、暗闇が広がっている奥の方で、何やら動いているような影が見えた。気のせいかと思っただが、その影はふらふらと揺れながらゆっくりと私の方に距離を詰めている。

……こんな夜中に堂々と生徒が歩くわけもないし、教師であったとしても、こんなおぼつかない足取りなのが、引つかかる。

杖に手を掛け警戒していると、ゆつくりと近づいてきた影を窓から差し込む月明かりが照らし、正体が誰なのかはつきりと分かった。

ブロンドの髪に、グレーの瞳、寝間着を身に纏っている彼女はどこからどう見てもルーナで、今にも転けるんじゃないかと思うほど足がおぼついていない。

直ぐに私の名前を呼びながら駆け寄ってくれいつもの彼女とは少し雰囲気が違う、私は杖から手を離してルーナに近寄った。

「こんばんは、ルーナ」

そう呼びかけてみると、私の顔を見た彼女は初めて私に気づいたように挨拶を返してくる。

「……こんばんは、ヘルキャットさん。今日はとても素敵な夜ね。」

そう話すルーナはぱつと見いつも通りなのだが、虚ろな目をしている彼女を見ると少し心配になった。

「何をしているの?」

「……お散歩をしているの。」

寝ぼけているのかどうか分からないが、彼女の足元に視線を落とすと、しっかりと靴は履いていた。

「あんたは?」

突然、私に問いかける声が聞こえてきて、顔を上げると、虚ろな目をしたルーナがじつと私を見つめていた。

「……………私もよ。……………そろそろ戻ろうとしていたんだけど、ルーナもどう?」

このまま彼女を放っておけるはずもない。何とか寮に戻さなければならぬと思いつながら、問いかけてたのだが、少し悩んだような仕事を見せた彼女は、表情1つ変えず、何も言ってくれない。

こうなったら、寮に連れて行くのが1番手取り早いだろう。

私は彼女の手を優しく握りしめて、レイブンクロウの寮への道順を思い浮かべながら、ゆつくりと廊下を歩いた。

あまりレイブンクロウの寮に行ったことがない私は、ルーナに正確な道順を聞きたかったのだが、虚ろな目を見ると聞くことはできなかった。

他に誰もいない廊下には、私達の足音しか聞こえず、先も薄暗くはつきりとは見えない。

私は何も話さず、ただ彼女の手を引きながらレイブクロウの談話室に向かっていると後方から微かに音がしたような気がした。

床に何か当たるような、…足音のようなそんな音。

反射的に振り向いてみたが、目の前に広がっていたのは真っ黒の闇だけで、人などいるわけがない。

……まただ…

誰もいないというのに、違和感だけが残り、私は誰いない廊下の先の闇を見つめていると、違和感の正体がゆつくりと私の中で姿を現した。

……ユニコーンに見惚れて忘れていたが、…

そういえば、あの時私の後ろにいたユニコーンとは違う方向から枝が折れる音がした。

……私は…誰かに後をつかれている…。

一体誰が私の後ろをついているのかは知らないが、今は確かめようがない。

それに大体予想はついている。ダンブルドアに私を見張れと命じられたセブルスが監視するために、私の行動を見張っているのだろう。

ここで、私がもし気づいたような素振りを見せたら、一番最初に困るのは彼なのは間違いない。

今私ができるのは、…気づかないふりをしながらルーナを談話室まで送り届けることぐらいだ。

私はその後、ほぼ勘だけで何とか螺旋階段の下に辿り着くことができた。

急な螺旋階段を上っている時に、ルーナが夢遊病だということを出したのだが、今まさにそれなのだろうか。

階段を上り終え、扉の前に立つと、鷹の形をしたドアノッカーが目に入った。

……そうだった…レイブンクローは、合言葉ではなく謎解きだった。

すっかりそのことを忘れていた私が、溜息をつけば、私達に気づいたドアノッカーが謎解きの問いを投げかけてくる。

「正義とは何ですか？」

手を握っているルーナに視線を移してみたが、彼女は答えるような様子など一切見せずにただ前をぼーつと見ているだけだ。

状況を見る限り、私が答えないといけならしい。

「正義とは何ですか？」

もう一度問いかけてくる声を聞きながら、私は一番最初に思ったことを口にした。

「…そんなの知らないわ。正義が何なのかなんて誰にも分からない。」
こんなことしか考えられない私は、答えた後に後悔が襲いかかってくる。嘘でも、それっぽいことを適当に言っとけば良かったのかも知れない。

少し待ってみても全然開く気配がなく、もうこの際私の部屋に連れて行こうかと思いつきながら、螺旋階段を下ろうとした時だった。後ろから鍵が開くような音が聞こえてきた。

後ろを振り向けば、さっきまできつく閉ざされていた扉が開いている。

開いたことに大分驚いたが、ルーナを寮の中に戻せると思うと、少しほっとした。

ルーナの背中を優しく押してやれば、彼女は私の方を見て、ゆっくりと口を開いた。

「おやすみなさい。ヘルキヤットさん」

「おやすみ。」

寮の中に入っていくルーナの背中を見送って、扉が閉まったことを確認すると私はひとりで急な螺旋階段を下った。

……それにしても…謎解きの問いが何とも嫌なものだった。

正義とは何なのかなんて、まるであのドアノッカー、人を選んで問題を選んでいるみたいだ。私はもう一度とここには来たくないという思いを抱きながら、自室へと戻った。

地下牢へと続く階段を下り、薄暗い道を歩いていると、一気に眠気に襲われ頭がぼんやりとしだした。

今すぐ眠りにつきたいほどの眠気に襲われて意識がぼんやりとしていたが、それも魔法薬学の教室の前で立っている人物を見た瞬間に眠気は吹き飛び、意識もはつきりとする。

魔法薬学の教室の前に立っている彼は、暗闇と同化していて、今にも溶けてしまいそうで見ていると少し怖くなった。

こんな夜中に、更にはこんな廊下でひとり立っている姿を見る限りでは、こんな所で睡眠を考えると考えるには少し無理矢理すぎる。途中で引き返して私の帰りを待っていたとしたら、一体いつからここで待っていたのだろう。

何も言わずに彼の前を通り過ぎようとするがそんな簡単にいくわけがなく、腕を組み、扉にもたれかかっていたセブルスの声が聞こえてきた。

「……夜中の散歩にしては、随分と長かったな」

低い声は地下牢ではよく響いて聞こえやすく、彼の口から出た散歩という言葉聞いて私の後を追っていたのはセブルスだと心の中で確信した。……単なる偶然かも知れないが、ルーナと話していたあの場所に居なければ、私が散歩だと言ったことは知らないだろうし、私の中ではそれだけで十分だった。

「……そうっ……こんな夜中にご丁寧にお出迎えをしてくれるなんて、

一体何の用事なのかしら？」

セブルスの顔を見ながら言葉を並べると、彼は表情を一切変えずに私の瞳だけを見つめてきた。真つ黒な瞳を見つめ返すと、まるでその瞳に吸い込まれそうな感覚に襲われる。その瞬間、何故か頭から血の気が引いていくのが分かり、違和感の感じて、咄嗟に目を逸すと胸が楽になった。

ほんの数秒見つめたただけだというのに、随分と見つめていたような感覚がまだ体に残っている。

……今、確実に……開心術を使おうとしていた……

気を張っていたから、僅かな違和感に気づけたものの、ここまですんなりと中に入ってこられようとする感覚は、初めてで心臓の鼓動が速くなった。あの人を欺くほど、開心術の達人のセブルスに真正面から受け止めようとしても無理に決まっている。

……目が合うたびこんなことされていたら身が持たない。

私は緊張している心臓の鼓動を落ち着かせるために、ゆっくりと呼吸を繰り返しながら、口走った。

「……私は今、魔法省の人間としてここにいる。……貴方が思っているようなことはするつもりはないわ。」

セブルスの顔を見ずに彼の前を通ったものだから、彼がどんな顔したかなんて分からないが、きつと表情なんて変えなかったに違いない。

開心術をされる前に、目を逸らしたからぎりぎり気づかれていないとは思うが、もし今ので私が開心術を使えるということを感じられてしまっていたら、後から色々厄介になる。

呼び止められずに無事部屋に戻った私は、扉の前で溜息と一緒に全身の力が抜けていった。

……あの時……気づかなかったら絶対心の中を見られていた。セブルス相手に防げたこと自体奇跡だろう。

……知られたくない……

……彼にだけは絶対、知られたくない。

胸をおさえるように服を握りしめても、楽になるどころか、どんどん不安と知られた時の恐怖が募っていくばかりで、血の気が引いていくのが分かった。

……側に居たいと思うのに……今は、今だけは居たくないと思うのは、どうしてなんだろう。

どうしてこんなにも愛しいのに、苦しいのかな……

思ったことを消し去ってしまおうと瞼を下ろすと、例のあの人の顔が浮かんでくる。

もう少しだけでいいから……もう少しだけ……

私に時間を欲しい。

そんなことを思っても、時間は残酷に過ぎていく。

9 引き裂かれた肖像画

別に避けるつもりなどなかったのだが、セブルスは教師でずっと私の相手をしていられるほど暇なわけで、あれからお互い話すこともしようともしなかった。

夜の散歩も毎日欠かさず行っているが、最近10月を迎えたからなのか、少し肌寒くなってきた。

ホグワーツに来て、気づけばもう1ヶ月ぐらい経っており、私の毎日の行動も決まってきた。朝起きて朝食を食べ終えた後は、学校中を歩き回ったり、飛行訓練を眺めたりして昼食まで時間を潰し、午後の授業中は図書館に寄り、本を適当に眺めたり、クイディチの練習をしている日にはぼんやりと見学して夕食まで時間を潰す。そして生徒達が寝静まった後は意味のない夜の散歩をし、夢遊病のルーナに会った時は、簡単なお話をしながら彼女を談話室に送り届ける。

別に自室に籠っていてもいいのだが、仕事をさぼっているなんて思われたくない。

もうすっかりハロウィン一色に染まったホグワーツには、朝からパーティーを楽しみにしている生徒達の賑やかな声が溢れかえっていた。大広間はハロウィンの装飾が施され、廊下には簡単な魔法をかけて変装している生徒もいれば、悪戯を仕掛けている生徒がいるせいで、仕事がいっもの倍以上に増えたファイルチは苛立っているような様子だった。

そんな中に紛れて、私服に着替えている生徒達は、ホグズミードに行くのか大きな振り子がある扉に向かっていた。

楽しそうに外に出ていく生徒達は、友達と話しながらにこにこ

笑っている。フィルチはそんな生徒と手に持っている羊皮紙を交互に見ては、確認していた。

そんな生徒達に紛れている、暗い顔したハリーは羊皮紙を握りしめたまま俯いていた。そんな彼を励ますように、ハーマイオニーとロンは声を掛けるが、ハリーは複雑そうな表情を浮かべながら、どこか落ち込んでいるような様子だ。

……残念ながら、そんなハリーを見ても可哀想などという感情は浮かんでこない。

友達と行けず、ひとりでホグワーツで待つというのは彼にとって結構辛いものだというのは分かるが、……所詮は私には関係ないことだ。

私はハリー達を横目にその場から離れ、騒がしい生徒達の声が響いている廊下を歩いた。

……きつと……これだから私は友達というものが居なかったのだらう。

つくづく自分の性格に嫌になりながら、静かな図書館に足を向かわせる。あの試験中のような静まり返り、空気が張り詰めているのは嫌いだ。時々鼓膜が破れるんじゃないかと思うほどに騒がしく、わちゃわちゃしている空間も好きではない。

誰かの声が聞こえる授業中のあの緩い空間が私にとっては居心地がいい。

「……随分と……我儘……ね」

自分に呆れて溢れた声は、楽しそうに話す生徒や、悪戯を仕掛けられ絶叫する生徒、そして仕掛けた側の生徒の笑い声で、口から出た瞬間かき消された。

図書館の奥の端に一人掛けの椅子に座り、適当に選んだ本のページをめくる。つまらない文書がちらつらと載っている読もうともせず、ただの手の運動をしているとしか思えないようなことをさつきから繰り返していた。

ハーマイオニーらへんだつたら、こんな本もきつと楽しく読めるのだろうか、今の私の頭には今後起きる事が浮かんでいた。

……ハロウインの日に、ホグズミード……

ページをめくる音を聞きながら、椅子に深く座り直す。

……私の記憶が正しければ、今日ブラックが動く。

もうこの時私は、本さえも見ておらずただ手を動かしているだけだった。

太ったレディーの絵画を引き裂くのが今日だとしたら……勿論ブラックがホグワーツに侵入したと大騒ぎになって、自然と私の仕事が増える。

セブルスにどんな目で見られるのかが想像ついてしまい必死にかき消すと、ページをめくっていた本の次がもうないことに気づいた。

私が何となく開いていた表紙を閉じ、元の位置に戻しに行こうかと、側にある本の山積み視線を移した時だった。

「マグルに興味があるのですか？」

どこからともなく聞こえた声は女性のもので、後ろを振り向けば、すぐ後ろに愛想のいい笑顔を浮かべる教師が立っていた。

声では気づかなかつたが、彼女の顔を見た瞬間、名前が頭に浮かんでくる。

チャリテイ・バーベッジ、日刊予言者新聞に載せた記事のせいで、あの人に殺されてしまうマグル学の教師だ。

セブルスに助けを求めると彼女の声聞こえたような気がして、私はバーベッジから視線を逸らした。

「すみません。マグルに関しての本をお読みになっているのをたまたま見かけたものですから。」

そんな彼女の声を聞いた私は自然と手に持っていた本に視線を移すと、確かに表紙には『マグルと共存する為には』と書かれていた。

図書館でマグルのことをわざわざ調べにくる生徒などいるはずもない。私は少し埃が被っていたことに納得しながら、立ち上がった。

「…そうですね…少し」

山積みの本を宙に浮かしながら、適当な返答をすると、バーベツジはうわべだけの私の言葉を真に受け取らしく嬉しそうに話しかけてくる。

「やはり、そうなのですね。マグルに興味を持つ人が中々いなくてですね。話す相手が限られていたんです。まさか、こんな身近に居たとは」

私の手を握りながらぶんぶん嬉しそうに振っている彼女の力は意外に強く、少し腕が痛んだ。

「…そんなことはないでしょう。…ダンブルドアは、何に対しても興味をお持ちだと思いますが…」

「ええ勿論ですとも。しかし、あの方は私の話を毎日聞くほど暇ではないですから。」

それは、私が暇だと言いたいのだろうか。

私が複雑そうな表情を浮かべたことに気づいた彼女は冷静さを取り戻し、握っていた私の手をパツと離れた。

「すいません。そういうつもりで言った訳では」

「いえ、大丈夫です。謝らないでください。」

ホグワーツの教師達が私に対してどんな風に思っているのかは分からないが、きつと良い印象ではないだろう。それだというのに、目の前にいる彼女は嫌な表情を浮かべるところか好意的に話しかけてきている。

申し訳なさそうに謝ってくるバーベツジを見ながら、本に元の位置に戻るように魔法をかけるとひとりでに動きだした。

「…」迷惑でなければ、今度お時間がある時にお茶でもいかがですか？」

その場から離れようとすると、彼女の落ち着いた声が耳に入ってくる。

る。笑みを浮かべてくる彼女の表情を見ると、キュツと胸が締め付けられた。

「ええ、勿論です。」

あと何年もしたら彼女は殺される。自分の考えたことを口に出しただけで命を奪われる時代が来てしまう。

時間が経つにつれ、セブルスが苦しむことになることを考えると、胸が苦しく締め付けられた。

『お願い、助けて！』

私に命乞いをしてきたいつかの女の人の声が頭にこびりついたまま何度も再生してくる。

私はそんな声を消し去る為に手を力強く握りしめて、図書館を後にした。

行き先も決めずに廊下を歩きながら、強く吹いた風のせいで、大きく波打つように舞う髪を耳にかけると、視界の端に黒い人影が見えた。私の体は無意識にその方向を見て、足を止める。

向かい側の廊下にいたセブルスが生徒と話している姿が視界に入り、私は気付かれないことをいいことに彼の横顔をじっと見つめた。生徒と何やら話をしているセブルスの表情は、私と話す時よりかは柔らかく、言い表すことができない気持ちちが溢れ出してくる。

……………見て……………

私は心の中で、セブルスに話しかけるように訴えかけた。

……………私を……………見て……………

決して口に出してしまわないように、唇をぎゅっと結んだまま思ったことを飲み込んだ。

「ヘルキャットさん」

私の名前を呼ぶ、ふんわりとした声の方を振り返ると、そこには本

を抱えているルーナが不思議そうに私を見ていた。

「こんにちは。」

何を言われるのかと思えば彼女は挨拶の言葉を言うだけで、私の言葉を待っている。

「こんにちは、ルーナ。」

挨拶を返しても、じっと見つめてくるルーナの顔を見ると今日がハロウィンだということを思い出した。

……お菓子が欲しいのだろうか。

私は試しにローブのポケットに手を突っ込んで何かお菓子を持っていないか探してみたが、準備をしている筈もなく、何も入っていない。

部屋には自分用にお菓子は常備している。

「ちよつとだけ私に付き合ってくれない？」

もうそろそろ夕食の時間が近づいてきてはいたが、私が笑いかけながら問いかけてみると、ルーナは愛想よく頷く。

「うん。丁度暇していたところなんだ。」

そんな彼女の言葉を聞いた私が歩き出すと、ルーナが小走りで私の隣に並んだ。

お互い話すことはなく、自室まで一言も話さなかったが、不思議と苦ではなかった。

「ちよつと待っていて。」

ルーナを部屋に入れて、棚からお菓子を適当に選び、何かいいサイズの袋がないかと探しているとキョロキョロと周りを見渡している彼女の姿が目に入った。

「そんなに物珍しいものがあつた？」

お菓子を入れた小袋を持ちながら、ルーナに近づき問いかけてみると、さつきまで周りを見ていた彼女がじつと目を見つめてくる。

「少し意外だっただけ。あんまり本読むのは好きじゃないって思つて

たから。」

「どうやら彼女は本の量に驚いていたらしい。

「読んでいたら色々な事を知ることができると、後時間が潰せるから好きではない訳でないわよ。」

私の言葉を聞きながら本棚に近づいたルーナは背表紙をじつと見つめたまま、動かなくなつた。

「何か気になるものがあつた？」

彼女に近づき、問いかけてみても返事は返つてこず、ただ一点を見つめている。不思議に思いながらも、ルーナが見ている方に視線を移すと彼女の目線の先にあつたのは、魔法薬の本だつた。

別に興味がある訳でない。ただセブルスが魔法薬が得意で好きだつたからというそんな訳の分からない理由で買った。

学生の時だつて、私が魔法薬の本を読んでいたのは彼の側に少しでも長く入れられるようにするためだ。少しでも長く話したいばかりにセブルスが興味を持っているものの知識は頭に叩き込んだ。

それだというのに、魔法薬学の成績が悪かつたのだから、私はよっぽど向いていなかったらしい。

私はルーナが見つめていた本を手にとって、お菓子が入つた小袋と一緒に差し出した。

「返すのはいつになつても大丈夫よ。ああ、それからもうご飯だからこれは明日にでも食べて。」

受け取つたルーナはお礼の言葉を言うと、手に持っている小袋をじつと見つめる。

「ほら、そろそろ夕食の時間だから大広間に行きなさい。」

そう言いながら、優しく背中を押してやると彼女は扉の前で問いかけてくる。

「ヘルキャットさんは行かないの？」

「勿論、すぐ行くわよ。」

言葉を濁らせて返すと、ルーナはじつと私を見つめてきた。

「そうだ、ルーナ。今度の月曜日にもお昼一緒に食べないかしら？」

言うタイミングが掴めず、未だにルーナとお昼を食べていなかった事を思い出し、問いかけみるとルーナの表情が少し嬉しそうに綻んだ。

「じゃあ月曜日は、ヘルキャットさんを探さないといけないね。」

嬉しそうにそんな事を言ってくる彼女を見ると、私は無意識に頭を撫でていた。

「大丈夫よ。私から会いに行くわ。」

ほら、もう始まってしまいわよ。」

その後押ししてあげれば、ルーナは手を振りながら部屋から出ていった。

ひとりになった私は、机の引き出しからペンダントを取り出して首からかけると服にしまい込んだ。最近ペンダントは机の引き出しにしまい込んでいたが、今回は何かあった時の事を考えると、ペンダントが必要になるかもしれない。

私は目を閉じ、深呼吸をして、扉に手をかけ自室を後にした。

ハロウインの装飾が施されている大広間には、食事をする生徒達の楽しそうな声が響いている。

教員席の1番端に腰掛けていた私は、デザートのかぼちゃプリンを食べながらその時が来るまでじっと待っていた。いつになればこのパーティーが終わるのかは分からないが、もうそろそろだと思う。

私は食べ終わると、容器を重ねてまたかぼちゃプリンに手を伸ばし、手に取ると今からどうしようかと考え込む。

絵画が引き裂かれていることに皆が気づいた時に、私はその場に居るべきだろうか。それとも騒ぎを聞きつけた風に少し遅れていった方がいいのか、はたまた行かない方がいいのか。

どうすればいいのか分からずに考え込む私の手は止まる事なく、口

にプリンを運んでいた。

どちらにせよ、その後教師達はブラックが潜んでいないか学校中を探すわけだし、勿論私もそうなるだろう。

私は生徒達の安全を守るためにここにいるというのに、ブラックに侵入されたということが分かればきつと教師達から厳しい視線を浴びせられることも想像できる。

私が5個目のかぼちゃプリンを食べ終わると、丁度パーティーは終わり、少しして生徒達は大広間から出ていった。

こういうのは意識するほど、行動が変になってしまふものだ。

私は、水を飲みながら自分に言い聞かせるようにそう心の中で言っ
て、もう何も考えないことにした。そんな事をしていれば、大広間の
出口らへんにいる生徒達の様子がおかしいことに気づいた。

絵画が引き裂かれているということが広まったのか、ほとんどの生
徒達と同じ方向に向かっている。そんな光景を見れば、誰もが何か
あつたと分かったのだろう。

腰掛けていたダンブルドアは何か悟ったように、立ち上がると大広
間から出ていく。私はその後を追いかけるように、少し遅れをとって
大広間から出るとグリフィンドールの寮へと向かった。

好奇心で生徒達が集まっているせいで、通りにくかったが声を一言
かければ狭い道を作ってくれるし、通れない訳ではなかった。

何とか生徒達を掻き分けて前に進むと、よく見たことのある3人の
後ろ姿が目に入った。

「ごめんなさい、少し通してくれないかしら？」

そう呼びかけ、振り返る顔を見ると案の定ハリー達だった。彼らが
開けてくれた道を抜けると、引き裂かれた絵画に触れるダンブルドア
と、その後ろには猫を抱いているフィルチの姿が見えた。

「何かありましたか？」

私の声を聞いたダンブルドアとフィルチは振り返り、フィルチは何
故だか少し険しい表情を浮かべている。いや、険しい顔はいつものこ
とだから気のせいなのかもしれない。

私は引き裂かれた肖像画に視線を移し、ゆっくりと近づき、まるで今初めて知った風を装いながら触れてみる。

「…………誰がやったのか、君の意見を聞きたいの。」

後ろからダンブルドアに話しかけられ、振り返ると慌てたように階段を駆け上る足音が聞こえてきた。

人波を掻き分け、騒ぎを聞きつけたマクゴナガル、ルーピン、セブルスが駆け寄ってくる足音だと分かるにはそう時間はかからなかった。肖像画を見て驚く彼らを見て、私はダンブルドアに向き直る。

「貴方が考えていることと同じです。寮に生徒達が居なかつたのが不幸中の幸いですね。」

もう誰がやったのか大体予想がついているだろうダンブルドアに言うとき、彼越しに無残な姿になった肖像画と私を交互に見ているセブルスと目が合った。睨んでるような怪しんでいるような、決して見られて気持ち良くなならない視線を感じながら私は視線を逸らす。

「…………どちらにせよ、レディーを探さなくちゃならん。フィルチ城中の絵を集めて探してくれぬか？」

指示を受けたフィルチが動き出そうとした時、ピーブズが空中を漂いながら話す嬉しそうな声が聞こえてきた。

「あの女はズタズタでしたよ。ひどく泣き叫びながら、5階の風景画の中を走ってゆくのを見ましたよ。木にぶつからないように走ってゆきました。」

ニタニタと笑いながら言うピーブズは、白々しく言い添える。

「お可哀想に」

「レディーは、誰がやったか話したかね？」

ダンブルドアが確認するように見上げながら静かに問いかけると、ピーブズはくるりと宙返りをして楽しそうに話し出した。

「ぼつちりと見ていましたとも。そいつは、婦人が入れてやらないんでひどく怒っていましたねえ」

彼はまるで今から素敵なお話をするかのように楽しそうに後を続けた。

「あいつは癩癩持ちだねえ、あのシリウス・ブラックは」

シリウス・ブラックという名が出ただけで、その場は凍りついたように静まり返ると、生徒達の騒ついた声が大きくなった。騒ついている生徒達の中にいるハリーの顔色は良くなく、隣にいるハーマイオニーが心配そうに声をかけている。

ダンブルドアが大広間に戻るように言い渡すと、生徒達はそろそろと大広間へと戻っていく。

「ミネルバ、先生方にこの事態を知らせ、学校中を隅々まで探すよう伝えておくれ。それからフィルチ、玄関の扉を閉めるのじゃ。

安全が確保するまでは、生徒達を寮に戻すことはできん。」

ダンブルドアに指示された者達は、それぞれの方向へと散っていく。

今私のやることは、城中を回ることだと思いい、階段を下りるためにセブルスの横を通り過ぎようとする、後ろからダンブルドアが彼を呼ぶ声が聞こえてくる。

彼が横を通り過ぎた時は、決してその方向を見ないように真っ直ぐ前を向いたまま階段を下りた。

私はそのままブラックが潜んでいそうな所に適当に足を運んだ。本来だったらこの時間帯に廊下を歩いていたら、まだ生徒達の声が聞こえてくるはずだが、今は静まり返っており、更には少し薄暗いせいで不気味だ。

ブラックが居ないことは知っていたが、一応杖を握りしめながら、廊下の角を曲がると何か物体が突然に視界に入った。あまりに突然のことで驚いた私が持っていた杖を向けると、向こうも私に何かを向けてくる。

「レイラ?」

誰か分かる前に聞こえてきたのは、私の名前を呼ぶ声で、目が慣れるとそこには私に杖を向けるルーピンがいた。

杖を下ろす彼は、少し顔色が悪く、体調が良くないように見えた。

私はゆつくりと杖を下ろしながら、じつとルーピンを見つめる。

「何かおかしいことはあった?」

「いや、何も問題なかったわ。多分もうブラックはここには居ないわね。」

問いかけてくる彼に言葉を返して、私は横を通り過ぎる。満月までまだ時間はある。体調が悪そうに見えたのは、単なる風邪なのかそれとも薄暗いせいでそう見えただけなのか、分からないが私は気にすることなく、歩き進めた。

ひと通り探し終えた頃には、空には星が出ていて、肌寒くなっていた。薄着だった私は、手の摩擦で体を温めながら、私は皆が寝静まっているであろう大広間に足を向かわせる。

階段を上れば直ぐにある大広間への入り口から、丁度タイミングよくダンブルドアが出てきた。

「先生、ひと通り探してみましたが、どこにも居ませんでした。」

「すまんの。わざわざ報告をありがとう」

私の報告する声を聞いたダンブルドアは、どこまだ余裕があるようにお礼を言ってくる。

「……すいませんでした。生徒達の安全を確保すると言っておきながらこんなことになってしまい……」

周りの人間からしたらきつと私の印象は、もつと悪化しただろう。魔法省の人間というだけできつと良く思わない人もいるというのに、結局こんな不始末になったのだから。

「今回のことはしようがないことじゃ。誰にも予想つかなかったことじやろうし、君ばかりが責任を感じることはない……が……ひとつ君に聞きたいことがある。」

私を励ますように言うダンブルドアの青い瞳が、突然獲物を捕らえたように私を映した。

「君がもしディメンターを潜り抜け、ここに入るとしたらどうするかの?」

問いかけるダンブルドアは、完全に私を怪しんでいるような言い方

だった。

「それはどういった意味でしょうか？」

慎重に言葉を選びながら問いかけみると、彼の瞳はいつも通り優しい色になる。

「君の考えというのは、到底儂には考えつかないものばかりでの。君の考えの中にヒントが隠されていないかと思っただのじゃ。」

「…残念ながらデイメンターを潜り抜ける方法など想像もつきません。」

ダンプルドアにそう言い告げていると、大広間から出てきたセブルスの姿が視界の端に入った。

私はセブルスを気にしないようにしながら、その場を後にした。

10 満月が綺麗な夜に

週が明け、月曜日を迎えてもすれ違う生徒達からはブラックの事を話している声がよく聞こえてくるほど学校中はシリウス・ブラックのことで持ちきりだった。

そうなるのは十分に理解できるのだが、ひとつどう考えても分からないことがある。それは生徒達の視線だ。つい最近まで私が隣を通り過ぎようが何も反応みせなかったというのに、今では私の姿を見ると友達と話す声を小さくし、目が合えば慌てて逸らしてくる。更には横を通り過ぎる時に、私を避けてくる始末だ。

いい風には見られないとは覚悟はしていたのだが、ここまでとは思わなかった。ブラックが侵入されたこと以外にも何か他の理由があるように思えてならないが、今私を知る方法など思いつくはずもない。

午前の授業が終わり昼食の時間を迎えると、私は約束通りルーナを探し回ってみたが、一向に見つかる気配がない。私はとりあえずもう一度、大広間に戻ってみるが、どこにも見当たらない。

…………どこにいるんだろう…

彼女が行きそうな場所を考えていると誰かから袖を引っ張られた。振り向けば、そこにいたのはサンドイッチや甘そうなお菓子を抱えているルーナだった。

「見つけた」

「ルーナどこにいたの？」

私は彼女が重たそうに持っているサンドイッチやお菓子を持って、問いかけとルーナは嬉しそうに答える。

「やっぱりあたしは見つけるのが得意みたい。」

確かに結局ルーナが私を見つけたが、私の問い掛けの答えにはなっていない。最初の頃の私だときつとここで戸惑ったと思うが、今の私はこの程度ぐらいはもう慣れていた。

ふと顔を上げ彼女の奥にいる生徒達に視線を移せば、生徒達が私に何やら怪しんでいるような視線を浴びせてきては、時折ルーナに視線を移していた。まるで変わり者を見るような目で見ている生徒達を見ていると、私は自分の学生の頃を思い出す。

……これでは彼女が浮いてしまう……

……関係ないルーナを巻き込むわけにはいかない。

「ねえ、ヘルキヤットさん。今日はあたしのお気に入りのお場所で食べよう。いい所なんだ。」

彼女は私のそんな思いも知らずに手を握ると、スタスタと歩き出した。

………こんなに優しい子が私のせいで、友達1人もできなくなるというのなら、……明日からあまり近づかないでおこう。

私は持っているものを落とさないように気を使いながら、前を歩くルーナの後ろ姿を見つめた。

「ねえ、ルーナ。外で食べるの?」

「うん。外」

前を歩くルーナに問いかけると、彼女は中庭に出ていく。確かに今

日は天気も良いし、暑くも寒くない丁度いい気温だ。

ただ彼女が向かっている方向は、私がいまだに行きたくない場所があると全く同じ方向だ。

その場所に近づくにつれて、心臓は緊張するように鼓動を早くし、ルーナのお気に入りのお場所があんな場所ではありませんよという気持ちが強くなっていく。そんな事を祈った所で彼女のお気に入りのお場所が変わる筈がない。

「……だよ。」

ルーナの声が聞こえ、顔を上げ視界に入ってきたのは、芝生と水面がキラキラと輝いている湖で、……私が避けていた場所だった。

彼女はフナの木の下に腰掛けると、立っている私を手招きする。私は大人しくルーナの隣に腰掛けて、持っていたサンドイッチを渡した。

「ここにはよく来るの?」

サンドイッチを頬張るルーナに問いかけると、彼女は飲み込んで頷きながら答えた。

「うん、ここは落ち着くから好きなんだ。」

「そう……ここは良い所だものね。」

私は自分を誤魔化すようにそう言って、手に持っていたサンドイッチを頬張る。

ここは何も変わっていない。何一つ変わっていないせいで、逆にあの出来事が昨日のことにように頭に浮かんでくる。

私だって昔も今も、自分の為に彼の幸せを願ってあげられないのは変わっていない。歳を重ねれば少しはましになるとは思っていたのだが、そんな簡単なことではなかった。

「ねえヘルキャットさん。」

昔の事を思い出していると、横にいるルーナは私に返事をする隙さえ与えずに、声を出した。

「どうして人間って、相手の事を良く知らないのに最初から拒絶するのかな。」

何故そんな事を問いかけてくるのかは分からないが、彼女の言った問いかけは自分の事を言われているようで、一瞬心臓が飛び上がった。

「どうして、嘘ばかりつくんだろう。」

言い終わったルーナが持っていたサンドイッチを頬張る姿を見て、私は視線を戻す。

……ごめんね。ルーナ

私は心の中で謝りながら口を開いた。

「嘘にも種類があるのよ。人を傷つける嘘や自分を守る為の嘘もあれ

ば、大切な人を守る為の嘘だつてある。」

……私も……嘘つきなの。

「ルーナ、何事も考えることは良いことだとは思うけど、考え込みすぎには注意しなさいね。」

何を考え込んでいるかは分からないが、私は彼女の頭を撫でてあげることしか出来ず、何を言つて、何をしてあげれば正解なのか分からなかった。

欠けていた月がだんだんと丸みを帯びていくと、学校でルーピンを見る回数が段々と減つていき、最近では朝食でさえ見かけなくなつた。更には夜中、見回りが終わり自室に戻る為に魔法薬学の教室の前を通る時、セブルスが薬を作っているのか、耳をすませると何かを煮込むような音や刻む音が聞こえた時もある。

ブラックに侵入されたあの夜から、随分と時間が経つても私がやることは変わらずホグワーツ内を見回るといふ名の散歩だけだ。

ブラックを捕まえる気などない私にとって、毎日が退屈で、今日もまたいつもの変わらず教員席で朝食を食べていた。

外はカリカリ中はふんわりとしているトーストに、ジャムとバターを塗つて食べていると、いつも通り数多くの梟達が手紙や小包を届けに大広間に入ってくる。天井高く飛ぶ梟達はそれぞれのお届け先の人の前に手紙や小包を落としていく。

ご飯を食べているというのに、梟の羽根や糞が落ちてきた時の事を考えると何故この時間なのか不思議に思った。

そんな学生の中から感じていた事を、思いながら飛んでいる梟達を眺めていると色々な色の梟達が目に入ってくる。

茶色や白、何か模様のように色が分かれている梟もいれば、黒色もいる。

……黒か…

私が無意識に黒色の梟を目で追っていた時だった。私の耳に入ってきたのは、学生の頃私の隣で、よく鳴いていたあの鳴き声だった。手からは自然とトーストが落ち、私は反射的に勢いよく立ち上がる。

何も言わずに突然立ち上がる私の姿を見てくる周りの教師達の姿が視界の端に入ったが、今はそんなの気にしてなれない。

大広間を出ていく梟達の姿を見た私は、後を追いかける為に、隣に座っている教師の隣を通り、少し早歩きで広く空いている真ん中の道を通る。視界の端に、明らかに私の方を見ている生徒達が見えたが、私は気づかないふりをして扉を指して歩いた。

……さつき…絶対アテールの鳴き声が聞こえた

あんなに鬱陶しく感じていたというのに、私はただ会いたいという気持ちを胸に、大広間を出た瞬間、私は小走りで梟小屋に足を向かわせた。

うねった階段を駆け上り、梟小屋に入ると、小屋で休んでいる梟をひとつひとつ確認しながら辺りを見渡した。別に時々聞こえる梟の鳴き声や羽根を広げたり動かしたりしている音で、静まり返っているというわけではなかったというのに、息が乱れる私の呼吸の音がやけにはつきりと聞こえる。

ひとつひとつ仕切られたスペースにいる梟をひとつひとつ確認していると、視界の端に何かふわりふわりと落下していることに気づいた。

人間というのは動く物がとても気になるらしく、私は何か落下し

ていた場所にゆっくりと近づくと、窓際に黒い羽根が一枚だけ落ちていた。

試しに手に持ってみるが、何も変哲も無い羽根だけではアテールがここにいたということは分からない。

……気のせいか：

よくよく考えてみれば、梟の鳴き声なんてそんな変わるものではないし、きつと私の気のせいだったのだろう。

そんな事を考えた私は急に自分のしてる事が馬鹿馬鹿しくなり、滑稽に思えてきた。

こんな時間が経っているというのに、私の元に戻ってくる事自体あり得ない。

多分久々に走ったせいだろう。疲れたのか口元が上がり笑いが出そうになった。

そうだ、笑いそうになったのはきつと久々に走ったせいだ。

梟小屋から戻り、いつも通り時間を潰していると授業を終えたであろう生徒達がどっと教室から出てきて、静まり返っていた廊下には賑やかさが戻った。

元氣よく廊下を走る生徒に気を取られていると角を曲がった時に誰かにぶつかってしまい、条件反射で口が動く。

「……めんなさい。」

私は顔も見ないまま、その生徒が落とした教科書を拾い上げ、渡す為顔を見ると、目の前にいたのは丸眼鏡を掛けたハリリーだった。どうやら彼もついさっきまで私だとは分かっていたいなかったらしく、気まずい空気が流れたのが分かる。

……今日は運が悪い……

ハリーの後ろにいるハーマイオニーは、じつと私を見つめてくるし、ロンは不機嫌そうに口角が下がっている。

私は手元に視線を移すと、手に持っていた彼の教科書は闇の魔術に対する防衛術だった。

「ぶつかってしまつてごめんなさいね。」

「いえ：僕も前を見てなかったのよ」

そう謝りながら、ハリーに教科書を渡すと彼は緑色の瞳に私の姿が映り、腸がぎゅつと握りつぶされたように気持ち悪くなった。

平常心を保ちながら何も言わずにその場を立ち去ろうとすると、慌てたように私の腕を掴んで呼び止めてくる。

「ハリー」貴女は、スネイプ先生と同級生なんですよね？」

止めようとするハーマイオニーの声を遮り、食い気味で喋つてくる。

「…それが？」

私が睨みつけながら聞き返しても、ハリーは臆する事なくはつきりと聞いてきた。

「スネイプ先生が闇の魔術に対する防衛術に執着するわけは知っていますか？」

こんな質問をするということは、さつきあつた授業はルーピンではなかったのだろうか。今夜が満月だったことを思い出した私は、何故彼がそんな質問をしてきたのか納得しながら、口を開く。

「それを知っていたとして、何故私が貴方に教えなければならないの？」

ハーマイオニーがなかなか引き下がらないハリーを止めるように腕を引つ張っている。

何も答えずに見つめてくるハリーを見て、私は無意識に溜息がこぼれ落ちた。

「そんなことは本人に直接聞いて見てはどうかしら？」

私はハリーの手を振り払って、彼に背を向けると顔も見ずに言い放った。

「彼の気持ち分かるはずがない私知ってるわけないでしょ。」

とにかくあの瞳を見なくなかった私は、その場を逃げるように早歩きで後にした。きつとハーマイオニーが追いかけるのを止めてくれたのだろう。ハリーが追いかけてくることはない代わりに、ロンが何やら抗議する声が聞こえてくる。

何を言っているのかは分からないが、ロンの声を聞きながらただ歩き進める私の頭にはこびりついたように緑色の瞳が浮かんでは、エバングの顔が浮かび消えてくれずにいた。

あの瞳を見るたびにあの時の出来事を止めなかったことを責められているような気がして、気分が悪くなる。

自分が何もできない奴だということはもう十分すぎるほど知っている。

側にいないのに、セブルスはまだ今も彼女のことだけを想っている事も知っている。

こんな想い消すことができたなら、断ち切ることができるのならもうやってる。だけどどんな事しても無理なのだ。苦しくて、悲しくて、辛いのに、それでも好きなんだ。

好きだという気持ちが溢れてしまえば、見て欲しくて堪らなくなる。私を見てほしいという気持ちが強くなって、醜いものに変わっていく。その繰り返しだ。

私はまだ死んでいないのに、セブルスはきつと私を見てくれない。気づいてくれない。

もうこの世に彼女は居ないはずなのに、どこまでもついてくるエバングが憎くて、恐ろしくて、怖かった。

生徒達が寝静まった夜中、私はいつもと変わらず城中を歩き回っていた。窓から見える月は、思わず見惚れてしまうほど綺麗な満月で自然と足が止まる。

……綺麗な……

ローブのポケットに手を突っ込むと、中に入っていたチョコレートを取り出し、手のひらの中にあるチョコレートを見つめながら心の中で呟いた。

別に部屋にあったチョコレートを持ってきただけだ。

チョコレートを握りしめた私の足は、思いとは裏腹に城すぐ側にある暴れ木がある方へと向かっていた。

……外に出た方が満月が綺麗に見えると思っただけ。

私は自分自身に言い訳をしながら、暴れ木へと歩いていく。杖を取り出し、暴れ木に呪文をかけると、根元にある人が1人入れそうな穴に足から入ると結構な広さがあった。

杖を取り出し明かりを灯しながら奥へと進み、出た場所は荒れ果てた廃墟だった。カーテンは引き裂かれ、床にはガラスの破片が散らばっており、歩く度にぎしぎしという軋む音が聞こえてくる。

ここが、叫びの館か。

一度も来たことがなかったが、叫びの館も私の記憶通りだった。迷うことはないだろうと思いつながら、部屋を出ると私の所まで何か暴れるように引き裂く音や、唸り声が聞こえてきた。どうやらルーピンは一階の1番奥の部屋にいるらしい。

彼を1人で相手にしたら、きつと命はない。

私はその場に座り込んで、静かになるまで待ち続けた。

少ししてぱったりと音が聞こえなくなり、眠り被っていた私は目元

を擦ると、ゆつくり立ち上がった。杖を握り直しながら、さつきまで音が聞こえてきていた部屋に恐る恐る足を向かわせる。

自分が何故こんなところにきて、何故こんなことをしているのか全く分からず、自分の体だというのに、他人の意思で動かしているみたいだ。

私もうほとんど固定されていない木の扉を押すと、ギーという音を立てながらゆつくり開いた。

部屋に居たのは、顔や体に新しい傷をつくり、血を流しているルーピンだった。狼の姿ではないが、爪は長く鋭く伸びており、理性と戦っているのかどうか分からないが食いしばっている歯は、人間の腕を食いちぎってしまいそうなほど鋭そうだ。

荒い呼吸を繰り返す彼を見下ろしながら、私は話しかけてみた。

「ルーピン、調子は………悪そうね。」

青白いルーピンの顔色を見て、私はゆつくりとしゃがみ、彼にチョコレートを差し出してみる。

「チョコレート………持ってきたの。貴方好きだったでしょ？」

問いかけてみても返事が返ってこないのはしょうがないだろう。

全然襲いかかろうとはしないのは、セブルスが作った薬のおかげだろうか。

ルーピンからしたら、私のこの行動は迷惑だと思っただろう。私だって何故こんな自分から危険な所に行っているのか分からないが………ただ少し気になっただけだ。

『……あの頃は……綺麗だと思えたんだ……』

いつの日か彼が呟いた言葉を思い出した私は、そっとチョコレートを置いて唸っているルーピンの目をじっと見つめる。

優しい色を帯びているはずの彼の瞳は、今は獣のように瞳孔が開きっぱなしでそこには光なんて存在していなかった。

「……ルーピン………あの時はごめんなさい。」

そんな彼らしくない瞳を目の前にしたからなのか、私は声を絞り出すように出して、後を続けた。

「貴方を傷つけるような事を言って、謝りもせずにこんなに時間が経ってしまったことも謝るわ。」

私がいやがみこみながら一歩近づくと、ルーピンは警戒するように一歩後ろに下がった。

「でもね……………親友だと言える存在がいた事自体……………私にしたら少しだけ羨ましかったの。」

どうせ、今の状態の彼に思いを告げても聞こえていないだろうし、戻った後も覚えていないだろう。

覚えていないことをいいことに、私はぎゅつと服を握りしめて、ゆっくりと口を開いた。

「本当は分かっていたのよ。…貴方が言ってる事は正しいことぐらい。こんな事していたら守れるものも守れないことぐらい分かっているわ。」

学生の時だって、貴方達とは衝突してばかりで、ろくに話なんてしたことさえない。エバンズが差し出した手を拒絶したことだって後悔してるの。」

私は全ての思いを吐き出すかのように、言葉に乗せて声に出して行く。

「それでもこんな私でも、守りたいものがあるの。私は私なりに昔も今も、それを守りたいのに、その人の幸せを何よりも願っているはずなのに……………本当に駄目ね。」

目の前にいる彼に笑いかけてみるが、勿論反応なんてある訳がない。私は床に置いてあるチョコレートをルーピンの方に差し出しながら、宣言するように少し大きめな声を出す。

「…ルーピン……………私は貴方ほど綺麗じゃない。」

部屋に響く私の声が消えていくのを聞いて、立ち上がりながら服に付いた汚れを払い、ルーピンに背中を向けた。

「……………ごめんなさい。つまらない話に付き合わせてしまって。」

背中越しにルーピンの唸り声を聞きながら、私は部屋から出ると扉を閉め、奥を見るように、扉の一点を見つめていると突然扉越しから

ルーピン低い唸り声が大きいものへと変わっていく。

何故急に大きな声を出しているのか不思議に思った私も、ふとガラスが割れている窓の外に視線を移せば、直ぐにその訳が理解できた。

窓の外に広がっている夜空には汚れなんて感じられない満月が煌々と輝いていた。

「……本当に……綺麗ね……」

そう呟いてしまうほど、本当に綺麗だった。愛しい人とこんな月を2人で見たらどんなに幸せだろう。

……今彼は……この月を見ているのかな……

大切な人と分かち合いたいという気持ちはきつと間違っていないだろう。

ねえ……セブルス……今夜は月が綺麗よ。

心の中で言ったことに馬鹿らしくなりながらも、私は暫くそこから見える満月を眺めていた。

11 嵐の中のクイドイツ

いつも通りの時間に起き、いつも通り教員席に座り、朝食を食べているといつも通りに梟達が大広間に入ってくる。生徒達が自分の手元に届いた手紙や小包を開けている姿をただぼつと眺めていると私の目の前に、手紙を啜えた茶色の梟がすつと着地した。

私に手紙とは有り得ないと思ったが、試しに梟から手紙を受け取り、宛先を見てみるとそこにははつきりと私の名前が書かれてあった。手紙の封を開けると、そこには堅苦しい文章がちらちらと書かれている。

レイラ・ヘルキヤット殿

ダンブルドアから君はよく働いてくれているという知らせを受け、私も大いに嬉しい限りだが、ひとつ急用の知らせがある。

最近、シリウス・ブラックらしき姿を見たという目撃情報が後を絶たない。どの目撃情報が正しいかはこちらからは確かめようがない。ただ一つ言えることは、ホグワーツ周辺での目撃情報も多数増えてきていることだ。

そこで、君にひとつ頼みたいことがある。

ハリー・ポッターという少年から目を離さずに、側で彼の安全を確保してほしい。君も知っての通り、彼は例のあの人を倒した生き残った男の子として魔法界では有名だ。勿論ブラックが脱獄した理由もハリーが大きく関係していると私は考えている。

今日からハリーの安全を確保することだけに集中してくれ。ダンブルドアには私から知らせしておく。

コーネリウ

ハリーの安全……

私は手に持っていた手紙を握りしめて、視線を落としてため息をこぼした。

……冗談じゃない。ハリーから目を離すなですって？側で安全を守る？

あんな校則をごく普通に破るような生徒から、目を離すなど言われなくても無理がある。何をしでかすか分からないというのに、面倒なことが増えた。

ダンブルドアに何故わざわざ知らせるのだろうか。知らせる必要なんてないとは思うのだが、これは私がおかしいのだろうか。

「だっ……大丈夫ですか？」

横から聞こえた声に顔を上げると、隣に座っていたトレローニが心配そうに私の方を見てきていた。私は頭を抱えていた手を下ろし、彼女に心配をかけないようにするために笑顔を浮かべた。

「ええ大丈夫です。すいません、ご心配をおかけして」

「いっいえ。大丈夫ならいいんです。貴女が謝る必要なんてありませんわ。」

慌てたように言うトレローニは、気にしていないようにパンを一口食べたが、チラチラと私を気にしている様子だった。

クイディッチの練習をするグリフィンドールの選手達を、私は観客席から眺めていた。ハリーの練習姿を見るためにわざわざ来たのではない。ただ仕事として、魔法大臣から直接言い渡されたら下の者はそれに従わなければならない。

雲ひとつない晴天が広がっている今日は、良い練習日和でもうすぐ試合が近いからなのか練習にも熱が入っている。

箒に跨り、スニツチを追いかけるハリーは、猛スピードで空中を飛んでいた。

目立たないように、ベンチの端に座っていたのだが、それでもやっぱり目立っているらしくさつきから視線が痛い。

ハリーからすぐ横に視線を移すと、ちらほらといった生徒達が私がここにいることが不可解に感じるのだろう。

生徒達の表情は決して良くはなかった。

「君がこんな所にいるとは珍しいこともあるんじゃないのう。」

後ろから聞こえてきた呑気な声は、振り向かなくとも誰の声なのか直ぐに分かった。後ろのベンチに腰掛けたのかよっこらせつという何とも年寄りくさい言葉が聞こえてくる。

「好きでここに居るわけではありません。」

「そうじゃろうと思っておった。後ろからでも不機嫌なのが分かったわい。」

ダンブルドアは愉快そうに話してくるが、私はクスリとも笑えない。

「…しかし、意外じゃったの。いくら仕事とはいえ、素直に聞くとは思っておらんかったのじゃが。残念ながら儂の予想は外れてしまったようじゃの。」

「逆に仕事じゃなかったら、こんなことしませんよ。こう見えても大臣のご機嫌取りをしなければ私の居場所なんてすぐになくなってしまいますからね。」

私の言葉を聞いたダンブルドアは楽しそうに笑って、他人事のように言ってきた。

「君も大変じゃの。」

私はダンブルドアの言葉を無視をして、選手達の練習姿を眺めた。

「しかし、これで安心じゃ。君がハリーの安全を守ってくれるというのなら心強い。」

「……そうですか。貴方を安心させることができて良かったです。」

眩くように言った言葉が彼に届いていたかは分からないが、ハリーが丁度スニツチを捕まえたらしく、箒に跨っている彼は自分の手のひらを見つめていた。

ハリーから目を離すなど言われても、そんな毎日付き纏っていたら、怪しまれるに決まっている。流石に授業中や、寝る時まで側にいるなんていう意味ではないだろう。

そんなことを考えている私は今前の方を歩いている3人の後ろ姿を視界に入れながら、廊下を歩いていた。ただ行く方向が同じなだけだと誤魔化しながら、3人の後ろ姿を見つめていると、向こうから歩いてくるルーナの姿が視界に入る。

私は動かしていた足を止め、来た道に向くと彼女に背を向け、その場を逃げるように後にする。

ルーナは他の生徒達に何を思われようが関係ないらしく、一緒にお昼を食べたあの日以降もごく普通に私に話しかけて来たり、お昼を誘って来たりしてきた。周りの目など気にしない彼女らしいと言ったら彼女らしい。

だが私のせいで、学校が楽しいと言っていたルーナが楽しくなくなってしまったら、巻き込まれてしまったらと考えるとどうも私は、自分からルーナを避けていた。

しかし何故、生徒達にこんなにも避けられるのだろうか。

色々な心当たりを思い出すために、静まり返っている図書館に入り、高い天井に届くのではないかと思うほどある本棚と本棚の間を抜け、角を曲がろうとすると小さな声が聞こえてきた。

「ねえ、あの噂って本当なの？」

どうやら直ぐそこに生徒がいるらしく、内緒話をするかのようにひそひそと話しているほどのボリュームだったが、静まり返っている図書館ではよく聞こえてくる。

「あれでしょ。……シリウス・ブラックを手引きしてるんじゃない

かっという……」

「そうそう……中にはダンブルドアに直接言い言った人もいるみたいで」

……ブラックを手引き……

「それにしても魔法薬の課題、難しすぎよ。…あつこれじゃない？」

「そう、それよ。多分それに書いてたような気がした。」

立ち止まっている私の前に、ハツフルパフの女子生徒が角から姿を現わすと、2人とも本に夢中だった。1人が顔を上げ、私に気づくと気まずそうな表情を浮かべ、友人の腕を無理矢理引っ張っては逃げるように横を通り過ぎる。

これで、納得した。

どうやら生徒達の間で、私がブラックの手引きをしているという噂が流れていたらしい。

これは尚更、ルーナを極力避けなければならない。

大雨というよりか、嵐といったほうがびったりな天候の中でもクイディッチの試合はするそうで、生徒達は風に吹き飛ばれそうになりながら競技場に向かっていった。勿論私もこの試合の結果は知っていたが、任された仕事を守るために一緒に大荒れな天候の中、教師達専用の観客席に腰掛けて、試合が始まるのを待っていた。

大雨が降り続ける中、グリフィンドールとハツフルパフの試合が始まるホイッスルが鳴り響いた瞬間、箒に乗った生徒がすごいスピードで横切る。

この試合で、ディメンターの邪魔が入るのも、ハリーが落ちるのも知っている。だが、ダンブルドアが呪文を唱えることで大事にならなくて済む。

ここで私のやることなどないだろう。

試合が順調に進んでいるのかどうかも分からないほど視界が悪い中、私が選手達からダンブルドアがいつも座っているはずの席に視線を移すと、そこには居るはずの彼はどこにも居らず、代わりにマクゴナガルが腰掛けていた。

一気に血の気が引いて、頭が真っ白になるとグリフィンボールがタイムをとるホイッスルの音が聞こえてくる。私は居ても立っても居られずに、勢いよく立ち上がり、座っている教師達を掻き分けながらマクゴナガルに近づいた。私が突然立ち上がったことに、他の教師達は驚いている様子だったがそんなの今は気にしてられない。

「マクゴナガル先生、校長は？」

私に突然肩を掴まれ、驚くマクゴナガルは、少し戸惑いながらも答える。

「校長ならついさっき、魔法省に呼び出されて出かけていますよ」

ダンブルドアがこの場にいない。ということは、ハリーはこのままだと確実に死んでしまう。

今日はペンダントは、机の引き出しの中にしたまままだ。

完全に油断していた。……まさかダンブルドアがいないなんて、未来が大きく変わるなんて想像もしなかった。

私の心臓の鼓動はばくばくと緊張したように速くし、頭は何をすればいいのか分からなくなるほど混乱しているのかが分かった。

そんなことをしているうちに、試合が再開される合図のホイッスルが鳴ると、風を切る音がやけにはつきりと聞こえてきた。

私は空中を飛び回る生徒達に視線を移して、目で追いかけた。

……ハリーを探さないよ

柵に乗り出すようにしてハリーの姿を必死に探していると、後ろから心配そうに話しかけてくるマクゴナガルの声が聞こえてきた。

「一体どうしたのです。そんなに蒼白になって」

答える余裕なんて無い私は、ハリーを探すのに必死だった。後ろでは、私の焦る姿を見て何事かと教師達の声が聞こえてくる。

「……………いた……」

雨で見えにくかったが、ハリーらしき赤いユニホームを着た生徒が、上空を飛んでいる黄色のユニホームを着た生徒を見て、箒の柄の上に身を伏せてぐんぐんと上へ上へと高度を上げていつていた。

箒のスピードというのはもう一瞬で、ハリーは、あつという間に雲の中へと突っ込んでいく。

私は何かしなければならぬという焦りからなのか、無意識に小さな声で呪文を唱えていた。

「アクシオ、箒」

大丈夫：これで一番近くにある箒が来てくれるはずだ。

ハリーが突っ込んでいった雨雲を見ながら、自分を落ち着かせるように呼吸を繰り返していると後ろから肩を掴まれる。

その反動で振り返ると、雨に濡れたセブルスが視界に入ってきた。怪しんでいる様子の彼が口を開いたかと思ったら、低い声が聞こえてくる。

「何をしている」

答えたくても混乱している今の私は、そう簡単に思ったことが、こんな時に限って口から出ない。

「おい、聞いているのか」

セブルスの声が聞こえた時には、もう私の視線の先にある雨雲からはデイメンター達が姿を現していた。

何か猛スピードで風を切る音がだんだんと大きくなると、誰も乗っていない箒が勢いよく私に向かって飛んでくる。何をすべきなのかも整理がついていない私は本能のまま体を動かした。

……ごめんなさい：セブルス

心の中で一言謝った私は自分の肩を掴んでいるセブルスの手に爪を立て、彼の手を傷つける。男相手に力づくで振り払うなどできるわけがない。丁度私の爪も伸びていたし、血が出るんじゃないかと思うほど力強く引っ掻くように傷つければ、相当痛かったのか彼の顔が大きく歪んだ。

私に引っ掻かれた手を握りながら、ゆつくりと顔を上げるセブルス

を見ている瞬間は、ほんの一瞬なはずだというのに長い時間見つめ合っているように感じた。

私がセブルスの黒い瞳を見つめながら箒を手にとると、彼は今から私のやることが分かったかのように、瞳孔を開き、怪我をした手をほつたらかしにして私にゆつくりと手を伸ばしてくる。

……：貴方はどこまでも優しいのね。

私はセブルスから視線を逸らすと、そのまま柵の外に身体を投げ出した。

……だから：私は貴方に甘えたくなくなってしまったよ。

私が落ちたとも思ったのか、悲鳴が聞こえてきたが、雨音に消されてすぐに聞こえなくなった。地面に落ちる前に箒に跨り、箒の柄をしつかりと握り、高度を上げながらハリーの姿を探していると、もうそこには箒に跨っていたハリーの姿はなく、雨音に負けないほどの劈く悲鳴が聞こえてきた。

箒から手を離している気を失ったハリーが、力なく下へと落ちていく姿が視界に入った瞬間、何も考えることをしなのまま箒を力強く握りしめた。私は体を前方に倒して、重力に従って地面に吸い込まれるように落ちていくハリーに突っ込む勢いでスピードを上げる。

左腕を伸ばし、全体で彼を抱き寄せるように落ちるハリーの体に突進すると、左腕が嫌な音を立て、痛みが全身に走った。

何とか気を失っているハリーを、抱きかかえるような形で掴めることはできたが、スピードを上げすぎた箒が急に止まることもできるはずもない。

私はなす術がないまま観客席から垂れている寮の色に染まった布の中へと突っ込んだ。布が視界を遮っていたせいで、観客席を支えている何本も木の柱が目の前に見えた時には、もう避ける距離などあるわけがなく、私は反射的にハリーを守るように痛む左腕で抱き寄せて箒を回転させるしかなかった。そうすれば柱には自分の背中から思いつきりぶつかるわけで、衝撃で舌を噛んだのかすごい量の血の味がある。

もう原形をとどめていない箒で、気を失っているハリーを何とか地

面に下ろすと、競技場に侵入したデイメンター達が目に入った。

…なんで、呪文を唱えなかったのかな。

ハリーを無事に救えたことにほっとしたのか、私の頭にはひとつの疑問が思い浮かんでくる。

自分がどうしてわざわざ箒に乗り、助けに行ったのかが分からない。…呪文を唱えればそれで良かったはずなのに、それだということにあの時はただ必死で気づけば行動していた。

私は気を失うハリーの前に立ち、左腕と、背中の痛みに耐えながら、なんとか踏ん張ると杖を取り出した。彼に襲いかかろうとするデイメンター達に向ようとしたが、頭にはあることが浮かんでくる。

…死喰い人は守護霊の呪文を使えない……

もしここで使ってしまったら、セブルスは何と思うのだろうか。

……というより……私にとって幸せな記憶って……何だろうか……

だんだんと近づいてくるデイメンター達を見ながら、ただ立ち尽くしていると突然、先がとんがった帽子が視界に入ってきた。

私の前に立ち、デイメンター達に向かって杖を向けるマクゴナガルの後ろ姿を見た私は、後ろにいるはずのハリーに視線を移した。

……マクゴナガルが…来てくれたなら、デイメンター達は大丈夫だろう。

とりあえずハリーが無事かどうかを確認する為に、力の入らずに垂れ下がっている左腕を支えながら、寝転がっている彼に近づき、膝をついて顔を覗き込んでみる。

緊張が途切れたせいなのか、突然体の力が入らなくなり、視界が大きく歪み、私は荒くなつていく呼吸を繰り返しながら、ハリーの脈を測ってみた。顔色は悪いが、死んではないようだ。

ハリーから視線を上げると、マダム・フーチや、選手達、さらには教師達も駆け寄ってくる姿を見て私は安堵感に襲われた。

力の入らない体に喝を入れて、立ち上がる時だった。突然一気に耐えきれなくなったかのように、夥しい量の血が口から出てきて、立ち上がるうとしていた私の体はまた地面に膝をつく。咄嗟に口

を押さえて、血を吐き出す私の姿を見た生徒達は固まり、真っ青にしたマクゴナガルの顔だけがはつきりと見えた。私の肩を持って何か言ってくるが、今は息をするので精一杯で何を言っているのかもわからず、マクゴナガルであろう肩を握って、小さく呟いた。

「……………私ではなく……………ハリーを……………先に……………」

舌を切っただけかと思っていたが、この血の量はもしかしたら内臓がやられたかもしれない。そう思うと、柱に背中からぶつかったことを思い出して意識が朦朧としだした。

あまりに痛いからだろう。だから逆にあまり痛みを感じていないのかもしれない。

地面に広がっていく自分が吐き出した血溜まりを見つめながら思って、顔を上げてハリーを確認すると、人影が私の方に駆け寄ってくる姿が見えた。

すると突然にさつきよりも少しずつ、痛みが増してきて、息をすることさえ苦しい私は服を握りしめながら、私の前にしやがみこんでいる誰かの胸にそのまま倒れ込むと、薬草の香りと懐かしい匂いがした。

……………このまま死んでもいいな

何故かそんなことを思った。

逆に気を失ってしまったほうが楽なのだが、残念ながらそうはさせたくない。

耳元で、落ち着く低音の声と、冷静な女の人声が遠くで聞こえてきて、私はもたれかかっている人のローブをぎゅっと握っていた。

…少しだけ……………怖い……………な

あまりに人の体温が感じれなくて、怖くて恐ろしかった。

すると誰か分からないその人は私を優しく抱きしめ返してくれて、傷物のようにそのまま立ち上がる。少し揺れるたびに痛かったが、それでも何故かこの人の胸の中は落ち着いて、恐怖心も溶けていった。

……セブルス……

私はその人の温もりを感じながら、気を失う直前にセブルスの名前を心の中で呼んでいた。

……隣には居なくても、名前を呼んだだけでも、私はそれでもやっぱり安心する。

自分が辛い時にとっての愛しい人の存在というのはそういうものだ。

12 甘い夢

水の中に沈んでいるような感覚が襲ってきたが、冷たいのか温かいのかさっぱり分からない。ただ目を開けるのも億劫だと感じるほど体が怠かった。

瞼の裏に光を感じ、恐る恐る目を細めながら開けると、目の前には一緒に水の底へと沈んでいるセブルスがいた。

硬く閉じられている瞼に青白い肌、彼の黒髪の毛先がまるで泳いでいるように動いている。少しずつ少しずつ確かに沈んでいつているが、不思議と苦しくはなく、私は空気の泡が上へ上へと上がっていくのを見ると、何を思ったのか彼に向かって手を伸ばしていた。

私はセブルスの手首を掴むと自分の方へと引き寄せる。彼の頬に手を置いて、撫でてみてもセブルスは瞼を開けることはなく、長い睫毛が目に入った。

まるでこんなことを何度もしているように緊張することはなく、胸の中が温かくなっていくのを感じ、どうしようもない気持ちが溢れた私は、額をくつつけて、未だに目が覚めない彼の顔を見つめては笑みが零れ落ちる。

セブルスが私の腕の中にいる。

側に近くに居てくれている。

ただそれだけで幸せだというのに、私はそれ以上を求めるように彼の体を優しく抱きしめた。

……セブルス……

口を開いて名前を呼んでみても、声になることはなく、口から出るのは空気の泡が出るだけ。

……愛してる……

それでも私は目の前にいるセブルスに伝えようと、口を開いては決して離さないように彼のローブを握りしめた。

瞼を閉じると急に、私の重たい体を誰かが上に引つ張っているような感覚に襲われて自分でもどうなっているのか分からない。

上に行く度に体が重たく、頭が誰かに押さえつけられているように圧迫感に襲われて少し息がしづらくなる。

重たい瞼をあけると、眩しい光が差し込んで目眩み全身が怠く感じたが、目が慣れてきてゆっくりとぼやけていた意識がはつきりすると、自分がベッドのようなものに寝転んでいることは大理解できた。今私の視線の先に広がっている天井は見たことがなかったが、今の私はさっきまで目の前にいたはずのセブルスを求めるように無意識に手が伸びる。

……あつ…夢か…

自分のやっていることが滑稽に思えてきた私は、伸ばしていた手を下ろして、額に乗せると自然と溜息が出てきた。

「……もう…本当に…嫌になる…」

現実ではなく、単なる都合の良い夢だとは分かっている。だからこそ辛いのだ。夢の中の私は幸せを感じられても、目が覚めれば残るのはぼつかりと穴が空いたようなそんな心寂しい感覚と、虚しさだけ。

私はそんな後味の悪い感覚を誤魔化すように、周りを確認するため重たい体を無理矢理起こすが、誰の姿も見えない。立ち上がろうと床に足をつき、力を入れると肋骨らへんがひどく痛んだ。あまりの痛さに右手を回しながら、ゆっくりと歩いてカーテンを潜り抜ける。

カーテンを抜けても誰の姿もなく、私は力の入らない左腕を垂らしながら目に入った扉に向かって歩く。少し息が上がったが、扉までたどり着いた私が部屋を出る為に扉を開けた瞬間、視界に入ってきたのはダンブルドアの姿だった。

少し驚いて言葉を失ったのは私だけではないらしく、ダンブルドアも瞬きを繰り返しながら私を見つめてくる。

「何をしているんですか☒」

横から女の人の声が聞こえ、視線を移すとダンブルドアの隣には、中年の女の人があった。足元に何か当たったような感触を感じ、視線を移すと包帯が転がっている。

「……あの……大丈夫ですか？顔色が良くないですが…」

顔色の悪い女の人に声を掛けると、彼女は怒ったような口調で言うてくる。

「私の心配をする暇があるのなら、自分の心配をしなさい。ほら、早くベッドに戻って。」

あまりに凄い勢いに圧倒されながら、大人しく体温で生暖かいベッドの中に戻る。

「……あの……ここは…」

包帯を巻き直している女の人に問いかけてみると、ときぱきと仕事をこなしながら答えてくれた。

「ここは病院ですよ。何があったかは覚えていますか？」

そんな言葉を聞いた私の頭には、ハリーを救おうと無茶した時のことが思い浮かんでくる。思い当たるような表情を浮かべた私を見る彼女の隣には、羊皮紙と羽根ペンが宙に浮き、ペンが忙しそうに動いていた。

「ちよつと失礼しますよ。」

彼女は私が着ていた服のボタンを何個か開けると、胸に巻かれてある包帯の上に手を置いては目を閉じる。数秒経つと目を開け、宙に浮いていたペンを持つと書き込んだ。

私の背中に手を回し、何か確認するように骨の上を念入りに触ると、また羊皮紙に書き込んで、包帯を変える。

「じゃあ、次は左腕を見せてください。」

あの印が浮かび、ドキツとしたが私の服のボタンを直した彼女の言う通りに大人しく差し出すしか他なかった。

力の入らない私の腕を持ち、また羽根ペンを動かす、包帯を解いていく。素肌が現れた私の左腕には何もなく、ただ少し火傷の跡のようなものが残っていた。

「良くなっていますよ。普通は3日でここまで回復しないものなんですけど…」

「……3日……」

彼女が言った言葉が引つかかり繰り返すと、何事もないようにさら

りと口にした。

「ええ、貴女3日寝ていたんですよ。」

そんなに寝ていたのかと驚いていると、彼女は考え込むように言った。

「やっぱり応急処置が迅速に行われたおかげでしょうね。」

彼女が羽根ペンを動かすのを止めると、隣でポンという音が鳴り、ベッドの近くにあった小さな物置の上には、小さな瓶が3つ並んでいた。瓶に入っている薬らしきものはほんのすこしの量だったが、3つの中の2つが毒薬なんではないかと思うほどの凄い色をしている。

「今からはこの薬を飲んでください。この2つは寝る前にお願いしますね。いいですか？ 安静にですよ。貴女はまだ完治していませんから。」

濁っている薬を渡しながら、念押し言ってくる彼女がカーテンを潜り抜け、扉を開ける音が聞こえてくると、ダンブルドアらしき声も聞こえてきた。

…きつと終わるまで外に待っていたのだろう。

私は渡された瓶の蓋を開け、薬を一気に口に入れた。口いっぱいドロブのようなどろりとした感触と苦い薬独特の味が広がる。私は吐き出しそうになりながらも、目を瞑って喉を動かした。

「薬を飲んでるところすまぬの。」

カーテンを開ける音と、そんな声が聞こえ目を開ければ、ダンブルドアが入ってきて私のためにカコップに水を注ぎ、渡してくる。

「ありがとうございます。」

早口でお礼を言い、受け取った水を一気に飲み干すとさつきよりははまだましになった。

「すまんのう。今日は君の顔色を見るだけの予定じゃったから、土産の品を持ってきておらんのだじゃ。」

「いえ、お気になさらず。」

私はまだ微かに口に残っている、苦い薬の味に顔を歪めながら声を出す。

「目覚めてばかりで申し訳ないが、少し儂と気晴らしにでもお話をし

てくれるかの？」

「……………ええ…いいですよ。」

断る理由がない私が了承すると、ダンブルドアはありがとう一言お礼を言っ、ひとりでに彼の元まで来た椅子に腰掛ける。

「まず君にはお礼を言っとかなければならんの。……君が居なかったら、ハリーはこの世にはおらんじやろう。」

「お礼なんて結構です。私は私の仕事をしたままです。お礼を言われる筋合いなどありませんよ。」

私が冷静に返すと、彼はいつも通り微笑みながらいつもの調子で言っってくる。

「いや、君は命を懸けてまであの子を守ってくれたことに変わりはない。本当にありがとう。」

……………命を懸けて…

そんな言葉を心の中で繰り返すと、私の口は勝手に動いていた。

「それ、やめてくれませんか。私はあの子の為に命を懸けたのではないのではありません。」

……………私はただ、自分の知っている未来通りに事が運ぶようにしただけ。

ハリーの為にあんなことをしたとは、思われなくなかった。

「……………どうやら、君は儂が思っている以上に、ハリーのことを良い風には思っっておらんのじゃの。」

「ええ、そうですね。私ほど彼のことを嫌っている人間は居ないと思いますよ。」

私は何か悟られるのが怖くて、ダンブルドアの顔を見ないようにしながら答える。

「しかし儂には、そんな子の為にあのような無茶な行動ができるとは思えんよ。」

「……………どういうことですか…?」

彼の言っった意味が一瞬分ならず、ダンブルドアに視線を移し、問いかける私は少し苛ついていた。

「ミネルバから聞いただけで実際見た訳ではないが、何故呪文を唱え

ようとしなかったのじゃ？君だったら使うべき呪文もすぐに思いついたと思うがの。」

真剣にそんなことを言うダンブルドアの姿を見たら可笑しくて、笑いそうになったが、私はため息をつきながら口を開いた。

「貴方は少し私に夢を見過ぎです。私はあんな緊急事態を目の前にして冷静に対応なんてできませんし、あの子を救ったのはそれが仕事だからであって、他の理由なんてありません。」

ハリーを心から助けたいという気持ちで助けたわけじゃない。自分でも分らないが、これはそう簡単に言い表せられるものじゃない気がした。

「……君は……」

小さなダンブルドアの声は、静まり返っているせいでよく聞こえる。

「…何ですか？」

返事をし、問いかけてみたが少し間が空いて返ってきた彼の言葉は、驚くべきものだった。

「………すまんの。言うことを忘れてしまったわい。最近物忘れが酷くて、困っておるんじや。さつき言いかけたのは忘れておくれ。」

冗談ぽく笑いながら話すダンブルドアの青い瞳は、いつも通りと何ら変わらなかったが、今のは何か言葉を呑み込んだ彼が誤魔化しに言った言葉だという事は大体予想がつく。

……こんなにも…分かりやすい誤魔化し方…なんとも彼らしくない。

……一体ダンブルドアは何と言おうとしていたのだろう。

「さて、これ以上長居するのは君の体に障ってしまうからの。今日のところはこれぐらいで失礼するとするよ。ああ、そうじゃった。怪我が完治するまではここで治療をしとくのじゃよ。」

「いや完治でなくとも、大体治れば……」

ぼけっとしていた私を見てか、そう言いながら立ち上がるダンブルドアはにこりと笑いかけてくる。

自分がどこをどんな風に怪我したのかはまだ聞いていないが、自分の体のことだ。だいぶ深い傷を負ったことは何となく分かっていた。そんな怪我が完治するのを待っていたら、もしかすると年が終わるかもしれない。つい最近、未来が変わろうとしたというのに、この先変わらないわけがない。

「そんなに慌てなくとも、もうすぐクリスマス休暇も来る。それに今の調子でいけば、クリスマス休暇明けには、復帰できるときっきの癒者も言っておった。ああ、後君の私物も持ってこなければならんの。良いかの？自室に職員が入っても。勿論必要な所には手はつけんよ。」

「……………ええ、良いですけど…」

私が納得しないまま答えると、彼は満足そうに笑ってカーテンを掴み、また何かを思い出したのか私の方を振り返ってきた。

「そうじゃった。見舞いの品は何が良いかの？何か今食べたいものでもあるかの？」

断ろうかと思っただが、ダンブルドアがそう簡単に引くとは思えなかった私は、そんなやり取りも面倒に感じて今一番食べたいものの名前を口に出した。

「甘い焼き菓子か、クッキーをお願いします。」

そう答えれば彼は満足そうに笑って、カーテンの隙間から顔を出しながら、子供に言いつけるように優しく言ってくる。

「ゆっくり寝て、休むのじゃよ。」

ダンブルドアが部屋の扉を閉める音が聞こえてくると、私一人になった部屋は静まり返り、自然とさつきダンブルドアが言ったことを思い返すと、部屋が散らかっていることを思い出した。

こんなことなら片付けておけば良かったと思いつつながら、掛け布団を肩まで被ろうとした時ふと引き出しの奥にしまっているペンダントが、脳裏に浮かんでくる。

私を怪しんでいる彼なら、この3日間の間にも忍び込んだ可能性

だって十分に考えられるし、まだだとしても忍び込まないという確証はどこにもない。

ペンダントの本当の姿は見えなくても、存在自体知られば、彼だったら答えに辿り着いてしまうかも知れない。

一度考えると、最悪な結果が色々と浮かび上がってきて、もうそうなればこれからそんな不安を胸にクリスマス休暇明けまで過ごすことなどできない。

私はベッドのすぐ横にあった小さなクローゼットの引き出しを開けて、私服がないか探してみると思った通り、あの時に来ていた服が綺麗に畳んでしまっていた。寝間着を脱ぎ、私服に着替えると、どこかに靴はないかと探してみればベッドの下に隠すようにしまっているのを見つけた。なんだか宝探しをしているみたいだと思いつながら、ローブを羽織ると、私服と一緒にしまっていた杖を懐にしまう。……よし、ここまではいい。

問題は……誰にもばれないようにここから抜け出さなければならぬ。

この怪我で歩くのは億劫だが、一人で姿くらましをするのは危険だし、かといってアウラを呼べば、レギュラスと対面することになる。

この怪我を見た彼から何を言われるか分からないし、余計な心配だけはかけたくない。

私は足に力を入れて立ち上がると、足音を立てないように扉まで歩いて、外の様子を伺ってみる。廊下には見舞いに来た人や癒者など沢山の人が歩いていて、到底誰にも会わずにここから抜け出すことなど無理そうだ。

扉を静かに閉め、ベッドに戻ると大きい窓に手をかけ、開けようと力を入れてみたがどうやら頑丈な魔法がかかっているようでびくともしない。しかし、開いて窓から抜け出せたとしても外には普通にマグル達も居るわけで、見られたマグル達全員の記憶を消すことなど今の私にはできる自信がない。

こうしている間にも、もしかしたらという不安だけが募っていき、

私は溜息をついた。

……こうなったら…アウラを呼ぶしか方法がない

私はレギュラスに何か言われる覚悟を決め、ベッドに腰掛けると、アウラの名前を小さく呟いた。

「…アウラ」

久々に彼の名前を口にする、答えるようにばちんという音が聞こえて、目の前には久々に見るレギュラスとアウラがいた。

ローブを纏っているレギュラスを見て、私はいつも通りに話しかける。

「久しぶりね。何も変わりはない？」

私の姿を見たアウラが怪我に気づいたのか、何か言いたげな表情を浮かべたのを見て、私は目で訴えながら、関係ないことを口にする。彼はぎゅつと口を閉じた。

「変わりはありませんが…貴女はどうなんです？」

私の問いかけに答えるレギュラスは辺りを見回すと、私の目を見て答えてくる。

「私も何も変わりはないわよ。ただ困ったことがあってね。アウラ、ホグワーツの手前まで姿くらましをして欲しいの。「それは無理でしょう。」

アウラに近づきながら言う私の言葉を途中で遮ってくるレギュラスは、表情1つ変えないまま高圧的に話してくる。

「その怪我では付き添いでも姿くらましは危険だと思いますよ。」

服を着ているし、そんな簡単にはばれないと思っていたのだが、甘かったらしい。

「…確かに怪我をしているけど、軽いから大丈夫よ。」

ここで怪我をしていないと誤魔化しても意味がないと思った私は、軽い怪我だと言うことしか言えず、そんな私の声を聞いたレギュラスは表情を険しくさせ、静かに声に出す。

「病院に居るというのに、どこが軽い怪我何ですか？」

「周りが大袈裟なだけよ。」

明らかに怒っている様子の彼を宥めようと言ってみたがどうやら

逆効果だったらしく、レギュラスの表情はどんどんと険しくなっていく。

「軽い怪我なら、何故そんなに左腕を庇っているんですか？ 実際体を動かすだけでも痛んでいるんでしよう？ さっきから表情が痛そうに歪んでいますよ。」

「大丈夫よ。」

何故こんなにもレギュラスが不機嫌なのか分からず、私が説明しながら立ち上がると彼は止めるように早口で言ってくる。

「貴女の大丈夫は信用できない。そんな状態で行って一体何をすることもですか？」

「…忘れ物をしたの。」

「じゃあ、僕達が貴女の代わりにその忘れ物やらを取りに行きます。だから貴女はここで待っていてください「それは駄目よ。」

彼が言い終える前に、声を遮り否定すると、怒りが籠ったような悲しそうなそんな声が聞こえてくる。

「……何故です？」

「もし、誰かに見られたらどうするの？ そんな危険を冒すぐらいなら、私が行くわ。」

私があウラの前にしゃがみこもうとすると、溜息をつくレギュラスの声が耳に入ってきた。

「……はあ……どうして貴女はいつもいつも」

振り返り彼を見てみると、片手で頭を抱えて、俯いていた。

「……怒ってるの？」

何故レギュラスが怒っているのか分からず問いかける私の声を聞いた彼は、私を見て口を開く。

「ええ、怒っていますよ。」

「どうして？」

「どうしても何も貴女が無理ばかりをしようとするからです。誰にも頼ろうとせず」

「今頼ってるじゃない。」

彼の言っている意味が分からず、反論するとレギュラスは拳を作

り、凄い勢いで言ってくる。

「そういうことじゃないことぐらい気づいているでしょう!! どうして分かってくれないんですか」はつきり言葉にしてくれないと分からないわよ。」

「お二人共、少し落ち着きましょう。そんなに声を張り上げては誰か来てしまいます。」

私達の間を入れて宥めるアウラの声を聞いて我に帰ったのか、レギユラスは口を閉じる。

「レギユラス」

静まり返った部屋に彼の名前を呼ぶ私の声が響くと、レギユラスは顔を上げてこつちを見てくれた。

「今はこんなことをしている暇なんてないの。話は後からいくらでも聞くわ。だから今は私の我儘を聞いてほしい。」

私の言葉を聞いた彼は私が引く気がないことが分かったのか、少し溜息をつくと言わず私に近づいてくる。そんな光景を見ながら、アウラの前にしゃがみこみ、手を伸ばして小さな手を握った。

「お願いね。」

レギユラスの手を握った彼が躊躇しながらも私の手を握った瞬間、視界が大きく歪んだ。

歪んでいた視界が元に戻って、足が地面に着くと、少し足がもつれて体がよろけ、側にいたレギユラスが支えてくれた。

「ありがとう」

「いえ……今度は必ず何か起きる前に呼んでください。」

そう答えた彼はまだどこか悲しそうだ。私はレギユラスを見つめたまま少し表情を柔らかくして答える。

「分かった、覚えておくわ。」

私が目の前に建っているホグワーツに向かって、歩き出そうとする

と後ろから私を呼び止めるとアウラの声が聞こえてきた。

「お嬢様」

振り向けば、アウラは心配そうな表情を浮かべているのが視界に入ってくる。

「どうか無理だけはなされないでください。」

「…ええ分かったわ。」

私が前を向くと、後ろから姿くらしをする音が聞こえてきて、振り返ればそこにはもう誰の姿もなく、少しだけ寂しく感じた。

ホグワーツにかかっている橋を渡り、中へと入っても今は授業中なのか生徒の姿はなく、静まり返っていた。怪我のせいなのか痛む横腹を押さえながら誰もいない廊下を歩き進め、私は寄り道は決してせずに地下へと足を向かわせる。

時々授業のない教師が歩いていたが、姿を見た瞬間壁に隠れ、過ぎ去るまで待つて決して誰にも見られないようにと気を張った。

地下の階段を下り、魔法薬学の教室の前を通ると微かに声らしき音が聞こえてくる。私が足音を立てないように、息を殺しながら前を通ろうとした時、固く閉じられていたはずの扉が音を立ててゆつくりと開き、中から出てきたマクゴナガルと対面した。

「……あつ……」

無意識に声をこぼした私は見つかったというのに至って冷静で、目の前にいる彼女から叱られるのかどうかだけが気になった。

決して穏やかな表情ではないマクゴナガルは私を逃がさないようにする為か、がっちりと手首を掴んでくる。何か言ってくれた方が楽だというのに、何も言わないせいで少し気まずかった。

「スネイプ先生、やはり必要なかったようです。」

前にいる彼女が向いた方向を見ると、扉が全開きのせいで教室の奥にいるセブルスの姿がはつきりと見えた。

彼と目があったような気がしたが、きつと私が一方的に見つめていただけだろう。

マクゴナガルが扉を閉めると、奥からは生徒が雑談をする声が聞こえてきた。彼女が手首を握ったまま地上へと続く階段に向かっていることに気づき、私は慌てて後ろから話しかける。

「あの、離してほしいんですが」

「それは出来ません。離せば直ぐに逃げるでしょう。全くあんな怪我をしといて病院を抜け出すなど何を考えているんですか。」

……まずい……このままだとここに来た意味がなくなってしまう。

前を歩く彼女の後ろ姿を見ながら、解決できる方法がないか考えてみたが、思いつくはずもなく、とりあえず足を止めさせるために適当な嘘を並べることにした。

「待ってください、実はハリーの怪我の様子が気になっただけなんです。」

「あの子の心配をするより自分の心配をしなさい。」

「そのついでに荷物を取りに来たんです。」

私の言葉にピタリと足を止めたマクゴナガルは、振り返ると訳が分からないような表情を浮かべていた。

「……どうしても手元に置いとかないと落ち着かない物があつて……」

決してペンダントという言葉は出さないように遠回しに言葉を並べると、目の前にいた彼女はしようがなさそうに溜息をついて、私の自室へと方向を変えた。

「早く支度してしまいなさい。」

そんなマクゴナガルの声を聞いた私はほつとしながら、後ろを追いかけてた。

たどり着いた私は部屋に入ると、中は相変わらず散らかっており、一緒に入ってきたマクゴナガルの表情は怖くて見れなかった。

とりあえずトランクを開け、その中に適当に荷物を詰めていると横からマクゴナガルの声が聞こえてきた。

「……魔法薬が好きなんですね。」

「ええ……まあ」

誤魔化しながら、横目で彼女を見ると本棚に夢中になっておりその隙にペンダントがしまつてあるはずの机に近づいた。引き出しを引くと、特に変わった様子はなく、手前に入れていた小さな本を取り出して、手探りで探す。丸みを帯びた硬い感触が伝わってきた瞬間、私はほつと胸をなでおろした。

ペンダントであろうものを掴み、引き出しから出すと、間違いなく私を取りに来たもので、そのままローブのポケットにしまいこむ。

「本も何冊か持っていきなさい。暇つぶしになると思いますよ。」

そう言いながら何冊かの本をトランクに入れた彼女は私に問いかけてくる。

「他に何か持っていくものはあるんですか？」

「いや、ないです。」

私の言葉を聞いたマクゴナガルがトランクを持とうとする姿を見て、慌てて駆け寄りトランクに手を伸ばした。

「大丈夫です。私が持ちます。」

「怪我人の貴女に持たせるわけにはいきませんし、それに貴女を病院に送り届けなければならなくなったんですから。」

「いえ、一人で大丈夫ですよ。」

まさか病院まで付いてくるとは思っていなかった私が声を挟むと、彼女は溜息をつきながら話し出す。

「そうはいきませんよ。貴女が思っている以上にことは大きくなっていくんです。さあ、行きますよ。」

私のトランクを持ったマクゴナガルの後を追って部屋を出て、階段を上り、廊下を出ると目の前を歩く彼女は玄関の方向とは真逆の方向に足を運んでいた。

「あの…一体どこへ…」

「校長室です。」

前を歩くマクゴナガルは私に説明するように後を続けた。

「怪我人の貴女を歩かせるわけにも姿くらしをさせるわけにもいけないでしょう。……まさか…行きは姿くらしでここに来たんですか?」

さつきまで歩きながら話していた彼女は何か思い出すと、足を止めて凄惨な表情で問いかけてくる。

「……ええ…少し歩きました」

そんな圧力に押されながら答えると、マクゴナガルは溜息をついて、口を開いた。

「自分の仕事に責任持ってやり遂げようとする姿勢は素晴らしいですが、貴女は仕事の前にもう少し肩の力を抜く時間を作りなさい。」

無理をしすぎては何も意味はありませんよ。」

何故マクゴナガルがそんなことを言ったのか、前にいた彼女がまた歩き出す後ろ姿を見つめながら少し考えてみたが、答えは出てこなかった。

校長室へと続く螺旋階段を上り、中へと入ると数時間ぶりのダンブルドアが椅子に座っていた。彼が引き出しに何かをしまった机の上には、紅茶とお菓子が置いてある。

「おや、さつきぶりじゃの。」

「ええ…そうですね。」

愉快そうに話しかけてくるダンブルドアの言葉を適当に受け流すと、そんなことなど気にしていない彼に私の隣にいるマクゴナガルが話しかける声が聞こえてくる。

「校長、暖炉をお借りしてもよろしいですか?」

「勿論じゃ。もう準備は済ませてあるでの。その机の上に置いてある。」

マクゴナガルは近くにある机の上に置いてあった少し豪華な装飾されている壺のようなものを手に取りながら、私に説明してくる。

「怪我人の貴女を歩かせるわけにも、ましてや姿くらましをするわけにもいけませんから、比較的安全な煙突飛行ネットワークを使うために暖炉は病院に繋げてあります。」

やり方は分かりますね？」

そう言いながら私に差し出してくる壺のようなものの中には砂のようなものが入っていた。

私はフルーパウダーを一握り掴むと、部屋の端にある暖炉の中に振りかける。緑色に変わった炎の中に入って、行き場所の名前を声に出すと、次目を開けた時はそこはもう校長室ではなく、ダンブルドアやマクゴナガルが居ない代わりに待ち構えている癒者達が居た。

煤を払いながら、暖炉から出ると私の担当の癒者が凄いい剣幕で近寄ってくる。

「一体何を考えているんですか☒勝手に抜け出して、本当に心臓が止まるかと思いましたがよ！」

「…すいません。」

今回ばかりは自分が悪いことをしていることは十分に理解してやったことだ。私が申し訳ない気持ちになりながら、謝ると癒者はしよがなさそうに眉を少し下げ、軽く溜息をついた。

「あら、先生もお越しになられたのですね。」

私の前にいた癒者が見ている視線の先を見ると、暖炉からトランクを持ったマクゴナガルが出てきていた。

「ええ、彼女の付き添いです。」

どうやらマクゴナガルは病室まで付いくる気であるらしく、何やら話している二人の後をついていった。

病室につけば、私服から寝巻きに着替えさせられ、強制的にベッドに入れられた。癒者は他の仕事があるのか、私がベッドに入ったのを見ると、寝る前に薬を飲むことと、ベッドから出ないことを顔が見えなくなるまで念押ししてきた。

マクゴナガルは、ゴジ寧にトランクから服やら何やらを出しては私の指示を煽って引き出しにしまうと、これまた彼女も、もう抜け出さないようにと言いかせてきた。

苦笑いで返事をすれば、少し満足したようにカーテンをしつかりと閉め、部屋を出る扉の音が聞こえてくると、部屋は一気に静まり返る。ひとりになった病室はやけに広く感じて、私は無意識にローブからペンダントを取り出すと、眺めて溜息をついていた。

慣れた手つきでペンダントを開ければ、手元にあるこれは前と姿を変えず、時間を刻んでいる。

……もし…これがなかったら私はこの場に居ない。

これがなかったら記憶は思い出していないが、ペンダントがあろうがなかろうがきつとセブルスに対しての気持ちは変わらない。

手元にあるペンダントが使ってもらいたそうに青白い光を放っているのを見て、乱暴に閉じるとそばにあった2つの薬を一気に飲み干した。

思っていたよりかは苦くなく、すんなりと喉を通っていき、私は水を一口飲むとペンダントを握ったまま掛け布団を肩まで上げて枕に頭をのせた。

……あの夢が…現実になってくれたらいいのに

夢から覚めたらあの嫌な感覚が襲ってくるというのに、それでも私はあの甘い夢を求めずにはいられない。

……夢ぐらい…私の思い通りでもいいでしょ？

早くあの夢の続きが見たい私は瞼を下ろして、誰にもペンダントが触られないように力強く握りしめる。

夢でも何でも良いから、セブルスの側に居させて。彼を抱きしめさせてほしい。夢の時ぐらい彼と触れ合うことを許してほしい。

夢の中のセブルスは、私だけを見てほしい。

それが現実でなくても、たった一瞬の幸せでも、それでも私は甘い夢を求めてしまう。

13 どうか私を

満月だった月がどんどん欠けていくのと比例するように、怪我は順調に治っていった。

窓から外の景色を見ようとしても、最近はずり続ける雪しか見えな
いどころか、外が寒いせいで窓が白く曇って何も見えない。

そんな病室にひとり籠り過ごす毎日が快適であるはずがない。確かに自分が寝たいときに寝られるが、病院を無断で抜け出した私を四六時中癒者達が見張っていて自由は限られるし、あまりに時間が有り過ぎて何をすればいいのか、何をしたら時間を潰せるのか今ではさっぱり分からなくなっている。

持ってきた数冊の本も読み終わったし、ダンブルドアの見舞いの品のお菓子も全部食べてしまったし、大臣からの手紙の返事も全て書き終わってしまった今の私は、不安をかき消すように眠たくもないのに
瞼を下すことしかなかった。

いつも通り何回読んだかも分からない本を眺めていると、いつも通り扉が開く音が聞こえてくる。

どうせ癒者が診察に来たのだらうと思っていると、カーテン越しから聞こえてきたのは、女の子の声だった。

「ヘルキャットさん。」

声といい、喋り方といい、大体予想がついた私が顔を上げたときには、もう彼女はカーテンを潜っていて、何かを抱えながら私の前に立っていた。

「…ルーナ…何でここにいるの？学校は？」

「今はクリスマス休暇だよ。」

…もうそんな時期なのか…

籠りっぱなしの私は、クリスマスという感じが全くせず、少し違和感を感じた。

「パパに頼んで、お見舞いに来たの。」

ルーナは私に近づくと、抱えていた小柄な箱を渡してくる。

「これ、少し早いけど…はいクリスマスプレゼント。」

どんなに親しくなったとはいえ、生徒からクリスマスプレゼントが送られる日が来るとは誰が予想つくだろう。勿論私もそんな日が来るとは思っていなかったせいで、反射的に断りの言葉を並べながら、渡してくる物を押し返すことしか出来ない。

「悪いわ、ルーナ。こんな高価そうなもの」

私も彼女のクリスマスプレゼントを用意していたらまだいいが、残念ながら私はそこまで気が回っていない。交換ならまだいいが、一方的に受け取るのはとても悪い気がしてならない。

「いいよ、大丈夫。あたしが渡したいだけだから」

ルーナにとってはそんなこと関係ないことで私の気持ちなど知らずにぐいっと押し付けられ、戸惑いながらもお礼を言いながら受け取ると、彼女に問いかけてみる。

「…開けてみてもいい？」

頷くルーナを見て、恐る恐る開けてみると、そこには小さな瓶が3つと折りたたみ式の小型ナイフが綺麗に並んで入っていた。

「…これ…魔法薬の」

「うんそうだよ。本持ってたから、好きなのかなって。お小遣いで買ったんだ。」

「…ありがとう、ルーナ。とても嬉しいわ。」

彼女に笑いかけながらお礼を言うと、ルーナの表情は嬉しそうに明るくなる。

彼女にプレゼントのことを言おうかと口を開くと、あんなに明るかったルーナの表情はまるで何かを思い出したようにだんだんと沈み、明らかに下を俯いていた。

「…ルーナ…？」

「あたし、あんなの気にしてないよ。」

心配になり名前を呼んでみたが、ルーナは返事の代わりに、私を見つめながら宣言するように言ってくる。その声は少し震えていたがとても力強く、頼りになるようなそんな声だった。

「誰が何と言おうと、あたしは知ってるよ。あんたはそんなことしない。あんなの誰かが言ったデタラメのことぐらい。」

最初は何のことを言っているのか分からなかったが、ルーナの言葉を聞いてすぐに噂のことだと大体予想がついた。

何か必死に伝えようとしてくるルーナを見てみると、私が避けていたことに傷ついたのかもしれないという考えが思い浮かび、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「ごめんなさい、ルーナ。貴女を傷つけてしまったわね。」

「違うよ。ヘルキャットさん。あたしはそんなことを言いたいわけじゃないの。あたしじゃなくて、そうじゃない。」

混乱しているのかどうか分からないが、彼女の口から出ている言葉の後半はもう訳が分からなくなっていった。

自分でも何を言っているのか分からなくなったのか、私を見つめてくるルーナは何かに耐えるように唇を結んでいる。見た事のない表情を浮かべるルーナに声をかけようと口を開くと、突然彼女のグレーの瞳から涙がポタリポタリと落ちてきた。

「一体どうしたの？」

急に泣き出すルーナを目の前にした私は、驚きよりも心配する気持ちの方が勝って、ベッドから足を出し、彼女の手を握った。

確かに泣いてはいるが、表情はどちらかというと無表情のまま、拭うこともせずにただ私を見つめてくる。

「怖かったんだ。」

彼女の名前を呼ぼうとすると、目の前にいるルーナの口からそんな言葉が出てきた。

「あたし、あの時、怖かった。」

後を続ける声が少し震えると、眉が少し下がり悲しそうな表情を浮かべ、小さな声を絞り出すように口を開くとぎゅっと私の手を握ってくる。

「……あんたが……自分から死ににいつてるみたいで……死んじゃうんじゃないかって……」

ルーナの小さな声が耳に入ってきてても、私は直ぐに言葉を返すことが出来ず、ただ目の前で泣く彼女を見ていた。

私が動いたのはルーナが必死に涙を拭いだした時で、目を擦る彼女の手を優しく包みながら、いつも通り話しかける。

「駄目よ、ルーナ。そんなに擦っては目が腫れてしまうわ。」

私は手を退かして、もう真っ赤に腫れてしまっている彼女の目元に手を置くと擦ったせいで少し熱をもっていた。私の目を見つめてくるルーナの瞳からは終わりを知らない涙が溢れ出てきている。

「ごめんね、不安にさせるようなことをしてしまつて。」

「……謝らない……で……」

震えていても、しっかりと声で言うルーナは彼女の頬を覆っている私の手をしっかりと握ってくる。

「……でも大丈夫。……私は生きてる。」

そんなことが何故か嬉しくて、自然と笑みが零れ落ちた。

ルーナは泣いているというのに、ただ彼女が手を握ってくれているだけだというのに、ただそれだけで嬉しくて、そして悲しくなる。

「……大丈夫……私は死なないわ。」

私のことで泣いてくれている優しい彼女に、私は嘘を重ねることしかできないかった。

クリスマスの夜にひとり過ごすのはもう慣れているが、病室だこんなにも寂しく感じられることを今初めて知った。

ベッドから抜け出し、白く曇っている窓に付いている水滴を手でふき取ると、外は雪が降り続けているのが見えた。まだそんなに遅い時間帯ではないというのに、もう外は真夜中じゃないかと思うほど真っ暗だ。

さつき拭き取ったばかりだというのに、外は相当寒いのかどんどんと霜が張っていく。

ベッドに戻り、何となく窓を眺めるが、勿論外など見えるわけもなく、代わりに風が吹く音が時々聞こえてきた。

……きつと今日は月は見えないだろうな……

雪が降り続けているのだから、きつと厚い雨雲が月をすっかり隠してしまっていることだろう。試しについていた明かりを消してみても、窓から月明かりが差し込むことはない。

そんなどうでもいいことを考えるほど暇だった私の耳に、もう聞き飽きた扉を開く音が入ってくると、明かりをつけようとした私は身構えるように手を止めた。静かに開けたその人物は、丁寧に扉を閉めると、ゆっくりと歩く足音が聞こえてくる。

一定のリズムで聞こえてくる足音を聞くたびに、何故か私の心臓の鼓動はやけに速くなっていく。

何故自分がこんなにも緊張しているのか分からずに、カーテンを見つめていると、人影の形に影が暗くなり、どんどんと大きくなっていく。

私も相手も決して話そうとはせず、ただその人物がカーテンの前でぴたりと止まったのを見ていた。

……違う……きつと気のせいよ

あんなにも音が聞こえるほど風が吹いていたというのにもう今では全く聞こえず、そのせいで耳元で自分の心臓の鼓動が聞こえるような気がした。

……来るはずないもの。

彼が私に会いに来るはずなんてない。

緊張する私を落ち着かせるように、心の中で繰り返していると、目の前にあるカーテンがゆっくりと開いていく。

……セブルス：

明かりもついていないというのに、何故か彼の顔はしっかりと見えた。目も口も鼻も全てはつきりと視界に入ってくる。いつもと違うことといえば、厚手のコートのようなものとマフラーを手に持っていることぐらいだ。

真つ暗な闇と同化するような彼は、ゆっくりと私の方を見ると、少しだけ距離を詰め、座ることもなく立ったまま静かに話しかけてくる。

「明かりもつけずに一体何をしていたんだ。」

私の名前を呼ぶことなく、怪我の調子など聞くわけでもないセブルスの口から出た言葉は何とも彼らしいといえれば彼らしかかった。

「そう言う貴方こそ、わざわざクリスマス夜の夜に一体何の用かしら？」
会いにきてくれた、それだけで嬉しい筈だというのに、今の私は複雑な気持ちを抱いていた。彼は単純に私に会いにきてくれた訳ではない。そんなことは分かっている。

……嬉しいのに、嬉しくない。

「暇人の手をしに来てくれたの？……ごめんなさいね。暇だったからお菓子を全部食べてしまって、出すお菓子が無いの。」

複雑な気持ちを誤魔化すように話しても、私はどこかで淡い期待が膨らんでいく。

「残念ながら楽しい話をしに来たのではないのでな。そんな心配は必要ない。」

静まり返った部屋に彼の声が響くと、私の胸はぎゅっと苦しくなり、私はセブルスに悟られないように声を絞り出した。

「……そう……残念ね。……それで……一体何の用事かしら？」

「思い当たる節があるはずだが？」

少し口角を上げながら話してくるセブルスは、どうしても私から話題を切り出せたいらしい。

「……………私は貴方に問い詰められるようなことをした覚えはないわよ。」

「ほお…あんな大胆なことをしといて、思い当たることはないと。」

「ええ…別に普通なことじゃない。」

セブルスの言葉を聞いた私の口からは、自然にそんな言葉が出てくる。ふと顔を上げれば、彼の表情は何か賭け事に勝利したかのようにどこか余裕があった。

「普通の人間はあんな行動はできない。」

「……………一体…何言ってるの。」

目の前にいるセブルスが何故そんなことを言うのか分からず、口から零れ落ちると彼の言葉が耳に入ってくる。

「生徒が箒から落ちたことに気づき、お前のように箒に飛び乗り、助けようとしようとしても間に合う箒がない。」

流暢に話すセブルスの間に割り込むことさえも、ましてや誤魔化す言葉も思いつかない私はただ聞くことしかできない。

「生徒が落ちていると気づいた時には、もう呪文を唱えない限り救えるはずがない。だがあの時お前は、落下するポッターの姿を見る前にはもう箒を呼び寄せていた。何故そんなことができたのか、理由は簡単だ。」

お前は知っていた、あの時あの場所でポッターが箒から落ちることを。」

セブルスの声はつきりと聞こえてきた瞬間私の心臓の鼓動は緊張するように大きく波打ち、自分が動揺したのが分かったが、ゆつくりと呼吸を繰り返しながら、しっかりとセブルスと向かい合った。

「……………それで何が言いたいの？……………まさか私が未来を知っていた何て、そんな馬鹿らしいことを言い始めるんじゃないでしょうね。」

自分から種を蒔いとけば、人間というのは自然とその1つの可能性

を潰すものだが、その前にセブルスはそんな現実味のないことを考える訳がない。

「自分自身で未来を作り出せば良い話だ。」

セブルスその一言で、彼が言いたいことがやっと理解でき、私は自然と笑みがこぼれる。

「……それは私があの子が箒から落ちるように仕向けた……そう言いたいのかしら？ そうだとしたらとんだ思い違いね。……セブルス、私が一体どうやってあの子を気絶させるの？ 仮に私が仕向けたとして、あんなに体を張った意味が分からないじゃない。」

「だからこうしてここにいるのだ。あの時の行動といい、病院を抜け出したことといい、あまりに不可解すぎる最近のお前の行動は、誰がどうみても何か企んでいると怪しむと思うが？」

そう簡単には誤魔化されないセブルスの鋭い言葉に私はどう返そうかと、頭を回転させた。きっと彼は私の小さなミスさえ気づいて、自分が納得できないことを突いてくる。

二重スパイをやりこなしてしまうほど優秀な彼は、私よりも何倍も観察力もあるし、よく口も回るはずだ。少しでも怯んで隙を見せれば、開心術で心を覗かれる可能性も十分に考えられる。

「思い違いもいい加減にしてくれないかしら？ 言っただしよ、私は今魔法省の人間としてホグワーツにいる。」

もうこうなれば、開心術をかける暇さえ与えないように喋り続けるしかない。何かを言おうと口を開く彼を見て、私は話す機会を与えないように後を続けた。

「私の仕事は、生徒達の安全を確保すること。彼の命を救って何が悪いというの？」

それか………」

もうこんな生温い関係をここで終わっておくのが一番だ。私の我儘で今までずるずると引きずってきたこの関係を壊してしまおう。

そう決心した私は自分の中にいる、彼にこれ以上嫌われたくないという弱い自分を押し殺して、声を絞り出した。

「あのまま死なせとけば、貴方にとっては好都合だったかしら？」

私の口から言葉が出た瞬間だった。前にいたはずの彼が気付けば横にいて、杖先を私の方に向けていた。

彼はポッターに瓜二つのハリーのことは良い風には思っていない。ただどエバンズの緑の瞳を持ったハリーを、少なからず私よりかは守りたいと思っているだろう。

最愛の人が遺した、たったひとりの男の子。

セブルスは彼女が命を犠牲に守った彼を、決して見捨てたりはしない。

「言ったでしょう？私は貴方が思っているようなことをするつもり何て一切ない。」

ただ……今死なれたら困るでしょ？」

私の言葉にセブルスは眉間のしわを深くし、杖をゆつくりと下ろすと、ベッドに手をついて、顔を覗き込むように見つめてくる。

「……お前は……何を隠している……」

一気に顔が近くなり、私の心臓は破裂するんじゃないかと思うほど、鼓動を速くしていく。

……本当に……ずるい……

こんなことで緊張しているのは、きつと私だけ。

私は真つ黒な瞳を見つめて、自分を落ち着かせる為にゆつくりと瞬きを繰り返した。

……彼は今きつと不死鳥の騎士団のスパイとして死喰い人の私に探りを入れている。……ダンブルドアからの指示なのかそれとも、彼自身が判断して、行動しているのか、分からないがどちらにしろ私が今セブルスに信用されていないのは痛いほどわかった。

……だったら、彼を騙せばいい。

「貴方も同じなのでしょう？」

手首を握って、顔を近づけながら問いかけるとセブルスが眉間の皺を一本増やしたのが見えた。

このまま私のことを信用させないように、

何だったら…彼が私のことを殺してくれるように。

…死喰い人として、

何も知らないふりをして、

セブルスの側にいる、それが私の出来る事。

「……僕の役目は主人の言いつけをしっかりと守り、忠実に従うこと。」

……私はただ貴方を守りたいだけ。

自分を押し殺すように少し微笑みながら言葉を繋いでいく。

「……私は一言も言われてないもの。それにお楽しみは後にとつておいた方がいいでしょ？」

私好きなものは後にとつておくタイプなの。」

…貴方がいつでも闇から抜け出せるように…

「…生きていると…言いたいのか」

私の目を見つめてくるセブルスの低い声が聞こえてくると、私は誤魔化すように少し口角を上げた。

「さあ…そんなの私に分かる訳ないじゃない。もし私が知っていたら、きつと貴方の耳にも入っているはずでしょ？」

今日の前にいるセブルスの目には私だけしか映っていないのに、私を見てくれているはずなのに嬉しいどころか、悲しくて胸が痛い。

死喰い人としてではなく、不死鳥の騎士団として彼の側にいられたら、きつとこんな思いはせず済んだのだろう。だけど、そうなたら一体誰が、決して立ち止まることのない彼の背中を守るといふの。

いくら彼の隣に居られなくても、それでも私は貴方の背中をいつでも押せるように…後ろに居ることが、今まで考え抜いた私の出来る最善のことだ。

私の言葉を聞いたセブルスが姿勢を直そうとしたせいで、あんなにしっかりと握っていた手首さえ自然と離れていく。

何も言わず見下ろしてくる彼の顔を見た瞬間、私は崖から突き落とされたようなそんな絶望という名がふさわしい感覚に襲われた。い

つも通り、無表情で何も変わっていない。瞳だって確かに今まで通り先が見えないほど真っ黒だが、ただ今日の前にある瞳は少し違った。

今まで彼の真っ黒な瞳を見ても冷たい気持ちにならなかつたのは、真っ黒な瞳の中にも優しい温かさを感じていたからだ。私の感じ方の違いだろうが何だろうが、確かに今目の前にいるセブルスの瞳は黒というより何も映しておらず、冷たく、温かさなど全く感じない。

それが一体何を意味しているのか、彼の中での私という存在がどうなったのか知らされなくても十分に理解できた。

……きつともう二度と、彼の笑顔など見れる事はない。

頭には学生の頃見た彼のはにかんだ笑顔が浮かび、セブルスに気づかれないように掛け布団の中でシーツを力強く握りしめる。

……もう二度と、たわいのない話をするともない。

決して特別に仲良くななくとも、本を読む彼の隣に座り、しようもない話をしたあの幼い記憶が、私の言葉に答えてくれるセブルスの横顔が浮かんでは音も立てずに消えていく。

……これからも：彼が私の名前を呼んでくれる日は来ない。

……もし私が彼に気持ちを伝えたとしても、

いつまでも期待に胸を膨らませ、待っていたとしても……

セブルスが私を愛してくれる日などもう一生来ない。

どうやら私はまだ、どこかで期待していたらしい。だから今こんなドロドロとした気持ち溢れ出ているのだろう。

エバンズがいなくなった今なら、セブルスが私のことを愛してくれるかもしれないと、自分がそんな期待をしていたことに気づいたというのに、私は決して驚くことはなかった。何も言わず遠ざかっていくセブルスの背中を見ていると、私の口は勝手に動き、彼の名前を呼んでいた。

「セブルス。」

呼び止める私の声を聞いたセブルスは、足は止めてくれたが、振り

返ってはくれない。

「……良い夜を」

勿論、セブルスから言葉が返ってくるはずもなく、扉を閉める音だけが聞こえてくると、一気に虚しく、悲しくなる。

静まり返った部屋が、さつきに比べると少し明るくなっていることに気がつき、窓の外を見れば、どうやらいつのまにか雪が降り止んだらしく、雲から月が顔を出していた。

部屋に差し込む淡い月明かりを見つめていると、私は小さな声で呟いていた。

「……どうか…彼を嫌いになれますように…」

きっと今日はクリスマスだからだ。だから神様に祈るような、こんな似合わないことを言ったんだろう。

学生の頃から私のこの気持ちにセブルスに届かないことも、忘れてくても忘れられないこの恋が叶わないということも分かっていたというのに、随分前からつくに失恋していたはずなのに、今この瞬間に失恋したかのように胸が苦しくて苦しうがない。

声に出せば楽になると思ったのに、辛くなるばかりで、嫌いになるどころか愛しさが増していくというのに、心臓は苦しくなるばかり。嫌いになろうと、忘れようとしてみても泥沼にはまっっていくように、溢れてはいけないものがどんどん溢れ出てくる。

駄目、これ以上は駄目。

溢れ出てくるものを塞ぎ止めようと胸を押さえてみるが、そんなの敵うわけがなく、飲み込まれないように歯を食いしばった。

お願い……セブルス…

光のない真っ黒な彼の瞳を思い出すと、底のない海に投げ出されようなそんな絶望感が襲いかかってきて、心臓がひやりと冷えた。

嫌われることぐらい、平気だと思っていた。

歳をとった今なら、セブルスの命を救うためなら、何を思われてもどんなこともできると思っていた。

それなのに……どうしてこんなに苦しいの……どうして……こんなにも悲しいの……

もうここまで溢れ出てしまえば自分ではどうすることもできない。私は咄嗟に胸を両手で押さえながら服を握りしめると、ぎゅつと瞼を瞑る。

セブルス……お願い……どうか私を

「……………嫌いに……………ならない……で……」

掠れた自分の声は震えていて、今にも事切れそうに弱々しい声を聞いた私は、今すぐにでも自分を殺したくて殺したくてたまらなくなつた。

……………要らない……

私がこんなだったら、こんなに弱かったらセブルスを救えない。

……………お願い、誰か……………どうか私を……

殺して。

14 隠れたお店

周りにいる人の話し声や足音などの雑音を聞きながら、病院の待合室のソファ―に腰掛ける私は持っている予言者新聞を読まずに、ただページだけめくっていく。

大人しく病室に引きこもっていたお陰か、怪我は順調に治つていき、最近では自由に歩けるほどに回復したが、最近は何故か気づけば溜息ばかりついているような気がする。

どんなに甘いものを食べても甘味が足りないような気がするし、特に何をしている訳では無いというのに一日が終わった頃には疲れ、かと言つてぐっすり眠れる訳でもない。

気づけば予言者新聞のページを最後まで捲ったようで、視線を下ろせば最後のページの動いている写真と、完治して包帯も外れている左腕の肌が目に入ってきた。

ゆつくりと袖を捲り、左腕の内側を上向きにしてみるとまだあの印はなく、無意識にほっと安心すると同時に不安が襲いかかってくる。

……… 来年……か………

そう、例のあの人が蘇る日までそう遠くない。

……… もうこの際、あの人が蘇るのを阻止してしまおうか……

そんなことを考えてみるものの、一体何をどうしたらいいのか分からない。

ペティグリユーを殺せばいい？ 分霊箱を全て壊してしまえばいい？

そんなこと出来るなら、こんなに苦労している訳がない。

……… どうしよう……

悩むように心の中で呟いてみるが、私は勿論動く気などさらさらなく、ただ今後の不安から溢れたものだけだ。

これからどうすればいいのか分からない私の頭に、一瞬思い出したくもない彼の顔が横切り、私は誤魔化すように舐めていた飴玉を噛んで粉々にした。

周りの人達の雑談の声を聞きながら瞼を下ろすと、まるで私が現実から逃げることを阻止するかのように聞き覚えのある声が耳に入ってきた。

「こんな所で寝たら風邪を引いてしまうよ」

明らかに自分に言われているその言葉に、ゆつくりと瞼を開けてみると、前に立っていたのは何か袋を持ったアーサーだった。

「久しぶりだね。レイラ。隣いいかな?」

「ええ、勿論」

あまりに思いもしなかった人物に驚きながらも、席を譲ると、彼はゆつくりと私の隣に腰を下ろし、袋を抱える。

「…誰かのお見舞いですか?」

無意識に問いかける私の声を聞いたアーサーは、少し呆気に取られると、面白そうに笑い出す。

「アハハ、レイラは面白いことを言うね。」

「…そうですか?」

何がそんなに笑うことがあったのか分からない私は、全く検討もつかずに呟いた。

「君のお見舞いに来たんだよ。」

「…あつ………… そうなんですか。すいませんわざわざ」

すつかり回復していた私は、病室に居ないせいかな怪我をして病院に入院しているということをすつかりと忘れていた。

「その様子だと怪我は大丈夫そうだね」

「ええ… もうほとんど完治しているというのに解放させてくれないんですよ。」

私が溜息をつきながら話すと、アーサーは嬉しそうに笑いながら話を聞いてくれる。

「こんな時ぐらい仕事のことを忘れてしまえばいいのに。本当にレイラは仕事熱心だね。」

「… それぐらいしかやることもありませんし…」

彼と話すのは楽しく、不思議とさつきまで感じていた不安は消え去っていった。

「あつこれ、お見舞いの品とお土産が入っているんだ。甘いものは好きだったよね？」

「はい、ありがとうございます。」

お礼を言いながら袋を受け取ると、想像していた重さよりも重くずつしりとしていた。一体何が入っているのか不思議に思い、袋の中を見てみると結構な大きさの球体と、包み紙と絹の紐でラッピングされている箱が入っている。

私が不思議そうに見ていたからなのか説明する声が横から聞こえてきた。

「その丸いものは、エジプトでは有名な魔法道具らしいんだ。使う人の必要なものや望むもの変わるらしいから人それぞれ魔法も色も形も異なるらしい。」

「…………… 名前は何んて言ったかな…………… まあとにかく、何か困った時にでも使ってみるといい。」

あつそれからその箱は今マグルの間で流行っているお菓子屋さんのクッキーだよ。」

「…………… 困った時……………」

眩きながら、袋を隣に置いていると横から今までとは打って変わって真剣な声が聞こえてきた。

「…………… レイラ…………… ハリーを救ってくれてありがとう。」

「…………… 突然どうしたんですか？」

あまりに突然なことに苦笑いしながら、問いかけてみるといつも通りにこりと笑いながら話し出した。

「君が居なかったら、今頃ハリーはこの世に居ないだろうから。」

まるで息子の事を話している父親の表情を浮かべるアーサーの横顔を見た私は、彼から視線を逸らして声を出す。

「…………… あの子の事…………… 心配ですか？」

「あはは、そりゃあ心配だよ。少し強引に行動する時があるから」

「確かに…………… こんな時ぐらい校則を平気で破る癖は直して欲しいですね。」

溜息混じりの私の言葉に、笑いながら返事をするアーサーの横顔を

ちらりと見て、ゆつくりと口を開いた。

「…大丈夫ですよ。貴方のお子さん達の安全を確保するのも私の仕事ですから。」

彼に見つめられる視線を感じながら、そう声に出すと、横から明るい声が聞こえてきた。

「確かに君が居れば心強いな」

どうしてこんなことを言ったのかは分からないが、ただ彼には余計な心配はかけさせたくはない気持ちになった。

「…ごめん、レイラ。仕事の最中に抜け出してしまったから、そろそろ戻るよ。」

「いえ、わざわざありがとうございます。」

立ち上がるアーサーにお礼を言うのと、彼はいつも通りの笑みを浮かべながら言ってくる。

「じゃあ無理だけはしないようにね。」

「…ええ、アーサーも気をつけて」

そう言葉を返して彼の背中を見送った私は、アーサーから貰った袋と予言者新聞を手にとって病室に足を向かわせた。

久々にシャツに腕を通し、ローブを羽織ると私は忘れ物がないか私物が入ったトランクの中を確認する。アーサーから貰ったお土産とお見舞いの品と、ルーナから貰ったクリスマスプレゼントがある事を確認し、トランクの蓋を閉めて鍵をかけた。

……長かったな……

今日でやっとこのお世話になった病室ともお別れできる。そう今日で私は病院を退院出来るのだ。

さつきお世話になった癒者に挨拶をし終えて、後はもうここから出

るだけ。

…… ホグワーツに行く前にダイアゴン横丁に寄って：

そんなことを頭の中に巡らせていると、病室の部屋の扉を開く音が聞こえ、振り向けばそこにはルーピンが立っていた。

「やあ、レイラ。久しぶりだね。」

相変わらずの彼の顔には傷があつたが、顔色はよく調子は良さそう
だ。

「ええ…… 見舞いに来てくれたのなら申し訳ないんだけど私、今日退
院よ。」

「うん、知っているよ。お見舞いに行きたかつたんだけど、間に合わな
かつたから退院の付き添いにね。」

「いや、遠慮しておくわ。」

ホグワーツに真つ直ぐ帰らず、ダイアゴン横丁に寄つてルーナのク
リスマスプレゼントを探しに行こうかと考えていた私は、トランクを
手に持つてルーピンの横を通り過ぎては、病室を後にした。

「持つよ。」

後ろからそんな声が聞こえてきたが、私は聞こえない振りをしなが
らすたすたと廊下を歩く。

「私は大丈夫だから、ホグワーツに戻つて新学期の準備でもしたらど
うかしら？」

横に並んできた彼に冷たく言ってみるが、何とも思っていないよう
な平然とした声が返ってくる。

「それは大体終わったから大丈夫だよ。」

怪我が治つたばかりだからつてダンブルドアに退院の日を教え
て貰つてね。今日はダンブルドアの代わりで来たんだ。」

「そう、じゃあそのダンブルドアに付き添いは必要ないほど元気でし
たつて今すぐに伝えに行つてくれない？ 見ての通りどこも問題ない
から。」

どんなに言葉を並べても引き下がる様子のないルーピンの姿を見
て、私は病院の玄関の前で足を止める。前触れもなく急に止まったか
らだろう。少し前に出ているルーピンに視線を移し、はつきりと言葉

にした。

「私、他に行きたい所があるの。一人でゆつくりとお買い物をしたい気分だから、ついてきて欲しくないのよ。」

「そうは言われても、病み上がりな君をひとりには出来ないし。…私のことは荷物持ちでも思つて気にしないで。」

そう言いながら私の持つていたトランクを手に取るルーピンはにこりと笑ってくる。

この場合の彼はどんな事を言つても引き下がってくれない。

私は諦めてトランクから手を離すと、ルーピンの隣を歩いて、病院の玄関の扉を開けた。

冷たい空気が流れ込んできて、一気に体温が下がったが、久々に外に出ると部屋にこもりっぱなしな私にとっては息がしやすく感じた。

それでも寒いものは寒く、もう一枚ぐらい着込めば良かったと後悔しながら、自分の吐く白い息を見ていると、ルーピンが話しかけてきた。

「それで、どこに行くんだい？」

「…ダイアゴン横丁」

答えながら、姿くらましで行こうかと考えているとふわりと首元に温もりを感じ、咄嗟にルーピンの方を見ると彼は自分がしていたマフラーを私に巻いていた。

「いや、何をしてるの。」

「そんな薄着で、寒いわけがないでしょ。怪我の次は風邪で休むことになるよ。」

「…大丈夫よ。」

「遠慮しないで。こう見えても結構着込んでるから」

意地でも返そうとルーピンが巻いてきたマフラーを取ろうとしたが、彼の表情といい、何より寒さには勝つことは出来ず戸惑いながらも有難く借りることにした。

この寒さのせいか道には、マグルもほとんど歩いておらず、道に積もっている足跡さえもついていない白い雪に視線を移し、お礼を言おうと口を開きかけた瞬間だった。

今まで何も通る気配はなかったというのに目の前を凄く速さで通り過ぎた時のような強風が巻き起こり、一気に冷え込んだ。

……… さむ………

ポケットに手をつ突っ込みながら、分かり切っている事を心の中で呟く私は、いつの間にか目の前に止まっている3階建てのバスをじっと見つめた。

……… なるほど……… ルーピンが動かなかったのはこれを待っていたのか

全く動く気配がなかった理由が分かった私は、何気に夜の騎士バスを見るのは初めてで、少し見上げながら先を歩くルーピンの後を追った。

バスから身を乗り出し挨拶をする車掌姿の男の顔を見てみるが、私の知っている顔ではなく、気だるそうな彼と比べて、今日の前にいる男はにこやかな表情を浮かべている。

ルーピンの後を追ってバスの中に入ると、昼間だからなのかベッドはなく、代わりに椅子が並んでいた。とりあえず一番近い椅子に腰掛け、物珍しさに色々見回していると、車掌と話していたルーピンが紙を握りながら私の横に腰掛けてくる。

「どうしたんだい？そんなにキョロキョロして」

「乗ったのはこれが初めてで、少し物珍しかったから」

可笑しそうに笑うルーピンの言葉にぶっきらぼうに返すと、車掌の男が話しかけてくる。

「どこまで行きますか？」

「あつ…… 漏れ鍋までお願いします。」

私の代わりに答えてくれるルーピンの言葉を聞いた車掌の男が運転席の窓ガラスを叩いた瞬間だった。合図もなしに急に発進したせいなのか、椅子が固定されていないせいで凄く勢いで左右に揺れているせいなのか、どちらにせよ少し酔いそうになった。

それなのに男はごく普通に立っているし、隣に座っているルーピンも何事もないような表情を浮かべている。

……… あつ……… これ合わない………

そんな事を思いながら、これ以上気持ち悪くならないように瞼を閉じた。

急ブレーキを効かせ、止まったせいで一気に気分が悪くなった私が少し瞼を開けると、男の声が聞こえてきた。

「漏れ鍋、着きましたよ。」

着いた、この言葉を聞いた瞬間、私は真っ先にバスから降りて、外の空気を吸い込むとそのまましゃがみこむ。

…… ああ…… 気持ち悪い……

まさかこんなに酔うとは思っていなかった私は、頭を抱えてゆつくりと呼吸を繰り返していると、上からルーピンの声が聞こえてきた。

「大丈夫かい？」

「……… 大丈夫…… 良くなったわ…… あっ……… お金」

バスの料金の事を思い出した私が呟くように声に出すと、さっきまで後ろにいたはずのバスはもうそこにはいなかった。

「大丈夫、払っておいたよ。」

「……… いくら？返すわ。」

「それぐらい気にしないで。とりあえず、中に入って休もう。外は風邪をひいてしまう」

伸ばしてくるルーピンの手を借りて立ち上がり、店内の中へと入ると、客人は意外に多く店内は賑やかだった。

空いている席に腰掛けると、ルーピンは私のトランクを置いて、どこかに行くと両手に水を持って戻ってきた。

「……… ありがとう」

何も言わず置いてくれた冷たい水を一気に飲むと、さっきまであんなに気分が悪かったというのにすつきりとし、頭も痛くなくなった。「体調は良くなった？」

「ええ、お陰様で戻ったわ。」

そう言いながら、座り直すとルーピンは良かったとだけ呟いて水を一口飲む。

「本当に大丈夫なの？新学期の準備は。」

喋ることも無く気まづい空気に耐えきれなくなった私は、話題を振ってみた。

「大丈夫だよ。生徒達が学校に戻ってくるのも明日の夕方だからね。まだ時間はたっぷりある。」

「……そう」

聞いておいてなんだが、そうとしか言えず、特に話が膨らむこともないまま、また気まづい空気が流れるが、今度はルーピンが私に話しかけてきた。

「怪我は本当に大丈夫なのかい？」

「ええ、どこも問題ないわ。」

別に仲良く話す程では無いし、話したい事がある訳でもないがこの気まづい空気はどうも好きになれない。

「じゃあそろそろ行こうか。」

そんな私の気持ちを察してか、ルーピンは私のトランクを持って立ち上がった。私は答える事もせず、店内の奥へと進み裏庭に出ると、目の前の煉瓦に杖の先を当て、決められた順番になぞっていく。

ガタガタと音を立ててゆっくりと煉瓦が動く、目の前には懐かしい風景が広がった。

今も昔も何も変わっていないダイアゴン横丁に一歩足を踏み出せば、一気に賑やか声が耳に入ってくる。

「レイラ、ところで何を買う予定なんだい？」

「人に贈るものを買うつもり……貴方も私に構わずお買い物したらどう？」

「いや、欲しいものはないからね。レイラに付いていくよ。」

1人でゆっくり買い物をしたかったのだが、気にしないで言うルーピンを見た私はとりあえずグリーンゴッツでお金を下ろし、何かルーナへのクリスマスプレゼントにするようないいものがないか探し回る。

私の後ろを付いてくるルーピンは、中々決められない私に文句一つ言わずに、トランクを持ちながら店の外で私が出てくるのを待ってくれた。

頼んだ訳では無いが、寒い中文句一つ言わず待っているルーピンを見ると悪い気がして、自分用のお菓子と一緒に、甘ったるそうなチョコレートのお菓子を何個か買って、お菓子屋の前で待っているルーピンに何も言わず差し出した。

「ん？」

「お菓子、貴方甘い物好きだったわよね。」

状況が掴めていない彼は、私の言葉で理解したのか首を横に振って中々受け取ってくれない。

「いや、悪いよ。」

「遠慮しないで。さっき私の分のバス代払ってくれたでしょ。安心して、別に毒なんて入れてないわよ。」

無理矢理押し付けると、やっと受け取ってくれたルーピンはお礼を言いながら少し苦笑いをしていた。

目に入った店に入っては、色々手にとって探してみたものの、中々いいものが見つからず、ここに来てから結構時間が経っていた。ルーナが欲しいものを考えてながら、じつとノクターン横丁を見つめていたせいだろう。私は誰が考えても答えが分かるような事を無意識に呟いていた。

「…意外とノクターンにあったりして」

「いや、それは無いと思うよ。」

隣にいたルーピンはどうやら私の呟く声が聞こえていたらしく、冷静で的確な言葉が返ってくる。

「分かっているわよ…ただ…何をプレゼントすればいいのかよく分からないの。」

今までクリスマスプレゼントを渡すような友達がいなかった私にとって、一体何をあげれば良いのかよく分からない。だからこんな時間がかかっているのだ。

「自分が貰って嬉しいものをあげればいいと思うよ。私の場合は、やっぱり甘いお菓子とか、チョコレートとか。」

チョコレートはお菓子の中に入るんじゃないかと思ったが声には出さず、ふと視線を移すとなんとなく目に入った店と店の隙間が気になった。

「レイラ、何かあった?」

急に足を止めた私に問いかけてくるルーピンの言葉は聞き流して、近づいてみるとその隙間は人が2人ほど並んで歩けるのがぎりぎりな広さだった。

ふと地面に視線を移すと確かにこの先道が奥に続いているのを示すかのように、色褪せた煉瓦が不規則に並んでいる。

今まで何度もダイアゴン横丁には来ているはずだというのに、今日の前にある道のようなものは初めて目にした。単に私が気づいていなかったのか、それとも最近できたのか分からないが、ノクターン横丁に続く道ではないことは確かだ。

「…こんな所に道あったかな…」

どうやらルーピンも気づいたようで、不思議そうに歩いている人の気配はなく、先が少し薄暗いその道を覗き込む。

「…さあ……………少なくとも私は知らないわ。」

ルーピンは、直ぐに他の店を探しに行こうと口にしたが、私は気になつて気になつて仕方がなく吸い込まれるようにその小道に入つていった。

「レイラ、ちよつとー!」

後ろから慌てる声が聞こえてきたが、気にせず歩み進めると、どうやら後をついてきたらしい彼が話しかけてくる。

「戻ろう。こんな所にお店はないと思うよ。」

「……………分からないわよ。隠れた店があるかも」

ほとんど冗談で言ったつもりなのに、少し進んだ先に目の前に突然営業しているのかどうかもわからないような店が現れた。

「…… あったね……」

ちよつと驚いたように呟くルーピンの声を聞きながら、店の前で足を止めて外観を見てみるが、見た目だけで見れば廃墟だった。

一応ぶら下がっている看板を見てみても、色褪せているせいであるか分からず、その隣にあるランタンも埃かぶっている。外に出ている椅子と机も誰がみても分かるほどに使える状態ではない。

「…… 営業はしてなさそうだし…… 戻ろうか」

隣で話すルーピンの声を聞いて、戻ろうと店に背を向けると後ろから優しい鈴の音が聞こえてきた。

咄嗟に振り向くと、固く閉じられていた店の扉はゆっくりと開き、人影が立っていた。

「また来るよ。」

そう言いながら、店から出てきた若い男の人は私達に気づくと、店に來たと勘違いしたのか扉を開けたまま道を譲ってくれた。

こんなことをされては中に入る以外道がなくなってしまう、紳士なことをしてくれた男の人に軽くお礼を言いながら中へと入ると外見からは想像もつかないほど温かい場所だった。

天井からは古そうなシャンデリアが温かいオレンジ色の光を灯していて、店内に不規則に並んでいる4つの丸い机の上には、指輪やネックレスなどアクセサリーが置いてあったり、壁に隣接している本棚には古い本がずらりと並んでいる。

隣にいるルーピンも意外な内装に驚いたのか、天井を見上げていた。

「お客さん、ここに来るのは初めてですか？」

優しい声で問いかけてきたのは前にあるカウンターの奥に腰掛けしている年老いている老婆で、彼女の後ろにある背が高くガラスの戸の棚には、何か液体が入っている色々な形をした瓶や、薬草のようなものが入っている籠、不思議な色を放っている石が積んでいたりと、変

わったものが並んでいる。

「ええ……ここは一体何の店なんですか？」

「薬や、魔法薬の材料とかね。ここは湿気が多くて保存持ちが良いものでね。その代わり本が湿気でやられてしまっただけ。何か気になる本があったら持つていつて貰っても構いませんよ。」

本棚に近づいていたルーピンが本に触れたからだろう。にこりと笑いながら話す彼女の言葉にルーピンは驚いたように問いかけた。

「代金は？」

「流石に売り物にはしていませんよ。それにもうすぐ死にゆく老人が持つているよりお客さんのような未来のある人が持つていた方が本も嬉しいでしょう。」

まさかこんな大量の本を無料で持つていつていいとは言うなんて誰が想像つくだろう。本棚に近づいて、背表紙を見てみると殆どが魔法薬の事に関するものばかりだった。

……ここにセブルスがいたら……きっと大喜びするんだろうな……

そう思いながら、本を取り出してページをめくってみると確かに傷んではいたが読めないという訳ではない。

私はルーナへのプレゼントを探しに来た事を思い出して、手に持つていた本を本棚にしまうとアクセサリが置いてある丸机に近づいて、ネックレスを手にとってみた。

金色に輝く紐の先についている青い宝石に惹き込まれた私は、周りにあるアクセサリと見比べてみる。机に置いてある他のアクセサリに付いている宝石は綺麗に形が整っているというのに、なぜかこれだけは不恰好だった。

「それは、私の夫が作ったものです。私の真似をして作ったみたいで、形は確かに不恰好ですけど、私はそんな綺麗な宝石は作れません。」

確かに彼女のいう通り、手に持つている宝石の中はまるで星を閉じ込めたようにキラキラと輝いている。

青が似合うルーナにぴったりだと思った私は、そのネックレスを手

に持ってお金を払いに彼女に近づいた。

「……これにします。いくらですか？」

そう言いながら下ろしたお金を取り出し、言われた値段のお金を丁度机の上に置く。

「贈り物ですか？」

「ええ」

ランピングをしながら問いかけてくる彼女にそう答えると、私の後ろを見て少し小声で話しかけてくる。

「……後ろの方に？」

後ろを振り向いてみるが、勿論店内にいるのは私とルーピンしかおらず、彼は相変わらず本を眺めていた。

「違いますよ。これは女の子に渡す予定なんです。」

「そうなんですか。てつきり彼に渡すのかと」

「残念ながらそんな仲ではないんです……。ここのお店はおひとりで行われているんですか？」

にこにこ笑いながらランピングを続ける老婆に、話題を振ってみると彼女は思いつくようにゆっくりと話し出した。

「……元々アクセサリーや小物を作るのが私の趣味で、少しでも生活の足しになればと思つて随分昔に魔法薬好きの夫と始めたのがきっかけです。」

私はアクセサリーを夫は魔法薬を作つて売っていたら、おかげさまで結構長く続いているんですよ。」

「じゃあ、ご主人と2人で」

「ええ、だけど最近先に逝つてしまいました。ですから今は独りですね」

少し寂しそうな表情を見た私の頭はその意味を瞬時に理解し、何か嫌な事を思い出させてしまったと申し訳ない気持ちに苛まれた。

「……すみません。」

「いえ、謝らないでください。今はこうして楽しくやらせてもらつてますから。ぜひまたいらしてくださいね。」

「ええ、勿論です。」

綺麗にラッピングされたネックレスを受け取り、振り向くと丁度ルーピンも読み終わったようで本を棚に直していた。

「また来ます。」

老婆はにこやかな笑みを視界に入れながら店を出た瞬間、冷たい空気が肌に触り、一気に体が冷え込む。

「いいものは見つかった？」

「ええ、お陰様で。プレゼントにぴったりなものが見つかったわ」

「そう、良かった。……他に用事はあるかい？」

「特には……そろそろホグワーツに戻った方がいい時間帯でしょうし。」

私の言葉にそうだねと声を出すルーピンの隣を歩きながら、小道を抜けると、とりあえず漏れ鍋に戻って外に出る。

「さて、どうやって行こうか。バスは……駄目だし「姿くらましでいいじゃない？」

私が横から提案すると、ルーピンは少し心配そうな表情を浮かべてくる。

「でも怪我治ったばかりだし」

「大丈夫よ。ほら早く手出して。」

渋々出した彼の手を強引に握った私は、何か言われる前に姿くらましをした。

歪んでいた視界が元に戻ると、私が思い描いた通り、ホグズミード駅に無事着いた私はルーピンの手を離して、学生の頃に行き慣れた道を歩く。

「まさか、歩いていくの？」

「それしかないでしょ。ホグズミードの方が良かった？」

白い息と一緒に言葉を吐きながら、少し早歩きで歩くが、どんなに動いていても寒いものは寒い。

ふと隣を歩いているルーピンを見てみると、私にマフラーを貸したせいで首元が空いているし、私よりペラペラそうだし、寒そうだ。

「寒いんですよ。返すわよ」

そう言いながら、マフラーを取ろうとするが彼はがんとなくなって受け取ろうとしない。

「大丈夫。女性の方が冷えやすいって良く言うだろう？それに病みやがりな君をこれ以上薄着にはさせたくないしね」

「……………そう」

私は少し溜息混じりに呟いて、マフラーを口元まで持つてくると、自分の息が籠るからなのか、暖かった。

無事ホグワーツまで辿り着いた頃には、私達の肩には雪が積もり、体の芯まで冷えてしまっていた。

ここまでトランクを持つてくれたルーピンも、流石に寒かったのか体を少し震わせて、2人で駆け込むように城の中に入る。

外よりかは暖かい城の中に入ると、肩に積もった雪を払って、トランクを持つルーピンに近づいた。

「トランクありがとう。今日はごめんなさいね。付き合わせてしまつて」

「いや、レイラと買い物が出来て楽しかったよ。それに良いお店も発見出来たことだしね。」

……………別にここまでじゃなくても、部屋まで運ぶよ。」

そう言い足すルーピンから半場強引にトランクを受け取って、言葉を付け足す。

「貴方も準備があるんでしょう？私もダンブルドアの所へ行かないと行けないから、ここで大丈夫よ……………じゃあ、また」

私はトランクを持ちながら、長い廊下を歩きながら自室を目指した。

地下に続く階段を下り、セブルスに会いたいのかそれとも会いたくないのか、私の心臓の鼓動は緊張したように速くなっていけばかりでそれに比例するかのようになり早歩きになっていく。

奥にある自室に入った私は、とりあえずトランクを置いてローブを脱ごうと手をかけるとマフラーをルーピンに返し忘れた事を思い出した。

………また今度返そう………

今返しに行くのは面倒に感じて、マフラーを綺麗に畳むと机の上に置くと、癖のようにペンダントをしているか確認をする。

………ダンブルドアの所へ行くのは……夕食前ではないか………

とにかく今はゆっくりしたかった私は、ローブを脱ぎ捨てるとソファに腰掛けて、一息つく。

ただぼんやりとしていたただけだというのに、久々動いたせいなのか、眠気が襲いかかってきて、このまま目を閉じればぐっすり眠れるかと思った私は抵抗することなく瞼を下ろした。

ゆつくりと瞼を開け、ソファから起き上がってみるが、まだ頭がぼんやりとしているせいなのか視界がぼやけていた。目を擦りながら、時計を見てみると針は夕食の時間帯を指している。

その瞬間ぼんやりとしていた意識は、はつきりと鮮明になり、私は急いでローブを羽織ると部屋を飛び出して大広間に向かった。

急いで大広間に向かったものの、夕食はもう始まっており、クリスマス休暇に家に帰らなかった生徒達もちらほらという大広間には雑談をする声が響いている。

話が弾んでいる中に入れば、注目を浴びることは大体予想はつくが、ここで行かなければ、後からわざわざ校長室に行かなければならなくなる。

意を決して、大広間に足を踏み入れるが案の定私の存在に気づいた生徒達は話を止めて、雑談をする声も明らかに私の話題を話す声に変わる。そうすれば前に座っている教師達も気づかない訳がなく、私はそのまま腰掛けているダンブルドアの傍に近寄った。

「今日はすまんかったの。退院に付き添えず」

「いえ、お気になさらず。」

怪我也完治しましたし、問題ありません。大臣からは私から手紙を送りましたので心配は無用です。予定通り新学期から復帰出来るご報告をもう少し早くしたかったです、少し寝すぎてしまって」

「よく眠れたようで良かった。寝癖がついておるぞ。」

「本当ですか」

笑いながら話すダンブルドアの言葉を聞いて、手ぐしで髪を整えるのと、隣にいたマクゴナガルに視線を移して話しかけた。

「マクゴナガル先生。あの時はご迷惑をお掛けしました。」

「怪我はしっかりと治ったんですか？」

「はい、ぼつちりです。」

笑顔を取り繕いながら答えると、ふとルーピンのマフラーを借りたままな事を思い出して、横目で探してみる。意外に簡単に見つけることは出来たものの、彼はこんな時に限ってセブルスの近くに座っていた。

ルーピンを見つけるはずが、彼の姿を見てしまった今の私の脳裏にはあの時見た瞳が横切ってくる。

私はゆつくりと呼吸を繰り返すと、ルーピンに近づいて机越しに話しかけた。

「ルーピン、マフラーを返すの忘れてて」

「ああ、いいよ。いつでも」

「そう、じゃあ洗濯してから返すわね。」

それだけ伝えて帰ろうとしたからだろう。後ろから私を呼び止めるルーピンの声が聞こえてきた。

「レイラ、夕飯は？」

ちらりと空いている席を探してみるが、残念ながら空いているのはセブルスの隣だけ。セブルスのことを見つめてみるが私の事など目に入っていないかのように、全くもって目が合いそうな気配もない。今までの私だったら、喜んで彼の隣に座って夕食を食べたのだろう。だけど、あの時以来会っていないセブルスの隣に座って、あの時に向けられた瞳で見られるかもと考えると一気に食欲も落ちていった。

「ああ…… お腹空いてないの。さつきお菓子食べたから」

目を逸らしながらその場を逃げるように背を向けると、足を動かした。何も見らずに前だけ見て歩いてきた筈だというのに、視界の端に動く物が見え視線を移すと、視界に入ってきたのは私服姿のハリ―だった。

何か言いたげに私を目で追う彼と目が合うと、緑色の瞳がはつきりと視界に入る。

緑色の瞳、それだけでエバンズの事を思い出してしまった私は消し去るように視線を逸らすと、そのまま大広間を出て、何も考えないよ

うに自室に足を向かわせる。

何も考えないように、何も感じないように、ただ前を向いて歩いているはずだというのに、頭にはあの時見たセブルスの瞳と、変わらない緑色の瞳が横切つて、一気に胸が苦しくなった。

あの後ぐっすりと眠れる訳でもなく、私は浅い眠りから扉をノックする音で起こされ、ゆっくりと上半身を起こした。

…… ベッドで寝れば良かった……

そう後悔しながら、扉に近づいて開けてみると、そこには緑色の瞳を持った少年が立っていた。

朝からハリーとご対面するとは、私はどうやらどこまでもついていないらしい。

「………何か用……」

扉にもたれ掛かりながら、出した声は意図せずとも低く、やり場のない苛立ちが表に出ていることは自分でも分かっている。

「…… あっあの、ダンブルドア先生に頼まれて。これを届けに」

差し出してくる手には袋が握られていたが、私はそれよりもこれがダンブルドアの差し金だと聞いた瞬間、彼に対しては苛立ちを通り越して怒りが湧いてきた。

私がハリーを良く思っていない事を知っておきながら、こんなことを指示するとは、私に対して嫌がらせをしているとしか考えられない。

……… 本当にここでこの子を殺してやろうか

そんな事を半分冗談、半分本気で思いながらもお礼を言いながら受け取った。さっさと扉を閉めようとするが、当の本人はまだ私に用があるらしく中々帰ろうとしない。

「ちよつと待ってください。」

気にせずには扉を閉めようとしたが、慌てるように彼から呼び止められ、言われた通り待ってみるものの言うのを悩んでいるのか中々先に進まない。

「…用がないのなら早く帰りなさい」

呆れた私が扉を閉めようとしたのを見て焦ったのだろう。あまりに突然出てきた手を見つめながら、内心挟めてしまいそうになったことをハラハラしながら、ひとつ文句でも言っただろうかと彼に視線を移すと何か覚悟を決めた表情を浮かべていた。

「どうして、助けてくれたんですか」

やっと開いたハリーの口から出た言葉は、想像していなかったものだったが、頭は至って冷静で、思った事をそのまま言葉にした。

「… 貴方の安全を守ることが今の私の仕事だから。それだけよ。」

冷たく言葉を吐き捨てた私は、ハリーの表情を見ずに扉を閉めて鍵をかけると、彼から貰った袋を覗いてみる。

…… あっ…… スコーンだ……

中にはパンとスコーンが入っていて、紅茶でも淹れようかと考えていると、扉越しに遠ざかっていく足音が聞こえてきた。

ハリーが持ってきたパンとスコーンを食べ、シャワーを浴び、ルーピンのマフラーを洗ったりと午前中は自分の身の回りの整理で、意外とやる事もあり暇をすることもなかった。

だが午後になれば、明日から始まる授業の準備に追われている教師達に比べ、する事がない私が最終的に辿り着いた場所は図書館だった。

分厚い本を読み漁って時間を潰すといっても、夕食の時間までそう簡単に時間が過ぎ去らず、飽きた私は廊下を歩きながら、どこまでも晴れ渡っている蒼い空を見上げた。

外に出て空気が吸いたくなった私は、城から出ると何も考えずに外を歩いては、ゆっくりと呼吸を繰り返してみる。

こんなに晴れているのに何だか気分は晴れず、呼吸を繰り返しても、私の中にある突つかかっている何かは取れることはない。

………前にもあつたような…

こんなことを大分昔したような、どこか見覚えがあるようなそんな気がして、足を止めふと視線を移すと先には温室が並んでいた。

そんな景色が視界に入ってくれば、頭に浮かんできたのは幼い時の記憶と嫌な感覚だった。あの時と温室の並び方も変わっているし、あの時のように上級生達が横を通り過ぎることもないというのに、あの時感じた嫌な予感が襲ってくる。

頭ではそろそろ部屋に戻ろうと考えているのに、体が勝手に動き出し、温室に近づくと扉に手を伸ばしてみると、鍵がかかっているはずなのに、扉はまるで開くことが当たり前のことかのように音をたてて私を迎え入れてくる。

薬草学の担当であるポモート・スプライトが閉め忘れたか、それかまだ準備途中で一時的にこの場を離れただけなのか、とにかく何故こうも簡単に開いてしまうのだろうか。

私はそんな疑問を抱きながらも、何も考えないまま中へと入っていると、まだ整理整頓の途中だった温室の中は、少し散乱していたがその中でも異様な音が耳に入ってきた。

スルスルという何かが地面を這いずり回っているような音を聞いた私が無意識に音がした方を振り向くと、1箇所には1年生で習う悪魔の罾が集められ、太い蔦が蛇のように動いていた。

頭には大分昔に見た、悪魔の罾に襲われるセブルスの姿が浮かんできたが、勿論今日の前には彼が居るはずもない。

「レイラ？」

突然後ろから私の名前を呼ぶ声が聞こえてきて、振り向いてみると重たそうな籠を抱えているルーピンの姿があった。

「こんな所で何をしているんだい？」

温室で1人佇んでいる私の姿は、他の人から見たら奇妙な光景なの

は間違いない。

「鍵が空いていたから、少し気になっただけよ。… 貴方は… 見たところによるとお手伝いかしら？」

「丁度通りかかったからね」

重たそうな籠を置き、歳だなと呟きながら背筋を伸ばす彼から後ろにある悪魔の罫に視線を移し、じつと見つめていると色褪せていた記憶が浮かんでくる。

『そんなの言われなくても分かっている!!』

僕が純血じゃないことぐらい!!!お前に言われなくてももう知っている!!!』

いつか私に、辛そうに、頭を支え狂ったように泣きながら大声で怒鳴り散らしてきたセブルスの声が聞こえてきたような気がした。

気の所為だということには分かっているが、初めて目にした彼の取り乱した姿が脳裏に映し出される。

『何なんだ。純血純血って、僕だって、あんな父親の元に生まれるぐらいたら、生まれたくなかった!闇の魔術がそんなにいけないものなのか!何で、何で!』

……… 気の所為……… 私の気の所為

何度も繰り返し返してもか『生まれたくなかった』

と言うセブルスの声が、頭の中で何度も何度も繰り返し返される。

「… ラ、… レイラー!」

私の名前を張り上げる声が聞こえてきたと思えば、突然後ろから肩を掴まれたせいで、少し驚きながら顔を向けると少し離れていた所にいたはずのルーピンが直ぐ後ろに立っていた。

「… 少し顔色が悪いよ。やっぱりまだ体調が万全じゃ「大丈夫よ。心配ないわ」

彼の言葉を途中で遮った私は、ルーピンの顔を見ないまま温室から出ると自室に足を向かわせる。

早く部屋に帰りたい時に限って、一筋縄ではいかないもので、壁か

らにゆつと顔を出す。ピーブズと鉢合わせした私はにやにやと笑う腹立つ彼の顔から視線を逸らし、構う素振りを見せずに歩き続けた。

「ヒヒヒ、そんなに蒼白な顔で一体どこに行くのかな。」

楽しそうにからかってくる。ピーブズは私の周りを飛び回りながら、どこまでもついてくる。私は気にする素振りを見せないように前だけをみて、足を動かし続けた。

「嫌われ者の次は、裏切り者になるつもりかい？」

からかうように言ってきた彼の言葉を聞いた私は、動かし続けていた足を止めて宙に浮いているピーブズに視線を移す。突然足を止め、見られることに戸惑っているのか彼の表情からは、あのニタニタと笑う笑顔が消えていた。

「……………裏切り者？……………貴方面白い事を言うのね。」

構うつもりはなかったが、そろそろ鬱陶しく感じていた私は我慢の限界で後を続けた。

「独りぼっち……………そう言ったのはどこの誰だったかしら？」

最初から独りな私が裏切るなんて一体誰を裏切れればいいというのだろう。

温かみのない言葉をその場に残して、また歩き出すと、後ろから聞こえてきたのはいつもと変わらないピーブズの楽しそうな笑い声だった。

「ヒヒヒ、可笑しいなく今のお前は酷く滑稽だ」

満足したのか彼の気配がなくなるのを感じても、後ろを振り向くことはせず、ピーブズの言葉に返すように小さな声で呟く。

「……………ええ……………知ってるわ……………」

さつきから左の掌がまるで刃物で切りつけたかのように痛むのは気の所為だ。

部屋に戻った私は、久々に魔法ではなく自分の手で淹れた紅茶と、アーサーから貰ったクッキーを食べながら、ゆつくりと過ごすことにした。何度も読んだ本を読んで、ペンダントを手に取ってみては時間を潰すがやることなく、そう長続きはしない。

椅子に深く腰掛け天井を見上げていた私は、本を閉じながら視線を下ろすと、机の端に置いてある箱に手を伸ばし、開けてみると中に入っていた瓶を手にとってみた。

……いつ使おう……

ルーナは私が魔法薬が好きだと思ってくれたのだろうけど、どちらかというときではないし、得意でもない。薬を自分から作ろうという気もしないし、薬草を集める趣味もない。

使い道はないかもしれないが、どんな物でもプレゼントを貰えただけで嬉しい。手に持っている瓶には勿論何も入っていないし、変哲もない瓶だが私にとっては特別なものに見えた。

ルーナにクリスマスプレゼントを渡さないとないと思いつながら瓶を箱の中に入れてしまうと、今度はアーサーから貰ったエジプト土産を手にとってみた。

白く所々透明な球体は、両手で包み込めるほどの大きさで、今の所何も変化はない。

……これどうやって使うんだろう。

回したり、転がしてみたり色々してみたが、何も変わる様子はないし、どう使えばいいのかも分からない。

『使う人の必要なものや望むものに変わるらしいから魔法も色も形も異なるらしい』

アーサーの言葉を思い出す私は、球体を見つめて呟いた。

「……………必要なものや……………望むもの」

私の望んでいること……………か

そう思いながら球体を眺めていると、意図せずとも奥底に沈めたは

ずの言葉が頭に浮かんでくる。

.....
セブルスに見てほしい。

「何やってるんだろ...」

どこか期待しながら球体を手に持っている自分が馬鹿馬鹿しくなり、溜息混じりに呟きながら球体を机の中にでも閉まっておこうかと引き出しを開けると、突然手の中にあつた球体が白い光を放ちながら形を変えだした。

「えっ、何」

驚きで声が漏れるも、どうすることも出来ずに見守っていると放っていた白い光は消えていき、球体を持っていたはずの私の手の中には鏡があつた。

楕円型の鏡はどうやら立てられるらしく、机の上に立ててみたが、どこからどう見ても変哲もない鏡で覗き込んでも自分の顔を映すだけ。

球体が鏡に変化したということは理解出来たが、今私が望むものが、必要なものが鏡だとは到底思えないし、実際必要ない。

.....
何これ...

不思議でたまらず、ずっと鏡を見つめてみたが映っているのは真顔な私の顔だけで、ますます意味が分からなくなつたが、変わらず映り続ける自分の顔を見ているとある事が頭に浮かんできた。

.....
鏡は目の前のものを映してくれるもの。所謂第三者から見た自分を自分自身で見ることが出来る。

まさかあの球体は私に今必要なことは自分を見直すことだなんて

事を言いたくてこの姿に変わった……なんてね……。

いや、それは深読みし過ぎだろう。

自分の中に浮かんだ可能性を否定しても、何が正解なのか分かるわけがないし、もしさつき私が考えたことが合っていたとしても、全然嬉しくない。

「……あはは…… ちょっと厳しすぎない」

乾いた笑い声と一緒に呟いてみても、鏡は特に変化することなく私の顔を映し続けた。

夕食の時間を迎えると、静まり返っていたホグワーツ中が活気を取り戻し、大広間にはクリスマス休暇が終わり戻ってきた生徒達の声で溢れかえっていた。

教員席の1番端に座ろうと思っていたのだが、私が行った時にはもう端の席は埋まっていて、残念ながら中央よりのマクゴナガルの隣の席ぐらいしか空いていなかった。

いつもだとダンブルドアが前に立つたらずぐに、会話をする声が途切れるのだが、今日は中々途切れずに随分と盛り上がっている。きつと休み明けだから友人に話したいこともたくさんあるのだろう。

「馳走の前にひとつ話がある。」

ダンブルドアが座っている生徒達に呼びかけるとさつきまで盛り上がっていたのが嘘みたいに静まり返った。

「明日から授業始まる君たちと一緒に、怪我で休暇されておったヘルキヤットさんが復帰なされることになった。」

まさか自分の事が言われるとは思っていなかった私は、前で話しているダンブルドアの後ろ姿に視線を移した。

生徒達の視線が私に集まっているような気がしたが、気にしないふりをしながら真正面を向いて彼の声に耳を傾ける。

「君達も友人と話したくてうずうずしている事じやろうからの。話は

これまでにしよう。」

ダブルドアが指を鳴らすと、目の前の机には豪華な食事が現れ、それが合図のように一気に賑やかな声が響き渡った。

お肉や、サラダなど適当に自分の皿に取り分けて食べても、何故か心の底から美味しいとは思えなかった。確かにお肉も噛んだ瞬間肉汁が溢れてきて口の中でとろけるし、サラダもシャキシャキしていてドレッシングとの相性も抜群だったが、私の頭には昨日のことが繰り返し再生されていた。

別に今までと同じじゃない…

目が合わなかったからなんだというの。

表情を変えないのも、話さないのも今まで通りだというのに、あの時のセブルスを思い出しては私の胸は苦しくなっていく気がする。

今までだって特別に話さなかったでしょ。

何も変わらないはずだというのに、セブルスから死喰い人だと思われることは今までと変わらないというのに、どうしてこんなにも悲しいのだろう。

……… 私の考えすぎ……… そう気のせい………

自分に言い聞かせながら握っているフォークで、サラダを刺して口に運んでみるが、やっぱり美味しく感じない。

人は考え込むと周りの声が聞こえなくなるらしく、さっきまで生徒達の声が聞こえていたはずなのにやけに静かに感じた。

こうなれば、セブルスを救えやすくなるじゃない。後ろで見守っていられるじゃない。だからこれで良かったの。

そう何度も言い聞かせるように心の中で綺麗な言葉を並べていても、胸に空いた穴は埋まることなく、ましてやどんどん広がっているような気がする。

私は視線をグリフィンドールの席に移して、無意識にハリーの姿を探すと、ロンと楽しそうに話している彼の緑色の瞳を見つめていた。

……… エバンズ……… だったら……… どうしてただら

う…

あんなに憎く、嫌っていたはずなのに私はふとそんな事を考える。
もし彼女が生きていたら、もし彼女が私の立場にいたら一体どう行動するのだろうか。

きっと私には出来ないような事を簡単にしてしまつて、セブルスを救つてしまうのだろうか。

………馬鹿らしい……

もうこの世に居ない人間の事を考えるなんて、ましてや彼女の事を自分から思い出すなんて、私らしくない。

あの時自分なりに考えて、1番いい選択肢を選んだつもりだったのに、あの時とつた私の言葉は正しかったはずなのに、

今は…苦しくて、悲しくて……

ただただ虚しい。

虚しいのは、どこかで選択肢を間違つたかもしれないという不安のせいか、セブルスに嫌われ、拒絶され続けてしまうこの先の恐怖のせいなのだろうか。

どんなに考えても答えなど出るわけがなく、私は皿の上に転がっている柔らかいお肉をフォークで刺して、試しに口に運んでみたがやっぱり味がしなかった。

16 恐ろしいもの

新学期が始まったホグワーツにはいつも通り生徒達の賑やかな声
が溢れかえり、私のやることは大きく変わることはなかったが、ひと
つ変わった事があった。私が生徒達の前でハリーを救ったことで、噂
を信じる人も少なくなったらしく、少し過ごしやすくなったのだ。

廊下で生徒達とすれ違っても変に避けられる事もなく、視線を感じ
ることも無くなったことは嬉しかった。

いつも通りの夜の見回りを終えた私は、自室に戻ると脱いだローブ
をソファアーの上に投げ捨てる。こんなことをしたら皺がつくことは
分かっているが、今は綺麗に畳むことすら面倒くさく、ソファアーに腰
を下ろした。

机の上には、すっかり冷えているであろう紅茶が入っているティー
カップや、時々送られてきていた大臣からの手紙が無造作に置かれて
あり、机の端に積み重なっている本は今にでも落ちそうだ。

魔法に頼って片付けようとした時、本の影に何か隠れていることに
気づき、重たい体を動かして本をどかしてみると、そこにあったのは、
ルーナに渡さなければならぬネックレスだった。

……ああ……まだ渡してなかったけ……

別に最近忙しかったわけではない。ただルーナと会わなくなり、渡
すタイミングが掴めないでいた。

………早めに渡さないと……あつ……マフラーも返さないと
いけない……

そう思いながら立ち上がろうとするが突然急に体が怠く感じ、足に

力が入らなくなる。

私はソファアの背もたれにもたれたまま天井を見上げた。

何故こんな体が重いのか分からない。ここ最近、こんな調子だ。最初は風邪かと思ったのだが、熱もなければ喉も痛くないしかといって頭が痛いわけでもない。

………本当に：どうしたんだろう……

私は溜息をつきながら、目頭を押さえ瞼を下ろし、目を瞑っている
と少し楽になったような気がした。

………まだまだこれからなんだから……

「………もつと頑張らないと……」

私は呟きながら、気合を入れるように頬を両手で叩いて、目を開けた。

午前中の授業が終わり、昼食を食べに大広間に向かっているであろうレイブンクローの生徒達の横を通り過ぎた私は、ルーナを探しに廊下を歩いていった。一応大広間に顔は出してみたがやはりそこに彼女は居らず、とりあえず城中を探してみることにしたのだ。城の中になかったとしたら、思い当たるのは外しかない。

私は彼女に渡す予定でいるネックレスが入った袋が、ちゃんと手元にあるか確認するためにローブのポケットに手を入れる。袋に触れて、持ってきたこと確認した私は図書館の方向に足を向かわせた。

昼食の時間だからいる可能性は低いが、普通の感覚で感覚で探して

しまうときつと彼女を見つけられないような気がする。

あまり期待しないで廊下を歩いていると、グリフィンドールの生徒達に囲まれて、楽しそうに笑いながら話しているルーピンの姿が見えた。

…… あっマフラー……

まだ自室の机に畳んで置きっぱなしにしてある彼のマフラーを思い出して、持ってくれば良かったと後悔しながら、彼の隣にいる満面の笑みの生徒達に視線を移す。

生徒達に囲まれるとはやっぱり彼は、生徒達からの信頼が厚いらしい。

…… 夕方にでも返しに行こう……

流石にそろそろ返さないといけないと思った私は、見向きもしないで横を通り過ぎると、有難いことに話しかけられなかった。

引き続きルーナを探そうと前を向くと、行き交う生徒達の中にレイブンクローのローブを身に纏っていたルーナが自然と視界に入ってくる。

呼び止めようと口を半端に開いたが、何かいつもと違う雰囲気彼女を見ていると声が出ることはなく、代わりに目で追いかけていた。

ルーナは何か見失わないように一点を見つめて、早歩きをしたり、時々止まったりしている。

……まるで誰かを尾行しているみたいな仕草だ。

私は全く気付いていない彼女の後ろに周り、後ろから話しかけてみた。

「誰の後を追っているの？」

普通後ろから話しかけられたら、驚くような仕草を見せるはずなのだが、ルーナはただ振り返ってくるだけだ。

「あつ、こんにちは。ヘルキャットさん」

挨拶をしてくる彼女はいつも通りで、違和感などない。

「随分と真剣だったわね。何か気になることがあった？」

さつき見た真剣なルーナの姿がどうも気になり、問いかけみると誤

魔化すことが得意な彼女は、いつもの調子で言ってくる。

「ただ人混みにどれだけ溶けられるか試してただけだよ。止まってるのと進んでるのどっちが上手く溶け込めるかなーって。それであんたはどうしたの？」

「ん？」

私だったら考えもつかないことを言うルーナの言葉に押され、間抜けな私の声が外に出ると、彼女は私に問いかけてくる。

「何か用があるのかなーって」

「ああ…そうそう。」

ルーナの言葉で本来の目的を思い出した私は、ローブのポケットから袋を取り出して彼女に差し出した。

「遅くなったけど、はい、クリスマスプレゼント。気に入ってくれるといいけど…」

私の言葉を聞きながら、袋の中からネックレスを取り出したルーナは、キラキラと輝く青い石を見つめると嬉しそうな表情を浮かべたのがわかった。

「本当に貰っていいの？」

「勿論。貴女に似合うと思っただけだよ。ほら、付けてあげる。」

視線を合わせ、ネックレスを受け取り、付けてあげると、青い石を手を持ち見つめるルーナは私に視線を移すと、少し口角を上げる。

「ありがとう。とっても嬉しい。」

そう言う彼女の声は本当に心の底から嬉しくて踊っているようなそんな声だった。

喜ぶルーナを見ていると何故か私まで嬉しくなり、私は彼女の頭を撫でながら視線を下ろすと、ルーナが袋以外の何かをしっかりと握っていることに気づいた。

「…ルーナ、握っているのは何？」

私の言葉に、ルーナは隠すこともなく大人しく握っていた手を開いて私に差し出してくる。

「さっき誰かが落としたみたいなんだ。直ぐ届けようとしたんだけど、一体誰が落としたのか分かんなくて。」

そう言う彼女の手にあったのは、濁っている液体が上まで入っている瓶だった。ルーナの小さな手では、握っても隠れないほど大きなものだ。

「前にいたのが、ルーピン先生だったから聞こうと思ったんだけど……見失っちゃった。」

ルーナが持つている瓶が一体何なのか、私には脱狼薬が入っているとか考えられないのだが、……脱狼薬をこんな瓶に入れて持ち運びしているとは思えない。

「ルーナ、それ少し私が預かってもいいかしら？」

「持ち主が分かるの？」

「ええ、大体ね。貴女の代わりに渡しとくわ。」

もしルーナがルーピンの所へ届けに行つて、何か物語がずれしまう可能性だつて十分あるし、それにマフラーを返すついでに聞いてみればいい。

「じゃあ、はい。」

「ありがとう」

お礼を言いながらルーナから瓶を受け取つた私がローブのポケットにしまい込んでいると、彼女がいつもの調子で問いかけてくる。

「ヘルキャットさん。お昼はもう食べた？」

「いえ、まだよ。……あつ、ルーナが良ければ一緒にどう？」

あまりに期待した表情を向けられたら、そう言ってしまうのが必然で、私の言葉にぱつと明るい表情を浮かべる彼女は嬉しそうに頷いた。

「じゃあ、時間はまだあるし今日は私の部屋で食べましょうか？紅茶とお菓子出すわよ。」

「いいの？」

「ええ勿論」

私の提案に嬉しそうに聞き返してくるルーナを見ながら、言葉を返した。

それからはクリスマス休暇にあったことや、私が居なかつた時にあった出来事など、時々話が色々飛ぶルーナの声を聞きながら、昼食

を取りに大広間に向かった。

久々だからなのか、いつもより沢山話すルーナの声を聞きながら食べる昼食は美味しく、あつという間に感じ、お土産にお菓子を分けてあげると喜んでくれた。

午後の授業が始まれば、やる事がない私はとりあえず夕食まで時間を潰し、夕食も済ませた。その後の生徒達がゆっくりとそれぞれの寮でのんびりと過ごしている時間帯は、私も自室で時間を潰すのだが、最近眠れていない私にとっては一番睡魔が襲ってくる時間帯で、欠伸を繰り返しながら、睡魔と戦っていた。

見回りついでにルーピンにマフラーを返そうと、自室を出て、廊下を歩いていても時々教師とすれ違うだけで、外に広がっている空を眺めれば、どんどん夜が深くなっていくのが分かる。

今日こそはベッドで寝ようとしようもないことを考えながら廊下を歩き、ひと通り見回りを終えた後、そろそろマフラーを返しに行こうかと思いつきながら何も考えずにローブのポケットに手を突っ込むと何か硬い物が手に当たって取り出してみれば、今日ルーナから受け取った瓶を握っていた。

……あつそうだった…忘れてた…

すっかり瓶の事を忘れていた私は、片手にはマフラー、片手には瓶を握って、襲ってくる眠気に抵抗するように自分に言い聞かせる。

……渡して、すぐに帰って、それで寝よう。

私は溜息をつきながら、重たい足を闇の魔術に対する防衛術の教室へと向かわせた。

闇の魔術に対する防衛術の教室につながっている長い階段を見た私は一気に行く気が失せてしまったが、そんな自分を奮い立たせて階段を上る。

…こんなには長かった…け

疲れているとはいえこれだけで息が切れた私は、自分が歳をとったのを感じながら何とか階段を上り終えた。

固く閉じられている扉を開けて、中に入ると机や椅子が規則正しく並んでいて、勿論だがそこには誰もいない。

ルーピンがいると考えられるのは、この奥の自室だけだ。誰もいない教室の奥にある扉の前までたどり着いた私が一応ノックをし、返事を聞かずに扉を開けようとした時だった。

扉の奥から声が聞こえてくるのに気づいたが、扉を開ける私の手はそんなすぐに止まることもなく、少し明るい光が目差し込んでくる。ずっと薄暗い所に居たせいで目の前がぼやけたが、だんだん慣れると、ルーピンの姿が見えて口を開いた。

「ルーピン、マフラーを返しに」

ハリーの姿とそしてこの場所にいるはずのないデイメンターを目にした私は、最後まで言い終えることは出来ず、あまりに不可解な出来事に何故デイメンターがこんな所にいるのか、そんな疑問が頭の中を支配する。

私が突然入ってきて驚いたのだろう。私の方を見つめているハリーが杖を下ろした瞬間、彼の杖の先からでていた銀色の光は途端に消えてなくなると、デイメンターは私の方をくると向き、まるで標的を変えたように、あつという間に私の目の前まで近づいてくる。

…違う……………これは……………

デイメンターじゃない…

私をやっとデイメンターの本当の正体が分かった時には、それは宙でクルクルと回り出し、反射的に杖を取り出し身構える。

奥では私の方に駆け出そうとしているルーピンの姿と、今だに何が起こっているのか分かっていないようで放心状態なハリーの姿が見

えた。

私もまるで石になる呪文をかけられたように杖を反射的に握り、身構えた拍子にマフラーを落としたが拾うことなど出来ることなく、手に持っていた瓶を力強く握ったままその場から動けずにいた。

さつきまで疑問に支配されていた頭には、今度は目の前で回転しているその正体の名前が浮かんでくる。

……これは、ボガート

自分にとって恐ろしいものを考えると、自然と頭に浮かんできたのは、生きている人間とは思えなかった例のあの人の姿で、冷酷で温かみが微塵も感じられない真っ赤な瞳が頭に浮かんでしまえば、死の恐怖を体が思い出したように一気に寒く感じた。

………あつ………違う……

冷酷なあの人の真っ赤な瞳に首から血を流し、倒れ込んでいる人影が映っている事に気づいた私の心臓の鼓動は緊張したように速くなっていく。

ぼんやりとしか人影が鮮明になっていくと、もうそこには既に息絶えているセブルスが、彼の首から流れ出た赤黒い血が飛び散っている光景が頭にはつきりと流れ込んできた。

私は杖を力強く握り締めて、頭に浮かぶ光景を消し去ろうと今やらなければならぬことを考えるが、彼の赤黒い血の色はまるでこびりついたように消えてくれない。

どちらにせよ、ハリーに見られはいけない。ボガートが姿を変えたら、直ぐに呪文を唱えて、誤魔化さないと。

そう思いながらボガートを見たつもりが、その奥にいるハリーとしっかり目が合い、その瞬間私の体はさらに硬直した。

………緑の………瞳………

緑色の瞳が嫌という程しつかりと目に入った時には、もう何に変身するかを決めたボガートは回るのをやめていて、回転をやめたボガートが空中で何かに変わると、目の前が景色が真っ赤に染まった。

………赤………？………

一瞬何が起こっているのか分からなかったが、グリフィンドール色のローブが私を覆うようにふわりと舞っていることに気づくと、心臓が鼓動を速くしていく。

私の恐ろしいものに変身したボガートの姿がゆっくりと視界に入ってくると、時間が止まっているんじゃないかと錯覚するほどゆっくりに感じ、まるで別の世界に取り残されてしまったように、何も聞こえなくなり、目の前に広がる光景しか目に入らなくなる。

靡いている赤毛のふわふわな髪

よく見覚えのある赤色のローブ

………につこりと笑っている口元。

………緑色の目で私を見つめてくる少女

驚きのあまり声を出したはずなのに、私の声は外に出ることはなく、私は杖を握りしめたまま後ずさりをした。

浮いていた足が地面につくと、ゆっくりと私の方に笑いかけながら

じりじりと近づいてくる。

『私、貴女とは気が合う友達になれそうな気がするわ』

そう聞こえたような気がして、私は咄嗟に耳を塞いだせいで、足元に落ちた杖の音と、瓶が割れる音が聞こえてきたが、そんなこと気にしてられない。

……………
なんで……………

今の私には目の前にいる人が、緑色の瞳を持った少女が、もうこの世にいるはずのないエバンズが怖く、恐ろしく感じた。

何で……………

頭の端ではこれがボガートなことぐらい分かっている。だけど、ボガートを退散させる呪文なんて最初から知っていないように私の頭からはすっかりと抜け落ちていたどころか、どこからどう見ても本物そのもので何故かボガートとは思えなかった。

「……………貴女死んだはずじゃない……………」

じりじりと近づいてくるエバンズから逃げるように後ずさりしながら、小さく呟くと突然後ろから誰かの声が聞こえてきた。

「ルーピン、薬を届けに……………」

低音の音が微かに聞こえてくると、私の心臓はまた緊張したように動き続ける。聞こえた声が途中で途切れ、少し間が空くと小さな声が聞こえてきた。

「……………りりー……………」

彼女の名前を呼ぶ声を聞いて、私は耳を塞いでいた手を下ろし、反

射的に振り返る。

「……セブルス……」

薬を持っているセブルスはその場に立ち竦み、口を少し空けて瞳孔を大きく開いていた。

……駄目……彼に見せたら……駄目……

まるで私はそこに存在していないかのように、エバンスの姿をしたボガートだけを見つめ続けているセブルスの姿を見た瞬間にそんな思いで頭がいっぱいになる。

これ以上セブルスに見せては取り返しがつかない事になりそうなき、落ちている杖を呪文で手元に戻すと、エバンスに杖先を向ける。私が呪文を唱えようと息を吸うと、後ろから思いつきり腕を掴まれ、その反動で振り返ると後ろにいるセブルスとしっかり目が合った。

あの時の瞳ではなく、何か訴えてくる彼の瞳が視界に入ってくると、冷たく溢れ出てはいけないものが、醜い何かに体に乗っ取られたような感覚が襲ってきた。

彼の手から逃げようとしても私が何をしようとしているのか、自分の目の前にいるエバンスが一体何なのかを悟ったセブルスは離すどころか私の腕を掴む手の力を少し強めてくる。

……消さないでくれ……

そう言われているような気がして、声を出さずにそう訴えてくるセブルスの表情を見ているだけで、胸が苦しくなり、辛くなる。

……何で……エバンスなの……

それがほんの一瞬の幻想でも、それが彼女ではなくボガートでも……彼にとっては……

私は今ここにいるのに、生きているのに、彼はエバンスに化けたボ

ガートを選ぼうとしている。

少しだけ唇を噛み締めるセブルスの表情を見ると、私の胸は更に締め付けられ苦しくなった。

…そんな顔しないで……お願いだから……

目の前にいるセブルスは、やっぱり私じゃなくてエバンズを見る。それがエバンズじゃなくても、偽物だとしても彼にとっては、今のセブルスにとつては愛しく感じている。

……私はセブルスが必要でも……彼は私を必要としてくれない。

彼に掴まれている腕を見つめていると、私の杖を握っていた手は自然と力が抜け、握っていた杖が手から離れると、カランという音が聞こえてきた。

貴方が私のことなんて決して見てくれないことぐらい分かっていたというのに、今までだって何度も何度も同じような光景を見てきたのに、これでもう痛いほど実感させられた。

きっと私が死喰い人じゃなくても、彼は私のことなんて見ようともしてくれない。

……もう……十分……

もう十分、分かったから大丈夫。だって私はエバンズの姿をしたボガートにさえ勝てない。

……もう無理なことぐらい、私の名前を呼んでくれないことぐらい。私を見てくれないことぐらいもう分かった。

私の中にあつた僅かな望みも光を失い、真っ暗になったような気がした。

後ろから突然風が巻き起こり、髪がふわりと舞うとチョコレートのような香りがしたような気がしてボガートがクルクルと回る音が聞こえたと思うと、ルーピンの声が聞こえてきた。

「リダイクラス！」

どうやらセブルスが突然現れて驚いていたであろうルーピンが、私とボガートの間に入って、私の代わりに呪文を唱えてくれたらしい。

ボガートが消えるポンという音が響くと、部屋は静まり返り、それがさらに胸を苦しくさせる。

離してと声に出したつもりでいたが、どうやら私の口からは声は出なかったらしく、結果的に何も言わないままもうほとんど力が入っていないセブルスの手を振りほどいた。

「……………レイラ……………」

後ろから心配するようなルーピンの声が聞こえてきて、彼の手が私の腕を掴もうとしたのが分かった私は、その手から逃げるように彼の横を通り過ぎる。セブルスにぶつかったが謝ることもせず

に、誰の顔も見ずに、急いで部屋を飛び出して机にぶつからないように避けながら小走りで教室を出ると前だけ見て長い階段を駆け下りた。

言い表せない気持ちだが、決している感情ではないものが足の先まで染み込んでいくような感覚を感じて、すっかり暗くなっている廊下を走った。ただひたすらに前だけを見て、呼吸を繰り返しながら全速力で走る。

……………嫌だ……………

何が嫌なのか、私は誤魔化すために忘れさろうとするために走るが、どんなに走っても不思議と疲れることはなく、ただ息が切れるだけ。

消えるどころか、記憶の奥底に沈めたはずのものが、まるで写真を見ているように昔見た光景が頭に横切つて、溢れてくるこの感情を解消する方法など分からない私は、誰もいない廊下を走り続ける。

……
もう……
嫌だ……

何もかも投げ出したくなった今、今だけは無性に泣き叫びたい気分
だった。

17 悪夢

あの場から逃げるように自室に戻った私は、部屋に入った瞬間扉を閉め、直ぐに鍵をかけた。

ここには誰もいないと思うと、足は緊張が途切れたように力が抜け、扉にもたれながら床に座り込む。どんなに落ち着こうとゆっくりと呼吸を繰り返しても、切れていた息が整っていくだけで心臓の鼓動は増していき、少し頭も痛みだした。

……… 違う…… きっと何かの間違いだ

さつき見たエバンスの姿を思い出しながら、私は自分自身に嘘をつく。私がどんなに自分を誤魔化そうとしても、ボガートが彼女の姿に変身したという事実は変わらず、更には確証づけるようにさつきから手の震えが止まらない。

自分の恐ろしいものが例のあの人でも、セブルスが息絶える姿でもなく、もうこの世にいない彼女だという事実を受け入れたくない私は、小さく声に出した。

「……… 違う……」

現実を見せてくるように、エバンスの姿をしたボガートを消さないでくれと訴えてくるセブルスの表情が鮮明に何度も何度も頭の中で再生され、手の震えを止めるために服を握りしめる。

「違う違う違う違う」

呪文を唱えるように小さく呟いていても、一体何が違うのか、私は何を否定しているのか自分でもよく分からない。

自分の心臓の鼓動が耳元で聞こえたような気がして、私は胸を押さえながら瞼を下ろした。

少しでも落ち着くために目を瞑ったというのに、視界が真っ暗になるとさつき見たセブルスの辛そうで悲しそうなそれでも彼女を求め表情がはつきりと瞼の裏に映り、私は目を逸らすように瞼を上げる。

……セブルスがあんなに苦しそうなのは私のせい……

「……そんなの分かってる」

ずっと奥深くにしまっていたはずの記憶が、まるで私を責め立てるように鮮明に浮かび上がってくる。

……あの時何もしなかったのは私自身

「分かってる」

暗がりで聞いたセブルスの嘆き、泣き叫ぶ声が頭の中で何回も再生されては、エバンスの亡骸を力いっぱい抱きしめる姿が焼き付けるように、浮かんできて、ぎゅっと胸を締め付けた。

私に傷つく資格なんてない

「分かってるわよ!!!」

心の中に浮き上がってくる自分の言葉を消すように、声を張り上げ、何かに耐えるように胸を押さえて俯くとある思いがどんと大きくなくなっていく。

……でも……私は……

「……………殺してない」

思ったことを口にした私の掠れた声は、外に出ると空気に溶けて跡形も無く消えていった。

周りを見回してみると、視界に入ってきたの一面に広がっている芝生と、湖の近くに立っているブナの木。見覚えのある景色に私の心臓は緊張するように鼓動を速めていく。

何故こんな所に居るのか、分からなかった私は直ぐに城に戻ろうと後ろを振り向くと、この場には似つかない赤が目に入ってきた。

赤いローブを見に纏い、赤い髪を靡かせ、緑色の瞳を持っている彼女は、まるで私をこの場から逃がさないように立っていた。

『私が怖いのか?』

……逃げなきや、彼女から逃げなきや

そんな言葉が頭に巡り、後ずさりをしながら杖を向ける。思いつく呪文を口にしても、何故かエバンスの体に当たることなく通り抜けていく。

『当たるわけないじゃない。私は貴女が殺したんだから「殺してない!!」』

私が彼女に声を張り上げ反論した瞬間、遠くにいたはずのエバンスは目の前にいて、簡単に芝生に押し倒される。横を向くと、落とした杖が見え直ぐに手に取ろうとしたが、上に乗っかってきたエバンスに首を絞められた。

苦しい筈なのに苦しくなく、息ができない筈なのに、普通に息が出来る。

目の前にある緑色の瞳が視界に入るのが嫌でしようがなく、視線を逸らそうとするが彼女がそうはさせてはくれない。

『……可哀想』

彼女のその一言を聞いた瞬間、何故か緊張したように心臓の鼓動が速くなっていく。

『……貴女は死んだ私にさえ勝つことが出来ない』

「……止めて」

知りたくのない事を知ってしまいそうで、後を続けようとするエバンスを止めようとするが、彼女は薄ら笑いを浮かべながら口を開いた。

『……ねえ、愛している人に見てくれないのはどんな気持ち？』

「止めて!!」

声を張り上げながら、体を起き上がらせると目の前にいたはずのエバンスの姿はなく、外にいたはずが部屋のソファアに腰掛けていた。

夢だと理解した私はほっとしたように、ため息をつくがやけにはつきりと夢の内容が頭に浮かんでくる。

「……最悪……」

エバンスの夢を見て、いい気分になれる訳がなく、頭が重たく感じぼんやりとする。ソファアに横になり、もう一度眠りにつこうと瞼を下ろしてみるが睡魔は襲ってこない。

手探りで首からかけているペンダントを服から取り出し、胸元で握り締めると、少しだけ安心した。

結局眠ることが出来なかった私は、顔色が明らかに悪い自分の顔を鏡で見て、自分に喝を入れるように頬を両手で叩く。

「……よし……」

何も大丈夫ではなかったが、そう呟くだけで少し軽くなった。

不思議とお腹は減っておらず、胃に何も入れたくなかったが、私はとりあえず机に置いてあったお菓子を一つ頬張りながら、杖を一振り

して紅茶を淹れると口に流し込んだ。

ソファーに投げ捨ててあったローブを身に纏い、扉を開けるとどうやら扉の目の前に人が立っていたようで、突然誰かの顔が視界に入ってきた。

扉を開けた瞬間人がいて驚かない訳がなく、私も相手も同じタイミングで驚き、何か落ちる音が聞こえてきたが、目の前にいた正体が分かった私は少し体が固まった。

「……何か用かしら……ルーピン」

昨日のことを知っているルーピンと朝から対面することになるとは、気まずくてしようがなかったが、今だけはセブルスと対面するよりはかは何倍もましだと思えた。

「朝食の時間が終わってしまったから、レイラの分を持ってきたんだけど、ああ……これは食べれないな」

しゃがみながら答えるルーピンは床に落ちているパンを手に持ち、袋を覗き込んでいる。

「良かった、これだったら食べれそうだ」

袋の中に何か食べ物が入ってるんだろう。ルーピンが少しホツとしたような表情を浮かべる。彼が私に気を使って持ってきてくれたことぐらい分かっているが、私はいつも通りルーピンをあしらった。

「私はそんなことしてほしいなんて頼んでなんかいいわよ。」

「ごめん……迷惑だったかな……」

「ええ、貴方が来なければ朝から驚くこともなかったんですもの。」

申し訳なさそうに謝ってくるルーピンの隣を通り過ぎながら、適当に言葉を返し、振り向くこともせず前を向いて歩き続けた。

「レイラ……あの「ルーピン」」

突然後ろから私の名前を呼ぶ彼の声を途中で遮ると、その場は静まり返る。

「何も言わないで」

ルーピンに頼むように、はっきりと言葉にするとそれ以上は何も言ってこなかった。振り向かなかったせいで、一体彼がどんな表情を

浮かべていたのかは分からないし、どんなことを言おうとしたのかも分からないが、今は昨日のことに関しては触れて欲しくなかった。

授業が始まる鐘の音が城中に響き渡ると、廊下にいた生徒達は教室の中へと入っていき、誰の姿も見えなくなった。

やることがない私は壁と隣接している石のベンチに腰掛けて、何となく外を眺め時間を潰す。空はどこまでも晴れ渡っていて、吹き込んできた風に髪の毛の先がゆったりと舞い上がる。

あんなに寒かった冬も終わりを告げ、地面の隅に少し名残惜しそうに残っている雪ももうほとんど溶けていた。

……もう少いで……ここにもいれなくなる……

溶けている雪を見ているとそんなことが頭に浮かんできた。ここにいる生徒達や教師達は、今年が終わろうともまた来年がくる。だけど、私の場合は違う。

今年が終われば、魔法省に戻らなければならない。またあの羊皮紙と向き合う日々に戻るだけだ。

……また……彼が遠くなる……

ホグワーツに居るだけで傍に居るようなそんな感覚を感じてしまっている私は、きつともう引き戻れない。

傍に居ないということとは痛いほど分かっているのに、こんなにも貴方が居てくれるようなそんな気がする。エバンズを想っているのを知っているのに、決して私が抱いているこの想いは叶わないことも分かっているというのに、何度も何度も消そうとしても、忘れようとしても、私は貴方を忘れることも、想いを消すことも出来ない。

……傍にいさせて……お願い……

……私をひとりにしないで……

……貴方を好きでいさせて……

今思ってしまった事を消し去るように立ち上がった私は、必死に自分を押し殺す。誰もいない廊下をひとりで歩く事など珍しいことではないというのに、何故か今だけは隣が寂しく感じた。

授業の終わりを知らせる鐘の音が城中に響き渡ると、静かだった廊下は生徒達の声や足音で騒がしくなり、雑音が耳に入ってくる。

友人と仲良く話す姿や、教科書を開き何か教え合っている姿など、いつも通りの光景を目にしながら歩き続けていると、視界に自然と3人組の姿が入ってきた。栗色の髪の少女と、赤毛の少年に挟まれて歩いているハリーの瞳は相変わらず緑色で、頭には自然とエバンスの顔が浮かび、夢の内容が流れ出す。

2人と話していたはずの彼は私に気づいたのか、少しだけ口を開いて見つめてきた。昨日の事を思い出しているのか、何か迷っているように見つめてくる彼から視線を逸らす。

「どうしたの？ハリー」

雑音に混じって聞こえてきたハーマイオニーの声を聞き流しながら、彼らとすれ違った私は逃げるように廊下を歩き続けた。

昼食の時間を迎えたホグワーツには、生徒達の足音や話し声で一気に騒がしくなり、私は生徒達の間をぶつからないように通り抜けて、

人気のない所を目指した。決して余計な所は見ないようにして、真っ直ぐに前だけを見る。そうすればもう余計なことも視界に入らない。だけど今回ばかりはそれが間違いだったらしい。

真っ直ぐに前だけを見て歩いてみると、黒い人影がこちらに歩いてきていることに気づいてしまった。こんな太陽が昇っている明るい時間帯に黒い人影なんて、顔を見なくても大体分かる。

脳裏に昨日見たエバンスの姿が過ぎった私は歩いてきた足が止まり、咄嗟に彼に背を向けた。

会わないつもりでいる時に限って、こういう気まづい時に限って、会うのをどうにかして欲しい。

頭は冷静なのだが、体は正直で緊張するように心臓の鼓動が速くなっている。

…早くこの場から離れないと。

そんなことを考えていると後ろからふわりと風が巻き起こり、髪の毛の先が宙を舞うと同時に微かに薬品の香りが香ってきた。

手の先に何か布のようなものが当たった気がして、俯いていた視線を少し上げれば丁度すぐ側を通り過ぎるセブスの横顔が視界に入ってくる。揺れる黒い髪の間隙から見える彼の長い睫毛に白い肌、綺麗な黒い瞳。

ほんの一瞬なはずだというのに、私にとっては何分も見ているように感じ、胸が高鳴ってセブス以外の人間が映らなくなる。

人間というのは、一度突き放されたら今まで以上に自分にとって大切な人が酷く美しく見えるらしい。嫌いになれば楽だというのに、忘れてしまえば楽なのに、彼の事で胸がいつぱいになる。

この経験は1度や2度じゃないが、それでも慣れるものではない。届かない、そう分かれば分かるほど、愛している人が自分にとって必要なものと痛いほど実感させられるのだ。

私の方を見向く気配もないセブスは、黒のローブの裾を靡かせながらスタスタと生徒達の間を歩いていく。

私がいいた事に気づいているかどうかも分からない彼の背中はどう

どんと小さくなっていき、私の脳裏には昨日見たセブルスの表情が過ぎつつきた。

「……………ごめんね……………セブルス……………」

私はまた貴方を苦しめた。

彼の温もりを求めるかのように昨日掴まれた腕を力強く握って、セブルスに背を向けた。

その日の夜も、次の日の夜も、眠りにつけばあの夢に魘されて、十分な睡眠を取れずままたつという間に3日過ぎていった。

日にちが経つごとに顔色は明らかに悪化していき、隈は酷くなつていく。

「……………どうしよう……………」

自分のひどい顔を鏡で眺めながら、隈をなぞってみるが消えてはくれない。人間にとって睡眠というのはやはり大切なものだという事を身に持って分かったが、何せ瞼を閉じて、眠りにつけたとしてもあの夢に魘されて飛び起きてしまう。

単なる夢だということは分かっているが、夢の中の私にとっては目の前に広がっている現実でどうすることも出来ない。

最近ではあの夢を避けるためか、体が勝手に眠る事を拒絶し、睡眠の時間が朝日が昇るまでただ待ち続けるという苦痛な時間になっていた。

それでも仕事を休むことは出来ない訳で、この顔色と隈をどうやって隠そうかと考えながら、試しにフードを被ってみる。影になつてまじに見えたもののフードを被り生活するのは、何か隠しているのが外から見て丸分かりだ。

私は隠すことを諦めて、気合いを入れるために少し強めに頬を叩き部屋を出た。

できるだけ人に会いたくなかったが、朝食を食べないで寝不足な体が1日持つ訳がない為、しようがなく大広間に向かった。

席に座るとパンをひとつ手に取って、一口サイズにちぎり、水で流し込む。視界の端にルーピンの姿が見え、何か言われたら面倒だと思つた私は温かいスープを無理矢理胃に入れる。

あまりに勢いがあつたからだろうか。隣に座っていた教師からチラチラと見られていたような気がしたが、私は気にせず立ち上がると逃げるように大広間を後にした。

午前中の授業が終わり、昼食の時間を迎えても私のお腹は空くことがなく、まだ胃の中に朝食べたパンが残っているような感覚がしてゐた。

お腹も空いていないし、大広間に行くのも面倒だ。

窓際の石造りのベンチに腰掛けると、体の力は抜けていき、自然とため息が出てくる。

元気良く廊下を走る生徒達が私の前を横切ると、ふわりと風が舞い上がった。

……元気だな……

そんな事を思いながら、目で追いかけると視界には友人と楽しそうに満面の笑みを浮かべる子供達の顔が入ってくる。

少し胸がちくりと痛み、ふと視線を逸らすが胸が痛んだ正体は消えるどころか膨らんでいるような気がした。

… 例のあの人が蘇ったらあの子供たちは一体どうなるのだろう。来年あの人が蘇ると分かっているように、あの人を倒す術を知っているように動くつもりはない。私はセブルスを救うために、彼に生きて欲しいからここにいます。

その為には未来が変わっては意味がない。私の強みはただ人より少し先のことを知っているということだけで、それを失ってはきつと私がここに意味なんて無くなってしまうだろう。それを失ったら、きつと私はセブルスを救えない。

頭ではそう言い聞かせても、自分を誤魔化しても罪悪感というものは消えることは無い。

… あの子供達の中で命を落とす子もいるかもしれない。

あの子達自身でなくとも、周りが死ぬかもしれない。友人が家族が殺されてしまうかもしれない。

そんなことがこうやって時折頭に浮かべば、もしもの事が今の私を否定するように頭の中でぐるぐる回りだす。

私が彼みたいに優しく強かったら、私が彼女みたいに皆に愛されていたら、きつと何か変わっていたのだろうか。

もし私ではなく、エバンズが未来を知ったら彼女は一体どうするのだろうか。もしセブルスが未来を知ったら、彼は命を懸けてあの人から彼女を守るのだろうか。

…もし… エバンズではなく… 私が死んでいたら… セブルスはきつと私の事など忘れてしまうのだろうか。最初から私の事なんて居なかったように。

『… 貴女は死んだ私にさえ勝つことは出来ない』

夢を何度も見たからだろうか。夢の中のエバンズが言った言葉が頭の中を駆け巡ってくる。

「… ええ… 本当ね…」

セブルスにとつては、私が死人なんじゃないかと思うぐらい、貴女しか見えていない。

小さく呟くと、自覚したくない思いが浮いてきて、色々なものが込み上げてくる。

『… ねえ、愛している人に見てくれないのはどんな気持ち？』

聞こえてきたエバンスの声は空耳なことは分かっているというのに、ふわりと彼女が使っていたシャンプーの香りがしたような気がした。

… 悲しくて… 苦しくて…

「… 辛い…」

とても辛い。体を鋭いナイフで切り刻まれるよりも痛くて、苦しくて、嫌になるほど、辛くて悲しくてしようがない。

… いっその事… このまま痛みで消えてしまえば楽なのに…

今だったら寝れそうな気がして、壁にもたれ掛かると意識がだんだんとぼんやりとしてきた。

「ヘルキャットさん」

そんな私の名前を呼ぶ声が聞こえてきて、下ろしかけていた瞼を上げるとルーナが私の腕を握っていた。

「… どうしたの？」

私のあげたネックレスをぶら下げている彼女の表情はいつも通りだったが、何かあったのかと思いつながら声に出す。

「こんな所で寝たら風邪ひいちゃうよ」

「… ついとうとうとしてしまって」

ルーナに微笑みかけながらできるだけ明るく答えると、彼女は私をじっと見つめながら話しかけてくる。

「… 寝れてないの？」

「少しね」

誤魔化しながら答えると、ルーナ何を思ったのか私の隣に座って手を握ってきた。

「あたしもね、ちっちゃい頃怖い夢を見るのが怖くて眠れなかったんだ。」

戸惑っている私を見たからなのか、説明するように後を続ける彼女の瞳には顔色の悪い私の顔が映っていた。

「そんな時にママが手を握って、一緒に寝てくれたの。そしたら全然怖い夢なんて見なくなったんだよ」

「…そう」

他の生徒の話し声で掻き消される程の私の小さな声が聞こえたのが、ルーナは笑いかけてくると私にもたれてきた。

「おやすみ、ヘルキャットさん」

どうやら彼女はこのまま私と寝るつもりらしく、顔を覗き込むとぎゅつと手を握ったまま瞼を閉じている。

10分ぐらい経っただろうか。私にもたれているルーナが寝たのか、急に全体重がかかったかのように重く感じ、体温もだんだん温かくなってきた。

一定のリズムで繰り返される呼吸と、彼女の心臓の鼓動がやけにはっきりと聞こえてくる。

「…ああ…眠れそう…」

ペンダントを握りしめた時よりも、自分が安心している事に気づいてしまえば、自然と体の力は抜けていき、瞼も重くなっていく。

「…いい夢が見れそう」

薄れゆく意識の中、私はそんな事を思いながら、ルーナの手を握り返した。

18 平穏な日々

肌寒く感じ、閉じていた瞼を開けると廊下を歩く生徒達の姿が目に入ってきて、横に視線を移すと彼女は相変わらず眠っていた。

どれぐらい寝ていたかは分からないが、どうやらまだお昼の時間は終わっていないらしい。

……そろそろ起こさないとな

ルーナは午後の授業もあるし、もしお昼を食べていなかったとしたら夕飯まで我慢することになる。私の経験上お昼を抜いての授業は辛いものだ。

私にもたれてぐっすりと眠っている彼女を起こそうと手を伸ばし、優しく名前を呼ぶとゆっくりと瞼を開けて、ぼんやりと遠くを見つめだした。

「お昼は食べたの？」

私の問いかけを聞いたルーナはまだ眠たいのか首を横に振りながら、目を擦っている。

「じゃあ遅めのお昼にしましょうか。」

もう殆どなさそうだが、パンぐらいは残っているだろう。

そんなことを考えながら、立ち上がると誰かに引つ張られ、振り向くと座っているルーナが私の服を握っていた。

「……怖い夢はみなかった？」

どうやら私の心配をしてくれているらしい。私は少し嬉しくなつて笑いかけながら頭を撫でる。

「貴女のお陰でぐっすりと眠れたわ。ありがとう、ルーナ」

安心したように表情を崩す彼女は子供らしくて、胸の奥が温かくなつたが、何も知らない彼女を見てると罪悪感が膨らんでいった。

「さあ、行きましょう。なくなっちゃおう」

ルーナを立たせて、ローブについた汚れを振り払っていると彼女はどこか嬉しそうな表情を浮かべていた。

「どうしたの？」

不思議に思い、問いかけてみればにっこりと笑っているルーナは思いもしなかった事を口にした。

「ヘルキヤットさん、あたしのお母さんみたい」

驚きで体が固まったが、いつもの彼女の冗談かと頭が処理して、私も少し笑いながらルーナの髪を整える。

「こんな大きい子を産んだ覚えはないわよ。ほら、行きましょう」

私の言葉を聞いたルーナはまだどこか嬉しそうで、大広間に向かっている途中も鼻歌を歌っていた。

きっとルーナのお陰なのだろう。その日の夜もまた次の日の夜もあの夢をみることはなくなり、ぐっすり眠れるようになっていた。

それに比例するかのように顔色もだんだんと回復していき、隈も消えていった。あんなになかった食欲も回復し、今朝もサラダとパン、そしてデザートとしっかりとした朝食をとった。

いつも通りに午前の授業が始まり、することがない私はベンチに腰掛けて、ぼんやりと遠くを眺めながら時間を潰していた。

しかしひとつだけ意外だったことがある。それはハリーがエバンのズの事を聞きにこなかったことだ。てっきり知りたがりの彼のことだから、付き纏つても聞き出そうとしてくると思っていたが意外にもそれはなく、今のところそんな様子も見せていない。

……まあボガートが自分の母に変身したら聞きたくても聞けないか……

相手の最も恐れているものに姿を変えるボガートが自分の母になっても、知りたいという好奇心より、知りたくなかった事を知ってしまうかもしれないという恐怖心の方が勝るのだろう。

それか私に悪いと思っているのか、私直接でなくても周りの人に聞

いているかもしれない。

…セブルスに聞くはずないから、可能性があるのはルーピンね：変なことを言っていないければいいが、そこら辺のことは変に気が回る彼は大丈夫だろう。

背筋を伸ばし、立ち上がると少し体を動かしてちゃんとペンダントを持っていくか確認した。

……一瞬だったな……

この過ごしやすい時も、本当に一瞬だった。もうすぐ訪れるイースター休暇が明ければ、ブラックが寮に忍び込む日もすぐに訪れる。そうすれば私は今までの立場に逆戻りだ。

そろそろ授業も終わる頃だろう。私は昼食まで時間を潰すため、図書館に向かった。

それからはとても平穩だった。何事もなく、何する訳でもない日々が過ぎるのはとても速い。イースター休暇まであつという間に過ぎていき、休暇が終わってしまったえば、すっかり季節は春になり、走ると少し汗が滲むほど暖かくなり、そのおかげか夜中に城中を見回るのも苦でなくなった。

授業がない日も廊下は一日中生徒達の声で賑わっていたが、夜になれば一気に静まり返り、いつも通り城の中を歩き回る。

壁に掛かっている絵画の人を起こさないように明かりを灯さずに歩いているせいで、暗くてあまりはつきりとは見えない。

そろそろ部屋に戻ろうかと思い、自室の方向に足を向かわせていると人の気配を感じ、目を凝らしてみればハリーを連れたルーピンがいた。

「こんばんは、レイラ。見回り中かい？」

にこやかな笑顔で話しかけてくる彼の隣にいるハリーは、何も言わ

ずにとだじつと見つめてくる。

「今終わった所よ。．．．とところでこんな夜中に生徒を連れ回すなんて教師のする事では無いと思うんだけど」

何故こんな夜中にハリーと歩いているのか不思議に思った私が声に出すと、ルーピンは苦笑いを浮かべて困ったように頭を掻く。

「別に私が連れ回している訳じゃないよ。だからそんな冷やかな目で見るのを止めてくれないか？」

別に冷やかな目で見ていたつもりは無いのだが、どうやら彼はそう感じたらしい。ルーピンから視線を落とすと、彼が何か持っている事に気づいた。畳まれている羊皮紙のようなものは、暗がりではつきりとは見えなかったが、私が思いつくのは忍びの地図しかない。ということは、セブルスと別れた後ということか。

「じゃあ、仕事頑張ってね。先生」

嫌味たつぷりに言いながら、隣を通り過ぎると後ろからルーピンの声が聞こえてきた。

「おやすみ、レイラ」

振り向けば、いつもと変わらず笑っているルーピンが明らかに私の返答を待っている姿が視界に入り、面倒な事を避けるために呟くように小さな声を出した。

「．．．おやすみ」

視線を逸らし、彼等に背を向けるとそのまま廊下を歩き進めていく。

「．．．．．良かった．．．」

1回大きく変わろうとしたせいもあり、不安はあったが私の知っている通りに進んでくれているようだ。

順調に進んでいることに安心したがすぐに別の不安が襲ってくる。

この方向に進んで、セブルスとばったり会うなんてことはないよね．．．

少し嫌な予感がしたが、どうやら私の気の所為だったらしく、セブルスに会うことなく部屋に戻る事が出来た。

それから淡々と時間だけが過ぎていき、生徒達が大興奮するクイ
ドイツ優勝戦を迎えた。

グリフィンドール対スリザリンということもあり、試合の数日前か
らお互いに睨み合い、いつも以上に衝突するのか、度々喧嘩している
姿が見られたが、学生時代に見ていた喧嘩程激しくなく、全て生半可
に思ってしまった。

生徒達はストレス発散をするように盛り上がるのだろうが、残念な
がら私はそうはいかない。ハリーを守るという仕事は現在も継続中
で、更には変わった事はないかどうかよく目を凝らして集中しなけれ
ばならないから楽しめるものじゃない。

観客席の一番後ろの端に座り、試合が始まるのを待っていると試合
の始まりを告げる笛の音が響き渡った。一斉に応援する歓声と、解説
の声がその場を盛り上げる。

時々箒に乗った選手が頭ギリギリを横切るものだからハラハラし
た。それ以外は見えていて楽しいものだが、それも余計な心配がなけれ
ばの話で私はどこか変わった所はないか集中しながら探し続ける。

「このゲス野郎！このカス、卑怯者！」

突然汚い言葉をマイク越しに叫ぶ声が入ってきて、マイクを片
手に興奮しているリー・ジョーダンに視線を移すと彼は指をさして何
か叫んでいる。

彼が指をさしている方を見ると、ドラコがハリーの箒の尾を握りし
めて、引っ張っている所だった。

四方八方から非難の声が飛び交う中、ドラコは特に気にしていない
様子で体制を整える。

ドラコだって、クイディチの選手に選ばれるぐらいなのだから普通
に箒に乗るのは上手いのだろう。ただ彼の場合、ハリーで雲隠れして
しまっているだけ。

.....
こんな真っ直ぐな子が人を殺せるわけがない

ハリーを目の敵にして、勝つことに必死になっているドラコを見て心からそう思った。こんなにも無邪気にただ目の前の勝利のために一生懸命になっている子供がいずれ家族を守る為に苦しむことになる。

人を殺すことなど、小心者な彼には到底出来る事じゃないし、更にはその相手が知っている人となると難しいだろう。

自分の命が危険に晒されていようが、ハリーを良い風には思っていないくても、彼はハリーをあの人に引き渡すような事はしないし、人を殺さない。

比べるまでもない。ドラコは私よりも何倍も綺麗な人間だ。少しばかり不器用で、頑固なだけでちゃんと話をすればきつと直ぐに友達もできるというのに、変な方向に歪んでしまった。止めてくれる人がいなかった。ただそれだけだ。

人を殺せないのは普通の事なのだろうか。私はセブルスを救うためだとはいえ、今まで傍にいてくれた家族をあつさり殺した。殺せてしまった。

ふと顔を上げると、丁度ハリーがあつかりとスニッチを手に取り、クイディチ競技場は爆発するんじゃないかと思うぐらいの歓声が響き渡った。

地面に足がついたハリーに仲間達は喜びを分かち合うように抱きついて、グリフィドル生達は、喜びのあまり観客席から乗り出している。

喜びを爆発をさせるハリーの笑顔が目に入ると、いつか見た3人に囲まれながら満面の笑みを浮かべるポッターの顔が自然と重なった。

「……本当に……そっくり……」

やっぱりポッターの血を受け継いでいるのもあるのだろうか。無意識に呟いてしまうほど、クイディッチで勝った時に見せていたポッターの表情と瓜二つだった。

何も知らず、無邪気に笑みを浮かべる緑の瞳を持ったハリーの笑顔を見ていると、あまりに残酷で恐怖を感じた。

試合が終わり、観戦していた生徒達がぞろぞろと帰る中、グリフィンドールの生徒達は興奮がまだ冷めていない様子で、凄い盛り上がりしている声が私の方まで聞こえてきた。それに比べ、負けてしまったスリザリンの生徒達は残念そうに肩を落として、騒ぐグリフィンドールの生徒を睨みつけている。ちよつとしたきっかけがあれば今にも喧嘩が勃発しそうだ。

観戦席から生徒達が少なくなった事を確認し、城に帰ろうと席を立ち、帰り道を歩いていると丁度競技場と繋がっている入り口から出てきた誰かとぶつかってしまつたらしく、カランという音が聞こえてきた。

「ああ……ごめんなさい。」

地面に転がっている箒を拾い上げ顔を上げ、まず目に入ってきたのは悔しそうな表情を浮かべているドラコの表情だった。彼は箒を落としたことにも気づいていないかのように、拳を握り締めたまま少し下を俯いて険しい表情を浮かべている。

「………これ、落としたわよ。」

再度話しかけながら差し出してみると、我に返つたように顔を上げ、一瞬だけ間拔けな表情を見せた彼は、私を見た瞬間直ぐに不機嫌な顔をして私から箒を奪い取つた。

彼から嫌われるような事をしたかは分からないが、どうやら目の前にいるドラコはそんなに私を良くは思っていないらしい。

「貴女と父上は知り合いなのですよね？」

突然口を開き問いかけてきたドラコの言葉遣いは、一応私が年上な事を使っているのか前話した時よりも上品にそして丁寧だった。

「……ええ、そうね。「嘲笑っているんですよ」

それがどうかしたのか訳を聞こうとしたというのに、私の言葉に被せるように話す彼は睨んできながらペラペラと言葉を並べていく。

「貴女もあんな奴に勝てない僕を馬鹿にしているでしょ」

何か勘違いしているのか、何を思ったのか知らないが話を続けるドラコが拳を作つた手を力いっぱい握り締めているのは、震えている

彼の肩を見てすぐに分かった。

「もううんざりだ。」

私から視線を逸らし呟いた言葉はきつと私に向けた言葉ではないのだろう。

引き止める気などなかったが、あんなに寂しそうな顔をされたら、いくら私でも放っておける訳がなく、私の横を通り過ぎようとする彼の腕を握りしめて引き止めてしまった。

引き止められると思っていなかったのか、少し驚いたような表情を浮かべる彼だったが、直ぐに険しい表情に変わった。

何も考えずに引き止めてしまった私は、自分が今彼に伝えたいことを考えてみると、最初に思いついたのはドラコがハーマイオニーに対してあの言葉を言う姿だった。

この際去年からここに来たかったなんて事を思いながら、さつきから何か言っている彼を見つめて口を開いた。

「はな「そんなこと思ってないわよ。」

ドラコの話の途中で遮ると、私の言葉を聞いた彼は機嫌を悪くしたのか、鋭い視線で睨んでくると冷たい言葉を吐き捨てる。

「同情なんて求めていない。」

「…… 同情…… かは分からないけど、少なくとも貴方を馬鹿にした事も嘲笑ったこともない。」

私を睨んでくる彼は耳を傾けるように口を閉じた。

「貴方はそのままです。無理に変わる必要なんてない。」

私が頭に手を置いたのが想定外だったのか、ドラコは驚いたような顔をしてたが、気にすることなく頭を優しく撫でた。

「…… また悪態つきたくなったら来なさい。私でよければ、いつでも聞くわよ。」

言葉を残してその場を離れると、城に向かって足を向かわせた。

優勝したグリフィンドールの生徒達がお祭り騒ぎをしているだろう時に、私は少し雲がかかっている空を眺めながら、これから起こるであろう出来事について考えていた。

私の記憶が間違ひなければ、今夜ブラックが寮の中に忍び込んで、ロンが彼の姿を見ることになる。

もし本当にブラックが忍び込んだら、その出来事は直ぐにホグワーツ中に広まるだろう。そうなれば、あの消えかかっていた噂もまた確証の近いものとして広まって、休んでいた頃に元通りという訳だ。

……… やつと… 過ぎしやすくなったと思っただのにな…

今回ばかりは私が疑われるのが必然だろう。事が起こるのは生徒達が寝静まった真夜中、つまり私が誰の目にも見られずに自由に動き回っている時間帯な訳で、きつと生徒達も教師達も直ぐに私に疑いの目をかけてくる。

とは言っても誰から疑われようが、流れを変えよう動く気はさらさららない。

……… 何事もなく進んでくれたら… それでいい

そんな事を思いながら見上げると、夜も深くなってきた空に怪しげな雲が浮かんでいた。

夜空に浮かんでいる月を隠す雲のせいで、今夜は月明かりが差し込まず、廊下もいつもより暗い。

しようがなく明かりを灯し、見回っていると天井からひよこりと顔を出してニタリと笑っているピーブズと遭遇してしまった。

「やあ、こんな夜更けまでご苦労さま。嫌われ者さん」

こんな奴と遭遇してしまうなんて今日はない。構わなければすぐに飽きて他に行くだろうと、無視を決め込んでいても今日の彼は物凄くしつこかった。

「きつと今日はお前にとって良い記念日になるよお〜ヒヒヒッ」

良い……記念日？

私はピーブズが言った言葉が引っかけり足を止めると、彼は面白そうに口角を上げ、2、3回目の前で回転する。

「どういう意味？」

「さあ〜どういう意味だろうねえ〜」

私の問いかけに答えてくれるもなく、ニヤニヤと笑いながら話すピーブズを見ていると無性に腹が立ってきた。

聞いた私が馬鹿だった。本当に彼と関わって良かった事なんて何一つない。

そう思いながらまた歩きだそうとすると、横から愉快そうなピーブズの声が聞こえてくる。

「……これは面白くなりそうだ」

振り返ってみると、彼は私ではなく奥の方を見ていて、いつも以上に口角が上がっていた。ピーブズが見ている方から足音が聞こえるような気がした私は後ろを振り向いてみると、明らかに寝巻き姿のマクゴナガルが私に近づいてくる。

「少し、校長室までいいですか？」

「……………ええ……」

何故校長室に連れていかれるのは大体予想がつく。ちらりとピーブズに視線を移すと、さっきまでそこにいたはずなのにどこにもいなかった。

マクゴナガルに連れられ、螺旋階段を上ると、普段閉まっている扉は開いており、中に入らなくとも誰がいるのか見えてしまった。

ダンブルドアとセブルスの姿が見えた瞬間、一気に入る気力が失せてしまい、溜息をつきたくなる。

「こんな夜中にすまんの。」

何とか足を動かし、中に入ると椅子に座っていたダンブルドアが話しかけてきた。

「いえ、お気になさらず……………それで何の用でしょうか」

校長室の扉が閉まる音を聞きながら問いかけると、目の前に腰掛け
ている彼は真剣な表情を浮かべながら口を開いた。

「…少し話があつての。ついさっきのことじゃが、またもやシリウ
ス・ブラックが城の中に忍び込んだようなのじゃ。」

勿論知っていたが、私は知らない振りをするために表情を歪ませ
る。

「…すみません、少しばかり理解が出来ません」

「グリフィン・ドール寮に、ほんのつい先程の事じゃ。姿を見たとい
う生徒まで出ておる」

声を出せばすぐにダンブルドアの声が返ってきて、校長室は一気に
静まり返った。

「寮に？合言葉があるはずでしょう」

「合言葉を書き写していた生徒がいたんです。その生徒曰く無くした
と」

私の疑問に答えるマクゴナガルの声はとてもはつきりしていて、分
かりやすく説明してくるが、私からしたらそんなことより今この状況
で頭がいっぱいだった。ダンブルドアにマクゴナガル、そしてセブル
スとなると、私が怪しまれている事はほぼ間違いない。

「…そうですか…分かりました。すみません、私の失態です。一
度じゃなく二度まで…しかしひとついいでしょうか？」

変わることはないダンブルドアの顔色を伺って、静かに声に出した。
「…あなた方はそれを盗んだのが私だとお考えなのですね？」

私は後ろにいるマクゴナガルと、斜め前にいるセブルスにそれぞれ
目で追うと溜息をつきながら口を開いた。

「…なるほど…私を呼び出したのはシリウス・ブラックを手引
きしていると疑われているからですか…これでも一応魔法省
の人間なんですけどね。」

「いや、疑っておらんよ。ハリーを命懸けで救ってくれた君がブラッ
クを手引きするとは考えられんからの。」

私の言葉を否定するダンブルドアは、いつもの調子で後を続けてい
く。

「君を呼び出したのは、お主じやったらブラックが忍び込んだ方法も大体分かっているんじゃないかと思つての。」

そのどろが疑つていないというのだろう。誰がどう聞いても疑っているではないか。

「知りませんよ。分かっていたら私も苦勞はしてないんですから。…… 仮にこの城の中に手引きしている者がいるとしたら、きっとそれはブラックが信用している人だと考えています。」

上手く私から話を逸れるように話すと、視界の端にいるセブルスの表情が少し険しくなっていく。もう今は何を言つても怪しまれるような気がする。

「…………… あの子が死のうが生きようが私には全く関係ないことぐらい貴方が一番ご存知でしょう？ ダンブルドア先生」

殆ど口を開かずに声を出すと、彼は何故か満足したような表情を浮かべて、少し明るい声を出した。

「十分じゃ。すまんかったの。真夜中に呼び出してしまつて」

何を基準に判断したのか分からないが、ダンブルドアの表情は明るく、にっこりと笑いかけてきた。何か言いたげそうなのはセブルスだけではないらしく、後ろにいたはずのマクゴナガルも前に乗り出している。

「ハリーのことはもう心配はいらん。レイラが守ってくれるというのなら安心じゃ」

守るなど一言も言っていないというのに、ダンブルドアは断言するよりに言ってくる。

「仕事ですからね。」

後付けをするように口を挟むと、それでも彼は満足そうな表情を崩すどころか、嬉しそうだ。

「… あの、戻っていいですか」

そう問いかけてみるとダンブルドアは、にっこりと笑つたまま頷く。

「おやすみ、いい夢を」

「…………… おやすみなさい」

小さく声に出しながら校長室を出ようとする、明らかに私を睨むように見てくるセブルスと目が合った。

…… 凄い…… 怪しんでる……

いつもと表情は変わらないものの、真つ黒な彼の瞳に映る自分の顔を見て、私は視線を逸らすと校長室を後にした。

19 噂と嘘

ブラックが寮に忍び込んだ事があつという間に広まっていくと、それと同時に消えかかっていた私に対する噂は、また確証の近いものとして広がっていた。

変に避けてくる生徒達や、教師達の痛い視線は居心地の良いものではないが、ここまで分かりやすかったら逆に清々しく感じる。

私に近づく者など居ないと言いたい所だが、ただ1人前と変わらさず話しかけてくる生徒がいた。それは勿論ルーナで、周りに何を思われようが気にしない彼女は噂が流れようが何だろうが、よく話しかけてくる。

そんな彼女を見て、私がブラックの手引きをしていると思っている生徒達が何も思うわけがない。彼女を変人扱いしだしたのは始まったことじゃないが、ただ困ったことに、ルーナもグルなのではないか、そんな噂をつい最近小耳挟んでしまった。

それから一度ルーナを避けてみたが、彼女はそんなこと気にすることなく私を探し回っては、見つけて話しかけてきた。

………これ以上……ルーナを巻き込む訳にはいかない

そう思いながら、今前に座っているルーナに視線を移すと、焼きたてのパンを食べていた彼女は何か勘違いしたのか、一口サイズにちぎって私の口元に手を伸ばしてくる。

「あーん」

言われるがまま口を開けると、一口サイズのパンが入ってきて、ルーナは満足そうな表情を浮かべていた。

「美味しい?」

「……美味しいよ」

口元を隠しながら答えれば、彼女の口元は嬉しそうに綻ばせ、目を細める。幸せそうに笑うルーナを見ると、嬉しいことも何も無い

というのに胸がじんわりと温かくなった気がした。

生徒達も寝静まり、静寂が訪れた城の中を暇つぶしの為の本を手に持ちながら歩く私は、誰も腰掛けていない石造りのベンチに腰掛ける。

本を読むぐらいなら部屋に戻って、ゆっくりとした方がいいということは分かっているが、星空を眺めながら、月明かりで本を読むというのも何か特別なことをしているように思えて、気分も上がるものだ。

それに、こんなに月が綺麗な夜に部屋に籠るのは勿体ないような気がする。

夜空を見上げてみれば、今夜の月は何もかも見透かしてしまうのではないかと思うほど煌々と輝いて、月明かりだけで文字が読めるほどだった。

本に視線を移した私は、ページをめくっては文字を目で追いかける。

ただ夜中に本を読んでいるだけ。ただそれだけなのに、時間の進みがゆっくりに感じ、心が穏やかになるような気がした。

……このまま…朝が来なければいいのに…

叶わない願いを心にしまい込みながら、ページを捲って、文字を読み進めた。

読み始めてどれほど時間が経ったかは分からないが、10ページほど読み終わった頃、突然人の気配がして私は無意識に本から顔を上げ

た。

周りを見回してみるが、勿論私以外誰も居らず、廊下の先はいつもと変わらず闇が続いている。

気の所為だと思いたいのだが、確かに今この時も気配がする。

……敏感になりすぎか……

そう思いながら、本に視線を移そうとすると遠くから足音が聞こえてきた。それは昼間だったら、他の音に掻き消されるほどの小さい音だったが、物音ひとつしもない今の廊下には響き渡り、嫌でも耳に入ってくる。

遠ざかるどころか、近づいてくるその足音を聞く私の心臓は何故か緊張に鼓動を速くしていき、私は真つ暗な闇が続いている廊下の先を遠目で眺めていた。

人影のようなものがぼんやりと闇に浮かぶと、一定の速さで歩き、今にでも溶けて消えてしまいそうな彼の不健康な肌が月明かりに照らされた。

白すぎる顔色には、少しの隈も目立ってしまうようで、いつもの何倍も不機嫌そうに眉間に皺を作っているセブルスを見ると、この姿を見た生徒達がいつも以上に怖がる姿が簡単に想像出来る。

……きつと……あの隈も、あんな表情をさせてるのも私のせいなのよね……

そんな思いが浮かんでくると、私の口は無意識に開き、彼に声を掛けていた。

「どこに行くの？こんな夜中に」

私の声が届いたのか足をゆつくりと止め、こちらを見つめてくるセブルスは何も言ってくれない。

昼間のように生徒達の声も、足音も、物音ひとつさえ聞こえない真夜中に二人つきりだということを思い出し、私は一気に後悔の念が襲ってくる。

セブルスと二人つきりで話した時を思い返してみれば入院していた時つきりだ。息がしずらいこの張り詰める空気はやっぱり何回経験しても慣れるものじゃない。

「……… 顔色も良くないし、隈も出来てるわよ」

重い空気に耐えきれず出た言葉は、触れてはいけない事で、私達以外誰もいない廊下にはよく響いた自分の声を聞きながら、私はまた後悔をする。

「…… 誰のせいだと思ってる」

聞こえてきた彼の言葉を聞いた私は数秒前の自分を恨みながら、誤魔化す為に本を閉じながら気持ちを紛らわした。

「……… 誰なのかしらね。私にはさっぱり」

謝罪の言葉ひとつ言えない私は、ふざけたような事を言いながら立ち上がり、その場から逃げ出そうと

その場を立ち去ろうと背を向けるが、後ろから近づいてくる彼の気配を感じて、咄嗟に振り返ってしまった。

すぐ後ろにいたセブルスと目が合った瞬間、鋭い眼差しで睨むように見てくる彼の瞳が温もりひとつ感じられず、途端に悲しくなる。

「……… ああ…… またその目……」

自分自身で招いたことが今この状況に繋がっているというのに、私を疑うセブルスの瞳を見ていると胸がぎゅゅと締め付けられ、ひとりで勝手に傷つく。

腕を力強く掴まれてもほぼ放心状態だった私は、気づけばそのまま壁に押し付けられていた。

あまりに一瞬の出来事で、セブルスと壁に挟まれていた私の頭は何が起こったのか理解出来ずにぐるぐると回る。

「……… お前がどこで何をしようが勝手だが、我輩がお前の身勝手な行動で振り回されることにいつまでも我慢できると思ってるのか」
あまりに近すぎる距離に心臓が爆発しそうになっていく私の心情を知るはずがないセブルスは、表情ひとつ変えずに淡々と話してくる。

「……… 残念ながら身に覚えがないわ。……… とりあえず離してくれないかしら？」

「いつまで、そうやって逃げ続けるつもりだ」

聞こえてきた彼の言葉が冷たく感じ、あんなに温かく感じていた体

はひんやりと冷えた気がした。

話を逸らそうと少し口を開いたが、まるで喉で何かが引っかかっているかのよう、声を出そうとしても何故か外には出てくれない。

……またこれだ……

こういう時に限って、私は自分自身を守るかのように途端に言葉を失う。そのくせ、言っただけいけないことは簡単に口から滑り落ちる。一度吐き出してしまった言葉は取り消せないというのに、私は何度も過ちを犯してきた。

……本当……つくづく自分が嫌になる……

「……都合が悪くとなると、話さなくなるのは今も健在か」

溜息混じりに聞こえてきたセブルスの呟くような声は、はつきりと耳に入ってきて、私はますます声が出なくなってしまう。

何かを話してくれた方が楽なのに、途端に何も話さなくなった彼の瞳が見れずに、視線をずらして閉じたままの口を開くことも出来ず、どうしようかと頭で悩んでいると、どんよりと重い空気には似つかない呑気な声が聞こえてきた。

「おや、お邪魔じゃったかの」

いつからそこにいたのか分からないが、ニツコリと笑っているダンブルドアの姿に視線を移すと、この状況から解放される安堵感が襲ってくる。

「……一体こんな夜中にどうなされたのですか」

さつきまで握られていた腕は解放され、私から少し距離を取りながら話すセブルスの横顔を見ると、どこか不機嫌そうな表情を浮かべていた。

「今夜の月は美しいので。眺めながら散歩でもしとるところじゃ。」

普段と変わらず笑顔を浮かべながら、セブルスに話しているダンブルドアを、今回ばかりは来てくれた事に有難く感じたが、彼は笑えない冗談を言ってくる。

「どうかの？皆で散歩するのは」

「いえ、遠慮させていただきます」

この状況から3人で時間を過ごすなど、気まづくてしょうがない。提案してきたダンブルドアにお断りの言葉を返すと、彼はとても残念そうな表情を浮かべた。

「…残念じゃの。…3人でゆつくりと話せるかと思ったのじやが」

「…私は結構ですので、どうぞお二人でお話ください。きっとこの月夜でしたら、お茶も美味しいですよ」

「…こんな月夜にセブルスとゆつくりとお茶が出来たら、どんなに楽しいのだろう。」

頭に自然と浮かんできた、そんな小さな幸せな光景をかき消しながら、自分を誤魔化すように声を外に出した。

「…では、ごゆつくり」

逃げるように2人に背を向けると、後ろから私を呼び止める声が聞こえてきた。

「レイラ」

それは勿論セブルスであるはずがなく、もし彼に呼び止められいたらなんて事を考えている私の気持ちなど知らないダンブルドアは、優しく微笑んでいた。

「おやすみ…いい夢を」

「…おやすみなさい」

できるだけ笑いかけながら答えると、私は背を向けそのまま部屋へと足を進める。

ダンブルドアが私を信用しているのかどうかさがさっぱり分からないう。そんな様子を見せるどころか、私がハリーを守るなんて事を断言までしている。

しかし彼にはセブルスもついているわけで、私が死喰い人だということを知っているはずだ。

セブルスが報せてない訳が無いし、そうなると思われ人だということとを分かりきった上で、野放しにしていることになる。

「…分からないな…」

どんなに考えても、ダンブルドアの考えていることがさっぱり分か

らない。

…………… それでも私はやり遂げないといけない。

世界中の人間を敵に回そうが、偉大な魔法使いと対立しようが、愛している人から憎まれようが、私は私のやるべき事をしないといけない。

今度こそは彼が幸せになるように、今度こそは彼を救えるように、彼の笑顔を見るために。

「…………… 今度こそは…」

誓うように呟き、本を握りしめるとまた人の気配を感じた。

反射的に振り返ってみるが、勿論視線の先には2人の姿もなく、私ひとりだけだ。

さつきから人の気配がするのに、誰も居ない。私の気の所為なのか…………… それとも……………

可能性を考える頭にある言葉が浮かぶと、ある人の名前が連想される。

…………… 透明マント…………… ハリー……………

咄嗟に手を伸ばしてみるものの、私の手は何も掴めず宙を切っただけで、微かに感じていた人の気配も無くなっていた。

昼食の時間を迎えた大広間は、生徒達の賑やかな声で溢れかえり、長机には昼食にしては豪華な食事が並べられている。

ルーナに連れられるようにレイブンクローの端の方の席に腰掛けると、当たり前前の事のように私の前に座る彼女は、皿にパイや揚げ物、サラダを取り分けて幸せそうに頬張っている。

生徒達は私達を避けるように、すぐ隣に座ることはせず、3人分ほ

ど間隔を空けて腰掛けていた。

誰も私には興味はないと言いたい所だが、視界の端には時折こちらを見てくる生徒達の姿や、ルーナの後ろに座り、彼女を怪訝そうに見る生徒達は嫌でも視界に入ってしまう。時間が経つにつれ、噂は消えるどころかどんどん大きくなっていくらしい。

かぼちやジュースを飲むルーナは、そんなこと気にしていないように、パイを食べている。

「…………… もう…………… これ以上…………… 彼女を巻き込むことは出来ない
い

私と一緒にいて、巻き込まれるのならやることはただひとつ。ルーナが私から離れてくれないのなら、彼女を突き放してしまえばいい。

「…………… どうしたの？ヘルキャットさん。食べないの？」

私が何も手をつけていないことに気づいたルーナは、不思議に私の前に置いている真つ白いお皿と私を交互に見て問いかけてくる。

私は少し震える手を握りしめて、真剣な面持ちで彼女を見つめると、ルーナは何か悟ったようにフォークを置いた。

「…………… ルーナ…………… もう止めにしましょう。」

私の言葉を聞いた彼女は意味が分からないのか、頭を少し傾げて、質問してくる。

「どういう意味？」

「…………… 疲れたのよ。貴女と一緒に居ると。」

「あたしは疲れないよ。」

冷たく言っただつもりだったが、ルーナには効果がなく、気にする素振りも見せない。

「…………… 子守りは懲り懲りなの」

「ヘルキャットさんはあたしのお母さんじゃないから大丈夫だよ」

「貴女が良くても私が良くない」

少し声を大きくすると、ルーナの体が少し固まったのが分かった。

「…………… 気にしてるの？あたしは大丈夫「貴女の心配なんてしてないわよ」

途中で遮ると、流石の彼女も表情を少し崩す。

「…… やだよ。あんたが何を言おうがあたしは離れない」

「……… そういうのが迷惑だつて言ってるの」

少し溜息をつきながら、目を逸らさずに後を続ける。

……… 後……… ひと押し………

「友達でもないのに、一緒にいるなんておかしな話じゃない?」おかしくないよ。友達じゃなくても、少なくともヘルキャットさんは赤の他人じゃないもん」

さつきと比べると、私の言葉を訂正してくるルーナの表情どこか必死だった。

「あたしは誰が何て言おうとあんたが好きだよ。沢山話を聞いてくれて、頭を撫でてくれるヘルキャットさんが「私は何とも思っていない」冷たく言い放つと、彼女は口を閉じてぎゅつと結ぶ。そんなルーナから視線を逸らし、立ち上がり見下ろすと彼女は何か言いたげだった。

「私は貴女が思っているような人間じゃない。」

……… きつと私はルーナの傍にいてはいけない

冷たく言い捨てると、大広間を後にする私は後ろを振り向くことなど出来なかった。

後ろからルーナが呼び止める声がある訳がないというのに、私の足は何か期待しているように歩みを緩める。彼女だったら、呼び止めてくれると期待していたのだろうか。

……… 自分から突き放しておいて……… なんて自分勝手な人間なんだろう………

廊下を独りである事など今まで通りだというのに、昼間に廊下を独りで歩いていることが、寂しく感じた。

20 約束

いつも通り、生徒達にぶつからないように廊下を歩く私は、さつきから感じる気配に溜息をつく。

数日まで、何事も無かったというのに何故、後を付けられているのだろう。

最初は気の所為だと思っていたのだが、一定の距離を保ちながらずっと聞こえてくる足音は止むどころか、近づく機会を伺っているように聞こえていた。

……… ハリー達か………

足音の正体は何となく想像が出来るが、もし本当に今後ろに居るのが彼だったら、この前感じた気配はハリーである可能性が高くなる。

……… 振り向くべきか否か………

どうしようかと悩んでいると、丸めている羊皮紙と本を持ったルーピンが正面から歩いてくる姿が視界に入ってきた。

「やあ、レイラ」

声を掛けてくる彼は、少し元気が無いのか声も覇気がなく、顔色も少し悪い。

「……… ほら、落ちたわよ」

ルーピンが落とした羊皮紙を拾い、渡すと彼はお礼を言いながら受け取る。

「……… 隈が出来る前にお勧めするわ」

いつもより元気がない彼にそう言葉を続けると、困ったような笑みを浮かべて声に出す。

「……… そうだね。今日は少し早めに寝ることにするよ……… それから」

急に彼の声が小さくなり耳を澄ませると、私だけに聞こえるような小さな声で後を続けてくる。

「……… どうやら最近生徒から付けられているんだけど、君は訳を知っ

「ているかい？」

「…… さあ…… 熱狂的な貴方のファンとかじゃない？」

「何故そんな相談をされるのか分からず、適当に答えるとルーピンは少し笑いながら答える。」

「…… そうだと嬉しいんだけどね。」

「それで、何でそんなことを私に聞いてくるの？」

「疑問に思い彼に問いかけると、ルーピンは羊皮紙を落とさないように持ち直しながら口を開いた。」

「…… ほら、君に凄いいている…… ルーナのこと？」

「そう、彼女がここ最近、ずっと後を付いてくるものだから理由を聞こうと思っても話しかける前に逃げてしまうんだ…… 仲のいい君なら何か知ってるんじゃないかと思っただけ…… 私の気にしすぎかな……」

まさかルーナの名前が出てくるとは、思っていなかった。勿論私
が、彼女がルーピンの後を付ける理由など知る訳が無い。

「…… そう…… 機会があつたら聞いてみるわ」

「ありがとう、そうだ授業の分からない所があるのなら遠慮せずに聞きにおいでって伝えてくれないか？」

「…… 分かったわ。伝えておく」

伝えられるはずがないと言うのに、私が無責任引き受けている事など知らないルーピンは、嬉しそうにお礼を言ってくる。彼から正面に視線を移すと、生徒達に紛れてこちらを見ているルーナが自然と視界に入ってきた。

…… ルーナ……

胸元に何かを握りしめながらこちらを見つめてくる彼女と確かに目が合ってしまった。足は自然と止まってしまった。

動くこともせずに呆然と先にいるルーナを見つめ続けていると、後ろからルーピンのハリーを呼ぶ声が入ってきて、ふと我に返る。

後ろを振り返ってみれば、ハリーと話すルーピンとロン、ハーマイオニーの姿があり、自然と溜息が出てきた。

…… やっぱり……

ルーピンが他の2人と話している間、まるで私を見失わないように見てくるハリーは明らかに私を睨んでいる。

相変わらずの疑われようにまた溜息が出そうになった私は視線を逸らし、ルーナに視線を戻すがさつきまで立っていた場所に彼女の姿はなく、ブロンドの髪を揺らしながら私から遠ざかっていく小さな背中が見えた。

小さくなっていく背中を追いかける事は出来ない私は、彼女の背中を眺めるしかない。

ルーナの姿が生徒達の波に吞まれ、見えなくなった時には勿論寂しい気持ちもあったが、私は心から安心した。

……良かった……

これでルーナがこれ以上巻き込まれる事はない。

学期末の試験が近づいているからなのか、最近では廊下を歩いていると、教科書を開き、友達と勉強している生徒達の姿が見られるようになった。

皆、出された課題に追われているのだろう。

試験前の課題の量は、異常なほど多い。私もあの頃は必死になって終わらせたものだ。

夕飯も終わり、生徒達が寮に戻る時間帯はいつもだと騒がしい声が聞こえてくるのだが、流石に試験前だと課題や試験勉強もあるからか、憂鬱な生徒が多いらしい。

普段より覇気のない声に混じって溜息のようなものも聞こえ、寮に戻る生徒達の足取りもどこか重たそうだ。

……曇りか……

そんな生徒達の憂鬱が伝染したのか、昼間あんなに晴れていた空も分厚い雲がかかっている。

生徒達の人波から抜け出し、人気のない廊下をひとり歩いていると、後ろから近寄ってくる足音が聞こえてきた。

足を止め、振り返ってみれば、そこに居たのはルーナではなくハリーで、緑色の瞳に映る自分を見つめる。

「……何か用かしら？」

走ったせいで乱れた息を整えながら話そうと、口を開いたハリーの声はよく響いた。

「……貴女は……ブラックがホグワーツに忍び込んだ方法を知っているんじゃないですか？」

分厚い雲から雨が降り出したらしく、外から雨が降る音と湿気の匂いが鼻を触る。

「……二度もブラックに侵入されても、貴女は慌てたり焦るどころか、誰よりも落ち着いていた。侵入されたというのに、夜中に本を読む余裕だってある。」

窓ガラスを打ち付ける雨は激しくなっていくばかりで、外の景色もぼやけて見えるほどだった。

「……そう……やっぱりあの時居たのは貴方だったのね」

ハリーの言葉を聞いて、呟くと、彼は気にすることなく後を続けていく。

「……皆が寝静まった夜中に、自由に動き回れる貴女なら、侵入が出来そうな所を探す余裕は十分にあった筈だ。魔法省の人間なら、魔法省の支配下にあるディメンターをどうにかすることぐらい簡単な事なんじゃないんですか？」

「……それで……貴方は何が言いたいの？」

私の問いかけに拳を作った彼は、私を見つめながらゆっくりと声に出した。

「……貴女は何かしらブラックと関係している」

静まり返るその場には雨が降り続ける音が響くだけで、張り詰めた空気が流れる。

「…………… そうなると… 貴方は今自分を殺そうとしている人間とふたりつきりだということになるけど…………… 自殺でもしに来たのかしら？」

遠くで雷が落ちたのか、ゴロゴロという低い音が聞こえてきて、気づけば真夜中だと思えるほど辺りは暗く、ハリーの顔もよく見えな

い。「…………… ボガートを母に変身させるほど、僕の母を知っている貴女が、両親の死に無関係だなんて言わせない。何かしら関わって、知っている筈だ。」

小さな声だと掻き消される程の雨音を聞きながら、ハリーを見つめる私は口を開いて、ゆつくりと声に出す。

「話はそれだけ？」

私の言葉が思いがけないものだったのか、彼は少し驚いたような表情を浮かべると、直ぐに険しい表情に戻した。

ハリーに背を向け、立ち去ろうとするが彼は許してくれる訳がなく、呼び止める声が後ろから聞こえてくる。

「待て！」

ゆつくりと肩越しに後ろを振り返ってみれば、私はどうやらハリーに杖を向けられているらしい。

…………… まさか… 彼は自分ひとりで太刀打ち出来るとでも思っているのだろうか。

驚きの方が勝って、少し体が止まったが負ける気がしない私は彼と向き直るとゆつくりと口を開いた。

「…………… 貴女が今私に杖を向けているのは、両親の為？それとも貴方自身の正義の為かしら？」

廊下に響く私の声を聞く彼が杖を握りしめる手の力を強めたのが視界に入ってくる。

「…………… 貴方は一体その正義で、何人もの人を殺すつもり？」

近くで雷が落ちたのか、ピカリと一瞬の光が走ると、地響きがするほどの大きな音が轟く。

あまりに大きな音に、ハリーも少し驚いたのか肩を震わせて、一瞬窓の外を見ようとして、私は咄嗟に彼の名前を声に出していた。

「ハリー」

私が突然名前を呼んだからだろう。私の方を見た彼は驚きと戸惑いの表情を浮かべている。

「私を疑っているというのなら、目を逸らしてはいけないわよ。相手は貴方を殺そうと一瞬の隙を狙っているんだから。」

周りで友人が死のうが、何だろうが、相手から目を離すことだけはしてはいけない。」

何故そんなことを彼に言っているのか、私自身も分からないが、ただ口が勝手に動いた。

「……それから……一度杖を向けたら、覚悟を決めなさい。一瞬の躊躇が死に繋がる。」

私の言葉に声も出ないのか、杖を持つハリーは呼吸を繰り返すだけで、呪文も何も唱えようとはしない。

「……人間は……簡単に死んでしまうものよ……」

絞り出すように言い、背を向け、立ち去ろうとすると少し震えた彼の声が聞こえてきた。

「……貴女は……人を……殺したことがあるんですか……」

窓に激しく打ち付ける雨音と、荒々しく吹き荒れている風音を聞く私の頭にはいつか見た、冷たくなった人の顔が浮かび上がり、歩みを緩める。

少し口を開き、見開いたままの光のない瞳から乾いた頬に流れる最後の涙。

だんだんと青白く、そして冷たくなっていく体。

床に広がっていく、生々しい赤黒い血。

鼻にこびりついた鉄の血の匂い。

まるで昨日のこのように鮮明に頭に過ぎった私は一呼吸おくと、声に出した。

「…… さあ…… どうかしら……」

私は振り向くこともせず、すっかり暗くなった廊下を歩き進める。

聞こえたのかどうか、彼がどんな表情をしていたのかも分からないが、私はとにかく頭に鮮明に浮かんでくる映像を誤魔化すために、歩みを少し速めた。

時間はあっという間に過ぎ去っていき、長い試験が終わってしまえば週末を迎えた。勉強から解放された生徒達は、今までのストレスを発散するように普段以上に騒がしい。

生徒達は悠長に過ごせるかも知れないが、私はそうはいかない。私の記憶が正しければ、今日ぐらいには、ブラックとハリーが対面するはずだ。

ここまで全く変わっていないければ気を軽くして過ごせるが、何せ一度大きく変わっている。

気を張らないと……

私はペンダントを握って、生徒達を避けながら、歩き続けた。

夕暮れ時まではとりあえず時間を潰さないといけず、適当に歩いていると、大臣と大きな鎌を持った男を連れているダンブルドアとぼつたりと会ってしまった。

大臣の姿を見た瞬間、今日が処刑日だということはほぼ確定だと確信しながら、社交辞令の言葉を並べる。

「お久しぶりです。大臣。」

「おおー、君があの子を身を呈して守ったということは聞いたよ。よくやった。流石私が見込んだだけある。」

あれはブラックではなく、貴方達魔法省が送ったディメンターのせいだと言いたかったが、ぐつと堪えて笑みを継ぐろつた。

「私は当然のことをしたまでです。」

隣でにこにここと笑っているダンブルドアを視界の端に入れながら答えると、横から声が聞こえてきた。

「では、ファッジそろそろ行くとしよう。あと少し歩かんといかんからの。日が暮れてしまう。」

冗談ぽく言うダンブルドアの言葉を適当に聞き流して、私は小さく失礼しますとだけ言って2人の横を通り過ぎると、後ろにいた男が私の方をじつと見てきた。

面識がない私は視線を逸らし、適当に時間を潰すにはぴつたりの図書館に向かった。

時間を潰した私は図書館から出ると、外は日が沈み、廊下にはオレンジ色の光が差し込んでいた。

……さて……ここから難しい所だ。

私の知っている未来通りに進んでいるかどうか、どうやって確かめればいいのか、……とりあえず、ルーピンが向かっているかどうか確認すればいいだろうか。

私は闇の魔術に対する防衛術の教室へと足を向かわせた。

階段を駆け上った私は、固く閉じられていた教室の扉を開け中に入ると、ルーピンがいないことを願いながら自室の扉を叩く。彼の声が返ってこない事を祈りながら、耳を濟ませ待った。

……返事がないってことは、ここには居ないか

私が少しほっとしながら扉を開けると、もちろんそこには誰も居なかった。

机に近づき、ふと視線を移した机の上にはご丁寧に忍びの地図が広がっており、その隣には葉がはいったゴブレットが置いてある。

ゴブレットがあるということは、もうセブルスはここに来て叫びの館に向かっている可能性が高い。

ルーピンの部屋に置いてある少ない手掛かりになりそうな物を見つけないが考えていると、さつきまで明かりをつけなくても何も問題なかった部屋が少し薄暗くなっていることに気づいた。外を見れば、顔を出していた太陽ももうほとんど沈んでいて、空は少し雲がかっている。

忍びの地図を自分の方に引き寄せ、セブルスの姿があるかどうか暴れ柳の周辺を探すと、はつきりと「セブルス・スナイプ」と黒のインクで書かれた足跡が暴れ木に向かい、足跡はすつと消えていく。

……大丈夫……何も変わったことは……

どうやら何事もなく進んでいるらしく、私が安堵しながら、地図から視線を逸らそうとした時、ある名前が視界に飛び込んできては、私の動きはぴたりと止まった。

【ルーナ・ラブグッド】

何故彼女の名前が視界に飛び込んできたのか、その理由は簡単で、それは暴れ柳の近くにいたからだ。

……まさか……

嫌な予感がした時には、地図の彼女の足跡はゆっくりと暴れ柳へと向かっていく。

「待って。」

地図を手にとって、ついつい口ずさんだが、彼女に届くはずもない。

来た道に戻る気配のないルーナの足跡を見て、地図を机の上に置くと、私は呪文を唱えこの部屋にある空き瓶を呼び寄せた。

瓶の栓を取り、ゴブレットに入っている薬を移し替えると、溢れなないようにしつかりと蓋をする。

……方が一のことを考えて、備えた方がいいと学んでいた私は、ローブのポケットにしまい込んでもう一度地図を見てみた。

暴れ柳の近くで止まっていたルーナの足跡はすつと消えていくのを見た瞬間、私は部屋を飛び出して、暴れ柳に向かって走る。

……お願い、間に合って

セブルスとルーピンそしてブラックが対面するあの状況に、もしルーナが入ったら未来が変わるどうこうの問題じゃない。

あの3人の中で、唯一落ち着いているのはルーピンぐらいで、ブラックは勿論、セブルスもいつもより冷静さを失っている。

もしかしたら……ルーナが怪我をしてしまう可能性だって。

嫌な予感しかない私は、血の気が引いていくのが分かる。相当焦っているのだろう。どんなに走っても息が切れるだけで、体力は減っていかなかった。

外に出ると太陽はもう沈んでいて、あんなにオレンジだった空はもう暗く、外も薄暗い。

私の存在に気づいたのか、太い枝を私に向かって振り下ろそうとしてくる目の前にある暴れ柳を見上げて、切れた息を整えるように呼吸を繰り返しながら、杖を取り出し魔法をかける。

するとさっきまでの暴れようが嘘のように大人しくなった柳の穴に滑り込むように入って、姿勢を低くしながら歩み進めた。

小さな穴から漏れるぼんやりとした明かりを目指し歩きそこから抜け出すと、見覚えのある部屋にたどり着いた。あの時と変わらず荒れ果てていて、特に変わった様子はない。

ルーナが居ないか、辺りを見渡してみたが、私以外に誰もおらず、代

わりに時々上から怒鳴り声のようなものが聞こえてくる。

「どうやら一度ここに来たのが正解だったようで、あの時のおかげでどちらに行けばいいのかわかっていた。」

「……とりあえず、早くルーナを探さないと」

急いで部屋から出て、何処にいるのか辺りを見渡すと、今にも崩れ落ちそうな階段を上ろうとするルーナの姿が視界に入ってきた。

「ルーナ！」

少し大きな声を出して呼び止めると、彼女は私の顔を見て驚いたような表情を浮かべ、足を止めた。2階から聞こえるセブンスの怒鳴り声を聞きながら駆け寄ると、ルーナは不思議そうに問いかけてくる。

「……どうしてここにいるの？」

それは私が聞きたいことだが、とにかく今はここから離れることを最優先させたかった私は、何も答えずにルーナの腕を握り、連れて行くこうとすると後ろから彼女の痛がる声が聞こえてきた。

「何事かと思ひ、振り返ればルーナはしゃがみこんで左足首を抑えている。」

「捻ったの？」

視線を合わせ、問いかけると、声を出す代わりに彼女は小さく頷いたのを見て、ズボンの裾を捲りあげてみる。露わになった足首は痛々しく腫れており、少し熱を持っていて、専門知識がない私でも酷いことがひと目で分かった。

「……これ、どこで？」

「……枝に当たらないように勢いよく、穴に入った時に……」

「そう言うルーナをよく見てみれば、彼女の服は泥で汚れていて、頬にもかすり傷のようなものがあることに気づいた。」

「……ヘルキヤットさん。2階に行かなくていいの？」

「じつと私の目を見つめながら、問いかけてくる彼女はきつと2階に行けと言いたいのだろう。」

「上からハリーらしき声がすると、何か崩れるような音が聞こえてきた。」

「……ええ……大丈夫、ほら掴まって」

背を向けると、彼女は大人しく首に腕を回してきて、落とさないようにゆっくりと立ち上がると、そのまま近くの部屋へと避難する。

ゆっくりとルーナを下ろすと、腫れ上がっている足首を露わにさせれば、だんだんと酷くなっているように思えた。

……歩くだけでも痛かった筈なのに……

私は申し訳ない気持ちになりながら、脱いだローブを切り裂くと、呪文を唱え、水に濡らす。とりあえず応急処置として、足首を冷やすためにそれを巻くとルーナは私の気持ちを察してか、突然口を開いた。

「……大丈夫だよ。見た目ほど痛くない」

「……痛いに決まってるでしょ……それに頬にも傷つくつ

て……女の子なんだから」

言いたいことも、聞きたいことも沢山あったのだが、何故か言葉が出てこなくて上手く伝えられなかった。

時折聞こえる声や音に、2階を見上げると、私が何も聞かないことに不思議に思ったのか、いつも通りの声で話しかけてくる。

「何にも聞かないんだね。」

「……聞いてほしかった?」

問いかければ、ルーナは頭を左右に振って否定してくる。

「……ねえ、魔法薬は得意なの?」

突然話題が変わることはいつもの事で、特に驚くことも無く、言葉にする。

「……得意ではないわね。成績はいつも悪かったし、最初は嫌いで仕方がなかった。」

問いかけにそう答えると、ルーナはどこか興味がなさそうにふーんと声を洩らしただけだった。

「本返すの、来年になっちゃうかも」

来年、何が起こるか知る由もないルーナの言葉に私は言い表せない複雑な気持ちを抱いて、声を絞り出す。

「… ええ… 大丈夫よ」

そろそろルーピン達が下に降りてくる頃だろうし、何より一刻も早くルーナを医務室に連れて行かなければ悪くなってしまうばかりだ。

部屋の外の様子を伺うために、外れかかっている扉に近づくと、後ろから彼女の声が聞こえてきた。

「ねえ、覚えてる？あんたがあたしに言ったこと」

そう言われ、思い浮かんだことは少し前に彼女を遠ざけるために口にした言葉だった。

… 流石のルーナも怒っているわよね…

「… あんたは言ったよ。考え込みすぎるのは良くないって。それなのに今のヘルキャットさんは変に考え過ぎだ。」

私が思っていた事と全く違うことを言うルーナの言葉に驚き、振り返れば彼女はじつと私を見つめていた。

「… あたしはあんたを信じてるよ… だからあんたもあたしを信じてよ。」

彼女の言葉は、じわりじわりと私の体に染みていく気がしたが、それでもずっしりと重たく感じた。

部屋の外に誰も居ない事を確認した私は、ルーナに視線を合わせ、重たい口をゆつくりと開く。

「… じゃあ… 貴女にひとつ頼みたい事があるの。引き受けてくれる？」

頼み事されるが嬉しいのか、少し明るい表情を浮かべるルーナは頷きながら、にっこりと笑みを浮かべる。

私は彼女の瞳を見つめたまま、ルーナにだけ聞こえるように、小さな声を出しながら言葉にした。

「… スネイプ先生を信じて、見守っていて欲しいの」

思いがけないことだったのか、彼女は少しきよんとしながら、じつと見つめてくる。

「… 周りの誰もが彼を批難しても、貴女だけは彼を信じ続けていて欲しい。」

「…………… どうして、スネイプ先生？」

単純な疑問をぶつけてくるルーナの問いかけに少し笑みを零しながら、答えを口にした。

「…………… 彼は私の大切な友人だから……………」

私の言葉を聞いたルーナは、純粹な笑顔を浮かべると、分かったと言いながら頷く。

「じゃあ、これは2人だけの秘密の約束ね。他の誰にも内緒よ」

「分かった、秘密ね」

秘密事が嬉しいのか、につこりと笑みを浮かべるルーナは、私の小指に手を伸ばすと自分の小指を絡ませてきた。

遅かれ早かれ、きっと私はルーナを裏切るような事をするのは目に見えている。

…………… どうか…………… 私を信じ過ぎないで

そんな想いを隠しながら、私は目に焼き付けるように彼女の小指が絡まっている手と、彼女の優しく、純粹な笑顔を見つめた。

21 膨らまぬように、潰れぬように

腫れている彼女の足首に治癒呪文を唱えると、痛みもましになったように歩けるまでに回復した。

一刻も早くこの場から離れたかった私は、ルーナを支えながら薄暗い穴の中へと入っていき、城を目指す。

「……………暗いね……………」

突然口を開いたルーナの声を聞きながら、眩くように声を出す。

「……………そうね……………」

それ以上言葉を交わすことはないまま、穴から出た私達は、そのまま城へと足を向かわせる。

陽も落ち、夜空に分厚い雲が覆っているせいで月明かりもない今夜は、いつも以上に暗く、足元も見にくい。

「……………ヘルキャットさん……………そういえばローブは？」

思い出したように問いかけてくるルーナの言葉に、自分が着ていたはずのローブを着ていない事に気づき、思わず足を止めた。

……………切り裂いて、ルーナの足首に巻いた後……………

そのまま叫びの館に置いてきてしまった事を思い出した私は、溜息が出そうになる。

運良く杖は手に持っていたが、脱狼薬はローブのポケットに入れておけばなしだし、あんなものがあつたらあの場に居ましたよと知らせているのと同じ事だ。

誰にも気づかれなければいいけど……………

「行きましょう。ルーナ」

取りに戻って鉢合わせになることだけは避けたい。とにかく今は彼女を医務室に連れていく事が最優先だと思った私は、ルーナを支えながら城に向かった。

今まで薄暗かったというのに、雲隠れしていた月が顔を出したのか、月明かりに照らされ、出来た自分の影を見ていると眩いたルーナの声が聞こえてきた。

「…満月だ…」

彼女が口にした満月という言葉聞いた瞬間、私の頭にはこれから起こることが自然と映像として流れ出す。

……早く離れないと

焦る私の思いなど知る由もなく、後ろから聞こえてきた獣の声に聞こえない振りをして先を急ごうとするが、隣にいたルーナはそうはいかない。

手を離し、声ができる方をじっと見つめる彼女の後ろ姿を見て、悟られない内にとにかく早くこの場を離れたかった私は声を掛ける。

「ルーナ」

顔が見えない私は聞こえているのかさえも分からず、ただルーナの背中を見ているとこのまま消えてしまいそうに感じ、途端に不安になった。

これ以上彼女をここに居させる訳にはいかないと思った私がルーナの腕を握りしめようとした時だった。ただ声ができる方を見つめていた彼女は、なんのきつかけもなく突然に走り出し、慌てて引き止めようとするが私の手は宙を切っただけだけで、掴むことは出来なかった。

「ルーナ！」

来た道に戻る彼女の名前を呼びながら、慌てて後を追いかける。

今まで彼女の考えている事を理解出来た事がないが、今回ばかりは今までで一番理解出来ない行動だ。まさかこの獣の声が聞こえていない訳でもないだろう。

何も考えずに自ら危険に飛び込むとは、何とも彼女らしくない。

先を走っているルーナは足を怪我しているはずだというのに中々の速さで、息を切らしながらやつと追いつき、腕を握りしめる。引き止めることはできたものの、彼らとの距離が近くなってしまったのは明白で、その証拠にさつきより明らかに近い距離で、争う獣の声が耳に入ってきた。

まるで耳元で叫ばれているみたい………耳元で？

聞こえてきた声があまりに近すぎる事に気づき、咄嗟に顔を上げた時にはもう遅く、視界が黒い影に遮られた瞬間、強い衝撃が襲いかかってくる。

突然に地面に叩きつけられた私は、何も反応出来ないまま頭を強く打ち、脳が揺れているように気持ち悪く感じた。

何が起こったのか分からず、頭痛を耐えながら、瞼を上げると少し離れた所に横たわっている人影のようなものと、視界の端に杖のようなものがぼやけて見えるだけだった。

全身が打ち付けられたせいか体が痛んだが、視界が徐々に鮮明になっていき、目の前に倒れている人影の正体が分かった瞬間、そんなものなど吹っ飛んでしまったように痛みは感じなくなり、心臓が飛び上がり、嫌な汗が流れ落ちる。

「ルーナ」

名前を呼びかけるが、私に背を向けている彼女は答える気配も、動く気配もない。

まるで深い眠りについてるかのよう横たわっているルーナの背を見ていると、頭には自然と私が殺した家族の息絶えた姿が浮かんできて、血の気が引いていくのが分かった。

「ルーナ……………ルーナ！」

とにかく答えてほしくて、名前を今出せる精一杯の声で呼びながら、駆け寄ろうと上半身を起き上がらせると、脳がぐらりと大きく揺れ、吐き気が襲ってくる。

獣の唸り声のようなものが聞こえる事に気づき、声がする方へ視線を移すと、人間の肉など簡単に裂いてしまいそうな程の鋭い鉤爪と、口から垣間見える牙が視界に入ってきて、いつものルーピンを微塵も感じられず、一気に恐ろしく感じた。

明らかに私よりも大きな体つきをしている彼は低く唸りながら、私ではなく、動かないルーナを目に映している。

彼女の身の危険を感じ立ち上がるうとすると、頭上から黒い犬が勢いよく彼に飛びかかる。

それがブラックだということも、ルーピンに投げ飛ばされた彼に巻

き込まれたということを理解した私は、無理矢理体を起き上がらせ、倒れている彼女の元に駆け寄った。

「ルーナ、ルーナー！」

ルーナの頭を支えるように腕を回し、何度も呼びかけてみるが意識を失っている彼女は答えるどころか目も開けてくれない。

苦しそうな犬の声が聞こえ顔を上げると、ルーピンは獣の声を発しながら、私達に詰め寄ると、躊躇なく鋭い鉤爪を振り上げてくる。

手元に杖がない私はもう何も考えられず、咄嗟にルーナに覆いかぶさるように抱きしめ、ぎゅつと脛を瞑った。

ただ純粹に自分を犠牲にしても、彼女を守らなければならない気がしたのだ。

空気を切るような音と、悲鳴のような声は聞こえたものの、いくら痛みに構えていても何も襲ってこず、不思議に思い、顔を上げた私は見覚えのある真っ黒な背中が視界に入ってきた瞬間、心臓が撫でられたように気持ちの悪い感覚を感じ、鳥肌がたつと全身の血が引いていった。

微かに臭う血の鉄の匂い。

白い指の先から滴り落ちる血で出来た血溜まりと、地面に飛び散っている赤。

嗅覚や視覚までも恐怖に支配されてしまったように、私は今日の前で起こっている光景に声を出すことも出来ない私の頭には、思い出したくもない光景が鮮明に思い浮かんでいた。

一体何が起こったのか、今何が起こっているのか、私の頭は掻き回されたようにぐちゃぐちゃに混乱し、心臓の鼓動が速くなっているばかりだ。

ブラックがルーピンに襲いかかる光景をただただ見つめることしか出来ない私は、未だに目を覚まさないルーナの体を抱きしめながら、セブルスの背中に視線を移すことしかできない。

獣の争う声が遠ざかっていくと、目の前にいるセブルスの怒鳴るような声が聞こえてきた。

「ポッター!!戻ってこい!!」

どうやらハリーがブラック達の後を追いかけて行ってしまったらしく、後を追おうとしたセブルスは何歩か足を踏み出すと、突然振り返ったのが視界の端に入ってきたが、混乱している私は何をどうすればいいのか分からなくなった。

どうして目の前にいる彼が怪我をしているのか、どうしてルーナが気を失っているのか、どうしてこんな事になっているのか分からない。

「…………… あっ…………… ルーナ…………… ルーナ」

彼女の名前を呼ぶ私の声は震えていて、このままルーナが冷たくなっていくのではないかと思ってしまった私は想像もしたただけで怖くなり、気づけば彼女の体が冷たくなるような抱きしめて暖めていた。

「…………… どうしよう…………… どうしよう……………」

大きくなっていく不安に押し潰れそうになり、零れた声はか細いもので私は落ち着こうと呼吸を繰り返すが、脳裏には冷たくなっていく家族の姿が何度も映像として繰り返し返される。

「ルーナ、ルーナ。お願い、目を覚まして。」

とにかく目を覚まして欲しくて、何度も名前を呼んでいると、それまで周りの声が聞こえないほど混乱していた私の耳に落ち着かせるような声が聞こえてきた。

「少し落ち着け。」

気づけば、セブルスが目の前に腰を下ろし、ルーナの首元に触れると、口を開く。

「呼吸も脈も安定している。命に別状はない。」

私に説明するように話すセブルスは、左肩を怪我をしており、服は赤黒く染まっていた。

ああ…………… 何で…………… こんなことになったんだろう……………

悲しく、苦しくなり、罪悪感に苛まれた私は無意識の内に口を滑らしていた。

「……………ごめんなさい……………」

口にした私自身も、まさか本当に声に出るとは思っておらず少し驚いたのだが、それは私だけではなかったらしく、目の前にいる彼も一瞬、瞳を少し見開くと直ぐに眉間にしわを寄せた。

咄嗟に視線を逸らしても、罪悪感が消えることもなく、かと言ってセブルスを見る勇気もなかった。

何を言うわけでもなく突然に立ち上がった彼がハーマイオニー達に呼びかける声だけが聞こえてくる。

「グレンジャー、全員を連れ、先に戻っている。」

セブルスらしき足音が遠ざかっていき、代わりにハーマイオニー達であろう足音が近づいてくる。

怪我をしているセブルスをひとりで行かせてはいけないということとは分かっていたが、顔さえ見れなかった私に後を追いかける勇気などあるはずがない。

どうしてこんなことになってしまったのか、考え込んでいると今まで重く閉じられていたルーナの瞼が前触れもなく突然にゆっくりと持ち上げられた。

「ルーナ」

驚きと安堵感、不安が混じり、複雑な感情を抱きながら少し大きめの声で呼びかけると、ゆっくりと瞬きを繰り返した彼女は瞳に私を映してくるが、ぼんやりとしたままだった。

「…私が誰か分かる？」

ルーナを不安にさせないよういつも通りの調子で問いかけると、私を見つめたまま小さく口を開く。

「……………ヘルキャットさん……………」

掠れている彼女の小さな声を聞いた私は頷き、優しく頭を撫でながらルーナに語りかける。

「大丈夫よ。直ぐに連れて行ってあげるからね」
とにかく今は医務室に急いで連れていかなければならない。

「……少し手伝ってくれる？」

顔を上げ、近くに居たハーマイオニーに問いかけると彼女は控えめに頷くが、私がおぶろうとすると戸惑ったような声が聞こえてくる。
「魔法は使わないんですか？」

確かに魔法を使ってルーナの体を浮かせ、連れていく事は勿論出来るがそれは私がしたくなかった。

「…あれはあんまり気が進まないの」

使いたくない理由は簡単で、叔父の顔が浮かんでくるものだから、何となく生きている人間に使えずらく感じていた。

私を見つめ、それ以上は何も言っただけだったハーマイオニーはテキパキと手を貸してくれて、何とかルーナをおぶる事が出来た。

まだ意識がはつきりとしなのか、それとも吐き気が襲ってきているのか、ルーナは私の首に腕を巻き付けることも無く、全体重を私にかけてくる。

「……行ける？」

「大丈夫です」

ロンを支えているハーマイオニーは力強く口にして、ハリーが気になるのか、彼が行った方に視線を移していた。

「……ハーマイオニー…大丈夫よ」

さつきと打って変わって落ち着きを取り戻した私に驚いたのか、それとも私が名前を呼んだことに驚いたのか、どちらかは分からないが、驚いた表情を浮かべながらこちらを見てくる彼女とロンを見て、私は医務室を目指して一歩足を踏み出した。

「……あの、1つ聞いて欲しい事があるんです。」

このまま医務室まで、誰一人として話さないだろうなと思ったのだ

が、意を決したかのように突然に話しかけてきたハーマイオニーはやけに真剣な表情を浮かべていた。

「貴女が追っていたシリウス・ブラックは無実です。本当の犯人が居たんです。」

「へえ…： そうなの？」

興味無さそうに返すと、さっきまで足を痛がっていたロンが口を挟んでくる。

「僕が飼っていたスキヤバーズ、あれがピーター・ペティグリューだったんです！あいつは鼠の姿になって何十年も逃げ続けていた！」

ロンの言葉を聞きながらも、構わず歩き続ける私は彼女達を遇うように言葉を並べる。

「貴方達にしては、面白い冗談ね 「冗談じゃありません！」

私の言葉に被せるように声を張り上げるハーマイオニーは、はきはきとした口ぶりで話し出す。

「ピーター・ペティグリューは、シリウス・ブラックに罪を着せた上で、自分を死んだと思わせ、何十年も鼠の姿で逃げていたんです。

私もロンもハリーも、そうだわ、ルーピン先生だって見ていました。

スキヤバーズが、ピーター・ペティグリューに変身した所をはつきりと目にしましたんです。」

「それで、貴女は何を言いたいなの？」

前を見たまま問いかけると、彼女は怯むことなくはつきりと言葉にする。

「この真実を魔法省から世に発信して、シリウス・ブラックが過去に罪を犯したということを訂正して欲しいんです。魔法省が認めなければ、結局彼はアズカバン送りになってしまいます。」

「それは無理難題ね。証拠も何もないじゃない。「証拠ならあります。目撃者が4人も居るんです。」

食い気味で話してくるハーマイオニーに少し溜息をついて、やっと目の前に見えてきた医務室の扉を見つめながら冷たく言い放った。

「子供3人と、狼人間の証言を真面目に聞く人も、信じる人も居ないと思うわよ。現に私も信じてないわ。」

「じゃあ！僕の手元にスキヤバーズが居ないのはどう説明するんだ！」

私の言葉に反応したロンは苛立ったのか、少し声を張り上げてくる。

「そんなことは知らないわよ。どうせ、また逃げられたんでしよう。言っただはずよね？ペットは肌身離さずに持つておくようにって。」

「信じてください!!私達は本当に!!」

私に訴えかけてくるハーマイオニーの言葉を聞きながら、医務室の扉を開けた私は中にいたマダムに近寄りながら声を掛けた。

「緊急です。怪我人が2人、それから後からも2人ほど来るかと思えます。」

マダムに指示された通り、おぶっていたルーナをベッドにゆっくりと寝かせていると、相当足が痛むのかロンが痛そうな声を出していた。

ロンに何か言ったマダムは、ルーナに近づくと顔を覗き込み、簡単な診察をしながら問いかけてきた。

「一体何があつたんですか?」

「……頭を強く打ったようで、一時的に気を失っていました。意識が戻ってもぼんやりとしていて……、あとそれから左足首を捻ったようです。」

私の言葉を聞いた彼女は、手際良くルーナの状態を診ると、足首に包帯を巻き、独りでに近づいてきた薬を手にとると、ぼんやりとしているルーナに飲ませる。

薬を飲んだルーナは再び瞼を閉じて、眠りについた。

「頭痛もないようですし、異常も見当たらないのでとりあえずは大丈夫でしょう。足首も早ければ明日には良くなりますよ。」

安静にして、何か変わった事があれば直ぐに知らせてください。」

「……分かりました……。すみません、あとそれからあの子も診てもらってもいいですか?」

ちらりとハーマイオニーを見ながら問いかけると、私の話を聞いていたのか戸惑ったような表情を浮かべている彼女と目が合った。

「貴女は？」

「私は大丈夫です」

ハーマイオニーから視線を逸らし、少し痛む体を誤魔化しながら答える。

こんな痛み、入院をした時のことを思えば軽いものだ。

ロンの足の手当をし終え、ハーマイオニーの軽い怪我を治療しているマダムの姿からルーナに視線を移すと、深い眠りについていて彼女を優しく撫でる。

私を行かせようと必死になっていたルーナの姿が頭に浮かべと、自然と怪我を負っていたセブルスの姿が脳裏にはつきりと映った。

・・・こんな所でゆっくりしている場合じゃない

私は机に置いていた杖を握りしめ、外に出ようと駆け足で扉に近づき、取っ手に手をかけた瞬間だった。

目の前の扉が勢いよく開き、気を失っているハリーを背負っているセブルスが血を垂らしながら駆け込んできた。私の方を見向きもせず、そのまま部屋に入る彼に気づいたマダムは驚いたような声を上げ、ハリーの名前を呼ぶハーマイオニーの声が聞こえてくる。

マダムに何やら説明をしているセブルスから、床に視線を移すと、彼から流れ落ちたであろう赤い血が点々と道をつくっており、専門の知識がなくとも大怪我をしていることは私でも分かるほどの出血量だ。

誰がどう見ても治療が優先だということは分かるはずなのに、治療もせずにごかへ行こうとしている彼は、引き止めるマダムをひらりと交わして、私の横を通り過ぎ部屋を出ていこうとする。

「セブルス」

こんなに堂々と横を通り過ぎるなんて、私が引き止めないでも思っただろうか。

私の声にしるし反応はしたものの、そのまま行こうとするものだけ

ら、怪我をしている彼に触れることもできず、セブルスの前に立ち、引き止めることしか出来なかった。

こんな大怪我をしている彼を黙って行かせられる訳が無い。ましてやこの怪我は私のせいなのだから尚更行かせられない。

「退け。邪魔だ」

「そんな怪我でどこに行くの？」

「… お前には関係ない」

冷たい言葉が返ってきたが、今回ばかりは引き下がることは出来ない。

「怪我人は治療を優先するべきぐらい、子供でも分かることよ。」

「こんな怪我、大丈夫だ。」

こんなにも引き下がらないということは、ブラック関係だろう。

「そのどこが大丈夫なの？ 私には全然大丈夫には見えないわよ。」

「レイラの言う通りじゃ。」

突然後ろから私に加勢してくる声が聞こえてきて、説得していた口を閉じ後ろを振り向くと、大臣を連れたダンブルドアが立っていた。

「セブルス、その怪我では何も出来んじやろう。まずは治療をしないと良い。後は手が空いているものに任せれば良い」

「しかし！「話はそれからじゃ」

反論しようとするセブルスを一言で静めるダンブルドアから彼に視線を移すと、決しているいい表情を浮かべていないセブルスと明らかに目が合ったがセブルスが怪我をしたという事実が怖くなり、目を逸らした。

何故、こんな悪い方へといってしまったのだろう。

思い返せば私がここに来て、少しでも良い方向に変わったことはあったことが無い。

ハリーが死にかけ、セブルスやルーナが怪我を負った。

抗議するハーマイオニーに、反論するセブルス。動こうとする彼を

怒鳴りつけるように声を張り上げるマダムの姿に、聞く耳を持つとうともしない大臣。

目の前の光景を眺める私の頭には、今までの事が駆け巡ってくる。避けることなく、最初から彼らの元へ行けば良かったのだろうか。最初の汽車で、ルーナのいるコンパートメントに入らず、彼女と仲良くしなければ良かったのだろうか。

ルーナを守りたいと思った事がいけなかったのだろうか。

思い返せば思い返すほど、今まで歩んできた私の選択、全て間違っている気がして、もう訳が分からない。

「レイラ」

突然に名前を呼ばれ、顔を上げると大臣が私を呼んだらしくそのお陰で、一気に注目の的となり、視線が集まった。

「君の意見を聞かせてもらっても良いかな？あの場にいた君なら、的確な意見も言えよう」

ファツジはまるで私に圧を掛けてくるように近づきながら、言葉を並べてくる。

それもそうだろう。ここで私はハーマイオニーの言う通りです、なんて言ったら彼にとって面倒な事になる。

それに私が魔法省に身を置いていられるかは、今大臣である彼次第であつて私など、どうとでも出来るだろう。

……まだ魔法省を離れる訳にはいかない……

「その人が来「私は見ていませんよ。彼女の言うピーター・ペティグリュウなんて。」

ハーマイオニーの声を遮り、答える私の言葉を聞いた大臣はやけに満足そうな表情を浮かべていた。

「レイラ、僕は君の意見を聞きたい」

「ですから、私はブラックが犯人で変わりはないと思います。彼らは少し気が動転しているのでしょうか。私だけではなく、セブルスもそう言っているんです。ほぼ間違いないと思います……ダンブルドア、貴方は生徒達の言葉を信じるか？」

彼の青い瞳から目を逸らさずに問いかけると、ダンブルドアは迷い

もせずに答える。

「勿論じゃ」

「ダンブルドア、貴方がなんと言おうと今回ばかりは大臣である私の名を立て、ブラックにディメンターのキスは執行させていただきませぬぞ。「シリウスは無実です」

大臣がそうダンブルドアに言い切った時だった。今まで聞こえてこなかった声が部屋に響くと、一気にその声の持ち主の方へと視線が集まった。

「ハリー」

彼の名前を呼びながらハーマイオニーが駆け寄ると、今までベッドに寝ていたはずのハリーは、上半身を起き上がらせて、私達の方を見ると訴えかけてくる。

「シリウスは無実なんです。「しかしだなハリー。そのような証拠はどこにもない。」

「僕達のはつきりと見ました。ロンの鼠が、ピーター・ペティグリューに変わるところを！僕の両親を裏切ったのはあいつだったんです！」

まるで私達から隠すように、必死に訴える彼の前に立ったマダムはどこか怒っている様子で口を開いた。

「もう我慢なりません。この子達は混乱しているんです。さあ早く外に出てください。」

彼女に追い出されるように外に出ると、大臣は少しため息をつきながら私に指示をしてきた。

「とにかく、準備を進めてくれ。」

「……………かしこまりました」

大臣とダンブルドアと別れた私はずり向かったのは勿論ブラックの元ではなく、叫びの館へと足を向かわせる。

……………とりあえず、ローブを回収しておこう。

そう思いながら、廊下を歩いていると後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。

「貴様が探しているのはこれか？」

こんなにも早く治療が終わるなんて、マダムは本当に優秀らしい。

振り向くと、私のローブを手に持っているセブルスが立っていた。

「……あの場にお前も居たとはな。」

「……無断で抜け出したら、マダムに叱られるわよ」

話を逸らすように話しても、セブルスがそんな手にかかる訳もなく、何か聞き出そうとしてくる。

「何の用があった？」

「そうね……きつと貴方と同じなんじゃないかしら？」

変に誤魔化した所でもう言い逃れは出来ない。もうこうなったら開き直った方がいい。

「誤魔化すこともしなくなったんだな」

「何故、誤魔化す必要があるの？貴方に責められる事をした覚えなんてないわよ。そろそろ返してくれない？」

手を伸ばしてみるが、彼が私の言う通りに返してくれるはずがなく、表情ひとつ変えずに後を続けてくる。

「あの場に居たにも関わらず、音が聞こえる2階には上がらなかったとは、何とも不思議なものだ。」

私が何も答えないでいると、彼がローブのポケットから瓶を取り出し、見つめながら話し出した。

「脱狼薬を常備しているとはな。まるでルーピンが变身するとても分かっていたようだ」

これはどう言っても誤魔化しきれようがない。私は自分は死喰い人だと、彼の敵だと言い聞かせながら、セブルスに何も悟られないように嘘の言葉を頭で並べると、ため息をつき、次の言葉を探しながら声を出すために息を吸い込んだ。

「ええ……そうね……私はあの場にいた。2階に行かなかったのはただの私の気まぐれよ……あなたのお望み通りの言葉にするなら……いつその事ハリーが死んでしまえばいいと思ったからかしら？まああの様子だと上手くいかなかったみたいだけど。」

ハリー達がいる医務室の方向からセブルスへ視線を移すと、彼の表情は変わらなかったが、少しでも気を抜くと殺されてしまいそうに感じた。

「冗談よ冗談。」

少し笑みを浮かべて答えながら、距離を詰めていき、絞り出すような声で言葉を並べた。

「私から言わせたら貴方がここで教師ごっこをしている意味が分からないわよ。」

ダンブルドアに恩を売って、あの子を守るような行動をして、一体何がしたいのかしら？」

彼の瞳から視線を逸らさずに言葉を並べるが、セブルスは冷静に私に問いかけてくる。

「… 貴様の目的は何だ」

真っ黒な瞳を見つめながら、私は息と一緒に言葉を吐き捨てた。

「貴方には関係ない」

私は髪を耳に掛けながら、頭で提案の言葉を考えて彼だけに聞こえるように呟くような声で口にした。

「貴方には貴方のやるべき事があるように、私にも私のやるべき事がある。だからこれ以上、お互い詮索するのはよしまししょう？」

セブルスが手に持っていたローブを握り、自分の方へ引つ張ると殆ど力が入っていないなかったらしく、彼の手から簡単に奪うことが出来た。

「ああ… それからこれ、拾ってくれてありがとう」

思い出したようにお礼を言って、セブルスに背を向け、彼から早く離れるように廊下を歩く私は、ローブを握りしめながら足を速める。

今までの緊張が一気に襲いかかってきたように、心臓の鼓動が速くなり、私は咄嗟にペンダントを握りしめると彼の死角に入った瞬間に、服から取り出し、躊躇なくペンダントの凹凸を押した。カチツという音が聞こえてくると、何も聞こえなくなり、足を止めた私は壁に持たれながら座り込む。

ペンダントの針を見てみると、動いているスピードはとてもゆっくりで、意外にも時が止まっている時間は長そうだ。

「…………… こんなはずじゃなかったのに…」

ため息と一緒に外に出た私の声は、勿論誰の耳にも届くことは無い。

セブルスが怪我を負ったことも、ルーナが怖い思いをした事も、どんなに後悔してもしようがないことは分かっている。

こんな事で、こんなことになっていたら駄目なことも分かっている。もう起きてしまったのだから、しようがない事も分かっている。

私には後悔する暇もない事も重々承知している。

それでも、これからの事や、次自分がやらなければいけないことを考えても、頭に浮かんでくるのはあの人の顔ばかりで、生きている心地が全くしない恐怖に支配されるのだ。

思い出す度にあの嫌な感覚を思い出して、正直な体は震えそうになるし、こんな平和な世界が前触れもなく崩れていく日が近づいていることがただただ怖い。

だからこうして時々、時間を止めてみたりしたがそんなことをしても意味はなく、ペンダントが動き出してしまえば、また時間は残酷に動き出してしまう。

「……もういつその事……このままでいいのにね……」

動いているペンダントの針を眺めながら、声に出した私の願いなど叶うわけがない。

……これから行く未来が決して良いものではないというのが分かっているのにね……

……これ程……辛いものは無い

ペンダントを閉じ、体に喝を入れ、立ち上がった私は時間が動き出す合図の音を聞きながらしっかりとした足取りで、ブラックの元に足を向かわせた。

もう随分と感じていなかった感情が膨らんでいかないように、潰されてしまわないように。

22 帰る場所

私がブラックがいる塔へ上った時にはもう彼の姿はなく、代わりに檻の扉が壊され、地面には石の欠片のようなものが散乱していた。

ハリー達と鉢合わせにならずに済んだ事に安堵しながら、遠くから聞こえてくるバックビークらしき鳴き声を聞き流して、来た道に戻る。

歩き慣れた真夜中の城を歩くのも、もう今日で最後かな…

自室に羊皮紙が大量に溜まっている光景が容易に想像出来てしまい、魔法省に戻ってもゆつくりと休めそうになさそうだ。

夜中の12時を知らせる鐘の音だろうか。どこからともなくゴーンという音が聞こえてきた。遠くから聞こえてきた鐘の音が鳴り止むと、廊下には再び静寂が訪れる。

医務室にハリーがいる事を祈りながら、角を曲がると何やら話しているセブルスと大臣の姿が見え、私は慌てている振りをして2人の元へと駆け寄る。

「大臣、少しよろしいでしょうか」

少し早口で口を挟むと、振り向く大臣の後ろにいるセブルスが、焦る私の姿を見て何か悟ったように眉間に皺を寄せたのが視界に入ってきた。

「どうしたんだ？そんなに慌てて」

少し乱れた息を整えながら、私は彼らに聞こえるようにはつきりと口にする。

「大変申し訳にくいのですが、ブラックが逃げ出しました。」

私の言葉に、ファッジの表情はだんだんと穏やかではなくなっていく。

「どういうことだ」

「私が行った時にはもうブラックの姿はなく、檻の扉は壊されています。直ぐに周辺を探索しましたが彼の姿はなく、手掛かりは何も見

つかっていません。」

それらしい言葉を並べると、大臣はぶつぶつと呟きながら何やら考え込み、指示を出してきた。

「とりあえず、君はもう一度周辺を当たってみてくれ。この敷地から出さない事を最優先に、いいか殺してでもだ」

「…分かりました」

まさか殺せとまで言われるとは思っていなかった私は、少し返事をするのが遅れたが、彼らの側を通り過ぎると、医務室の方からダンブルドアが歩いてくるのが見えた。彼には大臣が事情を話すだろうと判断し、横を走り過ぎた私は扉がしつかりと閉じられている医務室の前を通ると、居るはずのないブラックを探しに外に出た。

勿論ブラックが見つかるはずもなく、一応ひと通りは探し終えた私が城に戻ると、丁度校長室から出てきた大臣と鉢合わせをした。

「…君は明日にでも早急に魔法省に戻ってくれ。」

報告しようかと口を開いたが、何やら疲れた様子の彼が言ったあまりに突然な言葉に、私は訳を聞くために声を出す。

「…いくらなんでも急すぎると思うのですが…」もう決まったことだ」

はつきりと言い捨ててくるファッジはため息をつきながら、淡々と言ってくる。

「生徒や教師までもが怪我をしたんだ。何としてでもブラックを突き止めなくては、世間の目が厳しくなり、信用もなくなる。」

「では、尚更」

私の声に反応した彼は、睨むように見てくると呟くように小さく口を開いた。

「ダンブルドアは君に責任を求めるところか感謝していたが、私はそうは思わん。死人は居なくとも、少なからず負傷者がいる。これ以上君がここにいる意味はないと私が判断した、それまでだ」

大臣の正論な言葉に、何も反論することは出来ず、その場を立ち去る彼の背を見送ることしか出来なかった。

……ここにいる意味は無い……か

魔法省から追い出されるのかどうか不安になりながら、月明かりが差し込んでくる廊下を歩き進めた。

どうしてもルーナが気になり、医務室に来てしまった私は、出来るだけ音を立てないように中へ入る。物音ひとつ立てられず、慎重に歩きルーナが寝ているはずのベッドを覗き込むと、そこには先程と変わらず眠っている彼女の姿があった。

近くにあった椅子に座り、寝ている彼女の顔色を見てみると顔色は良さそうで、気持ちよさそうに寝息を立てている。

顔を上げ、周りを見てみると、ルーナの隣のベッドにはハーマイオニーが寝ているらしく、その証拠に栗色の後ろ髪が見えた。

向かい側のベッドで大きな口を開け眠っているロンの足には、包帯が巻かれておりとても痛々しく、時々魘されているのは足が痛むからだろう。

その隣で寝ているハリーであろう黒い頭は、丸々ようにして顔半分布団を被っていた。

ただじつと椅子に座っていると、さつきまで微塵も感じなかった睡眠が突然襲ってくるもので、このまま寝てしまおうかと瞼を下ろすと、扉が開く音が耳に入ってきた。そんな音が耳に入れば、瞼は自然と開き、足音を聞きながら座っていると入ってきたマダムはまさか私が居ると思ってもいかなかったらしく、私を見た彼女は酷く驚く。

「……一体こんな夜中にどうしたんですか」

小声で話しかけられた私が、一体何と言えればいいか分からず言葉を詰まらせていると、マダムは何か悟ったようにルーナと私を交互に見て穏やかな笑みを浮かべた。

「……………では、ここを少しお願いしてもいいですか？」

「……………ええ……大丈夫ですが……」

頷きながら答えると、彼女は扉の方へと歩いていき、扉の閉まる音が聞こえてくると一気に静まり返る。

差し込んでくる月明かりに照らされても、眠っているルーナを眺めながら独り言のように小声で話しかけた。

「……………ごめんね……ルーナ。痛かったわよね。」

白いガーゼのようなものを貼り付けている彼女の頬に手を添えようと、ルーナの体温が伝わってくる。

『……………あたしはあんたを信じてるよ……………だからあんたもあたしを信じてよ。』

彼女に言われた言葉が、さつきからやけに頭をグルグルと回る。

「……………嬉しかったのよ……まさかあんな事言われるなんて思わなかったから……………」

……本当に嬉しかったのに、その言葉がとても悲しく感じてしまった。

すやすやと寝ているルーナの寝顔を見ていると、現実を突きつけられる。

……………次ルーナに会ったら、彼女に杖を向けることになるのだろうか。

……………嘘つきで……ごめんね、ルーナ

声にも出さず、彼女に届けるつもりもない私は卑怯で弱い。優しく頭を撫でると、どうしようもなく寂しく感じた。

日が昇り、差し込んでくる朝日で目が覚めた私は、あちこち痛む体を伸ばしながら欠伸をする。

どうやら気づけば、椅子に座ったまま寝てしまったらしい。

まだ朝が早いのか、見回してみても誰も起きる気配はない。

少しぼつとしているとマダムが入ってきて、何もしていないという

のにお礼を言われた。そろそろ荷物をまとめなければならぬ事もあり、ルーナの頭を撫でると振り返ることなく医務室をあとにした。

自室に戻り、生徒達が起きる前にここを出たかった私は身支度を始める。

魔法というのはとても便利なものだ。こんなに散らかっている部屋でも杖をひと振りしてしまえば、トランクの中へと入っていき、荷造りなど直ぐに出来てしまう。

最後にローブをトランクにしまい、手に持つと、私は何となくすっかり片付いた部屋を眺めた。

……… 終わる時は…… あっさりしてるわね……

そんなことを思いながら扉に手を掛け、廊下に出るとできるだけ音を出さないように静かに歩く。

昔当たり前のように入っていたスリザリンの寮、魔法薬学の教室を通り過ぎ、階段を上ると朝日が差し込んでくる廊下に出る。

ダンブルドアが起きているかは分からないが、とりあえず挨拶しに校長室へと向う事にした。

てつきりダンブルドアは校長室に居るものだと歩いてきたものだから、ベンチに腰掛けていた彼の姿が視界に入ってくると自然と足が止まる。

「…… やぁレイラ。そんな大荷物で一体何処に行くのじゃ？」

「…… 大臣から聞いておりませんか？」

「勿論聞いておるよ。」

私の問いかけに答える彼はまるで、私が早朝に出ることを知っていたかのようだ。相変わらず笑みを浮かべているダンブルドアは、いつもの調子で話しかけてくる。

「少し、老人の相手をしてくれんかの？」

「……… いいですよ………」

そんなに直ぐに魔法省に戻る用事などないし、まだここを離れたくなかった私は、彼に呼び止められた事をいい事にダンブルドアの隣に

腰掛けた。

「歳をとると、早朝に自然と目が覚めてしまうものなの。最近困っておるんじや」

「…セブルスに相談してみてもいいかがですか？彼でしたら薬を作ってくれると思いますよ」

冗談ぽく彼の名前を出して、ダンブルドアの言葉を待たせていても聞こえることはなく、隣にいる彼を見てみると、何故かどこか嬉しそうに可笑しそうに笑っていた。

「…何ですか…」

少し引き気味に声を出すと、笑みを絶やさないうダンブルドアが口を開く。

「どうじやった？君にとってこの1年は」

「…そうですね… お世辞にも楽しかったとは言えません
が…」

答える私の声に彼はまた愉快そうに笑う。

「…懐かしかったですよ… 少なくともここで7年は過ごしたわけですし… 母校ですからね。」

呟くように言葉にすると、隣から、それは良かったという言葉が返ってくる。

「どうかの？君が良ければ僕はいつでも大歓迎じやよ」

「…教師にということだろうか…」

顔を見なくても、隣にいる彼がにこにここと笑みを浮かべている姿が容易に想像出来た。

「… 一体これで何回目だろう」

もう数え切れないほど誘われている私は、何だか可笑しく思えて、自然と頬が緩まった。

「丁重にお断りさせていただきます。」

「残念じやの」

残念そうな彼の声を聞いた私が、置いていたトランクを手を持って立ち上がる。

「ではそろそろ、失礼します。1年間お世話になりました」

ダンブルドアにお礼の言葉を並べ、その場を立ち去ろうとすると背中越しに私の名前を呼ぶ彼の声が聞こえてきた。

「レイラ」

私達以外誰もいない廊下にはよく響き渡り、振り返ると彼は青い瞳に私をしつかりと映しながら口を開く。

「君はあの子に会わずに魔法省に戻るつもりなのかな」

ダンブルドアのいうあの子が誰のこと分からず、少し考え込むと頭にルーナの顔が自然と浮かんだ。私が黙っていると、彼は立ち上がりながら後を続ける。

「お別れもせずに目が覚めて居なかったら、儂はとても悲しいと思うがの」

ルーナの代弁でもするように話すダンブルドアを見つめながら、私は口を開いて声を出す。

「… いいんです、せっかくいい夢をみているのに、起こしてしまうのは悪いですから。…では、失礼します」

彼に背を向け、1度も振り返らずに外に出ると、風に髪が煽られ、宙を舞う。自然と歩みを止めた私は、後ろにそびえ立っているホグワーツ城を見上げると、初めてこの城を見た時のあのわくわくした気持ちを思い出した。

何も知らずにただ待っている未来が、楽しみで仕方がなかったあの時がとても懐かしい。

私はペンダントを握りしめて、ホグワーツに背を向けると、しつかりとした足取りでホグズミード駅へと向かった。

駅に着くと、そこには勿論誰もいない。

… ああ今年が終わってしまった。

今後、待っているのは決して明るくない未来だというのに、この時も時計の針は残酷に進んでいく。

ペンダントを開き、変わらず刻んでいる時計の針を見てしまえば、彼が死ぬ未来が、何度も夢で見たあの忌々しい光景が確実に近づいていることを思い知らされる。

いくら歳を重ねても、大人になっても、ペンダントを持つ私の手が

少し震えているのはきつとまだ怖いからだ。この先待ち受けている事も、彼が死ぬ未来も、あの人が蘇る事実も、全てが不安でしかない。いくら味方が居なくなろうが、全ての人に非難されようが憎まれようが今更引き下がることは出来ない。今まで家族を殺し、人を殺してきた私がここでしつぽを巻いて逃げる訳にはいかない。

閉じたペンダントを力強く握りしめる私は、ひとり静かに深呼吸をすると、弱音を隠すように姿くらしをした。

丁度通勤時間と重なり、人波に混じりながらトランクが当たらないように歩くと、象徴的な噴水が視界に入ってくる。

行き来する人達、飛び交う紙飛行機、エレベーターに駆け込む人など、この雰囲気は久しく感じながらも、まずは大臣の元へと向かった。

地下一階に上り、魔法大臣室の前に立つ私は意を決して、数回ノックをする。中から声が聞こえてくるのをしつかりと耳で確認して、扉を開き、中に入った。

「失礼します」

何か物書きをしていた大臣は私を見ると、手を止めて持っていた羊皮紙を机の上に置く。

「…… 処分を聞きに参りました」

生徒と教師が怪我をし、更にはブラックを逃したとなれば何かしら処分があるだろう。最悪、辞めされる可能性も有り得る。

外した眼鏡を手に持ちながら、目頭を押さえる彼は疲れているのか目を瞑りながら口を開く。

「安心したまえ、君を追い出そうなどは思っておらんよ。とりあえずは以前と同じように資料の処理をしてくれ」

「分かりました。……では失礼します」

追い出されることがない事が分かり、少しほっとしながら部屋を後

にする私は自室へと向かった。

1年ぶりの自室の扉を目の前にする私は、少しため息をつきながら、羊皮紙が溜まつていないことを祈りながら扉に手を掛ける。

扉を開け、目の前に広がっている光景を目にした私は絶句した。

きちんと片付けてホグワーツに行ったはずだというのに、机の上には羊皮紙の山が出来ており、床にも羊皮紙が散らばっていたのだ。私が予想をしていたよりも遥かに多いその量に、もう溜息しか出なくなる。

居ないと分かっているはずだというのに、何故ここに回してきているのだろうか。ここにあるのはきつと1年分の量なのだろう。

とりあえずトランクをソファアの上に置き、机に近づくと1枚羊皮紙を手取る。

ここに回ってくる資料の中で、早急に終わらせなければならぬものはないと思うが、いくらなんでもこの量はありえない。

大きな溜息をつきながら、持っていた羊皮紙を机の上に置き、椅子に座ろうとすると机の下に何故かアウラがいた。

「…………… お久しぶりでございます。お嬢様」

少し気まづそうに言うアウラは、体を小さくしながら机の下から出てくるが、何故彼がいるのか、あまりに突然の事で処理できず、声も出なかった。

「…………… 何でいるの」

やっと出た一言を聞いたアウラは私が怒っていると思ったのか、少し慌てたように謝ってくる。

「申し訳ございません。勝手なことをしてしまい「違うんです。彼は怒らないであげてください」

アウラの言葉を遮る声が聞こえてきたのは、寝室のからで、扉が開くと申し訳なさそうな表情を浮かべているレギュラスが出てきた。

「僕なんです。ここに連れてきて欲しいと頼んだのは」

もう訳が分からない私は、背もたれにもたれると目を抑えながら、少し強めの口調で問いかける。

「それで何で貴方達がここに来る必要があるの？他の誰かに見られたりしたらどうするつもりだったのかしら」

私の問いかけに答えるレギュラスが、最初に口にしたのは謝罪の言葉だった。

「部屋に勝手に入ったことは、申し訳ないと思っています。

最初はただ暇で、本を借りたいなど思ってた僕が頼んでアウラにここに連れてきてもらったなら、羊皮紙の山があったので・・・それで少しでも減らせばなど思ってた2人でこつこつとやってたんです。」

「わっ私が言い出したんです！帰ってきたお嬢様がこの量と向き合えば・・・体調を崩されてしまうのではないかと・・・」

お互いを庇い合う2人を見てみると、何故か可笑しく思えて、頬が緩むと彼の拗ねたような声が聞こえてくる。

「何を笑ってるんですか」

「これいつからやってたの？」

さつき手に取ってみた羊皮紙をよく見てみれば、私の字に似せた文字が書かれていた。

「・・・貴女が怪我をする前ぐらいですかね」

何処か不機嫌そうなレギュラスの声に、彼の方を見ると少し険しい表情を浮かべている。

「・・・・・・・・ ああ・・・ 怪我のことをまだ引きずっているのかな

思い当たる節がそれしかなく、少し頬を緩めながら口を開く。

「まだ、怒っているの？いつまでも引きずる男はモテないわよ。」

冗談っぽく話すと、彼は凄い早口で話してくる。

「全く貴女はいつもそうやって、あの時どれだけ心配したと思ってるんですか?!大怪我をしているのに姿くらましをするなんて、自殺行為だということを知らないわけがないでしょ。アウラだって、あの後どれほど「あの時は、ごめんなさい。私の我儘に付き合わせてしまって」

これは終わらないと思ひ、謝罪の言葉でレギュラスの言葉を遮ると、彼は少しため息をつく。

「… おっお嬢様、お怒りには…。」

何処か不安げに問いかけてくるアウラはまだ、私が怒っていると思っっているらしい。

「大丈夫よ、怒ってないわ。安心して」

私の言葉に安堵したのか、頬を緩める彼を眺めているとレギュラスが私の名前を呼んだ。

「レイラ」

彼の方に視線を移すと、レギュラスはにこやかな笑顔を浮かべながら、一言口にする。

「おかえりなさい」

急な言葉に戸惑ったものの、その言葉を聞いた途端、何故か安心した。

「… ただいま」

帰る場所がある、それだけで幸せなはずなのに、ふとした瞬間怖くなる。幸せだと感じる度に、大切なものがひとつ増える事にそれが失ってしまう未来を考えてしまうのは、きっと私の悪い癖だ。

炎のゴブレット プロローグ

魔法省に戻った私は、あれからずっと部屋に籠ったまま羊皮紙の相手をしていた。流石に山積みだった羊皮紙は終わったのだが、トランクを片付ける暇もないほど仕事は次々に私の元へとやってくる。

嫌がらせだと受け取っても良さそうな羊皮紙の量と手紙を見つめる私は、羽根ペンを走らせながら、自分で淹れたお茶を一口飲むとあまりの不味さに声が出た。

「……不味い」

久しぶりに自分で淹れたのだが、やはり少し期間があっただけで腕は落ちてしまうものらしい。

一気にやる気無くし、ティーカップを置くと、少し休憩のために体を伸ばす。歳をとった私の体はこれ以上羊皮紙の相手を出来そうにないし、それに何より集中出来そうにない。

終わらせた羊皮紙の束が視界に入ってきた私は、自然と魔法省に戻ってきてから、アーサーに会っていないことを思い出した。

どうせ届けなければならぬ羊皮紙もあるし、彼に見舞いのお礼も言わなければならない。

気分転換のつもりで、羊皮紙の束を手を持ち部屋を出ると彼がいるはずのマグル製品不正使用取締局へと向かうため、エレベーターに乗り込む。自室に引きこもっていたせいで気づかなかったが、今日は何故かいつも以上に忙しそうだ。

エレベーターの扉が開いた瞬間、忙しそうな職員達が駆け込んできて、押しつぶされた私は窒息しそうになりながら何とかマグル製品不正使用取締局がある階に降りた。

人通りが少ない廊下を歩き、奥にある見慣れた扉を数回ノックをす

ると、中からの返事を待つて扉を開ける。

「アーサー、お久しぶりです」

部屋の中にいたアーサーが私の方を見て、どこか嬉しそうな表情を浮かべながら口を開く姿が視界に入ってきた。

「レイラ、おかえり。帰っていたんだね」

アーサーの声を聞き流したつもりだが、私の頭には彼が言ったおかえりという言葉が、グルグルと回って消えてくれない。

「…これはどこに置けばいいですか？」

まるで地面に足が着いていない時のような浮遊感を感じて、何故か不安になっている自分を誤魔化すように声を出す。

持っていた羊皮紙を持ち上げれば、アーサーは慌てて近寄ってきて受け取った。

「すまないね。重たかっただろう？」

「いえ、大丈夫ですよ。…今日は…パーキンは居ないんですね…」

貴重な局員である彼の姿が見当たらず、問いかけるとアーサーは少し困ったように肩を竦める。

「ああ…体調をくずしてしまっただらしくてね。きっと今頃家で寝ているはずだよ」

「…そうなんですか…」

説明しながら羊皮紙を机の上に置く彼の後ろ姿を見て、見舞いの時に貰ったクッキーとお土産を思い出しながら声に出した。

「アーサー、クッキーとお土産ありがとうございます」

「…ああ、気にしなくて大丈夫だよ。クッキーは美味しかったかい？」

「ええ…とても美味しかったです。が…アーサー」

問いかけてくるアーサーの後ろ姿を見ながら、答えていたが、何故かローブを羽織って支度を始めた彼の行動を見た私は無意識に名前を呼んでいた。

「どこに行くんですか？」

手を止めて私の方を振り返るアーサーを見つめながら発した私の声は、無意識に少し暗くなり、自分の手が少し震えていることに気づいた。

彼に悟られないように、咄嗟に後ろで手を組み、隠して血が止まるほど力強く握りしめる。

何故こんなにも不安になっているのか分からないが、まるで何か大切なものが側にならない時のように、不安で堪らない。

「昼過ぎに帰ってくる子供達の迎えにね。流石にモリーだけでは手に負えないよ」

笑いながら話すアーサーの言葉を聞きながら、私は痛覚で誤魔化そうと、後ろで組んでいた手に、一層爪を立てた。

「今年はクイティッチのワールドカップもあるからね。少し長期休暇を貰っているんだ。」

「……………ご家族で？」

誰と行くかなんて分かっていたが、声を絞り出した私はそんな話題しか振れない。

「エイモスの息子さんも一緒にね」

「それは楽しみでしょうね。お子さん達も」

嬉しそうな表情を浮かべる彼は、それはそれは本当に幸せそうで、子供たちと過ごせる時間が本当に楽しみでしようがないのが溢れ出していた。

そんな彼を見ていればつられない訳がなく、少し頬を緩めると、支度を終えたアーサーが私の頭に手を置くと優しい声が耳に入ってきた。

「少しは休暇も取りなさい。たまにはゆっくりとすることも大切だよ」

彼がそんなことを言うのは予想外でも何でもないので、頭を撫でてくる行動だけがあまりに予想外すぎて驚きを隠せなかった。

それはまるで幼い子供を安心させるかのように、優しく微笑みながら、割れ物に触れるかのように、とても優しい手つきで撫でてきたの

だ。

随分と懐かしい感覚に、懐かしむことは出来なかったのは、脳裏に色褪せた昔の記憶が断面的に映し出され、とても優しく撫でる彼の姿に、自然と兄の姿が重なってしまったからだ。

アーサーの撫で方は、よく私の頭を撫でていた兄の手の感覚と酷く似ていて、それが更に記憶を鮮明にさせる。

アーサーが何やら顔に疲れが出ているよと言っていたが、私が直視できないことも、少し目頭が暑くなっていることにも彼はきつと気づかない。

「…どうしたんだい？レイラ」

上から聞こえてくる彼の心配そうな声が聞こえてきて、呼吸をゆっくりと整えると、顔を上げ口を開いた。

「…アーサー…流石に頭を撫でられて喜ぶ歳ではありませんよ」

私の言葉を聞いた瞬間、慌てるように謝るアーサーを見ると、自然と気が軽くなり、笑みがこぼれる。

「冗談ですよ…楽しんでくださいね」

今できる嘘偽りのない笑顔を浮かべて、彼に背を向けて部屋を出ると、少し早歩きで自室へと戻りしつかりと扉を閉めた。

もう一度椅子に座り仕事に向き合おうとしたのだが、何故かソファアーに無造作に置かれているトランクが目飛び込んできて、私は引つ張られるようにソファアーに腰を下ろす。

中途半端に開きっぱなしのトランクを開け、服や本は杖をひと振りして元に戻すと、トランクの中に残ったのはルーナから貰ったクリスマスプレゼントと、アーサーから貰ったお土産の鏡…それと以前使っていたローブだった。

まだ棄てていなかったことに少し驚きながらも、無意識に手に取り、広げると微かに薬の香りがしたような気がして、私は裾が破れているローブをじつと見つめる。

…
…考えすぎだ

気の所為だと言うことを言い聞かせても、私はそのローブを棄てるどころか持つ手を握りしめ、寒くもないのに上から羽織って、体を小さくする。

自分自身の体温で温かくなっていくローブに包まれながら、もう目の前にいる底知れない恐怖から目を逸らすように瞼を下ろした。

羊皮紙は溜まっているし、やるべき仕事もあるがたまにはこんな風にゆっくり過ごす事だって大切だろう。

ついさつきアーサーに言われた言葉を思い出しながら、ローブをぎゅっと握りしめて眠りについた。

1 天秤

アーサーが休暇に入ってから数日経ったが、残念ながら私の元に三大魔法学校対抗試合に関する仕事は勿論、クイディッチワールドカップに関する仕事さえも来ていない。

警備は人が多ければ多いほど良いかと思っていたが、どうやらそんなに甘いものではないらしい。直接的に、三大魔法学校対抗試合の話は聞いてはいないが、他の職員が話しているのをここ最近耳にしたし、開催されないということはないだろう。

ソファアーに深く腰掛け、手に持っているティーカップをじつと眺めながらこれからのことを考え込んでいると遠くから何か呼びかける声が聞こえてきた。

「大丈夫……ですか？……レイラ？」

名前を呼ばれていることに気づき、我に返って顔を上げると、目の前に腰掛けていたレギュラスと自然と目が合う。

「凄い険しい顔をしていましたよ。ここに皺寄せて」

自分の眉間を触りながら話すレギュラスを見て、ティーカップを口に近づけると、彼は思い出したように話し出した。

「そういえば、最近ダイアゴン横丁に行ったら皆、クイディッチワールドカップのことで話題が持ちきりでしたよ。いつも以上に盛り上がっていましたし」

「……………そう」

呟くように言った私の声が暗いことに気づいたのか、嬉しそうに話すレギュラスの表情は少し暗くなる。

分かっている。彼がこの重たい空気を変えるために気を使ってくれていることも、こんなに気分を落としている暇などないことも理解している。

「……めでたい人達ね……………」

私の憎たらしい声は静まりかえっている部屋にはよく響き、お菓子

を持ってきたアウラもこの張り詰める空気を悟ったのか、神妙な面持ちで机の上に皿を置くと、直ぐにキッチンへと引つ込んでいく。

「…………… 分かっていますよ。貴女が言いたいことは」

ティーカップを置きながら、答える彼の表情は思い詰めたように暗く、視線は下がっていく。

「…………… レイラ」

重たく静まり返っているこの空気を壊すかのように突然レギュラスが口を開き、問いかけてきた。

「…………… 本当に…………… 何もしないつもりですか？」

顔を上げると、私を見つめてくる彼と目が合う。

レギュラスの澄んでいる瞳はじつと何かを見据えていて、それが私にとってはどうしても辛かった。

「あの人が蘇ることを知っているのは僕達だけです」

「…………… 何が言いたいの」

力強い彼の言葉に耳を塞ぎたくなかったが、更に私を責めたてるように後を続ける彼の言葉が耳に入ってくる。

「あの人を蘇らさなければいい話じゃないんですか？」

「そんな簡単な話じゃない」

彼の意見をきっぱりと否定しても、レギュラスは諦めずにある言葉を口にした。

「分霊箱…………… 貴女は知っているんでしょう？ ある場所も…………… 壊し方も」

ハリー達が分霊箱を壊していく場面が頭にちらちらと横切った私は、少し溜息をつく。

「…………… ええ…………… 知ってるわよ。壊し方も数も、何処にあるのかも」

答える私の言葉を聞いたレギュラスの瞳は、何か期待するかのよう私を捉え、訴えるように話し出した。

「今だったら、今僕達が動けば、僕達で分霊箱を破壊すれば、あの人が

蘇ることは無い。わざわざあの人が蘇るのを待っているだけだなんて…… おかしくありませんか？」

意図も簡単に淡々と話す彼の言葉を聞いて、私は少し苛立ちながら答えた。

「…… 確かに私は未来を知っているとは言ったわよ。だけどそれがどこまであっているかなんて確証はどこにもない。貴方は少し私が何でも知っていると思いきり過ぎてる」

「それでもです。やってみる価値は十分にある」

ハリー自身が分霊箱だという事を知らない彼が簡単に言ってしまうことはしようがない事だが、何故か今頃になって訴えかけてくる。「分霊箱は1つや2つではないんでしよう?…… いくつあるかは知りませんが、1つでも多く見つけて壊せ」「じゃあ貴方は殺せる?…… 英雄と称えられている人間を」

私の問いかけに固まったレギュラスは、それがどんな意味なのか理解したのか、眉間に皺がよって表情が険しくなっていく。

「…… 仮に分霊箱を、ハリーを殺せたとしましょう。勿論あの人が蘇ることは無い……。だけど」

ハリーが分霊箱だということを悟ったのだろう。彼の表情は険しいままだった。

「…… あの人が蘇る事実など知らない世間の目には、私達はどう映るのかしらね?」

背もたれにもたれながら、深い溜息をつくレギュラスを見て、もうこれ以上は掘り下げてこないだろうと思いつながらお茶を飲もうとしたが、彼は生半可な気持ちで私に提案してきたわけではなかったらしい。

聞こえてきた声には私はティーカップを持ったまま、驚きのあまり動きが止まった私は一瞬彼が何を言っているのか分からなくなった。

決して生半可な気持ちでは言えないことを、彼は意図も簡単に言葉にしてしまった。

「… いいですよ… やりますよ。僕がやります」

言葉の意味が分からず、戸惑っている。今まで天井を見上げていたレギュラスが私に視線を移してくる。

「… 死んだと思われている僕がハリーを殺した方が何かと誤魔化しやすいでしよう。ずっと機会を伺って息を潜めていたとでも言つとけば、貴女に疑いの目がかけられることはない。」

お手本のような笑みを浮かべ、饒舌に説明するレギュラスの言葉は何一つ頭に入らない。彼が話す言葉は決して嬉しいものではなく、途端に胸が苦しくなり、頭は真っ白になった。

「… 何を… 言ってるの…」

やっと外に出た言葉は途切れ途切れだったが、しっかりと彼に届いたらしく、レギュラスは口を閉じる。

「… 貴方… 自分が何を言っているのか分かって言っているの？」

私の問いかけを聞いたレギュラスは、これが1番の策だと言いながら、平気で笑う。

「… ええ勿論。万が一貴女に疑いの目が向けられようと、僕が服従の呪文をかけたとしても言えば誤魔化せますし、良い提案だと思いませんか？」

私の問いかけにごく普通に答えるレギュラスは、酷く残酷なことを言っているというのに笑っていて、その姿がとても恐ろしく感じた。

「全く思わないわね。冗談はいい加減にして」

「冗談じゃないですよ、レイラ。僕は本気です。大丈夫ですよ。どんな尋問をされようが貴女の名前は出しませんから、安心してく「レギュラス」

頭が痛くなつて目元を手で覆い、俯きながら聞いていたが、彼の話が最後まで聞くに耐えず、名前を呼ぶと声は聞こえなくなった。

「… 止めて… もういいから」

私の声が部屋に響くと、その場は静まり返り、私はゆっくりと口を

開く。

「…………… 私は… そういう事が言いたいんじゃない……………」

彼に情の欠片も移っていない私にとつてはハリーを殺すこととはとても簡単なことだ。杖を向けて呪文さえ唱えてしまえばいいのだから。

レギュラスは口を挟むことはせず、絞り出す私の声を待っているかのようにだった。

「…………… 私は貴方を犠牲にするために…………… 手を伸ばした訳じゃない」

「…………… 何かを犠牲にしなければならぬのなら…………… しようがないことでしよう」

私の声に答えるレギュラスの声がとても冷たく感じ、ゆっくりと顔を上げると、鋭い瞳と目が合った。

「貴方、意味が分かっているじゃないでしょうか？」

「分かっていますよ。あの人が蘇って、穏やかに過ごせる訳がないことは、何も知らない僕でも分かりますよ。大勢の人が死んでゆくのを、たった一人の子供の犠牲で止められるのなら、世界中から何を思われようが僕は、彼の命を奪うのが一番だと思えますけど」

しっかりと断言する彼を見ていると、やっぱり私が伝えたい事が、ハリーを殺す本当の意味が伝わっていない様に感じて頭を横に振る。

「分かっているわよ。相手は魔法省でも闇祓いでも無い。ブラックに誤解されたままに憎まれて、殺され「それでも！」」

私の声に被せるように声を張り上げたレギュラスは、少し頭を抱えながら口を開く。

「…………… それでも…………… 救えるなら良いじゃないですか……………」

あまりに痛々しく話す彼を見てみると、私の脳裏にはある光景が浮かんでは焼きついて離れてくれない。

消し去ることも、忘れることも許されない、淡い光景を瞳の奥で見つめながら、私自身の過ちを見つめながら、重い口を開き声を出した。

「……貴方は……無責任に奪って死ぬことが守ることだと思ってるの?」

私の言葉にレギュラスの表情は険しくなり、睨むように鋭い視線を向けられる。

「ハリーを殺して、平和な日々が来て、それで貴方はどうするの? ブラックは? セブルスは? その後どうすればいいの?」

私より賢い彼を信じて、伝えたい事を何一つ伝えられない私の言葉を悟ってくれることをただ信じて、レギュラスに問いかける。

「じゃあどうするんですか? 今できることもせず、このままここに籠ってお茶を飲んでいろと言うんですか?」

反論してくる彼の声は苛立っているかのように、少し大きくなる。異様な空気を悟ったのか、今までキッチンに籠っていたアウラが、心配そうに顔を出し、様子を伺っているのが見えた。

「じゃあ何? もし間に合わなかったら、もし分霊箱を中途半端に壊してあの人が蘇ってしまったら、私は死喰い人では居られなくのよ。まさか不死鳥の騎士団に入れとでも言うんじゃないでしょうね」

「そうですね、それもいいと思いますよ。今この状況よりかは何倍も」後半の言葉を強調するレギュラスが、私を挑発していることは分かっているのに、今の私にはそれを冷静に対処することは出来そうにない。

「そんな簡単なことで済むならとつくにそうしてるわよ。でも、そんなことで済まないからこうしているんじゃない」

少し大きな声を出しながら立ち上がると、キッチンから出てくるアウラの姿が見えた。

「だからこのまま、あの人の下につくというんですか!? もう時間がないんですよ?」

貴女独りで何か出来ることじゃない!」

「レギュラス様、どうか落ち着いてください」

立ち上がる彼の足元で止めようとするアウラの声を聞いても、落ち

着くどころかレギュラスの正論の言葉が頭に響いて、ぐちゃぐちゃになる。

「やるのよ。それでもやらないといけないの」

しっかりと声に出し、断言した私はの言葉を聞いたレギュラスは何か決心するように私から目を逸らさずに言葉を口にした。

「……分かりました。……じゃあ僕が今からホグワーツに行くと言ったら……貴女はどうしますか？」

突拍子もないことを言う彼の言葉は、確かに耳には入ってきたものの意味が分からず、直ぐには頭が追いつかなかった。それでも体は勝手に動くもので、気づけば私はレギュラスに杖を向けていた。

「お嬢様！どうかお下げください」

最初に口を開いたのはアウラで、私達の間に入り止める彼は傷ついたような表情を向けてくる。

ゆつくりと呼吸を繰り返しながら杖先を彼に向ける私は、次第に何故自分が杖を向けたのか理解できた。

「……ダンブルドアに全て話すと言ったら、貴女は僕を殺しますか？」

落ち着いた声で話すレギュラスは、杖を取り出すような動作は一切見せずに、ただ私を見つめてくる。

「……僕が話したら困りますもんね。……ダンブルドアが全て知ったらきつと貴女が知る未来は来ない。」

ゆつくりと呼吸を繰り返すだけで、何も言えない私は、彼が本当にホグワーツに行くのではないかという不安がに襲われている脳が体に殺せと命令しているのが分かった。

そんなことを簡単に命令する自分の頭に、この状況に、追い詰められた私は杖を力強く握りしめる。

「…こんなことしてる場合じゃないのよ。レギュラス、こんな馬鹿なことをしてる暇はないの」

冗談だと彼が言ってくれることを祈りながら、声を出すが私を見つめる彼の瞳は真剣そのものだった。

「僕にとつては馬鹿なことではないですよ。レイラ」

今にもダンブルドアの元へ行きそうなレギュラスは、引き下がる素振りも見せずに真っ直ぐな瞳で私を見つめてくる。

頭に何度も浮かぶ殺せという言葉を、何度も何度も消そうとするがまるで焼き付いたように綺麗に消えてはくれない。

今にも溢れてしまいそうな今までの感情を、必死に隠してきた弱い自分が、今日の前にいる彼にぶつけてしまいそうで、口を開けばぼろりと余計なことを言ってしまうようで、声を発することはできなかった。

「お嬢様…どうかお止め下さい。どうか杖をお下げください」

自分の呼吸以外音が聞こえていなかった私の耳に、自然にアウラの声が入ってきて、声がした方に視線を移すと、彼は私を止めるかのように空いている手をしっかりと握りしめていた。

「どうか…どうかこれ以上はお止め下さい」

大きな瞳に涙を溜めながら、私達2人に懇願するように話すアウラの声は、部屋によく響き、一言一言がしっかりと入ってくる。

「お願い致します。これ以上はお止め下さい」

何度も何度も私達に頼み込むアウラの声を聞いた私が、レギュラスに向けていた杖を下ろしたのとほぼ同時に今まで口を閉じていた彼も声を出した。

「…すいません…言い過ぎました」

額に手を当てるレギュラスは何か後悔しているように、大きな溜息をつく。

「…私も…ああ駄目ね…」

小さく呟くように言いながら話す私は杖をしまい、さっきまで杖を

握り彼に向けていた右手を見つめる。

「…… あんなに簡単に躊躇なく…… 杖を向けれるなんて……」

無意識に体が動いた事実には複雑な感情を抱いていると、険しい表情していたのか私を呼ぶレギュラスの声が聞こえてきた。

「レイラ？……… 怒っていますか？」

恐る恐るといった様子で聞いてくる彼の姿を見て、私は頭を横に振りながら否定する。

「…… 怒ってないわよ。貴方が言っていることは間違っていない。間違っていないけど……… 怖い。」

私の声がそんなに弱々しかったのか、レギュラスは心配そう表情を浮かべた。

「彼がどう思っているかというと、彼にとつてのハリーの存在と私の存在はあまりに違いすぎる。私が死ぬのと、ハリーが死ぬのでは彼にとつてあまりに意味が違う」

「そんなこと」「残念ながらはつきりと違うのよ。レギュラス」

否定してこようとしてくる彼の言葉を遮る私は、少し溜息をつきながら額を支えてゆっくりと言葉にする。

「何もかもが違うの。もし何か変わって、ハリーが死んだら？セブルスを救えても、もしハリーが死んだら、彼は一体何を思うのか。きつとその後彼は死ぬまで悔やみ続ける。自分自身を責めて責めて、苦しむ。彼女が命懸けで守った子さえも守れなかったと、自分を責めるに決まってる」

そんな光景が簡単に想像出来てしまって、額に手を当てながら溜息をついていると、黙って聞いてくれるレギュラスがまるで私が姿くらしをするのを分かっているかのように手を伸ばしてくる姿が見え、その手から逃げた。

私は強い眼差しを持つレギュラスの瞳をしっかりと見つめて、小さく声を出す。

「……ごめんなさい…… 私には貴方達みたいに強くないの」

そんな私の声は、姿くらしのバチンという音に吞まれ、消えていった。

2 ホットミルク

久々の休暇を利用して、ローブを新調しにダイアゴン横丁に訪れると、学校が長期休暇に入ったこともあつてか、家族連れで大いに賑わっていた。

アイスクリームを美味しそうに食べている子供達や、高級箒用具店の前で泣きながら駄々を捏ねている幼い子供の姿など、そんな何気ない平穏な光景が自然と目に飛び込んでくる。

どこからともなく聞こえてくる楽しそうな笑い声。

手をしっかりと繋ぎ、買い物を楽しんでいる親子。

挨拶を交わし、会話をする人達。

逃げも隠れもせず、何も変わらない日常を過ごすこの光景に溶け込む私は、フローリシユ・アンド・ブロッツ書店に訪れていた。

店内はお客さんで大いに賑わっており、天井まである本棚に積み重ねている本を眺める。

『死から身を守る方法』『予知者は知った』

『君ならどうする?こんな時』

気になる題名ばかりで、どれがいいものかと随分、悩んだがぱっと目に止まった本を、数冊購入した。

新調したローブと一緒にしてくれた本を抱え、店を後にしようとする時、突然に声を掛けられた。

「あら、貴女は…。」

声が出た方を振り返れば、そこには見知った顔の老婆が居た。

「…この前はありがとございました。」

彼女が、一度だけルーピンと訪れたお店の店主であることを思い出した私がお礼を言うと、老婆は変わらず温かい笑みを浮かべる。

「いえいえ、とんでもございません。ネットクレスの方はいかがでしたか?」

「とても喜んでくれましたでしたよ」

「それは良かったです」

何人ものお客さんと接する彼女に覚えられていることに少しばかり驚きながら、たわいのない会話をしていると、入口付近で話していたのがいけなかったのか、突然後ろから押され、持っていた紙袋を落としてしまった。

急いで拾い、顔を上げると、新調したばかりのローブを手にする老婆が視界に入ってくる。

「ありがとうございます」

汚れを払い、綺麗に畳んで紙袋に入れてきた彼女にお礼を言うところにつこりと笑いかけてくる。

「いえいえ。是非またいらしてくださいね。」

では失礼しますと言い、店内の奥へと進む彼女とは反対に店を出た私は、道行く人の声や足音、生活の音を聞きながら歩く。

次はどこへ行こうか…

そんなことを思いながら、目的地を決めずにふらふらと歩いていると、視界の先に居た兄弟が目に入ってきた。

まだホグワーツに入学してないような年頃の2人の周りには、親の姿はない。

心配そうな表情や泣いていたら声を掛けていたかもしれないが、何せ2人は表情はやけに明るいいし、迷子になったような様子はない。

彼等から目を離そうとするが、兄であろう少年がノクターン横丁へと続く裏道の方を指さすのを見て、それも出来なくなる。

ほとんどの家庭では、ノクターン横丁に行つては駄目だときつく言い聞かせている筈だが、やってはいけない、してはいけないと言われるほど子供というのは興味を持ってしまうものだ。

なんの躊躇もせず、裏道へと走る彼らの姿を見た私は、道行く人を避けながら後を追いかけた。

裏道に入り少し歩けば辺りは薄暗くなり、不気味な雰囲気は漂っている。一歩歩く度に、後ろから聞こえてくる賑やかな声は遠ざかっていった。

歩いているのは如何にも怪しそうな人ばかりで、そんな世界とは無縁の彼等はあまりに場違いで、よく目立っている。

道の真ん中で佇むように居た彼等の背中をしつかりと捉えた私は少し早歩きで近づくと、腰が曲がった年寄りが兄であろう少年の腕を逃がさないように握っているのが見えた。

「私の子に何か用でしょうか？」

割り込むように立ち、彼等を背中に隠すと腰が曲がった年寄りの瞳がフード越しに怪しく光る。

「こんな所を子供だけで歩いているものですから、迷子かと思いましたがね」

「迷惑をお掛けしてすみません。何せこの歳ですから色々好奇心があつて」

笑顔を作つて答えると、目の前にいる年寄りは何も言わずに、背を向けて覚束無い足取りで去っていく。

後ろにいる少年達に視線を移した私は、如何にも私を警戒している彼等を見て視線を合わせた。

「今日は誰と来たの？」

「……………お母さんと……………妹」

答えたのは兄で、自分の後ろに隠れる弟を守ろうとしているのかしつかりと手を握っている。

それでもやっぱり怖いのか、拳を作っている手が震えていることに気づいて、少年の頭に腕を伸ばすと優しく撫でた。

「偉いわね。弟をちゃんと守つて。しつかりしたお兄ちゃんじゃない。」

名前も知らないその子は、ぎゅつと口を結ぶ。

「大丈夫よ。私も一緒に貴方達のお母さん探しに行きましょう。」

掌を差し出して彼から握るのを待っていると、少年は小さな手でぎゅつと私の手を握った。

彼等の歩幅に合わせ、光が射し込む方へとゆっくりと歩く。

「ダイアゴン横丁にはお買い物しに来たの？」

彼等が退屈しないようにと話しかけると、下から小さな声が聞こえ

てきた。

「… うん… だけどお母さんがお話ばかりするから冒険しようって」

大人の話は長いから、きつと退屈だった彼等は、何も言わずに母親の元を離れたのだろう。

となれば、今頃母親は必死になって探しているに違いない。

「冒険は楽しかった？」

「うん、楽しかったよ。楽しかったけど、さっきの所は楽しくなかった」

私の問いかけに答える彼の言葉を聞きながら、小さな手をぎゅっと握る。

「もうあそこに行つてはだめよ」

「何で？」

言い聞かせるように口を開いた私の言葉に、無垢な彼は声を出す。

「真つ暗だったら、進む道も、今自分がいる場所も分からないでしょ？」

少し難しかったのか、下から直ぐには言葉が返つてこなかったが、代わりにとても幼い少年の声が聞こえてきた。

「じゃあ… あかるくしちやえばいいんじゃない？」

素直な子供は、時に残酷なことを言う。

「… 暗くなるのは一瞬だけど、明るくするのはとても時間がかかる」
彼らに視線を移すと、二人共不思議そうに、じつと私の目を見つめてくる。

視線を戻すと薄暗い道に射し込む暖かい光が見え、少しずつ音が鮮明に聞こえてきた。

「ほら、もうすぐ出るわよ」

2人にそう呼びかけると、大勢の人が行き来する大通りへと出た。子供を探す母親らしき女性の姿は居ないかと、辺りを見渡すが、見つけることが出来ず、とりあえず手を繋いだままゆつくりと歩く。

ひと通り歩いていても、母親らしき姿を見つけることが出来ず、最初は元気だった少年達もどんどんと不安そうな表情を浮かべていた。

「お母さん！」

私達を追い抜き母親の元へと駆け寄っていく子供の声が耳に入ってくる、それまで大人しく着いてきていた彼等が足を止めた。

どうしたのかと思ひ、視線を移せば、お母さんという単語を聞いた瞬間急に寂しくなったのか、今まで我慢していたものを吐き出すかのように、幼い弟がポロポロと涙を流していた。

「おかあさん、おかあさんどこ」

弟を泣き止ませようと声をかけていた兄も、なかなか泣き止んでくれない弟につられるように、泣きそうな表情を浮かべる。

とりあえず通行の邪魔にならないように道の端に寄り、しやがみこむと、耐えきれなくなったのか兄の方も流れる涙を隠すように目を必死に擦っていた。

「大丈夫。お母さんもきつと貴方達のことを探しているから、もう少しだけ頑張りましょう？ね？」

2人にそう呼びかけても、彼等は頷くことも返事もせずに泣き続けている。

…… どうすればいいんだろう…

あやすことひとつも出来ず、途方に暮れていた私は泣き続ける2人からふと後ろに視線を移す。

『フローリアン・フォーテスキュー・アイスクリームパーラー』

視界に入ってきた看板を見た私は、2人にここから動かないように言い聞かせて、2つアイスクリームを買い、泣き続ける2人に差し出した。

「少し休憩しましょうか。ほら、溶けちゃう前に」

半泣き状態だが、受け取ってくれたことに少し安堵しながらも、空いていたベンチに腰掛けて道行く人を眺める。

こんなに探しても見つからないなんて、どこかですれ違っているのだろうか。

一度漏れ鍋に行ってみようかどうか考えていると、幼い子供を抱っこしている女性の隣を歩く、チャリテイ・バーベツジと目が合った。

まさかこんな所ではつちりと目が合うとは思ってもおらず、少し驚

いたがそれは私だけではないらしい。

驚いたような表情を一瞬浮かべた彼女は、直ぐに何かに気づいたように隣にいる女性に話しかけていた。

彼女の隣にいる女性が幼い子供を抱っこしているのを見て、少年らが母親と妹とここに訪れていたことを思い出した私は彼等に話しかける。

「貴方達のお母さん、見つかったかもしれないわよ」

そう声を掛ければ、2人ともぼつと顔を上げた。

「おかあさん！」

食べ終わっていないアイスクリームを気にせずに走り出した弟は、真っ直ぐ母親の元へと駆け寄り、抱きついた。

走った勢いで地面にアイスクリームが落ちていているが、それは良しとしよう。

「あら、貴方は行かないの？」

弟の泣き声を聞きながら、まだ隣に座っている少年に問いかけると彼はぎゅつとアイスクリームを握ったまま何も言わなかった。

「じゃあ、私と行きましようか」

そう言つて手を差し出せば、彼は大人しく握つてきて、一緒に母親の元へ向かう。

「何処に行つてたの」

泣き続ける弟を抱き締めながら、問いかける母親から視線を逸らす彼は、叱られるのが嫌なのか私の後ろに隠れようとする。

「本当にありがとうございます。アイスまで買って貰つて。おいくらでしたか？」

深々と頭を下げてきた母親はアイスの代金を返そうとしているのか、財布を取り出そうとする。

「いえいえ、お金は大丈夫ですよ。私は何もしていません。」

「そういう訳には」

「本当に大丈夫です」

「いえ、そう言わずに。ご迷惑をお掛けしたので」

断つても断つても中々引き下がろうとはしてくれない彼女を見て、私はお金を取り出そうする母親の手を優しく握った。

「本当に大丈夫なんです。私、この子達と一緒に冒険してただけですし、逆に楽しませてもらいましたから」

「……しかし……」そうです、強いて言うならこの子達をうんと褒めて上げてください。この子はしっかりとお兄ちゃんの言うことを聞いて、彼はしっかりと弟を守ってましたよ。素敵なお子さんたちです、すね」

そう言いながら、私の後ろに隠れる彼の背を優しく押す。

「彼女もこう言っている訳ですし、ここは甘えさせてもらってはいかがですか？」

きりが無いと思ったのか、それまで口を挟まなかったバーベツジの言葉で、やっと財布をしまってくれた母親の姿を見て、近くににいる兄に視線を合わせた。

「……ありがとう…… お母さん見つけてくれて」

「…… 貴方がしっかりと弟を守ってくれたからこうしてお母さんに会えたのよ」

お礼を言ってくる彼にそう言葉を返すと、その子は母親の手をぎゅつと握った。

母親と去っていく彼等をバーベツジと見送るが、くるりと振り向いた兄は何を思ったのか私の方に駆け寄ってくる。

「どうしたの。またはぐれちやうわよ」

少し息を切らしながら走ってきた彼にそう言いながら視線を合わせると、綺麗な瞳で私を映し、しっかりと口にした。

「僕、思ったんだ。大きくなったら、ホグワーツに行くからそこでいっぱい友達作って、手伝いに行くよ。今度は僕がお姉さんを助けられるように、頑張るから待っててね。約束だよ！」

そう言いながら、浮かべてきた無邪気な笑顔は胸に突き刺さり、ぎゅつと痛くなる。

「分かったわ。約束ね」

幼い彼の頭を撫でると、嬉しそうに笑ってくる。

大きく手を振りながら、今度こそ母親と一緒に去っていった彼の後ろ姿を見送っていると、何故か悲しくなった。

「まさかこんな偶然、あるんですね。」

そう言って話しかけてきたバーベツジに、質問を投げかける。

「貴女は何故…。」

その言葉で、私が聞きたいことが分かったのか彼女は思い出すように話し出す。

「ああ、彼女が顔色を真っ青にして、困っていたものですから、話を聞いたんです。そしたら子供とはぐれてしまったと言っていたので、2人で探していた所に、子供を連れられた貴女が」

「そうだったんですか…。」

偶然すぎるこの状況に少し戸惑っていると、提案する彼女の声が聞こえてきた。

「どうです？…この後少しお茶でも」

期待に胸をふくらませたようなきらきらした瞳で見つめられてしまつては、断ることもできるはずもなく、もちろんだと答えれば、彼女はこれまた嬉しそうに笑った。

漏れ鍋でお茶をしようかと思ひ、店に入ってみたものの、ほかのお客でいっぱい席が空いておらず、彼女は残念に話しかけてくる。

「あら、この時間はやっぱり混んでるものですね」

また今度にしましょうかと思案するために口を開きかけるが、彼女が思い出したように少し大きな声を出したせいで、声が外に出ることはなかった。

「ああ！そういえばこの近くに今流行りのお店があるんですがいかがですか？アップルパイが絶品らしいですよ」

「じゃあ…そこに」

熱心に話す彼女の勢いに押されながら答えると、バーベツジは私の腕をしっかりと握り締めて、漏れ鍋を出るとマグル達に紛れて歩く。買ったものを落とさないように気を配りながら歩いていると、前を歩いていた彼女の声が聞こえてきた。

「ここです…今マグルの間で人気なお店らしいんです」

私の耳元で話すバーベツジの声を聞きながら、お洒落な外観のお店を視界に入れる。

迷うことなく店の中に入っていく彼女の後を追いかけて、何が何だか分からないまま彼女と同じものを頼み、私の分まで支払ってくれたバーベツジは、私をソファアームに座らせた。

「良かったです。貴女とお茶をすることが出来て。是非一度ゆっくりお話をしたいと思っていたんですが、ほら去年は色々」

饒舌に話すバーベツジは、どうやら話し上手らしい。

「そうですね…」

私は気まづそうに笑っていると、頼んだアップルパイと紅茶が運ばれてきた。

「去年は、本当に大変でしたものね…そういうえば、怪我は大丈夫でしたか？」

突然の問いかけに戸惑っていると彼女が後付けしてくる。

「ほら、クイディッチの」

「ああ…大丈夫ですよ。結構痛かったですけど」

少し笑いながら話すと、バーベツジは良かったとだけ呟いて、紅茶を一口飲む。

「しかし、盛り上がっていましたね。ワールドカップがあるからかしら？」

「お好きですか？クイディッチは」

私の問いかけに彼女は、にっこりと笑みを浮かべながら頷いた。

「ええ、見ている分にはとても楽しいですよ。ただやれと言われたら話は別ですが」

絶えず笑顔を浮かべる彼女との話は、想像以上に盛り上がり、クイ

ドイツワールドカップの話は勿論、今まで彼女が見てきた生徒の話、特にマグルの事になれば熱心に話してきた。

マグルに聞かれないかと少し心配になったが、皆自分の話に夢中になっていて、余計な心配だったようだ。

どれぐらい時間が経ったかは分からないが、アップルパイもとうに食べ終わり、おかわりした紅茶もすっかり飲み終わった頃には、まるで昔から知っているかのように仲良くなっていた。

「あら、いつの間にかこんな時間。今日はこれまでにしておきましょうか」

彼女の一言で店を出た私達はマグルに紛れて歩き、漏れ鍋に戻るバーベッジと魔法省に戻る私は、行く道が別れてしまった。

「今日はありがとうございました。バーベッジさん。とても楽しかったです」

そうお礼を言いながら、笑いかければすっかり仲良くなってしまうた彼女は笑いながら言ってくる。

「止めてください。チャリテイと呼んで」

これ以上は仲良くなつてはいけない。

そう思っているにも、目の前にいる彼女は何も知らないまま、砕けた文章で親しく話してくる。

「私もレイラとお呼びしても?」

「ええ、もちろん」

答える私の言葉を聞いたチャリテイは、それは本当に嬉しそうに笑みを浮かべて、ハグをしてきた。

「じゃあ、また今度ね、レイラ。風邪には気をつけて」

感じた彼女の温もりに、途端に悲しくなりながらも、チャリテイに悟られぬようしつかりと声に出す。

「…ええ、チャリテイも」

ダイアゴン横丁に用がある彼女の後ろ姿を見送る私は、ハグをした時に確かに感じた彼女の心臓の鼓動を思い出し、まだ彼女が生きているということを知らされた。

魔法省に戻った私は、買ったものをソファアに置いてとりあえずローブだけ皺にならないようにと、袋から取り出そうとすると、袋に入っていた本までも床にぶちまけてしまった。

しゃがむことすら面倒で、魔法で拾うとするが、床に落ちている本の数が買った時より多いような気がして、目を細める。

本を宙に浮かせ拾い上げてみると、買った覚えがない本が確かにあった。

『吟遊詩人ビードルの物語』

幼い頃よく目にしていた本の題名が書かれているその本は、購入した覚えがないが、そうなる今私の手元にある理由がつかない。

……しかし……懐かしいな……

吟遊詩人ビードルの物語の本を持って、椅子に腰掛けた私はあまりの懐かしさに表紙を捲ると、目次には見慣れた題名が並んでいて、自然と幼い頃よく読み聞かせしてもらったことを思い出した。

それは寒い冬の夜、暖炉の前で兄と一緒に母の声を聞きながら、アウラが作ってくれた蜂蜜たっぷりホットミルクを飲んでいた。

そんな日は必ず、父がリクエストしたお菓子をアウラが運んでくれて、家族みんなで夜更かしをする。

お菓子を食べて、ゲームをして、その日だけは家族みんなで寝床につく。

ふわりと浮かんだそんな何気ない日常は、弾けて消えていく。

跡形もなく消えた記憶は、遠い昔の日常の色を奪っていき、静まり返った部屋の空気が重く感じて、わざと音を立てながら、激しく本を閉じた。

パチパチと暖炉の火が燃える音を聞きながら、ただぼつと火を眺める。

くもっている窓から暖炉、そして机に視線を移す私の視線は座っているとしてもやけに低く、机の上にある描きかけの絵に向かい合う。クレヨンを握り締めて、大胆に描く私は、手が汚れようが気にすることなく描き続け、大きく翼を広げたドラゴンの上に乗っている女の子と男の子の瞳を描きあげると満足そうにその紙を持って部屋のドアへと向かう。

少し背伸びをしてドアを開けようとするが、誰かが入ってきたのか上から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「レイラ、何をしているんだい？」

「おえかきしたの。ノアにあげなきゃ」

私の意思とは関係なく出したその声は、確かに幼い私の声だった。「ノアは風邪だからね。それはまた今度にしよう。ああ…こんな汚して」

私を抱き寄せ、困ったようにクレヨンで汚れた手を見て笑い、暖炉の火に照らされた男の人はエド叔父さんだった。

ベッドに座らせられた私は、湿らせた布で汚れを落とす叔父をただじっと見つめる。

「ほら、いい子は寝る時間だよ」

「いや、ねむたくないの」

「そうだな。じゃあ本を読んであげようか」

そう言いながら、近くにあった吟遊詩人ビードルの物語と書かれた本を私に見せてくるが、私はぶんぶんと頭を横に振る。

「それはいや」

「困ったな…… ああ…… じゃあレイラには特別なお話を教えてあげようかな」

子供というのは特別という言葉に弱いらしく、頭を縦に振って、「じゃあ、布団に入ってね」という叔父の言葉を素直に聞き、布団に潜り込む。

「どんなおはなし？」

「嘘っぱちな魔法使いたちのお話だよ」

そう言いながら、布団を私の肩まで被せる彼は一定のリズムで叩きながらゆっくりと話し出した。

「ある所にひとりの魔法使いが居ました。

そんな彼の周りにいる人達も彼が魔法使いだということ信じていました。」

ゆっくりと話す叔父をじっと見つめながら、少しワクワクしながら耳を澄ます。

「彼は嘘をついていました。自分は魔法は使えないということを知った上で自分にも他人にも嘘を吐き続けました。」

ゆっくりと話す叔父の話し方は、睡魔を誘うらしく、少しだけ瞼が重たくなってくる。

「時は経ち、彼に親友が出来ました。皆から信頼されている勇敢な魔法使い、それが彼の親友でした。」

親友にもまた彼は嘘を吐き続けました。使えもしない魔法が使えろといい、魔法使いの振りを続けたのです。」

少しだけ悲しそうに話す叔父はゆっくりと後を続ける。

「そんなある日、彼の親友が彼の前から姿を消しました。深い悲しみうちひがれた彼は、同時に底知れぬ恐怖を感じました。」

魔法でも死という存在に勝つことは出来ないと思いき知らされた彼

の元に、悪魔が現れました」

視界がぼんやりとしだして、少しずつ叔父の声が遠くなっていく。

「悪魔は言いました。」

『お前が吐き続けた嘘が私を生んだ。お前が吐き続けた嘘が人を殺した。さあ、ひとつ願いを聞いてやろう』

親友を失った彼は言いました。

『力が欲しい。死にも勝る力が欲しい』

悪魔は彼の親友の遺品であるペンダントを禍々しいものに変えてしまいました。

その禍々しいペンダントは、使い次第では死に勝ることが出来ました。そのペンダントを使い続けた愚かな彼は大きな声で言いました。

『私は魔法使いだ！』 ……と」

悪魔に襲われている私に気づいたのだろうか。今まで話していた叔父は私の頭をゆっくりと撫でた。

「…… 続きはまた今度にしようか。…… おやすみ、レイラ。いい夢を」

叔父の声もぎこちない撫で方も、何故かとても落ち着いて、手ぎゅつと握るとそのまま吸い込まれるように体が重くなり、視界が真っ暗になった。

何か近付いてくる気配を感じ、ゆっくりと瞼を上げると目の前に手

を伸ばしてくるアウラが居た。

私が目を覚ますとは思ってもいなかったのか、彼は直ぐに腕を引つ込める。

「……どうしているの？」

最近は魔法省でちんとベッドで睡眠を取っていることもあり、呼んでもいないのに何故彼がいるのか不思議でたまらなかった。

「……それは……」

言おうかどうか悩んでいるのか、腕を後ろに組んで少し私から離れる。

まだ冬ではないはずなのに、少し肌寒く感じて、掛け布団を口元まで持つてくる。

「……ねえ…… アウラ……」

暗い暗闇に浮かぶ彼に呼びかけると、アウラは直ぐに私の方を見て、返事をした。

「…… ホットミルク…… 頂戴」

私の声は少し小さかったが、静まり返っているこの部屋にはよく響いた。

「…… 蜂蜜たっぷり」

そう後付けをすれば、彼はとても嬉しそうに、何故か涙を浮かべて元気よく返事をする。

「はい、直ぐにお作り致します！」

そう言い、姿くらしをしたアウラを見送って、ぼっとしていれば、コップを持った彼がバチンという音を鳴らして、姿を現す。

「…… ありがとう」

アウラからコップを受け取ると、口をつけ一口飲むと、ホットミルクの味はあの頃から何も変わっていないかった。

「…… ねえ…… アウラ……」

「はい」

彼の顔がはっきり見えないことをいいことに、私は真っ直ぐ見たままゆつくりと声に出す。

「…… 貴方は…… 私より先に死なないでね」

一度零れた言葉が取り消すことが出来ず、溢れた言葉が口から出てくる。

「……私をひとりにしないでね」

少し震えていた私の声を聞いた彼は、ゆっくりと近付いてくると、しっかりと私の手を握ってくる。

「もちろんでございませぬ。私は決してお嬢様をお独りにはしません。お約束致します」

「……そう良かった」

それだけ呟いて、ゆっくり瞼を降ろせば、頬に何か温かいものが伝った。

こんな弱音を吐いたのも、頬に温かいものが伝ったのも、ホットミルクが飲みたくなつたのも、こんなに苦しいのも、悲しいのも、怖いのも全部今が夜だからだ。

きつとそうだ。

そういうことにはしておこう。